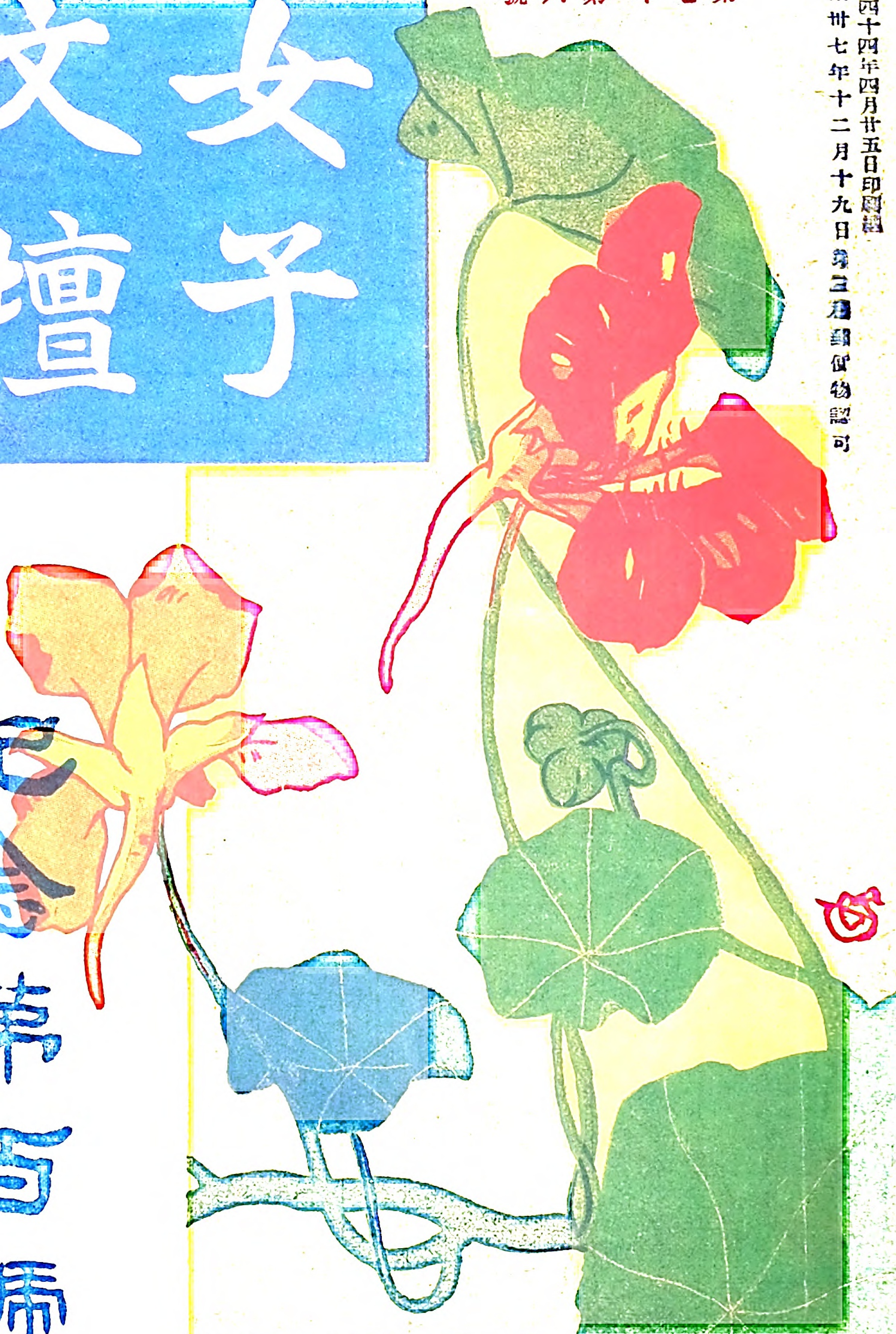
女子文壇

五月一日
第七年第六號

明治四十四年四月廿五日印刷
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

紀念第百號



女子文壇社發行

家庭の改良は臺所の改良に始まる
臺所の改良は瓦斯の使用に依りて完し

マッチ一本さへあれば、お子様にも、お年寄にも、自由に煮炊が出來ますから、皆様が、瓦斯のことを「女中用らず」と仰しやいます。

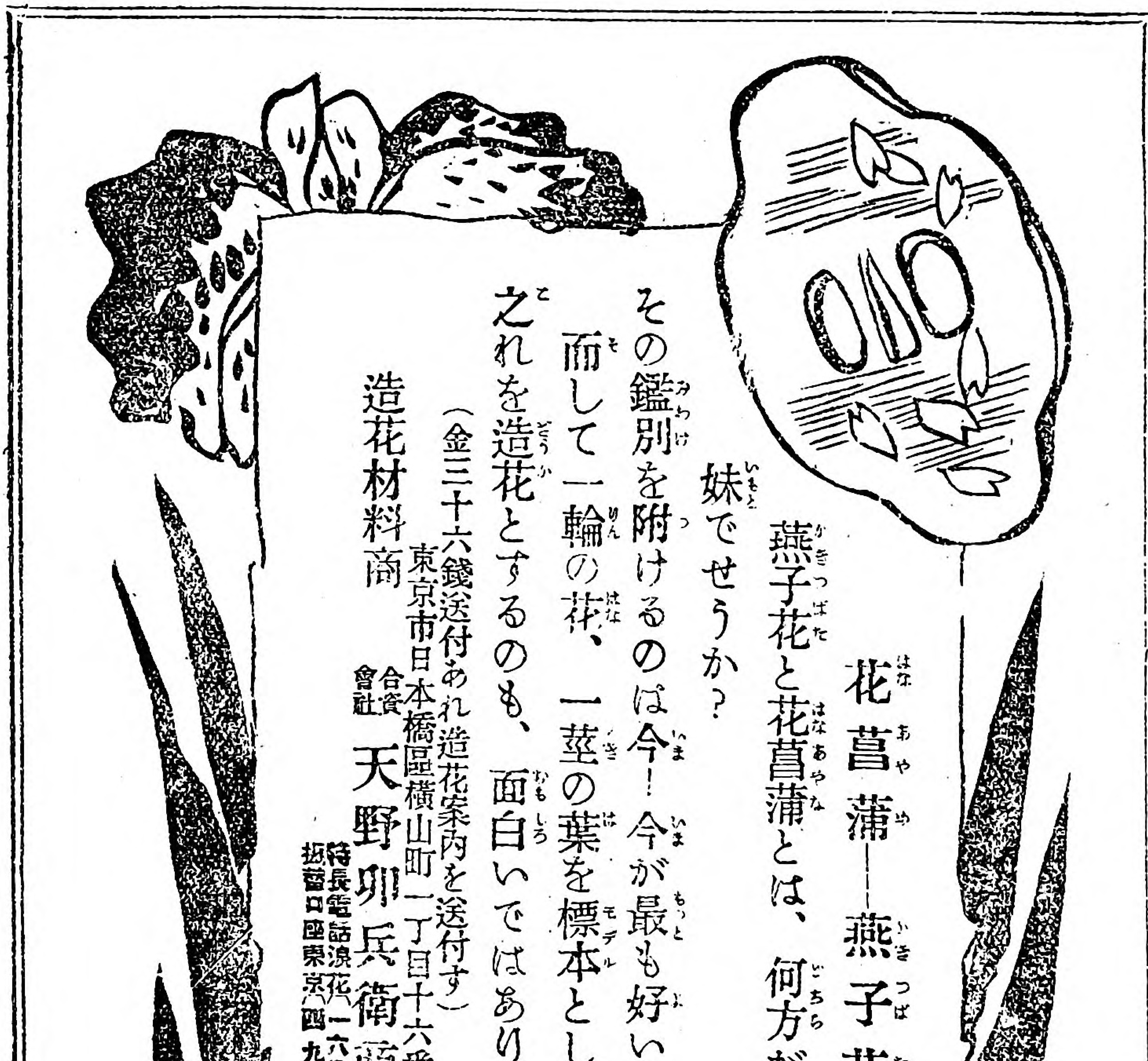
それに煤烟や灰燼が立ちませぬので、家の燻る憂なく、塵の出來る心配なく、火災の起る危險なく、臺所が清潔で、場所を取らず納屋を要せず、捻子で火の加減が自由自在ですから、烹物は頗る風味よく出來ます。

三升の御飯は寒中でも二十分（瓦斯代二錢）お湯や煮物は數分間で出來至極重寶で御徳用であります。普通十人位までの御内では竈と七輪とさへあれば充分で、竈は御望みにより御貸し致しますから、臺所改良の費用は僅金貳圓位しかかゝりませんどうか御試用の上御高評を願ひます。

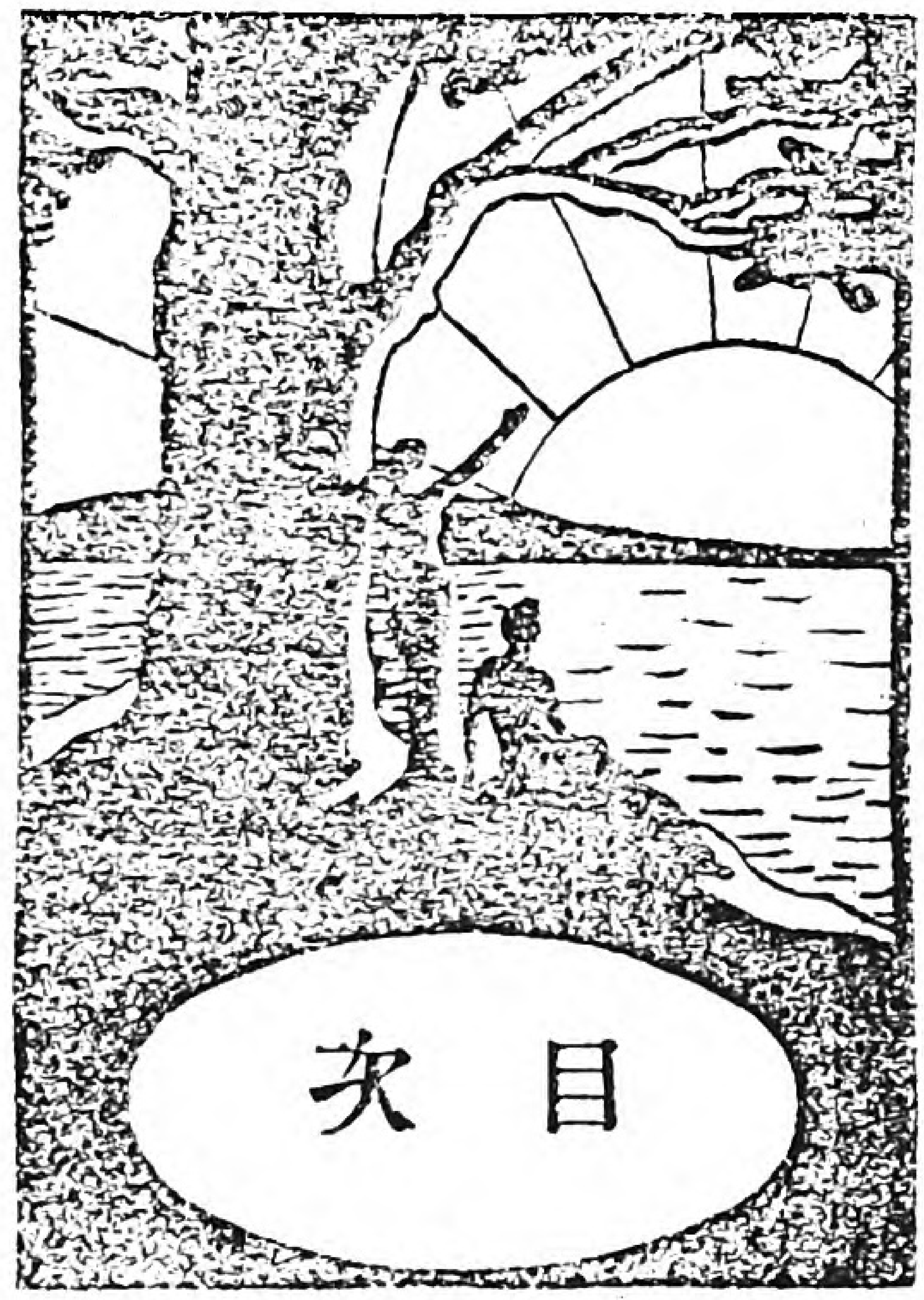
神田錦町

東京瓦斯株式會社

電話本局 一三、二五六、五四八／五七〇、三二三〇三／三一五二、三二三九


花菖蒲―燕子花
燕子花と花菖蒲とは、何方が姉でせうか？
妹でせうか？
その鑑別を附けるのは今！今が最も好い時季です！
而して一輪の花、一莖の葉を標本として
之れを造花とするのも、面白いではありませんか。
（金三十六錢送付あれ造花案内を送付す）
東京市日本橋區横山町一丁目十六番地
造花材料商
合資會社 天野卯兵衛商店
特長電話浪花（一六四三番）
振替口座東京（四九七〇）

女子文壇 紀念第百號



▲滿願の日（木版極彩色密刷）……竹久夢二

▲寫眞版（全部光澤紙色刷）△久邇宮邦彦王妃俔子殿下△貴族院議長公爵德川家達氏の家庭△德川伯爵夫人、四條侯爵夫人△三輪田眞佐子刀自、棚橋絢子刀自、跡見玉枝女史△松平子爵令孃△中島貴族院議員令孃、室町伯爵令姪、前田子爵令妹△南部伯爵夫人、鹽田大尉夫人△三宅文學博士と夫人花圃女史△渡邊晴江子、大久保綾子△武田少將夫人、中村文學士夫人、加納高師校長夫人、伊藤文學士夫人△元田代議士令孃、澤野農學博士令孃、小熊幸一郎氏令孃△新築落成せる日本橋……以上寫眞版十二頁

◎現代婦人百人一首……肖像筆蹟挿入

◎男子も女子も家庭の仕事が減じて來た……文學博士 大塚保治

◎將來の男女の關係……法學博士 上杉愼吉

◎好んで藝術家たるに及ばず……文學博士 井上哲次郎

◎西洋の若き男女の交際……美術學校敎授 藤島武二

◎脚本『祇王』……山崎紫紅

◎近頃の婦人問題……鳩山春子

◎母としての自覺……日向きむ子

◎屛風と日本畫……文學士 澤村胡夷

◎女庭訓……文學士 中村春二

◎正直に語る男子の見立……ほとゝぎす

◎人の生命と食物（上）……澤田順次郎

◎日本百文豪……記者

◎寧樂……………窪田空穗

◎與謝野晶子論
△婦人の作物に現はれたる色彩……和田英作
△短歌の爲に生れた人……森田草平
△强烈に我が生を愛す……窪田空穗
△尋常一樣の女流作家に非ず……藤島武二
△心持は貴族式、實際は謹愼な夫人の生活……馬場孤蝶
△和歌の創作三千餘首……河井醉茗

◎我が好む演劇と音樂……名士四十八人

◎門（落人、細道、破三味線、嵯峨、秘密、齋宮）……竹久夢二

◎世界百文豪……記者

▲有のまゝに現はしたる若き女の身の上
△何故時姫や初花に生れなかつたらう（市子）△名家の令孃と言はれる苦痛（毒だみ女）△父は大酒家、母はヒステリー、其間に出來た私の個性（覆面女）△青春の去りゆく時（斷崖の人）△生命より深い愛はないでせう（草の門）△聟の亂行に離散したる一家の悲運（重子）△華やかな時代（かげろふ）△涙多くなつたのも病身の爲め（木村涙花子）△眞實にお可哀想な百合子さん（佐分華影）△早く身の治りをつけたい（島守女）△春の寄宿舍（靜江）△吾を救はん、（露花女）

◎創作
△小說……（水野葉舟選）　△日記……（横瀨夜雨選）
△和歌……（與謝野晶子選）　△詩……（服部嘉香選）
△花……（河井醉茗選）　△動物に對する感想……（瀞口白羊選）
△俳句……（內藤鳴雪選）　△詩の言葉（鳥）△木瓜……（蘇生法師）

▲女子文壇
追想記　△山田邦子△長曾我部菊子△加藤重子△平塚白百合△ふゞき野

▲化粧問答（藤波芙蓉）▲誌友くらぶ▲第二回誌友會案內▲雜報

▲本號執筆畫家　△太田三郎　山中古洞、岡本一平、渡邊與平、萬代恒志




夢路

以下十種の書は百年後でも要つて居るから思ひついた時買ひ給へ

萬物製法秘術寶典

代價郵税共廿五錢 本年中大割引 郵税共廿二錢

目錄、輕便電氣燈●輕便晴雨計●輕便電話機●煙火●癇癪玉●齒磨石鹼●洗粉●白粉●香水●紙石盤●のみ取粉●萬年草紙●メッキ法●朱肉●空氣銃●萬年手帳●墨●朱墨●鼠取藥●無刀彫刻術●酢●豆腐●甘露水●果實酒●屠蘇酒●燒酎●葡萄酒●魚煎餅●罐詰●ラムネ●リモナーデ●ジンジャエル●蜜柑水●甘酒●味噌●醬油●水彩繪具等の製法其外大發明器械いらず**早取寫眞術**器械不用**早印刷法**等が**百**餘種記載してあるが皆あり合せの道具で出來る樣にしてある、殊に早取寫眞術は名の如く器械を用ひず僅かの藥品を以て器械にて寫せし者と少しも異ならぬやうに人物風景其他如何なる者にても大小の差別なく何枚にても鮮明に寫し得る愉快なる寫眞法である、藥品の無き地方は弊店より送る、又器械にて寫せし通りに寫らねば何時にても**返金**す、又早印刷法は道具を使はず繪でも文字でも大小の論なく速座に數百枚印刷する事が出來るから名刺ハガキ書畫廣告其他如何なる者にても安價で奇麗に印刷する事が出來る、一つ覺えても慥に五十錢以上の價値がある。

奇々妙々 手品種あかし

郵税共廿二錢郵券代用又は振替は廿四錢

本書を讀んで酒席又は多人數集會の折り手品をして見せたならば拍手大喝采疑ひなし、記載目錄●三尺の棒を丸呑みにする法●豆腐の上にて獨樂を廻す術●箱に水を入れる術●火を喰ふ大奇術●熱湯中に手を入れる術●空の帽子より色々物品を出す法●水上に木製船を自由に動かす術●黒いんきを金魚にする法●紙製の蝶を自然に飛ばす術●黒水を清水にする法●

附錄 **驚神的大魔術**

●水を燃す法●清水を牛乳にする法●銅貨を水に溶す術●ステッキを帽子の中に隱す術●水中又は机上にて鷄卵を踊らせる法其他尚面白き手品が澤山記載してあるが皆子供にも出來るやうにしてある。

學理應用 世界奇術大全

一週間に思ふ儘に白色となる法●人間百歳迄生きる法●人の生死を前知する法●必ず子を姙む法●必ず子供の出來ぬ法●胎内の兒の男女を知る法●他人の年齡を當る法●顔を櫻色にする法●日に燒けぬ法●髮の毛を多くする法●毛を生す法●書き損ひの字を拔く法●物覺惡き人を忘れさせぬ法●習字速成法●**催眠術**●歌がるた八々に必ずまけぬ法●百日百夜眠らずとも氣の衰へぬ法●老人でも白髮とならぬ法●其外斯の如き奇法を百餘種集めたる書物は廿三錢(郵券代用は廿五錢)

◎總て御註文は前金の外一切不送
●照會は往復ハガキの外返事せず

三重縣桑名矢田磧 **弘報館**

破天荒の快書 破格の大安賣 最新大奇術

郵税共二十三錢郵便切手は二十五錢

目錄大要 **切支丹バテレン**の妖術●モルモット術●太き火箸を指先にて自由に曲げる術●金錢自由吸集の妖術●繩拔の妖術●ランプの火にて手を燒く奇術●**十字架殺人術**●火渡の奇術●武道竹折術●火を喰ふ術●**隱身術**●人の力を取り我身を重くし上げられぬ術●七八歳の小兒を重くして上げられぬ術●棒を掌につけ押しても取れぬ術●片手にて數人の力を防ぐ法●護心術●三人にて持ち居る椅子を指二本にて取る術●不動金縛の妖術●二本の指にて**大人**を自由に揚げる奇術●數人にて一人を倒せぬ術其他奇術妖術山の如しそして何人も實行し得る獨習書なれば早く求めて朋人を**驚**かすも亦愉快ならん、奇術師天一も跳足で逃げ出す術ばかり。

禮法及婚姻法

日本の禮法に最大洩らさず婚姻部には媒酌●見合●結納の受渡●婚姻の前支度●嫁の荷物を送る事●婚姻三三九度盃の仕方●嫁と舅姑と親子盃の仕方●寢室に入る時の心得●フトンの敷方●其他婚姻に關する事柄は最大洩らさず附錄には婚姻出産死亡其他澤山。郵税共廿三錢

男女 無上の快樂

本書の内容は秘密に付掲載する事は出來ないから本書を讀んで初めて愉快なる事が出來る者と思へばよい。(他人に見えぬやう密封にて送ります) 定價郵税共二十四錢

一讀千笑 滑稽頓智笑話

面白くてアゴのはづれぬ用心して讀み給へ本書を讀んで居れば退屈する時がない郵税共廿二錢

數學獨稽古

定價郵税共二十四錢

智惠くらべ 考物萬題集

郵税共二十錢

道具不要輕便 食パン和洋菓子製造書

有り合せの道具で食パンや和洋菓子が手輕に出來る書は郵税共廿三錢

簡易 素人治療法

感冒●胃●痔●淋病●子宮病●眼病●疲小便●男女陰部諸病●頭痛●凍腫●肺病●ニキビ●ワキガ●サメハダ●耳ダレ●齒痛等の療法●毛を生す法●白髮を黒くする法●其他萬病を高價な醫藥でなく手輕に治療し得る書は廿二錢郵券代用は廿四錢

振替貯金口座番號 東京壹六九貳八番

三重縣桑名矢田磧 **弘報館**

◎割引上段下段ヨリドリ五冊一圓、十冊一圓七十錢、郵券代用一割增

五月號出づ!!!

青年文學界の覇王

拾壹卷六號!!!

趣味津々

秀才文壇

讀者文藝滿載

正價 一冊參拾錢 送料一錢五厘 三ヶ月分六拾三錢 半年分一圓廿五錢

△撰ばれたる作家……森田草平

△文藝保護問題……戸川秋骨

△新らしき俳優新らしき脚本 伊原青々園

○親(小説)……窪田空穗

○夢……モウパッサン作 仲田勝之助譯

△散文詩に就て……吉江孤雁

△予の愛讀書……小山內薰

△所在なさ(小品)……人見東明

△生物(詩)……山村暮鳥

◎初めて逢つた文壇の人々……SK生

◎晝(小説)……平岡縫代藏

◎記臆に殘れる鳥(詩) 矢野峰人

◎夜あるき(小品)……小川露葉

◎紅塵集……

秀才文壇第一增刊 五月十五日發行

青風號

正價貳拾錢 送料一錢五厘

發行所 東京神田旅籠町一 文光堂 (振替口座東京一五九五一五) 最寄書店に無くば直接本社へ注文を乞ふ

女學世界

第十一卷第七號

五月一日發行

□婦人問題は無益な空論……岡村法學博士
□女學校の先生へ眞劍の忠告……黒蠻女史
□思ひ出の記……清水玉露
□學問に熱して悲慘に了りし婦人の實例……棚橋絢子
□誕生日……松平鏡子
□四つ家の格式……花僊
□書物に囚はれた人の言葉……かげろふ
□時勢に伴ふ家風の變遷……淡雪
□卒業後の悲哀……常夏女
□湖畔吟……内藤千代子
□毒舌三千言……嫌はれ式部
□人情哲學……河岡潮風

□遁亡せる三婦人……松浦瀉
□非常の時に際して發現せられた武士魂……田鶴子
□クラスメートの異彩……黃水仙
□姿を美しくする法……河部享正
□逝くか青春……百合香
□現代婦人評論（女流音樂者）……獻舉
□教育と金力……井深花子
□猫の躾け方と人間の躾け方……木村利三郎
□人の榮華を羨まぬ心の餘裕……伊澤千代子
□雜記帳……與謝野晶子
□若葉のかげ……みさごゝろ
□天下一品の姑……翀品小枝子
□近世妖婦傳……物集梧水
□新案文學の教へ……

洋裝菊判紙數二百八頁
石版寫眞版豐富
正價二十錢
郵税二錢

東京本町
博文館



毎度三越へ御注文

目下流行せる子ル、セル

は申すに及ばず季節〳〵の流行品と必要品とは御手紙にて御注文下さりますれば、早速小包郵便にて御届け申上ぐべく、御便利は此上もございません。

三越呉服店は呉服太物を始め、洋服、時計、指輪、小間物、化粧品、玩具、靴、鞄、文房具、美術品など、何呉となく取揃へ品質の極良いものを極で安い直段で差上申ます程に明日とはいはず今直に、御注文下さる様ひとへに御願ひ申上ます。

寫眞版入「地方御注文案内書」は御申込次第進呈致します。

越

東京駿河町

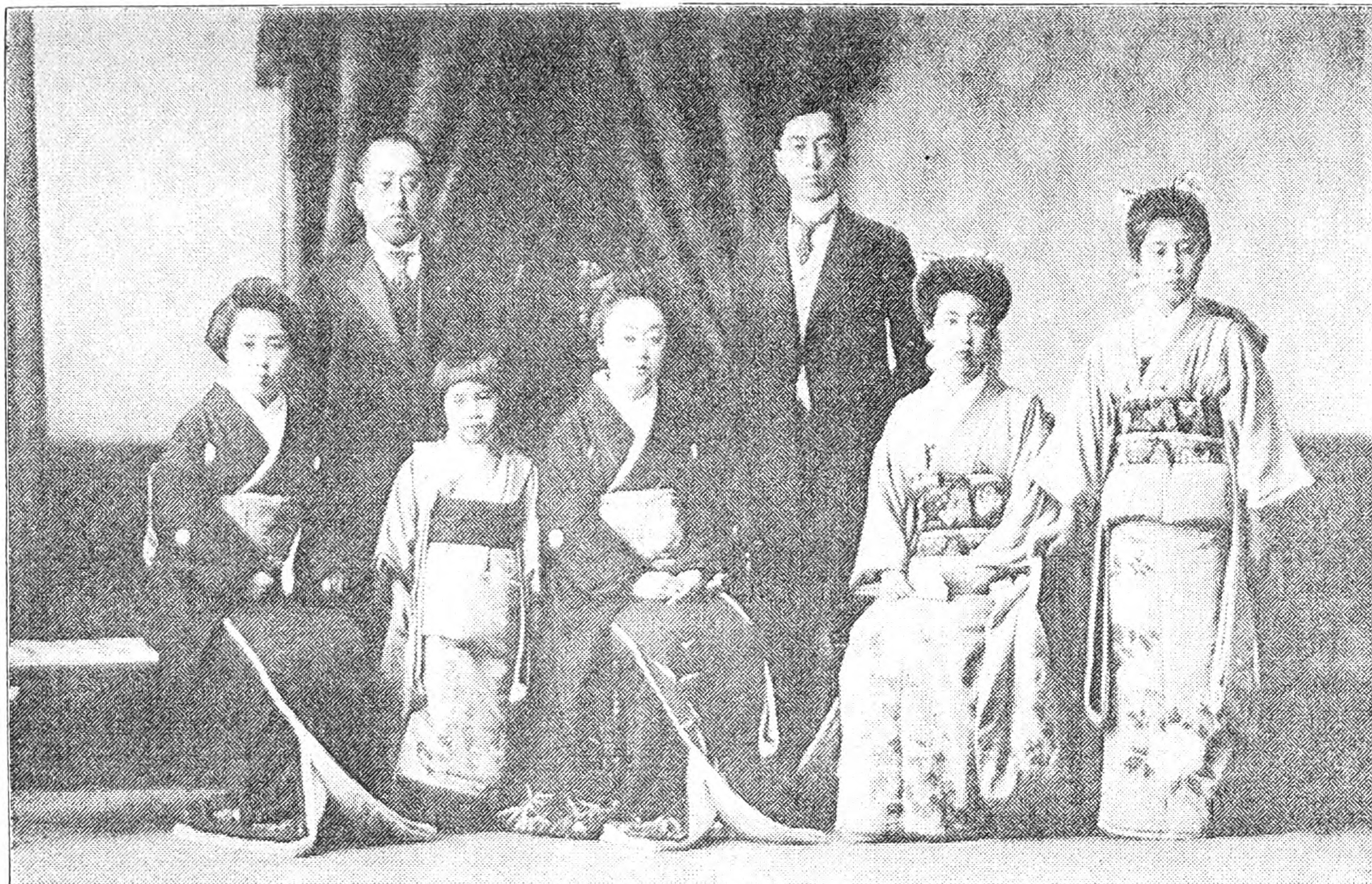
三越呉服店

久邇宮邦彦王妃俔子殿下



（本年紀元節の御撮影）

貴族院議長公爵德川家達氏家庭



（最近撮影）

家達公　令息家正君

公爵夫人泰子　令孃紫子　令息夫人正子　令孃綾子　令孃綏子

若き女性のゆかしき友

女學生

五月一日發行　第五號　正價一冊拾五錢　税一錢五厘

▲史傳 清少納言……小倉山人

▲女子と高等教育……澤柳政太郎

▲新夫人のやさしき心遣……鳩山薫子

◎女學校教師評判記……（實践女學校）

▲接吻と握手の原理

▲感じ易い我ハート

◎新譯 お夏清十郎　近松原作

▲きまり惡かつた事

▲女學生と粉飾

◎妖姫クレオパトラ……朝鳥

▲風變りの朝鮮婦人生活……今西學士

▲母校とも縁を切る……山脇房子

▲少女お伽 一瞬時の迷ひ……よへい挿繪

懸賞文藝　毎號大募集あり本誌を見よ

口繪　石版　木版　寫眞版　數葉入

東京神田旅籠町一丁目　文光堂發行　（振替口座東京一九五五番）





伯爵德川達孝氏夫人知子



侯爵四條隆愛氏夫人糸子



三輪田眞佐子女史



棚橋絢子女史



跡見玉枝女史



子爵松平乘承氏令孃愛子（學習院卒業）



貴族院議員中島永元氏令嬢徳子



伯爵室町公藤氏令姪文子

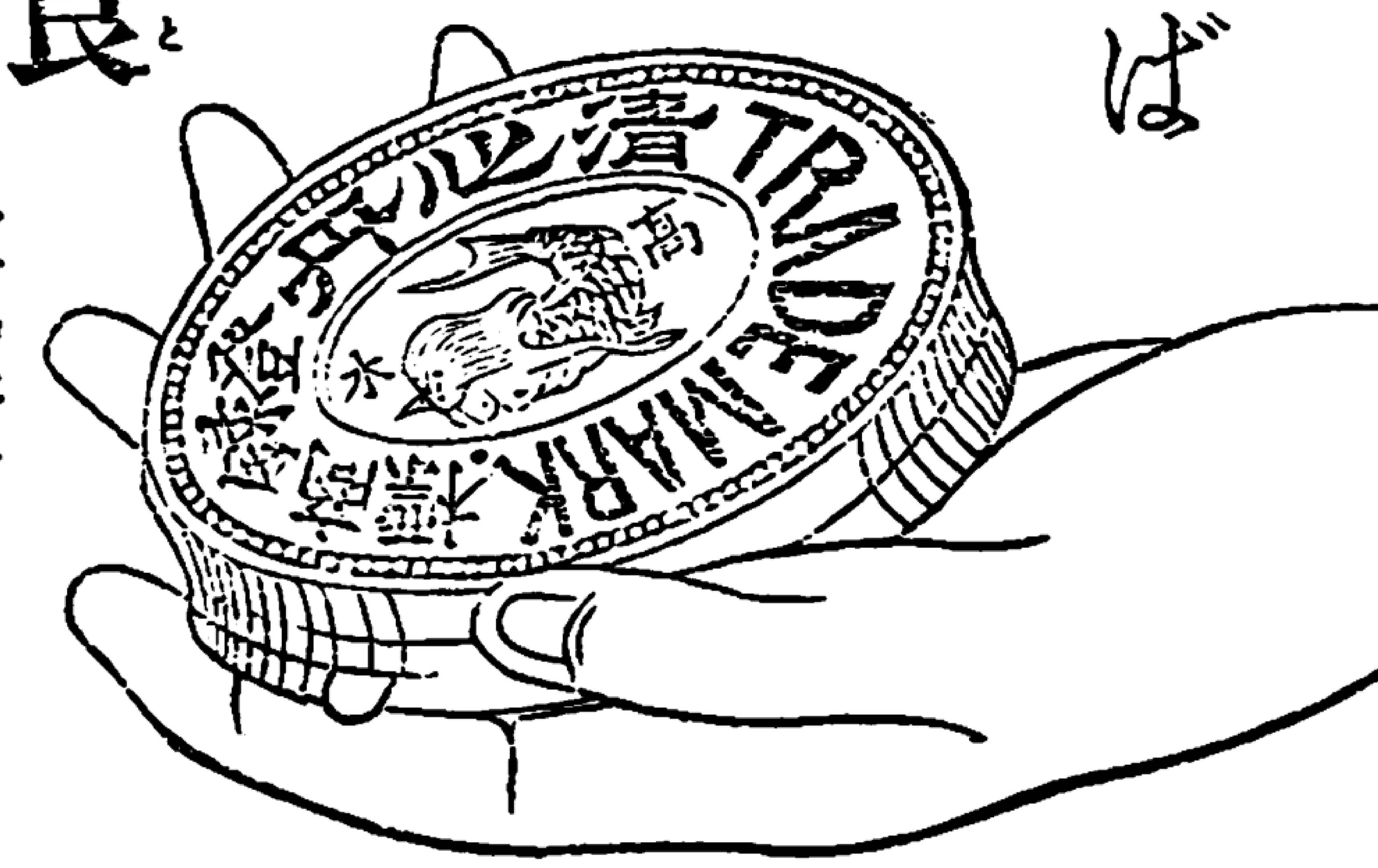


子爵前田利定氏令妹秀子

人若し藥を需めんとせば須く撰擇を要す

清心丹の三大特色は

一 効能の確實
二 品質の善良
三 價格の低廉



主治効能

心思鬱憂、頭痛眩暈、胸痛腹痛、
過酒過食、悪心嘔吐、溜飲宿食、
中暑中寒、下痢疝痢、舟車不快、
咯痰咳嗽、咽喉不調、歯痛口臭、

定價（壹圓箱入　五拾錢箱入　參拾錢鑵入　拾五錢鑵入
（拾貳錢瓶入　貳拾錢紙包　拾錢紙包　五錢紙包

本舖 東京市日本橋區元大阪町八番地 高木與兵衛

御婦人の寶

御婦人方が生涯無病でお過しなさるには月經の處置が最も大切な事は申上る迄もなく從來の樣に脱脂綿等を挿入なされては經水の滯るのみならず綿の纖が殘り此度子宮病ヒステリ等の病源となり醫家の嘆かる事です

特許 安全帶 は藤川藥學士發明消毒安全吸收力脱脂綿の數倍で博士の甚く賞用さる丶月經時に重寶便利な如何程經水の多い方でも粗漏する事のない起居動作極めて安全な帶 衣 又産後や白血長血痔漏等に妙です



東京市下谷區池之端七軒町四十二番地
本舖 安全堂
内外石鹼化粧品卸商安全帶

大阪市西區阿波座上通一丁目二十二番地角
關西一手販賣 洋々堂分店

定價
安全帶特甲一筋壹圓貳拾錢
乙八拾錢、並四拾錢、一筋ニテ二三年使用出來升
安全衣は一打入一箱特甲金六拾錢特乙金四拾錢

市内ハ藥種化粧品店ニテ販賣致升
小包料ハ一組金拾貳錢一組增毎ニ貳錢增シ候

應用自在 有益秘傳教授書

◎讀め!!讀め!!男も讀め!女も讀め!少年も讀め!老人も讀め!大日本國民は一人も殘らず本書を讀め!!

◎誰れでも讀んで非常に面白く非常に有益なり然り左の目次を讀みたるだけにても面白きにあらずや著者は半年の苦心此の如き良書を發行す

驚くべき賣行四版出來 至急御申込あれ

割引特價 一冊送料共 金廿二錢 振替は廿三錢 切手は廿四錢

東京神田錦町三ノ二 振替東京一六一八番 學友社

◎火に燒けぬ紙の製法
◎ランプ油煙上らぬ秘傳
◎情慾抑制秘傳
◎一生眼病にかゝらぬ秘傳
◎鼠取の秘傳
◎人の賢愚を見分ける秘傳
◎夏季氷を自製する秘傳
◎炭の徳用秘傳
◎髮の毛を長くする秘傳
◎ランプを明るくする秘傳
◎女に愛せらるゝ秘傳
◎災害を前日に知る秘傳
◎必ず子をはらむ秘傳
◎記憶力を増進する秘傳
◎人を眠らする秘傳
◎井戸を掘るに水有所知る
◎待人來る秘傳
◎毒を見破る秘傳
◎雀を白色に變ずる秘傳
◎人の器用不器用を知る秘傳
◎魚の骨喉に立しを取秘傳
◎飯のこげ臭きをなほす秘傳
◎人造金の製法
◎商店に客絶えぬ秘傳
◎酒きらひになる秘傳

◎女を泣かす秘傳
◎必ず乳の出る秘傳
◎顏のキメを細かにする傳
◎蚤を除く秘傳
◎男女戀の成就する秘傳
◎一生風の引かぬ秘傳
◎胎内の子の男女を知る秘傳
◎天氣を前日に知る秘傳
◎女の淫亂を知る秘傳
◎女の心を知る秘傳
◎自毛染の秘傳
◎器械不用早印刷の秘傳
◎卵殼美術浮彫秘傳
◎遠算の秘傳
◎シャクリを止める秘傳
◎習字速成の秘傳
◎夜光文字の秘傳
◎髮の毛の赤きを治す秘傳
◎油大徳用の秘傳
◎蠅取藥の秘傳
◎ちゞれ毛を治す秘傳
◎ふけを去る秘傳
◎さし木の秘傳
◎ふしぎの花をさかす秘傳
◎餅のかびぬ秘傳

◎長居の客を歸す秘傳
◎忍び繡文の秘傳
◎病氣を前に知る秘傳
◎酒きらひになる秘傳
◎煙草きらひになる秘傳
◎人心觀破の秘傳
◎萬年手帳製造の秘傳
◎生年にて女の美醜を知る
◎線香花火製造の秘傳
◎太皷を自然にならす秘傳
◎生れ月にて女の性質知る傳
◎藥品にて彫刻する秘傳
◎衣服類の洗濯秘傳十四條
◎醤油倍増の秘傳
◎壁を新らしくする秘傳
◎油のしみぬき秘傳
◎麥稈帽子の洗濯秘傳
◎生肉を貯へおく秘傳
◎栗を貯へおく秘傳
◎ホヤの割れぬ秘傳
◎石油の臭きをぬく秘傳
◎靴を新らしく柔かにする
◎日本酒倍増の秘傳
◎瀬戸物早つぎの藥の秘傳
◎石を柔かにする秘傳

◎竹を柔にする秘傳
◎冬に筍を出す秘傳
◎老人となりて白毛出ぬ傳
◎神經衰弱をなほす秘傳
◎餅の咽につまりを治す秘傳
◎蟲齒の痛をすぐ止る秘傳
◎白髮を染める秘傳
◎紫をよくする秘傳
◎咽に立ちし骨をとる秘傳
◎身體のやせる秘傳
◎梅毒を秘密になほす秘傳
◎淋病を人知れず治す秘傳
◎子供の夜泣をとめる秘傳
◎月經不順の獨察治秘傳
◎男子の精力を増す秘傳
◎いぼをとる秘傳
◎あざをとる簡易秘傳
◎寢言をなほす秘傳
◎トゲヌキの秘傳
◎髮のぬけぬ秘傳
◎色白くなる秘傳
◎耳だれをなほす秘傳
◎簡易美顏法
◎無藥療法數ケ條
◎雨障子切れぬ秘傳

◎及物のさびぬ秘傳
◎針のさびぬ秘傳
◎炭火のはねぬ秘傳
◎あらひ粉簡易製造秘傳
◎ガラスを切る秘傳
◎米に蟲のつかぬ秘傳
◎醤油の味をなほす秘傳
◎りんき深き女を治す秘傳
◎思ふ時眼をさます秘傳
◎貧者金持となる秘傳
◎上等ハミガキ製法秘傳
◎甘露水のこしらへ方秘傳
◎水おしろい製法秘傳
◎赤毛を黒くする秘傳
◎草木の花を藥とする秘傳
◎ラムネを製する秘傳
◎せと鍋のはけぬ秘傳
◎鼠穴をふさぐ秘傳
◎思ふ事を人に夢に見せる
◎鍋釜の金氣をとる秘傳
◎衣服に血のつきしを去る
◎歩みて道程を知る秘傳
◎生花の秘傳
◎醤油のかびぬ秘傳
◎冷飯を暖かにする秘傳

右は本書目次の二分の一に足らず秘傳總計三百六十條に及ぶ然も（一冊廿二錢）一法の傳授料僅々一厘の割合也天下此の如き安價なるものあらんや。

今回本書の發行盛なるを祝し本社へ直接注文の方に限り左の賤物利用法一部宛景品として進呈す至急申込あれ

進呈

◎一字千金 廢物利用 金儲法

本書は破硝子古下駄古新聞屑魚骨古手拭鋸屑鉋屑酒粕桑の枝皮古靴其他種々の廢物を使用する方法を詳説す之を家庭にて利用せば一家の經濟となり之を營業とせば少資本にて多大の富を作り得ん眞に一字千金之を無代附錄とす

梅どくりん病ぢ疾症わきが生殖器諸病神經衰弱症婦人科

東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横

(診)朝八時より夜九時迄

中央醫院

子宮諸病 血の道 ヒステリー 月やくとまりたる病 子なき人

梅どく諸病 りん病消渇 わきが ぢ にきび たむし等

生殖器諸病 神經衰弱 陰萎 遺精早漏 發育不充分 記聽力減衰

▲病狀を記し郵券六錢を送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特效新藥說明書送る

東京淺草區瓦町廿八番地淺草橋通り瓦町電車停留場横

中央藥院

ニキビ そばかす

にて苦悶者は藥學界の泰斗が半生の心血を注ぎて漸く

藥學士藤本理先生

發見せられたる特種の奇藥

ヴルー

を使用して速に苦惱を脫せよ但し本劑希望者は本劑購求前又は同時に本劑の說明書を要求せられ其特效たるを確信の上使用を乞ふ

(定)藥價輕症用五拾錢送料市內四錢地方八錢清韓臺灣卅錢

[illegible]

東京 本郷區森川町壹番地 長田商會

振替口座東京七六二九番

懷姙避姙自由自在器

子のできる器及子のできない器

(▲兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自療器)

醫學得業士

(齋藤乙吉先生發明)

實用新案登錄特許

アシトア

atocia,

(膣內挿入小器具)

本器は産科婦人科日東病院長醫學得業士齋藤乙吉先生の發明に係る最も簡易安全にして毫も無害なる懷姙避姙自由自在器兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自宅治療器也即ち本器により膣內へ姙孕を補助する藥劑を入れる時は人工的に懷姙することを得らる故に子の無き人は用て目的を達すべく又本器により膣內へ姙孕素を消失する藥劑を入れる時は決て姙娠せず子澤山の婦人は夫に秘密に用て避姙の目的を達し得らる而も共に衛生無害なるは發明者多年實驗上確證する所なり且つ本器へ病毒豫防藥を入れ應用する時は梅毒淋病其他の病毒を留て傳染することなく子宮に疵傷する患なし又慢性子宮內膜炎膣炎子宮諸病患者は本器へ是等治療藥液を入れ應用せば自宅にて容易に自身治療することを得るものなり本器は彼のルーデサック及子宮サックの如き不決の念なく天然の感觸を鋭敏强劇ならしむる世界唯一の理想的新發明品にて一度買へば拾數年間保存し得る婦人衛生上必ず携ふべき要用の良器なり。但し詳細なる說明書及使用法并に應用藥劑處方書。現品に添附し小包郵便密封にて送付す。(正價)ニッケル製壹圓拾五錢。純銀特別製參圓拾五錢は郵券代用貳割增し。著金即刻送品す。

世界一手 專賣元 東京市神田區五軒町十九番地(電話番號下谷五百四十六番)

日新館藥房

見よ◎月經なき女子◎病める婦人

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物

▲勿驚……藥力最精實……効能確保……有効無害……

有効確證



其主藥は最新唯一の通經藥にて**帝國大學**病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の**月經**閉止月經**滯**り經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

◉**肥滿病新藥**

（米國新輸入）

子供の折**美愛**と賞せられし人も年頃になりてよりぶとく〲肉太りたる爲め上圖の如く**醜**婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンッオルト氏の發見藥にて脂肪多き人◉ぶとく〲ふとり◉血太り◉肉太り◉酒太り◉水太り◉顏赤◉にきび◉ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は艶白となり誓て**美顏**窈窕たる美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸嬢姉の福音



藥價一劑一圓五十錢三劑四圓卅錢
二劑二圓九十錢四劑五圓半
送料十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番 **小宮愛生堂**

◎**腦神經衰弱及生殖器病藥**

壯快愉絶



本劑は獨逸醫界大博士メリングー氏が發明に係る新劑にして男女生殖器不能即ち**陰萎病**活力無能發育不十分等に起因する病症に使用して**可驚**大効ある新發見藥なり故に該病患者は一日も早く本劑を服用し**人性最大の快樂**を全ふせんと欲する人は必ず服用せよ服用僅かにして精力を尙一層强健にし偉大の効力顯る……奇効現代唯一の良藥なり

藥價四十五錠入壹圓百錠入貳圓二百八十錠入五圓特器入拾圓

適効ハ神經衰弱遺精夢精早漏房事過度射精無能貧血勃起力減少精神的及身體的過勞等に用て特効有り

◎**淋病でこまる人は**先づ完全なる良藥を撰べ

りん病消渇必治藥

內用外用



奇効說明書無代進呈

內用三日分五拾錢七日分壹圓十五日分貳圓特製分參圓八拾錢
外用三日分參拾錢七日分六拾錢十五日分壹圓廿錢特製貳圓廿錢送料內地は各八錢要す海外は小包卅錢

本劑は各國醫科大學處方及び藥劑を參酌し研究に苦辛を重ね一大完全なる良藥を調製するを得たり依て之れを多くの患者に與へたるに其結果實に驚く可く急性淋病は勿論慢性痼疾の淋菌も悉く殺滅して更に餘す處なく治癒せしめたり故に同病患者は速に試みられよ必ず全治保證す——

本舖 東京京橋區中橋和泉町 振替一〇六七七番 **小宮愛生堂**



海軍大尉豊田貞次郎氏夫人滿子



伯爵南部利學氏夫人嚴子

文學博士三宅雪嶺氏と夫人花圃女史



令孃民子

肺病新藥

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地ノ醫藥は勿論妙藥なりと聞く毎に諸種の賣藥を服し東京市内有名大家諸先生の診斷服藥し猶は横濱獨逸病院長ドクトル□の藥劑も其効なし豆州熱海相州箱根・州草津温泉何れも兩三年入浴するも異狀なし其外鍼灸限なく療養したるも効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々喀血して皮膚青白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳痰甚しく骸骨同樣に成最早此の上は致方無之只死を待の外なし然るに私は病中臥床ノ內と雖とも常に書見するの癖あり一日家藏ハ古書を書見す中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議に爽快を覺え尚續て服するに益々快方に趣き四週間餘りにて全く根治したり既に外期に臨みたる大患を斯く容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く毎に其藥をあげ試藥せしも〆五十四人皆共に全治せざるものなし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て寧ろ之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ內務省の御檢査を蒙り弘く世の肺患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尚は淺きにも不拘內地は勿論既に**米國紐育市タイヤーガ商會及び印度バタビアヒイアエーテス社**等へ續々輸出し專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に四千六百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に惱める人士なきにもあらじ天壽を完ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ

藥價七日分貳圓●十四日分四圓●廿一日分五圓●卅五日分七圓五十錢●五十日分十圓●七十日分十四圓▲遞送料十二錢●爲替局名は大森局宛

主治効能●肺結核●肺炎●氣管支加答兒●肋膜炎●肺炎加答兒●たん咳等肺病一切より起る諸病を根治する偉功あり

用法及び詳細は本能書にあり但し本舖へ直接御注文の時は病狀の模樣を詳細に記入申込を乞ふ

東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

調劑本舖 川名助次郎

電話大森六十九番

肺治散特約店

東京神田區花房町二番地 山崎帝國堂
東京神田區橋本町二丁目 福井甚藏
東京京橋區銀座一丁目 佐々木玄兵衛
東京日本橋區瀬戸物町 玉置合名會社
東京日本橋通二丁目 中田清兵衛
東京日本橋區本石町 守谷鶴次郎
東京兩國米澤町 大木口哲本店
長野市大門町 小林傳兵衛
佐賀市白山町 荒木榮盛堂
東京京橋銀座二丁目 岸田吟香
東京日本橋本町三、大橋博愛堂
東京芝區神明前 岩本藥舖
宇都宮市馬場町 木村作次郎
（全國到る所の有名なる藥舖にて販賣せざる一無之地・本舖へ申越次第特約す）
東京京橋銀座三、松澤八右衛門
東京日本橋通二丁目大野傳兵衛
東京日本橋箱崎町二川名久之輔
仙臺市新傳馬町 櫻井伊之助
東京日本橋上槇町 安川晁榮堂
東京兩國米澤町 吉田安五郎
相模國須賀汐入町 茶木支店
青森市米町 伊藤末次
東京神田區鍋町大通 大木合名會社
横濱吉田町二丁目都橋際 永井永進堂
大阪堺筋伏見町 谷同春堂
大阪小野町堺筋北入 丹平商會

新輸入美容法 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體に**純白色**に變化し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の美容新劑價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる內服藥 サーサパリラ

價壹劑二圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑强なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒瘡毒リウマチス等の病毒及び男女躰內の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の內服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と內外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王なることは荷も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗を證する所なり、乞ふ昨今世上に縱々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉石混同視することを勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

以上三種 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

有効保險 前代未發 秘傳奇術

全壹册正價郵稅共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

(目錄法要)神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰○の爛れを治する法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛即止藥製法●髮の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髮必生法●臭汗治法●白髮を染むる法●髮毛の光澤を美にする新藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ビツトル酒製法●夏日室內を爽涼にする法●羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白爪を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體衰へざる法●拔毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の老婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顯はす神術●女に○れらるゝ藥法●硬き毛髮を柔軟にする法●思ふ女を○○かす藥法●堅き女の氣を○○す藥法●陰○を長大にする藥法●そばかす必治法●女を○○にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を增す法●毒蟲に螫れたる時朧わ特効藥●避食の仙術●神速に精力を強む法●即座隱身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顏赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑亂する秘法●色慾なき女に情を○せしむる法●記憶力を增進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黑字夜光の奇術●老人の終身皺取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする內服劑新法●寶丹の製法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●眼眺を治する法●黃疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを直す法●痲病の治法●月經の不順を治する法●疝氣の妙燃●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る新法●頭髮を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●頑癬必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の最新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして治す法●火傷即治の秘法●シャクリ即治法●聲を能くする新術●白髮豫防新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭痛を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔く新法●乳の出る妙藥●陰部の濕瘡治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齡により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ肌美ならしむる法●毒酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●疊の汚染を落す法●新らしき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顏術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下拾法略す合計壹百四十法あり着金即刻送本す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館商店**



大久保德明氏令孃綾子（實踐女學卒業）



工學博士渡邊嘉一氏令孃晴江子（學習院卒業）



武田海軍機關少將夫人貢子



加納高等師範學校長夫人須磨子



文學士中村春二氏夫人小波子



文學士伊藤健氏夫人鶴子

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の

ばい毒根治特効

梅毒根治新劑

新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゐかさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく〳〵瘡毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて誓つて根治することを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡するも全治ノ効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。

藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

陰萎病特効新劑（瑞西新輸入藥）

内服 トニチン TONITIN

拾錠入壹劑 藥價送料共壹圓九拾錢 郵券貳割增

本劑は瑞西國ウォルフエンスベルゲル社の發明新輸入に係り其主効は……男女生殖機不能即ち陰萎病。腎虚。神經衰弱……遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虚弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不妊娠。冷症發育不全等に用ひ天下無比可驚奇効ある最新發見藥也精力を增進し生殖器を强健ならしめんと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に如電光たる世にありふれたる無効藥と同一視すること勿れ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

奏効確證 美容新劑 やせる藥

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分九圓廿錢着金即刻送藥す

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に減し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

世界唯一 痳病消渴の根治確證新藥

痳滅（りんめつ）

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渴即治療藥なり、本劑はありふれたる普通の毒藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を內服して痳病消渴の原たる病毒「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より根治するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割增しの事

わきが 腋臭 全治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても忽ち誓て根治し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ、價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓參拾錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

特別製分金五圓三拾錢 中瓶貳圓廿錢 小瓶壹圓廿錢

本劑は獨逸醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぽうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視することと勿れ

以上六藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

肺結核全治之奇法

全治者數千人に達す

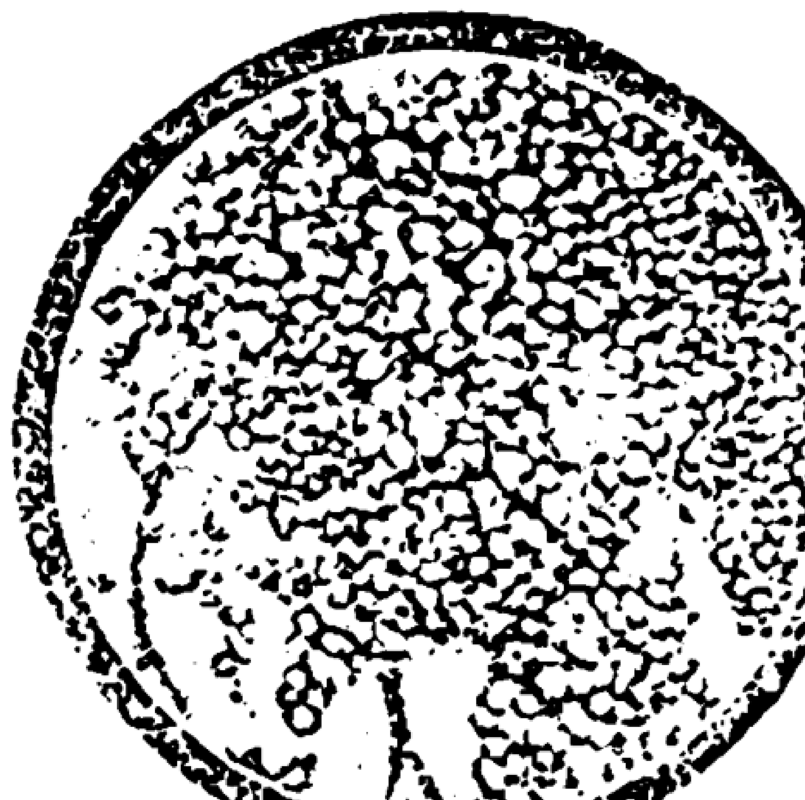
（所謂新藥に非ず）

近時肺病の治療藥として續出する新劑は其數幾百千然も人體内に於て殺菌の効力あるものは本療法の外之を認めずとは有名なる細菌學の大家古弗博士の證言なり宜なる哉肺結核治療の學理的見地より論及せば能く結核菌を殺滅するに足る濃度の劇劑は人間の臟器細胞を害するや論なし現に患者は所謂大家の新藥が其効果を奏せしもの幾何かありしぞ余は夙に仁義に富める多くの學者先輩の援助を得て肺結核競爭療法を企て歐洲各地病院溫泉地療養所等より多くの新材料を收集し茲に空前の新療法を發見し肺病患者寶典なる書物と全治の證據を刊行し五千卷を限り無代にて之を患者に分つ事とせり

大勳位伯爵東郷閣下題字
從一位侯爵久我閣下題字
正二位伯爵東久世閣下題字
正二位伯爵土方閣下題字

肺病患者寶典　全

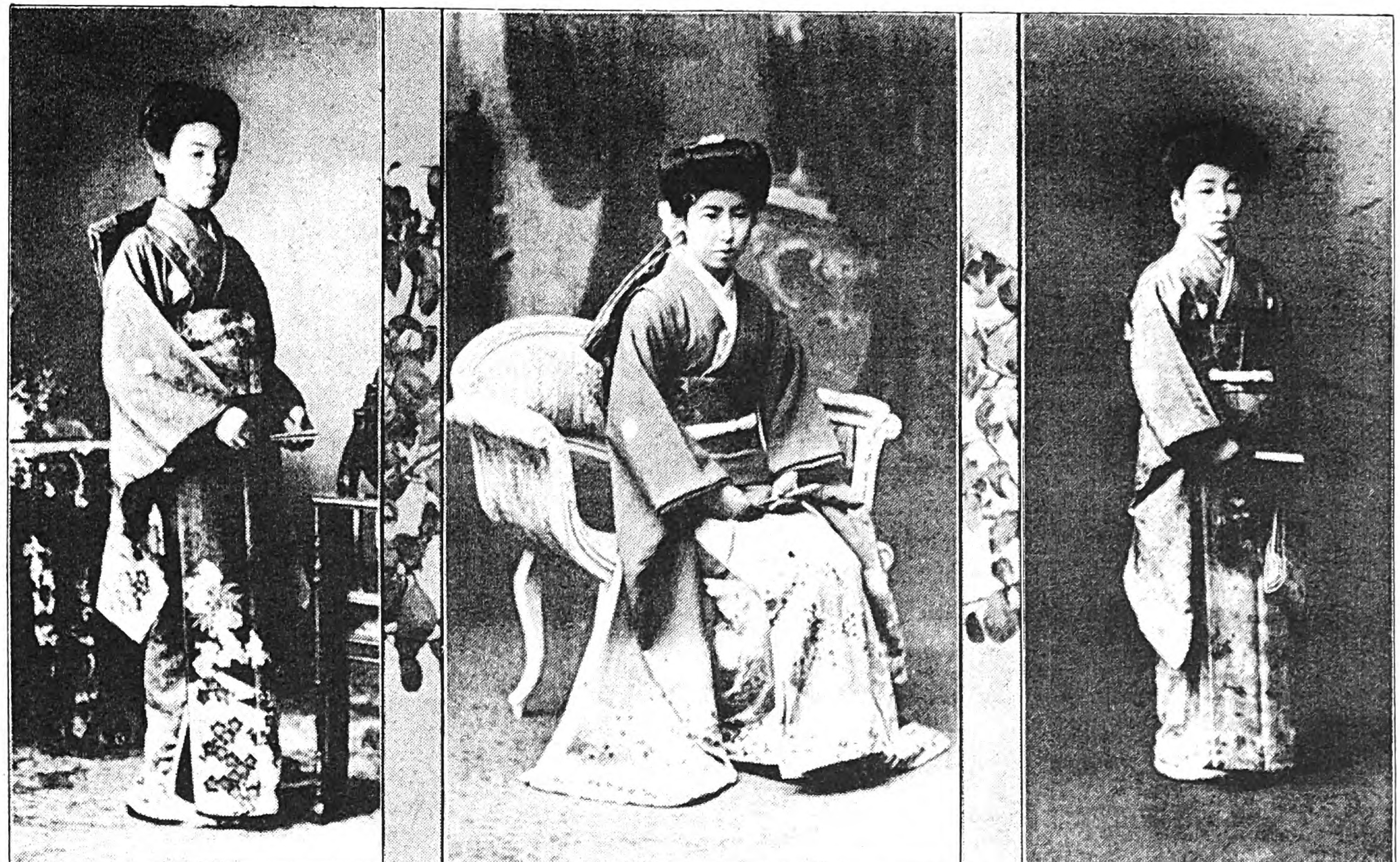
世に不治の難病と稱せらるゝ肺勞患者が本療法の奇効に浴し全快の幸福を得し實例は既に數千の多きに達す抑々肺病の醫藥甚だ多けれど悲かな現今にては攝生的本治療法の如く大効を奏するものは他に之ある無しとは北里醫學博士柴山醫學博士鈴木醫學博士が極力唱導されし處にして如何に本治療法が最も進歩せる唯一の療法たるを知に足らん



本療法の奇効

○發熱盜汗
○血管破裂
○血痰不眠
○食慾不進
○呼吸困難
○喀痰咳嗽
○胸部疼痛
○下痢貧血
○喉頭痛
○心臟衰弱
○肋膜滲潤
○胃腸障害

然れば肺結核、肺炎、肋膜炎、氣管支加答兒等に罹り前記の症狀を呈し醫藥効なく煩悶の人は決して失望悲嘆を要せず直に郵券二錢添東京日本橋吳服町二番地順天堂藥院安原尙親宛申込ば全治の秘術を盡せる前記の大書冊無代送呈す



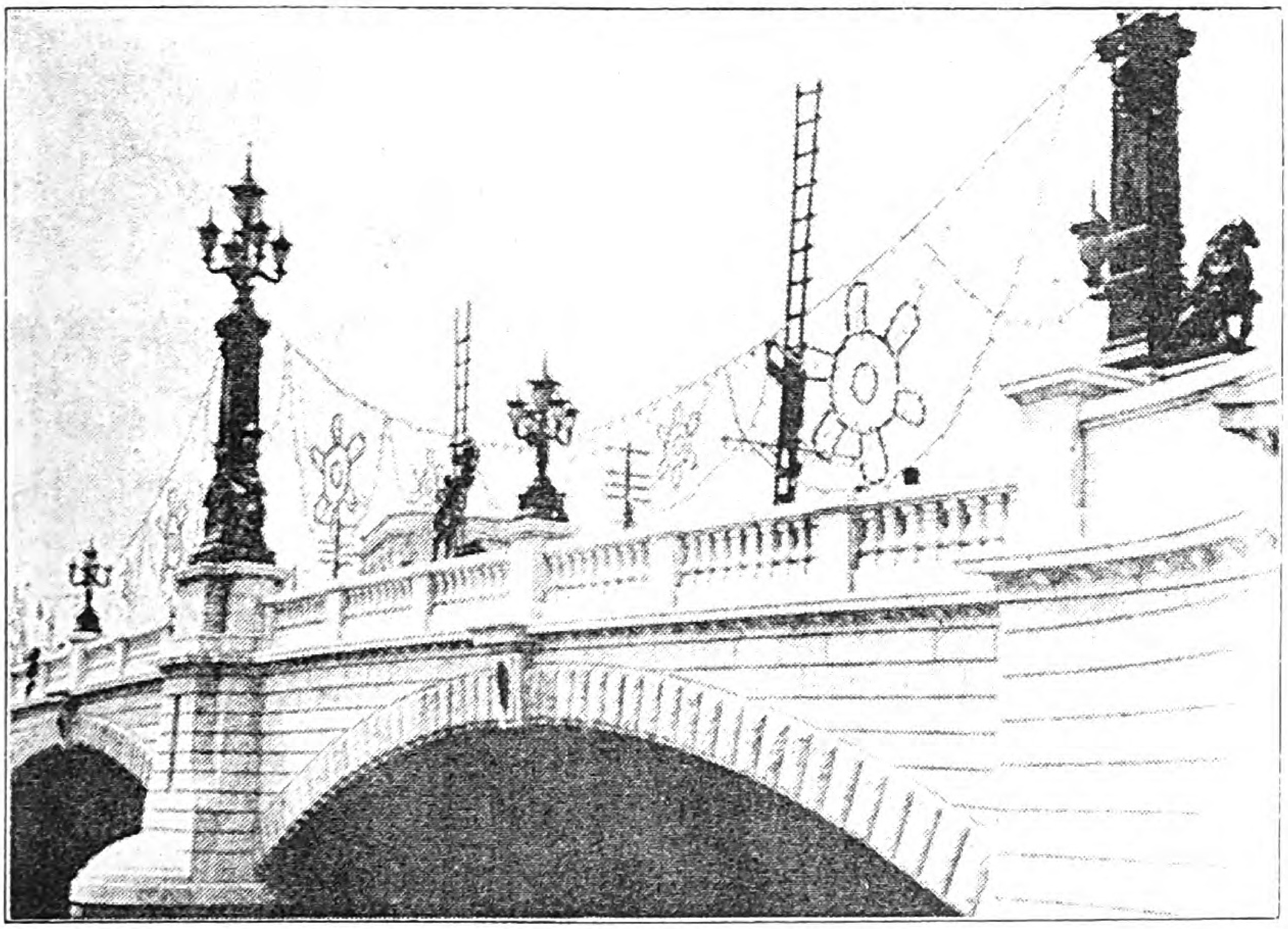
代議士元田肇氏令孃千鶴子

農學博士澤野淳氏令孃富子

函館紳商小熊幸三郎氏令孃たか子

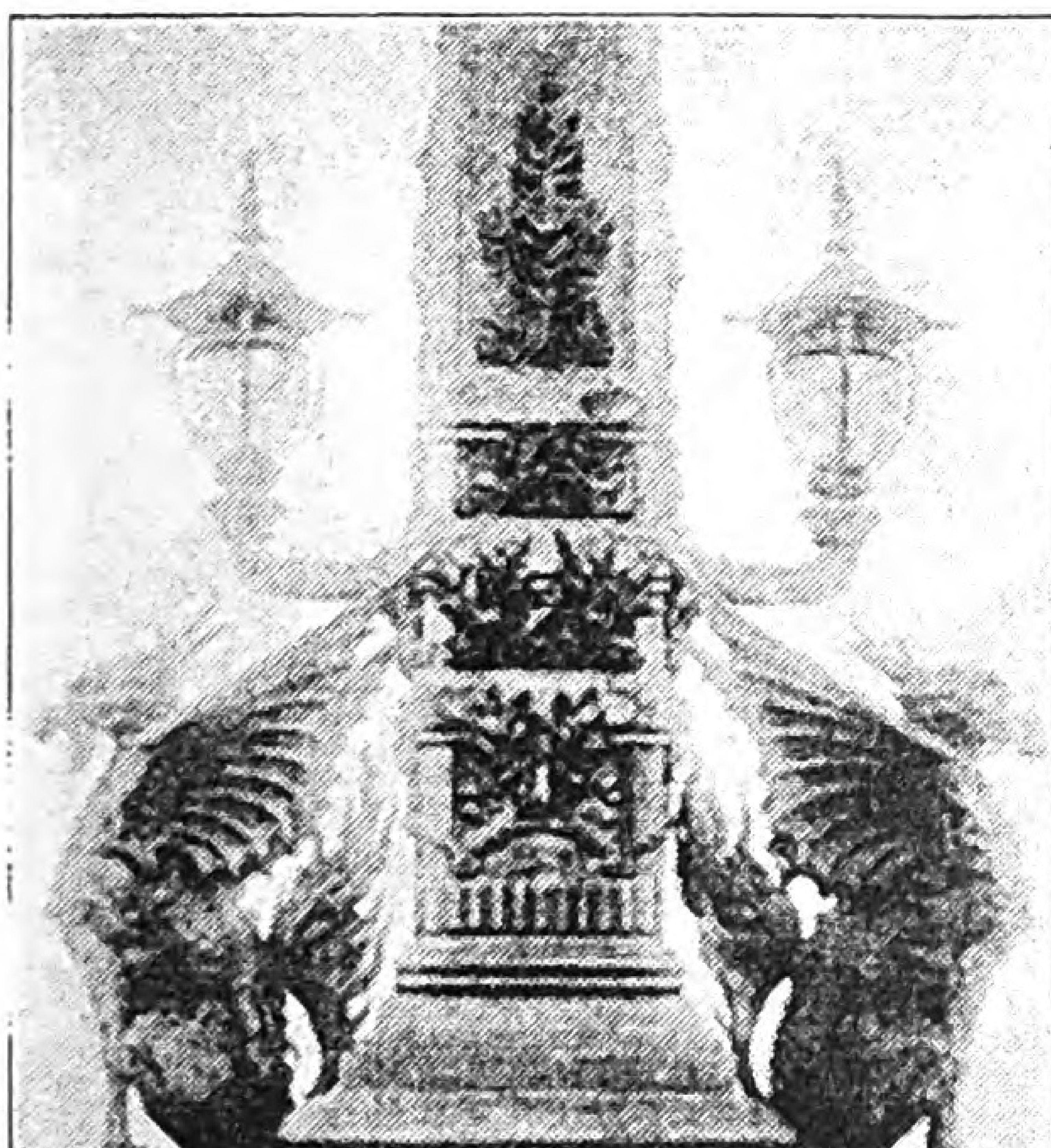
新日本橋

上圖は今回新築落成したる日本橋の全景、下圖は橋上の粧飾たる唐銅の獅子と麒麟。
橋の工事は明治四十一年九月に起り四十四年三月二十六日落成、四月三日盛大なる開通式を擧行せり。





獅子の燈飾



麒麟の燈飾

活版 凸版 寫眞 電氣 活字 鑄造 **印刷** 裝釘 帳簿 彫刻 凹版 銅版 石版

合資會社東京國文社

京橋區宗十郎町十五番地

電話新橋 三二〇一・三五〇九番


女子文壇
紀念
第百號

現代婦人百人一首

海邊秋夕　　有栖川宮妃慰子殿下

かぎりなく悲しき秋の夕ぐれにはてなき海をながめけるかな

年の始に新年雪といふことをおほせことによりてよめる歌　　山階宮妃常子殿下

ゆたかなるとしのみつぎかおほうちの山とつもれる今朝の初雪

田家煙　　賀陽宮妃好子殿下

民くさも御代のめぐみににぎはひて煙たちそふ小山田のさと

籬に卯の花さけり　　北白川宮大妃富子殿下

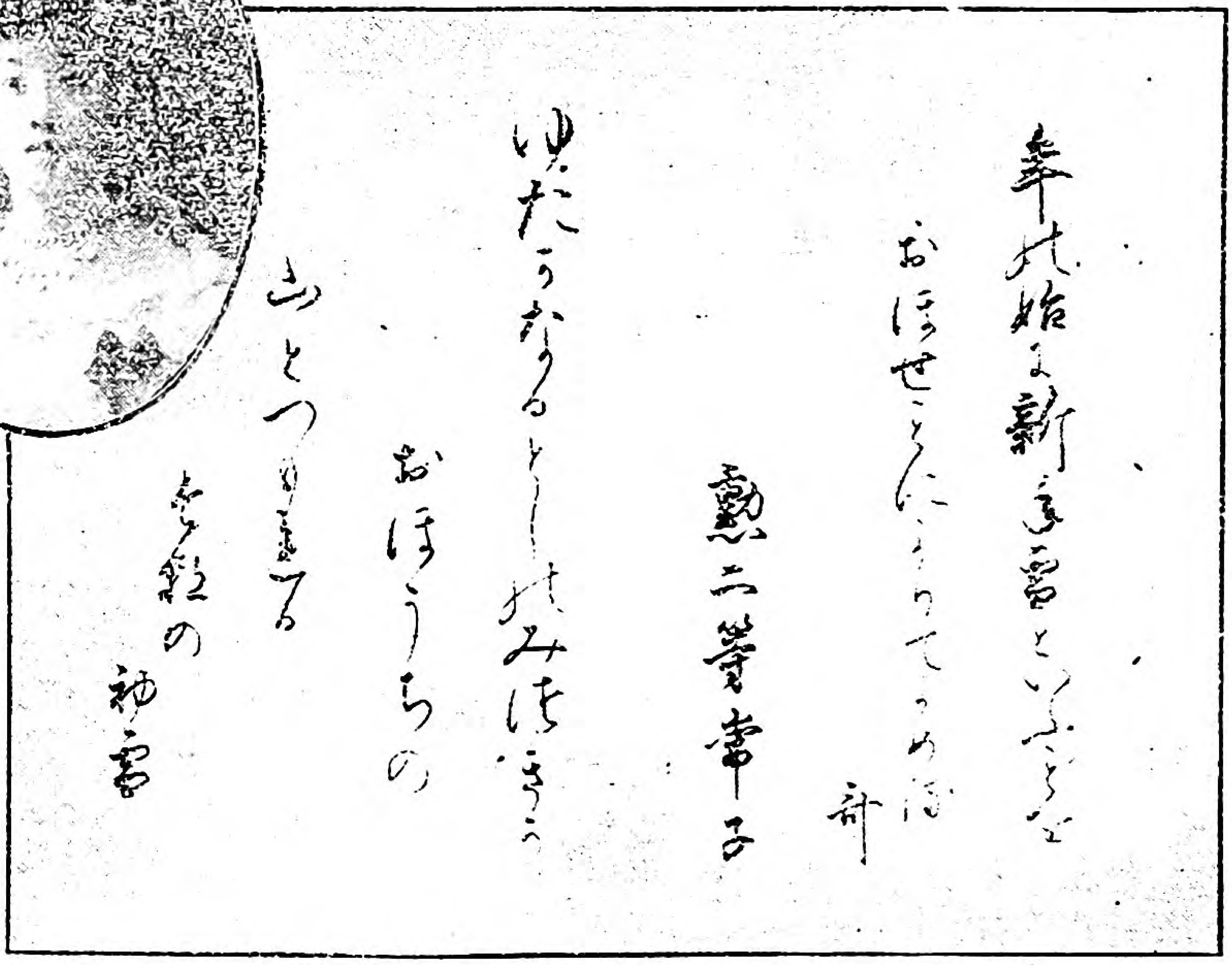
ませ垣のかなめにまじる一もとのうつきの花のおもしろきかな

首夏水　　閑院宮妃智惠子殿下

うちつけにすゞしきものは夏のきて若葉かげさす庭のやり水

故山階宮菊麿王妃常子殿下と御筆蹟





初花
公爵夫人 九條惠子

庭さくらはやさきそめぬ散りしける梅の花をもはらはざるまに

寒雲
公爵夫人 近衛貞子

あたゝかき日かげは窓にさしながらまだ風さゆる雲のいろかな

落花埋苔
公爵夫人 徳川泰子

春ながらつゆけかりけり苔ごろもかさねて花のゆきぞつもれる

秋色
侯爵夫人 鍋島榮子

尾花咲く野末にあかくまじれるははじの一本染めしなるらむ

女學校
侯爵夫人 前田朗子

をとめ子も文の林にわけ入りてまなびおぼゆる世となりにけり

谷村みよ子　公爵夫人近衛貞子　子爵夫人藪篤子　伯爵夫人壬生篤子



山影寫水　侯爵夫人　木戸壽榮子

しづかなる流れもしるし麓川うごかぬ山の影をうかべて

雪中竹　侯爵夫人　四條絲子

むら雀さわぐ羽風に雪おちてみどりにかへるそのゝなよ竹

新年烟　侯爵夫人　山内禎子

あら玉の年たつけさは小山田の里のけふりも立ちそはりつゝ

天　侯爵夫人　蜂須賀隨子

朝日かげかゞやき出づる大空は御はたを仰ぐこゝちこそすれ

墓上花　伯爵夫人　徳川知子

こゝろありて風や手むけむ上野山みはかの苔にまじる櫻は

田家煙　伯爵夫人　壬生篤子

あら玉の年いはふらむ小山田のふせ庵つゞき烟立つなり

千鳥　伯爵夫人　南部嚴子

さゆる夜の月影くだく河なみにをちかへりなく友千鳥かな

花初開　新法嗣夫人　大谷紝子

さえかへり雪さへふりし此の春も花はつねよりとく咲きにけり

樺山常子　子爵夫人芝山松子　子爵夫人鳥尾千勢子　大久保仙子



松上藤　子爵夫人　藪篤子

かすみたつ末の松山うちこゆる波にも似たる藤の花かな

萩映水　子爵夫人　芝山松子

あきはぎの花のさかりをきてみれば下ゆく水も錦なりけり

春の歌の中に　子爵夫人　鳥尾千勢子

つれ〳〵に昔をしのぶひとり居の雨の夜ふけてなく蛙かな

薔薇　子爵夫人　今城友子

たまり水にうかべる影もしづかにて庭のうばらは露おもげなり

朝梅　子爵夫人　成瀬倉子

朝風の吹きくるまゝに梅の花きよきそのふに薫りみちけり

瓦斯のうた　子爵夫人　大河内國子

あたゝかき瓦斯の光にてらされて草紙ひもとく冬の夜ながや

新年雪　男爵夫人　九條武子

あら玉の年のはつ風門松につもれる雪をはらひけるかな

庭雪　男爵夫人　三井苞子

ねやの戸をあけてぞみつるめづらしき庭につもれる今朝の白雪

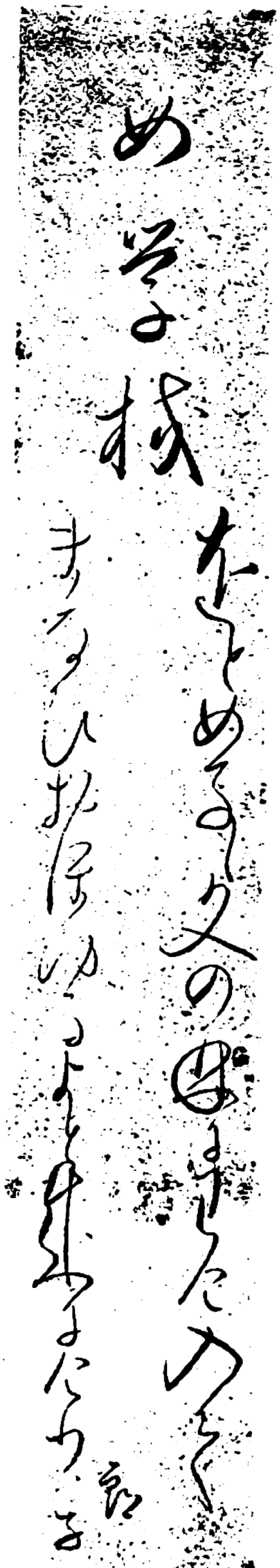
現代婦人百人一首

漁夫　男爵夫人　岩崎寧子

ひくあみの細きつなでや海原に世わたる蜑のいのちなるらむ

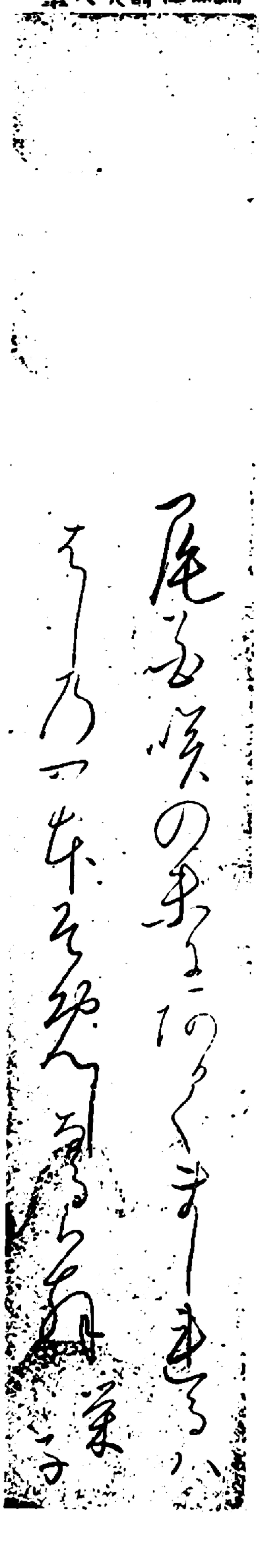
紅葉　伯爵夫人　大谷義子

山里は今をみごろともみぢしぬきませわが友いろあせぬまに



前田侯爵夫人筆

鍋島侯爵夫人筆



寒月照梅花　男爵世嗣母堂　高崎恆子

あまりにも月清ければ寒さをもうちわすれつゝ梅の花見る

春海　公爵令孃　九條兼子

いさり舟かへる波路にさしのこる夕日のどけき春の海かな

瓦斯のうた　伯爵令嗣夫人　樺山常子

花がすの光りまばゆき窓のうちに小がめの櫻雲と見らるゝ

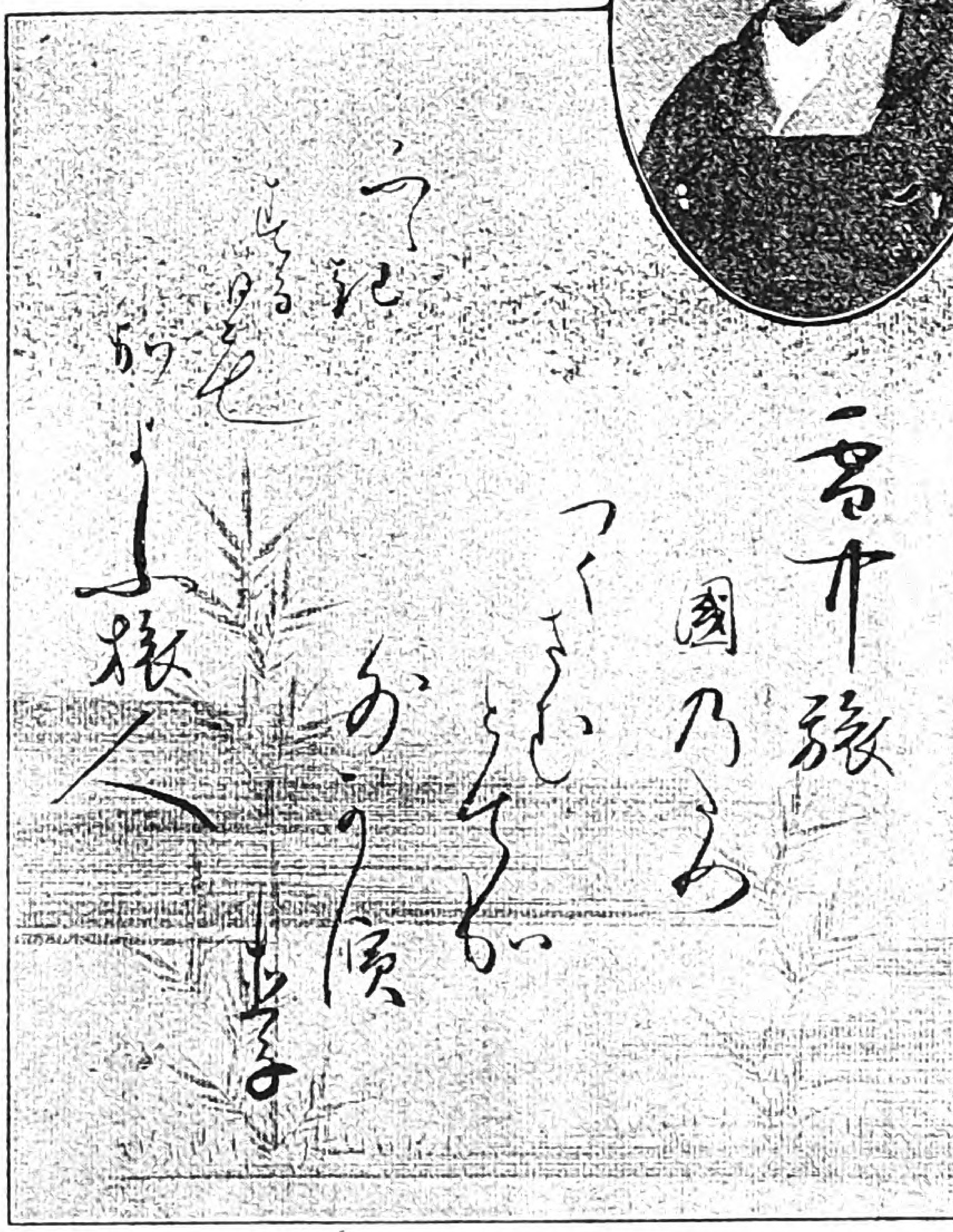
雀　伯爵令嗣夫人　酒井君子

里の子の小さきふきやにきずおひし雀の親は待ちつゝあるらむ

紅葉　男爵令嗣夫人　常盤井文子

たちまじるはじもうるしも紅葉して夕日まばゆき岡のかよひぢ





小川直子刀自と筆蹟

御代の光　子爵令嗣夫人　松平岳子

夜をてらすがすの光に月をおほふ雲も心にかゝらざりけり

春雪　子爵令妹　前田秀子

うら庭やおき忘れたる羽子板の押繪にふりぬ春のあわ雪

水鳥　子爵令妹　酒井錦子

何事かことの起りは知らねども争ひあへる水鳥のむれ

税所徳子　宮崎恒子　日野西廣子　武富荻子



池水鳥　典侍　柳原愛子

池の面の蓮のかれ葉に水こえて夕風さむみをしぞ羽根かく

田家煙　典侍　高倉壽子

ゆたかなる年のしるしに小山田の里のけふりも立ちまさるらむ

春日局　權典侍　千種任子

おのが身は露と消えても若竹の千代のさかえをいのりけむ君

深夜神樂　權典侍　園祥子

ものおとは靜まりはてゝ更くる夜に高くきこゆる御神樂のこゑ

山家夢　權典侍　姉小路良子

あしびきの山したいほはしづかにて夢も心に任せてぞ見る

老人　權典侍　小倉文子

たゞひとり杖にすがりて老人のゆくうしろ手のあはれなるかな

暮春鶯　掌侍　小池道子

花はみな青葉になりてたかうなの生ふる垣根に鶯の啼く

松間月　權掌侍　藪嘉根子

やま松の露さやかにも見ゆるまで月さえわたる秋の夜半かな

日向きむ子　陰山禮子　山内經子　酒井錦子



落花埋苔　權掌侍　北島以登子

めでられし春しのぶらむ散る花もみはかの苔の上につもれり

尋紅葉　權掌侍　津守好子

たけ狩りにきのふあそびし秋山に紅葉たづねて今日はくらしつ

春日局　權掌侍　吉田銈子

さまぐ〜に心つかひしかひありて竹は世にこそ立ちさかえけれ

新年雪　權命婦　生源寺伊佐雄子

ゆたかなる年のしるしをかど松の上に見せたるけさの雪かな

山家萩　權命婦　平田三枝

きゝなれしわが山松のこゑよりもさびしかりけり萩のうは風

故郷擣衣　權命婦　吉田愛子

ふるさとに誰が住みかへてから衣おとなつかしく今もうつらむ

谷鶯　侍從夫人　日野西廣子

水ぐるまひとりめぐれる谷かげのかけ樋傳ひて鶯の啼く

寒月照梅花　稅所德子

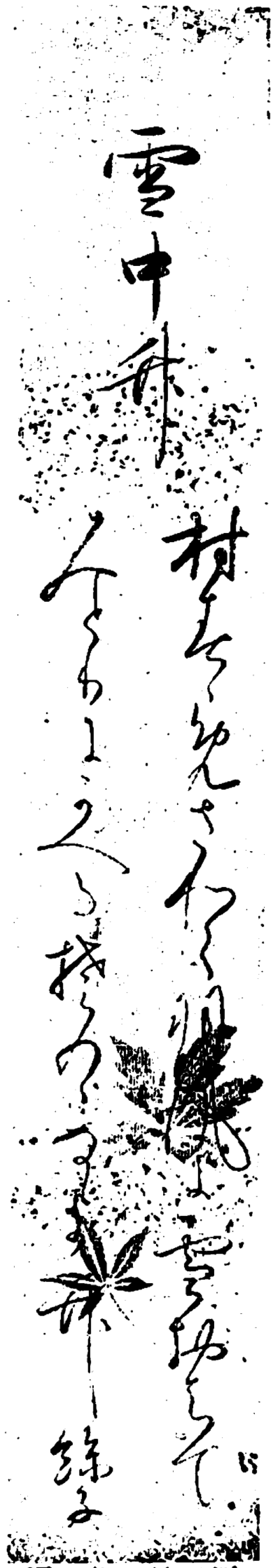
咲きにほふ梅のこずゑにかゝりけりかげさやかなる冬の夜の月

橋上霜　貴族院議員夫人　伊澤千勢子

かさゝぎの渡せる橋のそれならで置く霜白し瀬田の長橋

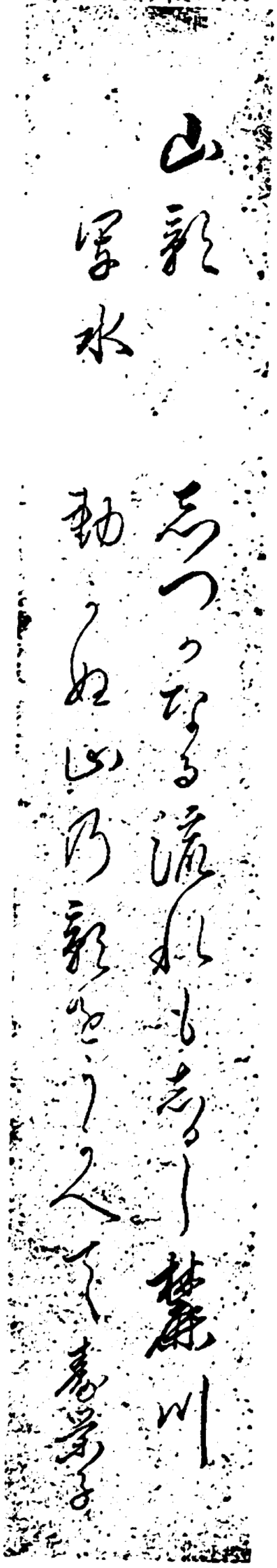
殘雪　貴族院議員夫人　谷森みよ子

きえあへぬ去年のみゆきも春くれればまづ咲く梅の花かとぞみる



四條侯爵夫人筆

木戸侯爵夫人筆



新年鶴　陸軍少將夫人　大久保仙子

初日かげひかりくもらぬ久方の雲ゐに高きたづの聲かな

外國に留學する某令孃をおくるとて　海軍少將夫人　武田貢子

とつ國の學びの園にうつるともかはらでさけよやまとなでしこ

春風　乙女子

清國參贊官呉振麟氏夫人

そよ〳〵と吹く春風にさそはれていづくともなく梅が香ぞする

飛行機　海軍少將令嗣夫人　武富荻子

飛ぶ鳥もおどろきぬらん大空をはねなき人のかけり行く見て

躑躅　伯爵令妹　室町文子

我庭のつゝじの花も二つ三つ青葉のひまに見えそめにけり



遠山稻子夫人と其筆蹟

牛　平松誠厚尼

ほの〳〵と霞の奥に山見えて野がひの牛の聲ものどけし

朝梅　博士夫人　穗積歌子

をさめあへぬ夜のふすまに薫るなり朝日さし入る窓の梅が香

折にふれて　衆議院議員夫人　日向きむ子

松ばらのひと本櫻さきにけりおほかるなかにせをおもふごと



三宅花圃女史筆



跡見玉枝女史筆

鶴宿松樹　下田歌子

大庭の古松が枝をまくらにてたづも千歳の夢やみるらむ

雪中旅　小川直子

國のためつくさむとてか外が濱ふゞきする日もかよふ旅人

友といふことを題にてよめる　遠山稻子

眞心をこめてわれよりまじはらば世にまことなき友やなからむ

山月　國分操子

のぼりきて仰げば高しふもとにて山のはにみし秋の夜の月

世界一めぐりして歸られし人に送る　　棚橋絢子

しばしとて結びし夢の旅まくら千代の榮えを君やみつらん

朝花　　花園　三宅龍子

すみだ川つゝみの櫻のどかにも今朝こそみつれ人の來ぬまに

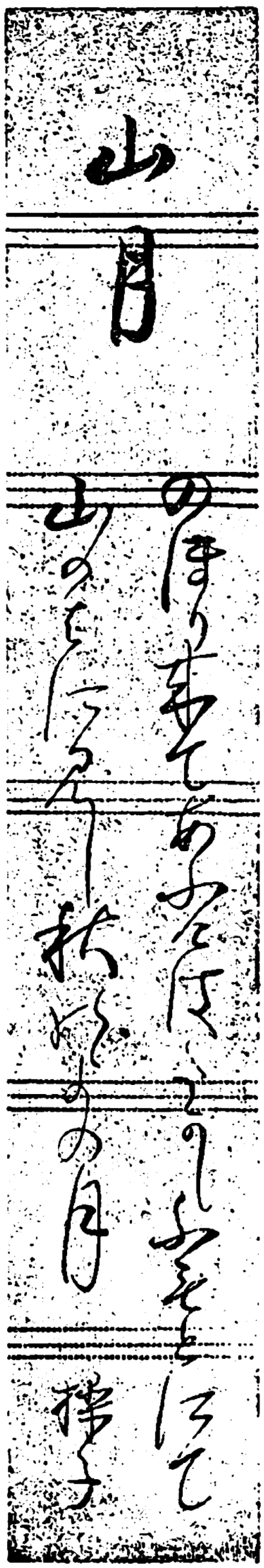
歸雁　　三輪田眞佐子

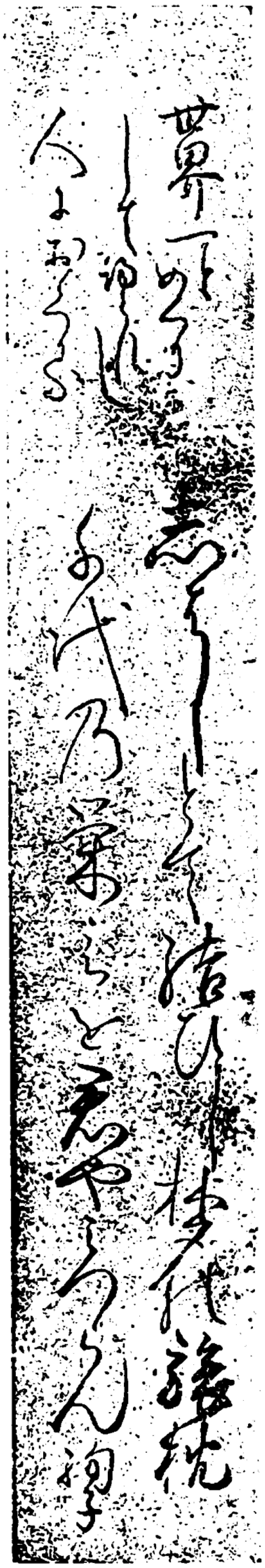
小簾まきてながむるほどもとゞまらず雲路がくれにかへる雁がね

梅先春　　後閑菊野子

匂はずば知らでやすぎむ春はまだとほさと小野の梅のはつ花

國分操子女史筆





棚橋絢子女史筆

田代朔子　大村やよ子　北村美那子　関屋愛子



現代婦人百人一首

明治四十三年五月六日御慶典につき　陛下より賜りし御盃ひらきして身に餘る喜びをしたしき人々にわかたんとて

跡見玉枝

かしこしや菊のさかづきくむ酒のしづくも千代の香に匂ふらむ

折にふれて　橘絲重

いかで一日心のまゝの一日あれよ思のまゝにおもひつゞけむ

裁縫　大村八代子

袖つむる針の手おそみ八つ口のそろはぬまゝに冬をむかふる

待子規　辻村靖子

いざよひの月こそいづれ子規まつま更けゆく山杉の上に

里擣衣　加納須磨子

里人も重着いまかいそぐらむきぬたの音のいとまなげなる

牛といふことを　金子牧子

草笛のひゞきかすみて夕川のつゝみをかへる牛の一むれ

春野　北村みな子

つむもをしつまぬもつらしをとめ子が心つくしの春の野邊かな

海上霞　博士夫人　遠藤夏子

よる波のたつも靜かになりにけりかすみそめたる春の海原

鶯　江崎牧子

をり〱は机のもとにきなくまで此ごろなれぬ庭のうぐひす

子　中村小波

幼子のゑめるひとみのかゞやきを知らずがほなる人のさびしさ

扇　藤田八重子

手にならす風のたよりもさし扇あふといふなもたのむとをしれ

鶯　澁澤孝子

宵の雨に殘んの寒さ洗はれて今朝のどかなり鶯のこゑ

新年　三井五十子

ふたおやのみなをならべて新玉の年のほぎ言かくがうれしさ

梅將散　鴻池路子

鶯の日ごとにきなくわが宿の梅もいつしかうつろひにけり

古寺落花　陰山禮子

おほ寺やあけもみどりも色あせし古き扉に花ちりみだる

鶯　　穗積仲子

青やぎの絲にぬくてふ白露のたまよりきよき鶯のこゑ

渡頭時雨　　伊藤鶴子

折てこし紅葉かざしてすみだ川わたしまつまを時雨ふるなり

新年雪　　豐田滿子

庭の雪見るぞたのしき父母と火をけのもとに年をむかへて

社頭燈　　生田すて子

たてまつる人のまことかさよ更けて神の宮居をてらすともし火

月前落花　　河村孝子

まなくちる花のふゞきに高どのゝおばしましろし春の夜の月

人を懐ふ　　關屋愛子

日のもとは花となりつるこの頃をきみたゞ一人あら海の上に

折にふれて　　田代朔子

うらやまぬ人こそなけれ立ならぶとほ山まつの高きほまれを

嶺上松　　服部磯子

白くものはれたる朝は大ぞらにそびえて見ゆる嶺の松が枝

花　　　山内經子

谷川のながれの音をしたひきて今を盛りの花をみるかな

石　　　中島保子

つき山にけふすゑさせし一つ石日のくるゝまでながめつるかな

朝梅　　　岡三保子

うちかすみ雨氣ふくめる朝東風の吹きのまに〳〵梅が香ぞする

藤田八重子の君にお返しせむとて　　　芹澤みゆき子

歸り來む其日今よりいなば山ふく松風もしのばるゝかな

朝梅　　　水原末理子

鶯の聲さへそひて朝な〳〵さむる枕に梅かをるなり

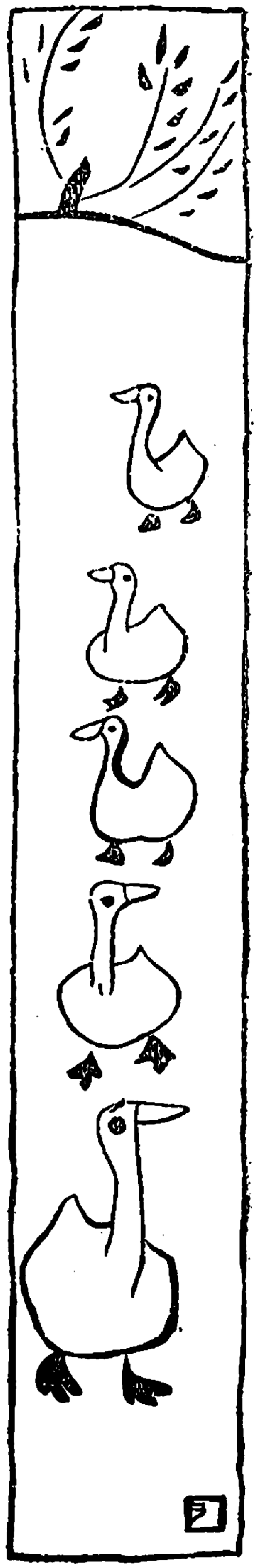
梅花　　　田中みの子

ところせきかきねのうちも梅の花かをるばかりの春風ぞ吹く

夏木立　　　與謝野晶子

鎌倉や御佛なれど釋迦牟尼は美男におはす夏木立かな

▲右の百人一首は、現代の名流婦人方にお願ひして、各御自作のお歌を頂いたものです、中には紹介者より頂いたのも多少ございます▲順序は次第不同で、別に秩序を立てた譯でもございませんから、其おつもりで御らん下さい▲お歌と共に御寫眞に筆蹟等を頂いた方も多數ございますので、御覽の通り本文の中にも刷り込みました、別に又口繪の方にもお寫眞が掲げてありますから參照をねがひます▲百人一首を集めますに就いて、御紹介下さつたり、御氣付け下さつたり、種々お世話下さつた御方には厚く御禮を申上ます▲令孃方の御歌で洩れたのは次號に發表いたします。（記者）



男子も女子も　家庭の仕事が減じて來た

文學博士　大塚保治

婦人問題や家族制問題の解決は東西文明に對する見方如何によつて、大に異なるのであるが、兎に角家族の結合が次第に弛緩になりつゝあること、從つて婦人[illegible]なづゝか、解放されつゝあることは爭ふべからざる事實である。從來家族の結合が極めて鞏固にして、家族制度の嚴重に支持されたるには、種々の理由がある。第一は人情の自然から起つたもので、男女あれば茲に夫婦あり、夫婦あれば子孫がある、夫婦親子は他人よりも親しいのは自然の人情であるから、此親しい夫婦親子が團結して一家を作ると言ふことは、自然の成行きにしてこれが家族制度の由つて起る基礎となるのである。第二はこの自然の人情に本づいて起つた道德的關係で、家族の間には自から他人と違つた特別の道德的關係が發達してこれが益々家族の團結を强固にすることになる。第三は政治的及社會的事情で、これがまた從來の家族制度の發達を大いに助けて居る。封建時代に於て武士の階級は家族結合して家を組織しその家に依つて食祿を世襲し、權勢を世襲するのである。さういふ社會に於ては、何よりも家が大切で、家あるが爲めに政治上にも社會上にも色々の特權や、利益を享有することが出來るのであるから、隨分重大な犧牲を拂つても家を維持しやうと力めるのは當然で

ある。それから又封建時代に於ては武士のみならず、外の社會階級も、一般に職業が世襲で、家といふものに種々の社會的便宜が附帶して居たから、家族制度は益々發展することが出來たのである。第四はまた經濟的原因で家族の團結が餘程緊密になつて居た。日本では今日でも特に地方には猶其風が殘つて居るが、所謂私經濟組織では、家庭は經濟上にも一つの生産團體で日用の消費品は大抵皆自家で作つた。さうしてそれは主として婦人の仕事であつた、蠶を飼つて絲を取り、その絲を用ひて反物を織り、その反物で着物を作る。その他煮炊洗濯等一家に必要なることは皆家族の中で女子がすることになつて居た。それ故妻を貰つて家庭を作るといふことは、經濟上から見ても、男子の生活に必要已む可らざることになつて居たのである。其外祖先崇拜の思想が家族制度の發達維持に大關係あることは言ふまでも無い。

　これまでは以上種々の理由に依つて、家族の團結が強固に維持されて居たのである。ところが維新以來封建制度の終を告げたると同時に、近世文明の潮流が西洋から流れて來て、世の中が一變したる爲め、家族制度を支持する有力の原因が一部分無くなつたのであるまづ第一、武士と言ふ世襲的階級が無くなり（華族を除いて）、また其他の職業世襲の習慣も廢れたから政治上及社會上家を重んじなければならぬといふ特別の必要利益が少なくなつた（個人より見て）。それから經濟上にも私經濟組織が漸々廢れて所謂資本本位の大工業が行はれるやうになると、日用品も自家で作るより出來たものを買ふ方が便利で且經濟で、つまり男子に取つて、家庭を作る必要－女子に取つては家庭に居つての仕事が幾分か減じて來た。其結果として一方には家族團體の結合が弛むことになり、又一方には所謂婦人解放が始まつて來る。婦人問題の經濟的觀察は畢竟此點から出發しなければならないのである。それから又祖先崇拜の習慣も科學思想の普及の爲に漸々衰へて來る、家族主義の道德も個人精神の勃興の爲に動搖つき出すといふ有樣で、結局今日は家族團體の維持發展に資する原動力が、以前より、餘程薄弱になつて居るのであるから、昔の儘の家族制度を保存することは勿論出來まいし、又婦人の地位も到底以前のやうに、全く家庭に押籠めて仕舞ふといふことは出來まい。しかし家族問題や、婦人問題は中々大問題でまだ十分研究して居ないから具體的の意見は御話出來ぬ（談話筆記）



將來の男女の關係

法學博士　上杉愼吉

▲男女の關係は變らない

男女の關係と言ふ問題は随分博い問題で、又却々六ヶ敷い問題である。私は假令これから世の中が進歩しても、男女の關係には大した變更はなからうと思ふ。成程單に男女の關係と言ふことだけを考へて見ると、種々の議論も起る。男と女は先天的に優劣のあるものか如何か、男は大臣にもなれば、裁判官にもなり、軍人にもなり、車掌にもなるが、女は大臣にもなれなければ、裁判官にもなれない、軍人にもなれなければ、車掌にもなれない、これは女と言ふ者は、初めから斯う言ふ者になれない樣に生れついたのであるか、男と女とは原始時代から斯う言ふ風であつたのであるか、斯う言ふ問題を研究せんとするには、人類學者、動物學者、植物學者等の意見を聞た上でなければ、遽に斷案は下されないが、何千年間と言ふ長い間、男は男、女は女と別々な方面に働いて來た長い歴史があり、且女は男より弱い者、優しい者、内で働くものとして、今日に到つたのであつて、又さう言ふ風に發達して來て少しも弊害が無かつたのである。寧ろ女がさう言ふ風に發達して來て、人類も進歩し、國家も發達して來たのであるから、今俄に女と言ふものを一變せねばならぬ必要はなからう。從て今後とても男女の關係に著しい變動は起るまい、イヤ變動が起つてはなるまいと思ふ。

▲極端なる女子解放論

獨逸のベーベルと言ふ人の著した『婦人及び社會問題』

と言ふ書物は、婦人問題を論じて、最もよく賣れた書物で五十版まで重ねて居る。此人の説に依ると、『男と女との間には、昔は優劣も强弱もなかつたのである、唯男が女に打ち勝ち、女を征服したるが爲め、遂に男の方が强くなり傑くなり戰爭政治など言ふ重大問題が男のみで決する樣になつたのである。これが爲に、女は男よりも弱い者、優しい者、外に立つて活動すべからざる者となつたのである。であるから今後の女は、太古の如く男と同等の權利を有し、男と同等の活動をせねばならぬ。それには結婚と言ふものが妨になる、結婚すれば女は男の私有物となり、奴隷となるのである。男女は必ず結婚せねばならぬ約束はない、結婚の目的は情慾の滿足を得ると子孫の繁殖であるがこの二つの目的を達するには必ずしも結婚に依らずともよい自由戀愛に依つて充分目的を達することが出來る無論家庭と言ふものが無いのであるから三度の食事は一定の料理屋の如き所に集つてすます、自由戀愛は斯う言ふ場所に於て行はれ得る』と言ふのである。何故こんな議論が起つたのであらうか。



▲男子が我儘の反動

右の議論は極端なる女子解放論にして、到底實行の出來るものでない、一種の空想に過ぎないのであるが、斯う言ふ議論が何故に起つたかと言ふことは、大に硏究すべき必要がある。それは言ふまでもない、餘りに女子の自由を奪ひ、女子を無理に壓へつけた反動である。女子が從順であるのをよいことにして、男子が餘りに氣儘をした結果、斯う言ふ女子解放論も起つたのであるから、今後は女子の地位もこれまでよりは高めねばなるまい、男子の女子に對する態度も改めねばなるまい。然し、ベーベル氏の說く如き極端なる女子解放論は斷じて容れることは出來ない、又實際さう言ふことは行ふとて行へるものでない。若し結婚と言ふものが無くなり、家庭と言ふものが無くなつて、男も女も自由に飛で步いて、料理屋か何かで自由戀愛が行へる樣になつたら、人類の進步が止る。何故かと言ふと、生れた子供を養育する者がないから、子が良い人間にならない。女子解放論者の說に從ふ時は、自由戀愛の下に生れたる子は、國家が養育すると言ふのであるが、親が子を養育してさへ充分なことが出來兼るものを、親でもない役人が役目だけに育てゝそれで立派な人間の出來る筈がない。人間の本分は立派な子孫を造るにあるのだから、其目的を達するには、如何しても正しき結婚に依らねばならぬのである、結婚を非認して自由戀愛を說くなぞは、痴人夢を說くと同樣である。

▲女子の地位を高くせよ

それでは今後の女子は全く昔日と同じ狀態に居らねばならぬかと言ふと、決してさうではない。昔日の女子は必ず男に賴つて一生を送るものと定つて居た、女子が獨立するの、職業に從事するのと言ふ樣なことは殆ど夢にも見なかつたことである。此時代に於ては女子は全く男子の召使であつた、奴隷であつた。然れども今後の女子はさう言ふ地位に立つて滿足して居ない

又さう言ふ狀態に置く譯に行かぬ。女子の地位を高め男子の女子に對する態度も改め、女子をして自分の天職のあることを自覺せしめ、愈々責任の重大なることを悟らしめねばならぬ。斯うなると女子も節操を堅くし、三千年の歴史に依つて作られたる婦德を守り、男を助け立派なる子孫を作ることに從事するであらうと思ふ。要するに男女の關係は今後如何なるかと言ふ問題は、女は男と對等であるや否や、女は男と同一の仕事が出來るや否や、男女は同權であるべきものなるや否や、と言ふ樣な問題を硏究するまでもなく、三千年間養はれ來つた女子の精神は、今俄に改めるべき必要もなければ、破壞すべき理由もない。從て今後の女子も敢てこれまでの女子と變つたことは無からう、又變るべき必要はないのである。これまでよりも一層責任の重きことを自覺し、人類を進歩せしむる方向に向つて天職を盡さねばならぬ。女子が男子と等しく政治家にならうとか、軍人にならうとか言ふ樣なことに運動せずに、女子の天職を自覺して其本分を盡すことに努力せねばならぬ。

男女ともに自覺せねばならぬ時代であるが、誤つた自覺は双方ともに圓滿を缺くことゝなる。



好んで藝術家たるに及ばず

文學博士　井上哲次郎

▲女は女として立つこと

我國の今日は昔と違つて、世界と交通し、世界と競爭し、世界と接觸して居るのであるから、世界の大勢に動かされるのは如何ともすることが出來ない。又その大勢に逆ふと言ふことは到底なし得べからざることである、が然し我國固有の國情と共に發達したる習慣は保存すべき必要がある。イヤ其習慣が合理的で人道に適ふて居る以上は何所までも保存せねばならぬのである。婦人問題も亦其通りで、女子敎育が盛になるにつれ婦人も近代的思想に觸れ、種々危險な思想を懷く者がある。女子が敎育を受ける目的は嫁して良き妻となり、子を持つて賢なる母となる爲めである。則ち女としての修養をなし、女としての技藝を修め、女としての人格を高むるのが目的であらねばならぬ。

▲家庭の人―藝術家

ところが女が敎育を受けて少しく文字を知ると、自分が女なりと言ふことを忘れ、女の天職の何物たることを忘れ、藝術家となつて名を擧げんとか、音樂家として世に立たんとか、樣々の野心を起す。尤も女が藝術家となり、音樂家となり、又は敎育家となることは不可能のことでない、又決して惡いことでない。世界の大勢は女をしてこれまでの如く臺所に押籠めて置くことを許さないのであるから、女が專門の學藝を修めて、これを以て世に立つことは、時代の風潮であるか

ら止めることが出來ない、又止めるべき必要もない。女と雖も其長所を利用して、藝術家になるのもよい、音樂家になるのもよい、敎育家になるのもよい、然しこれが爲め女は自分が女であると言ふことを忘れてはならぬ。女は何所までも女であるから、自然に從ひ、人道に基き夫を持たねばならぬ、家庭を作らねばならぬ。夫を持ち、家庭を作つて尙ほ餘力があれば、藝術家になるもよい、音樂家になるもよい。斯う言へば、女が夫を持ち、家庭を作れば、其女は最早夫のもの、家庭のものとなつて、夫に囚はれ、家庭に囚はれ、專心其道に盡すことが出來ないと言ふだらうが、それは間違である。夫を持つたが爲め、家庭を作つたが爲めに、其道に盡すことの出來ない樣な者は、假令夫を持たなくとも、家庭を作らなくとも、成功するものでない。特に其仕事を妨げる夫や、特別の事情の爲め其仕事に從事することの出來ない家庭は兎も角も、其仕事に贊成する夫を持ち、普通の家庭で在つてみれば、さう言ふ目的に向つて進むことの出來ない筈はない。現に小金井君子や、三宅花圃なぞは孰れも、夫を持ち、家庭を作つて、而かも文學に鬪つて各々成功して居るではないか。成功するとせぬとは、夫や家庭の有無に依るのではない、意思と人物の如何に依るのである。

◎女の未製品

さう言ふ實例があるにも係はらず、藝術家となり、音樂家となり、敎育家となるには、如何しても夫を持つては成功せぬ、家庭を作つては專心斯業に從事することが出來ぬと言つて、獨身説を唱へるのは、それは大なる心得違と言はねばならぬ。斯う言ふ女は女に非ずして女の未製品である。女と言ふものは夫婦の間に起る正しき愛情に依つて初めて女らしき女となるので若し女が正しき夫を持たず、家庭を作らなかつたならば、女らしき愛情もなく、女としての優しみもなく、男と何等選むところない者となる、則ち眞の女とは言ふことが出來なくなる。女に生れながら女の未製品では困る。

獨身は却つて面倒なり

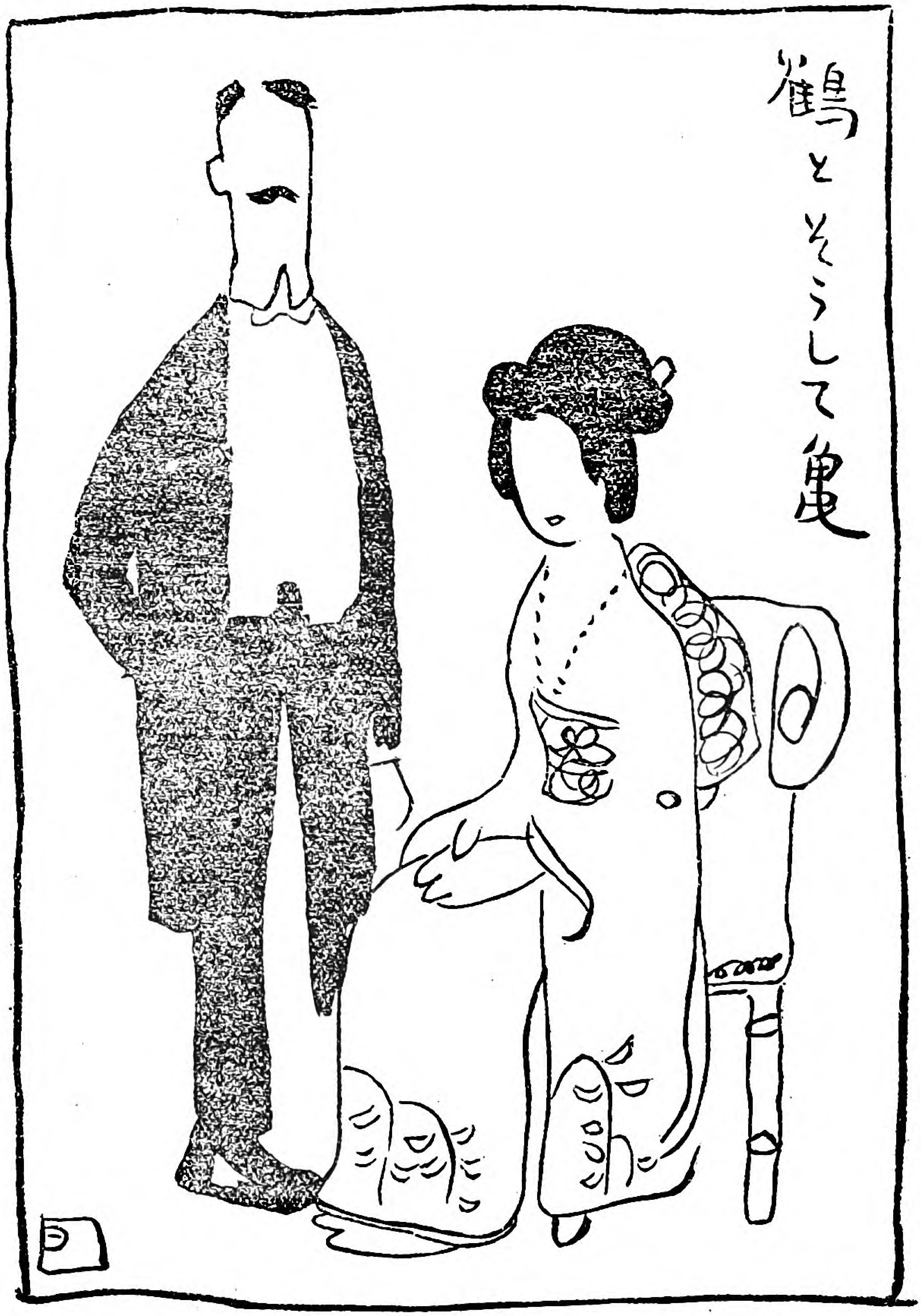
尤も生れながらに容貌の醜い爲めに結婚の出來ぬ者や、病氣その他の事情の爲めに結婚の出來ない者は已むなく夫を持たず、獨身生活をせねばならぬであらうが、さう言ふ人は藝術なり學問なりを夫として終生此方面に全力を注ぐのもよからうが、然らざる普通の女は尋常に結婚して、夫を持ち家庭を作り、餘力あれば望む道に進むのは强ち困難なことでなからうと思ふ。女の天職は子孫を作るに在るのだから、如何に藝術の爲め、學問の爲めとは言へ、一生夫を持たず孤獨で終ると言ふのは確に變則である、決して獎勵すべきことでない。殊に女の獨身と言ふことの困難なるに於てをや。女の獨身と言ふものは危險にして誘惑が多い、又假令危險に近づかず、誘惑に陷らぬにしたところで、世間の疑と言ふものが誠に面倒なものである。斯う言ふ危險にして困難な地位に好むで立たなくとも、女は女らしく夫を持ち、家庭を作り、そして伎倆のある者

は大に其伎倆を發揮すればよいと思ふ。

男が多く女が少い日本

近來敎育を受けた女子の一部に、危險極まる思想を懷いて居る者がある、さう言ふ女は獨身說を執つて家庭を詛ふて居る。これ等は女の天職と言ふことを知らず、日本現在の狀態に迂なるものと言はねばならぬ。其の天職は子孫を作るに在ることは前にも言ふた通りであるが、この天職を忘却すれば最早女としての價値はないのである。又日本現在の狀態は如何かと言ふと男が多くて女が寡いのである。西洋はこれと反對で女が多くて男が寡ない。殊に生存競爭の激甚なので結婚する男子が寡ないのである。玆に於て女は勢ひ獨身生活をせねばならぬ事が起つて來る。女が男に賴らず獨身生活をせねばならぬから、藝術なり學問なりに依つて世に立たうと言ふ女が出來て來るので、これは已むを得ざる結果とは云へ、決して歡迎すべき現象でない。それを日本と西洋との狀態をも研究せず、徒に西洋の

眞似をして學問藝術に依つて獨身生活をしようと言ふのは心得違も亦甚しと言はねばならぬ。日本ではまだ女子の多くが獨身生活をせねばならぬ程の狀態ではない、それを無暗にハイカラがつて、學問藝術に依つて獨身生活をしようと言ふのは、決して賞すべきことでない。寧ろ女子自身の爲に、苦痛が生じて來たり、煩悶が多くなつたりして不幸である。



西洋の若き男女の交際

東京美術學校教授　藤島武二

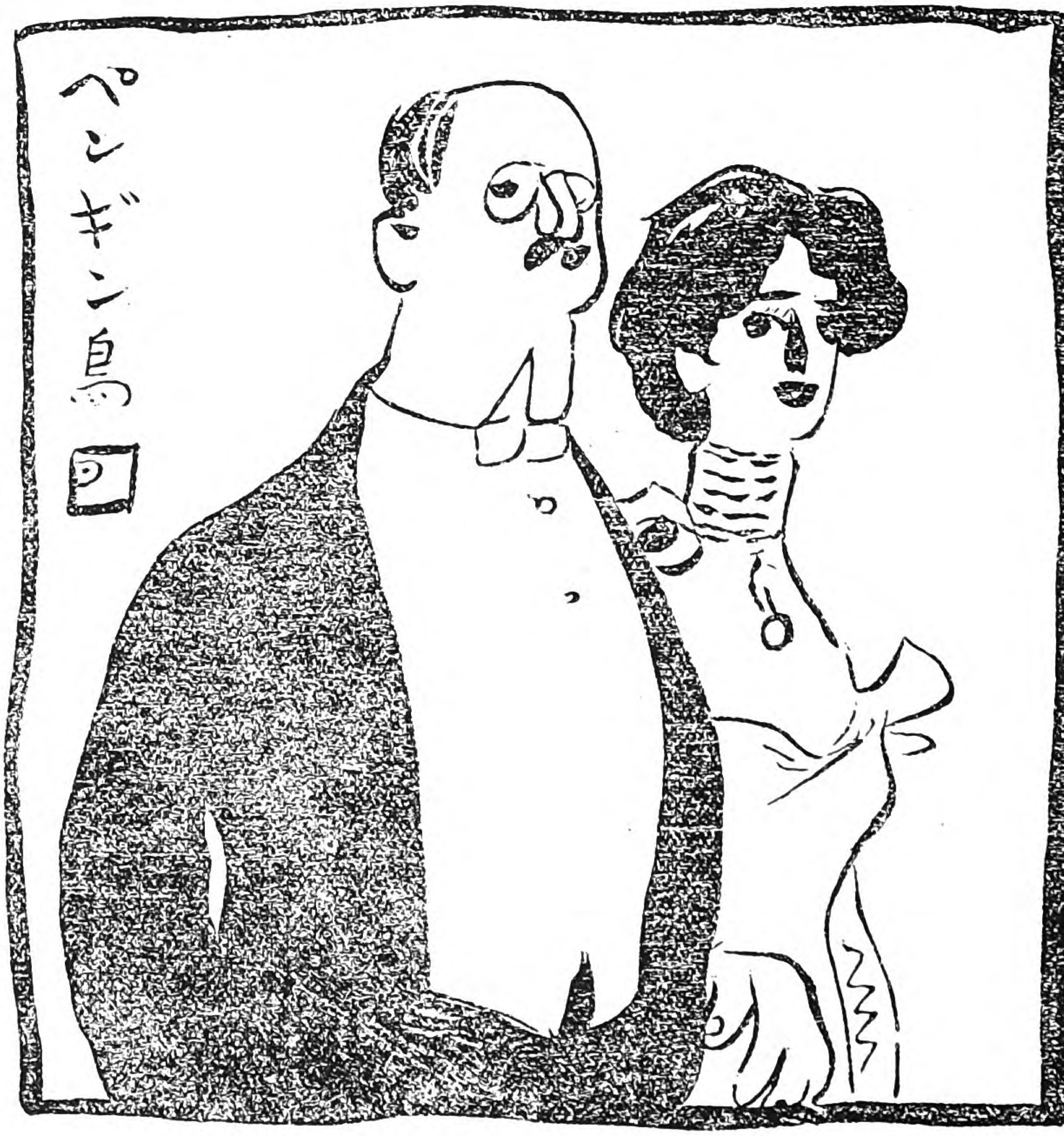
△女學生の品行

西洋の男女の關係と言ふと大變廣いが、私の實際見たのは佛蘭西と伊太利であるから、佛、伊兩國に於ける男女の關係を御話しやう。西洋では男女の交際は自由である樣に思ふて居る人があるかも知れないが、成程既婚婦人の交際は自由であるけれど、未婚婦人は決して自由に男子と交際することは出來ない。佛蘭西でも伊太利でも妙齡の婦人は皆學校へ入るから、大抵は女學生と言ふてもよい、その女學生は如何いふ生活をして居るかと言ふと女學生は多く土地の者で家庭から通つて居る。中には地方の者もあるが、さう言ふ人は寄宿舍に入り、又は親戚の家から通ふて居る。寄宿舍は却々嚴格なもので、殊に僧侶の設てゝ居る寄宿舍の嚴重な事は非常なものである、何人と雖も内へ入れないから、寄宿生以外の者には到底内部の模樣を知ることが出來ない。斯う言ふ嚴格な所へ娘を預けて置くから、未婚者でも品行上の問題を惹起する者は殆どないと言ふてよい位である。

△結婚準備の爲の男女交際

然し家庭に居る娘は絶對に男子との交際を杜絶されては居ない、無論單獨に男子と交際することは許されては居ないが、或監督の下に男子と交際することは許されて居る。それは外でもない、娘が相當の年齡に達すると結婚をさせねばなりませぬ、配偶者を選まねば

ならぬ。この結婚準備、配偶者選擇の爲に男子と交際が許されて居るのである。ところが假令結婚準備配偶者選擇の爲めとは言へ、若い男女を自由に交際さすことは危險なことであるから、頗る嚴格なる監督の下に交際の道が開けてゐるのである。その交際は如何いふ風になるかと言ふと、先づ娘の配偶者としてもよいと目星をつけた男があれば、其男を娘の家へ招待する、毎日ではない、一週に一度とか二度とか日を定めて招待する。そして交際して互の氣心を知らうと言ふのである。然れども幾等結婚の準備の爲めとは言へ、若い男と女との差向と言ふのも變なものであるから、招待日には女の方でもお友達を呼んで來るし、又男の方でも一人行くのは何となく氣がとがめるので、これも亦友達を伴れて行く。娘の家で會合するのであるから、無論娘の親が監督する、



大抵夕食後の會合であるから、コーヒに菓子位なもの

で茶話會的に談話をするのである。

▲文學談と美術談

さう言ふ會合の時の話題は主に文學談、美術談の樣な罪のない美しいものを選む、宗教談とか哲學談とか言ふものは禁物である。何故かと言ふに、文學談や美術談では衝突して赤くなる樣なことはないが、宗教談や哲學談になると、話が堅苦しいのみではなく、動ともすると話に花が咲いて議論となり、議論に熱して御互に感情を害する樣なことが起るからである。殊に青年は物事に熱し易いから、斯う言ふ會合でも、若し話が宗教談や哲學談に移らうものなら、如何な衝突を惹起すかも知れない、それでは折角御互に懇親を結むで氣心を知り合ふと言ふ目的と齟齬するから、斯う言ふ會合には決して宗教談や哲學談を持ち出さぬことにして居る。

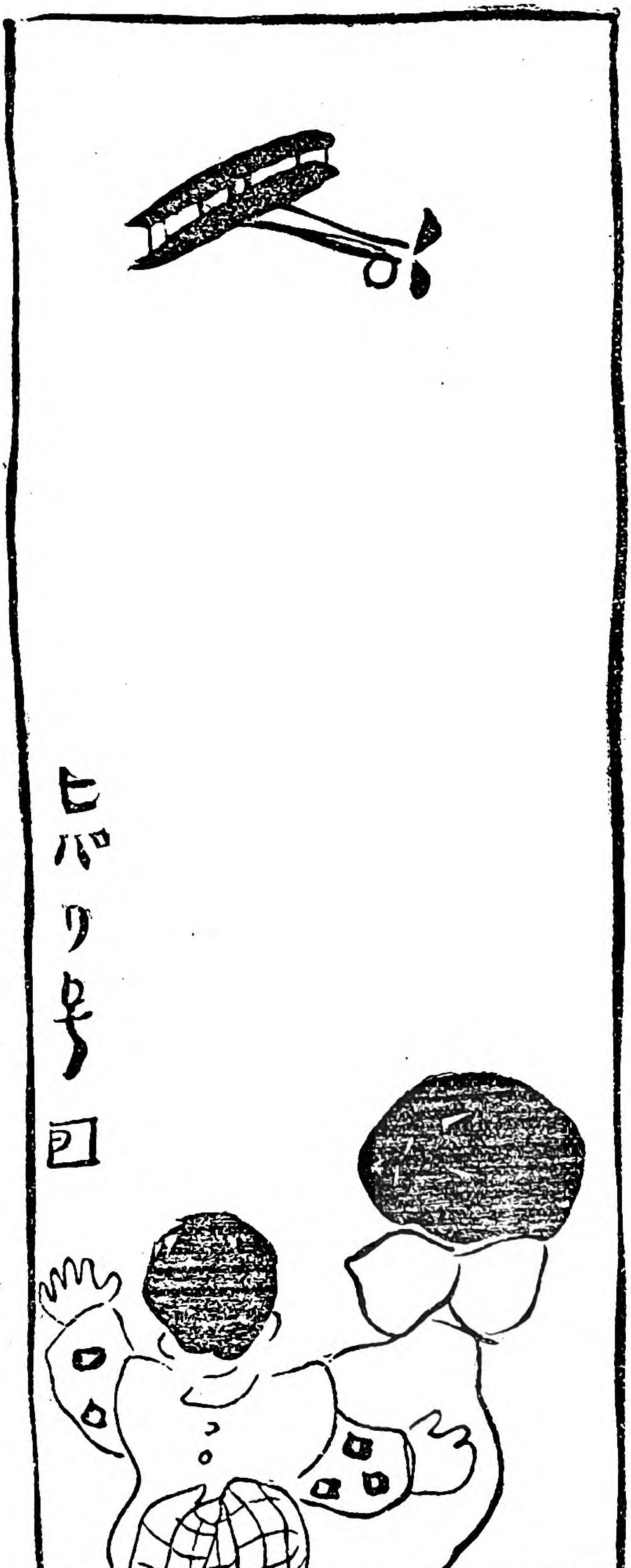
▲結婚前の男女

西洋の若い男女が、日本の若い男女よりも品行のよいのは、宗教的の觀念、哲學的の觀念が思想上に威力を持つて居るからであらう。斯う言ふ譯で、結婚準備の爲め、配偶者選擇の爲めにする青年男女の會合は、美しい、肩の凝らぬ話で面白く樂しい集合をするのである。話ばかりで興のない時は音樂もやる、歌も謠ふ全く打解けて話し合ふのである。斯うして互に氣心が知れ、あの男なれば夫としてよいと、本人も思ひ、又親も思ふ樣になつてから、始めて結婚の話を持ち掛けるのである。男の方でも又あの女なれば、妻にしてよいと思へば、そこで結婚の申込をするのである。斯う言ふ樣に双方で結婚の意思が確定した上で始めて結婚談を始めるのであるから、最初招待をし、又招待に應ずる時は、明地に結婚の話をするのでもなく、結婚の豫約をするのでもない。唯何がなしに招待するので、又招待を受ける方でも、何がなしに行くのである。然し斯う言ふことが一般の習慣になつて居るから、斯う言ふ招待を受けた時は直ぐ結婚の準備だなあと言ふて

とを男の方でも感附けば、女の方でも招待を拒まずに男の出て來るのを見て、結婚を申込むでも直ぐ應ずるものと決めて了ふ。斯うして双方不言不語の中に結婚の意思が通ふて交際するにも、其の積りで交際するから、御互ひの長所短所を、よく見定めて、その上で結婚するから、結婚した上で後悔する樣なことがない。

▲男を訪ふ女は無い

この會合の時に男の方でも友達を連れて行き、女の方でも亦友達を呼んで共に出るのであるから、女の方の友達と、男の方の友達との間にも、自然知己が出來て、斯う言ふ連中からも結婚するものが出來て來る。然れども交際して居る間は、頗る嚴格なる監督を受け



て居るから、交際中に醜聞の洩れる樣なことは決してない。斯く結婚準備の爲めに、若い男女が嚴格なる監督の下に交際することが許されて居ると言へば、それではさう言ふ意味で交際する外は、絶對に若い男女は交際することが出來ぬかと言ふに、さうでもない。若い男と女が何等の監督もなく、自由に交際することは許されてはないが、然し若い男が、若い女を訪問することはある。それを人は怪まない、その代り監督は頗る嚴格である、監督者なしでは談話することは出來ない、話をする時は必ず監督者が立會ふことになつて居る。斯う言ふ樣に一般の習慣となつて居るから、別に不思議に思ふ者もないが、女の方からは、決して男を訪問しない。

▲既婚者の放縱

未婚者の交際は斯の如く誠に嚴格であるが、既婚者の交際は自由である、全く開放されて居る。未婚の男女が交際するには今言ふた樣に監督者の嚴格なる監督の下に辛うじて交際の道が開けて居るのであるが、既婚者は何等の條件も束縛もない。全然自由で、悉く解放されて居るのである。未婚者なれば女より男を訪問すると言ふ樣なことは容易にないが、既婚者であれば女より男を訪問することは、決して珍らしいことでも不思議なことでもない。當然のことゝして何人も怪まない。未婚者が男と女と交際してもその間には厭な問題は起らないが、既婚の男女が交際すると、時々厭ふべき問題の起るのは何故かと言ふと、未婚者には嚴しい監督が行はれて居るが、既婚者には何等の監督もなく、制限もなく、餘りに解放主義に傾いて居るからである。要するに西洋に於ける男女の關係は、未婚時代に於ては頗る嚴格であるが、一度既婚者となると放縱に流れ易い、斯う言ふ點から見ると、女を解放すると言ふことは餘程考へものである。

凡そ世界何れの國に於ても、然う男女交際の亂れてゐる處はあるまい、文明になればなる程、男女の交際は正しく、美くしくならねばならぬ。



脚本

祇王

山崎紫紅

（場）嵯峨の隠れ家

（時）治承の頃、初秋

（人）祇王

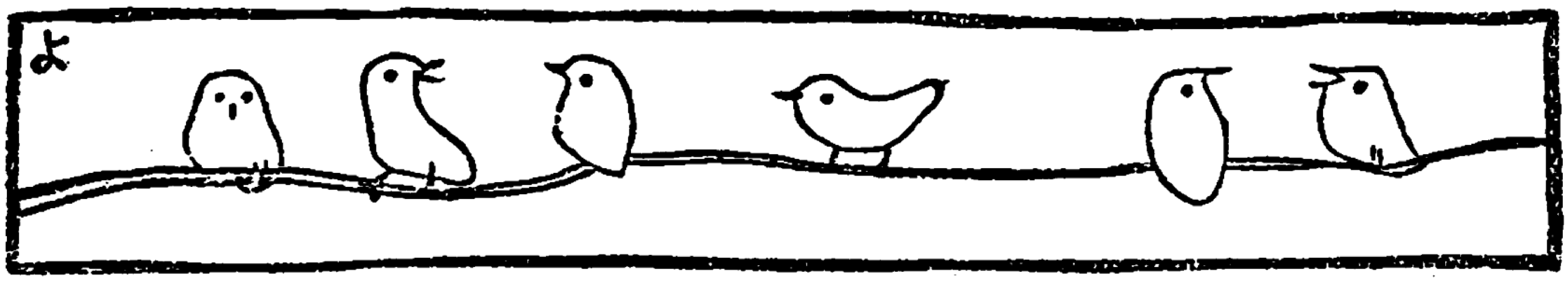
祇女

母

佛御前

武士

外に下人



やゝ斜めに飾りたる屏風、巻上げたる芦簀を掛く。上手には佛壇あり、紙表装の彌陀を安置し、幽かなる燈明を點じ、前に不相應なる經机を置く、上に煌びやかなる經巻三巻ばかり。緣側には筧の水細く落つるを、古びたる閼伽桶にて受けたり、その中に蕣の花を挿す。沓脱のあたりに金剛二足を双ぶ。正面の壁は中塗のまゝなるに、所々に色紙を貼り、火桶、笥、手函など、その下にあり。やゝ下手に寄りて三尺の出入口あり、煤けたる襖一枚を塡めたり、下手は調和を破らざる程に庭を廣く取り、卯花垣の間には、皮付の松の柱に竹の編戸。すべて人物は下手の奥より出づるか、またはこの門を入りて庭に出づる順序。下手の背景は嵯峨の山、空は夕暮の華やかなる光線に富む。

法體したる祇王は、同じさまの祇女と共に、歌集の冊子を見ながら、梶の葉に物を認め居る。祇女の傍らには葉の茂りたる竹を置く、これには歌書きたる種種の色紙を下げあり。

祇王。（書きながら讀む）あひ見ても逢はでもなげく織女は、いつか心ののどけかるべき。

祇女。（聞きて）姉さん、それをお書きなすつたの、あひ見ても逢はでも嘆く織女とは、よく讀んだ歌ですこと、私たちを其儘に讀んだのではありませんか。

祇王。珍らしさうに拾遺集の歌なんぞ！　これがどうして私達のことを讀んだのだえ。

祇女。あひ見てもと云ふのは、あの佛のこと、逢はでもと云ふのは私達のこと、何れにしても嘆くのは織女でせう、私達はみんな織女ですからねえ。

祇王。なに、あの織女が嘆くものかね、嘆くと云ふのは此方のことさ、あの人なんぞは加賀から出て來て、始めて見た都の榮華に、目を廻さないのが目付ものなのだ、今頃はころころと喉を鳴らして、清盛樣の膝の上に乘つてるだらう。

祇女。まあお口の惡い、まさかそんなではありますまい。

祇王。いえ、それはお前が男と云ふものを知ら

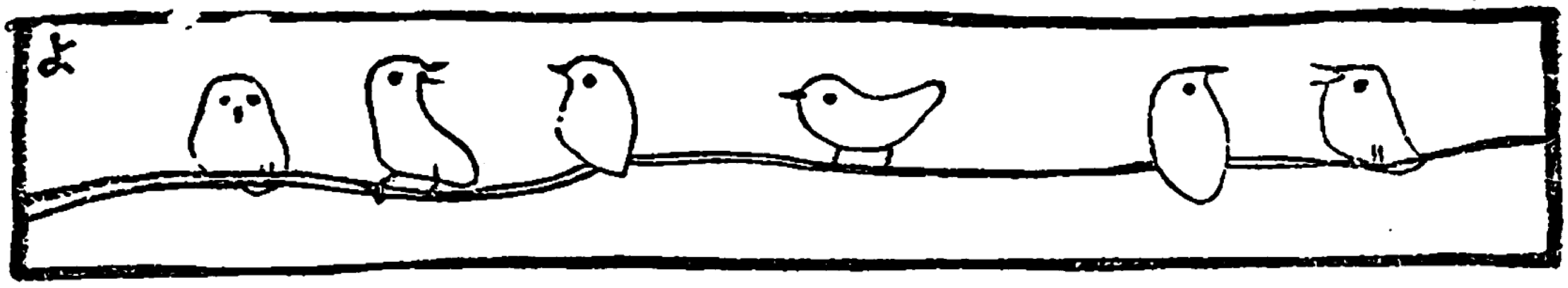
ないからさ。男と云ふ者は、それは得手勝手のものだからね、新しいものが好きで、流行るとあらば日傘を差して大夕立の中をのそのそと歩くのが男なのだよ。惡くても新らしい物が好き、仁王さまの申し子でも、笑ふときに靨が深く出ても御覽、直ぐに氣が移つてしまふ、前の女を想ひ出すのは、今の女に厭きが來てからさ、どうしたつて男が女に惚れるときには、外には屹度泣く人があらうと云ふものさ。

祇女。それは姉さんの時だつて、ねえ、あの人が來て清盛樣の心を取つてしまつたわねえ。それまでと云ふものは、往來を歩いたつて、向ふから避けてしまつて、油小路の侍從さんは祇王に逢つて道を讓つたなんて云はれては外聞が惡いなんて、そら細い小路に車を入れさせ、見世店の中へ牛を追込んで笑はれものになりましたつけ。

祇王。そんなことも有つたつけ！

祇女。今はこんなになつてしまつたつて、そんな事もあつたのですから、ねえ姉さん、くよくよしないで居ませうわねえ。

祇王。私よりお前こそくよくよおしでない、私は男を知つて來た罪の深い女なのだが、お前は男も同じこと、汚れのない若い身空で、誰れだつて皆な褒めた身丈より長い髪の毛を、まあ思ひ切つて切つてしまつて、かうして私に付合つて。（間）私やその事を考へると、お前に濟まないやうな氣がしてならないのだよあの佛のことを思出して、口惜い涙が出る時には、お前の頭を見詰めるのよ、さうすると悲しい思ひが蜂谷にすつと浮かんで來るの。こんな形になつたからには、嗔恚の惡念を燃やしてはならないと思つてゐたつて、さうは行かないわねえ。そんな時にはお前の顏を見たばかりで、ずつと氣が靜まつて來るからね



え。濟まないが私の爲めにはお前こそ、佛如來とも知識とも云ふべき人だと思つてゐるのよ、本當に私今日はお禮を云ふわ。

祇女。そんなに改まつてお禮だなんて云はれては、どうしていいか分かりやしない、私だつて、やつぱり浮世が厭になつて、こんな姿にもなつたのです、なにも姉さんの爲めばかりぢやありません。

祇王。だつて私には、外の人が考へても、これと云ふだけの譯があつて尼になつたんだが、お前の方は云はばその譯が薄いのよ、私は男に捨てられたんだらう、しかも世界中にみんな知れてる深い男に捨てられたのさ、私のやうな場合になつたら、自害でもするか、それで無くばこんな風になるより外に分別がないのだもの、そりやしつこしのない人だつたらまたお座敷を務めるだらうが、私にだつて少しは蟲があるからね。

祇女。あら、私にだつて蟲ぐらゐありますわ。姉さんひとりで、さう蟲を振廻さなくてもよいと思ひますわ。

祇王。私の蟲は起る譯があつて起つたのだがねお前のは起る譯がないのだから。

祇女。それは姉さん得手推量といふものですわ私にだつて有り過ぎます。

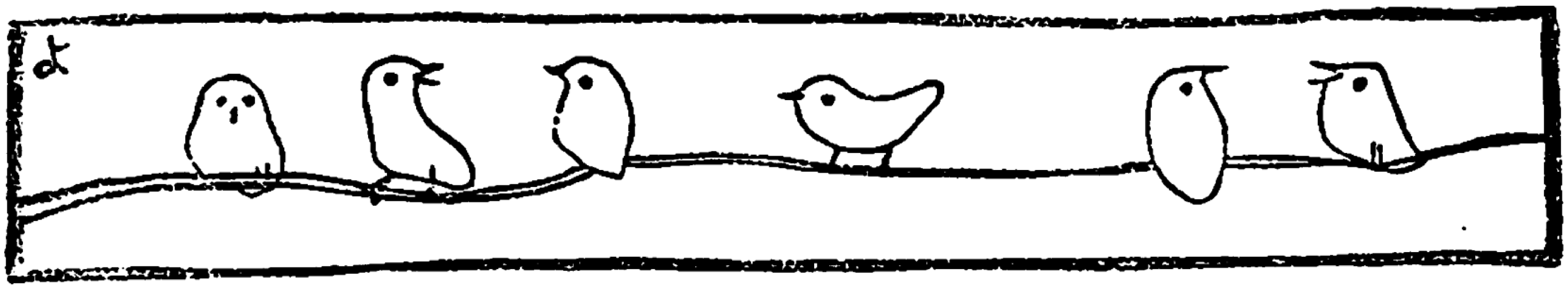
祇王。どうして？

祇女。だつて貴方の耻はやつぱり私の耻ですわ姉が捨てられたのは、つまり妹も捨てられたのです。もしか、私が姉さんより器量も好くそれに今樣もよく謠へ、舞も上手に舞へるのなら、どんな骨を折つたつて、清盛さまを取返して、あの佛に鼻を明かさせる分別も出すのですが、悲しいことに、いくら鏡を見直したつて、とても佛を向ふに廻しては太刀打は出來やしない。姉さんさへ見換へられるのですもの、應ふ譯がありません、私のなぞは詮

方なさの道心坊、それが嘘にも姉さんのお役に立つたら何よりですわ。

祇王。だつてお前が、特別に清盛さまにかあいがられた譯ではなし、私が捨てられたつて流れの身、意地を立てるのは私一人で澤山なのよ、お前にまで飛んだ付合をさせちまつたわ。さう云つた所で、今更らお前が還俗して、また白拍子を舞はうといふ段取にも行くまいし私はお前が早まつたその姿を見るにつけ、一





倍あの佛が恨めしくなつて來るの。

祇女。あら、いま姉さんは私を見ると、氣が靜まると云つた癖に。

祇王。靜まる時もある代りに、また溜まらなくなる事もあるの、出船の用に立つ風は、入船には邪魔にならあね。

祇女。姉さん、そんなにまであの佛が恨めしいの。

祇王。私は女だわ。

祇女。佛如來に仕へる尼ではないの。

祇王。姿ばかりは！

祇女。え、何んですつて？姿ばかりですつて？

（間）姉さん、貴方本當に發心なさつた譯ではないのですか。

祇王。本當だの噓だのつて、私の頭を御覽な！

祇女。だつて姉さんはいま姿ばかりだと仰有つたでは有りませんか、それぢや心は……お胸の中は變はらないと云ふのでせう。

祇王。生れかはらないうちは、さう〳〵變はるものですか、たゞまあ何かを忘れちまふと思ふ心だけが、今までよりか殖ゑただけなんだわね。

祇女。そりや噓でせう、反つて昔よりか惡くなつてやしませんか。

祇王。まあ、私が惡くなつてゐるなんて、何んだつてそんな事を仰有るの。

祇女。だつて姉さんは、何よりも包み隱しが嫌ひで、隨分てれはといふてとまで、ずば〳〵仰有つたもんでせう、それが包み隱しをしては惡いといふ坊樣の身になつてから、血の分けた妹にさへ、云はない事があるのでせう。

祇王。まあ何をお云ひだへ、白拍子をやつてるうちでさへ、何も彼も打明けて話をしたぢやありませんか、それがてのざまになつちまつて、何を隱すてとがあります。何を隱しました？

祇女。姉さん、御佛壇の阿彌陀樣の後には、何が隱してありますの？

祇王。あつ。

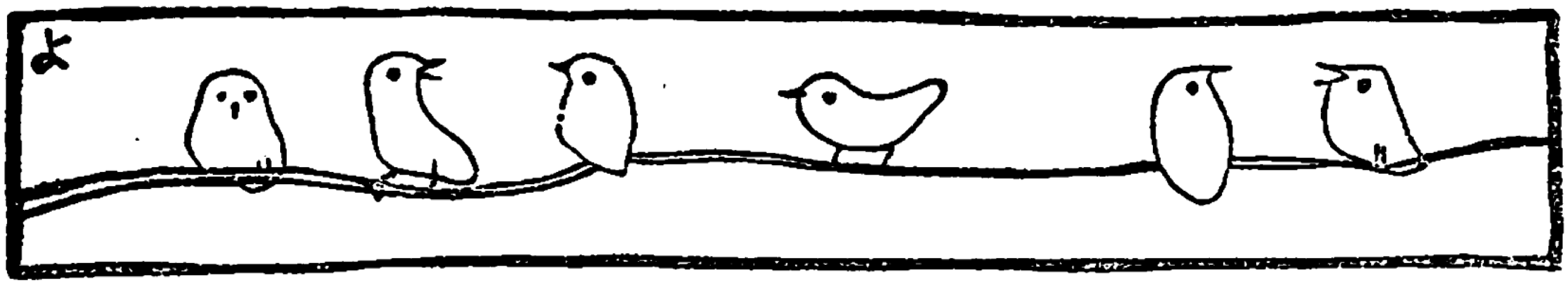
祇女。あれは何んでございますの。

祇王。お前あれを知つてゐたの。（間）知つてるのなら隱し立てはしません。（と立つて佛壇の中より藁の人形を出だして、祇女の前に置き）これさ！（祇女の顏を熟視して）これは何んだと思つてゐるの。

祇女。（答へず、これも立つて手函の中より、美くしき絹にて包みたる小さき白木の麁末なる箱を取出だし、その蓋を開きて祇王の前に差置き）姉さん、それもこれもおんなじもんでせう。

祇王。あら！　お前もそんなものを拵へて置いたの。まあ釘まで！

祇女。（函の中の釘を示し）姉さん、私だつて口惜しいわ。飛ぶ鳥を落とすやうな姉さんの威光で、我儘をして威張つてゐたのが、あの佛が西八條へ來たばつかりで、私たちが町を歩いたつて、みんな顏を背けて、此方から挨拶をすると、仕方がなしに口を利くんですもの、姉さんだつて私だつて、好き好んでこんな姿になるものですか、あの五十を越した阿母さんでさへ、あの髮を剃るまでには、どの位泣いたか知れやしない。あの佛が來た時に淸盛樣が否がるのを、姉さんが義理を立て、無理に座敷に通したのが、私達の難儀の元になつたんですもの、その義理も忘れてしまひまあ姉さんを追出して置きながら、舞が見たいなんて、西八條へ呼寄せて、姉さんに今樣を唄はせて、のめのめと平氣な顏で、聞いてゐたぢやありませんか、憎たらしいつて、さぞ姉さんが口惜しかつたらうと思ふと、取付いて食付いて遣りたかつたけれど、そんな事も出來ないと思つて、涙を飲込んで我慢して



ゐましたわ。人に恨みがあるものか無いものか、私はこの人形を拵へてから、毎日毎夜の念佛も、腹の中ではみんなあの人を調伏してゐたのです。この思ひでもあの佛が、病氣にでもなりさうなもの、達者でゐるのは、まだ一心が足らないのだと、明暮れに祈つてゐるのですわ。（話の中に白木の函を無造作に絹に包みて手函の中に藏む。）

祇王。そんなにお前は思つてくれたの、佛門に入つた身が、人を調伏するなんて、恐ろしい事だけれど、とてもあの人が生きてるうちは如來樣へ勤行なんぞが、どうして平氣で出來るものですか、あの人を咀ひ殺して、その後では取返しの付くほど、如來樣へ御奉公をする積りだ。

祇女。こんな恨が晴れないうちは、いくら頭を丸めたつて、とても菩薩なんかになられやしません。かうなつたら一緒になつて、あの佛めを祈り殺して遣りませう。

祇王。祇女や、手始めにあの佛が、清盛樣に逢へなくなるやう、その棚機の笹に釣るして、思ひがいとど高じても、一年に一度しか逢へないやうにして遣らうぢやないか。

祇女。その一遍も雨が降つて逢へないやうにしてやりませう。一つ付ければいゝでせう。姉さんのを付けませうか。

祇王。お前のを付けよう。阿母さんに知れないやうに佛壇に置くのは、私の方が都合が好いから。

祇女。さうですねえ、それぢやこれを付けませう。（と人形を笹に結び付ける）

祇王。序でに色紙も付けてしまはう。（と二人して笹に結び付くる。）

母。（下手より出づ。法體、笠、杖、金剛、都へ買物に出でたる歸り、小さき包みを持つ。扉を開きて內に入り、二人を見て）暗いのに



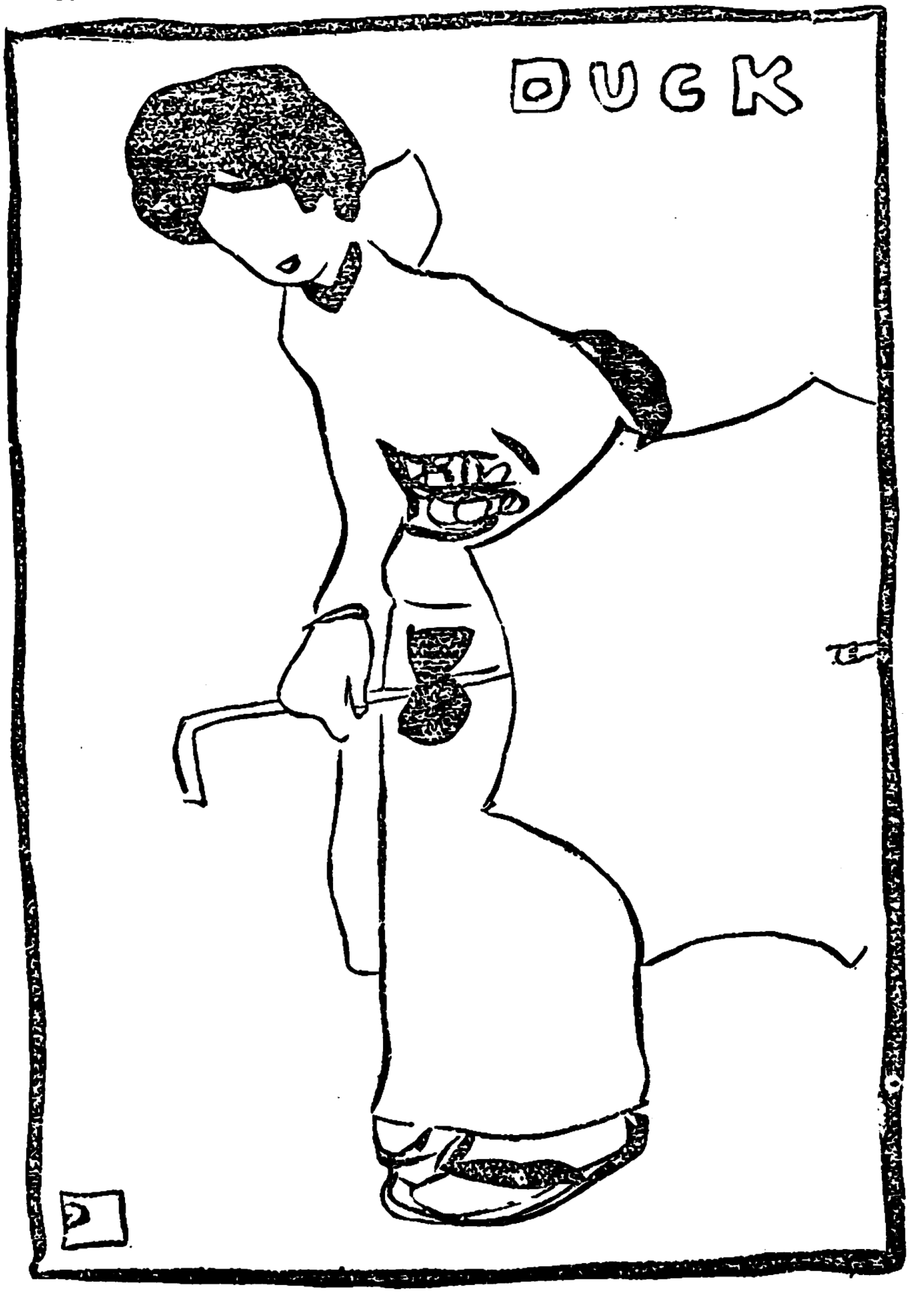
まだ明しも點けないのかえ。おや、棚機の竹もまだ立てなかつたの。

祇女。いま立てる所なのよ。

祇王。その間にかの形代を己れが懐中へ押隠す）

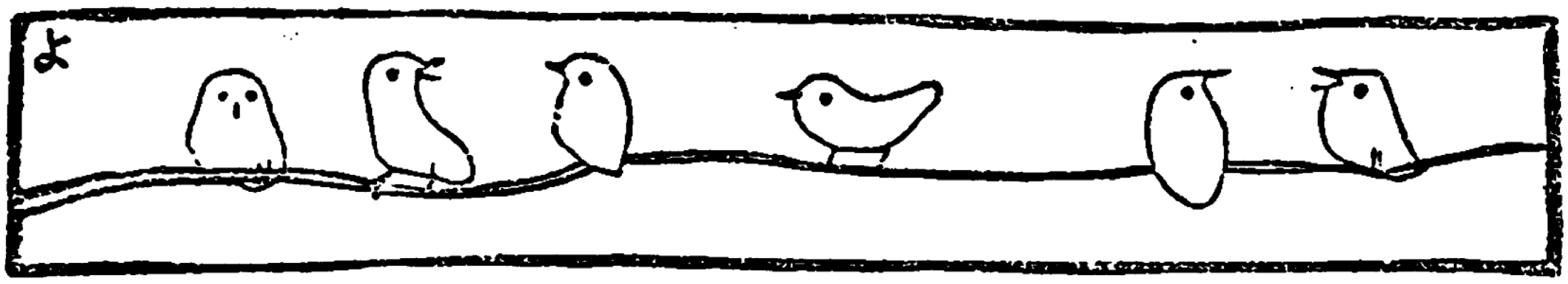
母。町に居た時とは違ひますよ、尚少し確りしてくれなくつてはねえ。（と縁に上がる）

祇女。また初まつたのねえ、姉さん二人で立てませうよ。（とこれは縁より下りて、祇王を招く）



祇王。お前一人では立たないの。（と云ひながら立つ）

祇女。なかなか重いわ。（と竹を引出だす）



母。あゝ、あ、あとが笹の葉だらけだ。(箒を取りて掃出だしたる後、燈を點ず)

祇王。(地上に立ち、祇女と二人して笹を扉の傍らに立つ。舞臺の光線は夜の色強くなり、對話のうちに七日の月あらはる)まあ御覽よ薄くつても月が出ると、世界がいくらか明かるくなるわねえ。遠くには小霧が立籠めて、見たところ生のあるものは、私達の外ありやしない、寂しいてとねえ。

祇女。去年の棚機なんかにはねえ!

祇王。(急がはしく)およしよ、またそんな事を云ひ出すの。

母。何をしてゐるの。もう秋だよ、風でも引くといけないから、その扉を締めて、早く內へお入りなさい。

祇女。忙しないのね。(呟きながら扉を差す。緣に腰掛けて悄然としてゐる祇王に)姉さん、何をぼんやりしていらつしやるの。

祇王。天の川がはつきり過ぎるほど見えるぢやないかね。

祇女。此頃は毎晩見えてるぢやありませんか。

母。何をしてゐるのさ、早くお上がりな。

祇女。姉さん、阿母さんが心配していらつしやるわ、內にお入んなさいまし。

母。(內に入來る祇王に向ひ)折角の誂へだつたが、やつぱり場所が違つては、お前さんの氣に入りさうなものが無いよ。

祇王。氣に入るも入らないもありやしない、香染の袈裟に墨の衣、誰れに見せる姿ぢやなし如來樣を男にして、死ぬのを待つてりや可いのですもの。

母。そんな事を云はないで、まあこれを見ておくれ。いつもの見世棚へ行けば好いんだが、人に顏を見られるのが否さに、顏を知らない家で買つて來たんだよ。これでもその店の中では、一番良いのだがねえ。(と包みの中より料

紙、筆などを出だす）

祇女。（傍らより、それを取り見て）全く酷いのねえ、こんなのは隨分安いのでせうね。

母。そりや安からう惡からうさ、以前と違つて何事につけ、儉しうしなくてはならないからね。

祇王。またそんな事を仰有るの、儉しい儉しいつて、高が紙や筆なんか、良いのだつて惡いのだつて、いくら違ふものですか、何もそんなことにまで、私に當らなくたつていゝぢやありませんか。

母。またお前はそんなことを云ふの、何がそれが當るのだえ。

祇王。當るんですとも、私が西八條へ行つてる時分は、儉しいのつの字も仰有つたことが無いぢやありませんか。清盛様に捨てられて……

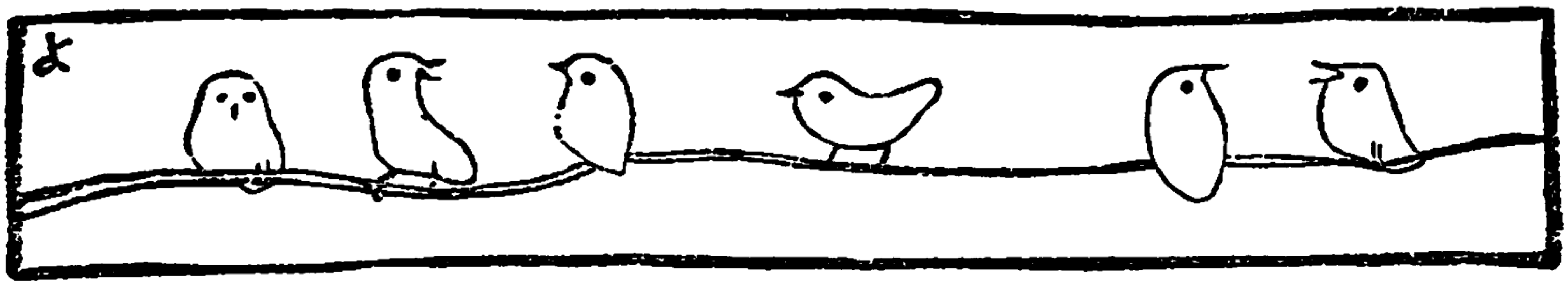
……、それは私が甲斐性がないからです、舞も下手なんでせう、併かし器量が惡いからでさあ！　阿母さんが生付けた器量が、あの佛より惡いからなんです。器量ぢやない、年が上だから捨てられたんです、新らしいものに見換へられたのだ、何方にしたつて、阿母さんが惡いんだ、阿母さんが私を遲く生まなかつたから惡いのです。

母。またいつもの分からない理窟を並べ出したのね。靜かにおしよ、身體に障るといけないから。

祇王。障つた方がいゝのです、そして早く死んでしまひたいのです。

母。そんな事を云はないで、氣晴しにこのお菓子でもお上がんなさい、どれお初穗を阿彌陀さまへ上げませう。（と立ちて佛前に至り）や阿彌陀様の掛地がこんなに外れて……、どうしたのだらう。祇王や、どうしたのだらうね。

祇王。へえ、阿彌陀様が。（てれ隱しに佛壇の前に行き）まあ、どうしたのでせうね、鼠でも



暴らしたのですかねえ。

母。勿體ないよ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

（佛壇の位置を直し、菓子を供じなどす。）

祇女。（その間に茶を點じて、かの菓子を點心にして共に食ふ。）

祇王。阿母さんはくたびれたでせう、お休みなすつたらどうですね。

母。さうさねえ、それぢや先きへ寝ませうよ、お前さん達も早くお休みなさい。女ばかりの一軒家、夜更けてからは、どうせろくなことはありやしないから。

祇王。夜更しの癖が付いてしまつてるから、床に入つたつて、容易にや寝付かれやしませんもの。

祇女。姉さん、今夜は一緒にお勤めをしませうね！

祇王。あゝ、一心籠めてね。

母。そんな譯なら、私も一緒に勤行をしませうか。

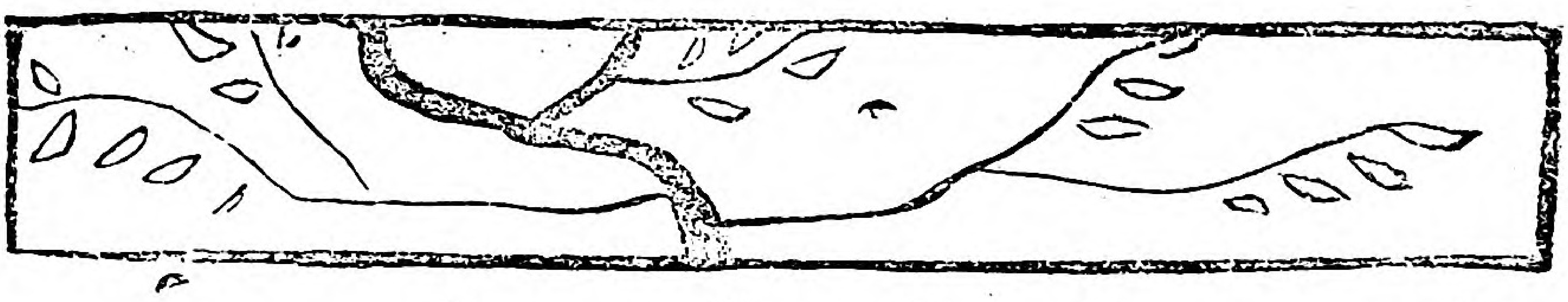
祇王。いゝえ、阿母さんはお休みなすつて下さいましな、年寄は年寄、若い者は若い者でやりますから。

母。だつてお前、阿彌陀樣の御奉公には、年寄だつて若い者だつて、隔てがあるものぢや無いだらう。

祇王。うるさいのね。

母。うるさいつて！　まあこの子は！　何がうるさいのだね、からやつてお前親子三人、頭を丸めて、阿彌陀樣を便りにしてゐるのではないか、浮世を離れた三人暮らしの中の、たつた一人の母を、うるさいとは何んのことだえ。

祇王。お怒んなすつたの。あゝ私が惡うございました、どうせ男に捨てられるやうな意氣地のない私ですもの、阿母さんの御機嫌が取れないのは當り前ですわ。ねえ、阿母さん、私



の惡い所は何程でもあやまりますよ。

祇女。姉さん、姉さんてば。また疳が怒つてゐるのだよ。阿母さん、構はずとお休みなさいましよ、直きに直るんですから。

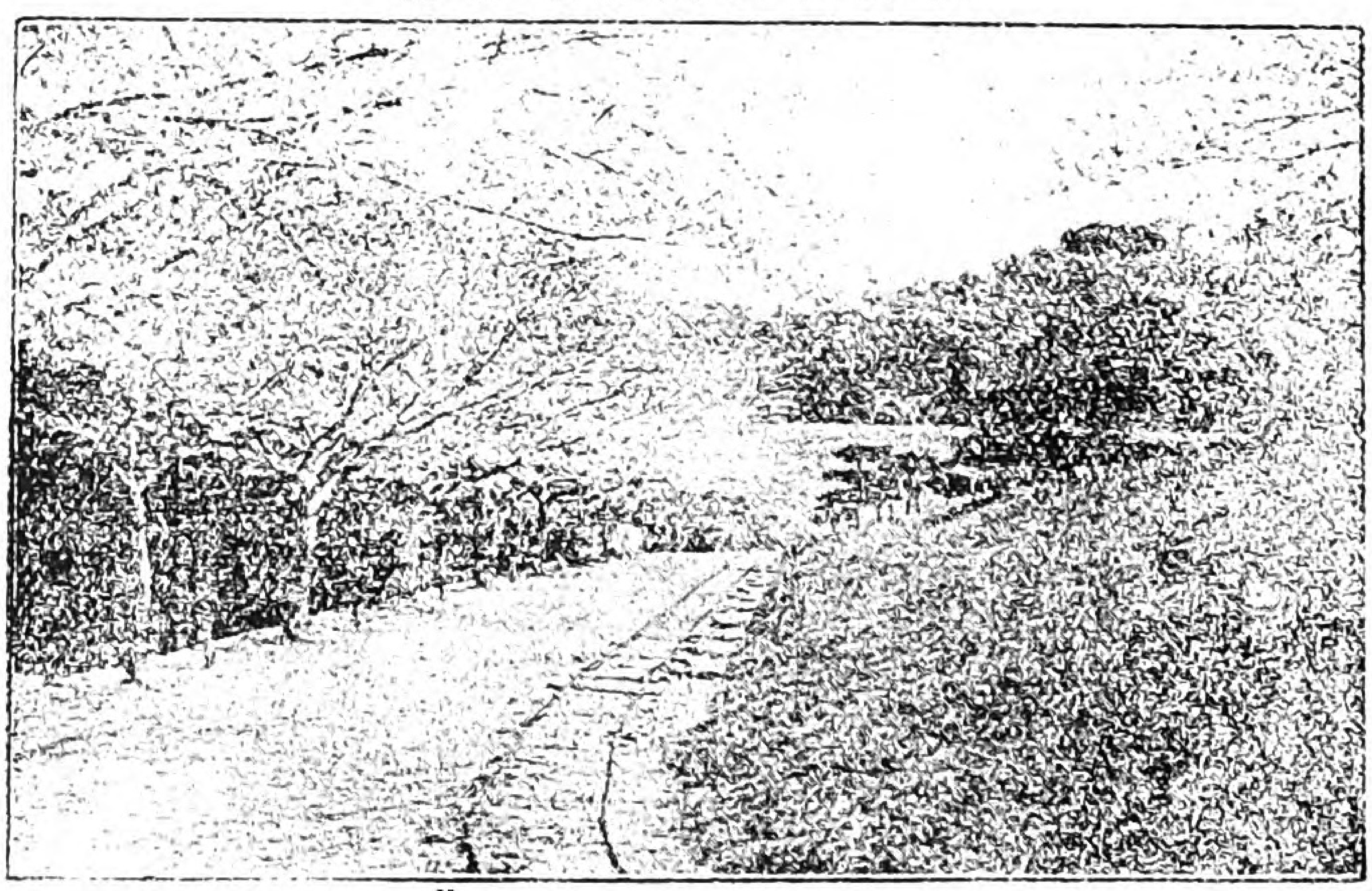
母。なんぼいつもの癖だつてあんまりな事を云ふのね。

祇王。どうせ私はかういふ人間ですから。

祇女。姉さん、およしなさいつたら。（と母を奥へと誘ひ去る。）

祇王。（靜かに立つて火桶を運び、手を翳して火の氣を見、更らに下手より小さき鍋に炭を盛りたるを持ち來り、炭を火桶に加へ、少しく考へて佛壇に近づき、花立を取りて庭に下り、件の花と薊の花とを差換へて經机の上に置き、佛壇の燈明盞を下して、花立と並べ懐中より以前の形代を出だし經巻に立掛けて置く。）

長崎西山水源地櫻花



（森谷つたみ寄）

祇女。（奥より靜かに出で來る。）

遠くにて梟の泣く聲、大いなる間を置いて聞ゆ。

祇王。（左手を延べて、母の枕に就けるやを問ふ振す。）

祇女。（目もて母の伏せることを語る。）

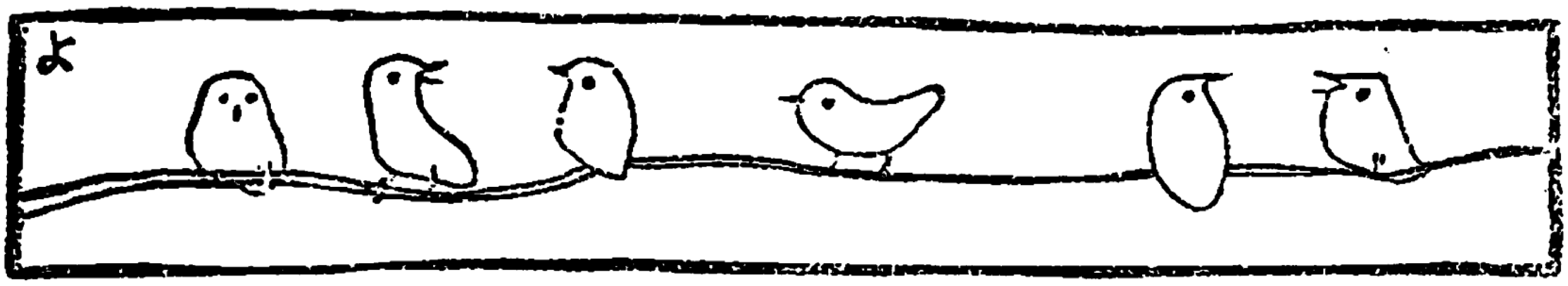
祇王。（火桶の上に鍋を翳す）

祇女。（小聲にて）姉さん、いゝ花がありましたねえ。

祇王。尖があるからねえ。

祇女。油は？

祇王。佛壇の下に淨いのがあるよ。



祇女。徒のですか。私の方にはずつといゝのがあるのですよ。

祇王。どんなのが。

祇女。(立ちて縁の下より口の缺けたる油壺を出だし)これですよ。蟇だの、馬陸だの、女郎蜘蛛だの、いろんな蟲を封じ込めてあるのです、この油をお使ひなさいな。

祇王。(凄き笑を示し)ふ、ふ、お前はそんな油で祈つたのかへ。

祇女。え、あんな蟲を摑まへるのには、そりや氣味が惡くつてよ。

祇王。まあ、それをお注ぎ。

祇女。鍋が眞赤になつてますよ。(と油を鍋へと注ぐ。油の煙立ちのぼる。)

祇王。(笥の中より小刀を出だし)よく御覽、姉さんの油を。(左の二の腕を突破り、鮮血を鍋の中へと滴らす)蟲けらよりか、この方がましだらう。(間。やがて右手もて左の袖を探りて、布を取出だして、疵所を括らんとす。)

祇女。(心得て繃帯を爲し)姉さん、私も。(と小刀を取る)

祇王。お待ちよ、お前のやうな清淨な人の血なんか役に立つものか、男の膏の香を知つて、男の汗を身に浴びた、汚れた私の血でなくては、邪婬の炎が煮え立つものかね。その小刀をお貸し。(と祇女の手より小刀を取り、かの形代を尖先に刺し)人の男を取つた恩知らずめ、親子兄弟を都住居の出來ないやうに、よくも、よくも、しやあがつて、のめのめと西八條に、おう、あの風を厭ふ帳臺はな、私が三年越も清盛樣と、睦み合ふた褥の上、そこをぬけぬけと己が住家にしてゐるのだな。お前は……、己れは……そこに安心して座つてゐる氣かえ！　落着いて座らせて置くものか足の先きから躍り出させて、居ても居付かれぬやうにして、苦しい思ひをさせて見せよう

さあ、これでも座つてゐられるか、これでも住んで居られるか、西八條は油で煮える鍋の中になつたのだよ、さあ、これでも住んでゐられるのか。(形代を鍋に入れて油に浸してはまた取出だすこと數次。)

祇女。姉さん、私にもその小刀を貸して下さい(小刀を取り、形代だけを鍋に入れ)私は姉さんのやうに優さしいのではないのだよ。人の義理を餘處にして、榮耀榮華に目を眩やまして、この眼だらう、この眼だ。淸盛樣を迷はしたのはこの眼だらう、目暗になれ、潰ぶれてしまへ。人も無げに高慢相に、扇翳して、舞舞つたのはこの手なんだ、折れておしまひ。手や、お前折れるのだよ、折れるのだ、折れずば痾むのだ、動かなくなるのだ。落つこつて手棒になるのだよ、上手さうに舞廣げたその腕が、業手になつて動かなくなるのだよ。(呪ひの箇處を、言葉に連れて突く)

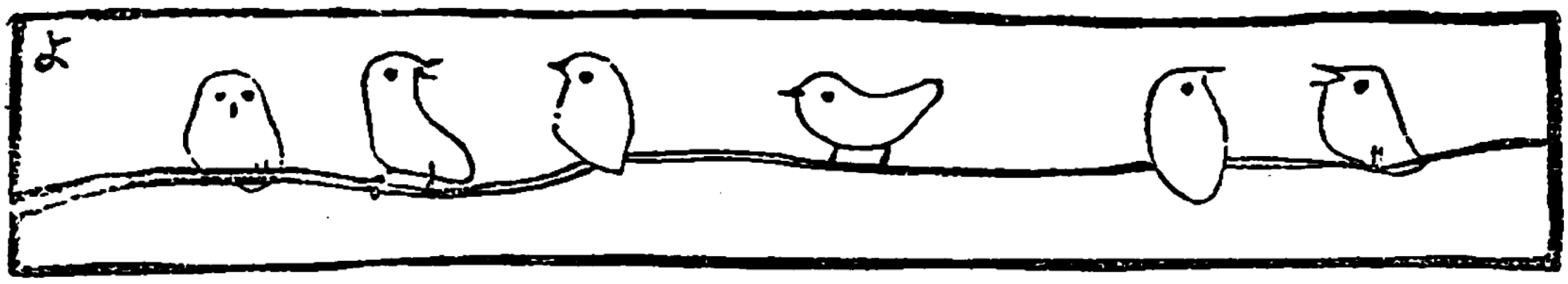
祇王。なあに舞の手なんぞは、どうなつたつて構ふものか、人の義理を其方にして、淸盛樣に縋り付いたその腕が捥ぎとりたいのだ。

祇女。あの美くしい顏を、さうだ、このやうに疵だらけにして遣るぞ。(と小刀にて滅多に突く)

祇王。顏なんぞはどうでも能い、あの齡を殖やして遣りたい、あの性惡と張合ふて、負けるのは年齡ばかり。新らしいのと若いのとに、私は負かされてゐたばかりだ。拍子も合はない田舍舞、張りのない田舍面、何處をどう負ける積りは無いのだが、若いのに負けたのだ。

祇女。構はないから、なんでも足腰の立たないやう、節々の痛むやう。さ、姉さん、呪つて呪つて呪ひぬいて遣りませうよ。

祇王。この姿で呪ふのは、佛さまへは濟まないけど、頭を丸めて見たつて、とても極樂へ行かれさうも無い兄弟、地獄へ落ちるは覺悟の



前、此身の落ちるのは何時までだつて厭ひやしない、その代りには憎い人も、此世からの地獄の苦み、つらい味を覺えさせて、熱い涙を浴びさせて遣る。(と燈火へ一束の線香を翳し、煙り立つを逆手に持ち、かの形代に突付ける。火、油に入りて燃上がる。)

祇女。あれ。(と叫ぶ。)

祇王。(制するやうに)靜かにおし、鍋に火が入つたのだよ。(と小刀にて形代を貫きて、鍋の中より取出だす。)

母。(祇女の叫び聲に驚きて、奥より聲高に)なんだえ、どうしたのだえ。

祇王。いゝえ、何んでもないのですよ。(と小刀に刺さりしまゝの形代を佛壇へ隱す。)

母。(なほ、聲のみして)大變明かるいぢやないか。

祇王。御燈明皿に火が入つたの、もう消えましたのよ。(火桶を持ちて筧の下へ置かんとして閼伽桶を倒す。花覆へり、水流る。)

母。(奥より出で)もう寢ちやあどうだね。

祇王。(緣にて空を仰ぐ風をしながら)大分更けて來ましたわね。祇女や、もう寢ませうか。

祇女。姉さん、今夜は(と意味ありさうな表情をなし)ね、もう寢ませう。

母。女ばかりの離れ家、別に取られるやうなものもないけれど、それでも何んだか恐ろしいから、さあ、早く休みませう。(と立つて簀を下さんとす、祇女も手傳ひて悉く簀を下し終る。)

蟲の音騷がしきまでに聞こゆ。

佛。(白小袖の上に搔取、市女笠、金剛草履にて、下手――或は花道――より登場。竹の編戸を見付け、押さんとして鎖しあるに氣が付き、はたはたと叩く。)お賴み申します、お賴み申します。

祇女。はい、何方でございます。(と簀の間より

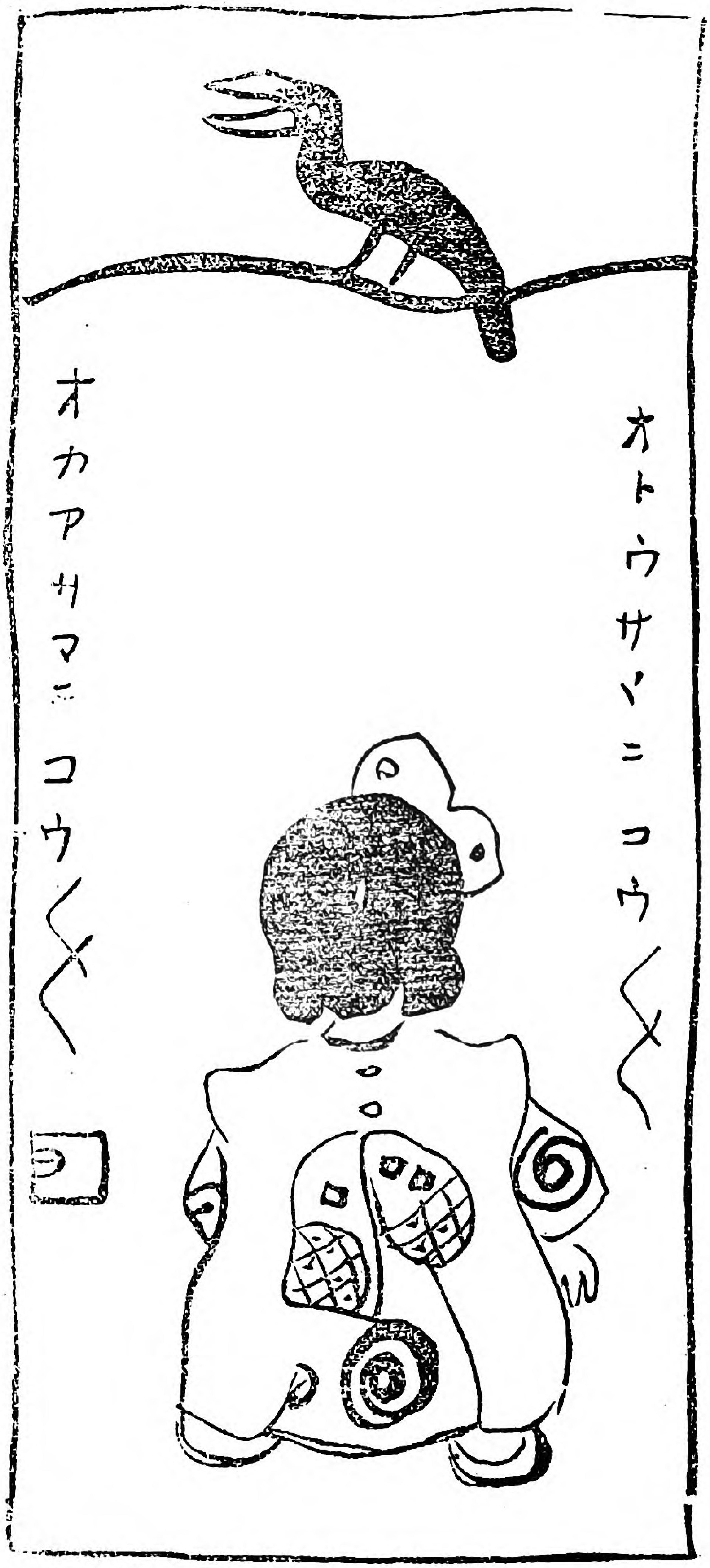
現はる。）

佛。どうぞこゝをお明けなすつて下さいまし。

祇女。はい。（と下立たんとす。）

母。（顏を出だし）お待ちよ、何方なの。

祇女。誰れだか知れないのですけど、明けてくれつて。

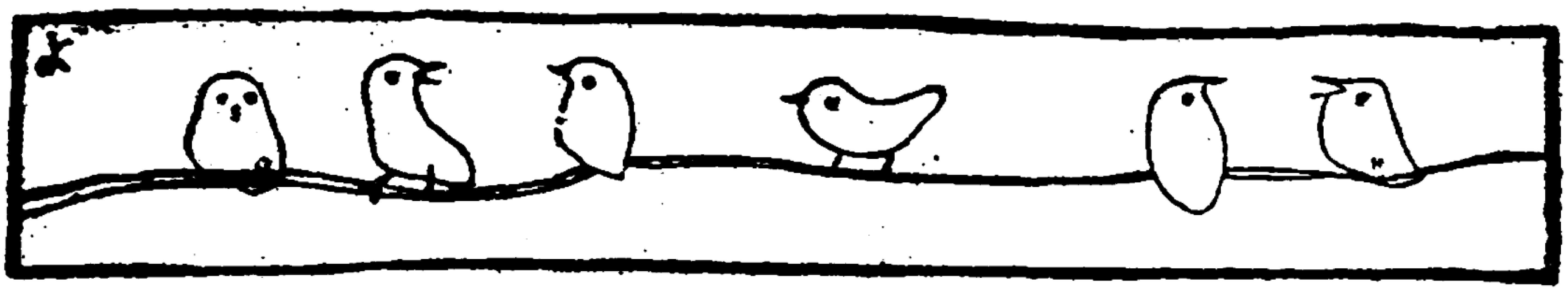


母。やたらに明けてはなりませんよ、どんな奴が來るか知れやしない。

佛。どうぞ、こゝを明けて下さい。

祇王。（これも簀の間より顯はれて）女の聲だね。

母。作り聲をしてゐるか知れやしない、こんな



所へ夜夜中、女の來る筈が無いぢやないか。

佛。(なほも戸を叩きて) お頼み申します。

祇女。はい。(と大きく返事する)

母。(小聲にて) 返事をする奴があるものかね、お前行つて能く名前を聞いて御覽、明けるのぢやないよ、え、決して明けてはならないよ。

祇女。はい。

母。泥棒かも知れないよ。

祇女。はい。

母。それで無ければ、魔者かも知れないよ。

祇女。私厭だわ、恐くなつちまつた。阿母さん行つて聞いて下さいよう。

母。だつてお前の役ぢやないか。私が止めなければ、今頃はもう入られて終つてるのだらうに。

佛。お頼み申します。

母。役に立たないね、いゝや、私が斷つて遣りませう。(緣の先の方にて) 今夜は遅うございますから、御用なら明朝來て下さいまし。

佛。さうしちや居られないのです。

母。一體何方なんでございます。

佛。祇王さんのお住居はこゝでしたね。

母。祇王はこゝですが、そして貴方は。

佛。佛なんですよ。祇王さんにお目に掛りたくつて、西八條から拔けて來たのです。早くお逢はせなすつて下さいまし。

母。ま、お待ちなさい。そしてお連れは何方です。

佛。たつた一人なんです。

母。え、一人で、こんな寂しい所へ。

佛。祇王さんに逢ひたいばかりで來たんです、どうか早く逢はせて下さいましな。

母。待つて下さい。(振返り) お聞きかえ、あの佛御前がたつた一人で來たんだとさ。

祇女。え、佛御前が、まあ、あの奴が! なんと思つて來たんでしよ。

祇王。阿母さん、全くの佛さんかね。

母。私はろくに口を利いたても無かつたから……………。

祇王。さうねえ、祇女や、お前よく御覧な、そして本當に連れがあるか……無いか……。

祇女。姉さん、本當の佛御前で、そして連れもなかつたら、内へ入れても好いんでしよ！

祇王。さうねえ。

祇女。入れませうよ、そして恨みを云つて遣らうぢやありませんか。

祇王。云つたつて仕樣がないやね。(嘲けるやうに)恨の文句だけなら、みんな先樣で知つてゐるだらうさ。

佛。どうぞお明けなすつて下さいまし。(とまたも戸を叩く。)

祇王。まあお前行つて戸をお明けな。(と緣より内に入り、簀を卷上げる。母も手傳つて悉皆上げ終る。)

祇女。(庭に下り、門を明けて)さあお入んなさいまし。

佛。御免下さいまし、おゝ祇女さんでしたね、まあ、こんな姿になつてお終ひなすつてねえ。

祇女。(冷かに)どうもね、ならなきやならない譯になりましてね。

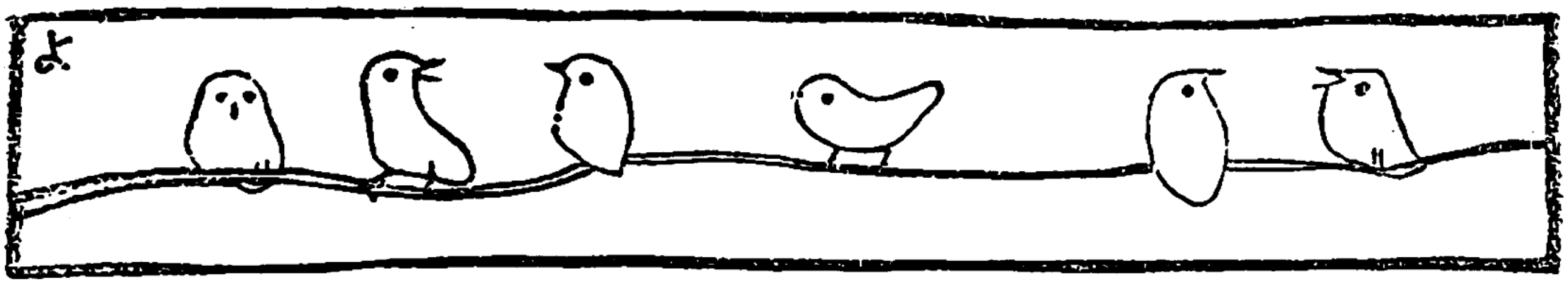
母。(緣にて)さあ、此方へお上がんなさいまし。

佛。それでは御免下さいまし。(と扉を入り、後を締めて、祇女に會釋して座敷の端に座す。)

祇女。(荒々しく扉を締め直す。その反跳に七夕の竹に釣るせる形代落ちたるを、慌てゝ拾ひて袂に隱す。)

祇王。佛さん、お久し振りですね。

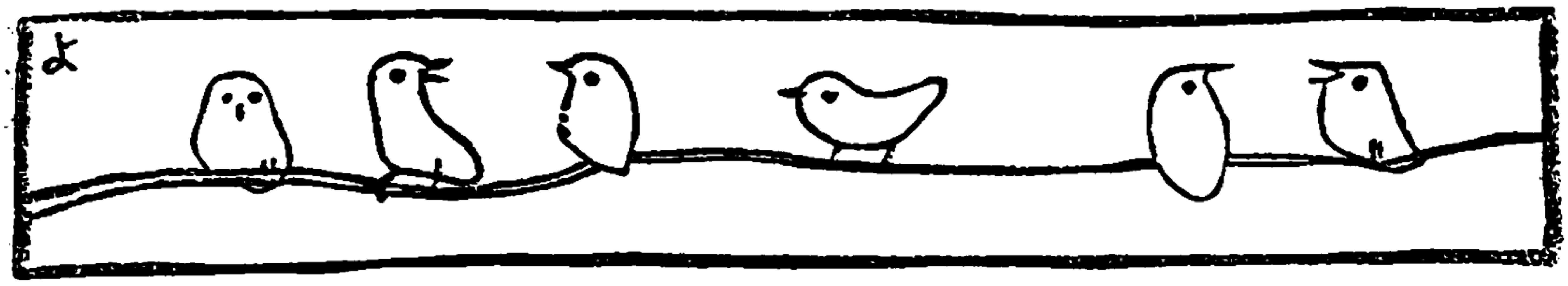
佛。あれつ切りお目に掛かりませんでした。まあ貴女も祇女さんも、それに阿母さんまで、すつかりお姿が變はつてお仕舞ひなされましたわねえ。



祇王。そんなに變はりましたかねえ。
佛。だつて貴方、あんなに綺羅を飾つた人が。
祇王。色の着物が墨になつて、髪がこんなになつた許り、なにもそんなに私は變はつたとは思ひませんわ。
佛。あら、以前の華美な御樣子を知つてるものには、まるで醒めない夢のやうですわ。
祇王。貴方のお目にも、そんなに見えますかねえ。
佛。（祇王の面を見守りて……………）
母。祇王や、お前何をお云ひだえ。
祇王。いゝんですよ、私は云ふだけのことがあつて云ふのですから。
佛。祇王姉さん、そりや貴方のお怒んなさるのは御尤です、私は決して御無理とは思ひません。貴方が怒つてゐらつしやると思へばこそ私もかうやつて參るやうになつたんです、貴方は私の恩人です。私が加州の田舍から出て來て、誰れも見向いてくれなかつたのを、清盛樣のお目通りに出して下すつたのは貴方なんです。
祇王。そんな事を貴方は知つてゐらつしやるの
佛。そりやあ、あの時、よつく分かつてゐた事ぢやありませんか。
祇王。あの時は、涙を流してお禮を仰有りましたがね、そんな事は大方忘れておしまひなすつたらうと、思はれますからね。
佛。やつぱりそんな女だと思召していらしつたの、それでは、あとで舞の時なんぞも、屹度私のしたことだと思つていらしつたでせう。
祇女。（先程より佛の後にありしが）私のしたこともないもんです、貴方でなくつて、誰れがあんな皮肉な眞似をさせるもんですか。
祇王。お待ち。（と祇女を制し）佛さん、私も少しは人に知られてゐた祇王です。そんな邪推を廻してはをりません。しかし何んですよ、

私をあのさまに逢はせて——そりや清盛様の仰せには違ひありません、仰せではありませうが——何んでも云ふ目の出る貴方が、なんだつて止めてはくれないのです。私は清盛様を貴方に取られたのよりか呼出されて二人の前で——もしか阿母さんの身體に障るやうなことが有つてはと思へばこそ——口惜いが、白拍子の名折になるのも我慢して、顫へる手で扇を差してゐたのですよ、あんな思ひをさせて下すつたのは決して私は忘れやしません。





佛。待つて下さい、私なんぞが止めたつて、あの清盛樣が、素直にうんと仰有る方だと、思召していらつしやるの。（間）ま、それもようございます、何方にしたつて、どうせ貴方がたが私を能く思召して下さる譯はないのですから。ですが私も隨分氣の好い方なんですよ、貴方がお殘しなされたお歌、萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草、いづれか秋に逢はで果つべき、あれをね、私へ眞實からのお戒めだと思つてゐましたのよ、あのお歌が今日の私の身上になつたんです。

祇王。歌が身上になつたんですつて、いづれか秋に……、それでは貴方も追出されたの。

佛。いいえ、私が逃げて參つたんです。

祇王。どうして？

佛。ですから貴方は大恩人だと申すんです。貴方のお蔭で此世の榮華を盡くした上に、また後の世までも助かると云ふもんです。あのお歌を口にすると、譯もなく私の心は、冷めたい黒金で摩すられるやうになつて、此世が厭で厭で仕樣がなくなるのです。分けてこの二月三月は、一層世中が味氣なくなつて、何を見ても、何を戴いても、面白いとも嬉しいとも思ふやうなことはないのです。たゞもう暗い所が好きで、井戸の中でも、深い淵の底でも、月日の光りが通はないやうな靜かな處に永く……永く住んでゐたいやうな氣がしてなりませんでした。

祇王。主のある男の所へでも推參する貴方のこつです、御勝手に何處へでもいらしつたら、能ささうなものですのに。

佛。後世が恐ろしうございます。この世の便りないのを思ひますと、一層先きのことが案じられます。

母。全くですよ、人間は後生のことが肝心ですお若いのに、よく其處にお氣が付かれました。

佛。阿母さん、よく仰有つて下さいました。私も後生のことが氣に掛かつてをりました。貴方がたのお身上を思ふにつけ、賴まれぬ今の身と存じまして、何處かの山寺に入つて、修行をしませうと覺悟しましたが、この嵯峨の奧に、貴方がたがお出でだと、風の便りに聞きましたので、お仲間に入りたいと存じて、忍んで參つたのでございます、今までのお恨みはお怨み、その方は御勘辨下さいまして、この上はどうぞ私も極樂往生のお仲間にして下さいまし、水も汲みますお掃除も致しますから有難いお經を敎へて下さいましな。

祇王。なんだつて！　尼になる！　捨てられたね！

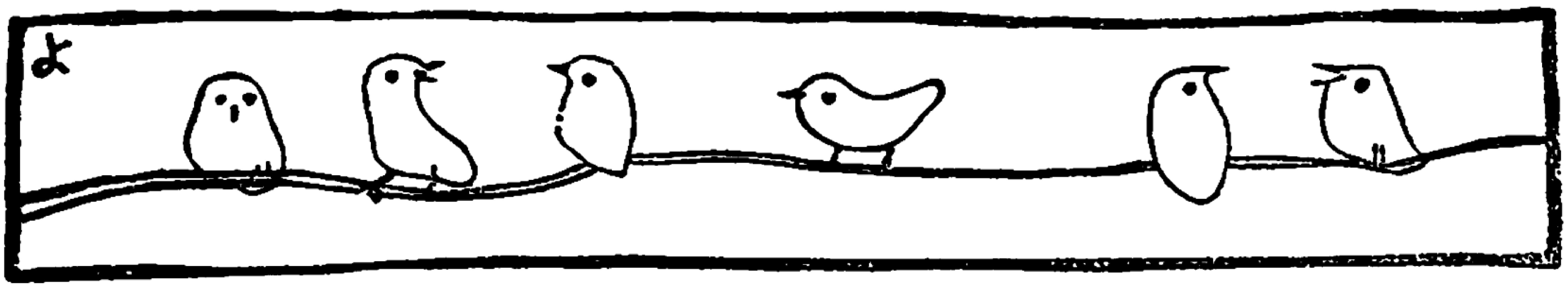
佛。いゝえ、捨てられたのなら、こゝへは來やしません。ねえ、祇王姉さん、貴方は私に世界の榮華を見せて下さいましたが、此上は後世の安樂往生もさせて下さいまし。阿彌陀樣は誓ひが廣うございます、まさか姉さんの蓮の臺を、また私が横合から、取上げるやうなことはございますまい。

祇王。うまいことをお云ひだ、それぢや佛さん貴方も本當に後生の道に入る氣なの。

佛。考へて見て下さいましな、それで無くつてこんな所へどうして來るもんですか、樂みが樂みにならないやうな娑婆の風に當るのは、すつかり厭になつたんです。

祇女。さうして私達のやうに行ひ濟まさうと仰有るのですか。

佛。浮世の榮華は、ありやほんの仇花、私は誠の花を探がしてゐる貴方がたの眞似がしたいどうかしてこの苦の娑婆を逃れたいと、貴方がたを便りにして、かうやつてお尋ね申して參つたのです、私の爲めの知識といふのは貴方がたです、私が成佛が出來たらば、そりや貴方がたのお蔭なのです。たとへこゝに置い



といて下さらないでも、私の發心はつまり貴方がたから出たのです、あのお歌が私の爲めには、後の世の燈火なのでございます。

祇王。佛さん、それでは貴方は、私達のやつてることが、そんなに美はしくお見えになるのですか。

佛。これが尊くなくて、なんとしませう。

祇王。なにがそんなに尊いのでせう！

佛。紅も髪も捨てちまつた、そのお姿が尊いのですわ。

祇王。この姿が……………、見掛ばかりの尼になつたのが。(長き間)佛さん、濟みませんでした堪忍して下さい。(と伸掛からんとするが如き姿勢をなし、そのまゝ前に倒れ伏す。)

佛。どうなすつたんです、祇王姉さん。

祇王。(面をあげ)私や耻づかしうございます貴方のそのしほらしいお言葉を聞いては、今更ら顏を合はすのが面目なうございます。私は貴方の思つてゐるやうな料簡のよい女ぢやあ無かつたんです、そりや髪も剃りました、なんの彼のと云つて下さる人も多い中を、振切つてこんな住居をする所は、眞實の後世願みの豪い人に見えたかも知れません。しかし佛さん、今まで私のしたことを、貴方がお聞きなすつたら、定めし私に愛想が盡きてお仕舞ひなさるでせうよ。

佛。まあ、どうしたと云ふことなんでせう。

祇王。貴方のやうな清いお心では、とても推量の付く譯のものぢやありません。佛さん、どうぞ御佛壇をようく拜んで下さいまし。

祇女。姉さんあれを。

祇王。知つてるよ、懺悔には五逆の大罪も許されるとの事だわね。まだまだ驗しのないのが目付ものだわね。

佛。こちらでございますか。(佛壇の前に到る。)

祇王。佛さん、そこを能く御覽なさつて下さい。

佛。あれ、まあ小刀に……。

祇王。妙なものが刺してあるでせう。まあ聞いて下さい。（佛を座せしめ）その形代は貴方のですよ、貴方の身に凶事のあるやうにと、阿母さんにも妹にも隠して祈つてゐたのです。そしたら、まあ聞いて下さい、かあいさうに妹は、自分の身の後世も捨てゝ、私の爲めにやつぱり貴方を祈つてゐました、それがつい今分かつて、これからは二人して、心を合はせて呪はうと、恐ろしいことを相談して、一祈り祈つた矢先、貴方にも阿母さんにも、打明けるやうにもなつたんです。佛さん、私たちはこんなに惡い人なんです。これでは折角の、貴方の後生願ひのお望みも、定めて醒めてしまひませう！

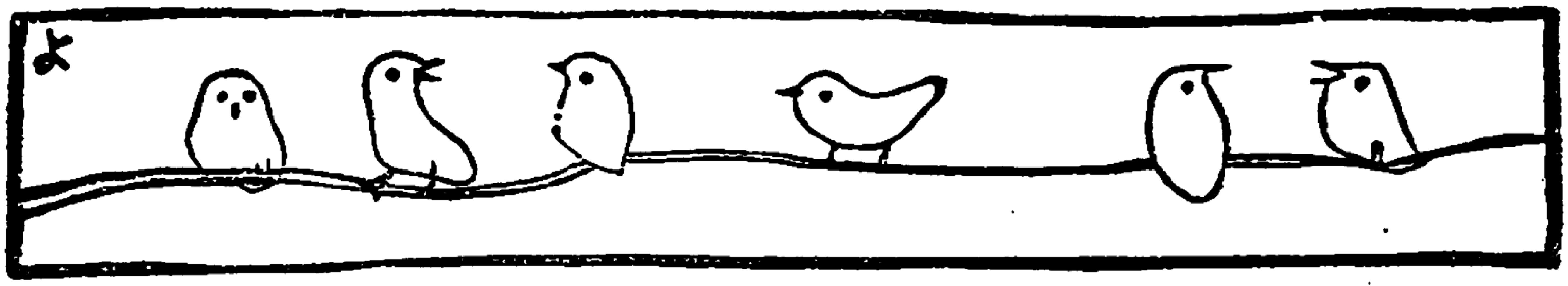


長崎大村の櫻花

しかしこれからは何處までも善人になります積り、これは全くのお蔭です、もしかお出でが無かつたら、やつぱり私たちは惡人で終るのでせうよ。

佛。まあ何んといふ有難いお話なんでございませう。そのお話を伺ひましては、なほさら後の世が頼もしくなりました。どうぞ私の髪の毛を切つて下さい、そして貴方のお弟子になすつて下さいまし。

祇女。佛姉さん、どうか私の罪をお許しなすつて下さいまし。そしてお仲間になつて戴いて



共々にこの世の苦患を免れるやうに勤めませうではございませんか。

佛。それは私の方からお願ひ申してゐることなんです。置かないと仰有つたつて、是非とも置いて戴きます。

母。私にはなんと云つて好いのだか、口の出しやうもありません。何んにしてもこの庵室に人が殖ゑると云ふのは、極樂往生の連れが出來て、阿彌陀樣の御機嫌にも應ふといふものでせう。

武士。（直垂、士烏帽子、太刀、素足、松明を持ち、輿を舁かせたる下人を率いて、佛御前の出と同じ場所より登場。門の外にて下人に）この家だらうな。

下人。外に人屋がないのですから、これに違ひはありますまい。

武士。まあ聞いて見よう。（と門を叩き）誰れか居ないかな。

祇女。（祇王と顔を見合せて、暫く躊躇せしが祇王が思ひ切つたる氣色を見せて椽に出で）はい、何方でございます。

武士。このあたりに祇王といふ女の家があるが知らないか。

祇女。祇王の住居はこれでございますが、何か御用でございますか。

武士。まあ、何しろ、こゝを明けろ。

祇女。女ばかりの家内でございますから、御用なら明日にして下さいまし。

武士。急ぎの用だからな、何んにしろ明けろ、明けなければ打壊して入るぞ。

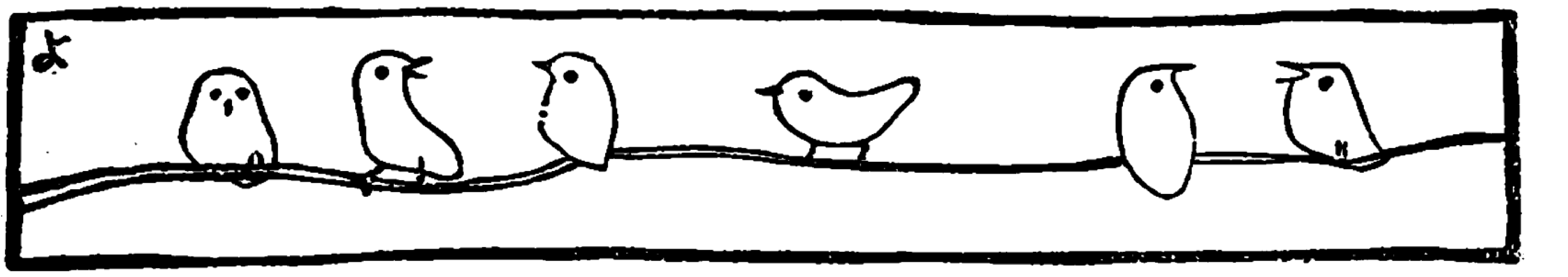
祇女。亂暴なことを仰有つて、一體まあ貴方は何方なのです。

武士。おれか、おれは西八條から來たのだ。

祇女。西八條ですつて、姉さん、西八條ですつてさ！

武士。驚くな、貴樣の所に、今夜佛御前が來て

ゐるだらう、それを迎へに來たのだ。
祇女。そんな人は來てはゐません。
武士。隱したつて駄目だ、明けろ、明けないと蹴放すぞ。よし、明けないのか、明けなけりや。（と扉を蹴る。）
祇王。祇女や、どうしたつて云ふの。
祇女。（大聲にて）佛御前といふ人が來てゐるから明けろといふのです。
祇王。明けたら好いぢやないか。（目もて佛を奧へと送り遣る。）
祇女。明けてもようござんすか。
祇王。いゝともさ。
祇女。いま明けますよ、靜かにして下さいまし、壞れてしまふ。（と庭に下りて扉を開く。）
武士。（庭に入り、祇女を見て）祇王とはお前か。
祇女。いいえ。
祇王。祇王は私です、伺ひますると佛御前といふ方を、探しにいらしつたやうですね。
武士。今夜貴樣の所に參つてをられるさうな、そこで迎への爲めに來たのだ。
祇王。それは御苦勞さまでした、しかしそんな方は來ませんよ。
武士。いゝや來た、暮れてからこの山道を、美くしい女が、たつた一人で確かに來たといふことは、大勢見知りのあることだ、隱立てをすると、爲めにならないぞ。
祇王。だつて、そんな人は來ないのですもの、またどういふ譯で、佛御前が私の內へ來たなんて仰有るのです、御存知がないかは知りませんが、あの人と私とは云はば敵同士なんです。どんなことがあつたつて、私んとこへ來るもんですか。
武士。なにがあるか知らないが、確かに來たといふのだ。よし、隱してるなら家探しをするぞ。



祇王。居もしないものを、家探しをするなんてあんまりですわ。

武士。愚圖愚圖いふな。(下人に)それ、奥の方を探せ。(と命ず。下人はどやどやと入りて、直ちに佛御前を引出だす。)それ見ろ、隱して置きながら、太い女だ。

佛。その方が惡いのぢやありません。

武士。何んにしろ、目付けるものが見付かりやそれで好いのだ。さあ、あの輿に乘つて、西八條へお歸んなさいまし、清盛公が大層の御機嫌です。

佛。定めて怒つていらつしやるでせうね。

武士。怒つてはいらつしやるが、なに、貴方のお顏さへ見りや、直ぐに收まつてしまふでせう。

佛。私は歸るのは厭ですわ。ねえ、後生ですから、目付からないと云つて、貴方は歸つて下さいな。

武士。そんなことをしたら、私の飯の食上げだ、そんな馬鹿なことが出來るもんですか、それどころか私の首が飛んでしまひまさあ。さあ早く輿に乘つて下さい。(と佛を引張る。)

佛。それぢやあ、どうしても歸らなくつてはいけないんですか、能うございます、私は歸りませう、歸りますから一寸放して下さい。(と座敷に入り、佛壇より小刀を刺したるまゝの形代を取りて袂に入れ、祇王の前に坐し)姉さん、お弟子になる積りでしたが、こんな障りが出來ましては、さうも參りかねました!御縁があつたらまた參ります。

祇王。(恐怖と驚駭との爲めに、なかば無意識のやうに)左樣でございますか。

武士。さあ輿へ早く乘つて下さい。本當に貴方のお蔭でひどい目に逢つた。

佛。それはお氣毒さまでした。(下りて輿に乘る。)



武士。尼にでもなつたら方の付かない所だつた(祇王に)おい、此後もあることだ、こんな時には、何より早く所の長にでも訴へる方がいゝ、とんだ迷惑を受けるぞ(獨りごとに)本當に頭に毛があつたので安心した。さあ行かう。(と外に出で、輿を舁かせて元の道へ去る。)

一同沈默。

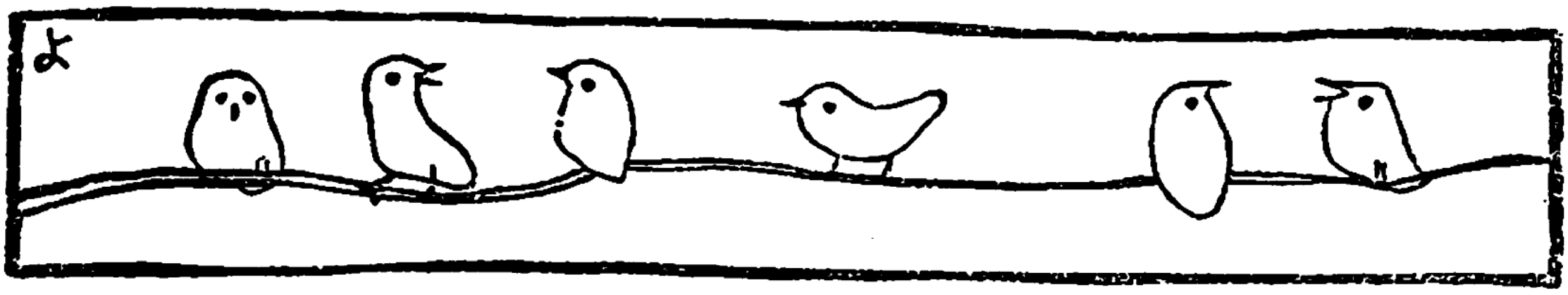
母。(やゝありて出づ)まるで嵐の後のやうだねえ。

祇女。來たと思つたら直ぐとまた塵の世へ行つてしまつた。後生といふものは、中々むつかしいものですねえ。

祇王。祇女や、どうしたのだらう。



祇女。かあいさうですわねえ。



祇王。何が……、誰れが……。
祇女。だつて佛さんさ、折角來たのに、連れて行かれて。
祇王。あの……食はせものが。
祇女。食はせものですつて？
祇王。食はせものだよ、一杯食はせやがつたな！ねえ、お前、考へて御覧な、決心して、うき世を捨てると云つた人が、あんな男が迎へに來たつて、直ぐと輿へ乘つて、お花見にでも行くやうに、勇み立つて行つてしまつたぢやないか。第一髮をその儘で來たのからして怪しかつた。あいつ私達が祈つてるのを嗅出して、その咀ひを止めやうと、猫を冠つて來たんだよ。そして私達に一杯食はして……、あの形代まで持つていつちまやがつて……。
祇女。まさか……。ねえ、阿母さん。
母。そりやさうだとも、第一祈るの、咀ふのと傍にゐる私でさへ、今の先き聞いたばかりだもの、あの人が知つてゐやう筈がないぢやないか。
祇女。姉さんと明かしあつたのさへ、やつと先刻でしたわねえ。
祇王。なあに咀はれる身だもの、何處かに驗が見えて、勘付いたのに違ひないんだ、そして猫撫聲をして、また私達を欺まくらかして、咀ひを解かせやがつたのだ。日數を重ねた大事の祈りを、とんだ邪魔をされちまつた、これも皆な私の馬鹿から起つたんだけれど、阿母さんだつて、お前だつて、傍に居ながら、ちつとは氣が付いてくれさうなものぢやないか。
祇女。だつてねえ！
祇王。なにがだつてねえだ、勇んで出て行つたのが何より證據だ、そんなことはどうでも好い、もうお仕舞だ、山上の驗者に聞いて置いた絕體の祈りをして、卽座に恨みを晴らして



遣らう、なまじ自分の身を庇ふから、驗も容易に見えないのだ。佛壇のを浚つていつたので、安心してゐるか知れないが、まだ形代は此方にあるのだ。（と立上がりて庭に出でんとす。）

祇女。姉さん、何をなさるの。

祇王。棚機に結付けた惡性女の形代を下すのだよ。

祇女。姉さん、およしなさいよ。（と止むるを）

祇王。（突放して庭に出で、棚機の竹を推倒して、短冊を拐りながら、かの形代を探す。笹の葉散りばふ。）

祇女。（祇王に）お止しなさいよ、ねえ、姉さん。（と止む）

祇王。ない！ ない！ ない、ない、ない、ない、ない！ 何時の間にか盜んで行つたな。（齒嚙をして憤る、手は笹に傷きて赤く染まる。）

祇女。姉さん、手が……眞赤に……

祇王。血だ、血だよ、さうだ、自分の血を流さなくつちや、人の血が流れるものか。形代なんぞが入るものか。（また座敷に躍りあがる。）

母。（呆れて立つたる儘にて、縁より二人の體を詠めをりたるが）まあ、お前は靜かにおしよ。（と止む）

祇王。（佛壇より撞木を出だし、手函を引繰返して、以前の白木の小箱より釘を出だし、その釘を手甲に立てんとす。）

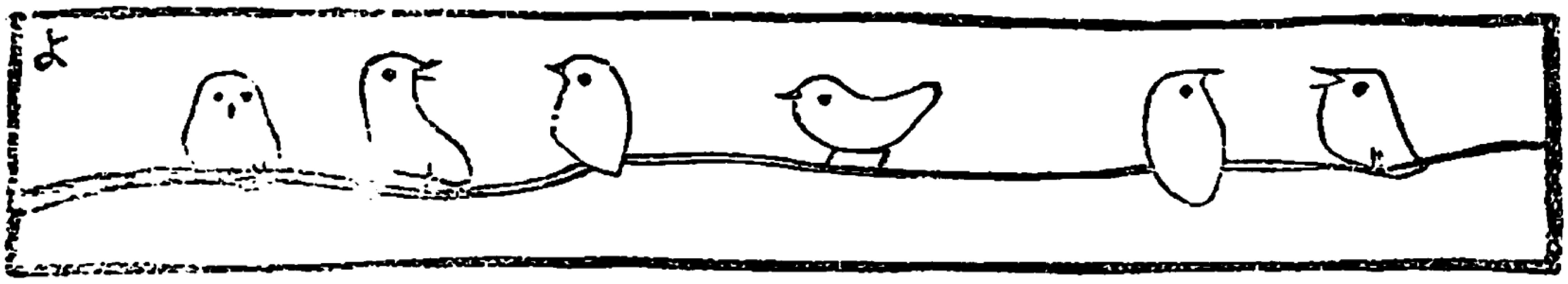
母。何をするのだい、亂暴な。

祇女。（これも縁より上がり、祇王に縋り付き）姉さん、まあ、どうしたといふのです。

祇王。自分が樂にしてゐたのでは、祈りの利目も薄い筈だ、自分で痛い目をする代りに、卽座にあいつを痛めてやるのだよ。

祇女。姉さんは私が形代を隱したのを怒つてるの。形代はこゝにあります、そ、そんなことをすると、後で身體に障りますよ。さあ、これでね。（と形代を出だす。）

祇王。（頭を振り）いや、いや、そんな優長なことがしてゐられるものかね、どうせ私達の



身體が、安穩でゐられるものかい！　あの性惡が歸ると直ぐ、氣の短い清盛樣を煽てこんで、私達をどうかするに違ひない、どうせ無い命なら、あるうち存分祈りに祈つて、人の恨みがどんなものだか、あの女に思ひ知らせてやる積りなのだ。

母。何んぼなんだつて、あの優しい人が。

祇王。なにが優しいものかね。今までの私達への仕向を御覽な！

沈默。

武士。（黑髮と小刀とを片手に持ち、慌ただしげにて出で、扉を蹴放して入り）おい、そこな尼たち、大變なことが出來た。

祇王。大變ですつて、大變だと！　あの女の身上に變はつたことでも出來たんですか。

武士。出來たとも！　これを見てくれ、輿の中でな、あの女め、髮を切つたわやい、切るならこゝにゐるうち切らいで。

祇女。（進み出で）あの佛さんが髮を切られたんですか。

武士。これぢや、それをお前たちに見せてくれとの事だ。こんな使ひに歩くおれぢやないがな、一つ相談があるのだ、あの髮はこの庵室にゐるうちに切つた體にしてくれ。おれが受取つたあとで、そんなことをされたとあつていはおれの身上に係はるからな、よいか、よか。

母。何方にしたつて同じ事です、宜しうござります。

武士。賴むぞ、後日に沙汰があつたら、佛御前が來ると直ぐに髮を切つたと云ふのだぞ、よいか！　この上にまた變はつたことでも出來ては困る、どれ後を追驅けよう。（と走りて出で）さうだ、これは置いて行くぞ。（と黑髮と小刀とを緣に置きて去る。）

祇王。（暫くにして緣に出で、武士の殘したる髮を見て）やつぱり……あの人は。

（幕）

ちぢれ毛くせ毛
毛はへらげあ
一大奇法

本法は女髪結師安部歌子女史の多年實地研究したる秘法にて是迄の使用者を悉く滿足せしめたる一大奇法なり照會者は往復はがきにて申込あれ

東京麹町區三番町六十七 小林濟世園

東京美人 夏の夜のうさはらし

一組五拾錢 送料共

特に今回は吉原大火繪はがき景品として差上ます

本所區林町一丁目八番地 良明堂

第四版

石川弘著

乙女の秘密日記

四六版 美装 全一冊 定價四拾五錢 密送料金六錢

手箱の裡に人には見せじと堅くも祕めおきし一令嬢が大膽なる青春期の秘密は或る動機により遂に茲に暴露せらるゝ

世の戀に煩悶せる青年熱烈なる處女は此悲慘の一少女を如何に觀する乎……

發兌 東京市京橋區山下町廿二 振替東京一四七一六番 清水書店

光榮ある專賣特許

毛生藥

はノーブル液を以て嚆矢とす發明者は多きを言はず唯毛髮に不思議の偉効ある事を保證す

定價大瓶壹圓小五拾錢（送料各貳錢書封八錢）

東京市東兩國横網町壹丁目十九番地 西森五友館 西森滝也

專賣特許

錆止發光油

諸金屬の錆を止め又磨きし物に用ふれば艶麗なる光澤を發する實に稀代の發明品也特別製小壜入拾錢郵税貳錢普通製鑵入貳拾五錢郵税四錢

經通丸

月々樂

調劑元

本劑は代々宗際の妙藥にて如何なる醫家の月經滯りし胃腸子宮等を痛めず安々と通じ輕症なるは其夜にあること請合也他藥を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價値を認めよ

定價廿五錢五十錢一圓

特製二圓但小包送を望まるゝ方は八錢を要す

東京市丸の内有樂町二ノ二 江戸屋

近頃の婦人問題

鳩山春子

近頃女子問題が勃興して居ることでありますが、序に男子問題をも勃興させたいものであります。女子ばかりを責めて、男子は何うでもよいと云ふのでは、甚だ不都合な話で、男子は上流の人でも、蓄妾をする、蓄妾せねば遊廓に行くとか、茶屋待合に遊ぶとか、社會の表面に立つ男子の行爲とも思はれぬやうなことが往々あるやうでありますが、それでは女子ばかり如何に氣を揉んでも詮ないことでありますから、女子を責めると同時に男子をも責めなければなりません。

なぜなれば、今日の日本婦人の幸福と云ふものは、全く僥倖的で、偶ま良縁あつて良き人と結婚し、よき家庭に入れば幸ひでありますが、不幸にして俗に謂ふ惡縁であつたら、それこそ生涯の不幸であります。又敎育なき卑しき醜業婦が一躍して權門家の令夫人となつて榮華を極め、敎育あり實力ある婦人が生涯頭角を顯はすことの出來ないやうな境涯に沈むといふやうなこともあります。故に婦人の幸福は良人に賴つて定まるのであります。それ故良縁であつたにしても、良人が如何なる理由で職をやめる場合がないとも限りませんから、いざと云ふ時の準備に、自活の出來るやうにしておかなければなりません。

* * * * *

若い時の苦勞は買つてもせよと云ひますが、全くこれは安樂の境に入るべき順路を敎へたものであります

大に苦痛をなめ、正直にその苦境にゐて、其苦痛に服從すると云ふことが、精神の修養になります。人間は種々な苦痛に服從し、種々な苦痛に堪へられるやうにならなければだめです。

私が學生時代に師範學校に居りました時ですが、丁度洋行する樣になつたので、其仕度などで四ヶ月ほど休校しましたところが、急に變じて行かない事になり再び學校に入つた時、皆と共に進まなければならない先生は只注入的に敎授して下さるから中々頭腦に入らない、それでも消燈になつてから、ソット起き夜具戸棚に入つて、行燈をともして其上に布をかけて其內へ顏を入れて勉强した當時の苦痛は普通ではなかつたのです。今と違つて英、漢、數、理に重きをおかれ、文學の方は一向にやらなかつたので、それ故只今でも理屈が好きでいけません。

＊　＊　＊　＊　＊

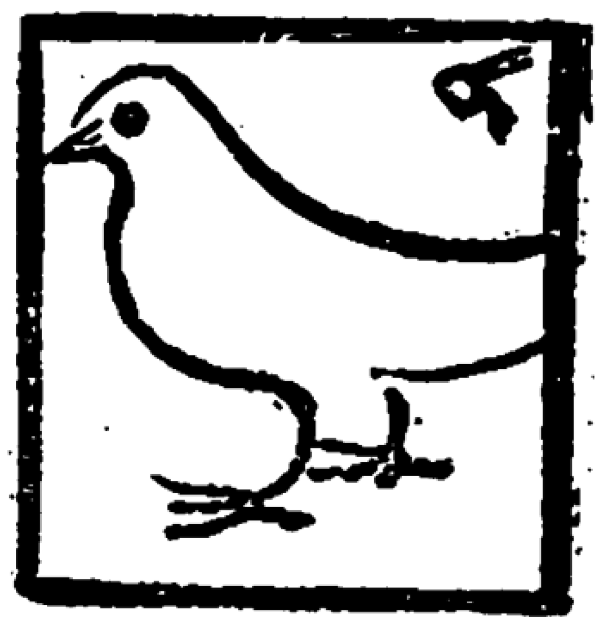
或人などは小說など讀むといけないと申されますが私は讀む方がよいと思ふ。人情を解するやうになれば差支はない、又、封建時代に大に尊重せられました女大學の中には、

婦人は別に主君なし、夫を主人と思ひ敬ひ愼みて、事ふ可し。總じて婦人の道は人に從ふにあり、夫の敎訓あらば其仰せに逆ふ可からず、疑はしき事は夫に問ひて、其下知に從ふ可し、女は夫を天とす、返す〴〵も夫に逆ひて天の罰を受く可からず。

と云ふ事があるが、これなども一度は讀んで見ても參考にはなりますが、併し何と云ふ言葉でせう、何と云ふ敎でせう、實に婦人を見る事、全く男子の奴隷としたのであります。

星移り物換り、今日は斯る思想は大に消滅したと云ふものゝ、なほ女子は絕對に男子に從ふ可きものとの思想があります。私は女子は男子に盲從するを以て女德と誤解しないやうに望みます。

凡て人は境遇と敎育とに由りて發展するものであるから、個人々々が善く發達すれば、自然國民性も一般に發達する事になります。女子は女子自ら保護するだけの決心がなければなりません、卽ち潔き品性を持するは勿論、健固なる意志と健固なる道義心とを持たれたいと思ひます。



母としての自覺

日向きむ子

諺にも男は頭なり、女は頭を動かす手なりと申しますが、洵に婦人は男子の手足となりて、男子の活動を助けねばなりません。それには何うしても柔和であつて、愛情があつて、賢良なる妻でなければなりません。いくら歐米の婦人がお轉婆であつても、妻としては思の外に優しいところがあるやうです。女子の天性は柔和にあります、柔能く剛を制すで、柔かい女子が、剛い男子を制して、初めて人類も國家も進歩します。柔かい女子が、剛堅な男子を眞似て、假令ば參政權を得やうとか、男子の職業に代らうとかしても、それは女子の天性に戻るものです。

それより女子には立派な、天性に應はしい仕事があります。古來、英雄豪傑は皆其母の感化に由つて、えらくなつたといふことは、多く傳記が證明して居ります。してみると、母としての女子の責任は、實に重く且大きいものです。子供が怠惰者となるのも、又身體の弱い者となるのも、殘忍な性質になるのも、清潔を愛する者となるのも、規律を守る者となるのも、或は不良少年となるのも、凡て皆之れ母の敎養の如何に由るのであります。

母たるものは、子供の將來を思つて、滿身の愛情を以て我を忘れ、子供の犧牲となつて、その養育に留意せねばなりません。此任務は甚だ困難であるだけ、男子よりも光榮のある仕事ではありませんか。社會も亦男子にして義務を遂行して行くものに對すると同樣に内に在つて其子女に義務を遂行して行く母に對して

も、多大の尊敬を拂ふのでせう。

男子をして、女子を尊敬せしめやうとするには、高尙に、優雅に、且賢良なる美德を具へることです、女子が其等の美德を具へてこそ、初めて男子から尊敬せられるのです。しかし彼のグリセルタ式に婦人の忍耐するといふことは、全然反對であります。長時間の夫の殘忍に對して、盲從して居るといふ事は、到底贊同の意を表すことが出來ません。

思ふに來るべき時代の勢力は、女子に委托されてゐると云つてもよろしいのです。されば子供を養育する上にも、愛情を以てすると同時に、又賢明なる人物に生し立てゝゆくといふことを忘れてはなりません。母たるものが、感化の力弱く、子供を只我儘者に育てあげ、利己一方の人物にしてしまふと、多年、其子に婚嫁して來る婦人の爲にも、憂ふべき災を殘します。それにも責任があるのですから、子供は善く育てなければなりません。

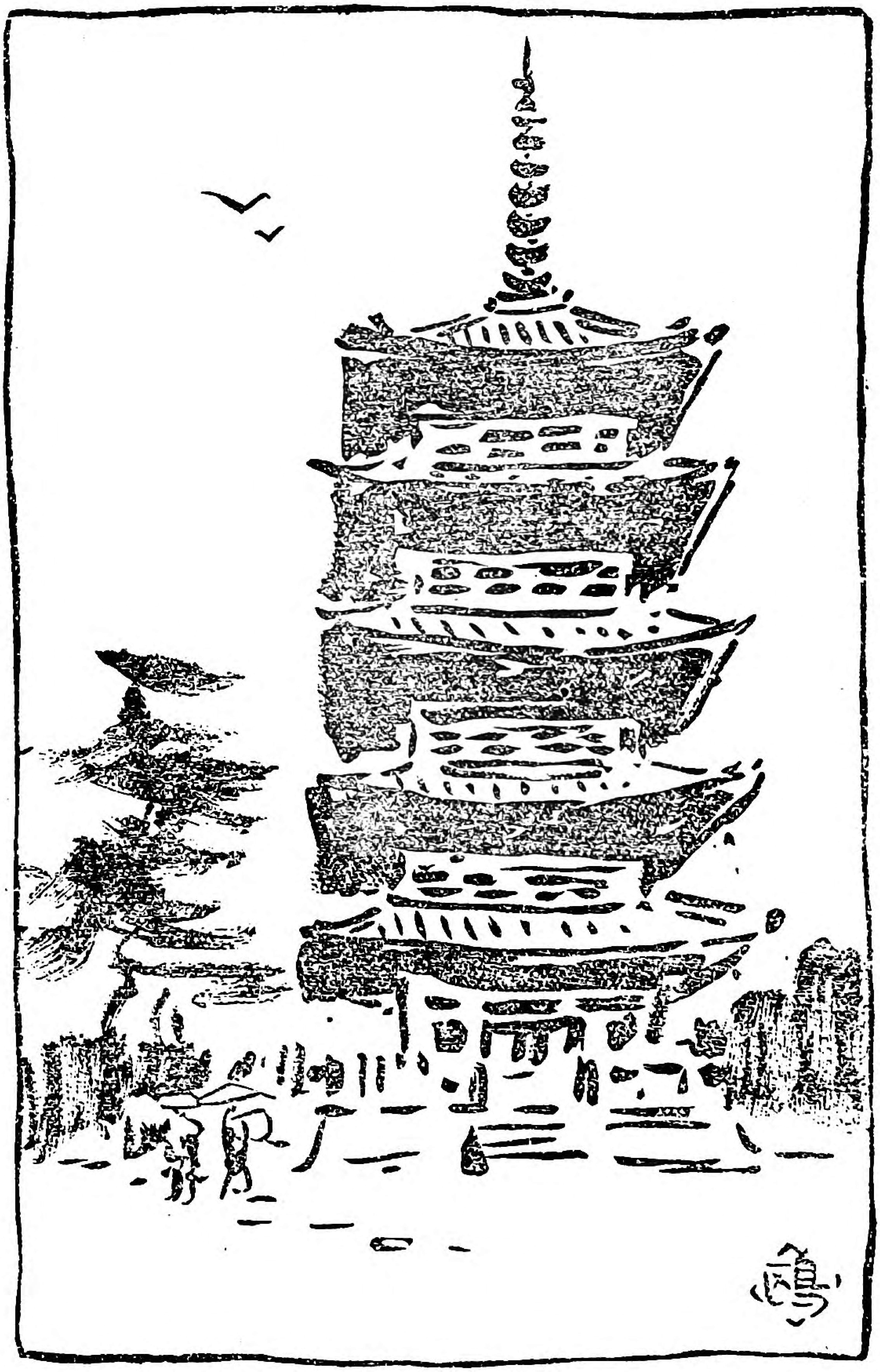
子供に働くべきことを敎へる場合が來ても、只遊ばして置くといふやうな母親もありますが、それでは宛で社會に不必要な人物を養育して居るので、母そのものゝ資格もなければ、無論責任も持つてゐる婦人とは云へません。

子供を育てるのも嚴に過ぐれば萎縮して了ひますし寬に流れると增長しやすく、その中庸を取つて育てるのがむづかしいのであります。子供の性質を見分けてそれに適應した育て方をしなければなりませんが、何れにしても、世の中に出て、奮戰苦闘しても疲れないやうに、困難に遭遇しても打勝つだけの意志を養つてやらねばなりません。

母といふことを自覺すれば、今の婦人方でも、決して張合のない世の中ではないと思ひます、母の仕事は尤も高尙な、尤も立派な仕事です。今後の婦人は完全な母となる爲に、學問もし、讀書もし、又世の中も觀ねばなりません。母といふ觀念を抱いて居れば、男子の父と云ふ觀念と同じく、婦人の事業の偉大なることを思はずには居られません。

旅より

（讃岐善通寺の塔）



大下藤次郎



屏風と日本畫

澤村胡夷

日本に現存してゐる屏風の中で最も古いのは、正倉院御物として大切に保存せらるゝ樹下美人圖屏風以下のものであるが、是等は少くも今より千百年以前のものである。一體その頃の屏風の畫には種々のものが描かれてゐたので、當時の記錄なる東大寺獻物帳に依つても、山水は勿論のこと、宮殿の圖だとか、遊宴の圖など、十數種の圖題を發見する事が出來るのである。現存の樹下美人圖などは六枚折一隻であるが、一枚毎に婦女一人を描いて何れも樹下に起ち又は岩石上に踞してゐる圖である。然しながら、此屏風畫は純粹な繪畫と云ふよりも寧ろ工藝品的なる性質を帶びてゐる。何故かと云へば元來この圖の美女の頭髮や衣服などには鳥毛を押して裝飾としてゐたので、今は全然剝落してはゐるが、其痕迹は殘つてゐるのである。それで之を鳥毛立女屏風とも稱へてゐる。然し是は工藝的の性質を帶びてはゐるが、また下繪として之を繪畫の方面から見て價値のある事は無論である。その他正倉院御物として殘つてゐるもので有名なものは鴨毛屏風、夾纈、﨟纈屏風などであらう。是等は繪畫とは較異つてゐるけれども強て云へば夾纈屏風や﨟纈屏風には種々の模様などがあつて、動物植物其他雲などが現はされてゐるから、多少參考とはなるけれども、鴨毛屏風は書を鳥の羽毛で現はしたので全然畫とは異つた方面から見るべきものである。

屏風といふものを其發達の上から見れば、今日云ふ所の壁、襖間などに起原があるのだらうと考へられるが、衝立は屏風の前身と見ても差閊あるまいと思ふ。即ち折疊んで持運びする事の出來る壁である、襖間障子である、また衝立の一種である、而して是を飾る爲めにその面に詩歌を書き繪畫を作製せしめたものである。今日吾々の見なれた屏風は普通に紙の蝶番で六枚なり、四枚なり、二枚なりを續いで、折疊みが出來るやに作られてゐる。此種の屏風は我國で創意せられたものである。然し屏風そのものは支那から渡來したものたる事は爭ふの餘地が無い。唯其製法が現今のものと本來支那製のものとは相異があつたのである。かの獻物帳には唐の作として畫屏風が少數ながら指摘せられてゐる、また百濟製のものも一つ記されてゐる。是等に依るも屏風が支那傳來のものである事は疑ひ難いのである。唯忘れてはならぬ事は是等支那製の屏風は、支那人の所謂硬屏風であつて、現今普通に吾々が見なれてゐる如く自由に折疊みが出來たゝ又は紙の蝶番を以て接續せられてゐるもの即ち支那人の所謂軟屏風ではなかつた事是である。

正倉院の御物の屏風の現存のものは支那風の製作であつて、我國に於ても其初は疑もなく支那の作法に學んだのである。即ち屏風の一枚一枚を續ぐのに幾つかの穴をその端にあけて之に革などを貫して、縛つては接續させたものだから、自由自在に折疊みの出來る今日の屏風とは自らその趣も異つてゐたのだ。とにかくかゝる支那風なる屏風が次第に日本に於て工夫せられ改良せられた結果、所謂軟屏風、即ち吾人が日常目擊するが如き屏風が發明せられたのである、而してこれが後に支那へ逆に輸入せられたのである。

さてこの奈良朝頃に於ては、屏風といふものは、必ずその時分の生活上なくてはならぬ程のものであつたのか何かは疑問だ。或は之が無くとも事を缺なかつたらしく想はれるのだ。で、是が平安朝に入るに至つて次第に必要缺ぐべからざるものとなつて來た。其主要な原因は住宅建築の變遷にあると考へてよい。即ち住宅

の構造上屏風が次第に實際上必要となつて來たのである。同時に朝廷などの儀式に於ても屏風は必ず無くてはならぬものとなり、また貴族なども一種の必要なる調度器具の一つと考ふるに至つた。是屏風が其製作の上に次第に進歩をなし、また屏風が畫といふものに刺戟を與へる素因をなしたものである。

平安時代に入つて屏風が次第に必要となつて來た事は物語記錄などに種々の名稱の屏風が記載せられてゐる事に依ても之を覗ふ事が出來るのである。即ち月次屏風、漢書屏風、地獄變屏風、大宋屏風、坤元錄屏風、催馬樂繪屏風、大嘗會屏風、山水屏風等の名が見えてゐる。然ながら是等の有名な屏風の多くは革製の蝶番が用ひられ、所謂支那風のものであつた事が疑ひ難き事實である。是等の屏風は概して朝廷の儀式などに用られたものであるが、日常に用ひられた屏風などは必ずしも支那風のものではなかつたのである。即ち貴族などが用ひてゐたものも概ね今日見るが如きものであつたのだが、唯儀式に用ひられたものなどは古い支那風の製法を忠實に保存してゐたのであらう。元來屏風といふものは器具調度の中でも餘程かさ張つたものであるのと、家屋の內部に置かるゝものだから、家屋の災火とその運命を共にするものたることを免がれない。夫故當時用ひられてゐた屏風で、今日に殘つてゐるものは殆ど無いと云つても差閊へなからう。然し全然ないのかと云ふに必ずしもさうではない。僅に古き寺院の中に保存せられてゐる。即ちそれは有名な山水屏風と稱へられてゐるものゝ一つである。

こゝに謂ふ所の山水屏風はさきに指摘した山水屏風とは異ふのである。さきのは朝廷のある儀式の時に用ひられたのだが、これは眞言宗の灌頂を行ふ時に用ひられたものである。密敎に於て灌頂を行ふには四大海水と境內の一切の川の水とをとつて之を灌ぎ且また境內の地圖を作るべき事が經文にある。是に依て此儀式の時には眞言宗に於ては山水屏風と云ふものが作られたので、此宗の大きな寺院には必ず持てゐたものらしい。この中のある物が現存してゐるのである。此屏風

は東寺、神護寺、醍醐寺其他高野山にもある。就中最も古いものと考へらるゝのは東寺のものである。これは平安時代のものであることは爭ひ難いので、畫の筆者は確に何人であるかは明かでないともかくこの屏風が現存のものゝ中で當時のものとして有名なる物だ。降つて鎌倉時代となれば益益その需要もあつたものらしく、種々の屏風の事が記錄にあるのみならずかの現存の山水屏風の中には此時代のものと考へらるゝものもある。神護



伊豫高濱の四十島　大下藤次郎

寺の山水屏風の如きは即ち是である。その他、東寺には十二天の屏風といふものがあるが、是なども此時代のものだ。宅摩勝賀の筆となつてゐる。それから足利時代となれば、屏風も極て多く從つて其遺品も少くないので、一々之を擧るのは煩はしいが、其圖題なども極めて豐富となつて來た。繪卷物を屏風に寫したり、支那から輸入せられた題目を屏風にかく事などが勿論のことである、然し概して言へば、屏風は平安時代に非常な勢ひで發展したので、之を繼承して、是に足

利時代の畫を描かしめたものである。近代に至つては屏風と畫家とが一種の關係を保ちながら進んできてゐるのだが、先づ足利時代に起つた狩野派が近世に入つて一大成功を告たのは大なる畫面とこれに伴ふべき畫といふ問題であらうと思ふ。

畫家の手腕を試す大なる畫面といふのは壁、天井、衝立、襖間の類の外にはこの屏風である。勿論、寺院などにある曼荼羅、その他、聖衆來迎圖などの掛物になつてゐるものにも大畫面のものはあるけれ共、是等は多くの畫家が手腕を示すほど需用のあるものではなかつた。殊に襖間や屏風に比較すればその普汎性を缺いてゐた事は明白である。ともかくかの狩野派の名家例ば元信にしろ、永徳にしろ、山樂にしろ、其他探幽にしても大畫面に對しては驚くべき大膽と工夫とを示してゐた。卽ち彼等は大畫面としての屏風に畫く事の技術を充分修得してゐたものである。此點に於て屏風の畫は狩野派作家にとつて光明ある一方面をなしてゐたのだ。また光悦光琳の畫風も屏風と非常に親密な關係を保てゐた。光琳などは特に大畫面と色彩といふ方面から大切な關係を屏風と結んでゐる。かう云ふ方面から屏風を見ると近代の繪畫と屏風との面白い關係が分るし、近時の官設展覽會と屏風畫といふ事も日本畫と畫面といふ方面から一種の觀察を下すことが出來るであらう。かの蕪村が一度絖地の大屏風に畢生の腕を振てみたくて仕樣がなかつた、然し之を購ふの資力がなかつたので富籤に依て萬一を僥倖せんとした事がある。門人が之を知て屏風講を組織して彼に思ふさまなる畫をかゝしめたといふが、此時の屏風が今に殘つてゐる。其他畫家が屏風に大作を殘さんとしたことゝ屏風が彼等の爲に都合よき畫面となつた例は決して乏しくないのである。卽ち屏風は日本畫に對して實用的の方面から絶えず同情ある刺戟を與へてゐたもの、また現に與へつゝあるものと考へてよからうかと思ふ。



危險とは何ぞや

▲新聞記者は新聞記者的に世の中を觀る、敎育家は敎育家的に世の中を觀る、文學者は文學者的に世の中を觀る。此頃或る新聞紙上に於て、一記者が現今の婦人雜誌をかたはじからひやかしたからとて何の不思議もない。

▲六號活字が暗黑であるか、五號活字が潔白であるか、一號活字が誇張であるか、我等は然う云ふ智識を具へて居らぬ。只、現今の婦人雜誌を以て、現代の女學生を不良に誘惑するかの如く云ふのは、之れ亦記者の所謂六號活字式ひやかしたるに止まる。

▲今の婦人雜誌を見れば、現代の女學生の內部の生命を窺ふことが出來ると云ふのは一面の眞理である、少くもわが『女子文壇』に於ては其事實がある。然しながら、それが何故に危險であるか、何故に墮落であるかと云ふ理由は到底見出すことは出來ない。

▲墮落とか、危險とか云ふことは、個人〳〵の人格問題であつて、雜誌の知つたことでない、何萬といふ雜誌の讀者を一人も餘さず善良に感化すると云ふことは無論出來ない相談で、全體に時代の傾向を見て、好い方に傾けるやうにするのが雜誌其ものの責任である。

▲斯う云ふ自由な時代には、或る程度までの自由を許しても決して危險でない、男子の世界と比較すれば、婦人の世界はまだ〳〵何んなに不自由か知れない、其上、恐るべき生活の壓迫と社會の制裁とは、決して社會生活の上に於て個人の或る度以上の放縱自由を許さない。

▲婦人の讀物として、一等刺戟を與へるものは新聞紙であらう、此は事實を傳へるものだから刺戟が實際的だ、次には雜誌であり、書物である。人間は一つの食物で活きておられない如く、あまいものも、からいものも食べるので好いので、身體を壞せば其人自分がつらいめをするだけのことである。

▲危險と云ふものは何に存在してゐるか知れない、危險は危險の存在してゐる處に存在すると云ふの外はない、今は人類全體が危險なんだらう、皆樣御用心といふ外はない。

▲若し現代の女學生に誤れる思想がありとすれば、深く其根柢に探り入つてみねば分るものではない。多くの中には誤つた思想を抱いてゐるものもある、併しそれは極く數は少ない、多くは無事太平、世間で心配するやうな危險も、暗黑もない。女性といふ性其ものに對する心配なら人間創始時代より、性に伴つて來た問題で、そんな單純なことを彼此云つてゐるほど、現今の時代は後れて居らぬ。

▲寧ろ危險と云へば、若い婦人よりも大人であらう、彼等は表面にこそ立派な口をきいてゐるが、個人としては放縱にして荒み切つてゐる人が多い、それを今の若い人達に眞似させやうとするのは危險ではなからうか。

▲何れにしても、淺薄なる婦人論の橫行は、いくら誇張されてあつても、世の好奇心を挑發するくらゐなもので、さう人を動かさない。

▲淺薄なら淺薄で、廣く見てもらひたい、凡今の女學生乃至婦人一般の傾向を詳論しやう思はゞ、思想の方面と、物質の方面と兩方から見ねばならぬ。思想の方面には雜誌其他の讀も關係はあるが、物質の方面から見る場合には他の實際的具體的の直ちに眼に觸れ、耳に入る處のものに、誘惑も危險も多からう、然して無智にして、淺薄なる大多數の人には其方面の影響の多いことを知らなければならぬ。（一記者）

敎句　どこかしら足らぬ女の智惠袋

女庭訓

それがほんとう　萬事主の差圖請る女房
女子のたしなみ　貞操たゞしき女房
かんしやく　子に行儀を敎へる女房
繁昌のもと　家業の助けになる女房
御きとうになるよ　手まめに拭掃除する女房
却つて人がほめる　なり振にかまはぬ女房
ちりもつもれば山　小遣迄儉約する女房
家内和順　主の心にさからはぬ女房

子孫のため　善をすゝむる女房
こゝろの和らぐ　主の立腹をなだむる女房
わが子のため　先妻の子を大事にする女房
すてゝおしまひ　絲道をわすれる女房
近く他人の　長家つきあひの好い女房
かけ色をみて　人をそらさぬ女房
三口を忘れず　嫁來た當座忘れぬ女房
おしくれぬ　しとやかな女房
我身のため　小姑をいたはる女房
主人のなさけ　下女に仕事敎へる女房
これが一節　火の元大切にする女房
少しはそく多　小遣帳をよく附ける女房

當正月元日より來る十二月大晦日迄家内つひえはぶきけんやく第一ヽ仕奉公人をいたわり召仕可申候若心得違仕御家風相背候得ば何時成共仲人方方へ引取異見差加へ萬一相用不申候節はりゑん相成候共其節一言之儀申間敷候然る上は何方より相極り候共差構一切無之候仍如件

いゝかげんにしな　吝氣ふかい女房
第一のきず　針仕事できぬ女房
貧乏神がなめるよ　晝迄朝飯の跡かたづけぬ女房
きみのわるい　汚た枕紙を取かへぬ女房
どこまでいきがる　流行物を欲しがる女房
こまたんやうに　小鍋立の好きな女房
又けんくわ久しい物だ　元の島田にしてたせといふ女房
ばちがあたる　寺參りと云て芝居行く女房

外聞わるい　おれがといふ女房
知つたふり　さしで口する女房
其くせ遊んでゐる　汚物をためて置く女房
自分のはおち　ぼろをさげさせる女房
きにゝくい　口こたへする女房
ろくでもなし　髮のむづかしい女房
よいやうでわるし　我亭主をほめる女房
おつにおもふよ　よその亭主をほめる女房
親の威光が薄い　我子をがきとしかる女房
もつたいない　洗湯で湯をたんとつかふ女房
大それた　仲人度々せわやかせる女房
ゆみづのやうに　錢つかひのあらい女房

少々氣の毒　此番附を見て迷惑がる女房

機嫌のよい時亭主の不身持いけんする女房
それでもわかる口かずをきかぬ女房
たしなみかくごのいゝ女房
口先のとゞくあいそうのいゝ女房
ばんじとゞく手ばしつこい女房
後になるほど勘辨つよい女房
めがあく子供に手習させる女房
德をつむ子供に學問致へる女房
一生の富子供に算をしへる女房
ほどよい客をそらさぬ女房
我みのため後生をねがふ女房
けたかい手跡美事な女房
見よしすなほなる女房
それでちやうどうち氣な女房

すなは無理なこといはぬ女房
大とく雑巾をさしてつかふ女房
ほどこし手の内を出す女房
わがことおもひ小僧の面倒を見る女房
まめでよし子供に髪を結てやる女房
めうりぼんをついできる女房
成長して子供をやさしくする女房
ふんをかへすかしこい錢勘定の早い女房
女のやくせんたくする女房
たしなみ身きれいな女房
そのみのため物の命をとらぬ女房
こまかに火を能くいけておく女房
きとうになる竈をきれいにする女房
みよりよー飯をそまつにせぬ女房
へらない油をたんとつぐ女房
ようじん家内を見まはる女房

子をもふくる女房　　佛事をいとなむ女房　　禮義を守る女房

家内を能守る女房　　姑に孝行の女房

子なき女房　　義理ある子を邪見にせぬ女房　　亭主を尻に敷く女房

自分はどれほど亭主をそしる女房
しまひはべちやくちやしやべる女房
ばかばかしい役者ひいきでけんくわする女房
みともないおてんばな女房
げすばるよ亭主の名をさんづけに呼ぶ女房
おだてられる大あねいといはれる女房
ぶらぶらして亭主に飯をたかせる女房
こゝともいはれぬ子をだしに出あるく女房
ものくさい糠みそを箸でつまむ女房
猫はわるしよせへ行きたがる女房
隣でわらふ調子はづれ大聲する女房
用があるのに内にかまはず出ずきな女房
わがまゝ人づかひのわるい女房
大それた朝寢でたばこのむ女房

きゝぐるしいけんどんな女房
みのほどをしれぜいたくを好む女房
心得違ひ我里方をほめる女房
いなか者まるだしぞんざいな女房
まちがひのたね夜あるきをする女房
ぶしやう無筆の女房
きざきざ意氣がつてゐる女房
はやくなにせじやうのこわい女房
つんぼでもなし返事のきらひな女房
みともなし子供どうしの喧嘩に出る女房
けんのん酒の上のわるい女房
だれのため縮緬の前掛しめる女房
やつかいきすぎな女房
きをつけよそゝつかしい女房
心わからぬこんじやうのわるい女房
どこかしら人のみなりになんくせつける女房

此番附は故御歌所寄人中村秋香氏が十歳の時何れよりか得て、自ら手寫し置かれたるものを、令息中村文學士より記者の拜借したるものなり。手寫されたるものは少年の筆とも思はれぬほど、みごとなるものにて、恰も相撲番附の如く、大關關脇等の文字もありしが、今印刷の都合にて削り去れり。要するに婦人方の好訓戒なれば特に此に揭ぐることゝせり。なほ文意の不明なる處もあれども其儘に置けり(記者しるす)

正直に語る男子の見立

ほとゝぎす

◎若い男子のわがまゝ

私は迚も誰が好きの彼が嫌ひのといふ資格はない、けれども良人として如何なる人が好いかと問はれゝば虚飾も偽りもなく人生を味つてゐる、眞面目な人なら結構ですと答へる。私は多くを望まない、眞面目な男らしい人ならば宜いと思つてゐる。

世間でいふ『眞面目な人』といふものは、お酒も煙草も喫まないやうな勤勉家をいふ、それから大方の若い女のいふ男らしい人とは、風貌の秀でた活潑な人である。

私のいふのは然うぢやない、苦しいと云つて耽溺せず、自暴自棄にならぬ、眞實に人生の味を噛み盡しつつ、戰つて行く人である。

ツルゲネーフの『浮草』に、ルーディンといふ男がある、才子で雄辯家で進んだ思想を持つてゐる。そして計畫澤山で、それを少しも實行しない。

此の頃の若い男の方で、其ルーディンを氣取る方が隨分あつて、『僕もルーディンだ、僕もルーディンだ』と猫も酌子も云ひたがる。

何があんなルーディンなんか宜いのでせう。熱心に計畫許り組立て吹聽してゐるから、何時か其事業が成るのだらうと思つてゐると、何時になつてもそんな氣振は見えぬ、見えないのみか其計畫の爲に盡力するでも何でもない、何時の間にか忘れ果てゝ昨日の煙り位にしか覺えてゐない。新しい思潮に觸れた今の若い青年は、何年か前の古い露西亞の青年を氣取つて、得々としてゐる處なんか、餘り感心したものではないと、何時も私は思つてゐる。

一夜作りの塔見たいなもの許り、建てゝは壞し、建てゝは崩しゝてるやうな人は大嫌ひ。それなら寧ろ『父と子』のバッサロフ見たいな人の方に、絶對な權威

を認める。
あの小説を讀んだ時——無論語學の素養がないから、飜譯物を見たのです——私が、もしか彼のバサロフに戀したらどうであらうと、いふやうな詰らぬ事を考へて見たら、何だか情ないやうな悲しい思がした。

▲女は音樂と色彩の道具

女でさへあれば誰でも好い、女は音樂だ色彩だ歡樂の道具だ！と云つたやうな調子の、ある一派の詩人や文學者の言を聞くと、私は胸がむら〳〵として來る。けれどもそれが事實なら怒る事は出來ない。眞實女といふものは詰らないものだらうか、少くとも自分だけは、彼等の玩弄物になりたくないとやうな、反抗心も起つてくる。
美しい衣を着て美しい顔をして美しい聲をしてと、百人が百人の女が希ひ願つてゐるではないか、そして嬉々として男子達の要求を容れやうとしてゐるではないか、と思ふとそれは眞實に爭はれない事實である。
私の知つてゐるお孃さんに、一人の許嫁があつて、其人は理學士で非常に高い人格の、風采の優れた、性質と云へば竹を割つたやうな人である、けれどもお孃さんは其人を嫌つた。嫌つたといふのではないが、其お孃さんの理想とするハズは、外交官と海軍の軍人である、唯僅にその故を以て理學士と結婚する氣になれないのであつた。其のお孃さんの胸には丁度、金色夜叉の宮さんのやうな、心理作用があつて、御當人も大變に煩悶してゐる。
其令孃の前途は知らない、けれども今の女學生連の理想の生涯は、餘りに低い卑しいものではなからうかと思つた。
然うした理想の低い淺薄な令孃達に取入らうとしてゐる、氣障な男もよく見かける事である。

▲自惚の強いのに驚く

多少の自覺を持つた、所謂現代的青年程凄いものはない、其新時代の思潮に壓され〳〵て來た人々は、何事にも沒頭し得ない、その代り目にとまる凡てのものを、自分の幸福の犧牲にしないでは止まない。譬へば其處に美しい花が咲いてゐる、それを摘み取れば木は枯れて了ふといふ、けれどもそんな事に頓着する人々ではない、摘んで見て自分の目に倦きが來れば、躊躇なく棄てゝ了ふ。草木の花は早晩枯るゝべきものだか

ら、餘り罪にはならぬとして、彼等は物いふ花にも同樣である。

そして理窟を付ける事が非常に巧い、要するに彼等は、自分の寂しさを慰め得る資格のある女なら誰でも宜いのであるから、彼等の理論に感服させられたり、甘言にほだされたりして、尊き生涯を誤られざらん事を、若い婦人達に私は望む。

然ういへば、女にも然ういふ利己主義な女が居る、と男子側から怒鳴られるであらう。それは女にもある男子を飜弄して得意になつてゐる女も、世の中には多くある、けれどもそれは女自らの弱い爲である、手管でなければ世の中が渡れぬとか、又は自分の人格の弱い爲に、自暴自棄になつたり、知らず〳〵止むを得ないが故に然ういふ態度になるとか、立ち入つて見れば可成同情すべき節々があると思ふ。女は男子とどう爭つて見ても、弱いのは生理的であるから、甲斐もない事である。

そして男子といふものは、女よりも自惚れの強い事は、驚くべきである。今の若い男性は殊更に激しい。今の社會の狀態が、女を弱くせしめ、男子を自惚れさせたのかも知れない、共に罪は社會にある。小理窟いふのではなかつたのでしたつけねえ。

男子の方と交際すれば――頭腦の固つた人か、一技一能に秀でた人――自然智識も博くなるし、聞く處見る處多少の利益を得る場合も隨分ある。狹い量見の女達に混じて、小い見解から人の批評をしたり、感情の角突きひあをして、泣いたり笑つたりしてゐるよりか遙かに得る處も多く、女といふ立場から退いて、女の缺點を冷靜に知る事も出來る。然しそれは一得一失、實はその利益にも換へ難い危險な事が少くないのである。

某時はフト斯んな事が頭腦に湧き上る事がある、既婚者と未婚者を問はずして、多くの男性が集つてゐるとする、此の中で若し自分の戀人としたらどの人が宜からう、良人としては誰が好いかと、無意識に考へる事がある、勿論戀人と良人とは條件が違ふから、別々に選擇して見る、けれども長し短しで適當な人がなかつたりする。

あ、こんな事を考へて私は何といふ大膽た女であらうと、氣付いては直ぐに打ち消して了ふけれど、誰にでも斯ういふ事を考へる時があらう、恥かしいから口にしないまでゝあると思ふ。

▲戀や愛は然う輕々しいものでない

配偶の選擇といふ譯でもないが、ある人の紹介によつて男子の方と交際した。其の方は眞面目な正直な人でもあるからだけれども、其結果を私は滑稽なものだと感じた。

其の人と私とは随分無邪氣に親密に交際してゐた、其の間は相手のどういふ人であるかといふ事を、能くも知らぬ時であつた。

二ヶ月三ヶ月經つ中に、私は案外失望して、知らず知らず其人から足を遠のかすやうになつた。すると又々案外、其の男の方は烈火のやうになつて、『僕は彼の女に欺かれた、彼の女は淫婦だ青年を飜弄する。』と行く先々を吹聽してゐるのであつた。是は又餘りに意外ではないか。

青年男子との交際は、先方の歷史を知り性格を知るに、大抵終つてゐる。先の思想や人格を知るまでに、自惚の強い男といふものは、此方が未だ先の凡てを知らない中に、淺ましくも輕卒にも、既にく戀に陷入る許りか、女の方でも自分に對して愛を傾けてゐると早呑み込みをして了ふのである。

何故か理窟は措置いて、そんな輕卒に戀するやうな男の心には、輝きも光りもないやうに思はれる。その人は自分に許りでなく、誰にでも戀し得る人なるが故であらう。それを知つて此方が失望して足をぬく時は今迄僕を愛してゐたのに、と思ふから怒りもし恨みもするのである、甚迷惑な次第であると思ふ。

戀や愛は然う輕々しく出來得る者ではない。風采や身分にばかり戀するのではなくて、先の思想や人格を知つた上で初めて慕ひもし、敬愛もするのである。それを知る迄には、半年なり一年なりの期日を要するではないか。

それが今の若い青年の大方、女が戀といふ登り詰めた處迄到達してゐない中に、友人としてあるべからざる態度を見せたりする。女は失望して『さよなら』をきめると、憤慨したり欺かれたと思つたりして終ふ。

此方が餘りに理想に憧憬れてゐるのかも知れないけれど、男の人の人格も低いからである。それに皮肉を云つたり、厭味を並べたりするやうな男は大嫌ひ、飾りも虛僞もかなぐり棄てゝ、謙讓して世の中を見た人にこそ、眞の婦人も解るのであらう。

『女といふものは詰らぬものだ！』といふ男の聲は、

絶望か、嘲笑かわからない。『女なんて、高くとまつても仕方がないぢやないか、玩具になれば潰しの利く事は非常なものだが……。』と今の男子の老若を問はず、皆然う考へてゐる。

愛されるよりも尊ばれたい！と私達は願つてゐる、尊ばれぬ迄も玩具にはなりたくない。愛す、といふ事をすら玩弄ぐらゐな事にしか考へてゐないのである。

私の知つてゐる青年に、嚴格な家庭に育つて婦人といふものは、母上に姉上に女中位しか接した事のない人があつた。私といふ唯一人の異性の友に對しては、滑稽な程に敬意を表してゐた。それで學校を卒業して社會に接すると、其の人の婦人に對する態度から觀念から、忽ち一變したのであつた。最初のやうな眞面目な調子は、書生風が紳士風に變つて、角がとれてゆくと共に、何時の間にか消えてゆくのであつた。某時、『婦人といふ者が了解出來ますか』と私が尋ねると、『え、幾分か僕も世馴れましたよ』。とさも輕侮したやうに彼は答へた。

其の變り行く初心な青年の態度を私は何だか殘り惜しいやうな、悲しいやうな心持で、見詰めて居たのであつた。彼は婦人といふものに絶望したのである。彼も幻影の美しかりし事を思ひ返しては、悲しいであらう。

理想の高かつた其純潔な青年をして、失望させたものは誰であつたか、私は心から恨めしく思つた。斷つて置く、其青年は失戀したのでも何でもない、女の全部を看破するだけの、觀察をしたのである。

不束ながら若い今の婦人達にお願ひする。舞踏會や自働車や、馬車や、ゴールドチエーンや、物質文明が産んだ虚飾にのみあこがれ給ふ勿れ。

外交官が豪いのでは決してない、外交官でも職工でも宜いから、其の人の人格を慕つて、夫とせられん事を望む。

うめくさ

○吾等の生くる途は自ら別に存すといふことは、始終考へて居らねばならぬ。

○危險とは何ぞや、暗黒とは何ぞや。

○所謂婦人問題とは、囚はれたる人間が、囚はれたる人間を征伐せんとするものなり。

○吾等の謂ふ解放とは公明潔白誠實を意味す。

人間の生命と食物

澤田順次郎

（上）人間の生命と食物

食物は人體の基礎にして、生命は食物の變形なりと謂ふて誣言でありません。彼の幼き小兒の漸く成長して大人となるのは、食物の同化にして、其の血液、筋肉、骨骼、內臟等すべて食物に關せざるものはありません。故に良好なる食物は壽命を長からしめ、然らざるものは之れを短縮せしむるのみならず、食物にして、其の性質をも變ぜしむることがあります。されば平素健康にして長壽を保たんとするには、食物の善惡、分量及び調理法等を注意することと肝要です。如何なる滋養物も食べ過ぎすれば害がありますし、調理の惡いものや、消化し難いもの等も、疾病の原因となります。

不良の食物から病氣の起るのに三の原因があります。即ち（一）體中に於ける組織學的變化。（二）新體の發生及び（三）寄生物です。左に之れを詳述致しませう。

第一の組織學的變化に基づくものは、食素の配合の不當から生ずる疾病で、主に肉類を食する者、蔬菜ばかりを食する者、或は魚肉のみを食する物等は、何れも疾病の原となります。肉食を主とする者は、便秘、大渴、或は多血性炎症に罹り易くあります。而して尿には尿素、尿酸を漏らすこと多く、砂淋、石淋等を起すことがあります。特に航海者などの如く多く醃藏肉を食して、不良の水を飲むときは、屢々敗血症を發することがあります。此の症は新鮮なる蔬菜の缺乏に基づくのですから、蔬菜を混食するときは、之れを豫防することが出來ます。英國の法律に、航海中は醃藏肉の外必ず一定量の蔬菜と果實とを、貯へなくてはならぬことになつて居るのは是れが爲です。

之れに反して單に蔬菜のみを食するときは、消化器が衰へて屢々下痢を發し、遂に貧血となることがあります。すべて肉類の不足は血液を稀薄ならしむるもので、水腫は多く斯る場合に生じます。魚許り食ふのも良くありませんで、消化器を害し、或は種々の皮膚病を發することがあります。又營養不良にして身體が虚脱すれば、結核、腺病、胃病等を起すこと多くあります。

脂肪及び澱粉質の類を食べ過ぎると、體中に脂肪が殖ゑて肥胖病となり、或は癤瘡、粉刺等を生じます。此の場合に於いては肝臓實質は肪脂を浸潤し、又皮下或は腸間膜等の結組織中にも脂肪が沈着して、消化器病、心臓痲痺或は血管破裂症等を誘ふことがあります。

香料は適度に食べますと胃腸を興奮して消化を助けますけれども、若し其の量を過ごしますと、胃腸に充血又は溢血を來たして、炎症或は神經の疾患を發します。茶、珈琲の類もこれに似て、過用すればヒステリー、偏頭痛等を起します。

酒は適度に飲めば神經を興奮し、消化を催進して食慾を進むる効がありますけれども、酒は其の適度を定むることが困難です。例へば一杯で既に酔ふ人もあれば、一合或は二合で調度宜い人もある。さうかと思ふと一升飲でも二升飲んでも平氣な人がある。斯樣に酒量は人に依つて異なりますけれども、概して言へば一合以上は害になりますから、五合の人も、一升の人も一合を適度として、是れ以上飲まぬことにすれば泰平無事です。

酒より生ずる害は實に測り知るべからざるもので、其の經濟的及び社會的弊害は別として、單に疾病のみを擧ぐれば、胃腸加答兒、心臓及び血行器病、肺病肝臓脂肪浸潤、肝臓硬化、癲癇、酒客譫妄、漸進痲痺、精神遲鈍等です。

第二の新體發生とは、黴菌の作用に依つて生ずる有毒性の物質でありまして、腐敗したるもの、或は腐敗に傾むきたるものを食したるときは發生するのです。其の毒物の主なるものは、一種の化學醱酵素及び類鹽基に似たるプトマイネと稱する毒で、動物中には最初から之れを含有するものがあります。例へば河豚の如きです。

家畜及び野獸の肉は、屠殺後直ちに食するよりも、

強直の解けたる後に食する方が美味です。是れ肉中に乳酸を生じ、且つミオシン(筋肉素)を溶解するが爲です。されど屠殺後餘り長く經過して、腐敗つたものは水、アムモニア、硫化水素、窒素、炭酸等の瓦斯を發生して異臭を放ち、味も變じて食ふに堪へません。他の食品でも分解したものを食しますと嘔吐を催し、腹痛を起し、或は頭痛、痙攣等を發し、重きときは心臓痲痺して死ぬことがあります、是れが卽ち中毒です。中毒は同時に之れを食べた多數の人に發することがあります。

魚肉は獸肉に比すれば分解し易く、往々數時間で腐敗するものがあります。總じて腐敗の速いものは毒を生ずること多く、鮪、鰹魚、鰤、鯖、鯵等は其の例です。鱈、比良目、鯰、鰐魚等も有毒性で、よく中毒することがあります。河豚の毒は主に生殖器、肝臓其の他臓腑中にありまして、筋肉にはありませんから、内臓を去つて能く之れを洗つて食べれば、中毒することはありません。然し危險を冒して強いて食ふほどのことも無いではありませんか。

河豚の毒は長時間(四十八時間乃至七十二時間)高熱(攝氏百度以上)で煮ると大抵消滅します。腐肉も輕度のものは、之れを煮れば中毒を免れますけれども、結核、脾脱疽、炭疽熱其の他の傳染病で斃れた病獸の肉及び乳は、幾ら煮沸しても効がありません。此等日常に之れを食ふものに大害を與ふるのみでなく、其の肉を調理する者に、其の病毒を感染せしむる恐れがあります。

肉類には亦寄生蟲を有することが多くあります。此等の寄生蟲は成長の初期に於ける幼蟲で、それより人體に移るときは、宿主の滋養液を吸收して十分に成長するが故に、宿主は營養不良に陷り、或は貧血となり或は腸胃其の組織を穿孔して、局部の疾病を釀す等恐るべき害を受けます。條蟲、施毛蟲、腎蟲等は、皆肉類から來るもので、條蟲には牛肉、豚肉より來るものと、鮭鱒の類より移るものとあります。肉類を生食することの危險なるは言ふまでもなく、煮沸したる肉でも、其の熱が內部に潛める幼蟲を殺すに足らざるときは、生肉と同樣に其の幼蟲が人體に入るのです。

(つゞく)

日本百文豪

一、各時代の中にある人名は年代の順に據らず。
一、歌人、小説家、國學者の區別は便宜に從ひたるのみ、歌人にして文章家を兼ぬるの類極めて多し。なほ洩れたるは他日の是正に俟つ。

奈良朝時代

柿本人麿（『萬葉集』の歌人）
山部赤人（同　上）
山上憶良（同　上）
大伴家持（同　上）
笠金村（同　上）
額田女王（同　上）婦人
石川郎女（同　上）婦人

平安朝時代

紫式部（『源氏物語』）婦人
清少納言（『枕の草紙』）婦人
赤染衛門（歌人）婦人
和泉式部（歌人）婦人
大弐三位（歌人）紫式部の女
紀貫之（歌人『古今集』の選者）
紀友則（同　上）
凡河内躬恒（同　上）
壬生忠岑（同　上）
清原元輔（『拾遺集』の選者）
藤原公任（同　上）
藤原俊成（『千載集』の選者）
在原業平（六歌仙の一人）
小野小町（六歌仙の一人）婦人
僧正遍照（同　上）
文屋康秀（同　上）
大友黒主（同　上）
喜撰法師（同　上）
源三位頼政（歌人）武人

鎌倉足利時代

鴨長明（『方丈記』）
兼好法師（『徒然草』）
西行法師（歌　人）
阿佛尼（『十六夜日記』）婦人
北畠親房（『神皇正統記』）
藤原定家（『新古今集』の選者）
藤原家隆（『新古今集』の選者）
源實朝（歌人）頼朝の次子
山崎宗鑑（連歌を興す）

德川時代

近松門左衛門（淨瑠璃作者）
近松半二（同　上）
紀海音（同　上）
竹田出雲（同　上）
河竹默阿彌（同　上）
井原西鶴（小説家）『五人女』
江島其磧（同　上）
八文字屋自笑（同　上）
山東京傳（同　上）

曲亭馬琴（同　上）『里見八犬傳』
山東京山（同　上）
柳亭種彦（同　上）
十返舍一九（同上）『膝栗毛』
式亭三馬（同上）『浮世風呂』
爲永春水（同　上）
北村季吟（國學者）
戸田茂睡（同　上）
下河邊長流（同　上）
僧契冲（同上）『萬葉集代匠記』
荷田春滿（同　上）
加茂眞淵（同　上）
橘千蔭（同上）『萬葉集略解』
村田春海（同　上）
本居宣長（同上）『古事紀傳』
伴信友（同　上）
平田篤胤（同　上）
清水濱臣（同　上）
塙保己一（同上）『群書類聚』

石川雅望（同　上）
上田秋成（同上）『雨月物語』
松平樂翁（同　上）
橘南谿（同上）『東西遊記』
小澤蘆庵（同上）歌人
伴蒿溪（同上）歌人
香川景樹（歌　人）
橘曙覽（同　上）
藤原惺窩（漢學者）
林羅山（同　上）
中江藤樹（同　上）
伊藤仁齋（同　上）
荻生徂徠（同　上）
室鳩巢（同　上）
新井白石（國學、漢學者）『藩翰譜』
貝原益軒（同上）『益軒十訓』
賴山陽（漢詩人）『日本外史』
松永貞德（俳　人）
西山宗因（同　上）

松尾芭蕉（同　上）
榎本其角（同　上）
服部嵐雪（同　上）
與謝蕪村（同　上）
一茶（同　上）
横井也有（同　上）
加賀千代（同上）婦人
太田蜀山人（狂歌、狂文）
柄井川柳（川　柳）

明治時代

福澤諭吉（評論家）
樋口一葉（小說家）
正岡子規（俳　人）
高山樗牛（評論家）
尾崎紅葉（小說家）
國木田獨步（同　上）
川上眉山（同　上）
長谷川二葉亭（同　上）
山田美妙（同　上）

寧樂

窪田空穗

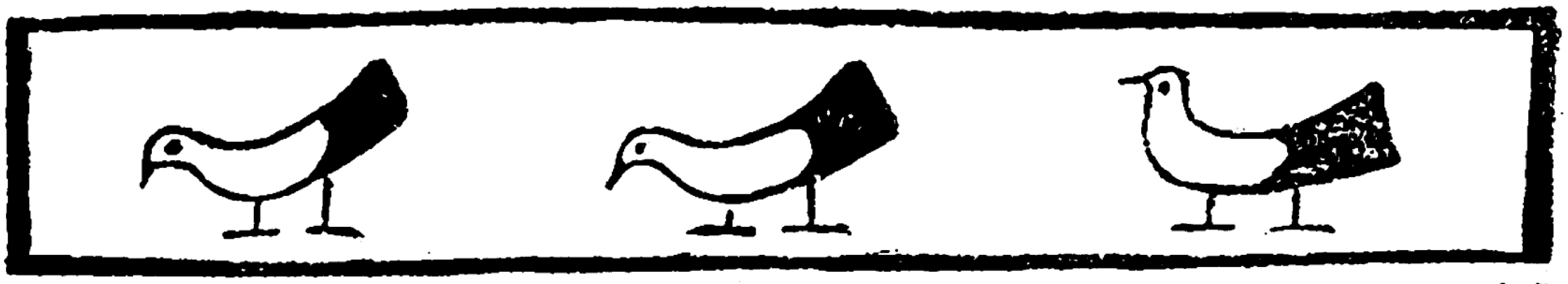
植ゑつぎつ植ゑつぎつするあはれさに衣掛柳黄なる芽をふく

椰のかげつれづれげにも人を見てうづくまりをる宮の鹿ども

業平が女ぬすみてかくれにし武藏野に來て春の夜を寢る

三笠山しろく曇れる春の夜の空を背にしてまろく横たふ

大佛の初夜の鐘とか耳すまし待つなる方にまたも鳴り出づ



青丹よし寧樂の都に古りにける鐘の鳴るなり旅びとわれに

濃綠の椰の木かげの細みちの白き砂踏み宮の內ゆく

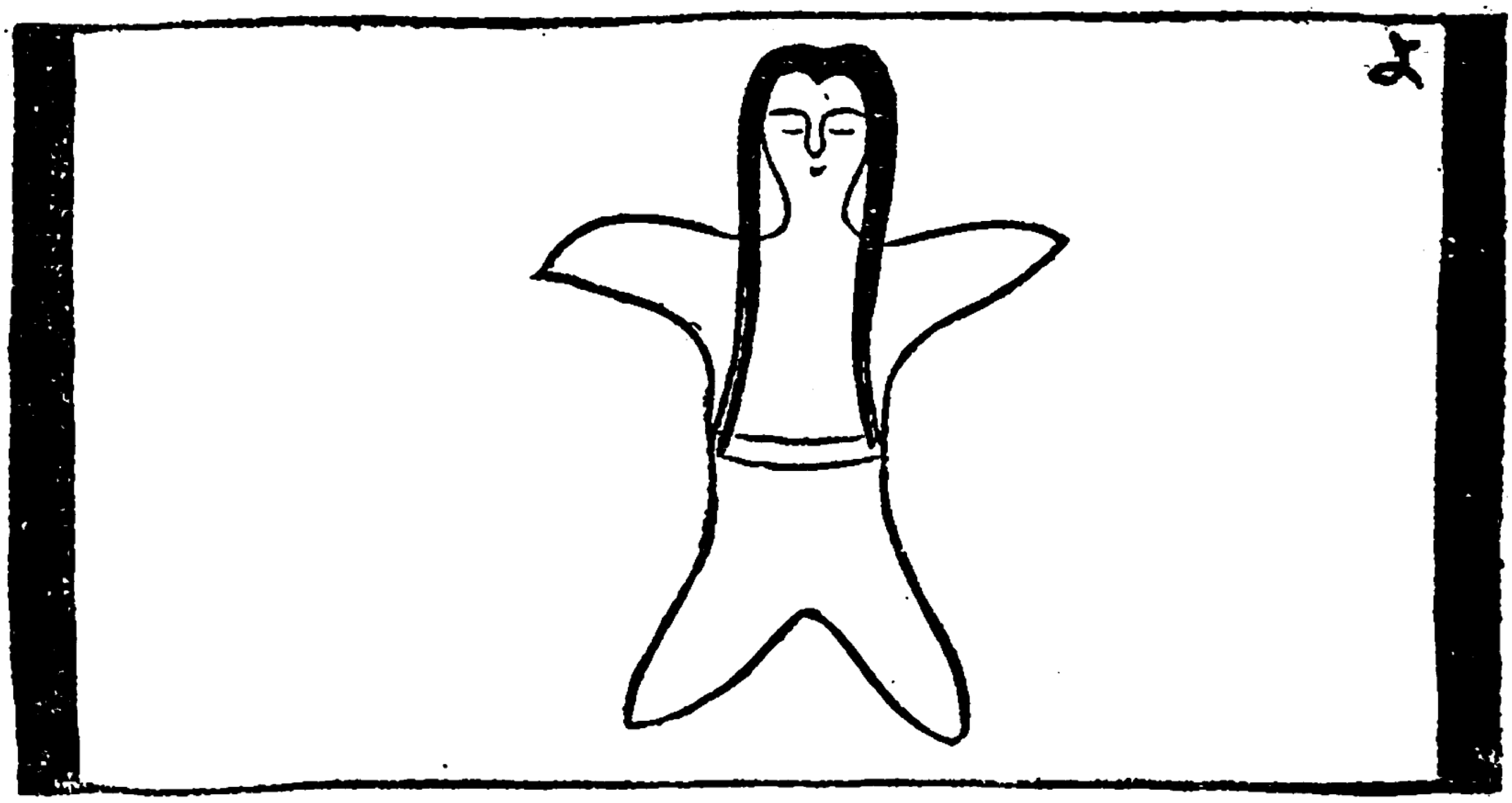
くもり日の光なきもと門築地ひたにつづけり壞れながらに

麥あをき畑の彼方やいさゝかの築地のこりて春の日に照る

天平の后の御眼をいやしける藥師如來の古さび立たす

天平の后の宮のをろがみし藥師のまへのしろき兵營

くづれたる築地ちらぼふ古瓦麥あをあをと春の日のさす



與謝野晶子論

婦人の作物に現れたる色彩

和田英作

私は寛君と親しいので、折々往來するが、其時々自然夫人とも面會するので有つて、直接の友達と言ふのでは無いから、文字の上で、責任を持つてお話する樣な事は御免蒙り度いのである。

然し私は、いつか詳しく昔からの閨秀文學家の作物の中から、色の研究をして見たら面白からうと思つてゐるが、其時など夫人の歌から必ず面白い、いろ〳〵の研究が出來るだらうと信じてゐる。まだ多くも讀んでは居ないが、目下の處で、紫式部は、色について餘り深く注意を拂つて居ないと言はふか、紫式部の性質が自らさうで有つたらうが、其作物に現れて居る色は、衣裳の流行の色とか、何んとか只單に目に映じたまゝを單純に書いてあるにすぎない。清少納言になつて來ると、其觀察が實に細かく、又するどく、且其上に色其もの〻調子＝我々の側から言ふ＝に付いて深い趣味を持つて居た人らしい。たとへば薔薇を萌黄の紙に包んで送つたと言ふ樣

な、何んとも言へぬ澁い好みは清少納言の性格を現してゐて、實に床しい思ひがする。明治のものでは一葉女史の「たけくらべ」を少し研究して見たが、言はゞ紫式部流で、目に映じた色は、多少書かれて有る樣なものゝ、別段取りたてゝ感じ入つた程の事も無かつた。私は未だ夫人の歌を語る程、まだ熟讀しては居ないのだから、夫人の歌に現れて居る色合について、今例を引いて話す事は出來ない。然し夫人の歌には、清少納言に現れた樣な、目に映じたものを其まゝ描き出した色以外に、深さと細さと、且複雜の趣味性から選んだ面白い調子の色が現れて居るのは事實である。之等についてはいつかくはしく研究した結果をお話する事にしようと思ふ。

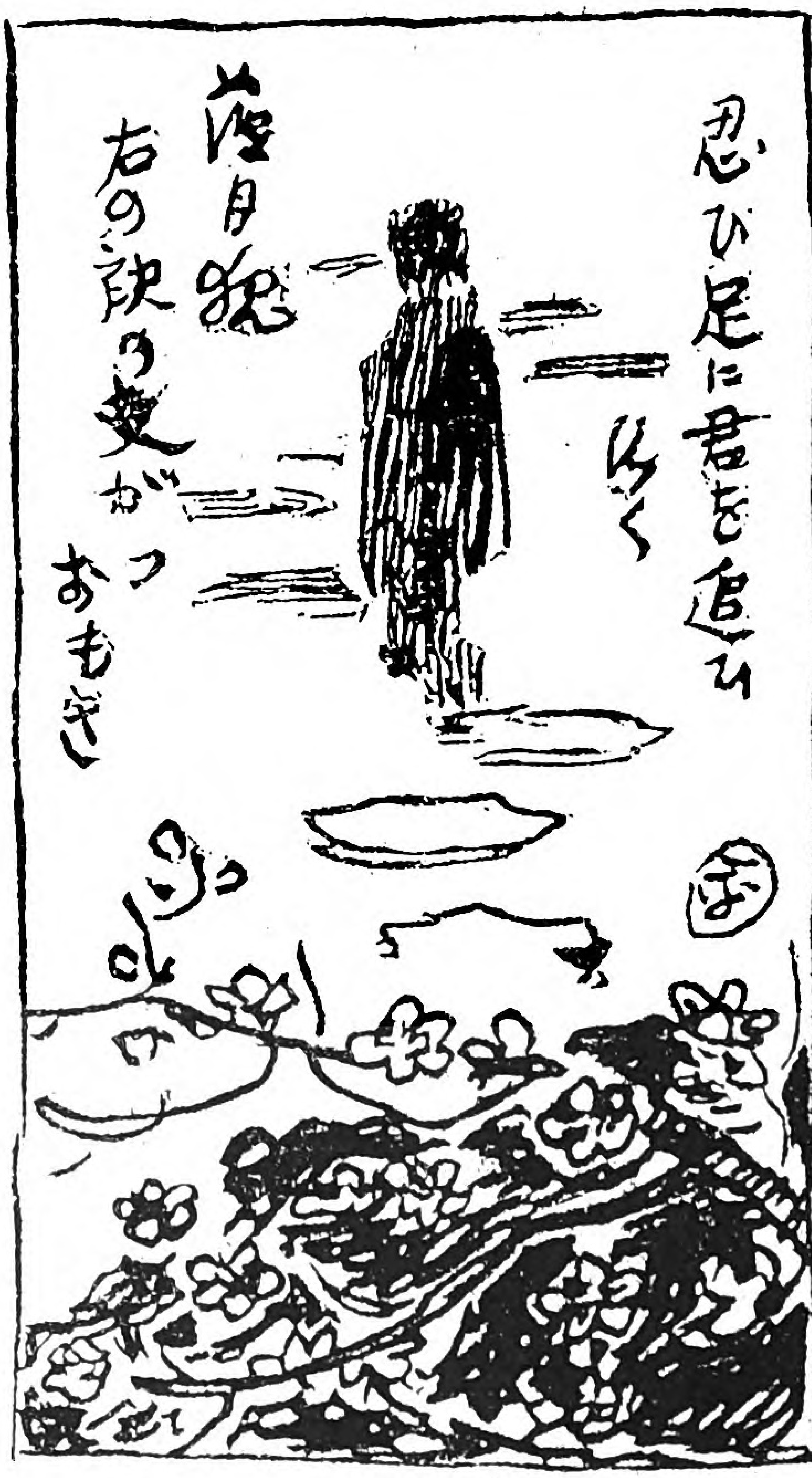
夫人の歌の人たるは言はずもがな、夫人は又婦女子として、妻として、母として、得がたい稀なる圓滿な天才の婦人である事と私は思ふ。

短歌の爲に生れた人

森田草平

橫道から入つてゆく樣だけれど、私は一體、創作と言ふ事を筆にするのが飽き足らない、いやで有る、出來る事なら筆でする創作を、事實に創作して見たい。それに相當した人物が、私の思ふ樣に動いて、其パートを演じてくれたら、之程愉快な事は無からうと思ふ。こんな事を思ふと、一體女性が筆を執つて、何故創作なんかするんだらうか、それよりも美しく其本性を實演してくれたら、どんなに好からうかと思ふ。然し之は、ほんの私の空想で有つて、こんな事が出來やうとはもとより思つて居ない。先づ此空想から押して見た與謝野夫人は、最もよく其パートを演じてくれる人だと思ふ。

女史は一體燃ゆる焔の様な、又ルビーの様な人である。其光は外に向つて燦爛と輝いて居る、燃えて居る、之が女史をして詩――否短歌、左様特に短歌にゆかしめたそも〳〵で有らうと思ふ。要するに女史は短歌の人で有る、絶對の輝、絶對の閃めきを持つて生れた人で、其行き道は短歌より外にない。ものを内考して纏める力が足らぬ其證據には、短歌以外詩にも小説にも、これと云ふ様なものが一つもない、論理などに於ては勿論然りで有る。と言つて私は何も之を惡口するのではない、否むしろそれは女史の特典で有つて、そこに女史の面影が始めて並ぶものなく躍つて居ると思ふ。



譯は違ふが世人は一葉女史を天才と言つて賞讃する然し私に言はせれば、一葉女史は女なればこそ、又其時代が、硯友社の連中が所謂洒落の文學を弄んで居つた頃、文學界の一派、島崎藤村氏、さては誰れ彼れのロマンチックな、又はセンチメンタルな新空氣をあびせられて、それによつて多少の自己の見地を深めた處を、世人が稱讃したので有つて、それは無論稱讃してもよい事では有るが又翻つて考へて見れば、千古に渉つて、之一つといふ作品と言ふではなし、女であつたればこそだが、男で有つて見れば、あの時代にだつてあの位のものを書いた人は澤山有つた。

然るに晶子女史に至つては全然違ふ。どうしても晶子でなければ、又それが歌と言ふ形式でなければ歌へない自己特得の天地に押しも押されもせずに立つてると言ふ處が有る。しかも千古に渉つて考へて見ても、晶子の歌で、女だらうと男だらうと、その爲に歌の價値が上下するでもなく、且時代と言ふものを超越して一個のものを築き上げて居る。此點から言ふて、兎に角、天才だかどうだか——僕は天才と言ふ言葉を疑ふ——豪い藝術家だと思ふ。

次ぎに寛氏對晶子女史と言ふ事になると、私は女史の今日有るのは、全く寛氏有つたが爲で有らうと思ふ。あれがもし晶子てふ女子を、寛氏の樣な「人物」が選み出さなかつたならば、空しく寶の持ち腐りで、晶子女史自身もあれだけの自己の才を自信する事が出來ずに、妙なものにひねくれて行つたに違ひない。女史と寛氏の如き「人物」有つたればこそ、あれだけの自己の才を信じ、縱横無盡に歌ふと言ふ大膽なふるまひも出來たので、之から言ふと、女史に寛氏はどうしても無くて成らぬ人であつた。然し私は又、これはほんの私一個の考へに過ぎぬけれど、前に述べた樣にたゞ一個の婦人として考へる時に、寛氏を配したのが惜しい樣な氣がする。目下の女史は歌人としては、成功したかも知れないが、それよりも創作を事實に創作して見たかつた、思ふ存分に其パートを演じさせたかつた。そして、ロマンチックな華やかな幕を引きたかつた樣な氣がする、然しくどい樣だが、之は全く私の空想に過ぎぬのである。

*　*　*　*　*

兎に角、夫人は、短歌に於て男と云ひ、女と云ふ性をも、又、時代をも超越して、動かすべからざる處に座を占めてゐる。日本に短歌てふ形式の有つたのは、女史に取つては非常な幸福であり、又日本の短歌てふ形式も、女史の如き人が出てこそ、始めて世界に誇るべき藝術の一種としてよろしい樣なものである。何んと言つても女史は私の知つて居る婦人中の、唯一の婦人たる事を終りに於て斷言する。

强烈に我が生を愛す

窪田空穗

與謝野夫人の歌は、最初の集である『みだれ髪』と最近の集である『春泥集』とを較べて見ると、大分の變化があるやうに見えます。ぎら〳〵と見る眼も眩しいやうだつたのが、しつとりと底光りのする物となり、何を歌はれたのか、ちよつと見當の附き兼ねると云ふ非難のあつたものが、極めて解りやすいものになつて來たなど、總ての集を通讀したならば隨分多趣多樣だらうと思ひます。しかし其れは打見た表面だけの事であつて、作の底を貫いて流れて居る心持の方から思ふと、反對に、殆ど變つた所が無いと私には思はれます。そして其所が歌人としての夫人の優れて居る所だと私は思つて居ます。

其れは何だと言ふと、夫人が强烈に我が生を愛して居る心持です。

誰しも自分の生は愛すには相違ないが、優れた人で無い以上、次第に最初の純粹を失つて來ます。うぶな心が世ずれて行くに隨つて、愛する所の對象が何時か知らず移つて行つてしまつて、直接の自分の心では無くなつて行きます。我を愛する心が我が生活を愛する心となつて、歌などはつまらなくなつて行く人、又我を愛する心が我が趣味を愛する心となつて行つて、多くの人には響かない調子の低いものとなつて行く人、又我を愛しつゝも、何時か心の上に堅い殼が出來てしまつて柔く感ずる事の出來なくなつた人、さういふ例は私達は常に見て居ますが、夫人には其れが無い、何の集を讀んで見ても夫人の純粹な心を以て我が生を愛して居るといふ心が流れて居るのが感じられます。もとより夫人に夫人としての詩境のあるのは言ふまでも

ない事で、要はそれが單なる趣味では止つて居ないといふ事です。

作者には二通りあります、作品を讀んで居ては何となく飽き足らなく覺えるが、讀んでしまつた後で何となく其の作者に懐かしみ、怖れなどを感じさせる作者と、讀んで居る中は眩しく華やかに感じられるが、讀み去つた後で、唯それだけといふやうな感じを與へる人となります。此れは恐くは其の作者が、自分といふものに對して持つて居る眞執の度によつてゞは無いかと思ひます。其作を讀んで其の作書を想像すると、何となく其人が解せられたやうで、其れと共にその作者が忘れられないものとなつて行く力、言はゞ其作の魅力といふものは、此の眞摯を外にしては無いやうに思はれます。

夫人の集は何の集もさういふ感銘を讀者に與へます一面華やかでありながらも、さう言ふ事を感じさせずには居ません。自らに對する眞摯と詩才と調和した美しさといふものを私は夫人に感じて居ます。

尋常一般の女流作家に非ず

藤嶋武二

◉私は度々女史の著作歌集等を装釘挿畫したことがあるので、舊來の所緣淺からぬことゝ信じて居ます。御目に掛つたのは僅かに一二回に過ぎません。其れも途上や御宅にて、ちらと相見たるまでにて嘗て親しく御話を交はした事はありませんので、女史の平素の性行逸事に至りては更に知る所ありません。併しあれ丈大勢の御子さんがあるにも關はらず、不斷奮闘的態度を以て能く現代の文藝に貢獻される所多大なる、既に古今東西を通じて異例を示し、尋常の女流作家に非ざることを證明して居ます。

◉初めて夫人に御目にかゝつた時、無論話される言葉のはしぐには、其歌に見る樣な、特性が現れて居るが、其態度は如何にも大人しやかで、言ふ言葉もひかへ目勝ちに、純日本婦人の特點を持つて居られる方であると思つた。

私は曾て歐洲に有つた頃、ポーランドの女詩人に會つた事が有つた。其人は公爵夫人で有つたとか、之は後で聞いた事であるが、其女詩人は非常によくいろいろな事を話した、無論無駄な事を話したのではなく皆其詩や文章に現れる樣な、趣味の深い話で、其人は筆で書く事も、人に向つて話す言葉も、双方に對しての自己の態度は同じ樣なものであつた。私は此夫人と晶子夫人とを比較して見て、我れ知らずほゝゑまれたのであつた。そして此は東西其教育其習慣が異つて居る處から、かゝる相違を見るのであらうが、晶子夫人の日常の態度のきはめて愼み深く、言葉に現して言ふ代りに、内部に深く入つて筆にのみ之を現すといふ事が、より一層詩人としての態度と價値を高くすると思つた。



◉女史の著作物を裝釘するのに、私は何時も興味を以て筆を執り、平素女史の才能を敬愛する處から、花束で詩神を飾る樣な氣持で描きます。

◉女史の作歌に對する批評は吾人門外漢に待たでも、既に世の識者の定論がありませうから、省きます。只私も女史に對して一人の Adorcteur なることを自白して置きます。

◉近來女史の筆に成れる小說や脚本も、皆其々に結構に愛讀して居ます。が私には彼の常に端睨すべからざる變化の下に、思ひ切つて人生の機密を歌はれたる短詩の方が、特に愛甚く思はれます。

◉要するに詩と散文とは自ら趣を異にした點もあり從つて散文に依つて女史の長所を無遠慮に發揮さるゝには、未だ時代の機運が熟せぬから、女史に向つては甚だお氣の毒な感じがあります。其處に行くと、短歌の方は大に都合の好い點を備へて居て、不自由な形式の裡に、最も自由な思想を包んである所に、面白味があります。

◉尙女史の變遷しつゝある心理や生理的狀態から、後來脚本や小說の方面に、大に發展さるゝことは、必然の傾向ならんと存じますので、將來の文藝の爲めに、藝術界の爲めに切に女史の健康を祈らずには居られません。

心持は貴族式、實際は謹愼な夫人の生活

馬場孤蝶

歌を作ることを知らず、從つて歌の良否を判じることの能き無い私のことだから、與謝野夫人の歌の評の爲やうは無い。

けれども、さういふ私にでも、與謝野夫人が全くの歌人であることは、爭ふことの能き無い事實のやうに思はれる。

與謝野氏は御夫婦とも、全く趣味中心の生活を送くつておいでだ――。而かも王朝時代の貴族の間に行き

つて居たやうな上品で優美な趣味を根柢にして、有らゆる物を觀、及び感ずるといふやうな生活をなすつておいでのやうにお見受け申す。私どもからいふと、即ちさういふ所が、與謝野氏御夫婦の眞底から歌人、即ち詩人でおいでの最大理由と認め無ければなら無い。寛、晶子お二方の日常のお暮しなされ方が、普通われわれならば自分に損德の掛かる方から打算して行かうといふ所を、前に申したやうな上品な趣味で選擇判斷を下しておいでなさるといふ方であるのは、常人の到底及ばぬ所で、まことにお羨ましいことだ。要するに、與謝野氏御夫婦の生活は一切が藝術的なのだ、其所が、お二方の詩人でおいでなさる所以なのだ。



所が、前に申した通りの趣味の人でおいでの與謝野夫人は、小說をお書きの場合には、御自分にお持ち合はせの趣味で、物を迎へて御覧になり過ぎるやうな所が、既往には時々おありのやうであつた。人生から入いる藝術家と、藝術から入いる藝術家と、斯う二種に有らゆる藝術家を類別することが若し能きるのであつたら、與謝野夫人の既往は何方かと云へば、後者の方に近かつたのでは無からうか。が、其所が又、與謝野夫人の詩人としての基礎の

極めて堅固な所以であらう。

併し、近頃は、與謝野夫人の思想なり、着眼なりが次第に實人生に透徹しつゝあるやうに、お見受け申すのは、まことに喜ばしいことである。

明治の世の中では、女は、女郎になることも容るされる藝者になることも、容るされる、婬賣になることも容るされる。けれども、婦人が文學者、殊に獨立した思想を有つ文學者になることは容るされ無い。前三者は、自治團體に賦金を納めたり、土地の繁昌を來したりするのだから、社會から保護されるのに無理は無い、文學者は、それとは違つて、何の必要も無いものだ。其樣な不必要物に好んでなる女といふのは、何んな女なのであらう。矢つ張り、髪は結つてゐますか、並の女のやうに帶は締めてゐるのでせうか。これが、世間一般の人の、婦人の文學者に對して有つてゐる考ではあるまいか。或る人に、私が『與謝野晶子といふ人は、つゝましやかな如何にも女らしい立居振舞の婦人だ』と話したら、その人は『へえゝ』と云つて、暫時私の顔を見て居た。

與謝野夫人は、如何にも優さしい言語の、如何にも愼ましやかな動作の婦人だ。それでゐて、心がシッカリしておいでで、且頭腦の明晰であるのは、感服の外は無い。理智のなか〳〵好く働く婦人である。われ〳〵が、最も感服するのは、夫人が、お子さん方を扱はるる態度なのだ。如何にも物和かな、如何にも母らしい態度、言語なのだ。それから、裁縫にも趣味をお持ちのやうで、方々の新聞雜誌への寄稿のお忙しいなかを見ては、針を取りあげておいでのことを、荊妻などは屢々お見受け申して、嘆服してゐる。

與謝野夫人の時々新聞などで公けになさる論文が又振るつたもので、徹底した意見には、われ〳〵は何時も敬服する。けれども、失禮を顧りみずに、此所で私だけの考を申し述べると、何とかいふ文學博士に、手紙を與へて、詰責なすつたのなどは、餘まりお正直に過ぎたことではありますまいか。土木とか、農業とかいふやうな全然物質的な技術ばかり學んだとでも云ふ

ことか、三十年以上も、抽象的な高尚なことの書いてある書物に可なり眼を通し、年齢はと云へば、婦人にお世辭を云つても色氣と直ぐには取られずに濟みさうな年配に近づいておなが ら、婦人に花を持たせる餘裕さへ無いやうな男が、何で思想家でしよう、何で學者でしよう、何で男でしよう男でも無いそんな男の面の皮を引ん剝いた所でそんな下品な男は、外にうぢよ〳〵居るのですから、



それ程効はありません。固より、與謝野夫人が、新時代の婦人として、奮鬪になる心事は、われ〳〵十分にお察し申しあげるもの丶、何とか博士などをお相手になさるのはチト大人氣無い、反つて、御人體に障りますかも知れません彼等のやうな手合ひに向つては彼等が何を申さうとも、微笑を以て、看過して澤山でしよう。これが夫人のお年齢がもう十四五年もお若い時分ですと、皮肉らしい

微笑が小面憎くも見えたかも知れず、又、此れから二十年もお年をお取りの時分ですと、何だかイヤに見えるかも知れませんが、今當分の所は、皮肉な微笑が生意氣にも、意地惡るくも、お見えにはなるまいと思はれます。

與謝野夫人が、寛君に嫁せられたことは、夫人の天稟の才能――歌人としての才能を發揮させるのに、非常な利益のあつたことだと、私は思つてゐる。お二方とも、趣味が同じで、同じ方向に進まるゝ詩人であり技巧に綿密な工夫を凝らされる所が、甘く合致して行くのだから、まことに祝すべきことだと云は無ければならぬ。寛君あつて、晶子君――現在の――は造くられたと云つて宜からう。

一體、婦人の藝の特色は、如何にも好く調のふといふ點にある。私は、豐竹呂昇の藝を聞く度毎にさう思ふのだ。與謝野夫人の歌が無論矢張りさうだ、ソツが無い、カスレが無い、全く渾然たる藝術品だ。夫人をして、此域に達せさしたのには、寛君のあの綿密な作風が非常な感化を及ぼしてゐるのは明かなことだ。それと同時に、夫人の婦人としての先天的に綿密な作風が反射的に寛君に感化を及ぼした點もあるかも知れ無い。

與謝野夫人の今日の作風にあきたらぬ人があるかも知れ無いが、お孃さんの歌より、奥樣――母親の歌が進んでゐるのは拒み難い事實であらう。

始に申した通り、歌の作れ無い私には、與謝野夫人のお歌などを拜見すると、何れも是れも、名歌に見えて、何れと云つて記憶しようが無いので、今何れをと取り出でゝお話しは能き無いのだが、最早四年程前のこと、與謝野家が、まだ千駄ヶ谷にお住居の頃、そのお宅で催された短歌會の有樣を憶ひ出さざるを得無い席には鷗外さんもおいでであつた。上田敏君もゐられた。歌は「春」といふ字と、「紫」といふ字とを讀み込んで作ることになつてゐた。與謝野夫人が一番早く作り終られたやうであつたので、私は、「紫」を何う使はれたのかと、十分好奇心を以て、注意してゐたのだ

が、發表になると、それは、

紫の蝶夜の夢に飛びかひぬ
故郷に散る藤の見えけん

といふのであつた。これは、非常な名歌といふ譯では無いかも知れ無い。けれども、私は、與謝野夫人の想像の一遍に纒まつて働く所、言葉を換へていへば、滿ち渡つた藝術的氣質の、さういふ一寸した場合にも表はれたのに、敬服せざるを得無かつたのだ。私どもの物を書くのは、刃の鈍まつた小刀で、鉛筆を削づるやうな風で、スラ〳〵と行かぬ所が、自分にも氣持の惡るさといふのは無いのであるから、與謝野氏御夫婦のやうな藝術的氣分の溢れるやうにある方々を見ると只管羨ましさに堪へられ無い。以上は不斷感じてゐるまゝのお話です。

和歌の創作三千餘首

河井醉茗

◎前提

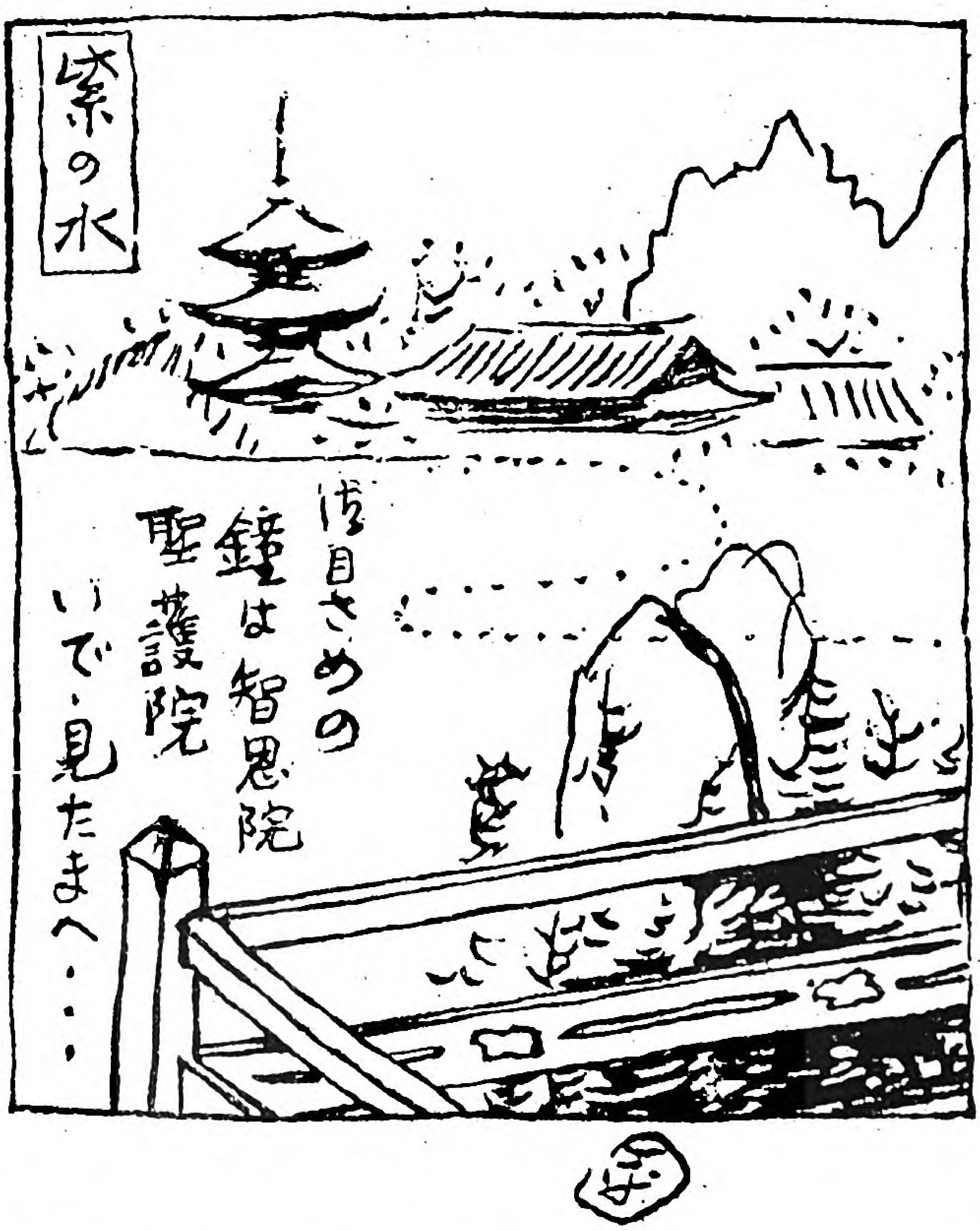
與謝野夫人は、私と同じくちぬの浦わに幼き夢を護られた女性である。舊き歷史に呪はれたる我が鄕土より、雲を破つて現れた新しい光明のやうに、藝術の天才を生み出したことは、私一人の誇りではあるまいと思ふ。

處女時代よりの夫人を知つてゐる私は、語るべく多くを持つてゐる。併しながら夫人の性格とか、言行とかは今好んで語るの要を見ない、世人が如何に夫人を解釋してゐるか、それも亦深く究むるを要しない。只私は顧みて、一層夫人に敬服する處があると言つて置けば宜い。

今回、晶子論を集めるに就いて、私も一わたり夫人

の歌集に眼を通した、而して其感想を語るに先ち、前提として、夫人の和歌に於ける價値とも云ふべきものを擧げて見たいと思つた。幸ひなる哉『春泥集』の序文に於て、上田敏氏が例の濶達明快なる筆致を以て、夫人の和歌に於ける功蹟を述べてある。序文は全篇に渉りて作家必讀の好文字であるが、此處には主として夫人に關する部分を引用する、曰く。

詩が一世の感情に投合して、不斷はこれに緣遠い人までを動かすには、まづ婦人の手と唇とに觸れられることが必要だ。婦人が詩の花のなかに、其顏を漬けるやうになつて、はじめて、ほかの詩をも理解されることになる。女詩人は實に詩の宣傳者　弘布者であつて、巧に周圍の感情にふさはしい情緒の琴の緒を彈じ、自然に時代の空氣中に浮ぶ新思想を吸收咀嚼して、一の新體を造りだす者だ。これは摸倣で無い、靈妙な同化である。精神上に於ける婦人の地位と知識との低い時代はいざ知らず、其他の場合では女詩人の作に、一時代の感情が綜合されて現はれる例は少なくないので、殊に抒情詩の域內では、愁、淺薄な理性に囚はれないだけ、却つて面白い天眞の流露を見る。與謝野夫人の場合もこれではないか。夫人をして羅馬尼亞公爵家の一女たらしめば、或は第二のコンテス、ド、ノアイユたるべく、南米の血を享けた佛蘭西高踏派詩人の女たらしめば、また、ド、レニエ夫人ジエラアル、ド、ウヰユであらう。ヱルレエヌ、ド、レニエ、ジアムの詩が、是等の女詩人に依つて佛蘭西の社會に弘布せられた如く、明治詩壇が、晶子夫人の絕間無き制作の精力あるが爲に、常に公衆の視聽を惹きつゝあるは、文藝を愛する者の深く感謝する所である。『後の世の人羨みてわが影に集るならむ、彼等の命よりもわが灰の溫かければ』と誇る伯爵夫人は、『寂しからずや道を說く君』と窘めたこの東洋女詩人を友とすべく、『菫は靑に、風信子は艶よく、水仙の香、家に滿つ。六月、牡丹、異珠色の絹に似たり』と佛蘭西の景物を咏じながら心は遠く南海祖先の地に憧れる才媛はつねに『西の



京の山』を思ふこの集の作家に頷くであらう。總じて詩人に席順をつけるのは村夫子氣質の惡癖、まことに無益の業であるが、あまりに古に泥んで今を顧みない人の多くある世の中だから、ひとつ押しきつて言はう。日本歌壇に於ける與謝野夫人は、古の紫式部、淸少納言、赤染衞門、等はものかは、新古今集中の女詩人、かの俊成が女に比して優るとも劣る事が無い。日本女詩人の第一人、後世は必ず晶子夫人を以て明治の光榮の一とするだらう。

◎『みだれ髮』時代

明治の時代に於て、藤村氏の『若菜集』が詩壇の曙光であるとすれば、和歌の世界では『みだれ髮』が曙光であらう。最もそれより以前、新派の和歌は起つてゐた、言ふまでもなく與謝野寛氏が第一の開拓者で『東西南北』が出て、明治の歌壇は震駭した。其寛氏が晶子女史を拾ひ出して、明治の和歌を一新したのも偶然でない。

『みだれ髮』の出た當時、毀譽褒貶は交も起つた。歌の讀み口の餘りに大膽なるに呆れて大抵の批評家は思ひ切つて之を推奨すること

を憚つた。出版されたのは明治三十四年であるが、爾來約十年の間に、文運は急轉直下の勢ひで進步し、推移し、ロマンチシズムを云ひ、自然主義を識るに至つた文壇は、顧みて『みだれ髪』が如何に新思想の巨匠を成したかに注意せねばならぬ。

青春の燃ゆるやうな、わかく〱しい思想は『みだれ髪』全篇に流れてゐる。詩人は通常の人間よりも、殊に其若い時に於て、烈しく、一てくで、物に支へられるやうなことがない、單純であり、幼稚であつても、若い時に作られた製作品には、眞の詩人らしい血が盛られてある。

やは肌の熱き血汐に觸れも見で淋しからずや道を說く君

と喝破した勇氣は、夫人一代を通じての藝術的信念であらう、斯の信念の下に夫人は、婦人としては寧ろ苦痛の多き藝術の國にかしま立したのである。

春みじかし何に不滅の命ぞと力ある乳を手にさぐらせぬ

ゆあみして泉を出でしわが肌に觸るゝはつらき人の世の衣

その子はたち櫛にながるゝ黒髪のおごりの春の美しきかな

夫人には初めより、一の堅固な自信があつた、それが歌に現れて、處女の誇りともなり、女性の權威ともなつてゐる。右の歌は其等を能く代表してゐる。

夫人が想像力の豐かな量分を持つて生れた事は、主觀以外の歌に於て窺ふことが出來る。夫人は二十四五歲の頃まで、多く外に出なかつた、而して專ら吾國の歷代の文學、殊に物語類、歌書類に親んだ、偶ま鄕土以外の地としては、京都の自然を知つたゞけである。而かも夫人の眼には其京都が新しく映つた。

ほとゝぎす嵯峨へは一里京へ三里水の淸瀧夜の明けやすき

時代としては平安朝、地としては京都の感化を受けた夫人の歌には、既に『みだれ髪』時代から盛んにそれが現れてゐる。佛敎の文字は使つてあつても、詩の

言葉としてあやなすだけで、思想は何處までも現代に向つて進まうとした努力を、忘れてはならぬ。今以上の傾向を一括して、例證となすべき作四五首を拔き、更に次の集に移らう。

のろひ歌書きかさねたる反古取りて黑き胡蝶をおさへぬるかな

うらわかき僧よびさます春の窓ふり袖ふれて經くづれきぬ

まこと人を打たれむものかふりあげし袂このまゝ夜をなに舞はむ

何となく君に待たるゝこゝちして出でし花野の夕月夜かな

ゆあみする泉の底の小百合花二十の夏をうつくしと見ぬ

◎『小扇』と『毒草』

『みだれ髮』の次に、傳ふべき歌集は『戀ごろも』であらう。併し『みだれ髮』が出て、『戀ごろも』が出るまでの間に、『小扇』と、『毒草』の二つの書が出てゐる。

『小扇』は『みだれ髮』に比べて、技巧は進んでゐるが、凡て技巧に囚はれた形になつてゐて、天眞の思想を少からず傷けてゐる。夫人の遲疑し、躊躇し、且最

柱いひぬ
誰まちたまふ
春の夜を
君はたよらに
みじろぎがちに



も苦んだ時代の集であらう。一首を拔く。

眼のかぎり春の雲わく殿の燭およそ百人牡丹に似たり

『毒草』には良人寛氏の詩歌もあり、夫人の文章もありて、和歌の數は極く少い。少いが其うちに只一首吾等の忘れかぬる歌がある、曰く。

ほと〻ぎす玉をまゐらす瑠璃盤に羅のおん袖の觸れにしものか

◎『戀衣』と美男

鎌倉や御佛なれど釋迦牟尼は美男におはす夏木立かな

此歌に就いては當時盛んに評論せられたことであるから、今更よけいなことを言ふ必要もないが、只一言初心者の爲に云ふが、此歌は格調とか、才氣とか云ふもの〻上では、晶子集中必ずしも第一位ではないが、思想に於て破天荒なところを認めるのである。多年佛敎思想に養はれて來て、少くもお釋迦樣と云へ[illegible]りがたいもの、敬ふべきものとしてある我邦人の口から、偶像的信仰を離れて、親しげに美男子呼はりをした大膽さに、先づ多くの讀書家は驚倒したのである。

なほ序に云ふが、夫人が此思想を抱いてゐたことは既に『みだれ髪』時代から芽ざしてゐたので、左の二首は確に、此歌を成すべき素地であつた。

御相いと〻親みやすきなつかしき若葉木立の中の盧遮那佛(みだれ髪)

讃ぜむに御名は知らず大男花に吹かれておはす東大寺(小扇)

偖て『鎌倉や――』の歌の外に、『戀衣』には何んな歌が多いかと云ふに、才氣の勝つた、華かな女性らしい歌が多い、此集は何となく淸少納言の面影があると思ふ。試に引けば、

春曙抄に伊勢を重ねてかさ足らぬ枕はやがてくづれけるかな

おもはれて今年要なき舞衣篋に黄金の釘うたせけり

母屋の方へ紅三丈の鈴の綱君と引くたび衣もて參る

金色の小さき鳥の形して銀杏ちるなり夕日の岡に

ほとゝぎす治承壽永の御國母三十にして經よます寺

花に見ませ王の如くもたゞなかに男は女をつゝむうるはしき蕋

ゆあみして泉を出でしわが肌にふるゝはつらき人の世のきぬ



◎『夢の華』と姉妹集

夫人の愛女に、ななせ、やつをの君あるが如く、夫人の集に『夢の華』と、『舞姫』とがある。此二つの集は、孰れを姉孰れを妹とすべきか、迷はれるほど能く肖た印象を與へる姉妹集である。『みだれ髮』時代の思想が、更に圓熟して、磨きあげた珠玉を盤上に盛つたやうな、歌の絕頂に達した集である。此二集の作は、殆んど一首々々に、力の限りを投げ入れてあるやうで、何の頁から、何の歌を拔いて來ても、然ら重さに變りはない。

平安朝の都——西京に愛着深き夫人の短歌が、西京の自然と人間と時代とを巧みに擒縱することは前にも言つたが、此集と、次の『舞姫』から少しばかり私の好きな作を擧げてみよう。

御目覺めの鐘は知恩院聖護院出でゝ見たまへむらさきの水

嵐山名所の橋の初雪に七人わたる舞ごろもかな

京の衆に初音まゐろと家ごとに鶯飼ひぬ愛宕の郡

冬川は千鳥ぞ來啼く三本木べにいとゝせんの夜着ほす
様に

十餘人様にならびぬ春の月八阪の塔の廂はなると

殊に『鶯飼ひぬ愛宕の郡』の歌は、非常に好きな歌
である。

藝術家は凡て誇張を知つてゐる、夫人は殊に誇張の技巧に於て、意表に出ることが多い。自然に於ては

地は一つ大白蓮の花と見ぬ雪の中より日ののぼる時

感情の誇張を面白く表はしたものには、

思ひ負けぬやれな事こそおこりたれやれな鞍おけや
れ馬まゐれ

のやうな集中稀に見る奇拔な作もある。

また印象の鮮やかな歌としては、

夏の水雪の入江の鴨の羽の青き色して草越え來る

自然を離れ、純なる空想から生れた歌に、

くらやみの底つ岩根をつたひゆく水の音して寢ね得
ぬ枕

すなほなる女性の歌としては、

うらめしと再び言はぬ口がため強いたまふ夜の春の
雨かな

斯の如く引いて來れば、殆ど際限がない。

◎『舞姫』

昔の歌人は多くおちついた歌を作つた、動いてゐるものを動いてゐるまゝに表はすと云ふことが出來にくかつた。餘程敏慧な才が無いと其れは出來にくい。夫人は動いてゐる人間、動いてゐる心、動いてゐる場所を其まゝに捉へて來て、讀者に或る時間の觀念をさへ與へるものがある。例へば

山かげを出しや五人がむらさきの日傘あけたる船の
うへかな

おん方の妻と名呼びてわれまゐろさくら花ちる春の
夜の廊

春の雨障子のをちに河暮れて灯に見る君となりにけ
るかな

美しき女盜まむ變化者來よとばかりに騷ぞきにけり

のやうな作である。『舞姫』の中で、多くの人に愛誦される作は

春の雨高野の山に御兒の
得度の日かや鐘多く鳴る

と云ふ歌であらう。爽快無比とも云ふべきは、

夏の風山より來り三百の
牧の若馬耳吹かれけり

であらう。若き日の幸を極端に誇張したものには

鴎居るわだつみ見れば抱
かれて飛ぶ日をおもふさ
いはひ人よ

がある。

要するに、與謝野夫人の歌を味はうと思ふものは、『夢の華』と『舞姫』の二歌集は、必ず見免すことができないのである。



◎『常夏』の新生面

『常夏』には『舞姫』以前の集に見なかつた言葉が表はれてきた、それは『涙』とか、『さびしさ』とか、『おとろへ』とか、『よはひ』とか、『かなしさ』とか云ふやうな文字である。是等の文字の上から推想しても分る通り、青春の燃ゆるやうな時代に別れて行く哀愁とも云ふべきものが此集には處々に歌はれてある。わが生の態を偽らぬ作者としては然もあるべきことで、眼を射るやうな派手やかな歌がなくなつた代り、しんみりとした生活の味ひが表はれてきたのだ。

古琴の絲を薫る香に面そむけ泣きぬ三十路に近きよはひを
古女君とその世の相聞の歌もて足れる天地に居ぬ
あざますや小さき二人の母とよぶ本意遂げ人のおとろへやうを
花鎮祭につゞき夏は來ぬ戀鎮めよとみそぎしてまし
とある人思しきざすと淋しくも心よく讀む用なき心
ふと思ふ十歳の昔海見れば足の蹌踉く少女なりし日

斯う云ふ歌が集中の大部を占めてゐるのではないが集中に散見するだけで、矢張、艶なうた、華やかなうた、印象の明瞭なうたなどは澤山あつた。夫人の出發して來た詩歌の一路は、まぎれもなく嚴存してゐる。

白き花紅に交りぬ逢ひそめてしら寢しにける日のかずばかり
法華寺の黒き千手の御像の御手勸進す奈良の大路に

など他の人の作には決して見られない。

◎『佐保姫』と人妻

『夢の華』と『戀衣』と同じ型を示して居るやうに『常夏』と『佐保姫』にも、同じ空氣が通ふてゐる、なほ一層此方が、時間も後であるだけ、人妻らしい想ひが表はれてあつて、時としては

心まづおとろへにけむ形まづおとろへにけむ知らねと悲し

と云ふやうな心持も起る、然うかと思ふと節操といふことが

天地に一人を戀ふと云ふよりもよろしきことを我は知らなく

と自明されて來る、或は

白刃もて我にせまりしけはしさの消えゆく人をあはれと思ふ

と自他に顧みて、ものゝあはれを時間の上に見出して來る。

凡て人間の衰へるといふことは、知らず識らずの間に來るもので、爾く明かに意識し得るものは少い、それを叉表白し得る力を持つてゐるといふことが、實際

に於て夫人の衰へてゐないことを證明してゐる。本集にも約五百首からの歌があるから、其盛んなことは勿論である。私の好きな歌を二三首引いて見よう。

少女子は魚の族かとらへむとすればさまよく鰭ふりて逃ぐ

來よといひし林なれどもわが歩む路の無ければ葛の葉を踏む

水無月のあつき日中の大寺の屋根より落ちぬ土の塊

山吹の花の一つをからたちの垣根の上に置きてこしかな

◎新しき『春泥集』

以上、八冊を數へた最後に、今年出版された最も新しい夫人の歌集『春泥集』に就いて一言しよう。『みだれ髪』以後の四五の集と、此集とを比べて見ると、流石に十年の間の面がはりは爭はれぬ、丕緻の情調が、前には空に舞ふ花のやうであつたのが、今は野に置く露のやうに、しつとりと、おちついて來た、友染の着物が、縞の着物に代つたほどの相違がある。娘の時代、妻の時代、母の時代と遷つて行くのが見えるやうであつて、刺戟には驚かないが、歌つて見ると云ふ態度は何處までも持續することを證してゐる。

感興に任せて歌ふと云ふより、思索して歌ふと云ふ傾向もある。

わが胸はうつろなれどもその中にいとこゝろよき水のながるゝ

ある時にわれの盗みし心よと公ざまに行きて返さむ

吾家のこの寂しかる爭ひよ君を君打つ我を我打つ

印象のきつぱりした歌の少くなつたと同時に、分別ざかりに近い年頃の人が、ふとした事に感じて我身の上でもないのに涙を流すと云ふやうな、むづかしく云へば現實界の底の暗流に自己の影を見出して、やるせない感じをするやうな、然うした作品が多くなつてきたやうに思ふ。

御心に離れぬ人の物語われ聞くまでになりにける哉

おん心らより覗くことばかりして生がひのいかで

あるべき

わが頼む男の心うごくより寂しきはなし目には見えねど

おとろへをうれふるきはにあらねども歌のあはれになりにけるかな

後より危しといふ若の我走らむとするいと若きわれ

愚なる心が建てし樓臺のくづるゝ音も心地よきかな

わが背子に四十路近づくあはれにも怒らぬ人となりたまふかな

注ぎたれば油壺なる油盡くもの味氣なき秋の夜半哉

此處には多く主觀の歌を引いたから、なほ其傾向が著しく見えるかも知れないが、『歌のあはれになりにけるかな』は、實に能く、一語を以て『春泥集』を語つてゐる。

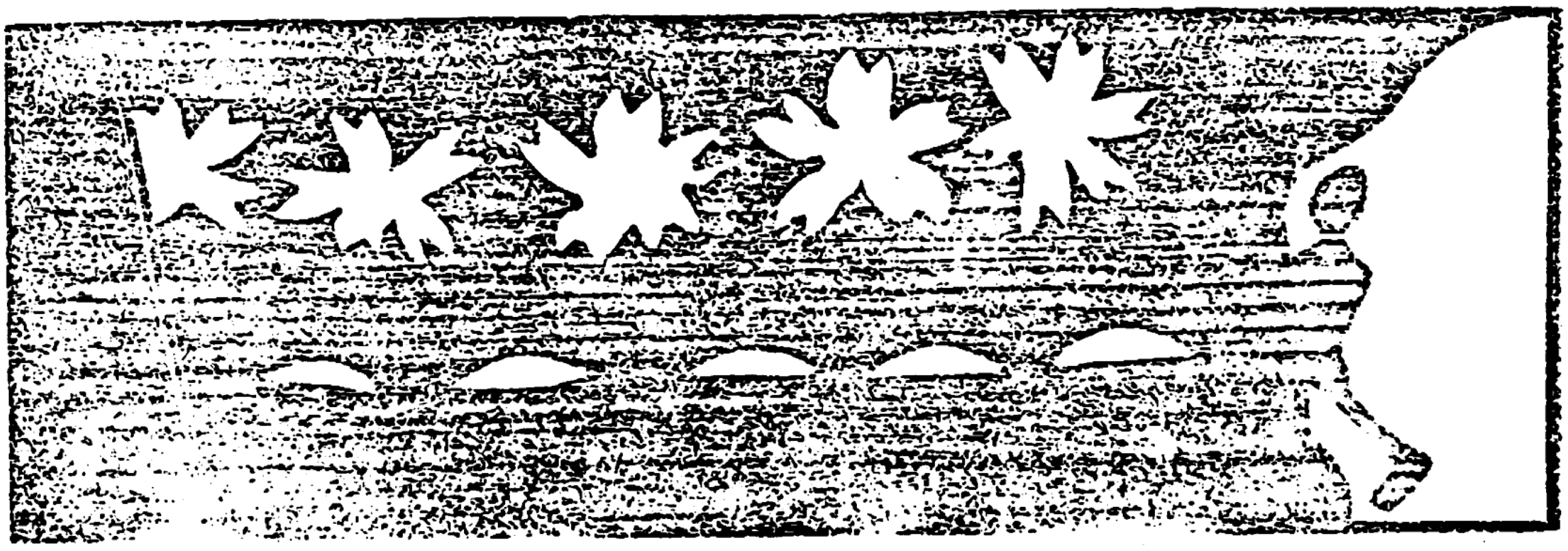
而かも日本の短歌として、歌のあはれに新しい生命を與ふるものは、夫人を置いて當今の歌人の誰に求めやう、私は徹頭徹尾、夫人は歌に生れた女性であるといふことを信じたい。

◎終りに一言す

約三千首に餘れる歌を、以上、僅かな文字を以て概評し去つたのは、おほけなくも亦無謀のことであつた。けれども與謝野夫人の實力を、漸く今日に至つて認めた世の中であるから、此の如き大づかみな說も、或る人には何等かの暗示を與へるかも知れぬ。夫人の歌を詳しく說いて、之が評論を試みるのは、文壇の大事業であると同時に、又何人かに依りて是非とも企てられなければならぬ事業である。

夫人の歌は、單に歌として研究することも一つ、思想として何程の感化を及ぼしてゐるかを測ることも一つ、なほ又、其等を透して女性といふものを研究することも一つである、夫人の事業は女性の事業としても代表的である、今後現れて來るかは知らぬが、少くも明治の代に於ては其代表者であらう。

終に臨んで、夫人の集より縱まゝに、其製作を引用したる罪を夫人に謝す。



我が好む演劇と音樂

○文學士　森田草平

●社會劇●　我邦に社會劇なし。

●喜劇●　我邦に喜劇なし。

●西洋劇●　イブセンの脚本『野鴨』は一度舞臺で見たいものだと思ふ。

●其他●　我邦の劇では、作者よりも役者が肝心にて、好きな役者がやるのならば何でもよし、好きな役者は宗之助、莚若。

●義太夫●　堀河。

●長唄●　道成寺。

●箏●　雲井九段。

●西洋樂●　デビユシイのペレアスト、メリサンド(歌劇)。

●其他●　俗曲の中では常盤津、常盤津の中では吉田屋。

○箏曲家　鈴木鼓村

●史劇●　第一に好むところなれども、これはと思ふほどのものを看たことなし。

●西洋劇●　本當のものを看ざれば話できず。

●義太夫●　重の井子別れ。故團平の三味線で、津太夫の咽喉で。

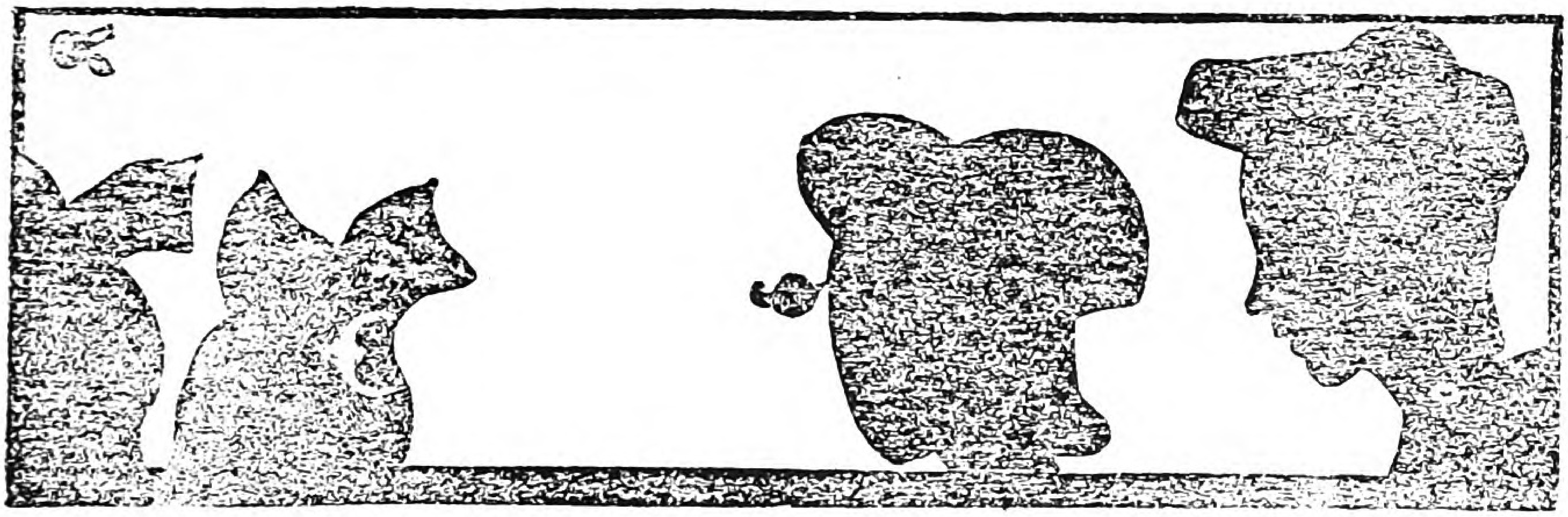
●箏●　器樂としては管絃の箏。箏曲としては組の明石。秋風の曲。及び自作の紅梅。

●西洋樂●　シユマン氏のトラウメリイ。

●其他●　雅樂の賀殿。催馬樂の更衣。朗詠の池冷。平曲の福原都落。

○富山房編輯員　杉谷代水

●史劇●　まとまつた日本の史劇にはろ



くなものなし、一幕づゝなら面白きものあり、妹背山川端。十種香。阿古屋。太十。御殿。彦九。菅四等。

社會劇。近松の博多小女郎。天網島。冥途の飛脚。油地獄。槍權三。萬年草等。

喜劇。狂言、釣狐。うつぼ猿。どぶかつちり。仁王。鈍太郎。金岡。節分。膏藥練。木六駄等。

西洋劇。沙翁のテムペスト。マクベス。トヱルフスナイト等。イブセンのワイルド、ダック。

其他。振事物はかろくて面白し。

義太夫。曲としては東もの、併し眞に味ひあるは西ものなり。布四。野崎。葛の葉。梅忠。御殿。壺坂。

長唄。勸進帳や、筑摩川の如き新曲は感心せず、古曲の方が歌らしくてよし。

箏。箏は好かず、箏の姉なる上方の地歌は大すき。

西洋樂。シムフォニーなら何でも。

其他。謠曲（但し極く上手な）。地方歌。

○

小説家　田村松魚
同夫人　田村とし子

史劇。桐一葉（とし子）。忠臣藏（松魚）。

社會劇。なし（とし子）。なし（松魚）。

喜劇。なし（とし子）。なし（松魚）。

西洋劇。ゼ、ロワー、デプス（とし子）。カーメン（松魚）。

義太夫。野崎。壺坂（とし子）。堀川（松魚）。

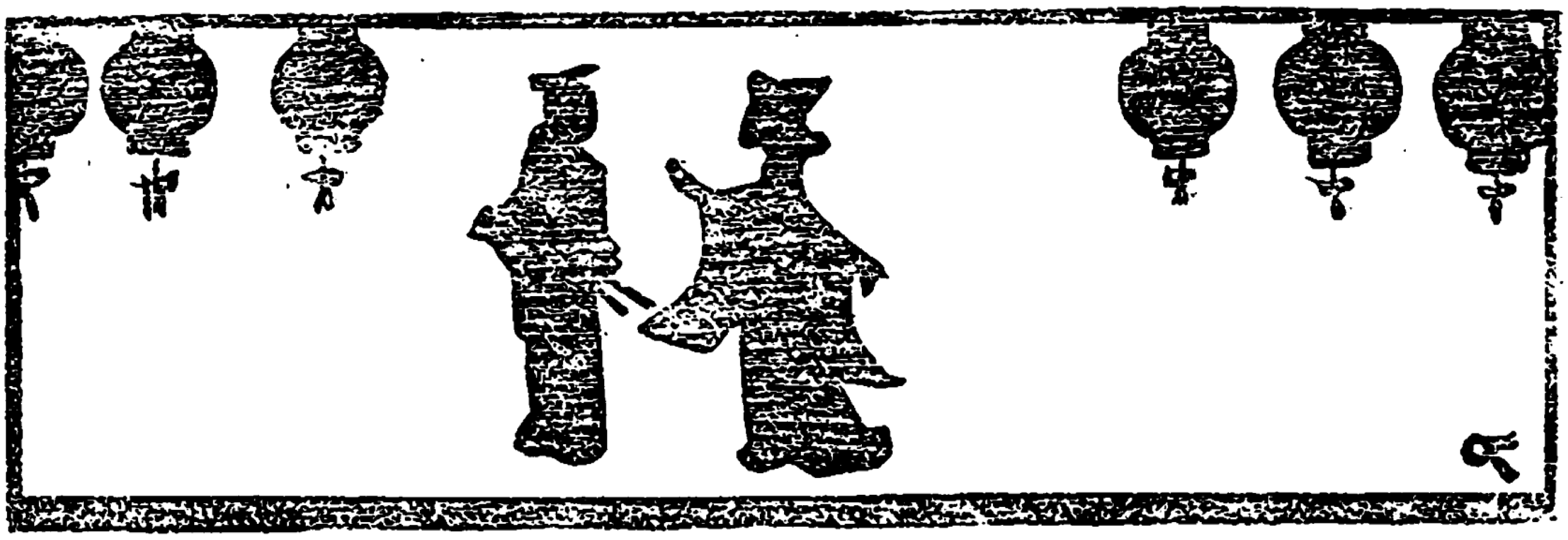
長唄。勸進帳（とし子）。賤機帶（松魚）。

箏。小督（とし子）。なし（松魚）。

西洋樂。なし（とし子）。ドリームの曲（松魚）。

○

評論家　山崎樂堂



●史劇● 無し。綺堂氏の宗任貞任だけは面白かつたやらうと想像する。

●社會劇● 無し。薫氏の夜の宿。寫眞版面で面白し。

●喜劇● 曾我の家の鬚物、特に寶の拍手など。

●西洋劇● 見たこと無し。脚本ではシャントクレール。ロメオ、ジュリエット。

●其他● 歌舞伎十八番＝鎌髭、暫等大部分。世話物＝廓文章。戀飛脚。鰻谷。紙治等大抵。

●義太夫● 酒屋。宿屋。鰻谷。紙治。猿廻。戀飛脚。野崎。寺子屋等

●長唄● 鞍馬。賤機。

●箏● 盛粧したる妙齢の美人が緋の毛氈の上にて、金屛風に圍まれて奏する場合には何曲にても。然らざれば塀の外より。その他は一切好まず。

●西洋樂● 耳に快き許りで、眞の味を嘗め得たことなし。

●其他● 能樂を劇、音樂總てに超えて好む＝花筐。隅田川。安宅。櫻川。百萬。兼平。花月。自然居士。班女。藤戸。松風。實盛。山姥。朝長。清經等。他に俗曲では一中の吉原八景。見物左衞門。小春。少將道行夕霞。又、園八、河東。但し歌澤新内は大嫌ひ。

○

劇評家　井手蕉雨

●演劇● 總じてコレといつて記憶に存するほどのものはありません併し、ひつくるめて芝居ならなんでもきらひではありません。

●義太夫● 合邦(下の卷の奥)。

●長唄● よし原雀。



●箏●西洋樂●　秋風。拙者の全部が組織的に變らぬ限りは正直のところさつぱり分らず。

●其他●　なんでも。但し日本のものに限る。

○『早生』編輯主任　西村醉夢

●史劇●　坪内博士の桐一葉。孤城落月の外には何もない。

●社會劇●　無し。先づ中村吉藏氏の波くらゐのものだ。眞山氏の第一人者も面白い。

●喜劇●　日本にはない。

西洋劇●　上場したのは觀たことがない脚本は大分讀んだが、實際これといつて特に感心したのはない。昔はマアテルリンクが好きであつたが、今は餘り感心せぬ。

●義太夫●　好きな中へは入らぬ。

●長唄●　大抵好きだ。但し意義のないのには閉口する、たゞ曲だけを取る。

●箏●西洋樂●　知らない。壓せられるやうな、力強い、暗い、近代樂は皆好きだ——實は彼是云ふほど分らぬのだ

●其他●　蟲の音樂、山野に於ける自然のオルケストラを愛す。

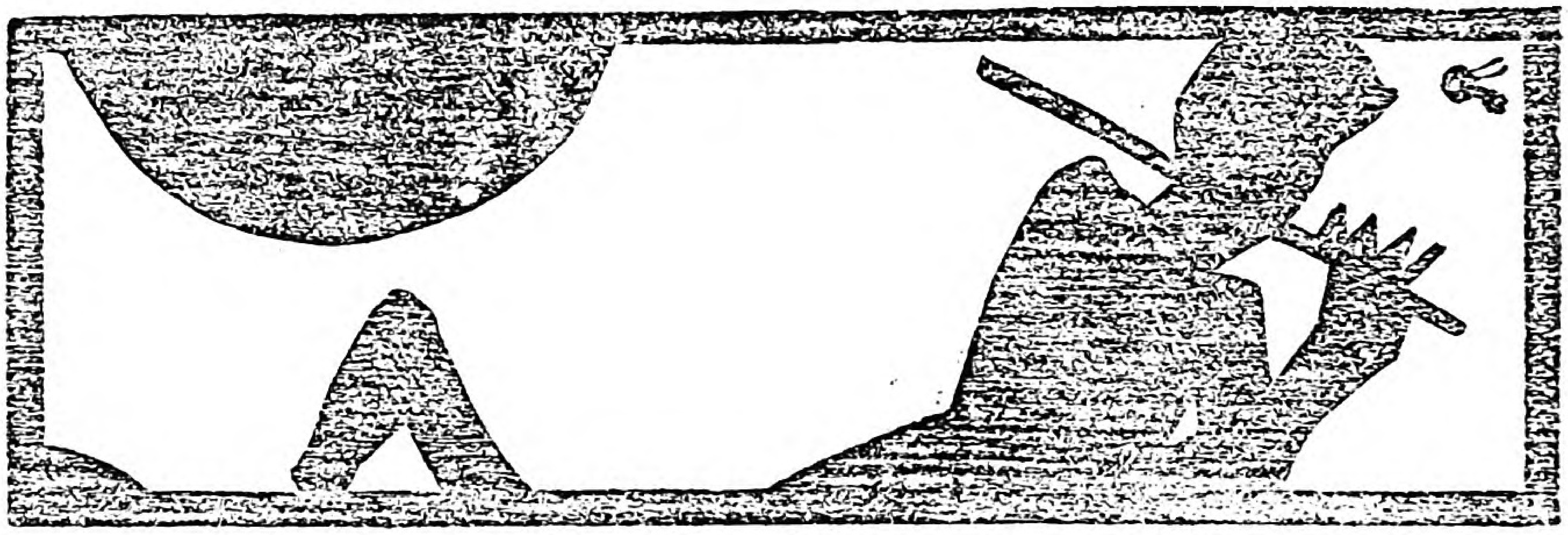
○博士夫人　三宅花圃

●演劇●音樂●　劇はいづれもすきに御座候。音樂はいづれもすきに御座候

○歌人　與謝野寛

●演劇●　舊劇にては中幕物の所作事、近松の世話物を好み候。能狂言も鑑賞眼の無き割に好み候。泰西の劇は脚本にて讀むを樂み候。

●音樂●　義太夫を好み候へど、聽かぬ



こと十年以上に成り候。洋樂は全く解らぬながら、耳慣れんことを努め居り候。三絃の好きなるは、日本人なる故に候べし。

○浮世繪師　鏑木清方

演劇。演劇は油繪の額縁へ日本畫を嵌めたやうなものは嫌ひ。檜舞臺で羽左衛門、梅幸、松助などの昔の芝居を見るのが好き、一番嫌ひなのは新派で演る翻案劇。

音樂。音樂は解せざれど、長唄の勸進帳は何時聽いても面白し。

○貴族院議員　伊澤修二

箏。組物。

西洋樂。ワグネル作曲。

○俳人　内藤鳴雪

拜復。今回演劇と音樂とに關して御尋ねの次第も有之候處、先づ演劇に就て申せば、僕は從來の芝居の時代物にて、それもチヨボ入りのものを好き候。世話物は餘り好かざれども、チヨボ入りのものならば、見ても宜しく候。而して史劇とか社會劇などゝ稱するものは其名稱だけでも最早ハイカラ臭く覺えて蟲が好かず候。因て御尋の目の下には、其他と稱する下に於に、右御答したる心得に御座候。音樂に就ては、義太夫、それも時代物を好き候、世話物は聞きても可し、聞かぬでも可しといふ處に候。右御答申上候也。

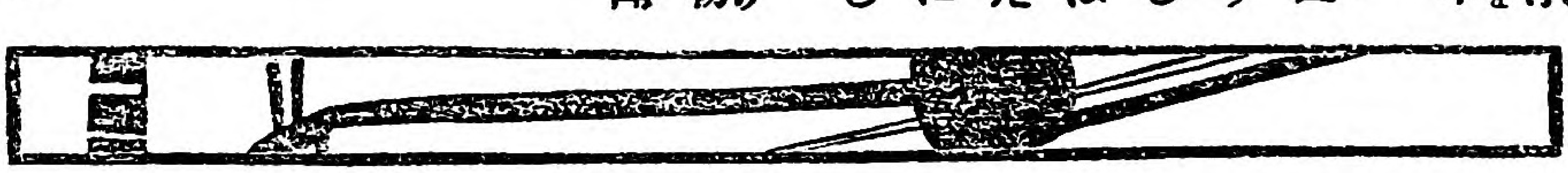
○脚本作家　高安月郊

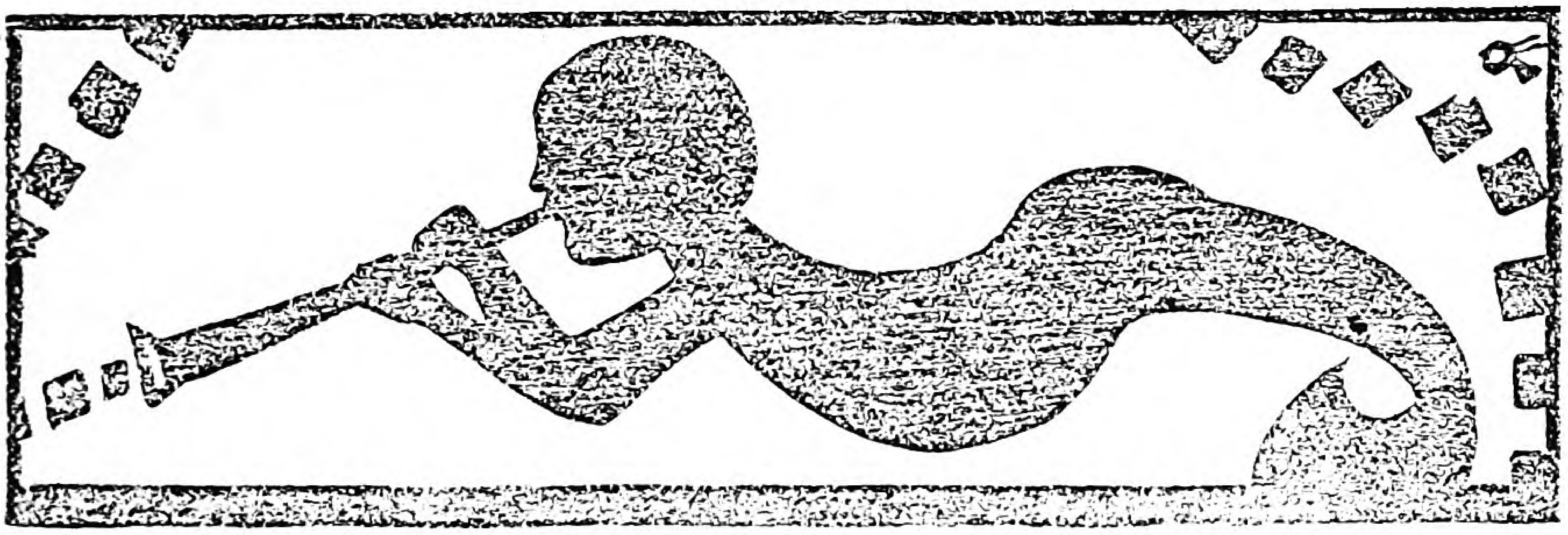
史劇。無。

社會劇。冥途飛脚。天網島。

喜劇。無。

西洋劇。メーターリンクのアグラウヱ





トンとセリセッチ。

●義●太●夫●　堀川。

●長●唄●　勸進帳。

●箏●　千鳥。

西●洋●樂●　ベートーヴェンのエロイカ、シンフオニイ。

○脚本作家　山崎紫紅

●史●劇●　今年のものにて、信西。

社●會●劇●　同じく和泉屋染物店。

喜●劇●　なし。

西●洋●劇●　なんでもよし。

音●樂●　歌澤（演者芝金に限る）。寢ながら枕上に聞ゆる新内。

○實業家　福澤桃介

演●劇●　小生は演劇に對しても毫も趣味無之候。

音●樂●　音樂は嫌ひに候。

○文學士　笹川臨風

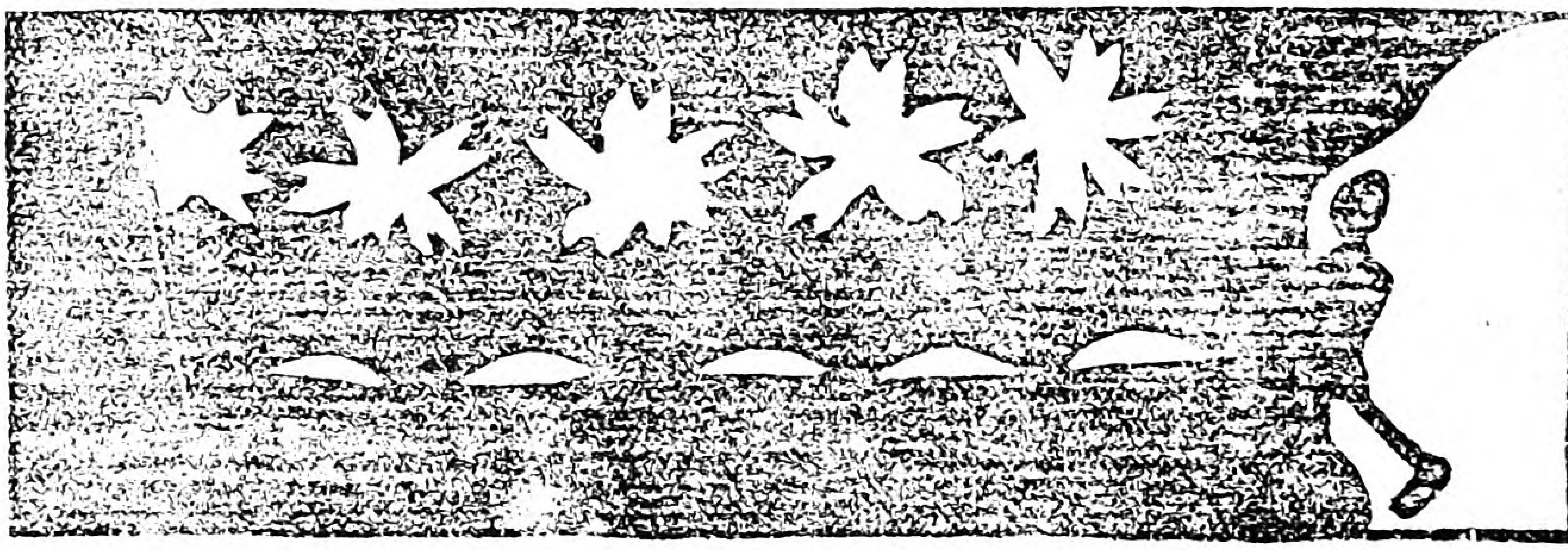
演●劇●　團十郎が死でから、好きな芝居はない。

音●樂●　長唄。清元。一中。河東。新内が好きで、長唄の勸進帳。筑摩川。河東の江戸櫻。水調子などは取分け好きであつたが、今は、歌澤。が大好物である。

○政治家　松本君平

演●劇●　小生は日本劇は餘り感興を惹かず候。西洋劇中、史劇としてはシエキスピヤー物のシーザル。ハムレット等最も好む。社會劇としてはカミールサホー、トスカ等最も好む。

音●樂●　音樂としては義太夫、長唄等多くの興味を有せず候。最も好むものはピヤノ、バイオリンの樂なり。日本音樂としては尺八を最も愛す。



○詩人　薄田泣菫

・社會劇・　がおもしろい。

・西洋劇・　書物にてもかなり讀みたれど舞臺にて見しは三四度のみ、その三四度の印象は今にあざやかに殘れり。

・義太夫・　よきところ僅かにありて、態とらしきところ多し。

・長　唄・　ちよとおもしろし。

・西洋樂・　好き。もすこし深く味ひたし

○『帝國新聞』主筆　結城禮一郎

・義太夫・　三勝半七美濃屋の段。

・長　唄・　賤機帶。

・箏・　何でもいゝ鼓村君のやるものなら。

・西洋樂・　ピチカト、ガボッテ。

・其　他・　此の中へ清元の一日逢はねばを入れて置いて下され度候。

○小説家　磯萍水

・史　劇・　天狗舞。貞任宗任。

・喜　劇・　身代り座禪。

・西洋劇・　當地にては外人の素人劇や、旅役者の現代物を見られるがまづ自由劇場の夜の宿か。

・其　他・　いつまでも好きなのはだんまり。

・義太夫・　野崎。酒屋。

・長　唄・　時雨西行。橫笛。土蜘蛛。

・箏・　茶音頭。

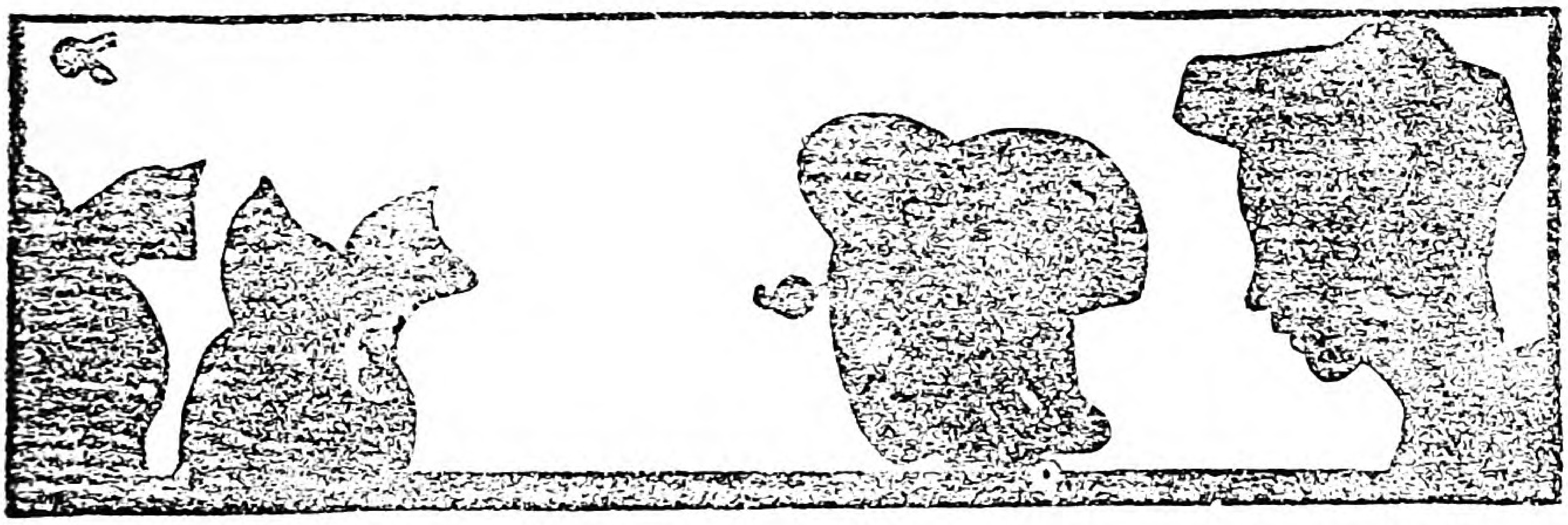
・西洋樂・　二人できくのはタンホヰゼル一人できくのはベルソヰヅ。

・其　他・　夜更けての祭の囃子。向ふ河岸の新內流し。壬生狂言の鐘の聲。幕あきの拍子木の音。

○小説家　德田秋聲

・史　劇・　舊來の史劇は優人によりては好しと思ふものあり。

・社會劇・　これぞと思つたものなし。



●喜劇● おなじ。
●西洋劇● 多く見ざればわからず。
●義太夫● 唄がゝつたものはよし、戻橋。吉田屋。のやうなもの。
●長唄● 大抵同じくらゐの心持で聞かれるやうなり。
●箏● 曲名を知らず。
●西洋樂● おなじ。

○ 醫學博士　山口秀高

●演劇● 小生は如何なる種類の劇も好み候へども、當今日本の劇には氣に入り候者無之候。西洋ものは別として矢張古代の歌舞伎劇面白く存じ候。然しこれとても十分感服はいたさず。

●音樂● 義太夫はあまり好まず。長唄の方却つてよろし、然し音樂はあまり分らぬ方に候。西洋樂も能くは分らぬながら、善良の者でベートーベン。ワグネルの作ときけば、矢張よろしきやうに感じ候。されば矢張わからぬと申す方本當なり。

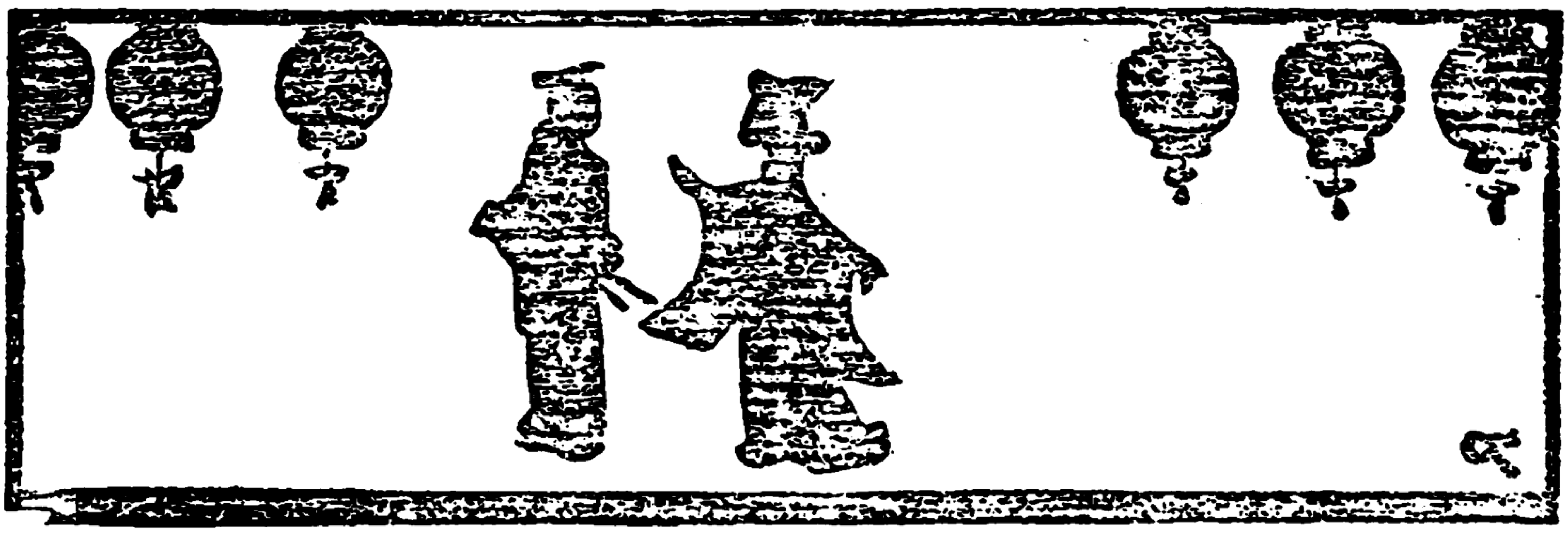
○ 劇評家　松居松葉

●演劇● 御尋ねの劇の分類法は學者のわざくれ、われら單に演劇を愛好するものには、こんな分類の必要なし。小生はよい芝居、面白い芝居が好なり。

●音樂● 西洋樂はパリの大オペラあたりのオーケストラなら分らねど好き。日本樂はむかし分つた振をした時もあれど、今は聯想的に面白く思ふのみ。但し義太夫は今の節づけが無理らしく、きらひなり。

○ 小說家　岩野泡鳴

●史劇● 氣にかなふ物なし。



・社會劇・　同上。
・喜劇・　同上。
・西洋劇・　イプセンもの、並にその類。
・其他・　紅葉狩。闘の戸。の如き一種の歌劇的所作事。
・義太夫・　梅忠の如きもの。子役の出るのは凡てきらひだ。
・長唄・　道成寺の如きもの。
・箏・　なし。
・西洋樂・　よくは分らないながら、外國音樂家のを聽いて、引き入れられたこと二三曲ある。

○音樂家　東儀鐵笛

・演劇・　どの種類のものでも舞臺上の統一された劇ならば、見て居て心持がいゝ。
・音樂・　調和したるものならば、いづれも捨て難い。しかし一番好なのは、西洋樂である。

○小説家　塚原蓼洲

・史劇・　貞任宗任。
・社會劇・　女夫波。
・喜劇・　最愛の妻。
・其他・　唄も手ぶりも面白きは帝國座の羽衣。
・長唄・　道成寺。
・其他・　一中の根曳の門松。いつきくも好し。

○文學士　小林愛雄

・演劇・　邦劇では助六。猿若狂言。近松物。など。歐劇では沙翁のマクベス。パオロとフランチエスカ。トリスタンとイソルデなど。日本の社會劇、喜劇は未だ心をひけるものなし。
・義太夫・　野崎。
・長唄・　おかる。めりやすもの。
・箏・　雲井弄齋。組歌。
・西洋樂・　ヘンデルのランゴオなど。



其他・和洋とも名手の名曲は皆好きです。

○ 歌人　窪田通治

史劇・何と申してよきやら、やはり役者を見ることに落ち候。幼くて觀たる赤垣源藏を忘れず候。

社會劇・觀る機會を得ず候。

喜劇・これと覺ゆるものなし。

西洋劇・夜の宿を見て作者に驚き候。

義太夫・三十三間堂など。

長唄・賤機帶。といふを聞きて快感を得候。

箏・曲は知らず、其時の氣分による。新綠の頃、細雨の日など。

西洋樂・何と名は知らず、聞きたる限りの物、或る程度までは殆ど面白く候。

○ 詩人　三木露風

演劇・その何れを問はず好み申候へ共、外國物の社會劇を觀んことを目下は希望致し候。

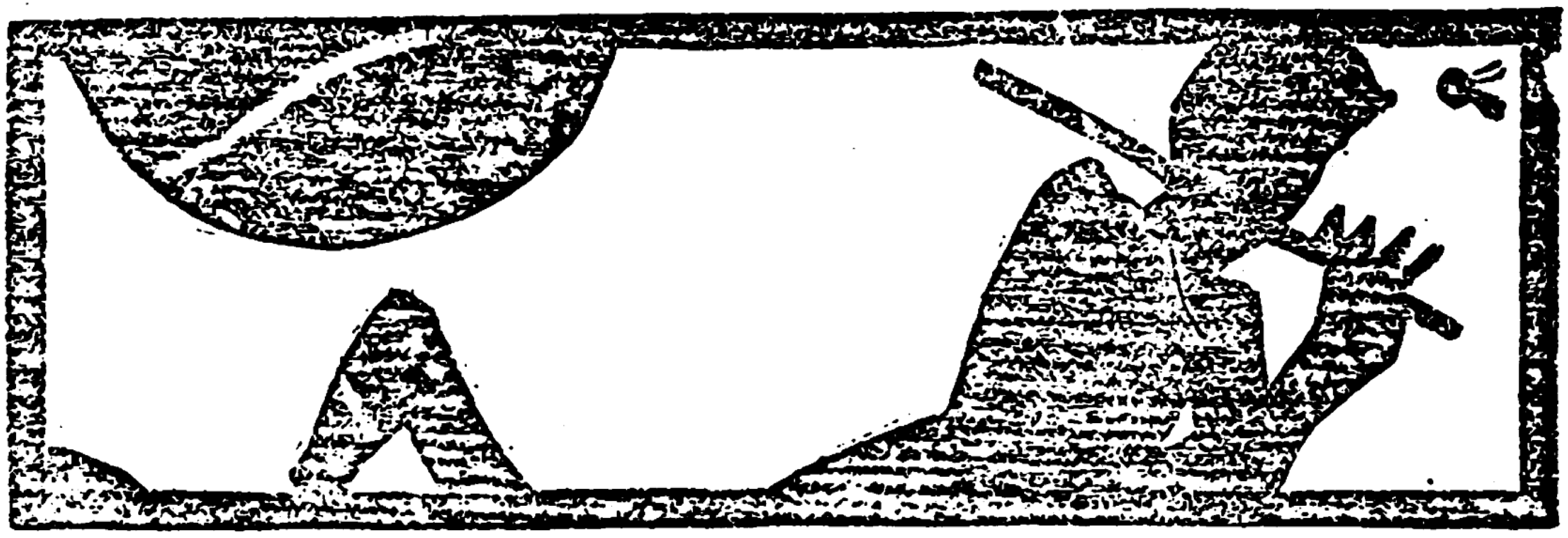
義太夫・呂昇の紙治。堀川。美光の柳など。

長唄・秋の色種。並に浦里時治郎の一くさりは小生の忘れんとして忘れ得ざるもの。

其他・日本の歌曲に類するものは、端唄の類に至るまで好み申候

○ 小說家　島崎藤村

音樂界の新聲はもとより望むところでありますが、遙かに接し得べくも思はれません。洋樂は依然翻譯の時代と思はれます。近頃心引かれるのは、紫朝が彈き且歌ふ曲などであります。あの中には、人の啜り泣の聲を聞くことが出來ると思ひます。演劇も今は、舊いものが、日に〳〵壞れて行くといふ時でせう。斯樣なことを書きつけて御答



にかへます。

○　文學士　澤村胡夷

●演劇●　この方は好きといふ程のものなし、但しきらひにはあらず。

●義太夫●　傾城戀飛脚(新口村の段)。

●長唄●　勸進帳。

●箏●　鶴の巣ごもり。

○　脚本作家　中村吉藏

●史劇●　團十郎の演じたる地震加藤。善かつたとは思ふが今はなし

●社會劇●　近松の心中物、梅忠。天網島。油地獄などを大阪の名優に依て演じさせると見られる、助六なども好き。

●喜劇●　日本に今日まで喜劇らしい喜劇は無かつた、皆下らぬ笑劇ばかりだ。随つてつまらぬ。

●西洋劇●　イブセンでは少アイヨルフ。人形の家。野鴨。ヘツダなどショウのカンデヰダも好い、その他随分多い。

●其他●　要するに、名優が演ずれば、下らぬ脚本も面白く見られる場合が多い、随つて一概には云へぬ。

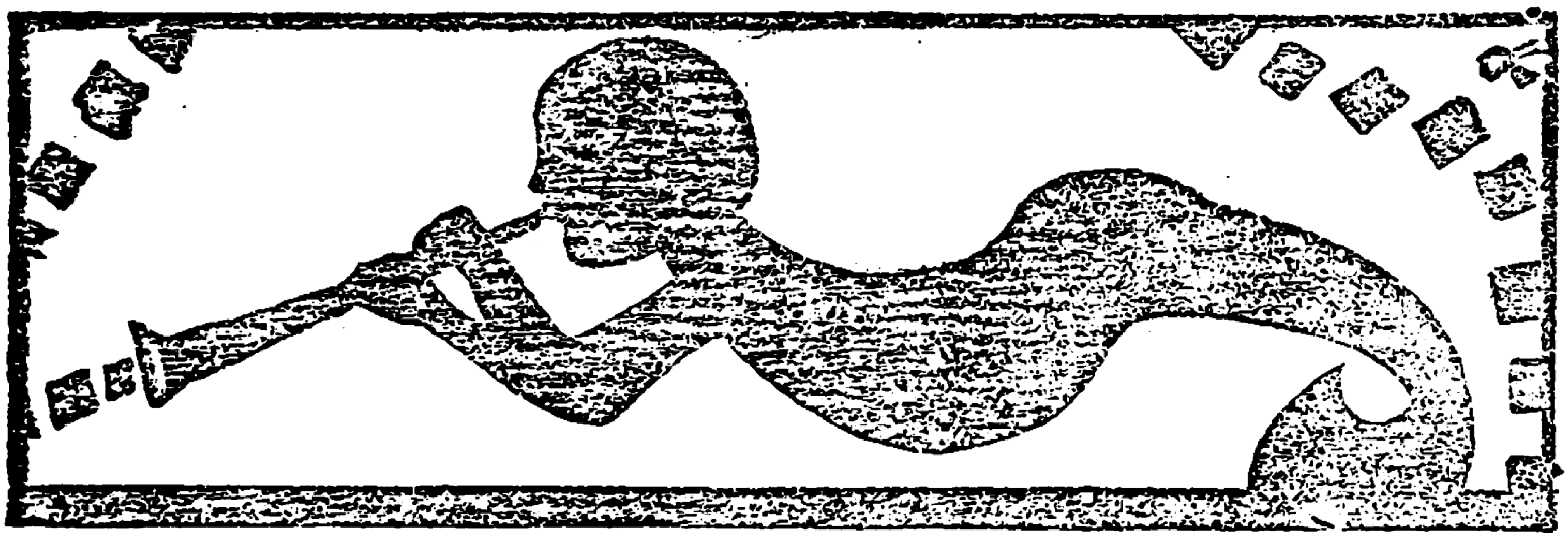
●義太夫●　名人が演ずれば何んでも相當に面白いが、先づさわりなどの部分的な處がよい。

●長唄●　勸進帳。その他随分よいのがある、但し之も名人の咽喉が要る。

●西洋樂●　ワグネルや、ストラウスのオペラ。

○　東京音樂學校長　湯原元一

●演劇●　觀れば何んでも面白い。喜劇などは下手な役者のものでも面白い。併し面白いと、感心とは別の意味であるといふことを附言して、役者の修養を



望んで置く。

音・樂・　聽けば何んでも面白い。別けて義太夫は拙いのでも面白い但し、これは理窟ではない、理窟をいへば、他に面白からざるべからざる音樂がある。

○美術家　高村光太郎

西洋劇・　メエテルランクの物を、よき俳優の演じたる。
義太夫・　大隅の壺坂。
長唄・　伊十郎の勸進帳。
箏・　×
西洋樂・　概してフランス音樂。

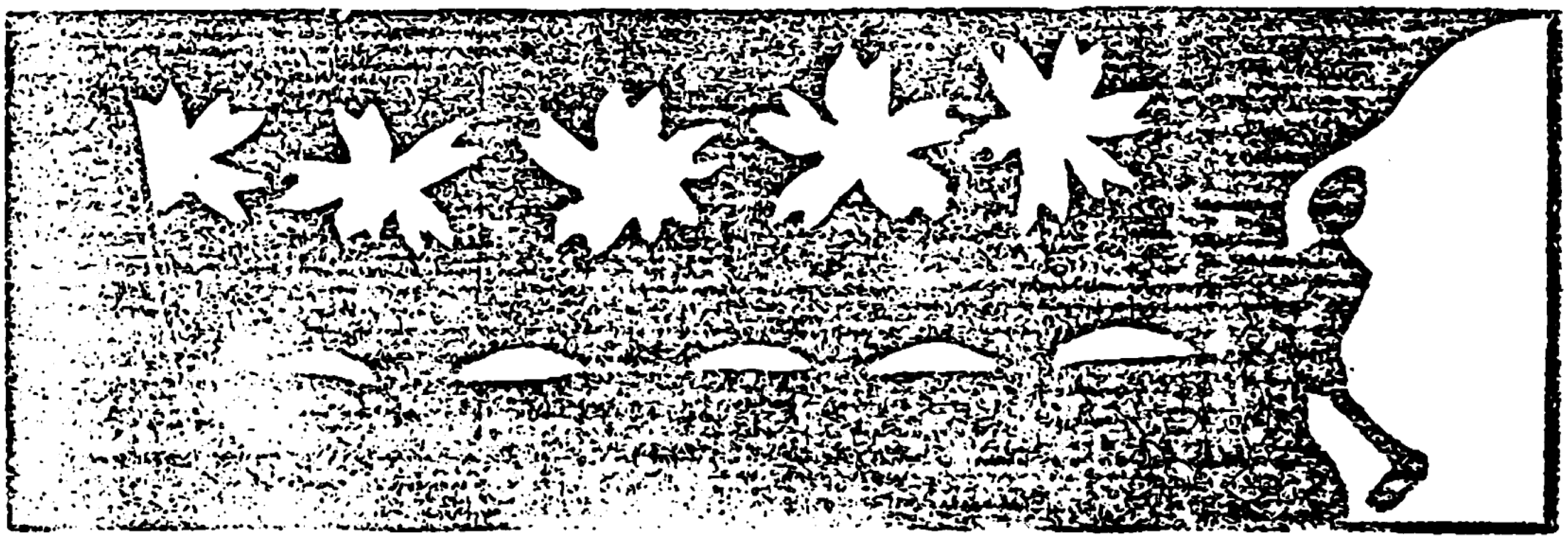
○「歌舞伎」主筆　鈴木春浦

史劇・　安政黒船話（綺堂氏作）。
社會劇・　假面（鷗外氏作）。
喜劇・　夏小袖。
西洋劇・　馬盜賊（鷗外氏譯）。
其他・　大安寺堤。

義太夫・　壺坂寺の段。
長唄・　勸進帳。
箏・　雁と燕（鈴木鼓村氏曲）。
其他・　新内の蘭蝶。

○評論家　高須梅溪

史劇・　義經千本櫻。慶安太平記。酒井の太鼓。大杯。大森彦七。
社會劇・　戀飛脚大和往來。心中天網島。三人吉三。女殺油地獄。
喜劇・　左小刀。矢の根。文七元結。
西洋劇・　是は一概に答へ難し、イブセン。ショオなどのものを好む。
其他・　喜劇は假に名を擧げたるまでなり、其他も思ひつきしまゝなり。
義太夫・　傾城戀飛脚。新版歌祭文。
長唄・　相生獅子。吉原雀。道成寺。
西洋樂・　箏と西洋樂は之と指定し難し殊に西洋樂は充分に分らず、但しわからぬながらも少々好



きなり。

○小説家　尾島菊子

●史劇●千本櫻。
●社會劇●天網島。
喜劇●惡落のしないものならなんでも好き。
●西洋劇●まだそんなに見ないからよく知らず。
●義太夫●朝貌日記。野崎。
●長唄●勸進帳。
●箏●熊野。小督。櫻狩。
●西洋樂●獨唱。
其他●清元。常盤津。小唄もの。

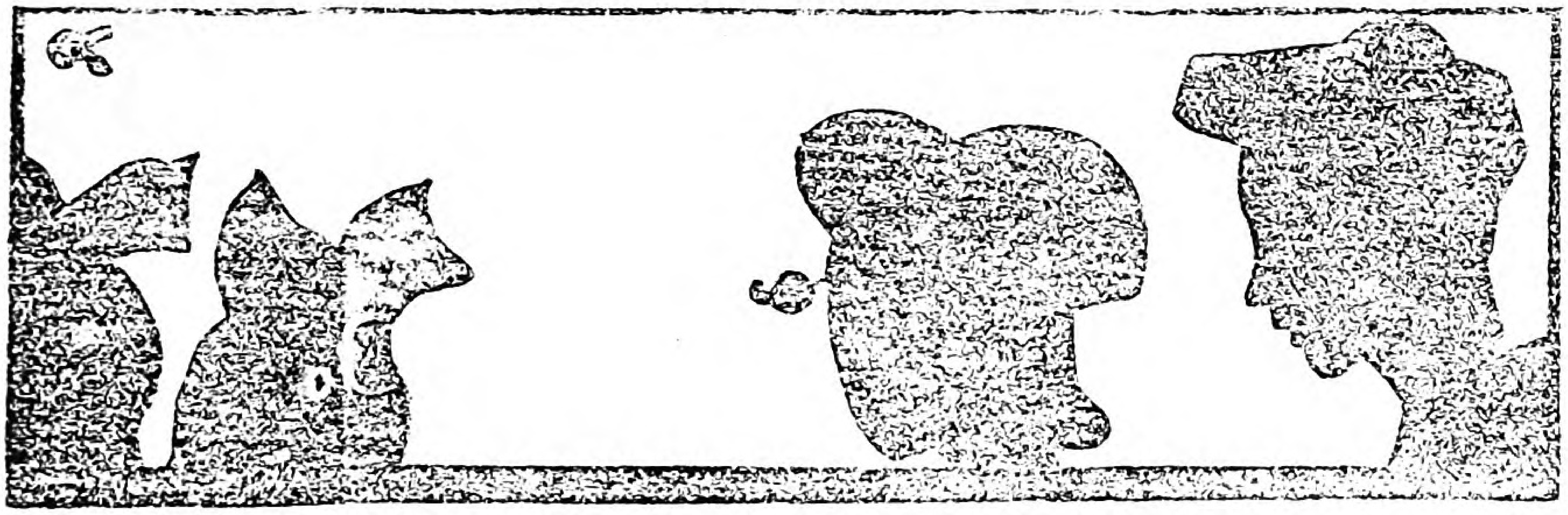
○脚本作家　佐野天聲

●史劇●無し。
社會劇●世話物といふ意味ならば五大力。
喜劇●日本劇中には喜劇らしい喜劇を記憶しません。

●●西洋劇●見たこと無ければ何とも申上がたし。但し讀んだものゝうちではイブセンのヘダガブラー。
●其●他●勸進帳。關の戸。
義●太●夫際立つて好きなものはありません。
●長唄●一寸思ひ出せません。
箏●なんにもありません。
西洋樂●聞いても解らないから好きなものはありません。
其●他●樂器では尺八が好きです、但し曲名を彼此いふ程の智識はありません。

○詩人　北原白秋

演劇●どうも困りました、一寸言へません。
音樂●どうも困りました、一寸言へません。



史劇・
社會劇・
西洋劇・
義太夫・
長唄・
箏・
西洋樂・
其他・

小説家　正宗白鳥

累。
牡丹燈籠の類。
ハムレット。
堀川など。
越後獅子など。
きらひ。
知らず。
常盤津の乘合船など。

○

史劇・
社會劇・
喜劇・
西洋劇・
其他・
義太夫・
長唄・
箏・

歌人　吉井勇

なし。
近松物の大部分。及び默阿彌物の大部分。
毛抜などの十八番物の一部分見ねば知らず。
自由劇場にてボルクマンを見たる夜の心地今に忘れず。
小磯ケ原。合邦。紙治炬燵等。
よく分らねど好きなり。
同上。

西洋樂・
其他・

同上。
新內。清元。歌澤は殊に好きなり。

○

史劇・
社會劇・
喜劇・
西洋劇・
其他・
義太夫・
長唄・
箏・
西洋樂・
其他・

劇評家　森眞如

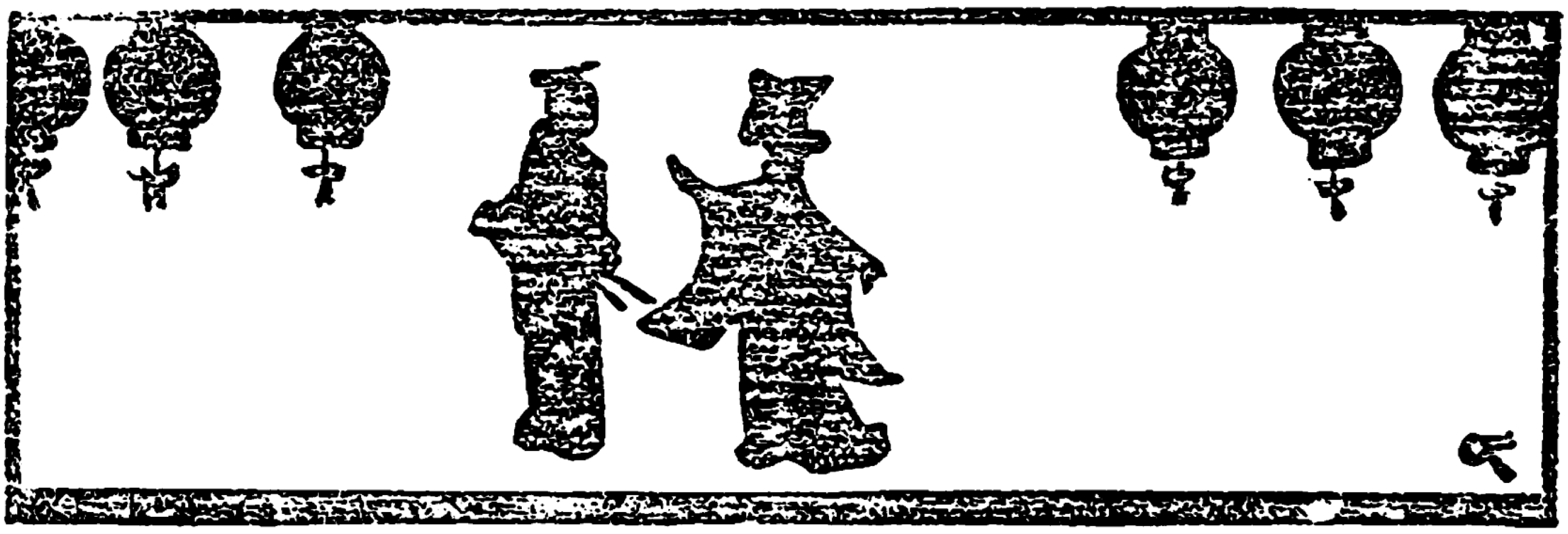
高時天狗舞。孤城落月。
不如歸。乳姉妹。
曾我の家劇の四海波。
ジョン、ガブリエル、ボルクマン。オセロ。
所作事。狂言。踊。
壺坂。新口村。堀川。
大薩摩。獨吟（シノビ三重、引込三重、
熊野。松竹梅。
ピヤノ獨奏。
清元。一中節。

○

史劇・

脚本作家　岡本綺堂

は小生大好に御座候へ共、いまだ「最も好む」といふほどの



もゝに接せざるは遺憾に存じ居り候。強て求むれば、故默阿彌翁作の高時。のたぐひに御座候。

社會劇

所謂世話物といふ意味より申せば、矢はり默阿彌の島鵆月白浪。など面白く拜見いたし居り候。又新らしき社會劇にては、眞山青果氏作。第一人者。など感服いたし候。

喜劇

これには餘り感服したるものを拜見いたさず候。岡鬼太郎氏作の二夫婦。など、今少し手を入れたらば、結構なものに相成るべきかとも存じ候。

西洋劇

已に劇と申すからは、脚本にあらずして上場せられしものを意味することゝ存じ候。小生不幸にして、西洋人の演じたる完全の西洋劇を見物したる事無之候間、何とも御答申上かね候。

- 義太夫　時雨の炬燵。
- 長唄　高尾。
- 箏　知らず。
- 西洋樂　解らず。

○劇評家　水谷幻花

- 史劇　高時。
- 社會劇　文七元結。
- 喜劇　膝栗毛。
- 西洋劇　ハムレット。
- 音樂　歌澤と新内（曲目は悉く）。

○劇評家　森燧洋

- 史劇　賴朝。
- 社會劇　小公子。
- 喜劇　ふた面。
- 西洋劇　ハムレット。
- 其他　五人男。
- 義太夫　合邦。
- 長唄　勸進帳。



●箏● 知らず。

●西洋樂● 知らず。

●其他● 詩吟。琵琶。

○　脚本作家　伊原青々園

花といふ花とり〴〵に面白きが如く、演劇、音樂に此れぞ好きと目錄にして書き出すこと、むづかしく候。

○　脚本作家　長谷川時雨

●演劇● いづれをも好み候なかにも、史劇と淨瑠璃劇を好み候。

●義太夫● にては艶もの。

●長唄● にてはめりやすもの。

●箏● は生田流などの、のびやかな曲。

●西洋樂● は分らず。

○　詩人　兒玉花外

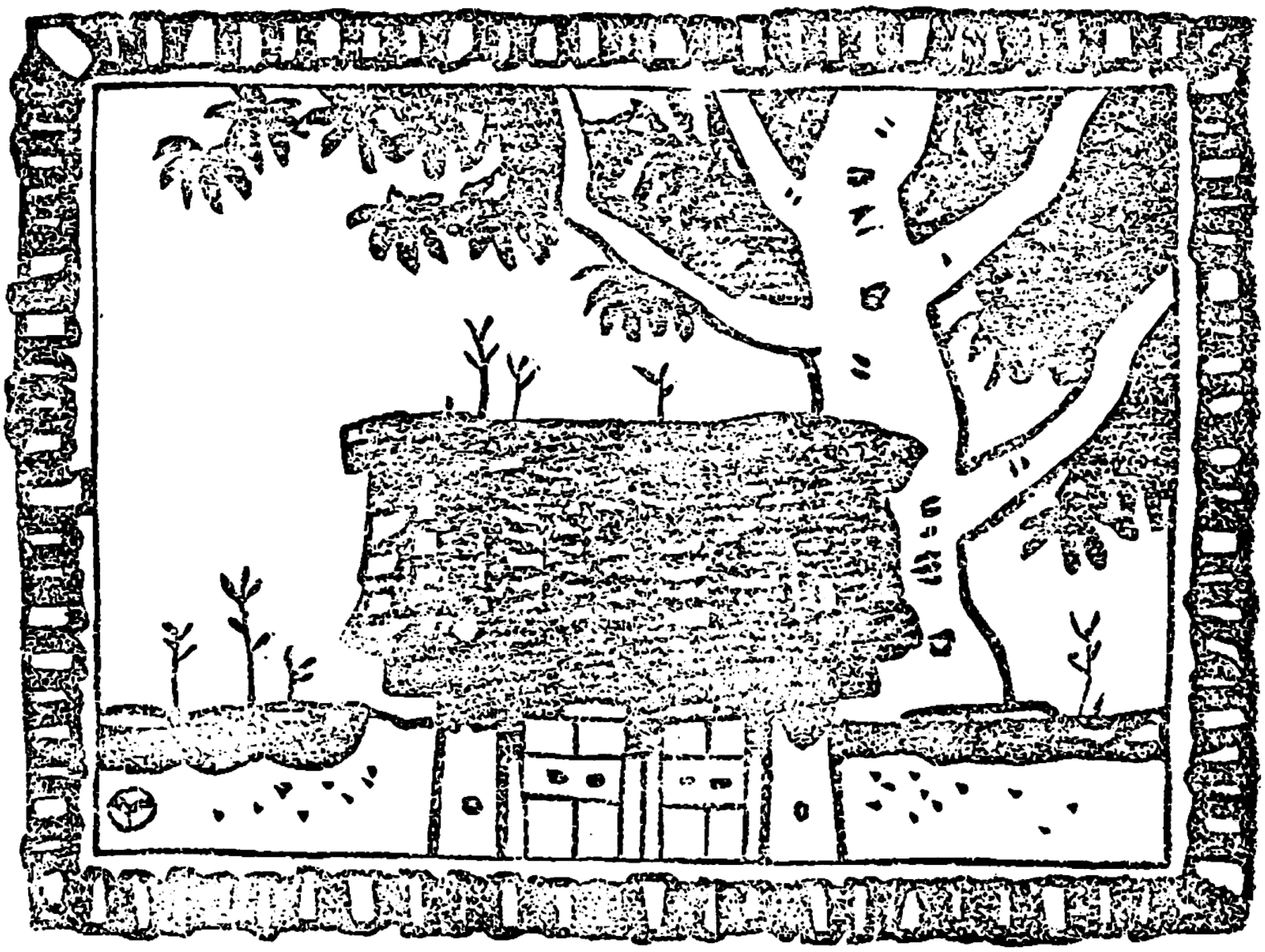
●西洋劇● ハムレット。

●音樂● 歌澤。

附言

右に掲げた『わが好む演劇と音樂』は本社編輯局よりの問ひに對して答へられたものである。問は單に演劇の部では史劇、社會劇、喜劇、西洋劇、其他とし音樂の方では、義太夫、長唄、箏、西洋樂、其他として分類した。此の分類もむづかしい法則に據つたのではない。近頃の新しい言葉で、一般に用ゐられて居るものに據つたのである。此の漠然たる問に對し、各要領ある答を寄せられた諸賢には謹んで感謝の意を表する次第である。順序は答の到着の順に據つて列擧したのである。

記者



門

——小品六篇——

竹久夢二

昔より、紅顔の美少年、富貴功名を夢みつゝ、この門を出でたものは幾人あつたらう。そして白馬に跨つて歸つたものが幾人あるだらう。老いたる母は、今もなほ門に立ちつくしてゐる。

或は、不義の名を得て、星暗き宵、裏門よりのがれて、乳母の情を泣いた姫御前は幾人あつたらう。叩けども叩けども、曾て開かれざりし幸福の城の扉を叩いてゐる顏白き若人もあつた。雪の朝、花の暮、うき世の旅路にゆきくれて、人の情のうす衣を身にまとひつゝ、父が家の門の戸に悔の泪を流した少女もあつたらう。

落人

それでは、ばあや

お孃樣

隨分、達者でゐておくれねえ。おまへにも長い間世話をやかせたわ、ねえ、ばあや私は恩にきますよ。

何のまあ勿體ない。おありがたう存じます、そのお言葉をきいたばかりで、このばあやは思ひ殘すことも御坐りませぬ。したがお孃樣え、どんな事があらうとも必ず〳〵短氣はお出し遊ばしますな、人の噂も七十五日、噂さへなくなれば御勘當もゆれませうゆゑ、ばあやが命にかけても、お連れ申しますほどに。

うれしいわ、ばあや。縁があつたらまた逢ひませうねえ。

ま、悲しいことを仰らずに、どうぞその日をお待ち遊ばしませ。

それでは、ばあや。

お二方樣……………………………



細道

こうこは
何處の細道ぢや　細道ぢや
天神樣の細道ぢや　細道ぢや
こうこを
通して下しやんせ　くだしやんせ
切手がなくては
通らせぬ　通らせぬ
一枚、二枚、三枚、四枚
五重の塔


天神様の細道

破れ三味線

この垣一重が鐵の、戸をたゝくにも叩かれず、勘當になつた袖萩親子のものは、泣聲さへも憚つてゐた。謙仗はそれと氣づいて、ぴつしやり戸をしめた。濱夕は何こゝろなく外を見ると、そこには娘の袖萩が、あられもない姿をして泣いてゐる。逢ひたかつた、逢ひたかつた、何から話さうと胸が一ぱいになつた。けれど晴れて逢へない身の上なので、門の内から濱夕は、

『これ〳〵旅の歌うたひ、お錢がほしくばなぜ歌をうたはぬぞ、願のすぢも何なりとさあ、歌ふてをきかせ』と言ふと、門の外では、久し振りに逢つた母の手前、琴の絃とはちがつて、皮も破れた三味線に、その日その日の露命をつなぐ今の身の上を耻ぢて、歌ひもえずに泣くのであつた。


破れ三味線

嵯峨野

叩けども叩けども、遂に門の扉は明かなかつた。耳を扉によせて聞けば、四曼不離の振鈴の響が、頃しも初秋の夜の空氣を傳はつて來る。往生院の門に身をなげて横笛は、紅花綠葉の衣の袖に泪を拭いたのであつた。

『生みの親にさへゆるさぬこの胸、女子の耻をも顧みず聞えまゐらするに、こゝ開けたまへ瀧口殿、情なきのみが佛者かは。夢と見たまふ昔ならば、情なかりし横笛とは思ひ給はざるべきに。今宵ならでは世を代へても相見んことのありとも覺えぬに、喃、瀧口殿』けれども遂に答へはなかつた。


嵯峨野

秘密

少女『あら、そこから入つちやいけない！』

青年『では、どうすれば好いんですか。この門を入らねば逢ふことは出來ないぢやありませんか』

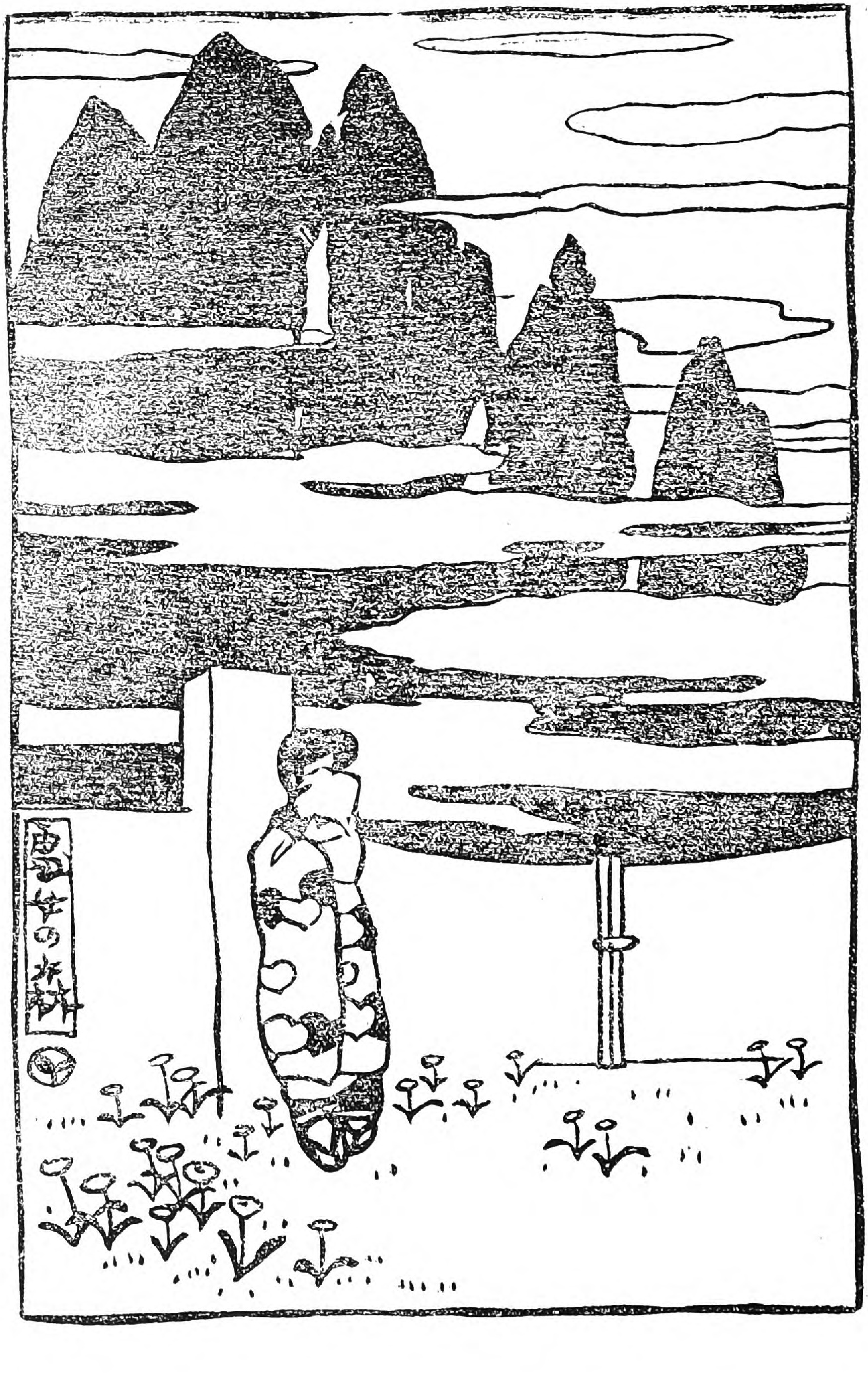
少女『でも、この扉ばかりは明けられませんわ』

青年『扉をあけずに逢はうといふのは、そりや無理といふものです。それでは、岡を續つて來いといふのですか。それならばお別れしませう』

少女『そりやいやですわ。こゝであなたに逢ふまでに、私はまあどんなに恥かしい目をしたことか。どんなにならうとこの手は放しませんわ』

青年『それじやあ、この扉をあけませう』

少女『いけない！　いけない！　こゝから入つちやいけない』



齋宮

昔、ある男があつた。内裏の御使で、伊勢の國の齋宮にゆくことがあつた。

海近き南國の五月の風は都育の男の肌を、どんなに快く吹いたらう。男は靜こゝろなく、神垣にもたれて、杉の木立に交つた遲咲きの山櫻の散るのを見ながら、都で別れた女どもの事を思つてゐた。

折しも黑髪長く、顔白き女が、礫石を音もなく踏みながら、忍びやかに男に近いて、

千早振る神のいがきもこえぬべし
大宮人の見まくほしさに

と詠むだ。都の詩人は、聲をついで

戀しくばきてもみよかし千早振る
神のいさむる道ならなくに

と歌つて女の手をとつた。


青宮

世界百文豪

一順序は出生の年に據る。
一初め二百人を選び、其中より又百人を選べり。
一ベルギー、イスパニア、ポーランド、ハンガリー、印度、ペルシヤ等を加へず。
一總て現代の文學者を加へず。

ギリシア

ホメロス(紀元前九百五十年頃)敍事詩人、「イリアス」の作家
ピンダロス(紀元前五二二—四四三)詩人、行列歌、凱旋歌を多作す
エスキラス(紀元前五二五—四五六)戲曲家、悲劇の創始者
ソフォークレス(紀元前四九五—四〇五)悲劇作家
ユーリピデス(紀元前四八〇—四〇七)同

ローマ

ホレース(紀元前六五—八)詩人、『詩術』を著はす
オヴィッド(紀元前四三—紀元後一八)抒情詩人

イタリー

ダンテ(一二六五—一二九〇)詩人、「新生」及「神曲」の作者
ペトラルカ(一三〇四—一三七四)抒情詩人、ローマの桂冠詩人
ボッカチオ(一三一三—一三七五)小說家「デカメロン」の作者
レオパルディ(一七九八—一八三七)詩人奇警なる散文あり

イギリス

チョーサー(一三四〇—一四〇〇)詩人「カンターベリ物語」の作家
スペンサー(一五五二—一五九九)詩人、「仙女王」の作家
ベーコン(一五六一—一六二六)評論家、「學問の進步」の作家
シェークスピア(一五六四—一六一六)戲曲家、「ハムレット」の作家
ミルトン(一六〇八—一六七四)詩人、「失樂園」の作家
バンヤン(一六二八—一六八八)詩人、「天路歷程」の作家
デフォー(一六六一—一七三一)小說家、「ロビンソー」の作家
スウィフト(一六六七—一七四五)諷刺作家、「小人島」の作家
アディスン(一六七二—一七一九)批評家、「スペクテーター」主筆
ポープ(一六八八—一七四四)古典詩人、「批評論」の作家
ジョンソン(一七〇九—一七八四)評論家、「ラセラス」の作家
ゴールドスミス(一七二八—一七七四)小說家、「ヴイカー」の作家
ワーヅワース(一七七〇—一八五〇)桂冠詩宗、「逍遥行」の作家
スコット(一七七一—一八三二)詩人、小說家、「湖上の美人」の作家
コールリッヂ(一七七二—一八三四)詩人「老水夫の唄」の作者
バイロン(一七八八—一八二四)詩人、「チャイルド・ハロルド」の作者
シェリー(一七九二—一八二二)詩人、「解脱プロメイトス」の作者
キーツ(一七九五—一八二一)詩人、「エンディミオン」の作者
マコーレー(一八〇〇—一八五九)批評家「英國史」が有名
カーライル(一八〇五—一八八一)批評家、「英雄崇拜論」の作者
テニスン(一八〇九—一八九二)桂冠詩宗「イン・メモーリアム」の作者
サッカレー(一八一一—一八六三)小說家「ヴァニチユー・フエア」の作者
ディッケンス(一八一二—一八七〇)小說家近代寫實主義の始祖

ブラウニング（一八一二―一八八九）詩人、「指環と書物」の作者
エリオット女史（一八一九―一八八〇）小説家、「アダム・ビード」の作者
アーノルド（一八二二―一八八八）詩人、批評家
ロゼッティ（一八二八―一八八二）詩人、「生命の家」の作者
メレディス（一八二八―一九〇九）小説家、詩人
スウィンバーン（一八三七―一九〇九）詩人、詩論家
ラスキン（一八四九―一九〇〇）批評家、「近代畫家」の作者

アメリカ

アーヴィング（一七八三―一八五九）小説家、「スケッチ、ブック」の作家
ブライヤント（一七九四―一八七九）詩人、「死觀」の作者
エマスン（一八〇三―一八八二）批評家、哲學者、「自然」の作者
ホーソーン（一八〇四―一八六四）小説家、「赤文字」の作者
ロングフェロー（一八〇七―一八八二）詩人、平明な抒情詩を作る
ポー（一八〇九―一八四九）詩人、散文家、散文詩を作る
ロウウェル（一八一九―一八九一）批評家
ホイツトマン（一八一九―一八九二）詩人、詩形破壞の第一人
ジェームズ（一八四三―一九一〇）小説家、心理學者をして名あり

ドイツ

ゴットシェッド（一七〇〇―一七六六）詩人、詩論家、批評家
ヴィンケルマン（一七一七―一七六八）批評家、「古代美術史」の作者
クロップシュトック（一七二四―一八〇三）詩人、「救世主」の作者
レッシング（一七二九―一七八一）批評家、「ラオコーン」の作者
ヘルデル（一七四四―一八〇三）批評家、民謠の研究者
ゲーテ（一七四九―一八三二）詩人、「ファウスト」の作者
シルレル（一七五九―一八〇五）詩人、戯曲家、「テル」の作者
ウーランド（一七八七―一八六二）國民詩人、シュワーベン詩派の首領
ハイ子（一七九七―一八五六）抒情詩人
レナウ（一八〇二―一八五〇）抒情詩人、「ファウスト」を作る
ワグネル（一八一三―一八八三）戯曲家、樂劇の創始者
ボーデンステッド（一八一九―一八九一）詩人、ミュンヘル詩壯の驍將
ニーチェ（一八四四―一九〇〇）哲學者、「ツァラトウストラ」の作者

フランス

ラ、フォンテーヌ（一六二一―一六九五）詩人、寓話作家
コルネイユ（一六〇六―一六八四）悲劇作家、學士院の人
モリエール（一六二二―一六七三）喜劇作家
ボワロー（一六三六―一六七二）
ルッソー（一七一二―一七七八）哲學者、精美の散文を以て名あり
シャトーブリアン（一七六八―一八四八）小説家、ロマンチシズムの先驅者
スティール夫人（一七六六―一八一七）小説家、評論も亦有名
ユーゴー（一八〇二―一八八五）詩人、小説家、戯曲家
サント、ブーヴ（一八〇四―一八六九）批評家、詩の作もあり
バルザック（一七九九―一八五〇）小説家、寫實主義の開祖
ジョージ、サンド女史（一八〇四―一八七六）小説家、耽溺生活を送りし人
ゴーチェ（一八一一―一八七二）詩人 評論家
ボードレール（一八二一―一八六六）詩人、「惡の華」の作者
ヴェルレース（一八四四―一八九六）抒情詩人
少デューマ（一八二四―一八九五）戯曲家
フローベール（一八二一―一八八〇）小説家、「ボヴァリー夫人」の作者
兄ゴンクール（一八二二―一八九六）小説家、ゴンクール學士院を建つ
弟ゴンクール（一八三〇―一八七〇）同
ドーデー（一八四〇―一八九七）小説家、詩人
ゾラ（一八四〇―一九〇三）小説家、實驗小説の作家

モーパッサン（一八五〇—一八九三）小說家、「女の一生」の作者
ホイスマンズ（一八四八—一九〇七）小說家、象徵主義の作家

オランダ

メールラント（一二二五—一二九一）詩人、オランダ文學の創始者
ヴォンデル（一五八七—一六七九）悲劇作家

デンマーク

オーレンシュレーゲル（一七七九—一八五〇）詩人、「靑春の詩」の作者
アンデルゼン（一八〇五—一八七八）伽噺の作家、「卽興詩人」を作る

ノルウェイ

ヴェルゲランド（一八〇八—一八四五）愛國詩人
ヴェルハーヴェン（一八〇七—一八七三）詩人、文藝雜誌を創刊す
イブセン（一八二八—一九〇六）劇曲家「人形の家」の作者

ロシア

カラムジン（一七六六—一八二六）散文の名家、「ロシア史」の作者
プーシキン（一七九九—一八三七）國民詩人、ロシア近代文學の建設者
ゴーゴリ（一八〇九—一八五二）小說家、「檢查官」の作者
レルモントフ（一八一四—一八四一）詩人、「惡魔」の作者
ツルゲーネフ（一八一八—一八八三）小說家
ドストエフスキー（一八二一—一八八一）小說家、「罪と罰」の作者
トルストイ（一八二八—一九一〇）小說家、批評家
チェーホフ（一八六〇—一九〇四）短篇作家

修養と云ふ事に就いて、一番緊要なのは、世界の文藝を知ることである、語學を修めて原書に就いて、耽讀するのは、尤も有益であるのは云ふまでもない。然し、現今の若き婦人方は、まだ英文學書を自由自在に讀破する程の語學の力の出來てゐないことは、事實であらう、あつても極く少數であらう。然れば寧ろ飜譯書に就いて、讀むのが宜い、右の百文豪の中に現れてゐる各作家のもので、吾國語に譯されたものは、決して少くはない、隨分澤山あらうと思ふ。譯書といふと何うしても親みにくいのは人情であらうけれど、少し渉獵してみると、日本の淺薄な作物を見るより、何んなに趣味深く、又多大の啓示を與へられるか知れない。

信用すべき學者、作家の譯したものなら、何を讀んでもよろしい、小說と云はず、詩歌といはず、評論といはず、譯されたものを見るのは、一つの滋養物を供給されるのと同じことで、必ず心の糧を豐かならしめる（一記者）

編輯通信

本誌は此の紀念第百號を機とし、次號より更に大發展を試み

●本●欄●の●擴●張●
口●繪●の●刷●新●

を行はんとす、本欄は名士の手に成りし材料を多數すると共に、若き婦人の手に成りし記事をも盛んに掲載すべし、口繪に至りては、從來の石版畫二枚を廢し、代ふるに、毎號大版本紙二倍大（本號に附したるものと同樣の）の

木版極彩色日本紙摺

繪を挿入すべし、執筆畫家は竹久夢二氏にして、右は實に本誌が率先して實行するものなれば、明治の新浮世繪として、空前の歡迎を受くるは疑はざるところなり。

新刊

○益軒十訓（上）　有朋堂文庫

貝原益軒の十訓が、德川時代に於ける修身書として重きを成して居たことは今更いふまでもない、本卷には家訓、君子訓、大和俗訓、樂訓、和俗童子訓、五常訓の六種が收めてある、有朋堂文庫は服裝の好いことゝ、活字の新式なことゝ、校正の嚴なことゝ、索引のついてゐることゝ、其他にも多くの優れた特色があつて、眞に有益な書物を永遠に保存しやうと思ふ者は此文庫を揃へるに違ひなからう（定價金八拾五錢神田錦町一丁目有朋堂發兌）

婦人画報

五月一日發行　五月の卷　一冊廿五錢　郵稅二錢　六冊稅共壹圓五拾錢　拾二冊稅共貳圓八拾八錢

讀物

- 誤れる結婚……文學博士 三宅雄次郎
- 結婚と實際問題……東北大學總長 柳澤政太郎
- 婦人と劇……文學博士 坪內雄藏
- 健全な婦人運動……法學博士 小河滋次郎
- ▼その日く……三宅花圃
- ▼嫉妬の談……文學士 源 三英
- ▼晩春の思出……時雨
- ▼姑より見た嫁……
- ▼病院日記……晶子
- ▼花嫁の日記……
- ▼住宅と庭園……工學士 古宇田實
- ▼家具の手入……宮川すみ子
- ▼卒業證書を手にして……葵子

畫報

- 馬こやし　中澤弘光筆三色版二頁大美人畫
- 梨本宮方子女王殿下御昇校
- 八殿下の御汐干狩
- 東伏見宮兩殿下御出發
- 北白川宮武子女王殿下御降嫁
- 村雲尼公御散步
- 德川侯爵の御婚儀……
- 新婚披露會に於ける島津公爵と新夫人
- ◉飛行機に乘りし婦人の此頃の花……
- ◉女子美術女子商業生徒の活人畫……
- ◉女子高等師範卒業式と謝恩會……
- ◉東京と京都
- ◉貫婦人撥兵院慰問……
- ◉布哇女學校
- ◉竹柏會大會雜況……
- ◉郊外散步の一日……
- ◉諸名家の令孃
- ◉女の手いろく……
- ◉長井博士の金婚式と夫人令息令孃
- ◉各女學校の卒業生……
- ◉優等生
- ◉職業學校紀念會
- ◉宇治の茶摘み……
- ◉各女學校の卒業式光景……

讀物

- 鎌倉三代記の時姬……文學博士 建部遯吾
- 快樂と生活の嚴肅生活……文學士 下田次郎
- 婦人の自覺……文學士 吉田熊次
- 自勞自活の婦人……農學士 志賀重昂
- ▼名婦鑑伊賀局……いね子
- ▼皇后陛下の御歌
- ▼端午について……文學士 瀧川亮三
- ▼五月の表情と自然の面影……しっか
- ▼連綿體假名の書方……岡山高蔭
- ▼家庭論……文學士 今井政吉

東京麴町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九番　振替口座一一八一八番

大懸賞募集

女子文壇 **新文章** 七月第二増刊

『新文章』は名の如く、現代の若き婦人方の手に成れる新しい文章を滿載します、二百頁の大冊を殆んど其全部を擧げて、皆様方の舞臺に供しますから、文章を書いて見やうと思ふ方は此機を外さず、盛んに投稿をお勸めいたします。

投稿募集の種類

第一種 若き婦人の現在の感想を表白したる文章、題材は自由
（總振假名、百行以上二百行まで、一行二十四字詰）

第二種 課題 ▲浴場 ▲劇場（河井酔茗選） ▲顏 ▲髮（横瀨夜雨選） ▲海 ▲山（滯口白羊選）
（二十四字五十行以内の文章）

第三種 ▲普通の散文（二十四字七十行以内） ▲短篇小說（廿四字百五十行以内振かなつき）

第四種 ▲本誌誌友の評論 ▲わが地方の婦人風俗 ▲わが崇拜する歷史上の婦人 ▲わが愛誦する古今の詩歌 ▲初めての投稿（凡て廿四字五十行以内）

第五種 ▲詩（長短隨意） ▲和歌（一人五首） ▲俳句（一人五句）

第六種 ▲表紙（石版三色限） ▲口繪（石版六色限）（寸法は本誌に就て注意あれ） ▲スケッチ（方三寸以内） 竹久夢二選

◎原稿〆切 五月三十一日本社到着最終便

募集所 東京市京橋區大鋸町 女子文壇社

懸賞

第一種 △一等金拾五圓△二等金拾圓△三等金五圓△四等金貳圓△五等金壹圓に掲載したるものは全部報酬す

第二種 △各題毎に△一等金四圓△二等金貳圓△三等金壹圓

第三種 △散文は第二種に同じ△小說は△一等金五圓△二等金參圓△三等金貳圓

第四種 △各題毎に△一等金參圓△二等金貳圓△三等金壹圓

第五種 △各種類毎に例號に準ず

第六種 △表紙口繪は金五圓以下貳圓以上を正金にて呈す、スケッチ繪は例號に準ず

附則、第一種の一等二等は正金、其他は凡て物品にて發表翌月末贈呈す

有のまゝに現はしたる

若き女の身の上

何故時姫や初花に生れなかつたでせう

市子



若い希望にみちた春は又めぐつて來ました。花嫁の樣に謙遜に、而も限知れない愛の思を胸に秘めて、春彌生、春雨の晴れ間をそゞろ心に任せて、伸びゆく木の芽を見樣と、今日武藏野の寺に來ました。

都を數里、西にはなれ、小川をひかへた境内には、梅は過ぎ櫻は蕾を固く、淋しい白の木蓮が未亡人の樣に咲いて居ります。

更無ニ俗物當ニ人眼一。　但有ニ水聲洗ニ我心一。

人に飢ゑて居た老僧は、喜んで迎へて呉れまして、今しがた澁茶を立てゝ話して呉れましたが、それも近處の佛事に出掛けた後、神代の樣な寂けさを破る者もなく、弱い日影、程近い森の香、海に行く水の叩きが今の私の心にしつくりと融和して、云ひ知れない涙が落ちて、考へて居ること、して居る事が判然として來

ました。私は之れを云はねばなりません、書かねばなりません……誰かに。

實にあなたの前に雪國の雲の樣に、長い間默して灰色に立ちました。白熊の住む北海道にも春は行く、南風には黑雲も北に行く、時來れば結ばれたる舌も聲を出しましよう。

「離緣」と云ふ言葉がある以上、「破約」と云ふ言葉は永久に有りましよう。而もそれは第三者から見る樣に少しの苦痛も困難も伴はぬ者ではなく、寧離婚以上の深い痛手と迷惑を感じましよう。

私と田口……其間を繫いだ物は私共お互の愛でもなく、間に立つた兄でも無論なく、又處世の眞面目な觀念からでもなく、全く一の好奇心、……悲しい嬉しい思出を得樣とした若い者の、仕損じた芝居の一幕に過ぎなかつたのです。最初私は田口を少しも知らず、田口も私を少しも知らず、只兄の親友で田口の兄に當る「○○」の著者の△△を知つて居りました丈で、ついした話で私共は二人繫がり合ひました。話が先方から出た時に、兄は自分一人で承知して纒めて終ひました。一は私が其時分「許婚」と云ふ事に就て非常に興味を持つて居たからで。

私の母は眞宗の信者であると同時に大變芝居好きでした。母の血を受けた私は、又芝居が好で、能く母に連れられて行つた事が有りましたので、早くから「許婚」有る女の心裡は餘程違つて居る事を知つて居りました。子の爲には暗にも迷ふ人の親は、我子の行末を思ひ煩つて、他人の子と、自分の子とを目に見えぬ鎖で繫いで置く。そして頑是のない二人、殊に女が覺めて、一朝「少女」と云ふ花やかな美しい涙多き身となれば、そこには若い勇しい強い腕が自分を支へ樣と伸べられてある。その時の喜と驚は如何でしよう。私はそんな境遇の少女がなつかしくて、その優しい物哀れな恥しい情緒が好で、何故時姫に生れなかつたらう？何故初花に生れなかつたらうと口惜んで居りました。ですから、「田口」と云ふ者は私には決して眞實の「田口」でなく、一度詩化されて美化されて芝居化された「田口」が私には「田口」だつたのです。けれ共若い夢の醒める可き時は來ました。私は全く眞實の「田口」を見樣として、大變な恐怖と苦痛とを感じました。田口の人物、田口と私とを中心にした、田口の姉、兄嫁と其妹の環さん、從妹のお季さんの周圍が勿論其原因なのです。學位とか位置とか古い習慣とかに、首迄入つて

終つて居る兄に、形になつて現はれぬ憎惡とか、性格の不釣合とかゞどうしてわかりましよう。兄妹の間の長い間の爭の結果が退學、姉の家への寄食、出奔、それからは、あなたの御想像も及ばない渦の中に捲き込まれて、肉も血も枯れ果てる筈の處を救はれて、今は骨迄も徹つた痛手を靜に養つて居ります。

時代の風潮に捲かれたとか、破壞主義だとか、云ひたい人は云ひましよう。沈默は弱者の勝利です。私共は「自己」を保護する爲には出來る丈の事はせねばなりません。自分の權は社會や、他人が保護して呉れるよりも、自分自身が、もつとよく保護します。若しその目的の爲に、犯した罪が有るならば、それを償ふ爲に悦んで神の給ふ刑罰を受けましよう。その刑罰は私共には、屈從に比べては寧有難い賜物です。

あゝ今日の日も暮れ樣として居ります。今し歸宅した老僧は、入相の鐘撞きに鐘樓に進みます。霧多い長崎が戀しくなつて來ました。淚多き放浪の遊子、も一度長崎に行く事を神はお許しなさるでしようか。

名家の令孃と言はれる苦痛

毒だみ女

派手な銘仙の矢絣にウヰンナ巻ゴム輪の俥で學校通ひは、東京ではさほど珍らしくもありませぬが、もう名古屋では、かれこれと人の眼にたつので御座います。地方の新聞の埋草に名家の令孃なんてことゞしい題目のもとに、やれ才媛の美人のと、寫眞まで出してかき立てられては、うつかり外出も出來ませぬ。

如何にも、出入の下役の方々から、父の威光が七光り、お孃樣、お孃樣と下にもおかない御追從をうけます。學校の先生さへ、縣に一二の大官の令孃とあるからは御手心が、餘程あるやうで御座います。同級の方々からは、淺山さん、淺山さんと、私に交際するのを、名譽かのやう、やれ學友會の幹事に選ぶの、音樂會に獨唱をしろのとおだてゝも呉れますが、私はもうあきあきいたしました。何も私がえらいわけではない、だから皆私に、御追從や、お辭儀をするわけではない、父樣にするのである、いえ父にするわけではなく、○

○縣知事といふのにするのである。何も父が要路を占めて居るからとて私共まで、かうしなくつてもよさゝうなもの、私は官吏の娘なぞに生れて來るものではないと思ひます。私共は、第一

△ほこる可き故鄕

の觀念にかけて居ります、そんな天保時代のお爺さんの繰言のやうなことは云はなくつても、日本といふ大きな故鄕があるではないかと申す人が多う御座いませう。然し私は、生れ故鄕といふものがなつかしい。搖籃のやうな幼な馴染の故さとの山々があつたなら、どんなに嬉しいでせう。私は千代の松原千代かけてと歌ふ筑前の福岡生れで御座います。父が少壯の事務官として福岡に赴任して母を娶りました、私が生れて、百日たつかたゝぬかに父は埼玉に轉任しましたから、孩子の私はもう旅へと出ました、それからと申しますものは、こゝに一年かしこに二年、北の青森、南の松山越路は福井までもまゐりました。所謂る東奔西走、席も暖らないやうな境遇で御座います。よく巡禮の親子がさすらひの姿もあはれに門にたつのをみます時、私共剩子の境遇を思はないわけにはまゐりませぬ。私はこゝで少女となりこゝで嫁さんになり母になりこゝの土になりますといふ方が羨しい。尤も行く先々でかはる山のけしきや水の流れなぞ、深い印象をのこしたのも多う御座りますが、皆旅だ旅だといふ感じが先入して居てはどうもなつかしくありませぬ。よく寄宿舍に居る友達なぞが、休暇をまちかねて行李をまとめ鄉里に歸りますのをどんなに羨しく思つたでせう。あゝ私どもは錦飾つても誇る可き故さとがありませぬ。第二には

△溫き親戚

の情を知りませぬ。伯父も叔母も從兄も、時々上京する道なぞで工合よくうちにきて呉れた者の外は存じませぬ、折々寫眞計りは交換致しますが、福岡の伯母様處に赤チヤンが出來たさうな位で、他人とさほど變らぬ冷さで御座います。親類にお泊りに行きますの、お伯母さんの處は田舍で廣くつて花がたくさんあつてなぞいふお話しを聞く度に、小さい胸はどんなに騒ぎましたか。父は天下の風來物、風向次第で何處に骨を埋めやうとも到る處青山ありなど傲語はして居りますが、私共にとりましては、溫い僞らない親身の情は、

兩親よりなく、なつかしいのは、家しかありませぬ、淋しい、なさけないと思はずには居られません。こんな工合で御座いますから、大切なる

▲女子の教育は第二義に置かれてありますそ、その訛も大方覺え込みましてお友達の二三人も出來たかと思ふと、もう轉任なので御座いますもの。まして悲のは學校で孜々と勉强いたしまして、お清書の二重丸、母樣にみせておほめして頂かうと飛んで歸つてまゐりますと、父も



居りませぬ母も居ませぬ、母は上官のお宅へとやら何處かの會とやら、婆やにお八を出してもらつて、たべます時の物足りなさ。餘所の母さんのやうにいつもうちに居て呉れて、温い手で抱いて呉れたらとんなにいゝかしらと幾度も幾度も思ひました。今でこそ父も押しも押されもせぬ長官として羽振がよう御座ますが、私共の幼時は、やはり今の私の家へきて、父のお髯の塵を拂ひになる方のやう、一生懸命に交際に

つとめたもので御座います。上官の令孃とでも同級にならうものなら、あの方のお氣を惡くしてはいけませんと始終母から申し聞かされました。僞つても人の氣に入るやうな事を云はなければならない、利益とあつたなら、どんな人にでもこのお頭をさげて、いゝものと、無邪氣な罪のない十三四から敎へられました。さうで御座いますから、たまたま、お孃樣のお美しいこと、お賢いことゝほめて呉れるものがありましても、あれはお世辭よ、何かをもとめる處があつて、あゝいふのだと、幼な心にも疑を懷くので御座います。虚僞にみちた世は、阿つて他を甘く利用するといふ事が一番大切だと淺間しい世わたりの道を、冥々の中に、幼い私はさとりました。技量よりも、阿附だと、最も世に信賴する父の口から出ますのを聞いては、どうして學校の方にお精が出ませうぞ。ことに私どもの、學校の參考書等は高いの何のといろ〳〵被仰る父樣も、お正月前、母さんのお襲には俸給の三分の一をつひやしても何とも被仰いませぬ。交際だ、必要だとすましてお出でになります。よし內は充實しなくつても、表面が立派でありさへすれば、いゝのだといふこともしりました。母樣は母樣に、また、お前方は勉强だ、勉强だと、我儘ばかりおいひだが、お前方がどんなにあせつても、何にしても父樣だけが內のおたより。父樣が御立身遊ばせば、自然とお前方にも運は向くといふもの、お客樣があつたり、外處樣へものをさし上げたりするのは、皆お前方のお爲を思ふからですよと申します。赤裸々にしても、立派な人格を具備して居るのが人として最も幸福だといふことは悲しいことには父母は認めて呉れませぬ。虚榮と富と權勢と人爵との前に銀よりも、黄金よりも貴い子寶を犧牲として悔いませぬ。しかも一旦

▲風雲の變

があれば、父の身はどうなりますことやら、父の一身にいふまじきことながら、事があれば路頭に迷ふ私共で御座います。政界の雲行毎に、ひや〳〵といつも私共はして居ります。まるで噴火山上、美衣をつけて、ダンスをして居るやうなもので御座います。「あゝ人生れて官吏の娘になること勿れ」と私はいひたい。一畝の畑でも自分で耕し、手織木綿の布子でも自分で織つて着たい、桃源場裡夢こまやかに落花流水、悠々たる處がなつかしい、醉生もいとはない、夢死もいとはない、あゝ自然にかへりたい！

父は大酒家 母はヒステリー 其間に出來た私の個性

覆面女

ともすれば、我が名さへも、忘れる樣な私に、どうして他人の事などが、考へられませう。これまで生きた十八年の歳月に、私の身邊には何物もありませんでしたよ――全く。まあ申しあげ樣ならば灰色の生の道を、とぼ〳〵と辿つて來た私は、寒からうが、暑からうが、歩けばそれでよい、といつた樣に、今日までやつて參りました。

はあそんな風ですから、人の事などは思つて見た事がございません。自分ながら不可思議ですが、これでも十八年間に一人だけ友が出來ました、全くおかしうでざいます。その友人ですか、性質ですか、何といつたらお分りになりませう。旅行しやうと思つて、家を出たけれど、汽車の切符を買ふときに、何處に行かうかと迷つたといふ人です。拂ふお金が何處からも出て來ないのを知つて居つて、澤山、本屋で詩集や小說を買つたと申す樣な人物でございます。兩親も兄弟もありません、級の變人で級長などは特に恐しがつて居ました。

これまで〻人を思ふたのはあれだけです。今からしてあなたと話して居ましても、あの人を思ひ出します。何故私はかうした性質なのでせう。

ほんとうに一生、私は自分といふ者を人に語らないで居やうと思つて居ました。今後とてもですわ。自分の境遇や心情を他人に語つてどうなるものですか。固く唇を合せて居るのが一番よろしいのよ。

何と仰います、それは、私の事ですからあなた、父母なんかはいつも忘れて居ます。自分のうれしい事だつて、かなしい事だつて告げた事はありません。とはれゝば、どうでもいつておきますわ。姉にですか、たつた一人の姉ですけれどね、さうですね中々可愛がつて

くれて居る樣ですが一度も心を、はなしたりした事はありません。

私が默つて居ますと、人はきゝたがつて居ます。無理にいはせやうといふならば、何でもいつてやります、きいた人は、それで、私の心の底をきゝたゞした樣によろこんで居ます。それを見ると私はおかしいです。

先頃ですよ。――なんでも私にいはせやう、語らせやうとつとめて居る男がありました。それは中々立派な學力もある敏腕家なのよ。その人が五月蠅く迫つて來るから、口から出まかせいつてやりましたら、その人はそれを私の眞の言葉と受取つて、大變々々熱烈にやり出したのです。父や姉や義従兄や義伯母は大事件だとさわぎ中々安心ならぬなどいひ出しましたつけ。肝心の私は平氣なもので、すまして居ましたら、男はすご〳〵手を引く。家内親類の大騷ぎは、いつの間にやらやんで居ました。

大勢をさわがせて、一人見て居ますと、實におかしいのでした。私で馬鹿を見た人も澤山あるのですけれど、それでもついて來る人も少くはありません。

私はつとめて自分の身の周圍から物を去つて、一人で明かに我姿を、あらはしたうございます。

いゝえ決して寂しいなど申す事はありませんよ。一人が何よりです。

人樣と語つて居ましても、つとめて心の孤獨を忘れない樣にしやうとつとめて居ます。

こんなに、一人で、自分をかたらず、人樣には何物か一寸とも知られない樣にと心の狀態を守つて居ますけれども、人の事ならば何でもきゝます。きいて何すると申してわけはないのですが、冷淡な心でたゞきく計りです。

多くの人は、よく、私に涙を落して心を語つて行きますが、あれも、眞だか、どうだか、知れません、と思つて居ます。

私がこれで親切だとか、いつて近寄つて來る人も澤山あります。私の所へくれば、すぐに馬鹿にしられた樣な氣がするつてかへつて行くのです。

何故つて、あなた、私はかうした人間なのですもの。

私にでも眞を仰る時はあるか、とお尋ねですか。――ありますのよ、詩を作るときです。詩許りにはどうしても僞や、よい加減な事は歌はれません。うそじやありません。詩だけは眞の心を歌つて、眞の心で愛して居ます。私の眞の聲は詩より外に出した事はありませ

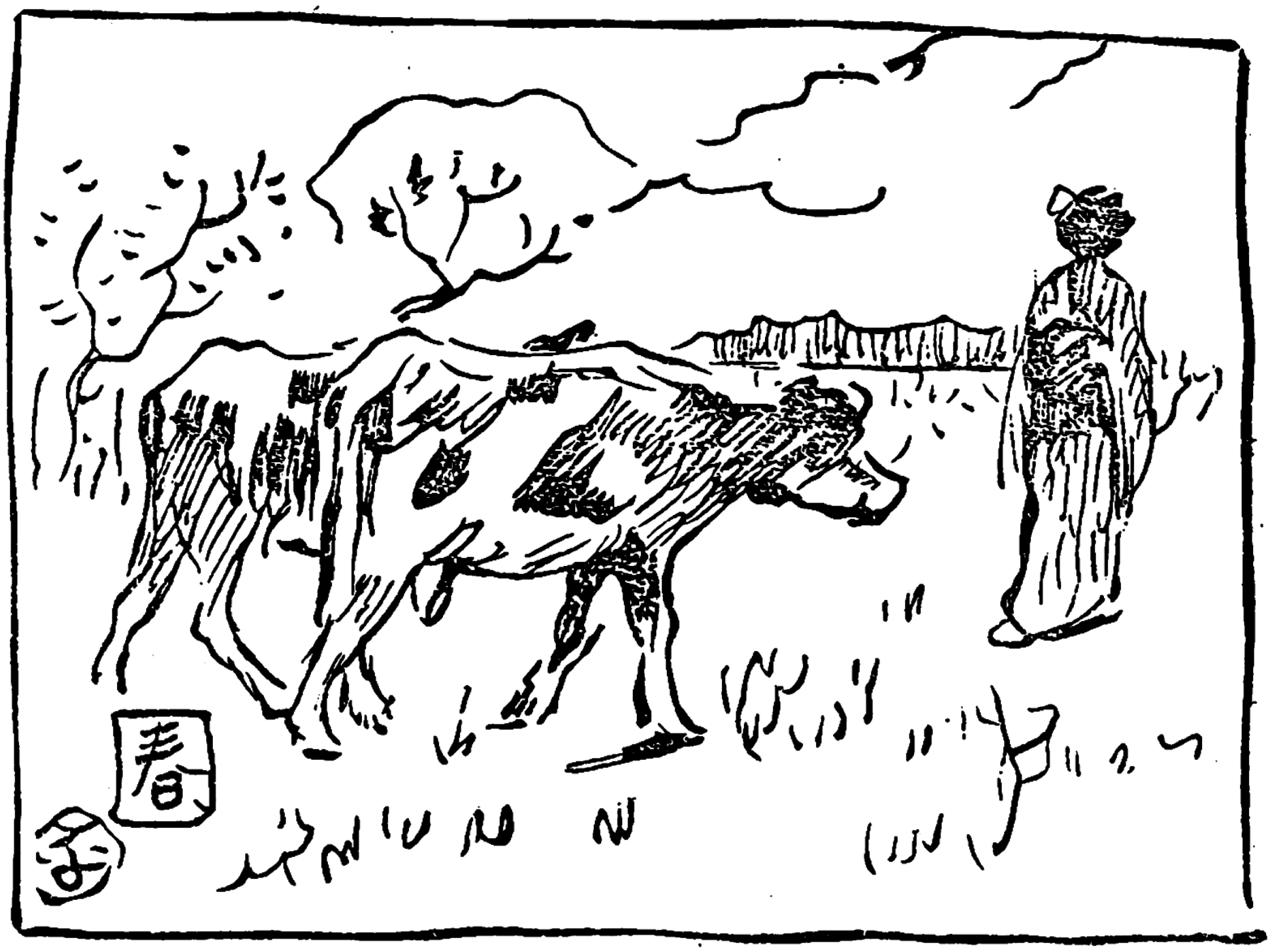
わ。私の拙い詩でも一生懸命によむ人は、私の眞の胸の底を見る人なのです。人はね私の詩を、かへつて僞だと思つて居る樣子。大した方角ちがひで詩の方へ話が進行しましたね。失禮しました。

私ほんとうに、自我主義なんか知らないのですけれど、從兄なんか、私を自我主義だつてわるくいひます。

自我主義でも何でも宜しい一人がよろしい。自身の心の底を人にのぞかせないのが一番好き。

これまで謎の様だとか、何だとか、私の事を仰いましたが、私の十八年の暮しはこんなもの、よく私がお分りになりましたでせう。

父や母と仰います？何れ私の父母ですもの、温い人



じやありませんわ。

父は○○藩の藩士ですの。大した大酒家ですわ、よくおきゝでせう。こゝら近所で知らない人はありませんよ。

親の世話には十四の年以後なつた事はない。飮んだ、遊んだ出來るだけの放逸な生活をやつて來たけれど、一寸とも人の世話にはならないから、いゝさ。二十七八迄冬が來ても綿の入つた着物に手を通した事がない。人は一人で立つて行けば、よく暮せるものだ。何親なんか小さい間だけ見てやればそれで澤山だ、いつもこんな話を大きな聲でして居る人物です。

小供が學校へ、新入學するたつて、人に見守らせるといふ樣な事はしない主義です。私なんか小學校を十一も轉りましたが、その間はじめから一

人で、校長の所までやつていつたものです。他所のお父様はこんなじやありますまい。お酒に酔つ拂つて、町の名望家の、頰を撲ぐる。酒を顔に吹きかける。料理屋の主人が青くなつてふる事などはありがちです歸りますと十二時過ぎて居るのに、庭へお膳や鐵瓶を投げつけます。かうした人なので家の事などは他所の様に見向きもしません、お金なんかは一厘も貯へないで着物なんかはそこらにあるものを、何でもきるといふ風です。美しい父の妹、私のおばです。それは二十三でなくなりますし。伯父は先年逝去しますし、今は父一人です。父は親族のないのも、氣樂なものさ、と申して居ます。毎日々々自分一人で暮して居ます。

それで、會社では、中々の人望家です。おかしい様ですわ。此頃年とりました故か、大分變りました樣に思はれます、配當金が多ければ滿足らしく見えます。そのお金もわけもなくつかつて居ます。

今日は何日だね、といつてたづねます。決して月や日を知つて居る事はありません。夜半でも眼が明けばおきます。下女なんか驚いて居ます。

お酒は朝でも、ひる前でも夜中でも、燗をして戴きます。それは妙な人間です。小供にでも何をしやうが止めるといふ事はないのです。父に物を言つてもらつた事は、數へる程です。だから一口でも尊いと思つて居ます。

父でも子の事などを心配をするのでせうか。

母ですか。母の事をきかれるとかなしくなります。母の死ましたのがもう十四年も前になりますもの。何も覺えはありません。見たいと思つてもだめ。寫眞があつたさうですが、それは燒いたつて申して居ます。兎に角私の顔をね、もつとヒステリカルにしたと思召せ少しづゝ記憶に殘つて居るふしをいひますならば、狂的ですね、全く甚しい、ヒステリーでしたのよ。一度だつて、私等を抱いてくれた事はないさうですし母になんか甘へて見た事はありません。何時でしたつけ一度お祭りにいつて、おそくかへつて來ましたら、父と母と何か申して居ましたが、庭へどか〳〵とおりて來て、私を庭へこかしました。どうしてもこんな者は家にあげたくないつて五つの私を庭へつきおとすのでした。父はみかねて抱いてくれました。

五年間母と共に住みました間に、こんな事は幾度だつたかわかりません。全く自分の身體が弱いからでもありませうけれど、父の事や私の事や姉の事など干渉

した事はありません。一所に居て皆別々に心の生活をして居ました。母がなくなりますとき父にも私にも姉にも一言もいひませんでした。だから誰だつて母が何を思つて逝つたか知りません樣なわけ。
　母の兄はその後精神病で長くわづらつて居たのがなくなりました。で母の兄弟も、外に一人もありません。私には親族といふものが、だん／＼減つて行きますわ。今は父と姉と私と三人が、まあ、親族ですね。
　私が一人でありたいと願ふと心のまゝに減つて行きます。暗い家で三人は別々の心で、何も互に語らないで、暮して居ます。
　さうでございます。姉は母に似て居ます。よく御存じの通ヒステリカルな細い體の處などが…………。よく胸が痛いといひますよ。私が脳を患つてかへりましたときには、精神病にかゝるだらうなんて一人でさわいでくれました。皆親族が病氣で死ぬ。病氣は恐しい。病氣は恐しい。と眞から、恐れて居る樣子ですが、自分は何時も病氣で苦しんで居ます。
　自分一人を、自分で持てあまして居ます。
　私がこの田舍の學校の寄宿舍へ來ますとき、姉は、大きな目になみだをためて、「羨しいわ、おまへは空氣の美しい靜かな寮舍に寢起するのね。」と申します。「何時迄この暗い騷しい處に、居なければならないのだらう」といつて居ます。眞に可愛さうです。
　何も彼もありたけ申しましたね。
　私はこの病がちな體をたのんで一人行きますのよ。
　ほんとうに一人がよろしい。
　今日計り自分の心も境遇もかたりつくしました。今後は口をつぐみましても、徒勞でせうか。
　父の事も姉の事も何も思はない樣にします。

青春の去り行く時

斷崖の人

　昨夜は、仲町のたしからやへ買物乍らKを送つて、歸つて來て物思ひに沈んでゐると、知らぬ間に夜が更けて、疾うく日記も何も書かないで寢て了ふ。
　今朝から寒い／＼雪もよひである。私はもう少し自分

の仕事といふものを尊重して、責任を持つ事は出來ないのだらうか、あゝいやだ。今日のやうな日は一日家に閉ぢ籠つて、空想に耽つて居たかつた。

今日も凝と目を閉ぢて電車に乘つてゐると、妙に心が沈んで來て、行く先を考へずにゐられなかつた。ああ私は弱い、弱い人間だ！　女優、藝者、辯士、淫賣それ等の生活を一々想像して見た、そして世の中の酸いも甘いも嚙み盡した、冬枯の空に突つ立つた枯木のやうな人々が、無暗になつかしくつて仕樣がなかつた。

私は世間の女の人からも男の人からも、嘲笑の的にされてゐる。私はほんとに世間一般の女の方の持つてゐられる、誇りをすら失つた人なのだ。

道を走る自働車も電車も人も、皆自分の國のものではなく、宛然自分とは沒交渉、自分の是から呼吸する世界は、ジメ〳〵した暗い岩窟の中で、唯強烈なアブサンーの息と、煙草の煙と、赤いランプの光りとが、自分の疲れた心に喰ひ入るのだ、と如何しても然う思はれてならない。私を取り圍む人々は、此の次の暗い生涯を祈つてゐる。

酒、酒、心も燃え熔ろけるやうな火の酒、それを何故私の舌は味ふ事が出來ないのだらう。酒は心臟を病む私にとつて、猛烈な劇藥になつてくれる。あゝ最後には酒がある、酒といふ自殺の方法がある。

今の私は意氣地なく囚はれてゐる、一方では遁れやうく〳〵とあせる、凡ての事に對する、自分の態度は餘りに弱い。

——閉ぢ籠めたる室にて——

思ひ見よ。

地位名聲、それ等のものに執着を殘して、我に來るを躊躇する程の人ならば、譬へ一朝の義理に迫られて來るとも、何の何の面白かるべき。

如何に敗殘の女とは云へ、それしきのものに代ふる多々あり。

『私の兎や角いふべき時ではない、貴君の御人格の如何に依る。』と冷然として云ひ放つべき時が來るであらう。

——電話室を出でたる後——

あゝ母樣さへないならば、情ある義理ある養母さへないならば、大膽な思ひ切つた態度をもとれやうもの。母樣は何故憎んでは下さらない、自ら老いたる父母を棄てゝ、幾年放浪の旅にある私をも、唯々信賴していらつしやる、あゝ私は老人の涙を見るのが辛い。

どうせ斯んな形骸一つ、どうならうと惜しくはない。私は自分の生存といふものを野の草程にも、河原の礫石ほどにも思つてゐない、あゝ、なるやうになれ。某時は自分といふものが憎らしくて、八裂にしても、遣りたいと思ふ事がある、誰でも斯ういふ氣分にはなるものだらうか。

こんな微温い戀なんか早く解決をさせて終はなくてはいけない。絶望して苦悶するのも、解決がつかないで苦悶するのも、苦しいのは一つぢやないか、一層何もまつはるものがない方が宜いのだ。

世の中は年の暮である、新しい年が來る。父も母も一つ年が多くなる、死が近づく。自分は尚一層荒寥たるライフに泣かねばならない、あゝ思ふまい。

苦しみよ悲しみよ、我心を取り圍みて、其のどん底に突き落して見よ、如何なる聲を發するか。

——暮の夜——

何だか歩みながら熱が出て來た、非道く苦痛だつた。歸宅するとKよりの手紙、考へると厭になる、行くままに行かしめよ、運命は神の司るところ。思ふ事、書きたい事が澤山ある、然し動悸がして苦しい。藥をとりに行つて來て床に入らう。

主よ、主よ、飽くまで正義の許に戰はしめよ。

——暮れる午後——

終日機械の音響を聞いて、活版所の二階で校正した。風邪昨日よりやゝ募る。

——床に入る前——

少し熱が出て苦しいが、髮をあげて被布を着て、時計が六時を報じたので家を出やうとすると、宿の伯母さんが癪を起して、看病してゐる中に、約束の時間を過ぎた。

いら〱として家を出て停車場に行く、丁度入口の暗の中に立つてゐた小柄な人が、何處か見覺えのあるやうな氣がして、私は胸が慄いた。目に止まるまいと遠廻りして、約束の場所へ行つて、二人は七時に上野を發つた。私達は汽車の暗い隅の方へ腰を下した。

汽車を下りてからは、胸が苦しくて息が切れて堪へられない。暫く細い街を通つて野に出でた。暗い〱星多き夜、二人は無言で歩いて無言で別れた。了解はしあつてる、お互に何も云はない方が宜い、なまなか言葉を取り交すと、顏を背け合はなければならない。

——クリスマスの夜——

病氣は段々勢力を增してゆく。

A氏來て珍らしくシンミリと話をした。結婚しやうと思ふ、と仰有る。『君も早く結婚した方が宜いよ、男の友人なんて、青年時代といふものが、異性の友人といふ形になつて現れて居るんですよ、早く其の青年期といふものを葬つて了つて決心しなくてはいけない。然う、餘り早く葬るのも不幸には違ひないが、君なんてもう大分宜い年齡だらうぢやないか、君の方で何時まで、青年時代に執着してゐても、青年時代は何時までも君を待つて居はしないよ、老孃なんて悲慘な境遇に落ちない中に、何とか決心しなければいけない。』あゝ此の人から斯んな訓を聞かうとは思はなかつた。

『だつて押賣も出來ないぢやありませんか、御親切に甘へて何分どうぞ。』と例のやうに交ぜ返すと、『串談ぢやない！』と苦り切る許り。あゝAさんよ、私は貴君に感謝します、今夜貴君の仰有つたお言葉は、世の多くの、若き誇りに滿ち〳〵た婦人方や、獨身主義を主張する方々にもお耳に入れて上げたい。

けれど、何を酔狂に、こんな寂しい冷い荒寥たる生活に泣きませう。噫もう何も云はぬ。

―病める夜―

年は逝く、幾多の事件を運び去りぬ。
今は唯病みて、年の去り行くを見送るのみ。

―大晦日の夜―

強き印象を與へたる冬の海よ、靜かなる波の調べよ、空の蒼と、紺青の海とに、私等の心は吸ひ盡された。私達は山際の木柵の破れ目から、高く白い沙山を辷り下りた。渚が迫つてゐる濕つた沙の上に、私は紫の被布を脫いで、其上に腰を下ろした。私達の前途！、あゝ然うした實際的な事を考ふるべく、餘りに詩のやうな夢のやうな、尊き自然のふところに抱かれてゐる。

『今は何時でせう。』

『此處は何處の國でせう。』

あゝ幸福に醉つてゐる。それもほんの刹那である、刹那程尊いものはない。二十里を行けば文明の修羅場！私は其處に歸らねばならぬ。明日から又パンの爲に働く、何といふ正しい事であらう、然し辛ひ悲しい。それ故に生きてゐる。

太陽は寂しい強い最後の光りを、海に陸に投げて、水平線下に沈まんとしてゐる。

あゝ莊嚴なる海の日沒！、斯くて名殘りを惜む中に三日の月はほの〴〵と中空に出でゝ島山の影凄く〳〵黒み渡る。『あゝ仕方がない、永久も斯んな處に居られるんぢやないや。』と私は思はず捨て鉢に云つて、漸々夕闇を這ひ上つた。

——短き旅より歸りて——



濃厚な人間的交渉！、それを求めてゐる間、私は到底眞面目にはなり得ない。私が毎日人に接してゐる間は殆んど僞りだ。女は獨りでも芝居をするといふ、全く違ひないもの。あゝ私は何處かへ行つて了ひたい。何處かへ？、何處かへ？一體何處なのだか自分にも解らない、私は近頃死といふものには無神經になつてゐる。誰かゞ、『死は決して最後ではない』と云つた。いゝや最後だ、死は萬事

弱い者よ、僞りの多い者よ、獨り靜かなる野にゆきて、寂しきを守れ、然うすれば、汝の汚れた心は、再び洗ひ清められるのだ。

の消滅だ！、此の頃理窟いふのが面倒になつて堪へられない。

君は思想上の富豪だとKさんから罵られた。全く然うかも知れない。貴族主義は止めて、平民主義にならうぢやないか、なんて揄揶はれるのも恥かしくなつて來た。

──ある夜──

思へば何故に斯う迄大きい犠牲を拂つて、何事を私は得ようとしたのだらうか。

戀、虚名、物質、然ういふものではないと云ひたい然し自分は動物である。

此の強い主我心が跳躍して來た、多くのむくろを振り返り見る時何とも云へない淺ましい思ひと、濟まないと思ふ心とが込みあげて、潸然として私は泣ける。けれども私は絶望したのではない、虚無主義でも何でもない。寧ろ其處まで徹底してゐるならば、都會に執着を絶つて、あの暗い家にも歸れやうもの。家は暗い、然し今の此の生活よりも、溫い平安な空氣が、自分の身を包んで呉れるのではないか。

女よ、若い女よ、汝は今迄多くの犠牲を拂つて、一體何を得たのだい、隱す事はない、どれ、ちよつとお見せ、と迫られるやうな氣がする、噫私の手には悲しい哉何も無い。

──ある夜深更──

夜八時、Kさん來る。散々冷評し冷評されて歸らるる。

私は狂言に洗禮を受け、狂言に結婚する、と揄揶半分に然う云つた。私は眞面目な心から云つたであらうか。

舌を二枚持てる女よ！、汝は某人に對して、私は絶大な力を戀に求むるか、さらずば法衣の人たらん、二つに一の解決は、全て君の御手にある、と云つたではないか？。

それも狂言に過ぎないのだらうか、狂言をする爲には幾許の高い犠牲をも辭さない程、私は荒んではゐないつもりだ。

──春の夜──

生命より深い愛はないでせう

草の門

神のあげた双手は右と左を指したのであらう。夢に歎き夢に逢ふた人も幻となつた。いつまでも過去に執着するは許されない。靜かに現在を見るべき時は迫つたのである。

『……其の根底の不可解は不可解として置いてもつと生命の糧を澤山に貯へ狹い天地から廣い天地へでゝ御らんなさい……』と河井先生は私の爲めに仰しやつて下すつた。

『醉茗の言つたことはまじめに聞いて考へた方がいゝでせう……』と夜雨先生も仰しやつて下すつた。

御二人の御言葉に對して感謝の言葉もないのでございます。

まじめに考へて見る。

醉茗先生の御言葉はせんずる處、新らしく世に生きるべき考へを　良妻賢母の考へをもて、自分勝手の考へばかりに苦しがつてゐてはいかぬ、社會の一員となつても恥ぢず、妻となり母となつても悔なきだけの修養をせよ。その修養は處女時代のものである。人より一歩先きに覺醒せよ、と云ふ有難い御言葉なんだ。と思ふ。

世の女の大方は人の妻たるべき運命をもつてゐるのであらう。けれど學校時代には獨身主義をとなへねば現代の女ではない、男子の犧牲になんぞなるもんかと威張つてゐるけれど、わが友の多くは人妻になつた。

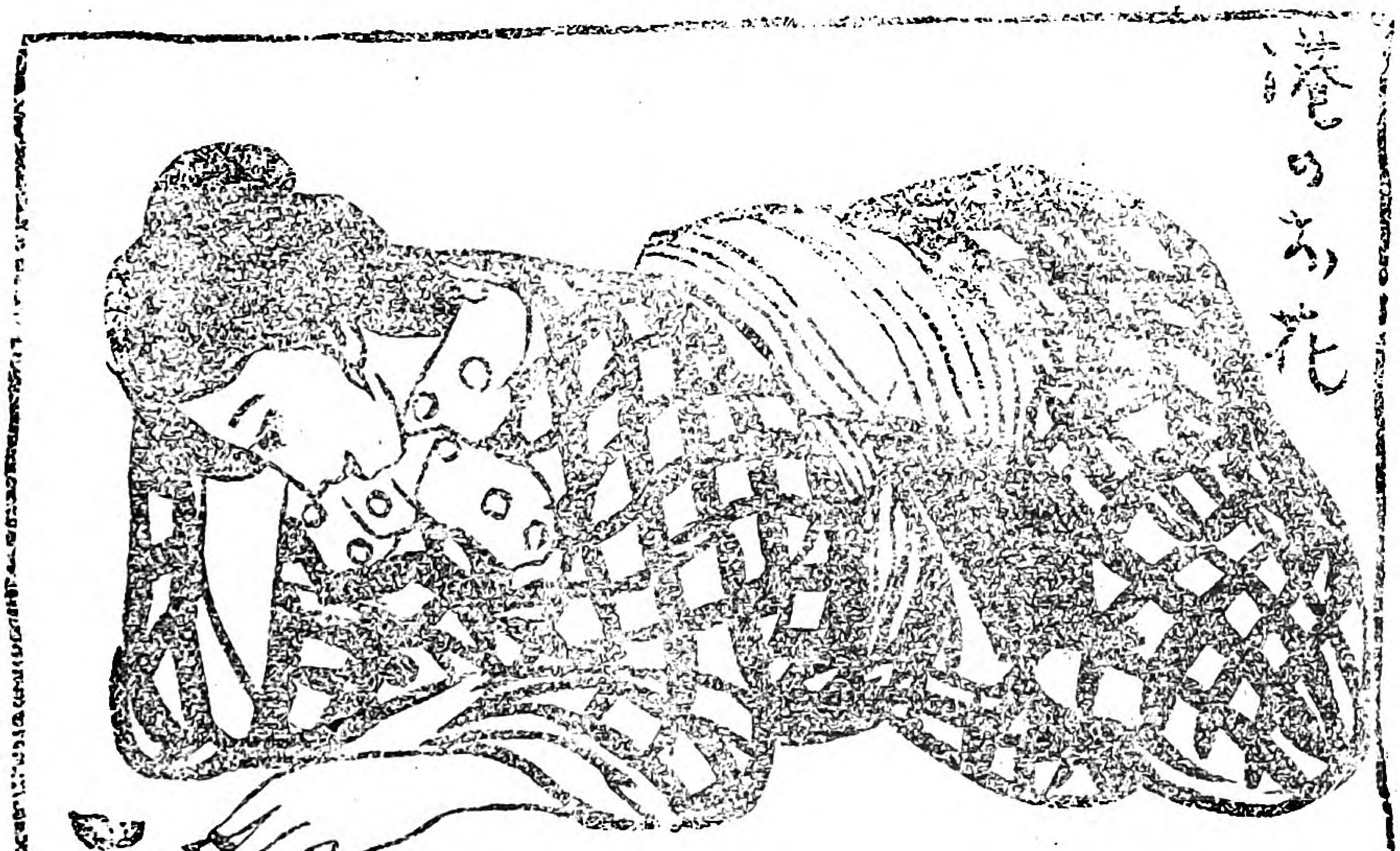
「あの時分の獨身主義なんて、實際無法だつたわね」……とわが子を抱いてすましてゐる、早くも世の制裁に屈伏して、今更に夫の愛の薄きをかこつ友もある、醒めたる愛に身の置き處なきを歎く友もある。

新妻の輝くおもてに世を誇り顏の友にも逢つた。ああ世に良夫賢父の多くいでざるかぎり、私共にのみ良妻たれ賢母たれと敎へられたつてむりだと思つてゐる

われ今まで、世に立つべきその苦心より、戀と云ふ

ものゝ深きを計つて見た。愛とはなにを得て滿足する、男の女に求むる愛は眞情の純なる少女の愛を一身に集めて滿足するのであらうと思つてゐたら、精神的の愛より一時の快をよぶ肉の要求であつた。美しき女、富める女なれば、たれも愛さん、惱み疲れて醜き女に寄する戀はまことのものかと思つたけれど、あゝ世は凡て僞りのものであつた。けれど男の愛情は女より厚く熱烈であつた。冷靜に猜疑に人を見る私なぞには考へられぬ熱烈なる情をもつてゐるけれど、その愛も一時のものである。永遠のものではないと知つた。

戀を語り愛を囁き、はては死まで語り聞かすその心を淺



ましく、ばからしく思ひながら「ほんたうに死んで下さるの……」と聞て見る。「命より深い愛はないでせう……」と云ふ。「それぢやあすみませんが死んで見せて下さいませんか」と「ひとりですか……」「勿論ですわ」……「それで死んだらどうしてくれるのです……」と云ふ。「お花やお線香位は思ひ出したならばあげませう……」「それであなたは生涯獨身なさる……」かと聞く……「さうね、あなたが死んで下すつたら男は全たく愛してくれるものときめませう……もしての後に愛して下さる人があつたら私は魂まで捧げてしまひますわ……」とすじ

めにからかつて見る。なんのこつた、とつぶやきながら別れてしまふ。

戀、其終も初もわからないけれど、斯くてはわれとわが心さへ不明になつた。靜かに考へては激しき精神の苦痛を感じて堪へられない、自から自分の心を冷笑もして見る。あゝ荒れた心だ、不眞面目な心だと深く恥なる。

われ自尊心の爲めにいかなることにも誘はれはせぬと信じてゐる。けれど女の性は弱いのでせう……。

わが友一句を出ずして姿かたち目さむるばかりに變つた。友を見て母は眉をひそめて、狐なんぞにつままれるものか、人間は萬物の靈長だと威張り〳〵まゆにつばつけながら誑されてるのだもの……狐にさへ誑されるからね……」と母はいつた。白粉に白い友の顏、マガレットに幅のひろいリボンがひるがへつてゐた。華に美しくなつた友の姿が目に浮ぶ。

「先だつて惡青年のことを新聞で見てひや〳〵した、マガの君などすぐ犠牲にされよう。若い女は皆うすべらなんだが、おなじ十九でも○○などに比べれば雲泥の差がある」と蘇生法師のお手紙にもあつた。人のことだが私も考へる。

男と女とあつて社會は成立つてゐる。社會がある間は男も女もなくてはならぬ。その男女をつなぐは矢張り愛なんでせう。その愛は双方共に愛情があればこそ成立つのであらう。愛は生れながらに持てゐるものかもしれぬ。迷はぬ積りで迷はされるものかもしれぬ。誘はれはせぬと信じながらわからなくなつてしまふ。

やむを得ぬ。第三者の兄に今の現在をかたり告げた私は親の影にゐる處女であると云ふ觀念も持つてゐます。わがあやまりをしつた時は自刄するだけの覺悟ももつてゐます、誘はれない筈ですが私の擧動に注意して見て下さい、と賴んだ。いま兄は無言のうちに、私を見てゐてくれる、たゞさう思つただけで心の味方を得たやうで云ひしれぬ輝きをしつた。自分ながら、をかしいことを賴んだものだとほゝゑむけれど、兄も笑つてゐるであらう。女は弱いのだもの。

をとこが肉を求むるその犠牲が妻か、男よ、今の男はまことの愛ある女を得ることは出來ないであらう。あはれ女もまことの愛に浴することはできずにあせたる思ひにくるしむでせう。結婚とは公然と、人生第一歩の犠牲のひとつかとあやしまれてなりませぬ。あゝ人生は謎とのみ思はれてなりませぬ。

聟の亂行に離散したる一家の悲運

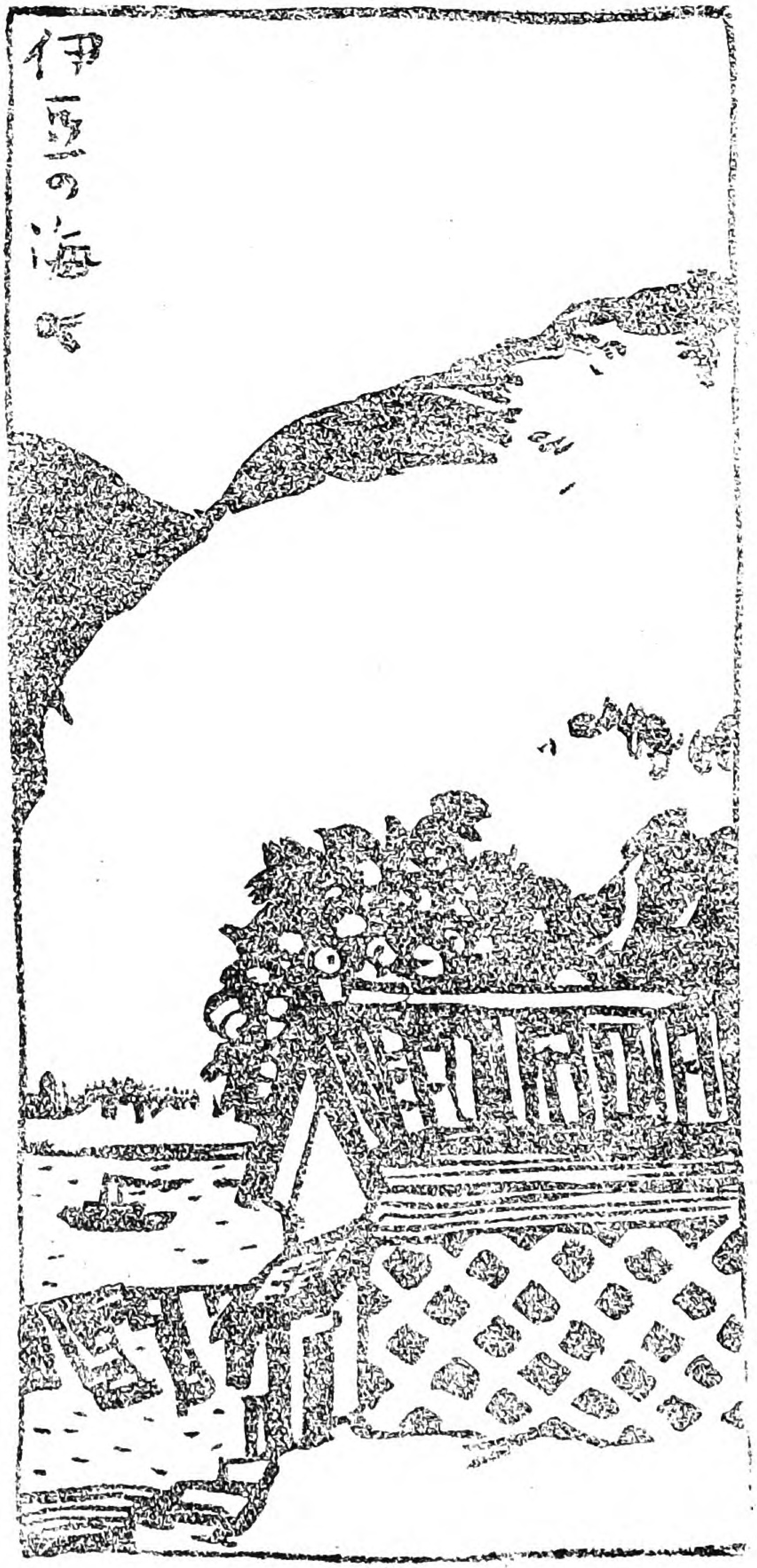
重子

御同情ある皆樣、今の境遇に落ちた私の身の上を御聞き下さい。元私の家は市内でも屈指の財産家でした。釀造業と材木を致して居りました、藏の者も六七人、店の者が十二三人、女中が三人、外に婆やが手傳ひに參つて居りました。私の上に二三人男の子があつたさうでしたが、皆早く死去つて後に妹が二人で、三人姉妹でした。私は弱かつたので、學校も小學校ぎりで止して、家で習字を母の手に習つたのでした。最も其頃は市内に女學校はありませんでした、御前は總領だから、弱いからつて裁縫もほんの少し許り、御琴も妹等よりも早く止めました。其時は何とも思はず、うかうかと暢氣に過してましたけれど、今思へば何故あの時稽古しておかなかつたらうと殘念でなりません。恰當私が十歲の時でした、父が病の床についてからは、日增に惡くなるばかりで如何ともできませんので、東京の佐藤順天堂病院で診察て戴きましたが快くなりませんで家へ歸りました。汽車にゆられたので尚惡くなつて、とう／＼永い眠りにつきました。後に殘つて母の嘆きは如何でしたらう、此の幼い子を抱へて大きい一家を處理して行かねばならぬのですけれど、御孃樣成長の母には出きません、で永年居る番頭にまかして、何事もなく繁昌居ました。其れに私には祖母がありまして、勝手元から奥の事と、母と違つてよく働いてたのでしたが、父が死去つてから間もなく、どういふはづみか、椽から落ちてから起つ事が出來なくなりました。其後は從兄が參つてよく店の事から、種々やつてくれましたから、皆安心して居りましたが、從兄も別れるので、私が十五歲の時或人の媒妁で婿を貰ひました。母も安心して居りましたら、初めのうちはよく店の事などやつて居りましたが、一年、二年と過つと一人で一日おき位に外出かけるやうになりましたが、何の變もなく私は十七歲で男の子を產みました、一家の

喜びは大變でした。が其れも束の間、月たらずの子で死なりました。其時でした、私は熱病にかゝつて死ぬ樣な目に合ひました、體も元の通りになつて好いと思つたら、良人は毎日、毎日、用にかこて付て外出ます。初めは怪しみもしませんでしたが、次第次第つのつて夜も外出る樣になりました、母は又心配しだしました。何處へ行つて遊んでるのか話てるのか、私は又世間見ずの女故何事もわかりません、夜おそくとも歸る時はまだいゝのですが翌日になつてぶらりと歸つてくる時もあります。其れで何て云ふかと思ふと、友人の交際で已むを得ず泊つた等と、そりや言わけの巧い事、母始め私までほんとうにして居たのです。其れから毎日着更て出ます、或時は紋付、風通だの絲織を着て行くかと思ふと、翌日は洋服、靴まで違つて、自用車で外出たり、自轉車で出たりします。行先を聞くと必と親戚か友人、時々は自轉車の遠乘だなんて言ふのです。私の從姉が市内へ嫁つて居るのがありまして、時々參りまして、母に良人はよくない所へ出入すると注意してくれましたが、母の手元からは一文も出ませんので決して信じません。其れから度々參つて私にも離縁を進めましたけれど、如何しても母が承知きませんで良人を信じきつて居るのです。私も時々ならよう御座いますけれどと申ましたら、何だ此な財産など潰すのは何でもない、と斯云ふのです。顏に似合ぬ恐しい方とつくづく悲しくなりました。母が良人に御前は花柳界へ出入して女を連れて遠出をするさうだね。御母樣誰が其んな事云ふのです今から行つて聞いてみます。つて眞實の樣に怒つて騷ぐのです、此が一ツの私等を欺く手段なのでした。或人が貴君は然んな事ぢや仕方がありませんて云つたら、私は娘に惚れてきたのぢやありません、財産に惚れてきたのです、つて云つたさうです、何所迄人を馬鹿にしてるのでせう、あゝ、離縁、早くと心には祈つて居るのでした。其れが世間へパッと廣がつて、家へ聞える樣になつた時は、最おそかつたのです。借金は山の樣、田地田畑家屋敷迄人手に渡る樣になりました、目星い物は何日の間にか持出されてありませんでした。親戚からは何故人がすゝめた時離縁しなかつたかとやかましくせめられました、が仕方がありません、鐵面皮しい良人でも居憎くなつて、辛抱してくるつて上京して、間もなく寫眞師に從いて滿洲へ行つて居りました。家の片も付いて先の三分一位の狹い所に住む事になりまして、祖母には家の建築

をするからつて、夜婆が付添つて立つ事になりましたが、私は此所で死ぬのだからつて夜具にしがみ付いてるのです。並居る者は皆涙です。あゝ祖母樣お許し下さい、老先短い祖母樣を此んな目に御合せ申して濟みません、皆私等が確乎して居ないのが惡かつたのですと、心に泣いて詫ました。引移つてから三年後、祖母樣も心配しながら遂々死去なりました、御隱居樣だけは先家から立派にお葬儀申たかつたつて、夢の樣になくなつたのを思つては泣許りです。其頃はまだ生活に苦む事もなく、妹も女學校を卒業ました、女中もありましたけれど、長くおく事もならず暇を出しました。御座敷は貸しておきまして、以前出入りの呉服やのお仕事をして居りました、御飯炊きから拭掃除までしなけりやなりません、其んな事はまだよう御座いますけれど、洗濯をすれば手の皮がむけさうになつて痛い、まして車井戸のズッと下の方に水がチラチラ見えるやうな深いつなの太いのを汲み上げる骨の折る事、體を引張れるやうで恐い、一杯の水を汲むのに三十分もかかるのです。こんな事で如何したらよかろう、祖母樣がよく何でもしつけないと今に困るつて御仰つた、其時は、皆又祖母樣が始まつたつて用ひなかつたけれどあゝ、矢張自分でしとけばよかつたと、今更度々思つては悔むのです。遊んで許り居た者が急になれない事をするのですから、肩が張つたり頭痛がしたり、たまりません。此んな窮屈な家に毎日毎日人のお仕事をして昔のことを思つては、涙をのんで早くも幾年か暮しました。良人が四年後に歸朝てまゐりまして、上京をすゝめますから、私だけ行つて、京橋に居りました。良人は朝早く、夜はおそく迄働いてくれます、是なら好いと喜んで、今迄居た家は貸して東京へ參りまして都合上北品川へ移りました。間もなく次の妹が緣あつて嫁く事になりました、仕度だけは幸に仕立ておきましたから、心配はしませんでした。其頃から又も良人は遊び出しました、何日も歸つて參りません、はては妹の家へ御金を借りに行つたので、妹は離緣になりました。憎しいとも何とも云ひ樣がありません。妹に迄此な恥をかゝせるのです、口惜くつてなりません。東京へ來ても何をするといふこともなく、廣い品川を見晴した立派な家に、只ブラブラして居るのですもの、何日迄御金のつゞく筈はありません。貸しといた家も賣りました。良人は御金の這入たのを見て今度こそは必と成功しますつて眞實らしく辯明をしますから、其

氣になつて居ますと外出たきり歸つてきません、妹も心配して或會社へ勤める樣になりました、私も母とお仕立などして過して居ました。其内末の妹が腹水病で入院する、先立つものは御金でせう、少し許りあつた山林を賣りました もうあてにする物はありません。妹も青春の盛り十九歲で歸らぬ旅に逝つてしまひました 病中も良人を心配して、兄樣何卒ですから御母樣に御心配かけぬやう此家を興て直して下さいつて泣て賴むのです、鬼の樣な良人も涙を流して悔ゆるのでしたが、それ程妹が賴んだ甲斐もなく、又花柳界だ、玉突だのつて、晝夜の別なく遊ぶのです。大切の妹が死去てから、ますく生活に苦しむ樣になりましたから南品川の窮屈な家を借りて人のお仕事をして、妹は會社へ出る、不用なものは賣つてやつと暮して居りました。こんなに苦しませられるのも良人あるが爲です。母は何故早く離緣してくれないのでせう



何日迄眼が覺めないのでせう、親戚からは冷笑れます、私はひそかに身の不幸を泣きました。母はりうまちが起つて、何も出來なくなりました、困難はいよいよ加

はつてきます。妹は可哀想ですが、離緣になつた時、横濱の伯父へ預けて置いた支度の品が入用なので、母が手紙を書いてると良人が、私が取つてきて上ますつて云ふので、其れを渡しました、良人は伯父の所へ行つて受取つて途中で賣つて、それきり姿をかくしてしまつたのです。まあ慘酷とも何とも云ひ樣がありません。何所迄斯樣に苦しめるのでせう、泣にも、もう、もう涙も出ません、泣面に蜂とは此事でせう、女許りなので今迄欺れて居たのです、如何な母でも今度は伯父に談して緣緣しました。今更離緣したつて仕方がありません。けれど此先又どんなうき目を見るか分らぬいつそ獨身になつて働いた方が好いと思つた時の、私は重荷を下した樣にうれしう御座いました。南品川は不便ですから芝の伯父に願つて神田へ移りました、妹は會社へ、私は間貸しをして、何か斯か生活し得られる樣になりましたが、今度妹が結婚するに付いて又御金が入用ます、さあ如何したらよからうと、身もやせる程心配して、故郷の從姉の家が立派にして居ります、泣付て今の身には大金です、其れを祝として送金て貰ひました。妹も緣付いて好いと思つたら母が藥に親む身となつて、日増に重態ゆく許り、今此所で母に死なれたら如何する事も出きませんから、妹夫婦と共に夜も眠ずに看護した甲斐あつて、少々よくなつてまゐりました。此所は陰氣でいけないから他へ移る樣にと醫者のすゝめに、二三町へだつた所へ又移りました、さし當り入用なのが矢張御金です。藥代やら敷金などともう從姉の家へも言はれた義理ぢやありませんけれど恥を忍んで、芝の伯父と兩家から出して戴きました。母の病氣もよくなつてうれしいと思へば、大切な杖とも柱とも賴む芝の伯父が突然死去りました、後は皆他人です。何所迄貧乏神が付きまとふのでせう。橫濱の伯父は月何程か補助を約しながら一錢も出した事はない、相談相手にもなつた事のない情のない人、母は又惡くなりました、あゝ如何したら此の苦しみをのがれる事が出來るのでせう、何日になつたら樂しい月日を送る事が出きるのでせう。此情ない運命に泣いて居ります。

女は餘り早く聟を取つたり、嫁入したりすると、斯んな後悔が起ります。殊に世間知らずの身であると、一層つらい深傷を負ひます、有耶無耶の裡に男子に連添ふといふことは考へものです、世間は思ひの外恐しいことが澤山でざいますもの。

華やかな時代

かげろふ

都を東北に七十餘里、朝に白沙をふんで、阿武隈の清流にのぞみ、夕に、紫影あざやかなる吾妻富士を嘆美する隈畔の都會——

華やかな町の燈火と、かまびすしい電車のきしる音と、表情に富んだきび〱しい、多くの人の顔を見なれた眼からは、暗い家、暗い燈火、暗い顔と、色彩のない、淋しい色許りが映るであらうが、住みなれては此處も亦都、廿年の年月は夢に過ぎ去つて居る。

夕ぐれの窓に、靜にこしかたを想ふとき、おさげの時代も、テニスで袴をきらした時代も、只昨日のやうにおもかげが胸に浮ぶ、父母あり、弟妹あり、家人に別れたといふては二度限り、薄倖の人に比して、はるかに幸多き私の生よ。

やせた立木のならんで居る森や林も、土色にかわききつた野山も、春くれば薄緑の色にもえて、芽も出づれば花もさく。人生に再び來らざる、青春時代の、まだ人妻ともならねば過古の想ひとなつたのでもないが日に燃ゆるやうな血潮の熱がうすらいで、理性てふ青色の、心にひろがりゆく此頃、我、華やかな時代の心の動搖も、更に若きに進まんとする人々に、とりえもあらんかと筆をとる。

◎戀されて戀知らぬ少女

夕やみの小窓に、すもゝの花の、殊に白きを思ひながら、燈火もつけず春宵にあこがれた、其頃の十五の少女は、如何程清くあつたか、如何程愛らしかつたか。女學校とはいふものゝ、東都とはことかはり、手織木綿の衣に、海老茶の袴、木綿風呂敷につゝんだ用具をかたからわきへ、なゝめにせおふて、日和下駄の音高く、學校に通ふた其頃は、華美などいふ語の、用ひたくも用ひられぬ程であつた。

多血質の私は、特質がよく眼に立つて居た。熱し易

く、さめやすく、わづかなことに感情に支配され、友人の爲、級のため、など〻よくさわぎ立つたものであつた。

敎育家が、わけてもたしなめる小說を、私は非常に愛讀して、むしろ耽讀といふ位、敎科書はそつちのけ復習するでもなく、夜更迄夢中になつて、不如歸の浪子に一夜、同情の涙をそ〻いだり、金色夜叉の宮さんをにくがつたり、少女の心は染みやすく、動きやすく私の幼ない心は、次第に大人化して、世の中の一部を解しかけたやうな、自分では、いひしらぬ嬉しさを覺えて居た。

思へば小說多讀は、私の大なる弱點であつた、其弱點が魔弓の的になつて居やうとは、露、知ることが出來なかつた。雪のふる、ある寒い日であつた、友の一人が。新聞紙につゝんだ小說を貸してくれた、今でもよくそれを覺えて居る、戀無情、上下と、椿姬とであつた。かすといふからかりる、私の考へは至極單純であつた。あの友が自分が見もしないでかしてくれるは不思議だと、氣づいた時には、すみれインクの筆跡あざやかな、洋罫紙の手紙が、私の手に落ちたのであつた。頭ぶかく、年もわかい私には、むつかしい文句はわからなかつたが、只、「御寫眞頂戴な」と終に記してあつたのは今も忘れない。

度々の手紙に返事のかきやうは知らない、小說の間にはさんであつた、××よりと記してあつたしほりもわれとは知らなくて、遂いれたまゝかへしてやつた。若草もゆる校庭に、友と靜かにあるいた時、こんなことをいふた。

「どなた小說を御かしになるのは」

「××樣の兄樣よ……」

「なぜでせう――」「手紙なんか時々かいてあるの」

「ずゐ分あやしいわね、いくら深い友人だからつて、かはいらしい貴女を、とりこにするつもりかもしれないよ……」

私は其時始めて驚きの眼を開いた、心をめちや〳〵に破ぶられたやうに、恐しくて身ぶるひした、美しい心の紙は、始めての誘惑に、驚きと恐れとに、よれよれになつてしまつた。

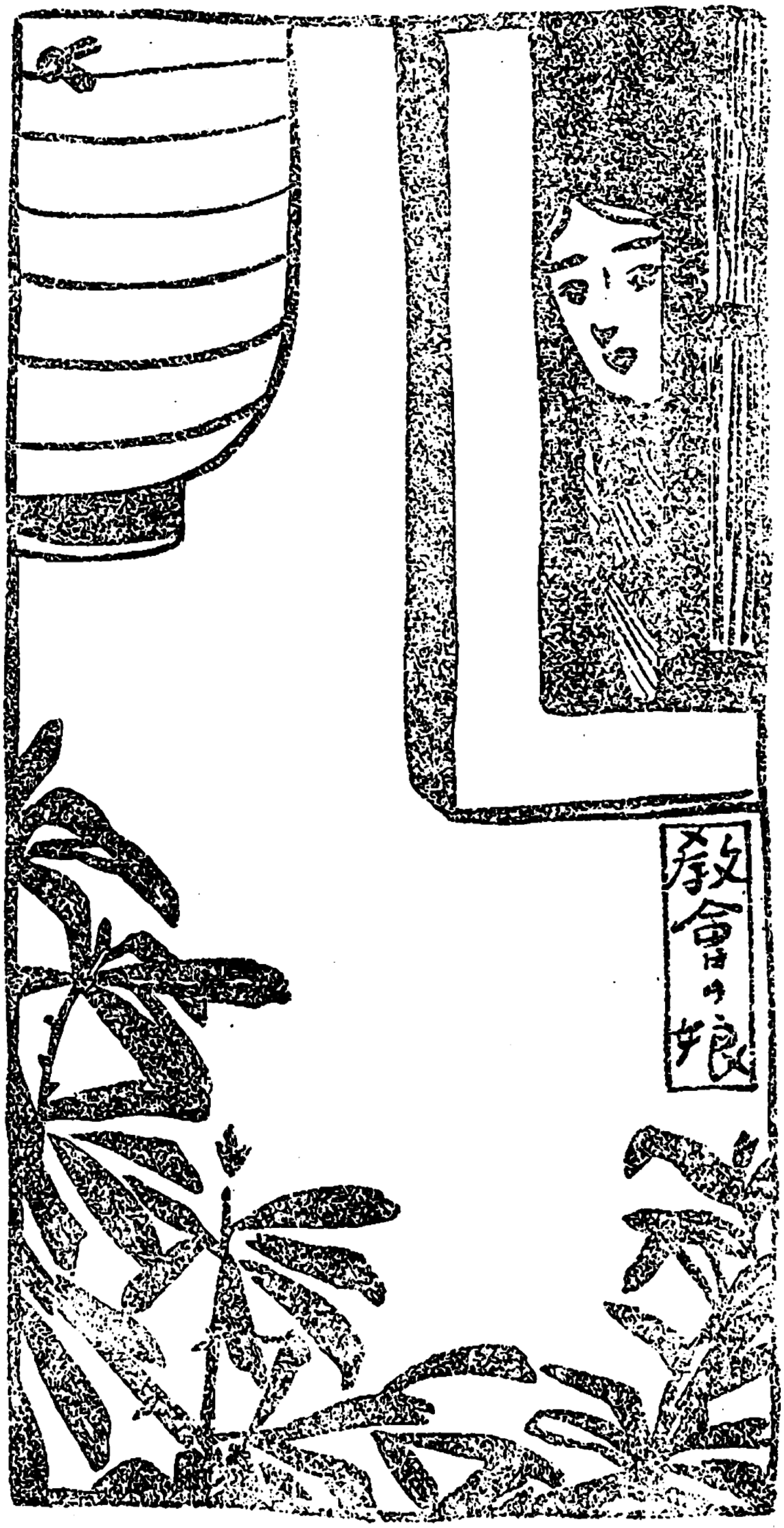
◎十六歲

戀されて、なほ、戀知らざりし少女も、芽はえ草に春風はやはらかく、すく〳〵と丈のびて、春たけなはに

花をつくべく時は來た。活潑にはねまはるべき少女は、一人、日かげに物思ひするのを心よくおもつた。

わづかなことに、涙をそゝぐ心の中は、なんとなく人戀しく、すべてに戀しさを思はれる。青春時代の危期、淋しいと思ふ心がそれとは、知らうはずがない。

十六の夏空はみどりに、山はみどりに、眞夏の日某溫泉の浴客となつて、すがくしいみどりの風に、心迄、綠化せられて、活々しい中にもなほ、心の奥の淋しさを、のがるゝことが出來なかつた。



若い血潮をもやしての、同情の涙は、一日、或る異性に對して、美しい涙をそゝいだ。その、涙をそゝぐ瞬間に於て、遂にとらはれたる女となつてしまつた。小さな心には、忘れがたい一人のおもかげがゑがゝれて居る。畫かれたおもかげは美しく、しかもまぼろしは淡い。

つぼみの花は、やはらかな異性の眼にほゝゑみてゆく秀麗なる、眉目の青年は、只美しく笑つて居る。

戀にとらはれた女には、親もない、兄弟もない、師もない、友もない、あつき血潮に胸はみなぎりて、二人は美はしき戀に酔ふべく、定められたのである。冷やかな心を以て判ずれば戀既に狂

である、狂的の行をして平然たる、それ實に醉ふて居る爲めであつた。

永久に變らじと、幾度かちかひつゝも、熱するものはさめる時が來るべきものである。

◎破りし戀

あまりに早く醉ふた私は、只淡い樂しみを、くりかへす許りの一年の戀に醉ふのをゆるさなかつた。日每に覺ゆる心のいたみ、戀人がやがて兄弟となり、友人となり、つめたい流にへだてられて、はなれ〲の道をあるいて居た。

雪のふる寒い夕、友からの絕交狀をふところにして友の家路をさして行つた時の私の心、終生の友とちかひたる、其人にも見はなされし口惜しさと、身の罪惡とにくるしめられて、〱、友に逢ふた時は、たゞ私は泣きふしてしまつた。其時、「忘れませう」とちかつた語が、忘れずに頭をもたげて居たが、遂に最後の手紙は私の手よりかの人へ渡された。

遠きにありて見る富士のすがたは美はしい、まして甘き酒に醉へる若き人の、戀といふ薄衣をへだてゝながめるのだもの、近き眼にては見るにたへない姿である。

私の眼はひらきかけた、あきたらないかれの人格と、熱の冷えゆく淋しさに、自らすてし戀ながら身を室にいれてあるさへ苦しかつた。

薄情とあざけられ、のゝしられながら遂に別れた、「再び同じ道をふむものか」と最後の言葉をのこして。

……失意の女はかへつて强かつた、のゝしられたに對しては限りなき反抗心が起きて復讐してやらうといふ氣にさへなつた。

◎復活

靜かに心をなぐさむべく、敎會に私は慰安をもとめたのであつたが、其處も私をいるべき處ではなかつた主を讃美する歌は淸くも、集まれる信者の樣を見てそこも去つた。遂に私は、すてられんとした友の手によつて復活の人となつた。けれども弱きは人の心の常である、すてたる人なれどもなほ、よかれとのみ祈つて居るのに、彼れは再び初戀の如よそほひて戀しつゝあるときいて、限りなき侮辱をあたへられたやうに感じた。私の復讐時の眼は、世のあらゆる男子にむかつてそゝがれたのである。

◎上京心

反抗のかげには堪へず、華やかな都會のかげが、畫かれて居た。卒業近くしてもゆるやうな上京心。諸種の雜誌などにあらはれたる、都會の人、都會の畫、などは、すべてなつかしいものであつた。

けれどもとらはれた女は、動くすべもしらなかつた。女の總りやうといふ、ながい運命のひもにまかれて、一歩もいづるをゆるされなかつた。

上京もならぬ運命とあきらめて、四月校門を出た。幼にして商人たるべくをしへられた私は、すべてのよく望をすてゝ家庭の人となつたのである。

文學雜誌を其頃から、よくあさつて居た、一句々々肺腑をつらぬくやうな、現代の若い女のさけびには、眞から涙をそゝいだことがある。中に最も、女子文壇は私の心をなぐさめてくれた。誌友の筆になる、あざやかな文を讀む毎に、いひしらぬあたゝかさがみなぎつてくる。

華やかな春の後に來るべき、みどり色は次第に濃く同時に醉ふたかの時代に胸がいたむ。

過古も忘れ未來も考へず、只現在にいきなんと思ふた。過古の回想は一歩も今進むをゆるされないからである。

◎再び來りし誘惑

鬼も十八、番茶も出花と、古い言葉ではないが、十八の頃は春中の春である。心も華かなれば、肉も美しい、常にはみにくいと思ふ人も、なんとはなしに、忘れがたい印象をあたへる。おそろしい誘惑の手は再びむかつて進んできた。

月なみの戀文句をならべてとくとくたるもの、過古の弱點をとらへて、たくみに情をのべたるもの、眞情を打ちあけてきたるもの、始めての手紙、再度の手紙、まよはんとしては、理性にさゝへられた。

冷やかな心、冷やかな眼を以てのぞむ時、「馬鹿々々しい」と一笑に附せざるを得なかつた。

一度、通つて知れるみちに、しかも暗いみちに、二度通つてゆくに燈火をもたぬものがあるか、燈火もてるものは既にいつはりである、あやうきを知つてわれからにぐる人である、それだけ相手には情がうすい。

二度戀せじとちかつた口に對しても意地がゆるさない一方に於て理はゆるさない。熱情あふるゝ文も、た

だ一かいの灰と化してしまつた。
まだ若い人達だよに、十八の少女の口から、こんな言葉がもれるやうになつた。

◎いつはりの衣

泣いて暮すも五十年、笑つて暮すも五十年、五十年と定まつた一生なら、樂しく暮すが上さくと、さとつたやうに、こつそりかむつた無邪氣の衣、華やかな色の、若々しいいつはりの衣をまとふて、私は、十九の私は、初心をよそほふ、いつはりの女であつた。

若いやうで、無邪氣のやうで、しかも一重の裏にはにがい經驗をもつ女、不可解の女と人がいふたのも無理がない。

引きよせて、のぼりつめた山上に、かげをかへしてい、ほゝと笑みを送る時、茫然たる相手の姿を見て勝利をさけぶ、恐ろしい女、罪の女、人の心をもてあそぶもの、非なるより、心をもてあそばるゝ人の愚なるを笑つた。けれども心の底までかゝ化しては居らなかつた。底には眞が生存して居る、いつかは頭をもたげんとして…………。

◎二十歲

年明けて、今更に我年を思はれる。既に去れる、十代の、華やかな年よ、心こそとはに若くも、胸の血は日毎に冷えてゆく。平凡な女、情に走らば、平凡な境もだつすることが出來るであらうが、今の私は理の發達しかけた女だ、しかも平凡なる境に滿足せねばならぬと滿足しつゝある女である。

「裁縫なんか、パンの代にしないから」と自らさけんでまらひ／＼で押し通した私も、今其心が、何處に存在して居るか、せねばならぬと思へば、なか／＼に興もわいて、細い針にちら／＼と、衣をぬひゆく手先に、いひしらぬ樂しみはある。

小說讀みに一日暮らすなんて、「まあもつたいない」といひたくなる。若い頃のおもかげ今いづこ、我も又老いたり、と、一人淚にくるゝ事もないではない。頭におもい高まげも、春をほこる色ならず、過ぎゆく春をしまんとてのかたみと思へば、思へば……。

弟年少にして、如何にしても、養子をむかへなければならぬ身の、一度はなげいたこともあつたが、それを退ける程、無茶をやる女でもなくなつた。かくれた

平凡な女となつてゆく。縫ふこともく山程ある縫物を處理しつゝ、朝夕の炊事に手をあらして、讀むことも、かくことも、夜仕事の後、それが反抗もせずに、覺めつゝある女よ。過古のなつかしい追憶と、見えすくやうな未來とに、なまぬるい涙をながして…………。

＊　＊　＊　＊

涙多くなつたのも病身の爲め

木村涙花子

私の身體の弱いつたらお話しにならないので御座いますの、それも幼い時には至て丈夫な質でしたのに、十歳の時學校で鬼事をして、鬼に追かけられ、木の根につまづいて大きな一抱へもある石に右の胸をイヤといふ程打ちました、其時の苦しさ、私が氣を弱くしてゐたら必度氣絶したに相違御座いません。所が同時に授業のベルが鳴り渡りましたのでそれに氣をとられて夢中で起き上りましたが、一時は呼吸も出來ず聲さへ立てられなかつたのでした。之が私の未來に輝く美しい希望を根から崩して仕舞つたのです。其れから二ケ年過ぎた、高等二年の時、突然恐る可き肋膜炎は私をおそひました。五時間許りは人事不省となつて、父母を驚かせました。それからは病院へも入り、手術も受けて遂に全治致しましたが、何うも皮膚が弱くなつてともすれば風邪いたり、氣管を冒されたりして、御飯よりも好きな學校は缺席勝ちで、前を通ふ生徒を見ては、泣き面してをりました。でも性來敗け嫌ひの私は決して人には敗けまい遲れまいと、父母の目をかすめて勉强しました。それ故尚更體に障つて、高等四年の時は、左右の肋膜許りか、胸膜、腹膜炎まで起して了ひました。父母は彼の名醫、此名醫と歷々の博士に見せましたが、何れも望みない事を申したさうです。吁兩親の心痛、其時の顏色、追想するさへ涙の種です。孝は親を安んずるより大なるはなしと申しますが、私程親不孝な者が何所に御座いませう。父は斷然退學せよと申しました、何うして服命せずにゐられませう。夜具をかぶつてさんぐ泣きました。師の君からの「一秀才の子を失ひ」てふ御文を讀むだ時は、私はもう泣

くより外はありませんでした。其後父母の心からの看病に、十六の時はすつかり忘れた樣に癒りました。さあさうなると一度沈むだ空想に近い希望は、又ぞろ浮み出した、何うしても裁縫所に等通つて平凡に暮してゐられません。しかし苦學して女子大學までといふのも退きました、女子師範も斷念しました、女子判任官の出來始め新聞に寫眞の出たのを記憶してゐる、私は其麼人になつて見度くて、遂に郵便貯金の管理局へ受驗して首尾よく入りました。私は天にも上る心地で何卒して希望を貫き度いといふ一心から、眞心こめて事務をとりましたのに、吁矢張悲慘な思ひに泣くのでした。運動不充分の結果胃を損じて歸宅の止むなきに至りました。もう斯うなると希望も何もない、病氣の快ゐるのを待つて、土地の實業補習に通つて氣隨氣のまゝ技藝專習に向ひました。注意深い兩親の膝元で學ぶのですから、其後大した病ひも致しませんでしたが、此寒中を風邪き勝ちに過ぎて、今年も既う三月となりましたので、友等は樂しげに師範の試驗を受けに行くやら女學校の規則書と首つ引きするやら、お目出度いとかお目出度くないとかつて大さわぎ、私ははやる胸を抑へて、ジツと針運ばして居ります。吁私も行き度い丈夫な皆樣が羨ましい、歸宅しては人しれず椽の柱にもたれて、都の空を眺めては自分の身をかこちゝ涙ぐみます。しかし愛てもれる神にも似たる聲を耳にしては、風につけ雨につけ、ひたすら我娘の無事を祈つていらつしやる兩親のお顏を見ては、忽ち友を羨む心は消えて、孝養てふ念がムラ〳〵とわいて出ます。けれどねえ、私も氣弱い少女です、裁縫室へ這入つて友のいそ〳〵と新生活に入る可く準備中なのを見ては、何だかから自分許捨てられる樣な氣がして情ない御座います。實際體の弱い程損な事御座いません。一生不滿な心を抱いて、自分を卑下し、親に不孝な事此上御座いません。彼の時一寸の注意で石につまづかなかつたら、斯うした涙の安賣も致しませんでしたらうにと、しみ〴〵思ひます。

橘　糸重子

いひしらずうるはしかりきしかはあれど短かく消えし夢をしぞ思ふ
胸にみつわが此の思ひなくばいかにやすけかるべき淋しかるべき
ゆきあひし小さき柩人しれず群にはなれて送り行くかな
いはぬおもひいはぬなげきの若しあらばひそかに語れ山吹の花
情あらば問ふなあばくなうきことの限りをひめし胸のおくつき
夢にあひし人もやあると夢に似し林のあたりそゞろさまよふ
つまれけりすてられにけりふまれけりすくせつたなき名もあらぬ花

眞實にお可哀想な百合子さん

佐分華影

小說よりも面白い事實を、廻らぬ筆に書きつゞりて皆さんに御らんをねがひませう、これも一つの他の身の上話です。

百合子樣は六つの時にもう命がなかつた位ですの、其れは濃尾の大地震ね、今年で二十一年前、私なんかまだ生れない前でした、其時に、姉樣と一緒に寢てゐたが突然グラ〱と來たでしよう、姉樣は八つで學校も二年生だつたものですから、地震つて知ると母樣のゐた茶の間迄逃た時、家がこはれて姉樣は押しつぶされて死んで了ひなすつたの。

百合子樣は寢床の中で、半日、戸障子や、いろ〱の物の下で泣いてゐたが、やう〱午後出されたのです。頭から何處から酷い怪我してね、本當に氣の毒でしたつて。

其のち百合子樣の家では家庭の風波が絶えまなくありましたの。名古屋で父樣が妾宅をひかへなさる、そして子供が二人も出來る。それやこれやで家庭は暗くなつて行きました。

併し百合子樣には、折々琴のさらへに出したり、美い着物着せて彈かせるのが母樣のたのしみでした。茶の湯は名古屋から先生を招んで習ふ、生花や八雲琴等も習ひなすつた。

十八の時に聟さんを貰ひなさつた、其人は東京のある立派な學校に居たのでした。百合子樣は美くしい人でしやう、けれども向ふの男が風采の揚らない方でしたから父母樣達が見合の後に「いゝかへ、あれでよくお前見たの」と云はれたさうです、すると百合子樣が「はあゝの方で結構です、顏で人間の價値が解りません、私には異存はありません」つて仰有つた。

それで結婚なさいましたのが十一月でした。向ふは何にも荷物なしで、本箱に机に下駄が三足に傘と何だか一つの長持に入つて了つたと、翌日きる好い着物までも百合子樣の方からしたのですつて、何十萬と云ふ財產家へ來たのです。

それから十日許被在つて、又東京の學校へ歸つた、學校はあのK樣のいらつしやる學校です、小學校時代から優等許りだとか。手紙で互の思ひを通じてゐたのですがどうしても手紙ではね、春もすぎ夏に歸られました時には、共に別莊へいらつしやいました。其時にある人が百合子樣の手を握つたとか何とかしたつて怒られたさうです、花壻さんは嫉妬心の深い方でした。

百合樣の從兄が當地の會社へつとめていらつしやつたのですから、奥さんもないし社宅ですから淋しいのでよく遊びに見えて、百合子樣とは幼い時よりの友達で、良人より打解けて話される物ですから、壻さんが疑つてね、そりあ罪もない百合子樣につけ〳〵と仰有つたさうです。

壻さんは又東都へ歸られる時、百合子樣も見物かたがた一緒に被行いましたの。そしたらね、あの方が小柄で美くしい者だから、若く見えるでしやう、そして男の方は風采の感心しない方でしたから、老けて見えましやう、宿で夫婦と云はなかつたさうですよ。十日程百合子樣は東京を見て、父樣が迎へに行らつしつたから歸つて來られました、又夫婦離れたのです。其年もすんで翌年の春になりました。

壻さんは學士號を戴いて學校を出た、結婚後の學費は皆百合子さんの家から出たのです。

東京のある銀行へ頼まれて、つとめに出た時にも、百合子樣を東京へ出すとか、出さぬとかつて、こちらでは母樣も一人娘でしやう、そして名古屋には憎い者が居るんでしやう、それだから淋しいので、出ししぶつてゐる中に日が立ちました。

二三ケ月立つと、壻さんが支那の支店詰めになつたので、又靜まりかけた問題が起つた、結婚さしてから二年程も離らかしておくのですものね。此時思ひ切つて支那の方へ一緒に二人お出しなされはよいのに、今度は東京より遠いでせう、でも百合子樣は行きたかつたさうです。

「支那の方へ行つて見て、よい具合だつたら私が後から百合子を送つて行く」とお父樣が云つて、壻さん一人支那の方へ遣つたのです、これがいけなかつたのですよ。支那へいらつしやつてから、折々手紙で百合子を連れて來て呉れる樣にとくるけども、其の初めの樣に一人娘を心細い樣なと思つて順延しにしてあつたものだから、遂に壻さんは、やけを起して堕落して了つたのです。支那の藝妓に溺れたのです。そして百合子

樣に「何故此方へ來ぬ、もうお前は私何んか忘れて了つたか……」從兄を疑ぐつてゐたものだから尙然う云ふのでせう。其中に百合子樣の所へ金を送れつて云つてくるでしやう、百合子樣も自分の小使から秘密にして送られるでしやう、折々からしていらつしやる中に多く送れつてくるんでしやう。

百合子樣もいくら財產家だとて、自分の自由になるものではないし、親には話されないし良人には送れないしと心配なすつたですわ、をり〳〵「養子娘は世間からいゝ樣に思はれるけども、嫁入りした方がどれ程樂なか」と話されたさうです。



其中に父母樣に知れて、聟さんの方へ歸つてこいつて手紙を出すと、學士の方からは借金がある、と云つてくるんです、仕樣がないから旅費も混ぜて金を送る、數多でせう。

歸つてらつしやると、小間使にやらせばよいことまで、わざと百合子〳〵つて色々やらせる。この時からですよ、寢汗は出るし、

座敷など掃除すると汗でびつしよりになつて苦しいつて仰有つていらしつたのは。

其時に父樣は名古屋の家に男の子があるでせう、男の子に本家を相續させて、百合子は女だから新家でよい、だが財產は半分づゝなど仰有るので、學士は嫡子に新家つて法がないつて、又いろ〳〵と不足をならべなさるので、人が出入りしてとう〳〵離緣になつて了つたのです。百合子樣は其頃から胃腸が惡いつて云つてらつしやるくせに、顏などは血色がよかつたのですよ。

それから有馬の溫泉へ行き、向ふで病氣が變になつたものですから、大阪や京都で博士たちに特別診察して貰ひなすつたら、肺ですと、あの結核ですと、俄かに驚いておかへりなさいました。床についていろ〳〵と立派な醫者にも見せ、人のいゝと云ふ事は何でもやつて、看護婦も名古屋から賴んだのです。

それから又だん〳〵とよくなつて、全快祝ひの相談迄あつて、裏が廣いから立食にするとか、名古屋からコックを招ぶとやら、其日に使ふ道具まで買はれたのです。百合子樣には昨今東京で流行する頸飾りの金ぐさりの時計もお買ひなさるし、そしてよくなつたら××の別莊は不可ぬから、××の方へ別莊を立てるつて地所も木もお買ひなさいましたわ、海邊です。

三月の十二日、晝前少しの中町を見て、それから午後いつもの樣に髮結つて、アルコールで身體を拭つて夜の八時頃に氷が欲しいつて、看護婦さんに氷を臺所へとりに行つてる中、女學世界を讀んでゐたのが、突然、氷々つて仰有いました。そして酷くせきをして被在いましたから、風邪氣で一間おいて向ふの間に寢てゐた母さまが出て來て「百合子百合子」と仰有つて見たら、何も返事はなく、其處等中眞紅ですの、驚ろいて人を呼ばれたから、看護婦が飛んで來た時には、もう血の塊で呼吸がつまつていけませんでしたと。一分程の中にね、ほんとに一人でお死になすつたのです。母樣なんか驚いてね、ぼんやり間の拔けた樣な顏していらつしやいました。

それから半期程たつてから、母樣が娘の所へお墓參りにいらつしやいましたら、×××と云ふ名刺が百合子樣のお墓の前にありましたつて、離緣された聟さんのです。其時門前で洋服姿の聟さんを見たと云ふ人が二三人ありました、小說の樣なと思ひました。

今は出世してらつしやるとか、今は奧さんがあると

か申ます。私ね日本へ被來るなら、屹度百合子樣へ又お花を供へに被來ると思ひます、今は朝鮮です。
二十二で死なれた百合子さんは、目の大きい人でした、今なら夢二式つて云ふでしよう。美人つて云ふと何故肺病で死ぬでしよう、美しい方は御用心なさいませ。

早く身の治りをつけたい

島守女

女は二十年の聲がかゝると悲哀が滿ちて來て、寂い思がせずに居られなくなると申ますが、實際さうで御座います。まして廿年過た今の私の身は、もう誰やらのやうに、本人にこそ〳〵してる樣な處へ誰が嫁てやるものか、十遍なと百遍なとむだ足ふんで歸らんせ、などゝ氣らくな事は言つて居られない。年毎に秋と共に我身も更て行ではないか、と云ふ觀念を抱くやうになつては、もう片時も早く何處へなりとも嫁ぎたい、我住む家となれば馴ぬ業も敢て苦しくはない、と思ひましてもさう〳〵下等社會のやうに自分の得手勝手が出來るものではない、此間新聞で見た神戸の貧民窟あたりでは「娘の子は年頃になれば、親が許さうが許すまいが、好いた男とサッサと世帶を持つて行く」と云ふやうな氣らくな生活をして居るさうだ。なまじひ少し計り資産ある家庭に生れたものゝ境遇は、極めて拙ないもので御座います。生れて慈母の育に離れた私はとかく虚弱な性で、病勝で有たから、成らう事なら獨身で送りたい。昔のやうに尼とまでにならずとも、現今は女子の職業はいくらもある、是が私の本意なので御座いますけど、子に甘き父は是非に嫁せしめやうとする。友は文をよせて言ふ「蒲柳な人でも立派に妻たり母たる責任を全うして居る人は枚擧に暇あらずでは有ませんか。もう少しシッカリ遊ばせな、總じて女子は獨立して生活し得べきものでない、それは百人に一人や千人に二人は有でせうが皆早晩結婚なさるのですから、同じ結婚するなら人のふり返りもせぬ時に及んで

求めてなさるより、お父様の御意見通りに從て、今のうち早くお嫁を遊ばせな」から被仰れると以前の決心もどこへやら、いつの間にか心は其方に傾てしまふので御座います。

四十二年の年は何故か世の中と共に我身にも禍が多かつたが、やがて涙のうちに其年も暮て、翌れば暖かき春の光が野に山に滿ち渡つて霞たなびく頃、我身もあたゝかき春光を浴びて一度枯れし胸の血汐も若芽も共に榮えて病は跡なく癒える。續いて起る縁談の申込が丁度芝居の幕を開くやうに次から次と又始まります始めの申込は餘りに身分が低いとて、お父様がはねておしまひなさる。

次は開業醫、資産は少ない代り家族も少なく弱い體の私にはふさはしい先乍ら、血統の餘りに正しくないと云ふ處から止めになつてしまふ。

第三には〇〇技師、血統も正く本人も有望なれば、望み丈の仕度は調てやるから嫁け、とお父様から進められたのを、私は一度呼吸器病を患うた事のある身で寒い國や遠い地へ轉任する毎に從つて行かねばならぬのが嫌でお斷りする。

次は神港の〇〇會社員、去年の秋本誌の交際欄に住所を發表したのが元で、屢々お手紙を頂戴いたが少しもみだらな言は被仰らず、至つて快活な青年故、私は友人同樣にお交際致して居ましたが、今年更衣月に入つてから、不意の申込、同時に届いた小包の中には、三越のタイムスで見た、結婚を意味したリング、星模樣あるハンカチーフ、寶石のブローチなど、私は是等の品物ヶ代る代る眺めて、心臓から血汐の流れ出る音が我耳に強く響くまでに胸騒がせた。

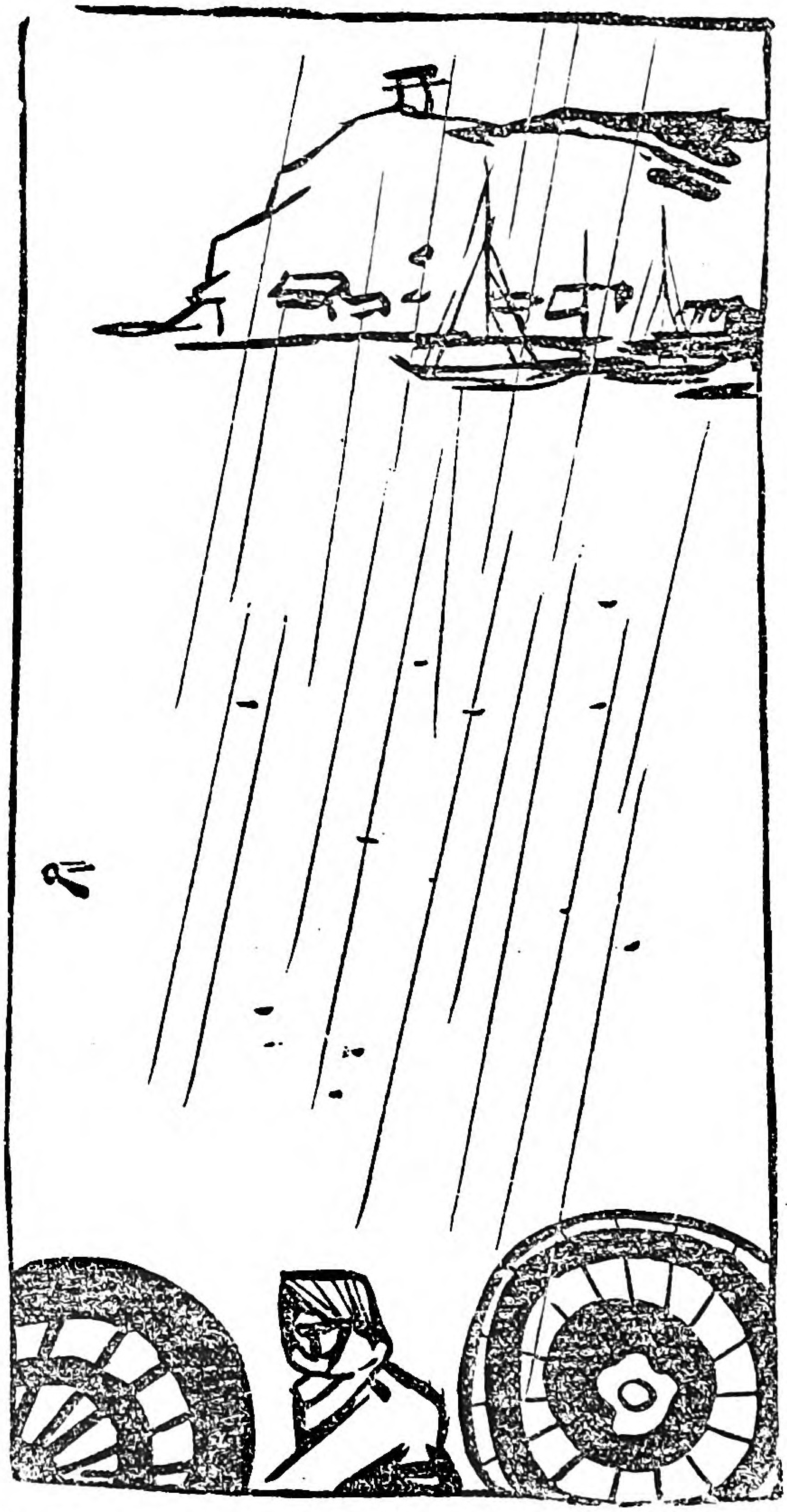
然し一度異性の方に欺かれた私は、最早二度と巧妙なる手段に乘りますまい、是で以て女の歡心を買ふ目的なのだらう――と云ふ反抗心がムラ〱と起つて、早速突返してもやりたう思ひましたが、取敢ず兄に相談致しますと「何の有望な人なら嫁ばよいでないか」とすつぱりした被仰られやう、翌日兄様からお父様のお耳に入たので、娘を持つた親の役目と被仰つて、早速彼の人の郷里へ身許調べに被行いました。お父様のお立になつてからお歸宅遊ばす迄の私は、さながら和氣公を神勅に使はせた時の道鏡のやうで御座いました。

其間姉樣は早、長襦袢にとて友禪の柄〱選つたり、着物の色合、帶の模樣など考へて被在つたけれど、私はそれ等の物質上の事は少しも考へないで、又も成立

しないので有つたら——と取越苦勞の爲めに心は絶えず寂しい暗い方をたどつて居た。

お立ちになつてから五日目の朝、門に車輪の音を強く響かせてお父樣はお歸宅になつたが、私は其日終日部屋に籠つて何の兆か庭前の梅花只ハラ／＼と溢れ散るのを眺めて居た。夕ぐれ兄樣會社からお歸宅になると、お話は有ましたが、私の身に取つては失敗に終らねばならなかつた。「資産は相當あり、血統も惡るくはないが年若き後添ひの母に幼兒が澤山有て、本人とは腹違ひの弟妹故、其間に立つて圓滿を保つて行くは容易ではない、今の內こそ家を出て居るが、嫡子と生れて被在るからは、早晩相續せねばならぬ、それでも敢てゆきたいとならやつてやる、其代りには仕度も何もしてやらない」と嚴かに被仰られた。

其刹那、私はもう何も欲しくはない我身とおなじ繼しき人の手に育てられた方の慰籍者となつて苦痛を忍んで行かう——とは思ひましたが父の意見にさからうて嫁した曉に、もし辛抱が仕切れなくなつて、破鏡に逢ふたらどうしよう、お父樣への申譯は立つにしても、出戻りと言れては估券が下る。私は金色夜叉の宮さん同



樣に視られては殘念だ。物質で責られる私でない、それよりかお父樣の意見通りに從つて居ればやがて幸運に暮る天の恩惠が巡つて來る春もあらう。と遂に筆執つて手紙を認め、彼の贈られし品物は返送致しました私は是限り本誌と長久のお別れせねばならないのかと心を惱ましたが、それにも至らずに止みましたのをよろこびます。

誌友の誰やらに欺かれたと云ふ詩人には同情者の數が非常に多くなつた。「島守女樣、あなたお才の國お讀なさつて――おいたましい筑波根詩人を欺いたのは何人でせう――」とよく千鳥子樣が書いてよこされた。

然し私も女には相違ありませんが「皆僞を言ふ」と言れる數には入つて居らないつもりです。私は寧ろ欺むかれた一人です、欺かるゝとも知らず其人を慕ふて上京した當時のあさましさと、自ら覺つた現今の果敢なさとを、つく〴〵思ふ毎に、一足とびに海越えて寂しい想と悲しい想に夢安からで病てある彼の人の看護させても戴きたい思ひが致します。どうせ成るは嫌なり思ふは成らずと云つた世の中だから、私はいつそ父が嫁けと云つた第三のに嫁して居れば今の苦痛はなかつたらうに――斯くて徒らに我春は過ぎて行く。

嗚呼今は月にも花にもはぐれて離れ小島に佗住の身雨の夜、風の晨を寂しとかこつは、唯に我身一つにはあらねど、今後の我運命はいかに支配せらるゝ事でせう――と涙流れて――

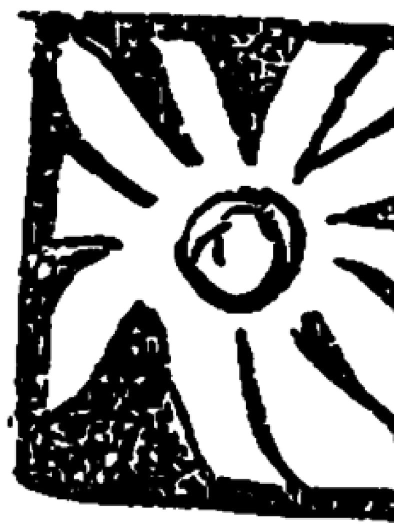
雲井弄齋（箏唄）

新曲

月もろともに時鳥、鳴きて入るさの山の端見ればはや短夜も明け渡る。
又の逢ふ瀬もいざしら露の、餘りて置ける袖の上げにも袖の上。
哀れはかなきうき世の中に、ともに絶えせぬ契をぞ待つ、げにも契をぞ待つ。

古曲

月と入ろやれ山の端に、離れ〳〵の浮雲見れば、あすの別れもあの如く。
思ひそめたよ濃き紫の、袖はちしほのわが涙。
忘れ草がな一もとほしや、植ゑてそだてゝ見て忘れよ。



春の寄宿舍

靜江

四月十六日　火曜　晴。

ゆうべ、一時頃めがさめたから靜かに起き上つて、夏さんのお布團を直したりして上げたが、何も御存じなくよく眠つていらした。今朝はもうすつかり氣分がよく成つたと仰有る。私も嬉しかつた。

漢文の時間に先生からソット今度の文學會の期日を敎へて頂いた。これでも一番上の級なのだから、少しはアッと云はせるものをし度い。

丁度よくと言はうか、惡るくと云はうか、習字の先生がお休みなので、皆より〳〵相談する。相談といつても首を集めて公然とは出來ないのだから、皆チヤンと席に座つて、硯も紙も揃へてお互に背に向つてお話したり後の人に自分の頭をてしてお話する。中には御念入りに二三字かきかけの古い紙を出した方もある私は墨許りすつてドロ〳〵にして終つた。其れと言ふのも實はいつぞや二宮さんが、丁度今日の樣な日に、扉のすきからお隣りの四年をのぞいていらして、折あしく敎頭のミスNに見つかつて、大までつきをしたからで。

西洋史の時間に井出先生が、シーザーの殺された後のマークアントニーの演說をなさつて、餘り夢中になつてまるで私等を羅馬の市民でもあるかの樣に、御自身泣かぬ許りのお聲でやつて被居たまではよかつたが「これでも彼は野心家であつたらうか。ブルタスは然云ふ。ブルタスは名譽ある人である」と一言云つては退り、二言云つては退り「シーザーは三度市民の捧げた王冠を辭したではないか」と仰有つたと思つたとき敎壇から後におちて終ひなさつた。私は夢中で知らなかつたけれど、二宮さんは「私もう後二尺五寸許りだからあの樣子ぢや三分もしたらと思つて居た處、案外早いので少し驚いたわ」ですつて。さすが數學のお得意な方だけあつて、兒童心理の時間に先生が「ですね」を七十と二つ仰有つた事や、和文の先生のおぐしの周圍が二尺八寸三分あつた事や、皆二宮さんの統計によるので。通學の方の中で一番のおもしろい方。

午後お花。母樣は私に課目外の花から書から皆おさせなさるから私が忙しくて仕方がない。二重に活けて

應接間に置く。早くしまつてお洗濯をする。今日のお仲間の村上様、小原様、河村様方もう大分お話しがはづんてゐる。アイボリーを半分もとかしてしまつて、三つ許りのものを洗ふ。ハンカチーフは裁縫室のアイロンを拝借してかけた。

お風呂から上つて、小原さんと二人眞盛りの花の下を散歩する。

寢しなに那須の伯母樣から封書。

十七日　水曜　曇後晴れ。

始業のかね前に英文法の練習を級中集めて、教員室の先生のお机にのせて置く。今日は二人お休みで淋しかつたけれど三時間目に、ドキ〱しながらお待ちして居たら懐しいスリッパの音がして先生がいらした。一番出口に居たので、一寸入るとき會釋なさつたら、雪さんグイ〱袖を引きなさるので熱つくなつた。私のはまちがひは無かつた。意地の惡るい雪さんが又、「さすがは」とさゝやく。

リタラチユアの時間は餘り早く經ちすぎる。ミスはミルトンのお講義が面白いので、初めお厭だと仰有つた方迄失樂園狂になつてしまつた。

ミスPの理科のときは顯微鏡でみる苔を探して遂々一時間遊んでしまつた。體操は厭だけれど一週の中で一番すきな日。

午後はお書。光さんは膠を解いて火鉢にこぼして終つたり、朱黄をとくに膠を入れたり、失敗計りして被居る。正臙脂をとくのにお箸でしぼつて居たら、先生にみつかつて「お姫様」つて笑はれた。だつて爪どころか指まで染まつて仕まふもの。

ミスニユーマンがいらして、久しぶりにホツケーをした、二度キャプテンになつたが一勝一敗。遂に勝負はつかなかつた。夜那須へ御返事かく。

十八日　木曜　晴。

今朝初めて文學會の事が發表された。どの級も餘興の支度やら何やら急に活氣づいた。

色紙にかいた「あふみの海、ゆうなみ千鳥ながなけば」のお清書と、作文がかへつた。例の長い評はくりかへして幾度かよんだ。

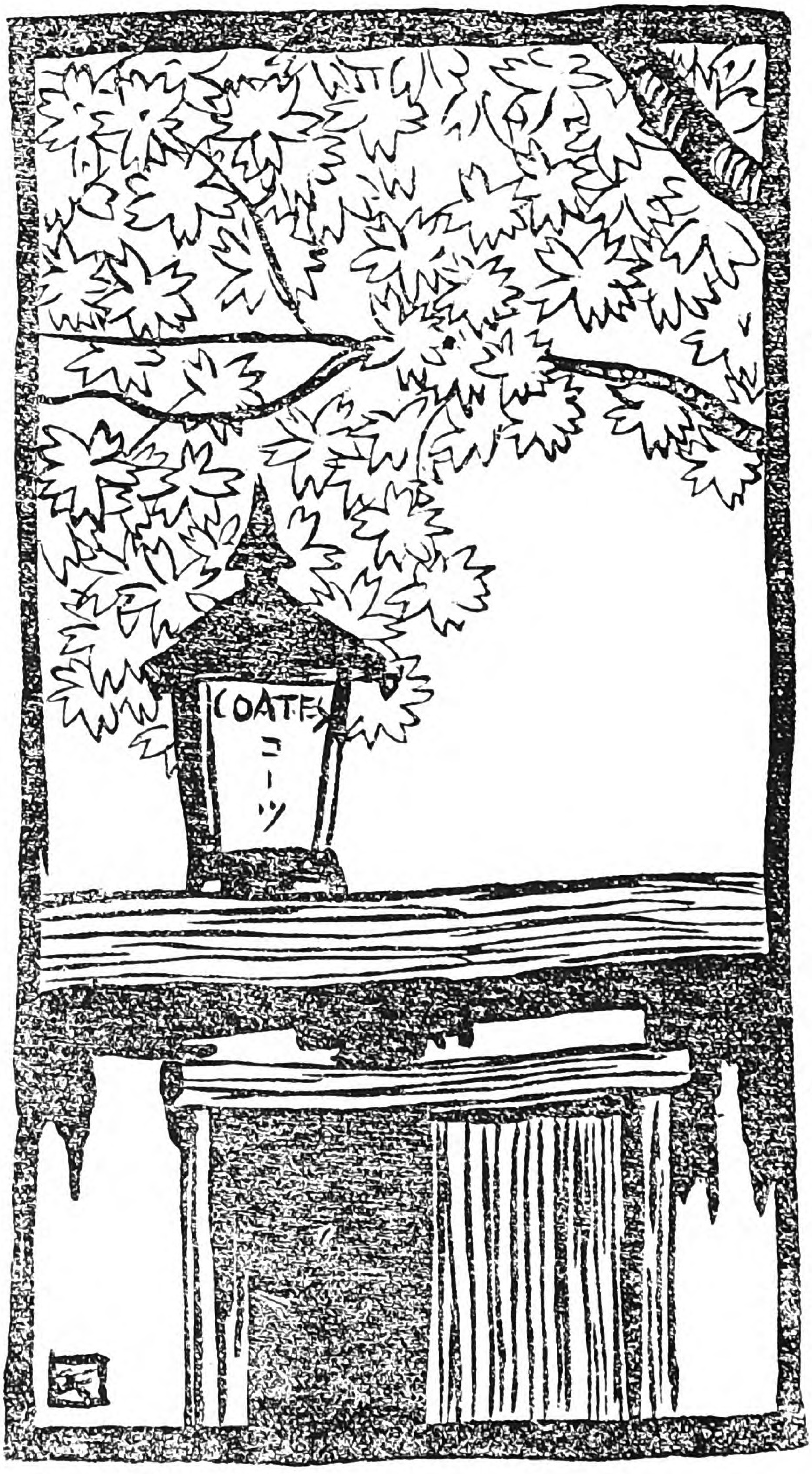
午後裁縫。吉井さんのぞべ糸がこぐらかつて、かけて上げた、私は片袖しかぬはなかつた。

お風呂に一番に入つて髪を洗ふ。小原さんが始めから終りまでお湯をくんで下さつた。

大きなタオルをえりから下げて、バランダーに出て

乾して居たら、グリーンハウスでミスHが食堂の花を切つて被居る。空色のお服に白の胸掛がうつゝて、下の方に無造作にまいたお髪の美しさ。御存じないてとと思つてじつと見て居たら、不斗振りかへつて、お氣がつきなさつたらしくお笑ひなさつたのが、自分の心をのみ通された樣で、あわてゝ走つて入つた。

輕ろく成つてよい箸の頭が、妙にシク〜痛む、日誌だけ手早く舍の出來事を誌るして、ミスHにお斷りして早くやすむ。



窓は上の方二寸計りも開けた儘、鎧戸もしめず、窓に向いてねた。朧ろ〜の美しい宵であつた。しだれる程にさいた牡丹櫻が窓からのぞいて、室の中は明るかつた。いつか眠つたと氣がついて眼を開くと、冷たいタオルが額に當てゝあつて、思ひがけなくもミスHが座つていらしたのでふるへた。

いつ被居つたのか知らなかつたけれど、亂れて居た髪を綺麗に束ねて、水を入れた白いベースが側に置かれてあつた。

「有り難う存じます、一寸も存じませんでしたので」

云ひさして隱れるひまもなく涙がこぼれた。
「ホームシック？」半笑つて優しく仰有りながら、御自分のハンカチーフを私の頰にお當て遊したとき、私は頭を强くふつて、ハンカチーフを兩手におさへて泣いた。
「先刻は何故あんなに走つて內に入つたのです、ヒヤシンスがよく咲いたから上げ樣と思つたのですに」と仰有る、御存じない筈はないものを。否御存じなくともよい。私は――私は。
おかへりになつた後も眠られず、夜の禮拜からかへつた夏さん光さんが、私のかい卷の裾をおさへて、小聲に私の事を心配して下さるのをき〻乍ら、默つてじつとして居た。
十九日　金曜日　雨。
明け方からぬか雨が小やみもなくふつて居る。我慢しておきたが皆樣が休んだらと仰有る。おきればなほるのにきまつて居る。今日はどうしても文法とリタラチユアがあるのだもの。
今朝から大好きな林檎のジヤムが出た。もうマムレードにはあきてしまつた。珍らしくミスNが見えて、御食事を御一緒にした。お茶の中にミルクだけでお砂糖は澤山ですと云つたら、ハイカラだつておからかひなさる。御自分だつて。
唱歌は今日から文學會に歌ふ晝の夢を習ふ。村上さんと河井さんのベースがたまらなくよい。私は相變らずサプラノ。
暗誦の方は『ベニスの商人』私はバッサニオ、シヤイロックの雪樣は可愛相だ。下の二級はアンクル、トムスケビンの一節だと云ふ話し。
午後おいのり部屋のお掃除を手傳ふ。
二十日　土曜　晴れ。
きのふの雨で花が大分散つた。白蓮も一つ二つおちて居た。早速に文學史の時間に『落花』と云ふ和歌の題を頂いた。今日歸つた詠草はまるで私の歌ぢやない先生はどうしても調ひすぎる程な古今集みたいのがおすきなのだもの。
お午すぎ夏さんに誘はれて部屋の三人が白牡丹に出かけた。二人はリボンやらお下げどめやら。私はしつかりしたピンの少しよいのを一本買つた。白木を一寸のぞいてかへりには尾張町の乘りかへの時、光さんの發言でミスHのおすきなものを木村屋で買つた。
かへつて三人懸りでお部屋の大掃除。

光さんと夏さんはとめるのも聞かず、臺所でお盆を借りて、綺麗に折つた紙の上に九ツ幷べて、お部屋の入口の棚にのせていらした。おきゝになると厭だのにと云へば光さんぬからぬ顔で、三人の惡戯子供よりとかいて各々の頭字をかいて置いたと仰有る。困つた方。

二十一日　日曜日　晴れ。

朝、何の氣もなく結んだ髪を、お二人で「似てゐるわ」の百萬遍も仰有る。直さうかとも思はない事はなかつたけれど、昨日のピンもよく挿さつたので止めた。光さんリボンの箱をひつくら返して、まよつて被居るから、赤の五吋のをぬいて格好のよいマガレットにかけて上げる

午前敎會へ。午後は臺灣の基隆の守備隊當ての父樣へお手紙かく。後はライブラリーのかぎ戴いて三家庭をよむ。

夕方、敎會の「Abide with me」のかねをきゝ乍らバルコニーに立つて居た、椽となく庭となく、一面に花が散りしいて、淡はいもやが下り初める。何とも譬へられない佗しい、やる瀨ない思が胸にあふれて、心の底の底から淚が滲み出さうな。私はつたのからんだ欄にもたれてじつと遠い町のどよめきをきいて居た。



殿方評判記

照子

まああられもない殿方評判記なんて、お轉婆にもほどがある、なんて仰つしやるお方があるだらうが、これでも十八、あんまり「ねんね」でもねホヽヽ。讀者方も口でこそお云ひなさらないけれども、日一日お胸の中では、あれか、これかと、殿方評判記でせう。オヤ誰れですか……？、すつぱ拔かれて一本降つたなんて云ふ方は……。

T　樣

大きい酒屋の若樣。去年九月に一高へ御入學遊ばした方。色の黒い、眼の大きい、一寸見たらそれは〳〵てはいやうな方よ。けれど存外お優しい、お商賣柄に似合はず頗るの下戶。今年新年宴會の時に、さん〴〵な目にあはされて……。

「照さん床敷いて下さい。あゝ醉つたよつたなんて、顔といつたら猿の樣、可笑しさをこらえて、床とつて上げると、床のなかで、登る朝日に露消えて……大き

な聲してどん〱足で音をさしてゐる。下戸だけれどお醉つたら面白いお方。

將來は、法律でたつとか。

K　樣

色のあまり黒くない、脊のすらりとした、中々の好男子ですわ。エヽ學校ですか、早稻田の文科よ。有望ね。お得意は、かるたと、新體詩。

「照さんは、居りますか、小母さん照さんは」

屠蘇きげんで顏をほんのり赤くして、大きな聲で、どなつて居つたは、今年の新年。かくれてやらうと思つて、奥へ走りこむと、

「どつてい照さん、かくしはせん」とう〱つかまへられた。

「照さん、かるた〱」

「ホヽヽ何ですかKさん、妾びつくりしてよ、かくれもせんくせに、かくしはせんなんて、嫌なKさん」つてしらばくれてやると、

「オット姫ご前、新春早々攻撃は、ごめん〱」つゝと逃げてしまつた。

ほんとに面白い方、お妹さまは、某世界の大投書家、ご兄弟とも、文才がある。妾なんどお妹さまがうらやましくつてならないわ。

「夢の如き空想を描いて、あまりに親を泣かせ給ふな」

さんざ怪氣焰をはいた、レターを上げたご返事のはしにあつた。ご自分こそ未來の大文豪なんて空想？を描いてゐる癖に。嫌な何方ですか……未來の良人なんていふ方は……そりや美いお方ですもの、妾なんども度度心を燃やされたことはありましたわ。けども、駄目よ、この方には、親と親とが許された房子さまつていふ今年十八のお方があるんですもの。

S　樣

眞黒い髪を、丁寧にかきわけて近視眼鏡をかけた、頗るハイカラな方ですわ。妾こんな方大嫌ひ。

道を歩いて新聞なんか讀む氣取りやの大將。Ｓ樣の尊稱は、デカダン紳士つていふのよ。エヽ其のわけですか。

S樣と相思の仲の人に英子さんていふ方がありますよ、ところが、政子さんてこれもデカダン娘さんがあつてね、――妾なんか話をしたこともない人だが――そのお方がS樣に大の思召があるさうです。

S樣ある日妾のところへ來たときに、

「ねー照さん、色男には幸も不幸もあつて困るかね」

「ホヽ、そりや當り前ですわ」
「とこスがね。君は政子さんを知つてるだらう、あの人がね——、僕に、レターよこしてね」
「ホヽヽ、八方美人はちがふね」
「ハヽヽヽ、それで困つたことがあるよ、英子さんがあゝだらう」
「妾さつぱり分らないわ、あゝなんて」
「やつぱりあゝよ」
「それから何なの」
「で、僕は、二人もラバーがあるといふ次第で困つてゐるがね、どつちがいゝだらう」
「ホヽ、二人あつたらいゝわ」
「それもいかん、困つちまつた。照さん定めて、くれないかね」
「嫌ですわ、まつ平よ、人のことですもの」
「僕は、何ちらにしたものかしらん」

* * * * * *

こんな始末でとう〳〵尊號は、デカダンさんよ。會社の方ですわ。

Y　様

海軍少尉のいかめしきお姿で、今年お正月にお出でたときに母様が、
「Yさんも短剣時代は、やんちややでしたが、早や、少尉さん、何だかお言葉までちがつた様ですよ」と云はれたら、
「小母さんてゝ四五年の後には、肩章もこんな奴ぢやありませんぜ、其時はどつさりおごりますよ」
「ホヽ、Yさんがおごるつていつたらお薩ばつかり、妾あんなもの、嫌だは」
「學校を出たからつて、てるさんなんか甚いねー、去年まで、机の下には、ホク〳〵した奴が十も廿もころがしてあつたのに」
後は大笑ひでした。ほんとに無邪氣な方。
「未來のワイフ綾さんは如何で在らつして－つひこの間手紙の端へ、書いてやつたら、御返事に、
「希ふ安心を。未來のワイフも幸ひに健なり」なんて妾とは、遠い縁者ですわ。

K　T　様

今業平つて云へば知らぬ人なき方、それもそのはずお母さんは、その昔南地で嬌名をうたはれた方ですもの。面長の色白！
學校の方もようこの方のことで騒ぐ人がありました

ね、其の内でも、前面から攻めたてて、とう／＼レター をT様まで手渡したのがタ……止しませうねー人の惡口なんか、後がたゝるわ。

おからだに似合はぬ早稲田のPに居るのよ。島田わげの宮さんと相思の仲とか……？クラスの皆さんの、うらみの中心は宮さんだつて、ことにタ……の字は、ホヽヽ。

I　様

I様は、私の爲には義叔父さんですわ、今はテキサスへ行つてゐます。先ほどの通信に、

照子さん、もうボツ／＼日本では梅が咲いてるだらうね、歸り度いがね、國を出てから五年。鬚をもつてなりし向陵の健兒も異人ばかりの間にをると、ついこんな考がおこるよ。ハツハ……。

ホヽヽ、I様懷郷病にかゝつたか知ら。

お得意は、碁と追分。

「忍路高島及びもないが、……せめて歌捨磯谷まで」

好い聲が出るのよ。

＊　＊　＊　＊　＊

隨分なこと云つてしまつた。皆さん失禮でした、御申込のお方があれば、よりぬいてお世話しますよ。

新　刊

○京人形　竹久夢二著

竹久氏の繪は明かに一轉機を現はして來た、所謂明治の新浮世繪とも稱すべきものに、其新思想を傾けやうと試み出した、本書は其第一着とも見るべく、感興縱横、思ふまゝに描いてあつて面白い、日本の浮世繪が世界に誇るべき藝術であることは勿論だが、更に古い土壤の上に新しいものを築かうとする作者の努力は深き同情を以て觀るべきものであらう。（定價四十五錢、麴町二丁目洛陽堂發兌）

○柳荒美談　國民叢書第一篇

國民叢書と云ふのは近頃澤山出る袖珍形の古書翻刻の中でも、體裁も好く、校正も嚴で、書物の選擇は尤も博く一般的らしい、第一篇として柳荒美談の上が出た、成程斯う云ふものは國民一般の讀物として瑕が無くてよからうと思ふ。（定價金二十八錢、本郷妻戀町村瀨書院發兌）

○追懷　鮫島大浪著

此小説は前に直ちに發賣禁止された『ある女の日記』と云ふ小説の代りに出たのである、同じ關係を持つた小説で、殊に此作者の書くものは女性らしい心持があるから、小説好の婦人は愛讀しさうに思はれる、至極分りやすい小説である。（定價金四十五錢、京橋巨明堂發兌）

○モオパッサン集　前田晁譯

佛蘭西の小説大家モオパッサンの短篇集である、モオパッサントと云へば、直ちに極端な肉慾を書いたものゝやうに思ふけれど、彼が一代の短篇數百種が悉く然うではない、此書は成るべく肉慾描寫の少いものゝ中での傑作を集めたもので、譯述も至極なだらかな、日本の小説を讀むのと少しもかはりはない、作が日本の小説よりも好いだけ、一層おもしろく感ずる。（定價金四十五錢、博文館發兌）

今の婦人

女子文壇紀念第百號の發刊を祝する爲め五月中の御注文に限り破格の廉價を以て廉賣す

廉賣 價金拾錢
送料壹錢五厘

▲菊判二百餘頁
美麗口繪挿繪多

本書の內容

- 美しい血　佐藤まさ子
- 與へられたる生命　山田邦子
- 木枷　長曾我部菊子
- 大川端　鈴木春子

▲美しき色彩　執筆婦人九名

- 見るも夢、覺むるも夢　夢の女
- 面がはり　若杉浪子
- 母に縋りて　前島ゆり子

▲若奥樣の生活　白木鐐子、枝の小島、きみ子、うすゆき

- ◎賣約濟　山崎千代子
- ◎死なれぬ女　河井醉茗
- 現代婦人の進歩
- 良人の選擇に迷へる女に與ふ　雨をとこ

▲婦人登山記　玉かつら子

- 私の心を縛つて欲しい　迷へる女
- 白き月の沈む頃彼女は眠れり　初野道子
- 獨寢の枕に響く霰の音　月夜花
- 正氣か狂氣か　秋扇
- 教會を脫したい　芳子
- 女學校窓から覗いた世間　白雨女
- 淚を呑んで運命に從ふ　神保千代野
- 單調なる生活に倦む　野に降る雨
- 覆面を脫ぐ　築土の草
- 私の運命を左右した試驗の力　秋香
- 危うく戀の波に浚はれんとす　夕がは
- 引いて歌ふや獅子の曲　さつき
- 夢の記　菊の葉
- 三人女　芳露子
- 遊學を志の貫かうとする初一念　星子

- ◎夜の自然を愛す　吉田菜花
- ◎覺めたる日記　安木春子
- 懷姙日記　越路女
- 苦勞人の面影　船田聖子
- 私の離緣された一事始終　小夜時雨
- 劇 早婚の爲に生じたる吾家の悲　新田文子
- 嫂の冷たき心を悲む　島守女
- 姑の我を折らすも少しの呼吸　月見草
- 子供を持つても忘られぬ文學　はまゆふ
- 細君評判記　さくら貝
- 袖香爐　横瀬夜雨
- 朝しづく　三加島良子
- 七世の後も　原田學子
- 栗の實　英那子
- 小品文、詩、和歌、俳句

東京 京橋區大鋸町 女子文壇社出版
（振替口座第壹七貳九番）
●賣捌各地書店●

地方の婦人

● 女子文壇紀念第百號の發刊を祝する爲め五月中の御注文に限り破格の廉賣す

廉賣價金拾錢　送本料壹錢五厘

▲ 菊判二百餘頁　▲ 美麗口繪挿繪多し

本書の內容

地方婦人の自重を望む　下田文學士　女が中心になつて働く　横井農博士　● 行ける處まで行き得ない　田山花袋　● 女性の自然の觀かた　小島烏水　● 天然の美と婦人の美　大下藤次郎　● 私の故鄕　尾上文學士　海豹島の婦人生活　岩野泡鳴　● 杉坂峠　澤村文學士　● 下京の女　兒玉花外　● 雲雀鳴く野　夜雨　煽風器　▲ 富士登山は宜い經驗　目賀田逸子　▲ 鳥の鳴く廣尾の奥　仲小路八重子　▲ 田舍では讀書より仕事　遠山稻子　▲ 周防の德山　武田貢　▲ 氣が利かぬ代りに人情に厚い　中村若子　▲ 幼い時は山へ成長すれば海へ　岸すみ子　▲ 信飛境上の深山旅行　辻村靖子　▲ 暑い方に向ふ　中野仙子　▲ 嫁して後忍耐强い京都婦人　松岡いと子　(小說)漁父の母　小栗籌子　賣り桑　水野仙子　● 海岸　河井醉茗　● 琵琶湖　しのぶ　● 雨　川路柳虹　● 伊豆の海岸より　中村文學士　● 淡路の生活　一色醒川　● 驛鈴　色彩的區分したる大阪市の婦人　みどり女　● 神戸　羅漢柏　東京近縣の女の特色　遊蝶花　● 都會より地方へ　長曾我部菊子　● 橋の旅日記　靜江　● 農村の處女が最も活動する田植時(伊豆、伯耆、近江)　富山と岡山の女　下枝子　● 本州の南北兩端より(薩摩、北見、)　● 五年以前　山田邦子　● 諸國通信(肥前松浦、××町、和泉の南、伊豫松山、常陸下館、駿州小山の各地より)　山岳と海岸　▲ 熱海　▲ 房州の渚　▲ 越後の海　▲ 秩父　▲ 高尾　地方の現在　石油の噴出　蒲原早蕨　其他　都會に憧憬れつゝある若き女の叫び　▲ 私の淋しい心を察して下さい　北斗星　▲ 行きたいくと思ふ一念　桃の花　▲ 擂鉢の底のやうな土地より　上田けん子　▲ 嚴格に過ぎたる家庭　白露子　▲ 船中より身を投んとしたる其後の私　江女　● 創作(和歌、小品文)

東京　京橋區大鋸町　女子文壇社出版
● 賣捌各地書店 ●　(振替口座第壹七貳九番)

小説



水野葉舟選

○娘

横濱市　妙子

——車が河岸ぶちを走つた。お染の熱い頭の心へ水氣を含が河岸の風が沁み通る樣に氣持がよかつた。一番先の車には粋な束髮の後姿をみせて、駒形の器量の好い叔母さんが乘つてゐた。眞中がお染で、一番の後がお母親だつた。お染は大きな島田に結て、柄の好いお召の二枚重をグッと拔衣紋にして、厚板の光た帶を高く背負上げてゐた。新婚した姉が思ふ以上に華美な樣子で、面白想な顏をして暮してたのを、「菊姉さんなぞも云はゞ玉の輿の運だつたのだ。」とお染は斯う思た。そして自分なぞもうつかりとした縁談に乘て了ふのは止さうと思つた。其から芝居茶屋の組さんの事なぞも考へてみた、菊姉さんみたいに何々夫人と云はれるより、寧そ何家の女將と云ふ方が面白かないかしらと思つてみた、が矢張り思切つた心持にはなれなかつた。

遠くから賑やかな繪看板や、勘定流の太い字で俳優の名を書いた、幟なぞが眺められる某街の芝居小屋近くへきた時、縞のマントを長くきて、派手な鳥打帽子をかぶつた男の兒が二三人ぶら／＼歩いてきた。皆綺麗な顏をした少年だつた。「○○座の小役連だ！」お染は車の上から、ぢいつと見遣つた。蒼白い沈だ樣な好い顏の中に一番年長らしいその兒は、いつも舞臺の上で快い印象を殘してくれる、お染の好きな某俳優の倅だつた。お染はちよつと嬉しい刺戟を感じた。でもぢきに淋しく自烈たい樣な、遣瀬がない心持になつて仕舞た。

車が自宅の前へ止つた。「只今！」駒形のが靜かに玄關の硝子格子をあけて、先へ入つた。「お歸りなさい、お早うございましたこと。」姆のお幸が愛想の好い顏付で出迎へた。

「あゝどうも疲勞れたこと、お幸表の座敷へ火を取ら

して下さい――さあ叔母さん、何ぞまあ此方へきて下さいよ。隨分おつかれになつたでせう！」お袋は椽側を廻て、表の座敷へ入つた。あけ放した八疊の座敷がきれいに形付いて廣々としてゐた。「まあ何しろ菊ちやんも好いあんばいでようございましたこと甚那かと思つてましたがネー」駒形のはよく通る聲で喋つた。色の眞白な、ぬれた樣な眼付の、美人だ……、お染の亡父の妹で今駒形町の酒屋の内儀になつてゐる。「本統に菊ちやんはお幸でしたネー。」嫂がお茶を進め乍ら斯う云つた。お母親も叔母さんもよく談した。嫂は二人の話をつゝまやかにきいてた。

　お染は其まゝ自分の室へ入つて好い着物をぬいだ、そして黒い衿のかゝつた常着に更へて、お茶のまへ入つてきた。そこには恰度組さんが來合せてゐて、お六を相手に話し込でゐた。「ホラ！染ちやんがきた！」お染の顏をみると突然組さんが云つた。「組さんいついらして？私知らなかつたわ。」お染は組さんと向合つて火鉢の脇へ座つた。「ナーニ今しがた水天宮の前でお六さんに逢つて了たら何でも來いつて仕樣がないんだもの！だもんだからネ。」

「まあ組ちやん噓つきねー姉さん噓よあんなこと、用がないならいらしやいつて云つただけだわ。私知らないわ、よくつてよー組さんてばあんな！」お六は本氣で怒つた。

　お染は笑ひ乍ら、默つて組さんの膝の上の袋から、敷島を一本つまみ出して、首をすくめて、旨さうにスパリ〳〵のんだ。

鼻の孔から濃い煙を吐き出した。

　お六は呆れた樣な顏をしてぢつと眺めてた。

「お染ちやんがさうして、巻たばこを吸つてる樣子が誰だかに酷似ー實際よく似合よ。」組さんは嬉しさうな顏付をしてみてゐる、お染は少し笑ひ乍ら「誰に似てるんだらう、氣になるわ。お六さんお喋りしちやいけないよ。」

「私喋りやしないわ、だけど姉さんよくのめるね。」

「旨いよ、お六さんも吸て御覽よ。組さんに一本寄附して貰つてさ。」お染は冗談らしく云つた。お六はもぢもぢした樣子をしてゐた。「染ちやん今度己れが好い煙草入を持つてきてやらうね、裏葉色の羽二重にね、渦巻の繡がしてあるんだよ。其りあ粋なんだから、お染さんが黒繻子の帶でもしめた時、其の煙草入を持つてでらんよく似合ふから。」

「本統に？嬉しい事ね、私そしたら香の好い刻草煙を入れておくわ。」――お染はのみさしのたばこを組さんの手に渡し乍ら斯う云つた。組さんは受取つてすぐ口へくはへた。

　好い男ぶりでもないが、垢ぬけて、スッキリとした樣な樣子が、どつか江戸前の氣持の好い若旦那然としてみえる！お染は其時「寧そ組さんに定めて了ふかしら！」と斯う思ひ乍らながめてゐた。組さんは思出した樣に

「己歸る！お染さん、又電話かけるから好いかい、お母さん來なくつても六ちやんとおいでよ。」組さんは立上つて博多の帶をキウとしめ直した。「屹度行くは、今度の狂言は幾度見ても好いのネー。今日私某役者の兒に逢つて了たの、素顔の方が好いと思つたわ。」

「女にやあんな顔が好いのかしらなあ！」組さんは懷手をして突立つたまゝ考へる樣な風をした。お六が

「先にあれ蘭平物狂の時に繁吉になつたでせう？」

「さうだよ、よかつたネーあの時は。」

「あの兒は所作が旨いからネーまあ思出してゝも始まらない――其中に電話かけるからネ、左樣なら。」組さんはねずみの中折をかぶつて、そゝくさ出て行た。お染もお六も玄關の格子口まで送出した。そして又姉妹はさし向ひで火鉢の前へ座り込だ！お染は口三味線で越後獅子の間の手を唄ひ出した！何がなし面白さうな顔をしてる、しまひにお六もつり込まれてうたひ出した。少したつてお六は思出した樣に、

「あゝあの菊姉さん何してゝどんな家なの？」大事な事を失念てた樣な顔をして質問した。

「菊姉さんは出世して了たよ、全く愕ろく程贅澤して暮してるんだもの！。」お染はわざと誇張して言つた。

　お六は愕ろいた眼付をして

「あらまあ！其麽に？隨分幸福だネー。」

「幸福だらうよ。でも辯護士の令夫人も餘り鹿爪らしくつて私ならいやだわ。」生意氣な云方をした。

「什うして？お金が儲かるんぢやないの？」

「其麽てつちやないんだよ。お前みたいな赤ン坊には解らないから駄目だよ。」お染はお六の白い頬を突つゝいて笑つた。二人は暫く下らない冗談を言合つて笑つてた。「お染さんと六ちやん、叔母樣がお歸りなすつて！」女中が呼びにきた。お六はかける樣にして行つた。お染は後からだる想に歩いて行つた。

　其晩方遊びにきた、書師の佐川にお袋はもうお菊の

結構な樣子を吹聽して了た。

「ぢや染ちやんも羨ましくなつた。」佐川は浮調子な顏をしてゐた。お染は帶もしめぬ、だらしのない風で、向ふの電氣の下で爪を切てゐた。「お氣の毒さ、私辯護士の令夫人なんて此方から願下だわ、あんな無風流なもの！。」

「愕ろいたな、ぢや畫師なんざあ什うだい、風流だよ。」と佐川は顏を突出し。

「私貧乏するのはいやなんだから、駄目でせう。」

「こいつあご挨拶だつたネー、どうも恐入ました。」

佐川は罪のない顏をして笑つて了た。

「お染みたいに口の惡い女はないよ、にくらしいね。」

お袋は斯う云乍らも笑つてゐた。

「お母さんお湯へ入らないの」お六が手拭さげてきた。

「入るよ。ぢや佐川さん話していらつしやいよ。」お袋はお六と一緒に湯殿へ行つた。お染は佐川獨りになると、

「私不滿ないわ。何だかしらないけど！」と急に沈だ樣な樣子をして、佐川の傍へ寄つて座つた。

「何故だらうね。」と佐川もぢいつとお染の俯きかけた顏をのぞく樣にしてみた。「私 全く、菊ちやんみたいな位置になるのも、有難くないのよ、私誰にしてからがお金さへありや好いんだと思ふわ。でも窮屈に四角張て暮すのは充らないわ！つまりネー。」お染は什う言表はさうと云ふ樣に一寸考へ乍ら、火鉢の灰へ最前逢つた小役の名を書いたり消したりしてた。

「つまり？だから什うし樣と云ふのさ。染ちやんは虛榮坊のくせして、馬鹿に放縱な質だから、矛盾してるから苦しいんだらう、立派な夫人顏もしてゐたいし、若い男にも可愛がられたいしだらう！」這那事を云はれてもお染はいつも程怒りたくならなかつた。

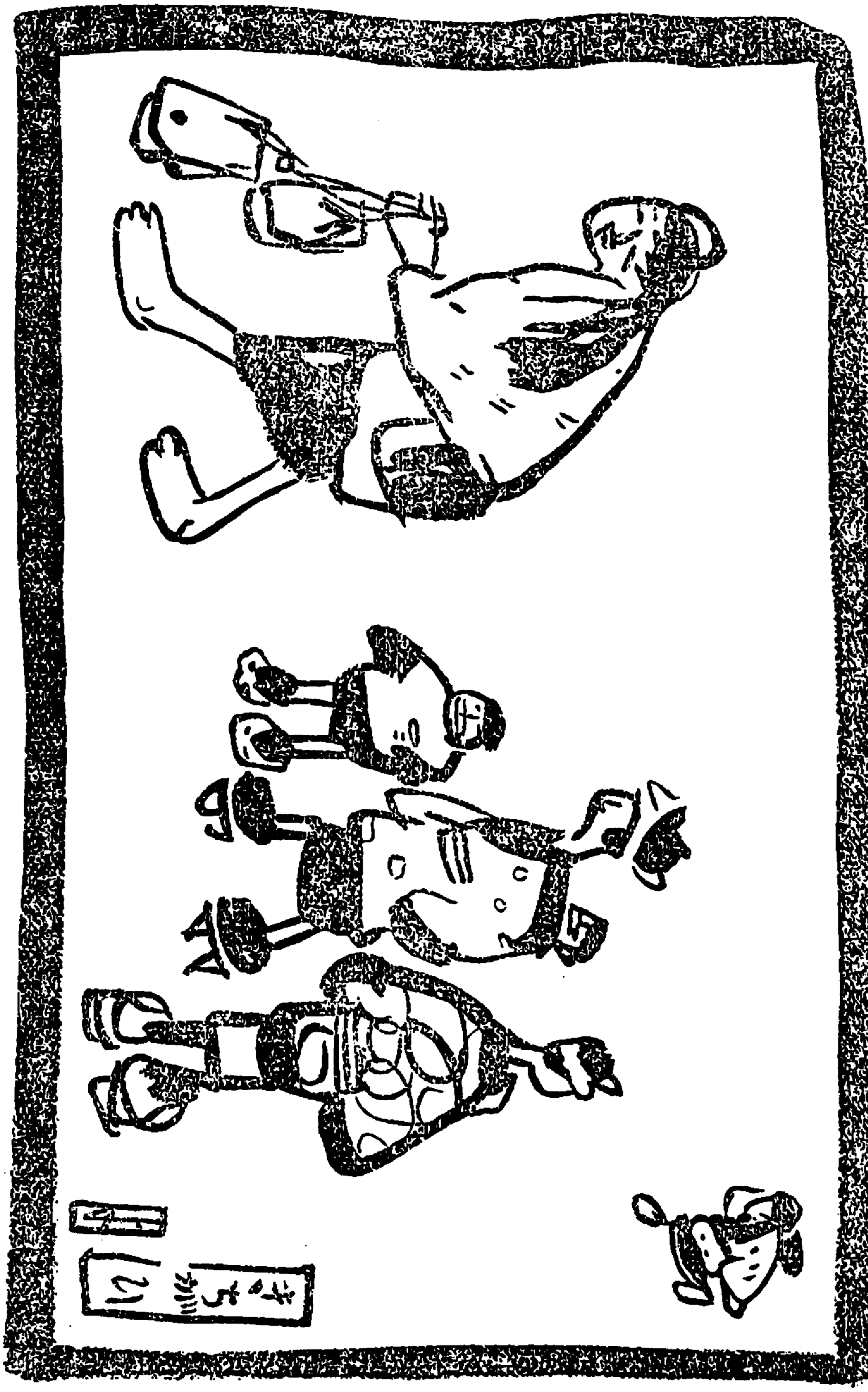
「佐川さんも憎らしい事云ふ人ね、でも好いのよ、くだけて云つたら其麼ものだわ。私什うせの一生涯なら出來るだけ面白く氣樂に暮したいからよ。」と音なしく言つた。

「結構な事さね、誰しも。」冷笑と云ふ樣な顏をした。

「貴方でも而う思ふの？ならも少し眞面目にやつたら什う？馬鹿遊を謹で……三十近い男でいつまで、下宿やのお飯たべてるんでもないでせう、私山師でいゝからキラを張つて、威勢の好い顏して暮すのが好きよ。」

お染が此の男にだけはいつも眞正直な心を安心して話す。

「染さんの思想は當世だネー僕あよく／＼貧乏性だよ少しでも金が入つたが最後費つて了ふねすぐと、だから全く僕の金は煙みたいに消えて了ふよ、そりや譯あなく。」少しおかしさうな顏をした「貴方、大變に道樂遊びするつて評判よ、本統なの？」



子ゅうよ木鈴　町鶴　ひおちき　（賞天）

「本當だよ。遊びたいからこそ、厭な努力をしても稼ぐのさ、書筆持てる時の感は其許しだ。」佐川は何となく淋しいやうな面持で笑つた。

「だつて生涯其麼わけにや、いかないだらう？」

「あゝだかゝ出來る時だけするさ。末の事なんざ考へてやしないよ。」佐川の顏は

其時めづらしく沈でゐた。お染はいつになく身に泌みて此の男の心を思遣られる。長い年月情なくされても思切れない忘られない意氣地なしの男心が可愛想にも思へた。「だけど、佐川さん餘り無茶なことしない方が好いのよ、若い中は信用が大事だからね！」お染はわざと泌りした調子で云つてみた。佐川は思の外感じぬ樣な顏をして笑つてた。「染ちやんはK町へ嫁くんぢやないの？」

其は組さんの事だ！「嫁くつて程、其程の決心もないけど、全く什うしたら好いんだか、自分乍ら譯がわからないの！。」お染は相談でもする樣な言方をした。

「いゝぢやないか、面白くつて其麽處が染ちやんの肌に合つてるよ。」佐川は勸めていつた。

お染は自分に關するこんな問題を眞劍に相手になつてくれる男があればいつまでも話してゐたかつた。其中にお袋が湯上の額を光らせて出てきた、佐川とお染の眞面目な話は出來なくなつて了つた。

「僕は久しく義太夫をきかない、今誰かきてる？」佐川は誰にともなく云つた。「えゝ呂昇がきてるわ有樂座に。」

お染が云つた。「有樂座？高いだらう、馬鹿々しいな、矢張り飮酒だ方がよささうだ。如何にも暢氣な男らしかつた。

「お湯へ入つたら顏がのぼせる。」顏から襟から眞白に白粉つけたお六が袷のねまきの上へ大人の羽織をはおつて出てきた。一寸きれいに見えた。「六ちやんがお嫁にゆく頃にや、お染さんは赤ン坊抱いてるんだよ。ねお母さん！。」佐川が平氣で斯那こと云ふのをお染は少しハラ〳〵した。

「佐川さんだつて、赤坊だいてるわ。」其はお六が云つた。

「アハヽ、さうかネ！。」佐川は平氣で笑ひ出した。「お六は其那風して風邪ひくから早くお休み。お母さんとねるわ。」お袋は少し喋つて引込で了た。お六は眠さうな顏しながらも矢張りそこで一緒になつて喋つたり笑つたりしてた。佐川は姉妹を相手にいつまでもかけかまひのない大聲で語つてた。出ていた茶受の菓子も空になつて了た、三人は番茶許しガブ〳〵のんでた。いつか十二時を打つてた。お六は欠伸を始め出した。「佐川さん十二時すぎてよ。」お染が注意する樣に云た。

「あゝ歸るよ。眠いのかい？」と云つて伸をし乍ら漸く立上つた。而して古いインバネスを引かけてカタコ

ト音をたてゝ出て行た。誰も送出さなかつた。お染は其儘室へ入つてお六と並で床をしいた。「よく喋る男だネー。」帶をとき乍らお染は云た。「でも面白いわ。」床の中でお六が云つた。「理窟云はせるとねー」とお染が云つた時にはもうお六は默つてた。(賞)

○冬のはじめ

府下　小笠原貞子

一

東北の街には十月の末頃から寒むい〱西風がふき始める。

「大寒！小寒！山から小僧が飛んで來た」

頬と唇とを　紫色にしてむく〱と綿のあつい着物をきた子供等が小石や木の葉をふきまくつてゆく風の中を鳶凧の樣に兩手をひろげて風におひかけられて遊んで居る。

「左樣なら」

「左樣なら」

と二人は云ひかはして「いづみや」の裏門にくると土藏と土藏の間のガツシリした木戸をガラ〱あけて一人は入つて行く、此二人は此春女學校に入つた許り新しいゑびちやの袴が目だつて見える。

一束にきりつとつめた大きな桃割の友達の姿が藏のかげになつて終ふと急に取り殘された樣な淋しい氣もちがしてきてお雪は急ぎ足に歩き出した。

これからは灰色の空と意地の惡るい風と雪と寒さとで此町の人等はおしつぶされた樣にちゞまつて終ふのだ。

ゴーツと底力のある風がふいてくると庭の木や雨戸がガタピシ大げさな音をして鳴り出す、その悲しい叫び聲の樣な風の音を聞きながら寢床の中に小さくなつて云ひ樣のない恐しさに目をつぶつて居る冬の夜を思ひ出すと「あゝ否やだ〱早やく冬が過ぎて春がくればいゝ」と思はぬわけにはゆかなかつた。

西に曲ると向ひ風がはげしくつて息がつまりさうになる、本の包と御辨當の包とをしつかり兩手でだいてガタ〱お雪はかけ出した。

人氣のない夜中の樣な淋しい町を二三町歩いてゆくと大きなかぶき門の處にせの高いやせた柳の木のあるお雪の家の前にくる、とお雪の足は自然とにぶくなつて終ふ、お雪は門の前にじつと立つて家の中から何かきこえはしまいかと耳をすました、けれど家の中はし

んとして何の音も聞えなかつた。

お雪は敷石のしかつたうす暗い門をくゞると今迄わけもなくはしやいだ心持はすつかり何かにおびやかされて終つたあとの樣に沈んで行つて胸の底からふりしぼられる樣にせつない賴りなさがわいてくる。

「お雪さんの父樣は氣狂だよ」とだれかゞきつとてんな事を陰口に云つてるに違ひないと思ふとつく〴〵世間の人に顏を見られるのがはづかしい樣な氣がする外の子の中に平氣でまじつてゆくのは何だかけがれた汚ないものを隱して居る樣でお雪は人一倍はしやいでさわぎ廻つて居る時でも心の底では何かゞ物に恐れて居る樣であつた。

お雪は勝手口の戸をソッと開けて入つた、入ると流しもとで何かコト〳〵して居たおいくは、

「お孃さん御歸んなんしよ」

と云つた。

「おいく、父樣は？」

「今日は大へんあれなさつたぞし、お醫者樣ねむり藥下すつたので、只今眠つて入らつしやるけんど」

「大きな聲だしたの？」

「ハア外さ出なさるつて大さわぎなさつたのし、榎本サアや龍雄サアでよう〳〵止めたんですのい」

「さう！」

お雪は本の包をかゝへたまゝ板の間にボンヤリ立つて居た、豫想して居た事がすつかりあたつて終つたので情けなく思つた。

あつい帶戸を開けると爐のふちに家內の人等がグルリと集まつて何かヒソ〳〵話しをして居た、お雪の入つて來たのを見ると、

「靜に」

と母親は青い顏をしていつになく威のある聲でひくく云つた、雪は直ぐ恐しい事のあつたあとの樣に感じて默つて母のそばに割込んで座つた。

「今云つた通りの方法より外ありますまいなあ」

と榎本はため息と一所にてう云つた。

「さうですかね」

母親は氣の進まぬ顏をして云つたが、

「別に方法と云つたつて……東京の巣鴨につれて行くのも可愛さうですし……ひどい取扱ひですつて云ひますからね」

「まア早やく石井村の貸してある家を開けてもらつて奧樣と先生とおいくと引込むんですね、お孃さんは本

町の旦那の所だつて寄宿舍だつて大丈夫の所はむもありますから」

「此子が可愛想でね」

母親はお雪の小さな頭をなでながら涙聲になつてしみぐ\云つた、お雪は母に寄りかゝつてうつむいて火箸をいじつて居たが母にかう云はれると急に悲しくなつてきてボロ\涙が流れ出した。

恐しい何かの出來事が近い内に此家におしよせてくるのであらうとお雪はさう感じられた。



（地賞）朝の聲　岩本とよ子

「然しいつ迄もあゝして御出でになつては世間に知れますから其よりか一日も早くあちらにおうつりになつた方が得策ですこゝは僕と大島君とで今迄通りやつて行きます先生の看板さへあれば奥樣やお孃樣の學費位はわけはありません。」

大島も榎本も母の決心をうながす樣に其顏を眺めた、お雪は母を山の中にひつこませる事や自分と母とを別れさせる事について何の同情も無ささうな其そぶりがにくゝつてくたまらなかつた、何か云つてやり度く思つたけれどあ

んまり皆の顏が眞面目で何となく一座の樣子がいつもと異つて居て云へなかつた。

「雪ちやんはあつちに行つて勉强をなさい子供はてんな話しをきかなくつてもいゝのだから」

と母に云はれたのでお雪は今の話しが氣にかゝつたけれど仕方なしに自分の室に引込んだ、

お雪は机の前に座つて明日の時間割などを眺めたが何となく落ちつかない不安がわいて來ていつもの樣に本をよむ氣にはなれなかつた、小さな胸の中で色々と悲しい事や家の凶事などを想像して見た。

二

次の日いつもの樣に學校の歸りは仲よしの「いづみや」のお道と二人で歸つて來た、風はふいて居たが何となくぼやついて脣がかわいて仕樣がない春の始めの樣な重くるしい日であつた、學課の事先生の事友達の事などをしつきりなしに面白さうに話し合つて居ながらもお雪の胸にはたえず父の事がうかんで居た。

ふとつた體に絲織の小夜着をバフ〳〵にして血相をかへてその邊を飛び步いてゞも居はしまいか……あの樣子をもしやお友達に見られたらどうしよう、あれが自分の父樣だなんて……お雪はどうかその樣な事がなくつてくれる樣に、とひそかに心に祈つた、そして心から苦のなささうなお道の笑顏を見るとつく〴〵自分の身が情けなく思はれた。

家に歸つて見ると病人は特別に變化をしては居なかつた、いつもの樣に茶の間に行つて見たが母親も誰も居なかつた、お雪は何よりもさきに母の顏を見ねば氣がすまぬ樣で方々母をさがした、奧の室のふすまをソーッとあけてのぞくと父は後向になつて火鉢によりかかつて煙草をすつて居たけれど母は居なかつた、お雪はちやうど猛獸の目を逃がるゝ樣な心持で息をころして足音をしのばして別の室に來た、かうして一人で居るとひろい〳〵荒野の中にすてられた樣な淋しい心細い思がしてきて我家の中に居る樣な氣はしなかつた、と玄關の方から母や皆の聲がした樣なのでお雪はハタハタとかけて玄關のわきの事務室と云つて居る室に入つて行つた、そこには母や事務員や書生やが山の樣に書類を取り出してあれこれと家中總がゝりで整理して居る處であつた、下女のおいく迄も物めづらしさうにぬれ手のまゝしきゐの處に立つて眺めて居た。

「どうするの母さん」

とお雪は母の脊によりかゝつて甘つたれた口調で云つた。

「大島さん此重要書類は此つゞらの中に一まとめにして下さいませんか」

と母はせわしさうに云つた、大きな丸まげがフクリくづれて顔の色もひどくやつれて居る樣に見えた。

「承知しました」

と大島始め皆の顏が氣しきばんで居て、一生懸命に動いて居る、いよ〳〵自分の家が田舍に行くのだなとお雪は思つた。

此日はわり合に病人はおとなしかつた。

夜になつてからは一年に一度か二度位しか來た事のない父の伯母が訪ねてきた、それから幼い時から此家で育てられたお雪の從姉――今は法學博士の處に嫁いだ――も來た、其等の人たちは集つて時々ため息をしたり沈んだ聲で話し合たりして居た、お雪も其夜はおそく迄火鉢のそばで皆の話しに耳をかたむけて居た。

三

お雪は乳母に手傳つてもらひながら針箱だのくし道具だの其外こま〳〵したものを母から渡された行李の中に入れて居た。

「お孃さんよ、偉くおなんなさんしよよ」

「早く大きくなつて奧樣に安心おさせ申さなくつちやあ駄目だぞし、私は奧樣が可愛想で〳〵」

ばあやは手を動かしながらもこんな事を云ひきかせた「早やくいゝ旦那樣でもおもらひなさつたらどんなに私はうれしいだか」

「いやだよ、私は一生お嫁になんかならない！」

またそんな事をとお雪は思つた、お嫁だの聟だのと云ふ話しほどいやなものは無かつた。

「それよりかも母さんはあんな山の中に行けば病氣になるんぢやないだらうかね、ばあや」

「さうですね奧樣はさぞおいやでせうけれどしかたがありませんよ此家に居れば此さききつとろくな事は有りませんよ此家は魔がさしてるのだから」

お雪も全くさうかも知れないと思つた。

「ばあやもういやよ、あとは私がするから」

お雪は何となくじつと落ちついて色々な事を考へて見たい樣でばあやを出してやつたあと机の上に頰杖をついて窓の障子を見つめた。

山と山との間にはさまれた彼のひくい田舍家に明け

ても暮れても風の音許りきゝながらあの恐しい病人を相手に此世の中とはズーッとかけはなされた生活をして行かねばならぬ母の事を思ふと胸をかきむしられる程情けなくなつてくる、けれど又此呪はれてる樣な陰氣な家をはなれたら病氣の爲にも好いかとも思つて見る、そして自分はこれから寄宿舍に入るのだと思ふと急に大人にならねばならぬ樣に感じられる。

お雪は今自分の感じて居る此悲しい樣な又一種先がまたれる樣な心持を何とか文章に面白く書いて見たい樣な氣がして手帳を取り出した、そして筆をかみながらやゝしばらく考へて居たが、

「昨日まで、我をまねぎし門柳の明日はいかなる人やまねかん。」

と歌の樣なものをていねいに記した、そして其わきに何年何月何日我家を離るゝに際してと書きたした。

これを幾度も〱讀みかへして見たが、もつと長い文章にして紀念の爲に殘しておき度い樣で一生懸命に考へて居たがふと茶の間の方から父の高いさけび聲が聞えた、お雪は此聲をきくとはぢかれた樣にハッとした。

父は何か大聲にどなつて居る、が其聲が何の意味もなして居ない、全く人間の樣な聲ではなかつた、狼のほえる樣な恐しい嵐の樣な音であつた。

此聲をきくとお雪の心はもう考へる力も何も消え失せて終つてたゞ身がすくんで心がをのゝいて居る。

お雪は兩手で耳をおさへてジッと目をつぶつた。(賞)

○祖母

優梨子

祖母は遂に逝きました。

五十日の病床に一日も休まず看護した私は、堪らなく悲しう御ざいます。是までの壽命とあきらめはしながらも思ひ出しては泣いて居ます。

祖母は不幸な人でした。よく人が、人間は此世へ苦勞しに來たのだ、と云ひますけれど、それは祖母にあてはめる爲に出來た言葉だと云ひたい位ゐです。

××さん、什麼ぞ私に、祖母の生ひ立ちに就いて私の知つて居るだけの事を、今こゝへ書かせて下さいませんか。

あり餘る程の昔話を持つて居ながらも、祖母はなかなか自分の事を語らない人でした。それでも私は母に聞き叔母に聞き、正しき眼を持つた祖母の周圍の誰

彼に少しづゝ聞きました。それをてゝへ綴つて見たいと思ひます。

私には肉身の關係が無いものとして書きたいと思ひますから、どうぞ貴女も其お積りで讀んで下さい。

祖母は××舊藩醫の家に生れました。產聲上げる時からもう祖母の身には不幸といふ字が附き纏つて居たのでせう。祖母が乳をたづねて泣く時には、もう優しき母の面影は、此世から消えて居たのでした。溫かき母の腕に抱かれた事のない祖母は、どんなに母を戀しく思つた事でせう。御殿風な嚴格しい乳母に育てられて溫かき母の愛を知らない祖母は、寂しい子だつたさうです。勝氣な嫂の手強い仕打ちを見る度に、內氣な纖弱い祖母は甚麽にはらはらして居た事でせう。



（貧人）おさらへ　青森　松尾ちよ子

家門の美しい家に產れて幾人の人に侍かれながら、只嫂の樣子を氣遣つては、小さい胸を痛めて居たのです。まだ蕾も堅い十四の春、××舊藩臣の××家――今の私の母の實家――へ嫁ぎました。嫁ぐと云ふより人形か何かの樣に連れられて來たのでせう肩上げ取るのが惜しいより初島田さへまだ重さうな十四の少女ですもの、人妻か何かも祖母は知なかつたでせう。其頃は××家の全盛時代でそれは大したものだつたと云ひます。

勝氣な嫂の手によつて、祖母の調度は美しく調へられました。けれどそれには決して溫かい情は籠つて居ませんでした。御所車の大模樣ついた濃紫の振り袖着て、御殿風

な高島田に結つた華奢な祖母の姿を、いつも私は想像して見ます。さうした時の祖母の面は何となく寂しい樣に思はれてなりません。

友禪縮緬のふつくりした蒲團に載せられた祖母の駕籠の後から何荷と續く美しき調度を見て人は皆「お汝さんは幸福者だ」と羨んださうです。世の荒海へ手放され樣とする日に載られた其お駕籠蒲團は、今日死出の旅路の恙なかれと哀れな祖母を見守つて行きました。

濃紫の其振袖は、祖母の遺言によつて私の許へ紀念におくられました。私は〱一生これを放すまいと思つて居ます。

××家は門閥も美しかつた財産も祖母の實家より多かつた。けれどそれで祖母が幸福とは云はれないと思ひます。

私の祖父――祖母の夫――は四人の女姉妹の眞中に生れたので、兩親の愛を一身に集めて好な我儘をして居たさうです。それに十二の年から御殿へ上つて、父の亡くなつた二十歳の時に下りましたので世事には疎く、遂友に唆かされて、花街へ足を入れる事も度々だつたさうです。

女は口さがないものです。四人の姉妹は祖父に抱いた不平を、纖弱い祖母に向つて當つけました。養子した姉姑二人は、祖母が來ればすぐ別居するといふ話だつたさうですけれども、それは緣談をまとめる手段ばかりだつたさうです。

世に云ふ鬼千疋の小姑四人の外に、まだ八十許りになる祖母が健康で居て、何かと目角を立てゝ居たと云ひます。

姑と呼ぶ人は病身ですべての事を姉娘二人にまかせて置いたさうです。

傍の苦痛は甚麼にもして忍ぶでせうけれど、なせか祖父までが夫らしい優しい言葉を掛けては呉れなかつたさうです。あゝ其中に一年二年と暮した祖母の身は……。義理ある姉を氣遣ひながら蕾の花まで生ひ立つた祖母は、又誰一人自分を護つて呉れるものもない斯うした中に美しく花も咲き得ないでいつとはなしに萎んで行くのでした。

小さい胸の張り裂ける樣な事も幾度だつたか知れません。けれど、何事も胸一つに納めて只の一言受け答へした事の無い、惡く云へば、馬鹿見た樣になつて居た祖母　、斯した嫁住みの辛さは人と同じだと思ひま

す。否凝と堪へて居たそれだけ、より一倍辛かつたと思ひます。それも今に子供でも出來たら、と怎麼大人びた事を當にして、僅かに〱慰められて居たのださうです。けれど四年五年六年、祖母には晴やかな日が來ませんでした。

毎日一度づゝ屹度隱居家から出掛けて來ては、何かしら小言を云つて行く元氣の好い義祖母も、八十五といふ歳には勝たれないで出て來なくなりました。さうして今度は二日に一度づゝ必ず祖母を呼び上げて、孫どもの告口をさも自分が知つた事の樣になぢりましたとか。其年の秋心臟炎で亡くなりました時、祖母は四十日の間一晩も傍をはなさず看護をさせられたさうです。日常の事から推して見て其間の辛さが思ひやられます。

御維新の前の年、長い年月ぶら〱して居た姑が亡くなりました。

あゝ祖母には何處まで不幸がつきまとひますのか、「子無ければ去る」の古き諺によつて、四人の小姑共は祖母に出て行けがしに前より猶辛く當るのでした。

なぜ〱祖父はそれを護つては呉れなかつたのでせう、只一言でも優しい慰めの言葉をかけて呉れましたら、張り裂ける樣な胸の苦しみも、祖母は忘れたでせうに……。あゝ祖父の夢はまだ醒めませんでした。

例へ姉の心は冷たくとも……と苦しみぬいた祖母の心がふと迷はうとした一日、其頃××町で一と名の知れた或る占ひ者に、そつと事情を打ちあけたさうです。××さん、はしたないと笑はないで下さい、今とは時代が違ひます、迷信深い人の斯うした境遇に立ち入つた場合としては無理もない、むしろ當然な處置だと私は思ひます。

祖母の運命は定まりました。

「あなたは不幸に生れた人です。たとへ今の婚家を出て二度他家へ嫁ついでも、決してあなたに幸福は向いて參りません。お氣の毒ながら、前世の宿縁とおあきらめなさい」と其占ひの爺さんは云つたさうです。

祖母の迷ひは醒めました、亂れた胸は治まりました。

祖母の小さい胸に堅い決心が出來ると間も無く、それを試すべくわざと製らへた樣に、祖母の前へ大山が崩れて來ました。

廢藩置縣の大革新で、祖父は食むに祿ない浪人となつたのでした。はつと思つて目が醒めた時には、もう遲かつた、多いと思つた財産は半ば影も無く消て居

ました。それと知つた二人の姉姑は、手早く別居したさうです。無論相當の分産を得ての事です。

二人の義妹は姑の亡くなる後先に、すぐ近くへ嫁ぎました。其二人は今も健康で、祖母の逝く日、私達と一緒に其死を悼んで居ましたが、私は二人の古い追憶が聞いて見たく思ひました。

祖父の氣はいら立ちました。什麼かして早く取り返しをつけたいと思つてあせりました。而して或る人の手引きによつて商法に手を出しました。けれどそれは駄目でした。失敗に失敗を重ねる許りでした。すれば祖父は猶いら〳〵して、其不快さを酒の爲に忘れやうとしました。そして自然祖母へは手強く當ります。それを凝と堪へて、只祖父の失敗を氣遣つて居る祖母の心は甚麼でせう。

嫁いで九年目祖母は始めて人の母となりました。それが去年東京の×××病院で亡くなつた私には只一人の叔母で御ざいます。

華やかな産神詣でも出來得ない今日、生れた叔母が不幸なのです。

父になり得た！そんな事で祖父のいら〳〵した氣分は治まりませんでした。

其翌年――確か明治三年と聞いた樣に覺えます――××の騷動で、僅かに殘つた自分の住家は、人の爲に燒き拂はれました。其騷動の原因は私にはよく解りません、誰も委しく話して呉れませんから。何でも祖母の近所の××家が恨まれて、それが爲に祖母の家まで燒かれたのださうです。さうした家が一軒や二軒では無いさうですから、一時××町は修羅の巷となつて隨分悲慘な有樣だつたと思ひます。

よく其時の怖しかつた事を祖母は話して呉れました或る事件の爲に町中は何となく殺氣だつて、皆おどおどしながら日一日と過して居た或る朝、ワー〳〵ッといふ大勢の聲が遠くでします。はつと思ふと「それ燒手が押し寄せて來た。××家が燒けた」と外を人が大聲上げて驅けて來るので、それッと云ふのでもう夢中になつて、祖母は二つになる其叔母を脊負つたまゝ、取る物も取らないで×××山の或る寺へ皆と一緒に逃げて行つたさうです。胸は波立つ足は疲れる××寺へ驅け附けた時にはもう覺えが無かつたさうです。

「あれ自家が燒ける私の家が……」と氣もしどろになつた哀れな人々は皆盛に燃える火の手を指して、大

聲あげて泣き叫んださうです。

翌朝、我が家は此あたりと目ざして歸つて見ると、見覺えのある庭の石燈籠と、何も這入つて居ない奥藏が殘つて居た許りだつたさうです。私は其話を聞く度に、其燒跡にしよんぼり立つた、祖母の姿が目についてなりません。

それから十何年の間の祖母の困難は普通大抵ではありませんでした。私の母が產れ、間も無く叔父が生れた其翌年、祖父は酒の爲に腦溢血で亡くなりました。

「よくまア其中をお祖母樣は三人の子供を抱へて店をやつて來なすた事、あゝあそれはもう甚麽苦勞だか知れやしない、まアあんな苦勞した人も澤山は無い」とよく母は申します。

「新一――私の叔父――が大きくなつたら又どうにかなるだらうから、什麽かそれまで店を終ひたくない」と祖母は口癖の樣に云つて、祖父の仕掛けた其店を、纖弱い女の手一つでやつて來たさうです。

零落しても家門の美しい爲に、叔母も私の母も着のまゝで嫁ぎました。

後に殘つた母と弟が氣遣はれて、母は幾度歸らうと思つたか知れなかつたさうです。

天も祖母の忠實を嘉しましたのか、叔父の大きくなるにつれて家運も漸く立ち直つて來ました。祖母はほつとしました。

けれどそれも束の間、祖母の胸はまた暗い雲に閉ざされました。

叔父は何を夢見たのか、ふと橫道へ足を入れる樣になりました。

我が子にさへ手强く云ひ得ない祖母は拜む樣にして諫めました。けれどなか〳〵叔父の夢は醒めませんでした、そして遂には姿のみ美しい女に、祖母は口先許りで姑と云はれる樣になりました。

「新一少しはお母樣の今までの御苦勞を思つてお吳れネ、第一御先祖へ對して申譯が無いじやないか」と泣て賴んだ二人の姉の言葉も水の泡となつたのでした。

それから十年家運こそ美しく立直りましたけれど、祖母の胸には永久に春は來ませんでした。

只姿のみ美しくする事を知つて、人妻は何か主婦の何かも知らない嫁を、祖母は何も云ひ得ないで只其仕打ちをはら〳〵しながら見て居る許りでした。そして何時とはなしに其嫁を氣遣ふ樣になつて、毎日おどおどしながら、三人の孫にせめられて六十五の今日、哀

れに逝きました。
祖母の悲慘な一生を書くには、餘りに私の筆が拙ない、それを私は堪らなく殘念に思ひます。も少し順序を立て、上手く書きたいと思ひましたが氣許りいらいらして思ふ樣に書けません。あとは貴女の御想像にお委せしたいと思ひます。(賞)

○河岸

上原ふみ子

女は外から格子戸に締をして、暮れゆく空を眺めながら、待つてゐる男の傍へ寄つた。軈て二人は肩を並べて、なんとなく騷然た夕暮の街を歩き出した。軒々の灯がともされる頃である。

斯うして二人連れだつて、黄昏頃から歩くといふ事は、此頃の二人に取つては樂しいものの一つであつた。其癖斯うして歩いて居ながら互に二人は他所の事を考へてゐるのである。二人が箱崎に世帶を持つた頃は、まだ隣の洒落た板塀の内に、二三本の櫻の若木が、僅か許りの花を持つて春を知らせてゐた。風の吹いた翌日は踏みにじられた花片を、濡れた鬢を掻きあげ乍ら歸る小徑に、幾度か女は眺めて、染々と逝く春の離愁を胸に描いた。丸髷に重々結つたのも其頃であつた。結び馴れぬ丸髷は重かつた。櫻は雨が強く降ると殘りなく散つて、その唆る樣な雨垂の宵を、爪彈く女の絲に合はせて、待合で唄ひ馴れた端唄を男は口吟んで過した事もあつた。雨が晴れると若葉は日に日に緑を增して軈て夏が來た。寢心のいゝ此頃の朝は、朝顏屋の呼聲に呼びさまされ勝である。用意して置いた金錢もこの夏を越すには二人共足りないと思つてゐた。男は如何しやうとも思はない。將來の事を考へたくなかつた、女も其事については何も云ひたくはなかつた。

女は以前は新橋で、三絃の音と、酒の香とに半生を揉まれた女である。負ける事の嫌な意地と、燃え易い性質とは、彼女にさまぐの事を經驗させた、斯うして箱崎に世帶を持つたのもその性質からである。然し女にとつては、願の叶た待合で儚ない逢瀨をした頃に想像して、胸に描いた生活も、斯うして毎日長火鉢に向合つて見ると、それ程の事も無かつた。場所柄だけに、芳町邊の藝者達が待合這入りの後姿を屢々見受ける事がある。其時女は何となく悲しかつた。あゝした派出な、不規則な生活と、毎日長火鉢に向ふといふ單純なそして穴の樣な今の生活とを思ひ比べて、女は

云ひしれぬ寂寞を感せずに居られなかつた。
「一體どうなるんだらう。」斯う此頃は折々考へられて賑かな三味線の音に外見だけでもはしやいで暮した昔を思ふまいと思ひ乍らも懐かしかつた。一日一日と二人の心は離れて行く樣な心地がして、譯もなく淋しい涙が落ちる事もある。然し斯うして連れだつて人中へ出ると周圍に刺戟されて、群集の中などは殊更に手を握り合つて通つた。人々は嘲笑の間に二人を見送つて行く。中には後から「畜生」抔と聲をかけて行くものもあるのがせめてもの心遣である。斯うした儚ない戯で冷たくなつてゆく心を慰めるのが此頃の常であつた。

土州橋に少時佇んで、橋の下を通る船を眺めて居た二人は、男からとも女からとも無く歩き出して、右手の河岸を肩を並べて、大橋の方へ足を運んだ。

「御覽なさい油繪の樣ね。」

斯う云つて女は赤く染つた夕暮の空を指さした。男は輕く答へた儘、他所の方を眺めてゐた。其限で眼を外して女も默つて仕舞つた。中洲の河岸の切れる處から見える隅田川は、忙しさうに船が往來してゐる。海を下る船が帆の半ばに夕日を浴びて風に追はれて續いて走つてゆく。二人は沈默の間に急足で周章しく過ぎる人の多い夕暮の河岸通を、殊更步調をゆるく、ぶら／＼步いて行つた。

大橋の一錢蒸汽の發着所まで來ると、その河岸には黒山の樣に人立がして川を覗き込んで騷然てゐる。橋の上からも欄干にもたれて、人々は好奇心の眼を一つ



同窓會へ　橫濱　臼井久瓦子

所に集めて私語てゐる、烏が厭な啼聲を立てゝ、低く川を舞ひ乍ら人々の頭の上を去りやらず漂ふてゐるのが何となく二人の心を不安ならしめた。

「何んでせう貴郎」

斯う云つて女は寄り添ひながら男の顔を見上げた。

「さあ、なんだらう」

男の眼は好奇心に動いて人の群の中を見入つて答へた。二人は淡い不安を抱きつゝ、群集の方へ急いだ。

「土左衛門ですよ」

斯う誰れに云ふとも無く商人體の男が云ひ捨てゝ二人の傍を過ぎた。夕日は赤い空に沈んで人々の顔はほのぐらく見え初めた。

「土左衛門ですつて、貴郎止しませう、また御飯が食られなくなるわ。」

厭な事を聞いたと云ふ樣に、女は眉を寄せて、急いで歩いてゆく、男の袖を曳いた。男は默つて大股に歩いて行く。女も仕方なしに後から續いた。

二人は人々の肩から川面を見ると、まだ曳き上げられずに、水に浮いてゐた。手と手、足と足を固く紐で結んで、尙ほ放れまいと強く抱き合つてゐる男女の死體を、女は何とも云ひ樣のない寂しい心持で眺めた。男の顔は水に沈んで、頭の半ばが浮いてゐる。女は横にそむけた樣に、白い顔の半面が、小波のまにまに仄暗い川面に見えた。男女の着物は水に濡れて、ぴつたりと體に附いてゐる。男は二十五六、女は二十歳をまだ越すまいと思はれた。足も顔も水にふくれて白蠟の樣に白い。

「畜生、うまくやつてやがるな、抱き附いてゐやがらあ、堪らねえ。」

斯う職人體の男が、肩の辨當箱を搖りなほして云つた。その云ひ方が可笑しかつたので、周圍の人々は顔を見合せて笑つた。女は長く見てゐるのに堪へなかつた。顔をそむけて、ぎゆつとかたく男の手を握り締めてゐた。男は一心に水に漂ふてゐる、若い男女の死體を見詰めて、去らうとはしない。

「可哀ざうにまだ男女共若いや。女は美い女ですね。」

誰れとも知れず群の中から云つた。

「親の許さぬ不義と云ふやつさ。」

斯んな事を云ふ者もあつた。女はもう其處に立つてゐられない、と云ふ風に、男の袖を曳いて、

「貴郎もう行きませう。私氣持が惡くなつたわ。」

と云　ので、纔て二人はその群集から遁れて、柳の

青い河岸を歩き出した。軒燈が光りを増しはじめて夕暮が迫つて來る、河を渡つて來る風は肌寒かつた。

二人は何時迄も默つて歩いてゐる。

二人の胸の中には今見た若い男女の確く抱合つて、さも滿足したらしく死んだ態を云ひ合せた樣に描いてゐる。

「思ひつめたのね。」

染々女は男に云つた。

二人が斯うして世帶を持つた當座、死のう、死にませう、と男が短刀抔を持出した事を考へて、思はず女は戰慄とした。男は暫く默つてゐたが軈て、

「何うだい、あゝなつたら。」

斯う云つた。戲の樣にも、眞面目にも、女には思はれた。女は恐ろしい處へ曳き入れられる樣な心地がして、なんとも答へられなかつた。

「どうだい、抱き合つて、惡くはないせ。」

男は女の答を促す樣に云つた。

女は柔い手でぎゆつと男の手を握り締めながら、

「厭ですわ。」

「どうして？」

「そんな事、どうだつて、宜いぢやないの、寒か無い貴郎。」

沈默は又續いた。

もう薄暗くなつた河岸通を二人は當てもなく兩國の方へ歩いて行つた。

うすら寒い宵である。

○豫期

筆子

頭は熱して居るし、耻と怨みが反抗となり、堪へられぬまでお道は苛々として來た。

「俺が又道樂に費ふだらうとさ、お前なら可いさうだ」と投げ出す樣な言葉を聞いた時は、もう何だか夫に澄まない氣がした。そして一度墮落した人は既う生涯信用する價値がないのかと、世に絶叫したかつた。

以前は以前、近頃非常に謹直になつた夫に對して、餘り無禮だ、私は怨みの矢を從兄夫婦に向けねばならぬ、だが其侮辱を受けても、自分は青山の其門を潜らぬ理由には行かなかつた。弱味はある、けれども云ふだけの事は云つて遣る、誰がこんな屈辱の前に默々として居られやう。

斯うした息組みで座を構へた。庭を隔てた生垣の透

間から往來の人影がしら〱と見える、趣も無く枝を張つた梅の花が、捨石の上へ散つて居る。おくみになつた靜かな四邊だけあつて、如何にも落花の情がある。お道が冷たくなつた茶を啜つた時、暫くして從姉が這入つて來た。

「お待せ申ました……」

「いゝえ」

女同志は烏渡探り合ふ樣な眼色をした。

從姉は相變らず血色が惡るい、寒さの取付から肋膜炎を病んでぶら〱として、藥瓶と親んでる相だ。それでも髮だけはあげて、お婆さんの樣な微塵の綿入羽織を着て居た。

「まだ何だか寒いぢやありませんか」

「さうですかしら、でももう春らしくなりましたわ」

從姉はにやりと笑ふ。どんよりとして瞳孔が一層弱弱しく見せる。親身だけに面と向ふと、激して感情は自然春の雪の樣に淡くなる。で豫期した通り思ひ切つて口がきれない。

從姉はもう三十に成る、三年あと伯母が死ぬ迄、其嚴しい干渉といふより、消極的な壓迫を受けてた彼は花ならば咲き草ならば萌ゆる、若い時も押竦縮られて悄然とやう〱白い淋しい花を咲かせた。といふ風だから今だに、處女の樣な俤が見える。お道はこの人に今更毒口を聞いたり反抗する事が、氣の毒になつた。

「あの、昨日勇さんが被入つてね」

從姉はやゝあつて、用件に移つた。

「え、奈何も飛んだ御迷惑を願ひまして……」と唾を呑む。

「それでねえ、内では勇さんぢや信用が出來ないつて云ふんですの」

「それで私に證文を書けつて仰るの」

少し急き込む顏を見ながら、「えゝまあ……」と氣の毒さうに、

「私や實は、色々と云つたんですけれど、家ぢや未だ勇さんが道樂に使ふのぢやないかつてね」

「那麼事……」と高ぶつた笑を浮べて、

「もう貴女、三年も四年もあとの事ですもの、それに多少神經があつたら、善惡の衝動はありますからね、三年たてば赤兒だつて歩くやうになりますわ、ホヽヽ勇だつて年をとれば、さう馬鹿も出來やしませんわ、……ね利八さんにさう云つて下さいな」

「…………」從姉は默つて火鉢のふちを撫でゝ居る。

控へては居たものゝ、餘り金錢に齷齪する從姉の仕打が憎らしくなつて、奈何も此儘では胸が晴れぬ、と云つて、人の好い此人にはどうも刃向ひ兼ねる。

「あの、理由は昨日お聞きになりましたらう、全く遊ぶ入費ぢやないんです、先月逐ひ會社の方のお交際が多かつたもんですからね、何そりや家中あらひざらひ質に持つてけば濟む事ですけれど……

……………」

「まあ、那麼……だから私もね、今度は勇さんも本當に堅くお成りだから、少しばかりのお金なんだから貸して上て下さいつて頼んだのですけど、勇さんぢやあつて……お道さんが來て一筆書くなら信用が出來るつて云ふのでせう」

「さうですか、ですけれども、證文となりますと、私ぢや妙なものですね」



幼稚園　越後　村田けん子

ちらり額越しに仰ぎながら、追ひかぶせに、

「さうぢや有りませんか、公證にせぬ迄も私は無能力者ですもの、其よ、什麼者でも勇の名義にした方が、此方のお爲ですから……兎に角夫の名義に致しました」と證文を並べ、指を突きながら、

「で、期限が今月から五月の晦日限りお返し申す事にして、三月の月賦、宜敷う御座いますか」

「那麼にまあ……」從姉は呆氣にとられ、まじ〳〵證書を受取つた。其間に思ひは再び逆行して、弱者の私に筆を採らせ、現に親族間でありながらかうした負擔をさせる、從兄の鄙劣な根生が腹が立つて〳〵。

飾りたてた座敷、惣桐の簞笥紫檀の床、亡き伯父伯母の努力の結果ではないか。其奮鬪の時代、伯母が九尺二間で足袋をさした、而して從姉は風呂敷さげてお米を買ひに行つた。自分の母が絲織の藍勝つた瀧縞の着物を仕立てなほしてやつたのが、當時一張羅の晴衣であつた。さうして仕上た俄分限へ養子に來た、從兄は舊恩――誇張した語か知れないが兎に角吾家に對しては餘り無禮な態度である。

從姉は手文庫から新らしい紙幣を二枚出して、

「何しろ勇さんはあゝいつた、浮々した調子なもんだから、家も案じるんですの、尤も小使の內からつて仰有つたけれど、此頃はねえ、あの切詰めにしか置いて行かないんでせう、店の方も皆月末にならないぢや、お金が來ないのよ、だから少しばかりでも矢張り銀行へ行かないぢやあ……」

と辯解らしく、口重にくど〳〵と呟く。

「は、」と輕く頭を下げた刹那、屈辱々々と心中に强い反響が起つた。指先は痙攣のやうに引釣る、それでもお道は遂々紙入の口をあけた。從姉はぼろ〳〵涙を溢しながら

「本當に勇さんさへ眞面目で居たら、お道さんも苦勞はなかつたのに……貴女一人詰らないわね、先の家は立派だつたわね、これからは櫻が澤山咲いて、泉水もあつたし…………」

お道はギユッと唇を噛んだ、ある女俳優が這入込んだのも其頃であつた、夫が赤坂や新橋に豪遊したもあの時分だつた。思ひ捨てた古い悲しみが再び湧いた。昔の夢は悉く痛恨の涙にあけた一夜である。が偶と又其夢を呼び起すのが、云ひ知れぬ不快で、そして夢から得る夫其者は語るにさへ面伏なのだ。其折妻といふ名を蹂躪された自分が、今日かうして何の不平もなく盲從してるのが、餘り不甲斐ない樣な心地もする……

……あゝ何故從姉はそんな古い痛手を引き出したのだらう。私は怨めしい、それを思ふともう、妙な反抗心が起つて、夫の人格を全く零にして了ふではないか、服從するのが厭になつて了ふ。

お道はづき〳〵腦が痛んで來た。氣の晴れるまで、云ひぬいて遣らうと思つたのが、至つて不結果に終は

つた座に得堪へず、倉皇に暇を告げると、

「まあ、お忽々しましたね」

沈んだ聲音で送り出した。お道が土間へ下りると後からコートを掛けてくれる、それに手をとほして居る時丁度子供と下女とが、何處からか歸つて來た。

「おやお歸りで御座いますか」

下女は慌てゝ頭を下げながら、

「奥さん〳〵、あの好い貸家が御座いましたよ、小石川の奥さんには丁度宜しいでせう」

とお道に眼をやつて、

「御一緒にお供しましやうか、何なら御覽になつては如何でせう……」

お道が此方の方へ引越したいと云つたのを眞に受けて、探してゐるのだ相だ、けれどもう誰が這麼所へ近づくものかと、

「さうね……まあ今度にしませう」

「さうで御座いますか、本當にいゝ家ですよ」

と殘り惜し相。

「またよく此方で調べて見ませう、ね」

と從姉がいふのも上の空で、

「え、どうか……それぢや失禮致しました」

「ぢやまた、ゆつくり……」

「えゝ此度は好いお使に參りませうよ」

皮肉に笑つて、

「ね、人間は一度踏はづしをするとお了ひですね……利八さんへよろしく、お目にかゝつて、いづれお話致しますから」

然しそれは從姉に、何の感覺をも與へなかつた。お道は其まゝずん〳〵門を出た。

風は未だ冷々と吹く、路には車の輪だちや馬の蹄のあとが印せられ、交番所のほとりで小さな旋風が砂をまき上て居る。

横町の邊から、もう空は夕日にあか〳〵として、ギイと近くの跳釣瓶がなる。白い胸かけした女の兒がむくれ輪を作り、飛びはねて嬉々として居る。

夕方の色彩が、しつくりと心の中に泌み渡つて、ただ無性に悲しくなつた。

空漠とした晩秋によき夕陽は、まるで冬木立のやうなさらばえた自分を照らすには、適當して居る。かう思ふとなほ悲しくなつて、胸のなやみは古疵が疼くやうに起る、愚痴や未練な追懷に耽りながら、大通りへ急ぐと、ふと神經痛の樣に眼ぶたがしびれると、涸き

きつた底から、熱い涙が湧き上つた。
軒燈には火が這入つた青山の街を、お道はふら〳〵として歩いた。
電車の音を聞いた時、彼は須臾にして吾家の事を思つた。そして偶と懐を押へて見た。
頰は心もちポーと上氣したが、もう奈何でも可いと云つた風で、生欠伸を噛みながら、電車へ乘つた。
色々な心を抱いた乘客と一緒にお道はだん〳〵夜の幕が下りてゆく街を、いつまでも〳〵搖られて行つた。

○薄茶

梅子

黄色い午後の薄日が寂れた光りを投げた、四疊半へ鐵色無地の道行を被た、色白ろの良信は兩手を固く膝へ置いて、冷たく沈んだ眼で、おつとりお袖の薄茶手前をみつめて居た。其傍へ丸く肥えたお勘先生は、つや〳〵した顔に斷えず微笑をふくみ乍ら、何かしら良信にお愛想を云てゐた。だが良信は、味も素氣もないむしろ蒼蠅相な返事が多かつた。お袖は二十一だが、水々しい島田に結て黒繻子の帶を、きうつと、しめてゐた。いつも良信の見てゐる時には、何故か、手も足も胸迄もふるへて、分りきつた事迄、よくどぎまぎする……其毎にお勘先生の、皮肉な言葉が、妙に癪にさはつて口惜しかつた。今日こそはと、お袖は、お勘先生への意地が恐ろしく出て、出來る丈け心靜かに、落ついてお手前をした。そして、云はゞ人を人とも思はぬらしい悠々した態度が此場合出來た事をお袖は、お勘先生へ對して矜に思た。

黒繻子の帶へ緋のふくさを下げて、立ち上つたお袖の姿が、水やへ入る迄、良信はいつ迄も〳〵みつめてゐた。「さあ〳〵此度は良信さんですよ……今日はお濃茶でもなさいますか？」と、お勘先生は、良信の顔を覗く樣にしていつた「はあ……」と良信は少しもじもじし乍ら、「今日は少し寄道もありますから、お稽古は又に願て、これでお暇いたしませう！」と、さびた聲を低くしてから云た。「おや……何故でせう。お袖さんが見てござつたつて、貴方好いではありませんか。」とお勘先生は、半ば冗談らしく、良信の肩を輕く叩いてから云つた。

良信は一層固くなつて、苦い顔をしながら「今日は×町の檀家へ三時迄に行かねばなりませんから……」

と不愛想に云て、一寸柱時計を見上乍ら立ち上つた。

「あらまあさうですか？では、お會席には是非ね……良信さんお待ち申して居りますよ……」と、調子の高い聲でお勘先生はかう云ひ乍ら送り出した。水やで茶碗を洗てゐたお袖は、其時情味の豊かな眼を、じつと良信に向けてゐた。だが良信は、それを反らせる樣にして、一寸會釋した儘、出て行た。

間もなくお袖も先生の家を出た。良信の云た檀家と云ふのは何處の事であらうと、多少氣にかゝつた。

今朝迄の雨に濡れた街を、軟かい南風が吹いてゐた。何となく、お袖は、ぞこらを彷徨いて歩きたい樣な氣になつた。さうして居る中には、誰れか逢ひたいと思ふ人に逢へぬものでもない抔とも思た。けれどもお袖は、歩むべき道を、普通の足どりで、歩いてゐた。

K橋で不圖セルの袴をはいた、脊高の若先生に出逢つた。若先生は中折れの帽子を、一寸もち上げて、輕く辭儀をし乍ら、「お稽古の歸りですか？今……ぢやもう少し早く歸れば、お袖さんのお手前で、お馳走になれたのに、惜しい事をしたな……」と若先生は、相變らずさばけてゐた。「巧い事を仰言るぢやありませんか……それなら此度、先生のお稽古の時に、伺ひますよ……」とお袖は、華美な顔を微笑させ乍ら云た。「是非……屹度ですよ……」と若先生は、綺麗にわけた髪を氣に仕ながら帽子をかぶつて、「本當に來るんですね」と、又念を押した。「えゝ〳〵」とお袖も力を入れていつた。

別れてから、お袖は、ふと今逢たのが、良信であつたら、何うしたゞらうと思つた。そして、少しもさばけぬ、内氣な人の戀と云ふ事も考へて見た。

お袖の住ふ片側街の、泥濘へ、瓦斯の灯が黄色く照らしてゐる頃、漸く家に着いた。明るい電氣の座敷へ、お袖の嫂のお稻が、友禪の蒲團を被ぶせた、置炬燵の前へ座つて、自分のらしい小袖をほどいてゐた。長火鉢の前へは、小柄な花幸が、薄い眠むげな眼を細くして座つてゐた。お袖はコートをぬぎ乍ら、「幸さん……御苦勞ね……今夜も笑へるのね面白いわー」と云て火鉢の前へすわつた。花幸は、いつもお袖の兄が、直宿の時に泊りに來る花やの男だつた。「お袖さんが居ないと、隨分靜かだぜ……ねえお稻さん。」と花幸はお稻の方を一寸見て云た。「えゝ今日は遲かつたのね……」と細い眼でお袖の顔をみた。（つゞく）

此小說の後半は勿論、他の佳作も次號以下に掲載することあるべし。

小説選評

選者

今回は、應募の原稿も平常の四倍はある。各篇の分量も、平常の倍はある。今――三月十七日の正午、小包が届いて、中を開け、此一かさの原稿を机の上に積んで見て、中に如何な作が含まれて居るだらうかと思ふと、一種の快い豫期が心に浮ぶ。自分はこれから、ぼつ〳〵とこの作を讀みながら、この批評を書いて行かうと思ふのである。

丁度、この諸君の投稿を見て居る今は、花が漸く咲き始める頃である。秋の末にいけ込んだ球根の花が、やつと咲き出す頃である。種々の美しい色をした花が、黒い濕つた土の上に、目のさめるやうな色を見せる。今はその始めで、又、一年中の花の咲き始める時分である。さて、この選擇した原稿が、印刷されて、諸君の目に觸れる時は、もう若葉の頃に成つて居るだらう。室咲きでよい、つゝぢや、藤の盛り頃である。時の移りかはりの早さ！……

諸君はさう思はれないだらうか？……この春から、夏になるまで位、心持の難しく、感じの底に憂鬱な氣分の深く横つて居る時分は一年中に又とあるまい。自分はこの頃になると、狂氣になりさうな、自然のオツプレツシヨンと、如何なるものもこの心に重壓を失つたはかなさとを感じられる。

今日は昨夜から雪が降つて居た。それが今雨にかはつて居る。東京の方でなる汽笛が、波動の聞えるやうな音をさせて遠くで響いて居る……さて、これから讀み始めようか。

▲影(みち子)　一種、「感じ」を書いてあるのが、强く人の胸にしむ。だが、兄妹が二人で話し合つて居る處になると、すぐ幼稚ないゝかげんな、カラクリが目に見えて來る。「感じ」と言ふものを書くのに、書く人の心に、その感じが滿ちて居なければやはり駄目だ。それと、やはり寫生といふ事は藝術の根本だと言ふ事を忘れてはならない。

▲卵賣り(むらさき)　整つた作である。お峯の生活も、はつきりと感じられる。別に批難すべき事も無いと思はれる作である。が、自分には、この作が、ぢつと自然の奥を見透さうと思つて見詰めた目の力が足りぬと感じられる。そこがこの作に對してふるひ付き度くなるやうな感じの起らぬ處だ。しかし整つた作ではある。

▲冬休暇(美登利)　このやうな作こそ、本當のセンチメンタルの作と言ふのです。讀んで見ても、面白くない。

▲青い笑(鵜沼直子)　一寸何處かに才のきいた處がある。藝術的で、中々饒舌である。しかしその割に大切な中心點がきいて來ぬ。たゞ、この人は伸びる人だ。伸びるやうに自分でも盡力されたらよからうと思ふ。

▲牛肉屋(香女)　田舍町の牛肉屋が書いてある。それが話上手が見て來たように書いてある。たゞそれだけだ。生命の影が無い！

▲雨の日(月盤子)　細君の心持がよく書けて居る。この人は如何も、キヨウだが、それだけで終りさうでいけぬ　一つ皮を破つて出てほしい。中途で整ひすぎたといふ事は、却つて大きな毒だ。

▲生の苦痛(ひなげし女)　力の無い作である。

▲美しい心！(うすひ)　この作の始めに、この中の事が事實であると斷り書がしてあつた。それで、この作を讀んで見ると、「乳兄弟」とか「己が罪」とか言ふ程度の幼稚な、下等な小説と同樣な感情で出た作であつた。自分はそれを見た後で、この人々の小説といふものに對する心持

を思ひやつた。よく女の人がかあいさうな、涙の出るやうな話が聞きたいといふ。自分はその程度の人々の意外に多いのを感じた。と同時に、現在の新興の文藝が、日本の民衆の胸に泌み込む日のまた甚だ遠い事を切に感じた。

▲祖母(優梨子)　全體に沈んだ、心に冷さが滲み渡つた人が、思ひ餘つて口を開いたと言ふやうな、眞劍さがある。そこが甚だ面白く思はれた。手法も、非常に巧みになつた。たゞ、をしく思ふのは、この作者が人間を見る目と言ふものが、——言ひ換へれば、自然を透視すると言ふ力が、足りぬ爲めに、この一篇が、簡短な、普通の同情に滿ちた人の話になつてしまつた。この話の中に、折ふし、「祖母」であつた人の、血の流れ出すやうな、斷層面が見える點が全くほしかつた。それが無かつたのは全く殘念であつた。しかし、自分はこのやうに注文をこの人にする事が不當でなく思ひ出した事を非常に心強く感ずる。

▲隣の家(かほる子)　斯う言ふ作には、何と言つて批評をしていゝか、言葉がない。巧い、拙いと言ふ可き境ではない、と、言ふだけだ。たゞ、すてきもなく早口でものを言はれて居るのを聞いてるやうだ。

▲姙娠(要司村福子)　私通して、姙娠した女の心持を書いてある。女らしい處がある。そこに人を動かす力が少しはあると思ふ。が、これは小說としてはよい事ではない。それと、この女主人公の書いた手紙をでも讀んだやうな心持がした。

▲彥さん(紫白女)　行きとゞいた話しぶりだ。だが、たゞこんな事を彥さんと言ふ人がしたと言ふ事だけが書いてあつて、肝腎の彥さんは煙のやうだ。

▲尾上の雲(くれたけ)　自分はこの人の作を讀む度びに、も少し自分で如何かしてくれられないものかと必ず思ふ。目さへあけばきつと如何にかなるのに。

▲渦卷(葉がくれ)　才筆だ。ぐいぐい書いて行く處が面白い。粗雜の感は勿論あるが、ともかく才筆だ。たゞこの作はも少しパックを明かに書いてほしかつた。

▲豫期(筆子)　熟した處がある。それと用意周到だ。小說らしい作をする人と思ふ。だが、この人の目は小さく固りかけて居る。生きたものを見て、心が動いてるとは思はれない。この作はしかし、作者のとしてはいゝ方である。たゞこの作に含まれて居る感情に面白いと思はれる點がある、自分のいゝと言ふのはそこである。讀んで了つてちつと考へて見ると作者は如何も、人間の深い底に居て聰明な目を開けて居る人とは思はれぬ。この人などは、如何かして、も一步眞劍な處に入らうと努力しては如何だらう。

▲十三年後(富子)　面白い物語風に書いてあつた。古いと思ふが、いゝ氣持に讀んだ。

▲京子(鈴木武子)　一寸氣のきいた處もあつたが、甘い作と思つた。

▲住家(淸水あき子)　自分はこの作の文章の美しさを賞賛する。

▲河岸(上原ふみ子)　非常に上手に書いてある。この人の作は從來、この雜誌では見なかつたが巧いものである。その「巧い」といふ言葉がこの作にすつかりあてはまる批評の言葉だと思ふ。いゝ藝術といふよりは巧なテクニックを見せられたと言ひ度い。

▲お菊(沓子)　筆達者だ。輕卒な作だ。もつと眞面目になつて書いて貰ひ度かつた。才のある人らしいだけに一層さう思ふ。

▲敎子の一人より(葉櫻)　また、中途にぶらさがつて居る人の「煩悶」と言ふやつを聞かされた感がある。この作者などを見ると、藝術の上下は、この作者の立つて居る、居所に依る事を明白に思ふ。

▲數奇なる運命（野の百合）　お孃樣のセンチメントを滿足さすべき作。

▲同居人（智代子）　もつと明かに書かれ度いものだ。從來のこの人の作に比しては非常にいゝ。

▲薄茶（梅子）　例の町娘の、我儘な、强い心持が書いてある。自分がこの人と、妙子と言ふ人との作を好いと思つて來たのは、これらの生活を思ふ存分に書かれてあるからである。それと、一緖に力の强い處が氣に入つた。しかし、この人々の作には何處かに、一氣に書いたと言ふ處が見え、その調子に含まれて居る力が感じられはするが、同時に、粗雜な感じがされる。もつと、ものが見える目と、深く感じる心――この「生（ライフ）」を考へる心とが、强くなつたらば一層面白からうと思ふ。今回のこの作は、平生のより、少し氣ぬけがして居るやうに思ふ。

▲娘（妙子）　「薄茶」よりは、自分はこの作の方を取る。この作には、藝術的の光がある。この人でなければ出來ないいゝ處がある。

▲かへり咲き（蔦紅）　しんみりした味が何處かにある、そこがいゝ。

▲照子（治子）　幼い作だ。

▲蟲干の日（梅の月）　コンベンショナルな作だ。

▲冬のはじめ（小笠原貞子）　この作は、平生よりは落ち付いて書いてある。だが自分は何故もつと、斯う言ふ有樣に入つて居る人が、もつと燒き付けられたやうにぴつたりと感じなかつたらうと、それを思ふ。その力の不足が、この作を弱くしたと思はれる。大體から言ふと、この作者はだん〱上手になつて來るやうだ。だが、また、その心が感ずる處が薄い。粗い。

以上、全體を讀み了つた後に、自分の机の上に殘つたのは「冬のはじめ」「河岸」「薄茶」「かへり咲き」「娘」「お菊」「雨の日」「牛肉屋」「青い笑」「卵賣り」「影」「祖母」「渦卷」「豫期」「十三年後」の十五篇である。これを左の順序でとつた。

（天）「娘」――（地）「冬のはじめ」――（人）「祖母」――河岸――豫期――薄茶――卵賣り――雨の日――影――渦卷――青い笑――牛肉屋――かへり咲き――お菊――十三年後。

●新●●●刊

○花草繪物語　太田三郎著

銀地に紫の矢車草を描いた函から、厚さ一寸に餘る書物を抽き出すと、三方とも緣は金粉を以て塗られてある、表紙は白茶色のいやみのない布に、褐色を以て空豆の花がカット風に刷印されてある。偖て内を開くと、金蓮花が三色版に摺られて初めに挿入してある、次に序文を見ると、此本は自分の好きでこしらへたものだと斷つてある、成程と思ふ、目次を數へると、花の名が三十一ある、つまり題目が三十一篇あるのだ、それから繪の數が三十七ある、或は木版、或は石版、寫眞版といろ〱の試みがあつて、殆んど凡てが着色してある。偖て本文の最初には『藤』の花の傳說があつて、太古にあつた美しい少女と、美しい少年兄弟との戀物語が書いてある、兄と戀爭いをした少年が、少女の家に赴くと、母から貰つた弓矢からも、衣服からも紫の藤の花が一ぱいに咲いたので、美くしさに見惚れて女も戀を許したとひふ一くさりのお話が書いてある。次には向日葵、次には美人草と花の一つ〱に斯う云ふお話が附いておるので、又其話材を面白く繪に表はしてある、西洋の草花も澤山ある。要するに、繪の本として見て面白いばかりでなく、物語は一つ〱意味があつて、これから詩や歌を作る材料がいくらでも湧いて來る、又家庭の間の話のたねにも至極好い、有りふれた傳說より遙に高尙だ、婦人などに斯う云ふ話を心得て置いて一寸した集りの席などで語り出でたならば、何んなに床しく思はれるであらう。兎に角近來の美しい書物でもあり、又おもしろい書物でもあると思ふ。（定價金壹圓五拾錢、小石川區久堅町精美堂發兌）

日記



横瀨夜雨選

○やよひの空

越路あはゆき

三月三日。昨夜からの雨は明け方頃から、みぞれとなり、霰となり、絶えまなしに軒をうつて居たが、しまひには、本氣らしく大つぱの雪がぽさ〳〵ふり出して來た。みる〳〵うちにもう二三寸もふつたがまだ止みさうもない、昨日平地を量つてみたら一尺位しかなかつたのでよろこんでゐたのに……いつになつたら絶えるだらう。

「又厄介なものがふつて來ましたのう、心配する事はあるまいとは思ひますが、あんまり降り振りがいゝで」と新聞やはハタ〳〵と桐油の雪をはらつて「をなご衆、ちつとばかあたらしてくんなんせう」と、わらぢのまゝ下女がどん〳〵鍋の下をたいてるゐろりへ這ひ込む、お茶をいれてもつてゆくと、「讀賣」と「萬朝」とをカバンから出してかしてくれた。

例の道ぎはの室の窓の下で裁縫する。學校ゆきの少さい女の子がはなしをしながらゆく「あのな、雪だつてもな、天竺の小供なんかゞふらすんではなくて、矢つぱり、雨が氷つてなるがんだて」「だれがさう云つた?」「うちの兄ちやもさう云つたし、先生だつても」、ああ夢の樣なー美しい夢の樣な國から一刻々々引き出されゆく少女よ……、いとほしい、伸び上つてみると、小さい雪帽子を被つたほうづきみたいな頭がいくつも並んで行つた。

夜に入つて雪は止んだけれど風がふき出してガタガタ戸がなる。

五日、めつたに無い上天氣、地の上からも屋根からもほーほーと湯氣が立つて、雨だれは絶えず明るい障子にうつつて居る。大屋根にかけてあるブリキの雨どひがこはれてるとみえて、途中から瀧の樣にドッドッと落ちて、下の風返しにぶつかるので、しぶきは四方へ散つて、軒板等はビショ〳〵にぬれてしづくがたれて居る。室が冷たくなつて惡るいと祖母がいふので、めつたに開けた事のない雨戸をカラリとあけて、室一

つぱい夜具やふとんをひろげてほした。午前お客様おいでて四時頃お歸り。もう縫物を出すがとてもないと思つて椽側でざぶとん敷いて仕掛けの手袋をあむ。

裏に遊んで居た子供が聲を揃へて「なはになれ、かぎになあれ」とど鳴つてゐる。もう雁が歸るんだらうか、どこの花をみすてゝ來たの、こちらでは屋根にさへ雪があるといふに。

人の顔がおぼろにみえる頃久しぶりで裏の道へ出てみた、とぎたてのかまの様に鋭どく白い月が掃き清めた様な空にぽつねんと光つて居た。道の雪は石の様に堅くなつて雪下駄で歩るくとチヤラ〳〵と音がする、小足にチヨロ〳〵と走つてスケートのまねをすると、三尺位はわけなく滑れる、少さい時よくかうしては、あふにころんでガンといふ程頭をうつて泣いたつたと思ひ出す。下男は家の北に小山の様に積つてる雪を割つてはすぐ下の川へ投つて居た。細い跨がれる様の川は大きなのを投げる度に大波が立つて兩岸へピチヤンピチヤンとぶつかる、どこでもかうして投げるので、此の頃は水は増して流れは早くなつて居る。小橋の上でみて居ると誰も投げこんでる人は見えないのに、川上から又一つ又一つ大きなのが解けもせずいくらも流れて來る。空橇をひいて來た人が二人「そりの壽命ももうちつとだのう」などゝはなして行つた。風もないのにしみ〴〵する程寒い。明日の朝はしみ渡りが出來るかも知れないと思つた。

六日。案の定酷くしみて、とび上つてもぬからないといふ。前の家の爺が、箕の中へ一つぱい灰を入れて、花まき爺の様にパツパツと座敷ぢうまいてる、早く雪を消すためなのだ。

朝の間、筒つぽの袖口にする切れを探がしに二階へ上つて序に簞笥の中を少し片つけて來てみると、△も、××も〇〇も居ない。しみ渡りしながら原まで遊びに行つて來ると云つて出かけたと祖母がいふ、マアと思ふともう目がうるんで來た。わたし獨りを誘つて呉れずにだまつて行つたんだらうか……、悲しい、口惜しい、泣きたい様なのをじつとこらへて、冷たい椽に立つて外をみてゐると、寒い風がしみ〴〵と後れ毛をふく。思ふまいとしても心の奥の奥でお前は獨りなんだよ、たつた獨りとさゝやく様の氣がしてならなかつた。

子守りが三四人一松葉にさゝれて目が覺めた、こゝはどこだと問ひきけば、鎌倉街道の森の下、森の下」とてまり謡をうたひながらしみ渡りして西の方へ行つた。(さびしき朝)(入賞)

「繩になれ鍵になれ」と歌ふを聞いて雁の歸るを驚いたり、雪塊の川に流るゝを見ては春の水の到るをおもふあたし、叙事もこゝまで來れば中原に覇を唱ふるの期も遠くはあるまい、「しみわたり」の何の事とも想像のしようのないのが殘念た、氷渡？氷滑？いづれにして

るひとり殘されたからとて泣くほどのねんねとも思へぬ。が帝劇だ舞踊だとやたらに華やかな文字を並べる都會式孃さん達に交っていしくも成功せよ。(評)

○三月六日

牛込　平塚白百合

かるい足音たてゝかいかい間見に來たやうな春雨はひる前上つて、そて明るい空がどんよりにでつてゐる。友禪メリンスのふとんを椽にしいて髮を結んでゐると、鏡の面に椎の葉のあわたゞしくちるのがうつる。常磐木の葉が春ちるのは秋ちる葉より却つて淋しい。
　叔父樣の五十日祭なので、叔母樣や春さんや町さんや姉さんと青山へ行つた。歸りも電車。同じ道ではあるけれど濠端をゆくのはいゝ。
　黑ずんだ綠の木、下もえした堤、櫻の芽も角だつてやつぱり空まで丸味を帶びてうるほつてゐる。午後神樂坂迄出たついでに、神田まで用達して父上のお好きな越のみぞれを買はうと立よると、何處へこしたのかまるで店が變つてゐた。東明館の角から電車にのる。
　水道橋で髮尻上げた十五六の少女が私に並んで腰かけた。柿色の布に三つべうたんの紋をそめぬいた稽古本入れを膝にのせて、メリンスの大形の羽織は生立をしめしてゐた。
　初めは本入れの上に置いた人指ゆびが右のと左のと間をはかつて動いた。だん〳〵口の内で云つてゐた間拍子ももれてうたひ出した――こゞゑに――首も動く。手は指先許りではなくなつた。
　この時少女の心は輝いてゐるであらうとほゝゑまれた。ひるのせいか電車はごく人がすくなかつた。少女に注目するのは一寸の間であつた。人は皆、ゆるんだ心魂を抱いて、ゆるんだまぶたをそろり〳〵ととぢてゐる。
　私はこの少女のやうにありたいと思ふ。それは事は變つても私は紙に向ふ時、專心に心醉して筆をとりたいと思ふ。私の筆にはいまだ權威はない。王冠のやうに輝く事も不可能である。けれど貧しい心の中に、はりみちたものをうつすには、私の筆で足りてゐる。貧弱な内容にふさはしい筆。けれど私にはこの上もない崇いものである。
　三時すぎ道子樣が帝國座へと誘ひにいらしつた。ことのよしを申しておことわりすると、お氣の毒な表情をあそばしたので私はかへつてお氣の毒だつた。「こん度どうぞおねがひいたしますわ」と云つて置く、課長の奥樣なので。
　夜田町の五十日祭に行く。眞榊から白い幣白のこぼれた祭壇。白木の位牌は蠟の火にてらされて淸いものであつた。祭壇に横に居流れて神主は三人居た。
　萌黄の狩衣着た上座の神官は、よくこえた鼻の大き

い人である。後の二人は白ねりの衣も袴も清い装である。白蠟の流れる間に、祭壇に供物をさゝげる。凡て新木の三寶である。すり足して進める下座の神官の白足袋の裏が汚れてゐるのが、フト白づくめの衣に對して目立つた。九時暇まをしていづ。

雨雲の底の一部があかるいのは、日の存在を知らせる雲のたはむれであらう。

衣ぬぎすてゝ、潮のやうな春の夜の暖かい様に立つて、うすい寢衣の袖をかゝへたまゝ、物かげの和かくとくるような春の夜のなつかしさにひたつた。

薄闇夜の白梅は星のやうな輝がある。(入賞)

よく外出する人、よく口の廻はる人、よく筆の立つ人。誰かゞどうして白百合さんは旦那様の事を書かないのだらうと、いぶかつたが、こんどは課長の奥様を點出して來た、つひ先達歸朝したから……。(評)

○嫁ぎの前に

鳥取　はる子

試驗だからとて、弟が五時にかけておいた眼覺し時計に起されて終つた。雨戸をくると、昨夕、男が掃除した、箒のあとの、まだ消えない庭の東の隅に、紅椿が、七つ、八つこぼれてゐた。杉垣の蔭の方は未だ暗い、母の實家の辰巳藏の前には、古い椿の木が二本あつて、晝なほ、うす暗かつた。この頃になると、その濃い大輪のが、ボタリ、ボタリ、淋しい音をたてゝ落ちる、恐いので祖母様を引張り出して、新しいのを拾つては紐に通して花輪を作つた。從兄は肩から斜にかけて士官だと威張つたり、小さいのを私の頭にのせて「女王! 泣蟲の女王!」など手をたゝいてはやした。私は寢衣だけでふるへながら久しい事、ぼんやり立つて昔を思つてゐた。

夜、机によつて詩集をくつてみたけど、やるせない淋しさと悲しさとに、たへられず、Y先生に、長い手紙をかいた。筆をおいて、よみ返すと、止度もなく涙がおちる、ヅタ〱に引き裂いてしまつた。(一日)

どんよりと曇つたいやな日、今日は南風でせう、頭痛がして仕方がないと言つたら、來合せた隣の夫人が「因幡の南風は頭痛がしますね、郷國ではこんな事はありませんでしたけど」と仰有る、お生れは、九州のやうに伺つてゐる。藏にこもつて、古い本の整理した。

婦人世界や畫報は××の伯母様に、少女界と女子文壇五巻までは妹に、六巻はすゞ子様に、明星合本、スバルなどの文學雜誌は△△の兄様に、などゝ心組しながらそろへる、孔雀船は、K様にと思つて、はじめのページに、何か深刻な言葉を殘しておかうと思つたけど、考へつかなかつた。頭がクラ〱するので籔の中を歩いてみた。カサ〱と葉づれの音が、何事かさゝやくやうで、幾度も立ち止つた。湯殿の煙突から煙が出てゐるので入つてみると、時が、今丁度、燃きつけたところであつた。「お前、私の室に行つてね、本箱の

上にある箱を取つて來てお呉れ、それまで私が燃くから」「此所へ持つて參りますんですか」と目を丸くしてゐるから、「左樣！此所へもつてお出」と強くいふと、すぐ涙含んでうつむいたが、戸をあけて出て行つた。可愛想に、氣のよわい子にあんな事言つて、去年の冬相次いで、父母を失くしてから、私の宅に來て氣兼ばかりしてゐる十四の少女の行末をしみ〴〵考へた。「これで御座いますか？」兩手に大切さうに持つて來たのを受け取つて「えゝそれよ、御苦勞樣！」文箱にあふれた文がらは、昨日と一昨日と、夜おそくまでかゝつてよみ返したものである。涙つぽい德島の人の文！ホームシックを訴へて來た紫野の人！月波の下の薄幸なる詩人のも交つてゐる、思切つて兩手につかんでぱつと火の中に投げ込むだ。

袂を顔に、「誰方も勘忍して下さい！」と聲を絞つた。オロ〳〵聲で「まあ！如何なさいましたので御座います」と時に言はれて、餘りはしたないふるまひが恥しくなつた。

「時！殘らないやうに燒いといて頂戴」立ち上つて火の中をちらとみた、煙がうづまいて何もみえぬ。

「まあ！煙いこと」つと出る、空になつた文箱を抱へて！（五日）（入賞）

日を期して人に適くべく定まりて、よみ古しの本を分ち文がらを焚くなどゝいぢらしき心づかひを見る。しかしお目出たをひかへてかう固たれてばかりゐては誰やらにすむまい、孔雀船の扉に書く文句ならいゝのを敎へて上げよう、曰く「むかしの泣虫の女王、今のわかき人妻より」（評）

○彌生

川越　中村みどり

雨に暮れて、雨に明けた。お百だといふのに。食卓に向つた時赤い御飯を盛るのをみて、母樣が思ついたやうに、まだつい此間お正月を逝つたばかりだのにもう桃のお節句と、太いためいきついてらしつた。過去には至つて無責任な、正氣でゐる年寄つた母樣さへ――私は無言のまゝ箸を運ばせて居たけれど、胸がつまつて一杯きりでよした。「みいちやん、お前のやうな執着な女はいまにメランコリヤのために、死んでしまふと、ある人は嘲つたけれど。（三月一日の朝）

女と生れたからには、一生を華美に送りたい。虛榮と人は責めるかも知れないけれど――、せめられてもいゝ、罵られてもいゝ。短かい一生だもの、人は何と云はうとも――、思ふさまの綺羅をよそほふて、一身に多くの人の羨望をもかつてみたい、女だもの、女だもの。春やうやく酣ならんとするにあたり、いよいよ帝國劇場も來る四日から、――、あゝ、幾多の紳士淑女、群り集る滿場の觀客を、晴れの舞臺に恍惚として醉はしめる、若き女優……女優！熱血漲る、若き私も女だ――。新聞の記事位みても、云ひがたない羨望に胸をそゝらるゝ、どこまであなたは墮落したのだら

うと云はれるかもしれないが、華美に送りたい一生なら、女優がいゝ！同じ女と生まれて、人になんのかのと云はれるほど、こんな田舎町に味もない名もない生を辿つて、埋れ朽ちるのはいやだもの。

緋桃が咲いた、五輪ほど。

髪結さん來る、今日は太輪のつぶし銀杏に紅絹のチンコロをかける。思きつて出た。たぼが雪のやうに白い襟足にはえて、美しいと合せ鏡して微笑んだ、おなんどいろの襦袢えりに黒繻子のかゝつた、格子縞の銘仙を、スーと抜いて着る。ルイザなどより二歳も老けてみえる。

フト倉へ行つて、母様のようだんすの中かきまはすと、幼かりし日の寫眞がでゝきた。十二の三月十日、撮す、表をかへすと丸い可愛いゝ顔、稚子髷の紅友禪の腰揚厚き小さい手、みんななつかしい戀しい。

指輪のない、丸い小さい手、と大きい、手とくらべて、沈默にみつめて居た。

朦々と立ちのぼる湯氣に、明るい瓦斯がくるまれて、首までとつぷりつかつて、上るとフラ〳〵ッとした。

香の高いクラブ白粉を襟にだけはいて、着物はをつたまゝ帶もしめず其のまゝ、椽づたへにゆく。

淸い夕月に兩のお乳が丸く、白く、このまゝ、着物などぬぎすてゝ雪のやうに潔い肌を天津女神にさゝげてしまひたい、と思つた。(三月二日)

アイスクリームを知らず、チヨコレートも知らず、紬と木綿の見わけもつかず、濱縮緬とモスリンもわからぬ、私はそれだけ野暮天なのだから　潰銀杏に結つて、紅絹とやらのチンコロをかけて下すつても一向想像がつかず、Mさんもこの頃はマガレットカプレットとなつていらすといふが、一つ一つあたまだけも寫眞にして下さればいゝと思つてゐる。「紫の衿からぬけ出たやうな首」と書いた人があつたが、夜なかに行燈の油を啜めはしまいか。但雪のやうに白い衿足は別なり。(評)

○行く水に散浮花

九段　夢のをんな

二月終の夜をしめやかに地に灑いだ雨を夢にきいたかへれ、と投げつけられた花を踏みにじつて、あの時あのまゝ去つたならば、どうなりゆく運命であつたらうと此ごろ此麽ことも思ふ。梅咲く二月櫻散る四月、黒い土にも草の色を見て、あゝもう春だ、と若い心はそゝられるけれど、單調な一色が無限につゞくみちを之から行かなければならないのだ。いたましき執着と破られたる憧憬のとぢた心の暗きかげに、なほうづくまりうごめくを思へば、暗き春よと歎かれる。幾百のともした火の、ひとつゞゝひとりでに消え行いて、闇に返る瞬間のごとき、また人去り歌舞の音絶えた大劇場にたゞひとつ殘る電燈のやうな深い大きなさびしみ、あゝそのさびしみ。

夜は星もなかつた、唯一人の部室にゐて、アービングの宿の妻をよんだ。

けれとやるせない。ゆびわの珠に紫インキを滴らしてみた。

立つて座敷をあるいた。

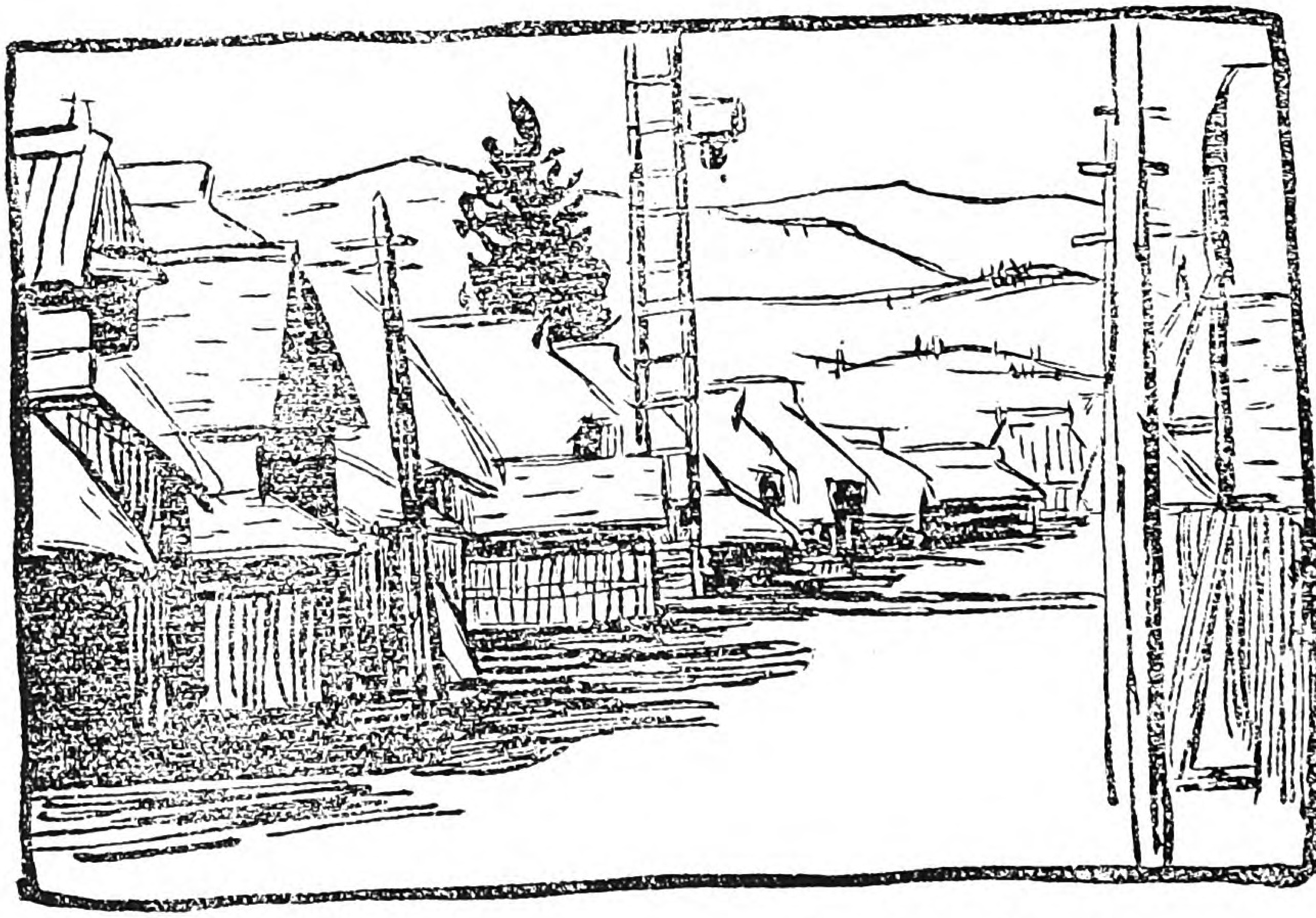
硝子の色を月の色とみた。

鏡臺の前に座りつくして終にさびしくなつてしまつた。

（ついたち）

豆人形をはだかにして、小さな箱のいうぜんの小切の中に埋めて、お人形の棺と云つたらわらはれた。インキのつぼを三つ並べて前に支那燒の筆掛を置き、丁度お墓の石碑の様と云つてまた笑はれた。

或人の私を評した――おひなさまのやうな家庭に人形のきものを縫ひ――ある時はそんなをばなりの子のやうな戯れもするのに、やゝともすれば暗い階段を灯もさゝげず、手さぐり手探り下りてゆくや



春立つ朝　　さくゆつ

うな不安に襲はれる。逐はれるやうな心、何故ともないけれど、白堊の建物が河岸の對うの黄ろい落日の光のなかにつめたく沈んで居る、しめつぽい日蔭の町にうすい電氣は點いたけれど、三層に劃られた薄あかい光に吸はれたわが心のなやましさ。

葬られゆく命を泣いて、高き天を仰いでは、自由よと叫んだ時、恁うしていま、夕暮の河岸の家の二階から、ぼんやりと雲を見入つてる女にならうとは思はなかつたのに。

（ふつか）

弛緩した心をあかるい部室に置いて、火鉢のふちに手をかざし乍ら、思ふともなく思はぬともなく、さつきから考へこんで居たので。

らんぷの下にめぐりかはす盃をうけて、あかい皆の頬の

色と、滿たされたさかづきをもてあました妹の瞳とを思つた。ゆく水に散り浮く花と、人は皆ゆく。みな行いてひとり都に殘るのだ。もうおわかれだからと、別離のさかづきをうへの姉にさした時、北のはての見知らぬ人によめいるといふ姉と、會津のくさにあすはかへる妹とうす月の籬の門を出て、青山の町を歩いた時、青山のまちの灯にわかれきて、閉された電車の硝子窓から重なる雲を眺たとき、心はくらく／＼なつてゐた。

母さま、かへりますよ、歸りますよ、やがて會津にかへります、と心によんで、花模樣ある机の上に顔をあてた。はなれじとするもの丶やうに机のふちをぢつと押へて。(みつか)

大きな風が吹いてゆく、雨戸ががた／＼ゆすぶられて。きもちよくかたづいた部室のなかは、洋燈の光りが和かく流れて居る。ぼんやりと大きくあたまの影が障子にうつつてゐる。しづかな下の店ではカタリ／＼俎の音がつゞく。

さつき、胸に閃いたあるものを想ひ、心の或一點をみつめやうとしたけれど、だめだめ。いま考へたことは次の瞬間にはもう外に移つてゐるのだもの。だまつて壁の色を見た、黝色の重い暗い色がうれしかつた。

かなしみのはてには暗い壁を心の色とみる、と云つた人もあつたけれど、驕樂のそのはて、ふと見出でたさびしみ、それはどんなに深く限りないものであらう。

あれは誰れのだつたか忘れたけれど、「冬の如月にはじめて見いでた戀の種」その戀を、あ丶それを、それを、暗い土に葬らうつていふ御考へなの、私は涙がおちますわ。といふ一句が忘れがたい心の底に殘つてゐる。戀の奧津城を築くのは餘りにはやいと泣いた人、あ丶しかし私は……私達はもうすでに墓のおもてに、二人の名をきざんでしまつたのだ。やがてひとりひとりにそのなかに入つてゆく日はいつか、いつの日か來るんぢやないでせうか。

「三月のおやすみには横濱へおかへりになるでせう」「否私は歸らない。おまへひとりでお歸り、歸りたければ」といふ。「ひとりでかへつてなにをします。このでろ私、あなたはやつぱりあなたひとりの心に歸つていらつしやるやうな氣がしてなりません。」私は机につつ伏した。獨りで泣きに歸るとはいはないものに。(なぬか)

賤の苧環くりかへすと靜者はいふ、『見るも夢さむるも夢』の絶品は一有るべくして二有るべからず、隋性、君を驅りてしばらく同一圏内を彷徨せしむるのみ。深く咎むべけんや。わが住める世界には「結婚」なるもの無し、一切の歡樂一切の慶事渡人はあづかり知らざるなり。然れども、結婚を唯一の誇りとせる低級の女子は知らず、人身賣買にひとしき事實を美名によりて覆はんとする人も知らず、心有る士女をして痛哭かくの如きに至らしむ、土に婚も本懐事なるかな。(評)

○三月二日

赤阪道子

みるなと願つた甲斐はなくて、明け方近くまた思はぬ人のゆめから覺めた。さめると今迄氣がつかなかつた氷嚢の冷たさが泌みる樣に額に感じる。仰向に成つて居る儘手探りで、下に當てるハンカチーフを見て居たら、きゝつけて次の間の母樣が起きて被來つた。燭臺を片手に凝と立つて被居るお姿を、仰ぐ事はようせずに默つて眼をつむつた。

愧づかしい小さな心よ、私は何故あの晩あれしきの事で倒れたらう。高瀨の小母樣は何と思召したか。

蒸される樣なストーブの熱氣に、只さへてぐらかつた頭の中を攪亂された樣にゆら／＼して、側の長椅子にたふれたのは覺えて居るけれど。

さめた時、私はのしかゝる樣に見守つていらした母樣のお瞳を、初めて母の顏を知つた嬰兒の樣にいつ迄も見て居た。其れから一週間になる。少しは勞れてもおきて見よう。

苦い／＼食後の水藥をのんで、一時間許りじつとねてゐた。今日は鶯が一寸ゝ鳴かない。風も烈しい暗らい日。十時頃ネルの上に綿入重ねて、被布をきておきる。廣椽の柱から柱へ、茶の間迄ゆくのに四度休む。何としてもミルクが厭になつて半分しか咽喉に入らない。眼をつむつてグッとお飲みと仰有るけれど、此麼にして飲んで、あの白い濁つた液體が何の養ひにならう、母樣のお顏みい／＼飜してしまつた。

二時頃、白い胸かけした儘お勝さんが來た。「お正月から暫らくお休みと仰有いましたが、明日はお節句でもありますしお上げ遊したら」と云ふ。氣まゝにひもで結んだ儘下げた髮を吃驚したらしく眺めて居た。

初の作つて吳れたすり餌をやるとて、鳥籠の障子を明けたら、圓いさかしげな眼がじいと見て居た。

束ねては双の手に餘る六尺の髮、熱つい血の流れてゐるこの肌も、私はもう女には生れて來ないだらうよ。苦しい故に、煩はしい故に。限のない蒼空を、自由に飛び、自由に歌ふ鳥であつたら——。

花榮が賴んで置いた白と緋の桃を持つて來た。今からお雛壇を飾りませうかと伺つたら、母樣は勞れるだらうからと仰有つた。「今年きりなのですから」と云ひさしたら、母さまは默つて立つて支度して下さつた。

私はお雛樣だけを出す。一樣に萠黃の絹緒で結んだ箱をとき乍ら、もうかうして再び飾る雛ではないのだと幾度か心にくりかへした。吉野紙をのけると后の宮のお顏もさみしかつた。ゆら／＼垂れた冠のお飾り、檜扇の緋房の長いのも、もう今年でお別れである。五人

雛子、三人仕丁、高砂から官女方、お小姓からいかめしい矢大臣まで一つ〳〵小さな聲で「さよなら」と言つた。左近の橘右近の櫻一切をかざり畢へたのはもう雪洞に灯ともす頃。もえる樣な緋毛氈と、丸に劔かたばみの紋をぬいた紫の幕としみる樣に目が痛い。

暗らい心を抱き乍らも、厚いお二人の愛に包まれて、兎も角もすぎた昨日は謝さねばならぬ。今迄私をかうして來た誰れかの手が、新らしき日にも私の行く道を定めるのであらう。逆はれぬ力に只從ふ許りである。

あゝ、短かゝらぬ年よ、月よ。傷けられた痛みさへ、欺れた恨さへ、かへりみすれば皆古き夢の一つであつた。凡てを忘れねばならぬ時は來たのだけれど。私は立つて窓を明けた。風は和いで水の樣な空にはふる樣に星が輝いて居た。

あはたゞしく梅が散る。胸にたゝんだ被布のたもとをすべつて、カラ〳〵と音して爪箱がおちた。

「お母樣、もう梅も散りますのね」私の聲は顫へて居た。

「あゝ、でも梅が散つても櫻がこぼれても、家には春が續きます、靜さん、あんたは幸福と思はないの」

「幸です。私には幸すぎます」

はつきり言つて、淚がおちやうとした。

あはたゞしく梅が散る。

「家には春が續きます、靜さん」と仰有た母ぎみは虞美人草の謎の女の口ぶりである、何の愁ひありて二十年の春をかなしむか知らないが、雛の調度を携へて人の家に入り玉ふもよからずやと思ふ、今回集つた文は殆半分は離い日記であつた、若い女の人には無理ならねことらしいがこの君も其一人なんだ、やつぱりお孃さんだなあ（評）

○母と子と

東京　ひざくら

春になれば天の色にも地の色にも噎をさやる處に長閑さはたゞようて居るけれど、ねざめの足にはまだ椽側が冷めたかつた。

母樣が立つて居らしつたので、ふと、寄りそうて立つたら、私の方が少し高いので、思はず、ねー母樣親つて者は、子の丈が親の丈より高くなつたのは、嬉しいものでせうか、え？、母樣。お顏をのぞき込んだけれど、たゞ笑まれた限りで居はほでれなかつた、私もたゞ笑つて終つたけれど。本當に私は大きくなつたと今更に驚かずに居られなかつた。

母樣がよく一人限りだ者ですから、何時でも、あかちやれで困りますつて、甘へる私を愛しさうに見ながら仰しやつたのも、ようござんすねー、お小さいんですものつて、皆樣が仰しやつたのも、夢の樣に淡い懷かしみが殘つてゐるばかりで、此の頃はなんて御成人

遊ばしたのでせう、本當にお身大きくおなり遊ばしましたね、外でお目にかゝつても、わかりませんよと誰れも言ふ。お小さいと言ふ人は何時の間にか一人も無くなつて終つた。

小さな痩てけてた弱い子も、痩てるまゝ弱いまゝ人並に丈はのびて、足袋も母樣と同じのがはける樣になつたし、着物は母樣よん長いのが着られる樣になつたし、人の行く所なら何所でも行れる樣に大きくなつたと思ふと。へだてなかつた、親と子との間に、冷めたく流れ入るある物を見とめて、いはう樣なき淋しさを覺えるのである。

父樣だつて母樣だつて、一寸ふれゝば、くるつと、はぢける鳳仙花の實にさはる樣な心持で居らつしやるのだから、反抗しなければならぬやうな場合は、決してお作りにならないけれど、私に對する信實の希望はお心にひめて何んによらず、表面上の同意をして下さるのだと知つた時、私はうらぎる冷笑を包むことが出來なかつた。親に對する冷笑、親を冷笑する子が何所の世界にあるだらうと恐しくつて震へながらも猶冷笑を包む事が出來なかつた。父樣も母樣も私は醉つて居るのだと信じて醒る日を期して待つて居らつしやるのだけれど。私はどうしても、たゞ柔順な孝行な少女となる日のない事を、幾度びか迫つて語らうとしても又ひるがへる心よ。弱い、弱いとむち打たれても、未來に總べてを期して安らかに保てる父母の胸を破るに忍びず。場合によつては溫かきベッドも斷然蹴つて立たねばならぬ罪を恐れて、弱き身を思へば總べてを捨ててたゞ安らかに死ぬるまで生きようかと思ふ事もあるけれど、あゝはかなき命をと、思へば、知らずしらず熱して命を縮めても、生命をさゝげても、意義ある生を祈らうと組てめし手に熱涙のはふり落つる時、全身は震へわなゝきて心は空しくくだけ散る。神樣のあることをかたく信じて居る淸き子が、さゝぐる祈りは、かならずと思ふと、死は決して恐れないけれど、生を愛しむ心のより强きを、どんな光明によつても、どんな力によつてもくぢく事が出來ない。力なくたれた手をふたゝび組む時は、ぬけがらの樣な心で、世の中の親の凡べてが女の子に對する考をもう少し深く重くしてとたゞ祈るのである。

一人で居ると色々な事を考へて、はては體にさはるのだからと思つても、信じに、信じて居る父樣さへ母樣さへあざむきの慰安をあたへて、我が醒ぬ心のさむる日を待つて居らつしやるのだと思ふと私は、のろひたい、世の中の總べてをのろひたくなるのである。

あゝされど愛する父樣よ母樣よ、我がために凡べての愛と惠とをこめて、溫かきベッドを作らせらるゝ懷かしき、父樣よ母樣よ、私は決して、決して、惡人にならぬ事を誓ひます。(三月一日)

堅決ともに下る、うべひざくらも年たけたり。めざましき和歌の進境とともにこの人の近狀も亦瞠目にあたひするものありと聞く。久しく師として待たれながら、年賀狀すら人に書かしたるをたまふまでにへだてられたることをおもふ。よしや世は春。(評)

○兄嫁と共に

千駄木　野に降る雨

嫂樣が見えぬと思つたら、まあ、隱れて泣いて被居る、奈何なすつたのと聞いても默つて泣くばかり。お前何かお云ひぢやないかと母樣が仰るけれど、さつぱり覺えがない、あゝ一言でも斯々と打明けて下すつたら私は什麽に嬉しいだらう……。斯うした淚は默々の中に相互の誤解を來すもので、私の樣な僻んだ狹い女の心からは、遂ひいろ〳〵な猜疑が起る、そんな事を話すわけにも行かないから、だん〳〵雲霧が湧いて二人は隔離せねばならぬ。お互に暗鬪をつゞけ、世間並の嫁と小姑になつて了ふぢやないか、と兄樣に申上たら全くだ善く云つてやらうと、お口ばかりで何とも嫂樣に仰らない。こんな樣子では未々私は一人ぼつちに投り出されて了ふかも知れない……思ひ迫つて愴然とした。そして偶と夫といふものに付いて考へて見た。

――三月一日――。

大分氣候が暖かくなつた。痛切に別居を思つて今朝お使ひの途中、淸水町から坂町へかけて貸家札を見て歩いた。二階建ての七間半といふのは、母子二人には廣すぎる、四疊半に二疊の手頃なのは、じめ〳〵した露路の中だし、どうも思ふ樣にならないが、然しまだまだ何處かにあるだらう……と云ふけれど、母と共に別居したその後は――改めて新らしい生活を立てねばならないのだ、兄樣が構つて下さらなくとも、母樣ぐらゐ……と云つて退けたものゝ、果して私の腕で、あゝ頭が亂れて來る。不覺の淚がほろ〳〵とこぼれた。

――二日――。

雛ならべて、さし翳す緋桃白桃、雪洞の美しい火影に白酒汲むと、お節句だよもつとはき〳〵なさいと叱られたが、さう强ひたつて急に嬉しさうな眞似が出來るものか。本當にお雛樣を喜んだ天眞爛熳な時代が戀しい。

――三日――。

まばゆい電燈と金屬や大理石の輝き。草色のドアを後に嫂樣と私は知らぬ男と椅子を並べた。帝劇の觀覽席はむつと汗ばむほど暖く、新らしい建築の香が泌みる、天井の天女の繪を霞がくれに見た程私は上氣して居た。並んだ若い其人は、入口の混雜から席につく迄深切に世話してくれた、そして色々と話かけるが、弱い女は人知れず恥羞を覺えた。人目も良心も何らの痛痒を感じなかつたけれど、只私は面伏せでならぬ。嫂

は平氣で芝居眼鏡（オペラグラス）を借りなぞして被居る。見受ける處誰も彼も嬉々として居るのに、私ばかり何故もつと浮浮出來ないのだらう。餘り悲しくなつたので、一人廊下に來たら、パッとした瓦斯器から強い光がさす、華やかな食堂では貴婦人や紳士が卓を圍んで居る。食慾を誘ふ樣な甘い匂ひがする私は一人立つてたのが俄に耻かしく、矢張あの觀覽席の方がなつかしい。この中で靜かな夜風にふれやうと、出て來たのは到底不可能なるを知つた。それほど私は世の中に盲目なのだ。

——七日——。

冷笑の裡に涙有り。（評）

○三日

長野　優梨子

祖母の二七日である。

朝「姉さん、怎麼に寒くても行くの？」と小さい弟が聞く。

「え〻姉さんは甚麼に寒くても行くけれど、信ちやんはお風引くと不可ないからお家に被在い」

「嫌、姉さんが行くんなら信ちやんも行くよ」と弟は、可愛いマントにくるりと包まる。

外は寒い。一面に霜がおりて居る。下駄の音が強く



春の日曜　芝　田中きよ子

響くので、堂庭の敷石の上をそつと歩いた。本堂の階段を上ると、いつもの處に堂番の爺さんが、張りの無い黄色い顔をして居た。行李詰事件が思はれた。

晝。日本橋の叔母の家からお節句の配り物が屆く。十軒店の印象がはつきり浮ぶ。明るい街を走る電車の響きが聞える。けれどあたりには桃の香も無い。

「やアこれは酷い!」と、急に降られた道行く人が、袖の雪を拂ひながら急いで走る。

春の淡雪といひたいけれど、まだ信濃は冬だもの。けれど始めのうちはふらないで、濡れた地の中へ吸ひ込まれる樣に浸みていつた。

師の君四人の十五年勤續祝賀會の回章が廻つて來るずらりと列んだクラスメートの美しき名の下には、不揃へに缺席と記されてある。お稽古日だけれど、わざと大きく出席と書いて次へ廻す。

夜。暮れる頃、ミセスノルマンの親睦會に行く爲に、靜かな雪の街を友と二人で歩いた。

ゆるやかなオルガンの音を聞くに相應しい、教會堂の前も靜かであつた。信濃圖書館も寂しく門が明けられてある許りであつた。

行かうとする鼠色の大きな家から、音律の調つたピヤノの音が洩れて來る。美しき團欒を思つて小刻みに急いだ。

「——笑ひや結ぶ住吉の——みちをまもりの神なれば……姉さんそれから何でしたつけ」

「知らないよ住吉なんか」私のペンは忙がしく洋罫紙の上を走つて居る。

「あれあんな事云つて、喧しいもんだから……姉さんは須磨さんから手紙が來ると夢中になつて返事を書くから大嫌ひ、好いわ又先達て見た樣にお師匠樣に告げ口するから」ぷつ／＼云ふ妹の聲がうるさい。

痛ましき友の叫びを聞いて、私の頭は今むすぼれて居るのに……。

すーつと電氣が細くなつた。

「あら!」と富美ちやんは頓驚な聲を出す。私は默つて筆を休めて居ると、すぐ前よりも猶明るくぱつと點いた。富美ちやんは笑つて居る。

軒だれの音がゆるやかに聞える。

「あなたはお澄しだからいけない」と言つたら、本願寺の坊さんが亡くなつて悔みに行つた時は大すましにすましたけれど、文を作る時はさうすましちやゐないと抗議して來た、寫眞を引のばしにして寫眞屋の看板にさせておくとはたから聞いたので……、知つてゝさせたのかと問ふたら、そんな馬鹿なまねを誰がと言ふ、どつちにしろ小說に於ける努力を日記の方面にも用ゐて下さればいゝのだ。(評)

○三日五日七日

東京　けむり

三日。齒醫者の歸りに若々しい神田の町を歩きたいと思つたが、弟が厭といふので電車に乘つて歸る。

Kさんの家に行つてお雛さんを見る。Kさんは四月に嫁くといふ。處女の名殘りに心ゆくまで遊びたい、

草青き武藏野を歩みませんか。嫁くとなると厭なものね。といつた。そんなら嫁かないでお置きなさい、といつたら俑いやでせう。と皮肉つたら、その方が宜いわ。と負け惜しみいつて居る。

この人との交りももうおしまひだ。私のまはりの人はひとりづゝ去つてしまつて、私はもう誰の心も握つて居ない。淋しい。

五日。このごろはちつとも敎會に行かなかつたから、今日こそは靈のパンを充分得なくちやならない。何だか此頃は精神が少しづゝおち行くやうに思ふ。やつぱり何かゞ思ふやうにならないところから、厭やだ、厭だ。とやけ氣味になつてそれに我儘も手傳ふから、それで墮落もするんだらう。わるいことだ。あれほど强かつた理性は眠つて居るのか。

然し私も弱いなあ。些細な事件に遭遇した位で、負けてしまふやうぢやあとてゝ我が生は遂げられぬ。『强かれ』只その勵ましの言葉がほしいのだ。强かつたら前にも進めやう。上にも昇れやう。

心の糧、それを得やうためにとは思ひ乍ら、燃えきつたんだか、消えてるんだか、不明らない信仰持つて、非常識なと思はれるほど熱心な信者の中にまじるのは如何にも苦しいことだ。

ともぢ〱して居るところへ叔父樣が帝劇に行かうと仰有るので、はいとばかりそつちの方へ行つてしまつた。

ルネーサンス式建物の內、花散らす天女の畫、橄欖色の壁に金色の香の浮彫、麗はしいと見た。

私に芝居の批評眼はないけど『賴朝』はよほど現代的な調子のやうだつた。美しい賴朝、賢しげな政子、皆よかつたが、男のいふ女のつくり聲はいやなもの。要するにうそとほんとの間をみてゐるやうな氣がした。

昔は堅苦しい事をするものだと思ふ、『伊賀越』といふのは全然技功でなつてゐる。『羽衣』は美しかつた。殊に背景の土佐繪はよかつた。

かへり路で日比谷の樹の間に光るアーク燈を眺め乍ら、政子の戀についてて考へてみた。

七日。私は人の前によわく、自分の前につよいのだ、と思ふ。人の前に語る時は聲ふるへ、言葉亂れて思ふやうに云はれない。靜にひとり思ふ時は隨分突飛と驚かれるほど思ひ進む。行ふ時には行ひ足りなく、思ふ時には思ひ過ぎる、そこに悶えもおてるのだ。私の弱點もあるのだ。

力味返って强いことを言ってるけれど、あらそはれぬふしのあるのはこの君のひねくれた文である、第一こんな亂棒ないら〱した文章を作るくせに、幽靈の正體を見られることをおっかながってけむりの中にかくれてゐる。（評）

○叔母を迎へて

常陸　赤城躑躅子

三月二日。

「いやなんぢやない、嫁くのはいやなんぢやないけれど」だつて私には着物がないものと言はうとして、ふと顔を上げたらにこりともせず見守つておられたので、私は「叔母さん、私洋物屋なんぞいや」と言つてのけてしまつた。さうお前それは本氣で言ふのかい、いくつになると思ふ、あすこもいやだこゝもきらひだと我儘ばかり言つて一體どうする積りだと怒つてしまつた。だつてだつて、私は口がきけなくなつて突伏して思ふさま涙を疊へ吸はした、お母さんさへいらしたら私の心配するまでもなく何も〳〵揃へて下さるだらう、お京さんにはコートもショールもある、お市さんだつて總もやうに振袖がある、何んで私にだけ無いだらう、ただ親のないと言ふので年々蠶をかつて、糸はとつても自分の機はおれず、おはりはするけれど、これお前のにしろとついぞ絹ものをくれもせぬ、アヽお母さんさへ生きてたらと思ふと、おこるともしかるとも勝手にお しなさいなと涙のひまに考へもする。叔母さんは困つたやつだと言つたきり二人は深い〳〵沈默に入つて……。

露をおびてほちんだばかりの若草を踏で叔母様等と墓參りをした。叔母さんと露ちやんとは細道を二人立並んで先へ、私は後からついて、野道を辿つた、空は霞んで、雲雀の聲もうつとりと、私は二人を見比べて涙がやまなかつた。いつも私は賑かな家庭を見ながら窗に流れる白雲を見れば亡き母が思はれて、嫂樣の冷たき心を悲しまねばならぬ。

花をさしかへ水をくんだ叔母様はものをも言はず涙ながらにうつむいた、私は堪へられなくなつて、冷たい墓石に手をおいてあの世の人となつたお母様にも叔母様にも兄様の無情と嫂様の冷情を訴へやうとしたがむやみに唇がふるへて只涙ばかりが出た、アヽ七年前、丁度桔梗の花の紫なのを持つて妹と泣く〳〵お母様を見送りしたのは未だ昨日のやうに思はれるのに……。

叔母様にかたく手をとられて歸る。

この人は孤である、そして長女なのにもかゝはらず、次ぎに生れた腹ちがひの妹に相續權は移つてゐる、はかなき人の子よ。（評）

○朝と晝と夜

京ばし　千代子

三月四日。

お晝近い時分西村の叔母様が來て例の事に就いて姉にいろ〳〵と言ひ聞かせて居た、蔭で聞いてゝ腹立たしいやら馬鹿々々しいやら、默つておとなしく聞いてる人をいら〳〵する程あきたらなく思つた。それにつけても、噫やつぱり母様に歸つてもらはなければ……。獨考へては泣いてる姉様に、どうしても母様に歸つてもらはなければ私達の周圍にはあんなわからずやの人達ばかり寄り集つてるのだから貴女一人ではない私だつて皆だつて可愛想だから……私もも一度手紙書きますから貴女からも書いて上げて頂戴といつたら、もし母様が歸つてらしつたら、でなくともどうしたつて私は私は他へ出してもらひますつていふ。妹のくせに生意氣な事いふやうだけれどよう〳〵考へて見て下さい貴女が出てしまつてそしたらめつきりお弱くなつた父様の老後を誰が見ますの、また貴女が今から出るといつたつてそれはもう覺悟はちやんときめていらつしやるのだらうけれど……。それはもうよう〳〵考へての上の事ですもの、とまたハラハラと涙がひざに。噫靜かに御佛に仕へまつる一生？それもいゝでせう美しくつて、とだけいつて目を泣きはらしてる姉様に今此上いふのはかへつて惡るいと思つて口をつぐむだ。後で妹が姉さんどうしたのでせう昨日から泣いてばつかり居るでせう、つていふから泣きたくなつたから泣いて居るのでせう、貴女達にはわからない事なの、だからだまつていらつしやいと言つて置いた、自分ながら哀れな兄弟だなあと思つて涙が止めどなく流れる。

五日。

大急ぎでお夕飯すましてからすぐお約束の本持つて、萬壽子様をお訪ねした。丁度お出掛けの處だつたけれど私歩きながらお話し致し度うございますわと申上げたら「ではね切角お出で下すつたのに失禮ですけれど」と優しく仰有つて、二人は折から水天宮の緣日で混み合ふ中を通りぬけ

て萬壽樣のお好きだといふ明治座前の河岸通りをお靜かにたどる、暗らくはないけれど人通りも途絶えて四邊はシーンとして居る。ふと道の中ほどで萬壽樣は向ふ河岸の暗にこんもりと立てる樹を指して「私が少さい時分夜牛込の家に歸ります時あれを見て心にいろ〳〵と恐しい形を想像致しますのよ、するともうそれが恐しい形に見えて來てこわくつて〳〵かけ出して通り過したりいたしましたわ」と仰有りながらあこがるゝやうな御まなざし、御美しい姿が暗に一きはは〔ママ〕えて、無言のまゝに肩を並べて眠れる河の岸を奥へ奥へとたどつて行く。萬壽樣は御胸に手を當てゝ、こゝが板で押つけられるやうで苦しいと仰有る、ハッとしてまあ氣が付かなかつた、あんまりお歩かせしたのが惡るかつたのではないでせうかと伺つたけれどさうではないと仰有つた、あまりおそくなつてはと白木の前までお送り下すつていつまでも後見送つて下さる君にお別れしていそぎ足に家についたのは九時半。いつもとりとめのないお話してはお別れするのだけれど、お別れしての後も何となく歎かいなつかしい氣持になつてつかれた體を其まゝに床に就く。先刻御春樣が私まで申上げたい事があるのですけれど何だか言へませんわ、と仰有つた、其時は別に深く御尋ねもしなかつたけれどあゝどんな事だつたのでせう、氣にかゝる。
姉さんの事が獨合點に終つてゐる、わけのわからぬ文章を見せられて腹が立つ、しかし何か知ら無い仔細がありさうでさう叩きつける氣にもなれぬ。(評)



梅咲く茶屋　失名女

○尼になりたい

長崎　むらさめ

私も口ぐせのやうに尼になりたいと言つてはしかられてるのと、しつかり友は私の手を握りしめました、私もしつかり握りかへして、いつしよになりませうかと二人は淋しい笑をもらしました。
今日はお節句です、私はお節句をうれしいといふ氣がおこらなくなりました、これだけ私の心が荒んできたのでせう。今や陽春三月、すべての物若々しく、人の心にも温き血汐のわく時に、私の心は自分ながらわからない程の變化が起つて冷たうございます、正さんの甘つたるい文字に滿足してた時は過ぎ去つて、今では其甘つたるい文字がばからしくて、讀む氣にならずひきさいてしまひますの、そして希望も理想もない、いえ、あつてものぞむことの出來ない、囚はれの身をかこちつゝあります。
糸より細い春雨がしと〳〵と降つて、明日の倫理の試驗のしらべをしてた私を、今日も又もだ〳〵した哀しみがおそひました。

許婚が何故私にはあるのか、と、これが私の小さい胸を苦しめるうたがひなのでした。私だつて美しうはなくとも、いた〳〵しい胸を抱いて夕よる緣の柱に長い袂かみしめるのを人は何と見るでせう、空想に憧れ、理想を夢見て今迄自己の境遇に滿足してた私が、ふと自己を知り其の過去を考へた時、どんなに物足りなく感じましたか。紅に燃ゆる頰の色、緑の髮、あらゆる少女のプライドは早や、或一人の手に握られてるのだと感じた時の私は、非常に自分の身が心細く、又物足りなく、可愛想でなりませんでした。紅、白粉に親んで少しでも美しく見せたいとあせるのは何のため？……と、こんなこと思ひますともう美しい着物もいらなければ、御園の瓶もなげすてたくなります。今日吳服屋がきました、いつもならうるさく母樣にねだつて何か買つていたゞくのに、見むきもしない今日の樣子、母樣は何か御氣がついたでせうか、思ひなしか、近頃母樣の御目が次第にひつこむやうに覺えます。私が正さんの手紙ひきさいたことも、どうしてか御存じでございますの、でも、まさか私の心を御存じじやないと信じて居ります。だつて、何事も打あけた妙さんにさへ、今の眞情は秘めて、感情を僞つて何氣ない風を裝つて居るのでございますもの。

有明の燈火あはれに、私は耐へられないでとう〳〵泣きました、

あゝ自由！女は何事も服從しなければならないのでせうか。

どうも本當のうたがひでは無いらしい、事實なやむなら情迫り意ちゞみて文おのづから激流奔湍の勢を示さねばならぬと思ふ、如何。（評）

○臼ひき

三の宮　美保子

彌生六日、朝起きると細い〳〵霧雨が降つてゐる、一寸手にうけてみると濡るかどうかわからんやうな細雨である。空は一點の村雲もなくスツーと丁度すり硝子を幾枚も重ねたやう、例の如く店から二階から掃除する便所も上下淸めて手水鉢の水をかへ手拭もしかへる、御飯濟て髮結んだら十時、お母樣の長襦袢縫ふ。晝からいつもの床屋へ顏そりに行く、誰も來て居らぬから嬉しいすぐそつて吳れる。一人五十の坂を越したと思はれる人が來られ髮を切下げにして吳れと言つてゐられる。「まだこんな黑い髮を惜しいですネ」と床屋はじつと見てゐる。「イーエ其方がスツパリ宜しい」と淋しく笑つてゐられる。人生の花たる乙女盛りの私とあの人とのコントラスト、床屋の人はどう思ふだらうと妙な事を考へる、歸ると○○のお叔母さんが手紙を書いて下さいと來てゐられる、言はれるやうに書きこれで宜しいですかと「餘寒漸く去りて梅花匂ふやよひの春とは相成申候處」と私の聲はすんで天井の一角にひびきて申し候ところと繰り返す、中ばまでよんで行くとまるで夢心地になつてスラ〳〵と水の流るゝ如く讀み續けた、「どうも有難う存じました、それで宜しう御座います」いふ聲にハツと我にかへつて何を書いてゐたかサツパリ分らなかつた。晩お母さん私御飯たきますといつてあづきよましてあづき御飯たく、珍らしくおかずは猪のすき燒香の物は奈良漬、夕飯後臼を親類から借りて來る、二階に上げるのが重いので西洋室へ花莚しいて母樣と二人襷がけに手拭をかぶつて差し向ひでひく、ゴーロ〳〵と平和なひゞきと一緒に白い粉がサラリ〳〵と四方へ落ちる、なん共言はれん平和な心になつて夢のやうに無意識に手を動かしてゐた、そこへ親類のお叔父さんがいらしつて「オヤ〳〵こりやどうもすてきだネいやはやどうも西洋室で臼ひきとは、寫眞寫したらどうですハヽヽ」と傍の椅子に腰かけてお笑ひになる、皆一度にふき出した、でもかうして苦しい目したら明日は美味しいお團子がたべられると思つて樂しんで寢る、橫になつたと思つたら早美さんは寢てゐるとお母さんに言はれる寢つかれんといふ人おかしいワといつてゐた私も空想に枝が咲き葉が出來て久しく目をパチ〳〵さして、一時の聲を聞くのも度々た、あゝ私もおとなになつたのか……。

座敷で石臼はちと、お茶を挽くなら何んだけれど。（評）

○彌生日記

楓坂　かつらの華

春の朝は寢ごころが好い、七時より早く起きた事のない私がけさは珍らしく六時半に目が覺めた、座敷ではまだ誰も起きない。オ、さうだ、

昨晩から奥の旦那様が週番なのでこちらの旦那様は奥へおとまりになつたのだつた。御病人もよくやすんでいらつしやる、また椽の雨戸も明かないで、枕元の五分心が明るくまたゝいて居る、臺所から葱の實らしい味噌汁の香がたゞようて來る。惜しい様な氣がするけれど思ひ切つて飛び起きて着物を着替へて居ると、松子さんが目をパチパチしていらつしやる、「松子さん」て呼んで見るとニツコリして首を引込めて仕舞つた。眞先に玄關の戸を明けて夜中ポストを探ると堀部さんから繪葉書が來て居た。オヽ、文子様！月に一度のお便りを決してかゝさず下さる其お志がうれしい。堀部さんと云ふと過ぐる年の夏の夜を蚊帳の中に悶へつゝ此世を去られたあの頰首の尖がつた御良人のお顏がすぐ目に浮ぶ、腸チフス、あゝ何と云ふ忌はしい病氣でせう、去年私が附いて亡くなられた患者のうちに三人まで其名を見出ださうとは。思へば私の職務もつく〲厭になつて仕舞ふ。

八時半頃御兄妹とも學校へいらつしやる、間もなく女中もお藥取りに出掛けたので家の中はひつそりしてしまつた。御病人は別にお變りもない、たゞ始終背中が痛い、背中がいたいと許り繰かへしていらつしやる、斯うやつて始終さすつて居るのだけど知覺がたかぶつて居るから、ちつとも感じないんだもの、本當に聞いてるのが辛い、もう〱決して看護婦なんかになるものぢやない、はやく止めて處女らしい生活をいたしませう。障子に日が射して來て丸寢して居る猫の影がはつきりうつる、オいゝお天氣になつた、女中が居ないので奥さんが御飯炊いていらつしやる、出來上つても未だ歸つて來ない。食前のお藥が來ないからお先に御飯をいたゞく。けふは初午ださうで赤の御飯にお菜のからしあへがそへてある、辛しの香りが得も云はれず懷しい、七年前のけふは實に樂しい日であつた、今でも笠間のお稻荷様は一昔に變らず賑やかな事だらう、彼のそゝられる様なはやしの音に小さい胸ををどらせて、仲よい友と晴着の袂を連ねてお社に急いだこともあつた。笠間を去つてからは絕えて此日を思ひ出した事はなかつたが、今日計らずもよその家に病める人をみとるべく雇はれて來て、かうした懷しい思出の種に接した、此のお膳にお强飯はないけど、お煮しめはないけど、只この一品は奥さんの誠心こめた御馳走として、何より嬉しかつた。午後奥さんは雛祭の豆煎をいつていらつしやる、三時頃松子さんが御歸りになつて、何か思ひ出して笑つていらつしやる、何あにと聞くと、けふ唱歌の試驗の時ね、後の方が震へて机をガタ〱させたの、それを今思ひ出して可笑しくつてつい笑つて仕舞つたのつて、無邪氣な方ね。

四時頃坂田先生御來診、又車夫が代つた、夜は皆さんと豆煎を食べ乍らいろ〱のお話をした。(三月一日)

派出看護婦の生活を見よ。(評)

○實家にて

松本紅子

三月三日、長髮くる〱とくし卷にして表へ出た。

一月に及ぶいたつきにおとろへし身はともすればたふれさう。わづか十戸の小村故靜かに一まはりして歸つた時、くやし涙と悲し涙が一時にわいて、吁何たる寂れ方であらう、三十年前母が此地へ嫁いだ頃は、しげれるケミの木にかこまれた青垣高く門がまへりゝしき十戸の家、町を通て來た母の目にさへ美くしさと奥ゆかしさにおどろいたと云ふ、吁今其おもかげがどこにある。私がもの心付いた二三年前其頃の姿が吁今……。ケミの木は皆きられて田となつてしまつた、落ちたかべ、風にとばされた屋根板、せり賣りせられて半分殘れる家など、吁其中に住める人の心も昔のまゝであらうか。

夜三日の月の沈んだ田道をさまようた。雨の夜と暗の夜とが一番好きですのと云たら、かはり者、僕は月夜が好きだと笑た君、吁其君が我終生を共にすべき、新らしい涙がわいた。

六日、たゞの體でないと知て心ます〱暗くげきしやすき性はいよいよげきしやすく、かんじやすき性はいよいよかんじやすくなつた。

夕方西國の友から手紙が來た。不治の病に泣く私よりあなたの方が餘程しあはせだとある、いつ迄もいつ迄も力になりませで、なつて下さいともあつた、えゝきつとなりますよ、いくら御顏は知らないで、遠くはなれて居たとて。

ならうなら此友の心が我嫁げる××村の人に少し一寸でよいからあつ

てほしい、こびを喜び美衣を喜べる人程哀れにさもしいものはないもの。

弟から××樣が心ならずも○○の罪をおかして廿日たゞ卒業と云ふ今日退學された話しをきく、御氣の毒にたへぬ、けれどたとへ心ならずせしとて、罪は罪惡は惡である、君もそれを知りいたく、くい、自殺し樣としてとげられず、東の都へ行きしと聞く、きづかはれるのは前途である。

七日、義妹から、早く歸て下さいと手紙が來た、「いつ迄もをると己が迎へに行くぞ」と笑はれた、義祖父を思ふ。歸らねばなるまい病はまだなほらねどと思ふと又胸が痛む、我に美衣がないと笑つた人、どうかして私の短所をとさがせると云ふ人、自分を誇らんために、私の實家の家が古いとのゝしつた人、それ等の人は近くに住めど、靜かな千鳥なく地、水美くしく山高き地、歸りませう、つらけれど、其地に生を終ふべく生れ出でし我運命ですもの。

新婚を呪へるもの前に神保千代野、夢の女有り、今又君を加ふ、必しもイチヤツイテル者ばかりではないやうだ、さればとてタイラントぢやなし、結婚愚劣令を布きて、結婚したものは剃るといふわけにもいかない。(評)

○彌生の二日

麻布　百合香

四日。雛のさゝやきも聞ゆる樣なとは、今日の樣な、靜かな春の宵を云ふのであらう。更けしにはあらねど、四邊、寂として音もなく、打並ぶ燭臺の火の幽かに風にゆれる。

自分の高髷の影が、大きく襖に映る。一人、お雛壇を見守つて居たら、また、私の生れない廿餘年の昔、家が、全燒になつて、舊藩士家より給はつた、二間床に所狹き迄飾られた、善美盡した雛道具一切は無論、先祖傳來の、家寶財産一も殘らず、曉の灰燼と化したのは、丁度けふ、お節句の翌日と、きいて居た事を思ひ出した。定まれる運命か?。否、もてあそばれる運命だ。過去は夢々。

夕ぐれの雲の行方を見つめたら、我れにもあらで、熱い涙がはゝを傳ふた。

憧憬多き、過去の樂しい追想にばかり耽つて。

色華やかな、巾廣のリボンを喜んだり、念入りに化粧して、多少美化した我が姿に滿足し、高髷に結んで、男女の別なく道行く人に、見られては恥かしさに、紅染めても、限りない處女てふ青春の誇によふたのも、たゞ昨日の樣な氣がするけれど、追ひて捕へられぬ過去の時よ。今は其樣な事喜ぶ程單純な無心な私ぢあない。

五日。長閑な春の日、若草は日毎に萌え出でゝ、名もなき草の芽でも、活々したのを見ると、偲しい心持になつて、愛らしい懷かしさを想ふ。自分の血緣の人々の高き身分重き地位名譽を思ひ、母よりうけた此の全身を流れる血潮を顧みては叫、なかつた。ちういい氏なく、教育なく、身寄りない女だつたら、こんな考もへ起らずに平氣で、意義なき生活を續けて居たであらう。又、死にたい時は、人に憚りもなく、自由に死なれたでもあらうに。

生意氣な女になつたかも知れないが、今は「人生の意義」を、哲學的眞理の一部分でも、聞きたい知りたいと思ふ。

よしある人の子のなげきらしい。けれど、君に曰ふ、衰へたる名家はひとり君の家ばかりではない、一門富貴に誇れる中に一人陋巷に窮居する人も他にある、神は自ら助くる者を助くといはずや、昔をおもうたとて何にならう、況んや百年の苦樂他人による女人をや(評)

○鼠狩

越後　布　久

先に寢よと仰有つたので失禮する、むつかる子をすかしながらいつか眠つて終つた。と、ばたぐゝやかましき物音に目が覺めて見れば、夫は、三疊の間で死に物狂へにさわぐ鼠を追ひ廻つていらした。

が、「オイ早く此棒で打て」と丸太の棒を渡しなすつた、取り上げ打たんとすれど、あゝ手が妙に顫へて、何だい早くよと急き立てられ、再び振り上げたが矢張ふるへてならない早くといふのにと私の手から引つたく

様に取つてパツチリ御打ちなすつた一打ちに、チーと鼠は其處へ倒れあゝ死にましたかと、今更の樣氣の毒になつてきた、常にはにくき〳〵鼠とは思つて居るが大きい死んだのを見たら、是とても可愛い子持つたらうに今頃泣き〳〵親を探ね居る子鼠があるだらうにと急に胸まり爺はろりとした
おくさんは其時はたかではなかつたか知らん。（評）

○猫征伐

藤井　明の星

（三日）宿の黒（猫）が私の箱をあけてるすの間にすつかりまんぢゆうを平げてしまつた、私はムツとした、されど人のかひ猫なれば如何する事も出來ず、其場をすました十時頃宿の兄樣も姉樣も外出後で黒征伐「黒コイ〳〵」と呼ぶと又御馳走に會ふのかと思つて私の室へとんで入る、ピツシヨリ戸をしめて竹でぶつてやりました黒は苦しがつてあつちの隅でニヤグ〳〵こつちの隅へかけつきニヤン〳〵手もだるくなつたもう止さう、やつと胸の虫やすむ（四日）石橋寺よりはがきが來たなんだ此十一日が貞さんの里歸りか、ふと私は言ひ知れぬ悲しさと寂しさに打たれた去年までは姉妹となのつて親しく語り合つたにあゝもう此度顔を見合せたつて今までの樣な空想は描かれまい、例ひ私から描き始めたつて貞さんは相手になつても下さるまいこんな事繰返すと心は猶々縮み過去現在未來かきむしりたい程胸に浮び苦しくなり急に泣きたくなつて人ない室にかけ入つた。

猫征伐には男振りんりんたる方が、友の結婚にはふさぎかへるところ、欺かざる感情を見る。（評）



給仕女　　淺草橋　ひなげし

○伯耆野より

伯耆　新田文字

彌生の月にいつたせいか、何處を見ても春らしい香がする。家の畑の、半分朽ちた梅の木に、五つ六つ花が此間まで咲いて居たが、今日見れば、皆んな散つて終つてゐる。

二階へ上つて、西窓の障子を、開けはなつた。眞白い峰の、伯耆大山が、朝の光線にまばゆい樣に、輝いて居る。續いて上蛭山、下蛭山皆氣高く聳えて、此の山陰の伯耆野を、護とまもつて居る。

昨日、お隣りのお春さんに習つた、お金入れを、赤い絹レースで、編

み始めた。窓からさす暖い光線が、背にあたつて、羽織が脱ぎたかつた。午後の四時頃、編み終つた。上出來ぢやないけれど、何となく、うれしさが、胸に滿々と漂ふ。

今日の暖かさに晩方伯耆大山を見ると、峰の雪が淡くなつて居る。誰れかの、春あさき、伯耆の國の夕ぐれの光りに消ゆる大山の雪。つていふのを思ひ出して、二度も三度もこゑ出して歌つた。（二日）

ひなたぼつこりの日

風はまだ寒いが、春の光りは何となく、暖さを想はせる。今日は、いよく久しぶりに羽織を脱いだ、そして、赤い模樣入の、メレンスの丸帶締めて、南側の椽で、日向ぼつこりした。

垣一重へだてた、小川の流れる音が、かすかに、かすかに、耳に傳はる。雪の降る寒い日から、此の春を樂しんで居だ。春になつたら、あの赤い大模樣の帶結んで……と、簞笥から幾度も出して見ては、母樣に笑はれたが、今日はあの希望が、叶つたのだ。水色地に、赤いバラの模樣が、柔かな光りに榮えて、若々しい處女つていふやうな誇りが、心に浮んで來る。吾れは、伯耆野に人となり、赤き帶する、うれしき子とはなりぬ。なんていふ、言葉が、口のさきに出てならなかつた。（四日）

おとづれありし日

障子にさす美くしい朝の日かげを、ぢつと見づめて居た。すると、母さんが打吹公園の名物なるお團子を持つて來て下さつた。二十歳になつても母樣は、子供の樣にして下さる……母樣の後姿見て、思はずホロリとした。

お午まへ、○○のKさんからお封書が參つた。

「今は嫁とる嫁とる世に、わたしや木陰で、シラミ取りです。」の、一節には淡い淋しみが含まれて居る。

奥さんを、お貰へつて、いくらお勸めしても要なんてうるさいです、獨りが氣樂で好いですよつて、いつもお言ひ遊ばすKさんも、時には、やつぱり孤獨が淋しいかしら……。

夕方、松村さんから、紫インキで小さく書いた葉書が着いた。食へば着れない、着れば食へない月俸十三圓の我が生活！いかに現實の苦痛を追ふ敎臭なき女と相成候かを、御推察被下度候。と末段に悲しくかいてある。あゝ、十三圓の月俸で、老いませる母を養ひたまふ、孝女松村さん。鐵石よりも堅い貴女の信念を益々尊重して、此の辛くて苦い現實と、極力戰ひ給へ……妾は慇懃返事を、出して置いた。（五日）

シラミ狩に同情するとは流石に山陰道の人だけある、旦那樣の無い人には私の方では花が咲くのだけれど。（評）

○けん嘩

愛媛　千鶴子

春雨のしとく降る日。夕方お仕事しまつて姉樣に送る花を手折つてこんと庭へ出て見ると、アラマア誰の仕業でせう紅の花はどこへ稍えたか影もない。「誰か誰か」とさけんで居ると兄樣お部屋でクスく笑つて居らつしやる、マア兄樣のお仕業だわ。一輪やつと咲いたばつかしだもの取られては大變すぐお室に入つて見ると、お机の花さしに、はさんでおられる「私いるのですからおゆづり下さい」つてお願しても「僕もいるから取つたのだよ千鶴さんより早く見つけたのだからナア」「アラマア私今朝見つけたのですよ」「僕昨日からだ」「アラうそおつしやい」「そんなにほしけりやあ、何かお禮りそしたらゆづつて上るよ」「いやだは誰が當つたりしてまで」つて手をさし出して見るとどく、取らうとすると、「なにする」つて力のありつたけ腕をたゝかれ、ひくはづみに花はぬけて落た、兄樣すかさず拾つてむしつてしまつた。アラくいたづらな人むしつてしまうのなら私に下さればよいに、くやしくつてく泣いた、母樣ききつけて「また大きな者が喧嘩かえもお二人ともよい年でおたしなみつておしかりなさる？、あまり悲しいので自分の室に入つて涙のありつたけ泣いた。

「涙の有りつたけ」少々お負けがあるでせう。尤一たらしの涙が出たけであとは無かつたといふなら格別。（評）

○鶯茶まく頌

信濃　ふもとの草

一日「三月になればもう、一日から陽氣が違ひますな」いつもは默つて許

も異る人數、こんなことを言つて去つた。
「少つとは快いか？」
「え、だけど目まひがして一とけた氷のやうにゆらゆらしてしやうがない。清々とした心持になりたい。植込の中を逍遙てみたけれど、晴れた空を仰いでみたけれど、だめだつた。
　夜お茶を入れながら實家の事伺ふ。
「ゆうべは御父樣も大變酔つていらしつたやうだつたよ、皆で捺押しや腕相撲をしてね」
　職人が來て居るので晩はお酒つけてやる、職人などにはおとつくりの口までこぼれる程入れとけば僅かなことで氣がいゝからとお母樣仰言つたが、これも處世術の一つと思ふ。
　三日、新宅からお白酒頂く。さうさうけふはお節句だつた。雛飾りはもつと暖かくなつてから四月にしやうと思つて居たから忘れた譯では無いけれど、けふの日をうつかりして居る程、私も大人びて了つた事とつくぐおもふ。實家の方では今頃大さわぎであらう、私を頭に七人の兄妹のお節句は賑やかだつた。紙へ胡粉を塗つていろどつた見ともない松本雛、けふの晴の日を、箱の底に埋めておくのも可愛さうでいつも四段目の隅の方　出してやつたつけが今年もやはり飾られたらうか桃も咲きさうなよい日和。丞(小僧)が咽が痛いといつてホーサン水で含嗽してごろごろさせながら歌の節にして居る呑氣な子だ。
　十二許りの女の子が豆蔵といふのを、後から母親らしいのがホーカイ節を流してゆく。××館で春びきを開始するとみえて盛裝(？)した工女が數組もとほる。
　少し寒くなつてきた。
　天氣が變りさう。
わざと豆いりして當菜まきの人達のお茶うけにする、午後から急に寒く雪がふつて來た、紛々霏々唯一瞬の間に風さへ加はつて凄然たる冬げしき。あゝ春やいづこに……。
　おのろけなぞを聞かされると、よくも惡くも罵倒したくなるけれど、山氣も擔當りもなき若い奥さんのつゝましやかに書いたのは氣もちよく讀める。（評）

○御留守

諏訪べに百合

　父樣や裕さんに言つても十三にもなつて弱蟲だなんて言はれる物だから私を起しに掛つた。さつきに目醒しが鳴つたぢやないか、姉樣ようお起きないやれ、枕元でどしどしやつてる。未早しえ、憚り行くの怖いもんでそんな聲して、姉樣目開いてるから行といでつて言つたら、それぢやよしえつてどしどし行つた、そいでも怖い物だから障子一ぱいに開け放し。一昨日母樣お立ちの時留守でむごいからやさしくおしよつて被仰つたの思ひだして可哀相になつた。歸つて來たから、美ちやんお天氣可い樣かいつて優しくきいたけれど返事もせずにぶんぶんして臺床へ行つて仕舞つた。六時起床、昨日の失敗に懲りたから念の爲お釜の蓋取て見て火をたく。昨日は前の晩水仕込んだ積りで火をたいてひどい目に逢た、一日中父樣と裕さんに冷かされ通し。名譽回復今日こそと一生懸命に御料理する、エプロンの仰々しさに御料理も比例すればいゝがなんて裕さん惡口言ふから今日はかけない。おろりのお釜の下へも火をたきつけて御みおつけする、赤々と燃えてる火を見ると何となく心丈夫な樣な氣がする、御ねぎむいてると御飯が煮こぼれる、御飯の方もちんちんぷんぷん言つてる、あつちをやつたりこつちをやつたり、おねぎも切りたいし、一掃きして雜巾もかけたいし、お香の物も出したいしどれを先きにしやうとまごまごする。お留守になつて母樣の有難さが知れる、東京朝日と信毎が來る、御座敷掃きかけてた裕さんとびだして來る、いつもならとりくらだけれどそこどこぢやない。朝食、今日は燒き米ぢやあるまいなつて父樣被仰る、御飯はいゝけど御汁は口が曲りさうだつて裕さん、其癖三杯もかへて、まあ、すつかり曲つたよつて言つてやつたら、うん、曲つたのが又曲〃返して元の樣になるんだつて。
　今日は音樂研究會の日、今日こそSさんと連彈の、合せて見やうと思つたけれどよしにする。父樣可いから行といでつて被仰るけれど何か御留守御見舞の御客樣でも見えさうな氣がしたからやめた。案の定、柳瀬の伯母樣を先頭に岸田のをば樣西谷の御婆樣丸吉のをば樣入れ替りく

いらした、誤期した者こんなに大ぜい、何たら日曜、一層けさ行けばよかつた、さうすれば今頃ピアノ彈いてるになんてずるい事考へて顏しかめる。でも伯母樣いらしてよかつた、伯母樣は今でも肩揚取つた私をまず坊〳〵つて呼んで下さる、たからつい甘へたくなる、どうやらかうやらお茶さし上げて御客樣おかへし申す。御はぎだけでも五重、櫻餅に五目の御飯に、日曜だからと思つて方々皆今日下すつたので仕末に困る。ふだんならさもしいけどもう少し喰べたいなあと思ふけど、こんなに困つて來ちや見るのも厭だ。皆も御はぎは眞平だつて言ふ、長くは置けない物だから弘さんにと御ぱちへとりわけて伯母樣にもつてつて頂く。美ちやんはサンデースクールへ裕さんは御湯へ、家の中が急にひつそりした。のび〳〵一人で六疊の御こたに當つてよみさしの春泥集開く。西窓から一杯にさし込む夕日に室の中のあらゆるものが柔かく黄にぼつかりと浮きたしてなつかしい。母樣今頃京の智恩院で御念佛して被居るだらう、靜樣にお逢ひなすつたらうか、廣い世界に只一人の伯母、姪、三十年ぶりお逢ひなさる御心はどうだらう、私には母方の只一人の從姉、京の靜樣、未見ぬ美しい人、樣々に思つて見た。あゝ春だなあとつく〴〵トン〳〵とのみ音がどこからかのどかに響く、

〳〵思つた。（三月五日日曜）

山田邦子さんのお知合である、キビ〳〵とした文章で心もちがいゝ、少し見ぬうちに上手になつたのはひとりこの君ばかりではない。

（評）

○一日かゝり

大阪　龍膽花

一日、雨の降り出した頃、香代さんと優美ちやんとの寫眞が出て來た。椅子に後向きに掛けて顏だけ伏目に地方を見返つて居る香代さんの澄まし樣、優美ちやんは亂菊の振袖重げに立つて居る。輕く傾しげた頭の横に結へた眞紅のリボンは、何だか眞黑の困りをくつ付けた樣。白にすればよかつたのに。「香代さんは御本人より美人ね」と云つたら、「姉樣だつて寫眞のまゝだと思つたら大きに間違ひよ」と、賞めたつもりが怒られた。

二日、まあ空の美しい事、いつもこんなのかしら、風があるのに浮き雲一つない眞のコバルト、私は今年になつて始めて空を見やうと思つて空を見た樣な氣がする。

三日、朝からお筆さんが來た。お筆さんは頤や顋すぢをそる人、宅のペーアに似て居るのでペーアと云ふニックネームを付けてある人。ペーアは犬の名、北極の白熊に似て居るのでかう呼ぶ樣になつたのでお筆さんは要するに熊に似た顏の女。

四日、吉田の叔母樣いらしつて美しい元祿人形を下さる。高さ一尺二三寸の四方ガラス張の箱にはいつて居る。緋縮緬に荒浪を白く染めぬいた裾模樣の二枚襲ね、黑地金通しの帶の上品さ。重ね草履をはいた左足を後にはねて、右手は輕く羽子板を上げた形、心持ちかしげた頰の靨かさ、頰に笑くぼが動いたらホヽヽとの聲が今にももれさう。

五日、不意に艶子樣から手紙が來た。卒業後今迄一度のお便もなかつた艶子樣から私の名を忘れて下さらなかつた御友情、其れは今息引き取つた人に殘る體溫のそれと同じではあるまいか。最早ことされて居るのですよ。私は死んだ人に再び蘇み歸れと希ふ程優しい心になつて見たい。

六日、床に入つてから、隣室にやすむ香代さんに、一月號の文壇を讀んで貰ふ。詩でも、歌でも、話しでも、自分に關係のない事をうつ〳〵眠りながら聞くのが何より樂しい。「詩ですよ、まつかな笑ひ」「まつかな笑ひぢやないの」「あゝさう〳〵」「それ代志子樣ので せう」「さう讀むんでせう。文章の章の字なの」「ぢやあ木村さんだわ」といふ中に眠くなつてしまつた。

七日、夕飯後香野樣のお嫁入りを見に行く。家の前には七八台の車が並んで大勢の人だかり。表二階が御支度部屋と見えスリガラスを透して、色んな女が代る〳〵に鏡臺をのぞいては頭に手をやるのがボンヤリうつる。花嫁君はお駕に召していらしつた。媒介や親なる人々さては提灯持つた男や若い女中等は目に入らなかつた。只駕の中に白裝束の美しい人が、小さくうつむいて居たとのみ。厚化粧の頰はどんな色だつたか、私はあひ憎く簾のたれた方に立つて居つた。

こんな口の惡い人が出て來ると大いにたのもしい。尤今はしといふ

大闇があるはあるんだけれど。皆を馬鹿にしおつてめつたに來ないから。（評）

○呂昇

神戸　栗原容子

いよ〳〵呂昇の番が來た、六間の金屛風を三つ廻らして前の方に鼠青なみ簾を下してあるそつとのぞくと青總の重げな見臺を可愛女の稚兒髷が二人して持つて來てすゑる、黒紋付の長い袖があちこちして赤い座蒲團がふつくりとおかれる湯呑茶碗に淡い湯氣がゆら〳〵と上る、しばしそれかと思ふ人が靜かにすわつた、奥の樂屋からもれてくるペン〳〵といふ音が止むと先の稚兒髷が三味線を持つて來て渡した、と奥の金屛の陰から「東西こゝもとお聽に達しまする淨瑠璃げたい……相つとめまする太夫豐竹呂昇……とすみ切つたいゝ聲でいふきく者は形を直した、大澤さんは痛いほど私の膝をついた。

しづかにみ簾がまきあがる、と「ほんまに若うおますな、「あれで四十過ぎなさうな」「廿歳としか見えんな」「あの毛のいゝ事や」などゝとりどり話してる、ほんとに若い地藏眉のやさしいのに、それにふさはしいきれいな眼つき鼻つき口元のえいはぬ愛嬌のある人だ皆うつとりとしてゐる、流石眼口屋の兄さんさへ。

外は春雨のどかにふり内はストーブもえて溫かく電燈華やかにまぶしく照りかゞやく人しづかに只呂昇の口よりもれてくるお園の聲に淚ながしてうつとりとなる太く長いろふそくの火影見臺の兩方にひらめいて黒の着付けに青色の肩衣はえて美しい顏は聲と共に一しほうるはしい、半七の遺書よ　あたりはほんとによかつた私は呂昇とは思はなかつた、美しいお園が淚を堪へて泣き聲をのみながらなつかしい者のつれない遺書をよんでゐるやうであつた其未來で夫婦になるといふ處に至つてお園の喜ぶ處父親のせめて現世に一夜なりと添はせ度いといふ處其表情其聲音眞にせまつてゐた。

ほうとしてきいてゐるとをしい處で拍子木の音み簾はする〳〵と下つた、美はしい人は夢まぼろしの如く消えた、ろふそくも消された。

食ひちらした皮や袋の始末しながら皆んなの批評をきいたみんなほめてゐた、「ほんまにいゝ聲や」「いゝ女や」一圓が二圓かて高うおまへんな」などゝいふ中をすりぬけ〳〵下足場にくると押すな〳〵の大さわぎ大澤さんが「いの十番」「との卅番」などゝいつてる道々二人に後れながら呂昇の姿を目にゑがいてはほほゑまずにゐられなかつた。

先さにいつた兄さんと大澤さんは、さめたやうな聲で共に「詠めし月影も……光もいつか浮雲に隔てられつゝ野も山も風蕭々と腥き新戰場は朧夜の春とはいへど尙さむし」と合唱しながらゆく、家に近くなつた頃十一時を聞いた明日は淨瑠璃本を見やうと考へながらいそいだ。

二間切りの室、十枚に足らぬ戶、何圓の家賃か知らないが　それでゐて二圓出して呂昇を聽くとはぜいたくならずや、ハスベンド又の名兄さんなる人、風蕭々どころぢやあるまい。（評）

○一週間

土佐　はざくら

八時半起床。寢坊しましてといふのが辛らかつた。今日は父の祝で、だれもかれも早朝から上を下へ騷いでゐる。私は重たい頭を抱へて、離室にこもつた。

八十餘名の客は華かにうたつて醉うて歸つたが、尙あとに居殘つた十幾人の隱藝は前にもまして賑である。燈火輝く宴の席に、頸ふつて眼を閉ぢ或はみひらき、悲しげに語る人達の淨るり、いづれも吾淚を誘はぬのは一つとしてない、私は生きたくない、闇に消えたらと思ふけれど、それも出來ぬ。生は母に與へられたのだ、苦しうても私は母の爲に生き樣、けれど母よりは一足先に死なねばならぬさだめである。それまでは何を仕樣、何を慰安に世を過さう、私には才がない。哨く歎いても文にも詩にも生きられない。學問でもあつたなら、斯うまでなげかずに苦しまずに明るい道を尋ね出すことも出來樣ものを。いつまでも暗い灰色の壁と壁の間に立つて苦むのだ。今夜もさんざめく華かな席から、三味線につれたあはれな聲が耳からはなれぬ。面白く騷げる人よ、若い女の暗い歎に泣くにはふさはしからぬ夜よ。大きな鍊塀を築き上げ樣、後振返

つても、ふりかへつても、新しい足跡のみ認めて行から。(三月二日)

夕方野をさまよふ、菜種の花をむしつて唇にあてゝ見た、やはり涙を誘ふ種である。淋い麥生に交れる黄花は　私にふさはしい場所ではあるまいか。人には塵芥の如くに取扱はれて、あらゆる侮辱も與へられた。さめて見ればかへつて某人達をあはれに思ふ。生きた半生の聖さを思へば瞑目して行かう、たれにも頼らうとは思はない。夜風が烈しうふく。灯明るい座しきでは手を叩いて唄ひ騒いでゐる。寂しいけれど皆と一緒に談すのはいやだ。(三月三日)

此頃毎日の寢坊。ぼけが蕾を破つた。机なしで座敷いつぱいになつて、手紙かく。横濱のくま様から、先の日産着のお禮状が來た。旦那様は私の名の重飯(しげい)をぢうはんと云ふさうな。『阿方のあんな手紙も隨分久しいものよ、もう大抵ならさとりを開いてもいゝ頃ですわさめなすつては——』ともある。母様桃の枝切つて來て下さる、手に取たまゝに美しう色よう咲いた花の命の短いのを思ふ、あゝ私はもう泣くのぢやなかつたのに……燕が鳴いてゐる。(五日)

大雨。風さへ添うて浪が高い。一日暗い障子のかげに身を横たへた。矢張頭痛がやまぬ。あゝ捨てられて二度嫁ぐ女と、止むを得ず自ら捨てて一生を獨りで行く女と、人はいづれを笑うであらう、いづれを媚婦と名づくるであらう。(六日)

昨日の大雨はあとなく晴れて、曉の星淸うまたゝいてゐる。雨に散つた木の花が、土にたゝかれて痛ましい一片拾ひ上げたが、身悚して捨ててしまつた。近頃初めて針持つた。晝前迄にひぢつき一つ縫ふ。白の方がまるでお飾い様だと皆が手からはなさない。奈良の德子様からお手紙が來た。もうくきつくく云はずに面白う暮すとある。重い頭をうつぶせにして、疊の上で人に手紙書く。すぐ投函した。もう日暮であつたけれど、さつきのひぢつきを包んで明日出して貰ふ樣に學校の子に賴んだ。(三月七日)

これも醉者のいはゆる学理のたぐひである、安價な涙でないことはほゞ想像もつくが、さりとて癡疾でもあることか、旦那様ゃおはすのに、母さんに先だゝねばならぬと言ふのがたわいもなく聞える、どんな美人でも人間は失戀で痰といつたところで腹がへると飯をくはねばならぬのだから、お互に煩悶は西の海へさらりと投げてしまはうぢやありませんか。(評)

○わび住ひ

長岡花ゆき

ほんとうに春になつたやうな心地がする、茶色に堅い蕾が鈴なりについて居る桐の枝にふくれた雀が三羽程鳴いて居た、御飯が早くすんだので妹と二人で雪消しをする、砕いて大きなかたまりにして幾つとなく重ねて置く、道へ敷いたこもから陽炎が立つ。(ついたち)

才蔵の言ひ草だ、昨日と今日は大違ひ、冷い雨が眞つ白な積雪に音もなく注いで居る、新家へわざわざ鐙ちゃんをむかへに行つてつれて來たけれど寂しいもんだから「かアーちやへ行かうく」つて居なかつた。午後カシミヤの座蒲團縫ふお手傳をする、母様より私の方が早い、何となし嬉しかつた。

夜、馬場の主婦さん木綿のたて縞を持つて來て綿入にして下さいと賴まれたので早速へら付けをしてやる、お茶など入れて世間話をする、其中に質置き話が出て母様も私もびつくりした。(ふつか)

昨日の夕方は霰が降つた、今日は大びらな雪が降り出した、嫁ぎた冬が來た、ふる雪を眺めて居るうちにいつしか薄暗くなつて來た、父ましまさぬ寂しき家、涙ぐまれずには居られない。つと立つて例の通り佛前へお燈明を捧げた、新しき金泥の位はい。

夜は空氣ランプのもとに元祿袖の袷縫ふ。

今日は補佐村普光寺に押合がある夜。

雨垂れの音(三日)

今日も未だ寒い、私と母様の足袋洗ふ、お湯に指先がひやけて軟かくなつた、四季の花ぬつてみた、無神經のやうにガラス窓から外をみつめて居た。○○様いらしつて下さる、美しい高島田に結つて、お懐かしかつたわ、春季の同窓會には是非參りませうとお約束をする。百合ちやんの緋綸子の袖丈をつめる。(四日)

和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　宮城縣　齋藤靜子

若き日に戀する事と春の花咲く悲みと相似たるかな

○（地賞）　東京　赤蜻蛉

髮とけば花いでぬしほたれて悲しき事の思ひ出のごと

○（地賞）　備前　佐久間みどり子

菜の花の香れる中に消えゆきぬたはれ男どもに似る胡蝶かな

○（地賞）　小田原　中村貞子

獨身は涙打ちぎはをさまよへる夕の如き悲みのわく

○（人賞）　淡路　加藤菊子

海ぞひのぬかるみ道に花ちりて薄き日さすを踏めばさびしも

○（人賞）　名古屋　加藤胡蝶子

若き身の甘き愁に堪へずして家を出づれば路に花ちる

○（人賞）　淡島　宗原美津子

うつろなる胸を抱きてさまよへば晴れたる野邊の土の香もよし

佳作

○　淺草　藤井はつ子

しろがねの鈴の如にみ言葉はいと美しく我にひゞきぬ

○　名古屋　畑ひろ子

うしろより袂を取れる如くにも人驚かし春の風吹く

○　神奈川　中村美穗子

夕ぐれにかなしく花の散ぼへば出でゝ町ゆく美しき君

○　金澤　山梔子

淋しさに柱によりて我が泣けば空も悲しく泣て雨ふる

○　高輪　島村つゆ子

君とわが涙に咲きし花かともなつかしみ見る別路の草

○　大阪　みどり

懷しき君見ぬ日より花なりし庭の如くに淋しくなりぬ

○　福井　明星

灯火は摘みてし花のしほれたる影を照せり惱ましき哉

○　廣島縣　後藤壽美枝

をさな子と動物園の大象に麪包のはしなど投る春の日

○　栃木　高松たへ

世に拗ねて人に忌る丶我なれど暗き心に泣く日ある哉

○　あはゆき

君見ば白き花にもならましと思へるものを頬の染る哉

○　同人

問まほし切し鎖を泣る子か展べし翼をよろこべる子か

○　岡山市　立岡房之

黄と白き胡蝶もつれてとけし時わが愁さへ明くなりぬ

○　愛知縣　榊原けい子

三五人誰やら裏の竹垣に竹笛をふく朧月かな

○　長野縣　柳田千鶴子

活ける世につながれながら漂ひぬ我や渚の棚なし小舟

○　大阪　田野しか子

美しく垣根の椿咲きそめて親の日はきぬ三月はきぬ

○　佐賀　磯百合

快よき夢よりさめし若き子の胸にも似たる初夏の空

○　大分縣　小屋加根子

にぎはしき人の群より捨られし心地に淋し五月雨の家

○　京都　要司村福子

死と戀といづれ安きと菜の花の香れる野邊を見つ歎ぬ

○　熊本縣　富野美惠子

朧夜や櫻の花に歩むかと少しへだて丶君を見しかな

○　富山縣　にひしほ

しろがねに息せし如き曇りをば空にたゝへて春の雨降

○　茨城縣　今泉磯千鳥

我ならぬをちかた人に通てふ男の履を釘付けてまし

○　同人

みやび男がわれを思へる魂かわが家にしげく入來る燕

○　羽前　木村松風

わが庭の南天の實をゆるがしてほのかに暮る空を眺ぬ

○　石川縣　山田松子

たをやめは淸し美しよき衣をあまたあたへよ淸し美し

○　能登　且田淸瀨子

大地より火を吐く如うづまきて煙這ふなり山の湯の谷

○　茨城縣　田村かね子

身にしめて思ふとすれば我の胸洞となりて嘲りの涌く

○　京都　三宅壽賀子

春の日の明き光ゆるやかにものぐるほしき胸に溶入る

○　東京府　岡野よね子

物の香に夢みてありぬ若き日は源氏に似たる人を思て

○　信濃　百瀨わか子

あな寂し春日の宮の燈籠の一つづつ消る春のあけぼの

○　神戸市　綠髮子

我いつかかのやさ人と逢にけり復の日長く歎かんが爲

○ 北海道 上原ちよ子

目よなとて紅玉ほのほ血の雫唇などの色を好むや

○ 和泉 金田露花子

溫かき親になづかずつよげなる男をてふる悲しき心

○ 京都 國廣櫻子

きさらぎは草の芽青く萠え初めて悲き事を思はする哉

○ 藻の花

西の空あかるきに似る喜びに笑む人にくし若はにくし

○ 長崎市 永井圭子

春雨やわが師の家の軒端には青く銹びたる銅鐸を掛く

○ 磐城 長谷川東子

幾千本花咲く中に立ち並ぶひと木の若葉美しきかな

○ 金澤 山梶子

くれなゐの花の木立にふりつもる三月の日の雪のうつくし

○ 大阪 横田絣子

春の夜のふけて靜に聞ゆるは花を催ほす雨の音かも

○ 宮城縣 波瀬河紫葉

しら玉の君にしつれればわれは又匂ふ絹もて包まんとする

○ 神戸 島谷弁子

何やらむ物想ひつゝ處女子の月さす壁に倚りそひてゆく

○ 高輪 島村つゆ子

山の町ならぶ家居は早寢して物の音もなし軒に月てる

○ 千葉 伊藤美渓子

美しきつばさひろげてわが胸を蔽ひにけりな幻の鳥

○ 石川縣 哲女

相笑みし人もなげきをかたらひし人もかたへにあらぬ日となる

○ 越後 田巻てい子

打ち興じ友の語らふかたはらに一人草とる淋しき日かな

○ 後藤壽美枝

ま白なる花はら〳〵とちるまゝにさびしき如く涙するわれ

○ 赤上とよき

ぶなの木の梢に朝の時雨して旅路いとよき日にもあるかな

○ 同人

昨日まで今日まで飽かぬ人ながら明日は海行く漂泊人は

○ 美作 水田邦子

をとめ子が歌うたひつゝ菫つむ空にひばりも歌うたひつゝ

○ 栃木 高松たへ

聖き神の御ひざにすがり生くる我いつはり多き胸の苦しさ

○ 岩見澤 清川ゆき子

落つる日の山邊の雪に輝けば涙こぼれぬ此頃の雪

○ 秋田縣 佐々木貞子

見ねば戀し見ればなつかしさりとても訪ひて行くべき我ならぬかな

○ 鳥取 はる子

鐘なりぬさらば別れん否しばし鐘つきはてて音の消えんまで

○ 備前 松本雅子

老木にもわかき日のきて青柳の枝なびきつつ霞む春かな

○ 芝 東野歌子

なほ君の見返りやせむ直ちにははなれ難かり花の下かげ

○ 信濃 紅百合

うなだれて夜の道行けば木がらしのかちどきあげて我れを追ひ來る

○ 長岡 秋月すゞ子

明るしと我は思へど小暗しと教へたまへり母の御なさけ

和歌

○　　伊豆　海の少女

冷めたきは君が心か野に咲ける水仙に這ふ薄き入日か

○　　同　人

大いなる水盤のごと湖に夕燒雲の紅くうつれる

○　　同　人

春は來ぬ石の下なる草の芽の萌ゆるにも似て心をどりぬ

○　　近江　さゝれ石

あかなくに春の野はやく日は暮れぬ別れの惜しや花と小鳥に

○　　越後　文枝

わづかなるきずに薄ききぬ巻きていたはる程の戀なりしかな

○　　伊豆　土屋いそ子

苦しみを脱がるゝすべもよそにしてたゞ泣ける身の愚かなるかな

○　　大分縣　小屋露子

遠山はまだ白雪をのこせども野に雲雀なき菜の花のさく

○　　岡山市　石井明子

鶯の聲ははるかにしつれども姿をば見ず春くれてゆく

○　　兵庫　紅雀女

君住むと聞く國遠く海越えて霞む日はよし薄紫に

○　　同　人

二寸程いびし牡丹の紅き芽に小雨晴れつつ陽炎のもゆ

○　　麹町　藥がくれ

やがて來むさびしさなどはおもはずて君と別れきあはれなる人

○　　牛込　平塚白百合

こほろぎやふるき林檎のにほひする市場の後の月明にして

○　　岡山市　洋月子

ゆくりなく戀しき君をゆめに見て若き血汐のをどるわが胸

○　　淡島　岸浦文江

偽りの涙する人今日もまたわが心をば誘はんとする

○　　淡島　田山清子

何となく友にうとまれ歸り來て亂れし胸に春雨をきく

○　　下谷　島貞子

野の道に誰がおくつきぞ苔青く石をつゝみてあはれなるかな

○　　土佐　石川桂花

戀しくも君が御跡をしたへるに見返りもせぬ心うらめし

○　　淡路　靜田里

美くしき胡蝶きたりて舞ふときはむかし忘れし人も戀しき

○　　淡路　柏木こはる

冬枯の野中に一人うなだれて冷えたる石に世を涙する

○　　淡路　留子

わが家の窓さしのぞく紅椿落ちて音しぬ春の夕暮

○　　山川しがらみ

甘き乳と母の情に幼兒の育つがごとく春の木の萌ゆ

○　　鳥取　櫻草

誇りかに小箱を開けて覗くかな青き紫くれなゐのきれ

○　　長崎市　永井主子

春の雨鐘の音まじり戸に降りぬ旅の疲れの心地よきかな

○　　足利　きしの柳

君來ませ來まさむ路は紫にかすみたなびきすみれ花咲く

○　　千葉縣　松崎きよ

君が髮櫻のかをりいとよくもつゝまれてきぬ公園の奥

○　　越後　貞子

この七日君を思ひて亂れがみかき上げんとも我はせざりき

○　　名古屋　瀧本逸子

軒つたふ雫の音に心までしめり勝なる五月雨の空

○　　岡山市　田上もゝむら子

大なる蝶のもつるる姿して春の海をば雲ちぎれゆく

○　　寄川幸子

捨て得ぬを悶えつゝなほ捨てられぬ甘き愁を時によろこぶ

○　　同　人

なげきつる涙しづまれば夕映に雲もこゝろも一しきり燃ゆ

○　　日本橋　松岡千代子

まよひつる心の闇にいさゝかの燈影見出でぬ君を得したため
○　京都市　平井千代子

黄昏の都の空を流れゆく煙は濁る我が胸のごと
○　大阪　田野靜子

君おます空はほのかに見ゆれども心くもらぬ春の夕ぐれ
○　仙臺　橋元清子

君まさぬ春とも知らず鶯は荒れたる庭の花に來て鳴く
○　空とぶ鳥

淋しさの増すばかりなる少女子を君は哀れと思さざるらん
○　茨城縣　來栖花都子

若菜つむ少女の群の素足してかへりしあとにたんぽゝの咲く
○　丹波　野菊女

眼とづれば死の近づける音としも靜かに響くわが胸の脈
○　熊本縣　天村美子

朝明やよき香つゝめる薄霧の晴れて朝日の清く昇りぬ
○　備前　板崎好枝

途に散る只ひとひらの文がらも捨てつる人の心ねたまし
○　近江　丘の人

雲雀なく堅する方ををさな子も打見上げつゝ高く歌ひぬ
⊙　大和　千里

思ふ事なくて我身は夢のごと君が心にすがりつるかな
⊙　同人

春雨の雫かなしき此ゆふべ瓶なる花の一つこぼれぬ
⊙　神奈川縣　木村浜花子

何となくやつれ初めたる心地しぬ苦しとまでは知らぬ身なれど
○　下谷　東保美佐枝

夕さればよき黒髪の香ひする京の四條のなつかしきかな
○　草霽蛋

君ゆゑに笑むことを知り君ゆゑになげきをも知る少女となりぬ
○　すもゝの花

山椿ほろほろこぼれ淺間野はさ月となりぬ火の山のもと
○　松本すみれ子

靜やかに歩む少女のうす黒き髪の飾に月の輝く
○　茨城縣　本橋梢子

消えのこる高嶺の雪に横雲の赤くなびける春のあけぼの
○　大連市　甲斐操

花芙蓉ひらけし面ざしと稚子にはゝ笑むわかき母かな
○　内海千鳥子

ふと出でゝ霧島山の雪をみし朝の心の清かりしかな
○　大連　磯なれ松

夏は色のなべて濃きこそうれしけれわが手の花は臙脂紫
○　大阪市　吉田うすひ

花咲けど花は散れどもふたゝびと君を見がたきさびしさに泣く
○　信濃　白菊女

夕暗に消えゆく友のうしろ影眺めて泣きぬ病院の窓
○　信濃　ひなげし女

或人は世をはかなみぬ或人は浮かれてありぬ春の夕ぐれ
○　能登　哲子

夏の野に何をまどふやひなつばめわが黒髪に羽すりて行く
○　能登　さとし

初夏の青める池の朝かげにしだれて咲けるむらさきの藤
○　能登　あかつき

合歡の花十五六とも見ゆる子の紅き帶する心地して咲く
⊙　うき雲

あなあやふし黒き布もて封ぜばや少女がもてる桃色の玉
○　府下　戸張菊野

そよ風に白玉椿さゆらぎぬ春の香うすく夜を流れて
○　信濃　吉澤辰美

家根板の風に飛ぶをば見送りてわがおちぶれし親を歎きぬ
○　名古屋　登貴靜子

かなしげに我が胸かろく波立ちぬ結ひたる髪もゆるぎそめにし
○　麹町　牧野嵐水子

君を待つ窓に眺むる紅薔薇のとりとめもなくちるが淋しき　鳥取　櫻草

○

垂乳根よ稚子にてわれははやあらじやさしき歌に涙こぼるゝ　福岡　林まつえ

○

血の脈のふるふが外に見えつつもおん物語りわが聞く宵よ　下總　松崎きよ

○

うまれにしこの水の國初夏の花多く咲く日となりにけり　西多摩　岡野伊智女

○

ゆるしなく戀せるわれと云ふ人の心にかゝり春を暮しぬ　西多摩　岡野よね子

○

あゝ海豚母の乳吸ひて大海にありし日戀ふる土の上にて　伊豫　高橋政子

○

みだれたる髪かきあげて淋しげに一人見るなる山ざくら花　土佐　五百蔵幸子

○

子守歌菜の花つゞく川ぞひの野よりきこえてくれんとする日　仙臺市　増澤邦子

○

なき姉のおだまきの花咲きにけり折りて手向けんおくつきのへに　會津　桑原仙子

○

いつよりかたゞ何となくたそがれの小暗き野邊を好む身となる　和歌山　うめか

○

たゞひとり小庭に立てば風吹きて梅の香きたるいづこともなく　神戸市　足立春子

○

いたづらになげくをよしと思はねど傷手になやむ身とおぼせかし　改野竹子

○

彼の君の來まさば個のかたばみに春日のうたを添へてさゝげん　千葉縣　紅谷はつ子

○

はらはらと花より花のしづくしてつめたき森の夕ぐれの道　つぼみ

○

冬來れば白銀の雪やまに積む越路をわれは故郷とせる　長岡　喜志葉津子

○

はるかなる水色の空のぞきつゝ灰桑き人立てる夕ぐれ　靜岡縣　渥美千秋

○

かざしたる櫻の花にあこがれてわれに來たれる春の蝶かな　むら子

○

近き日に人妻となる我顔の可笑しと笑ふ妹達よ　羽前　野口菊子

○

色あせて枝にのこれる花びらとひとしきわれに春のくれゆく　德島縣　蔦紅

○

戀ふことをさかしまごとに云ひなせしきみなればにやまた逢ひがたき　福島　春子

○

きさらぎの日はゆく君に文をかくそれより少しぬくき心地す　京都府　内藤ふみ

○

梅の山また殘り咲くそのもとにましろき砂のこゝちよきかな　大阪市　星月

○

白菊を一枝手折り姉なるが御墓にまつるうき悲しき日　京都　松本都瑠子

○

圓山の櫻の咲きて皆人のよろこぶ春の朧夜となる　高尾

○

強き事敎へし君の今は唯弱きおのれを愛で給ふかな　甲斐　鷹谷とみ

○

しめやかにいとしめやかに雨のふる音をきくなり戀つくりつゝ　大和　靜子

○

このおもひ戀かあらぬか今日も亦君に逢ふ道たどりぬるかな　紀伊　廣畑英子

○

春の日のかすむ野の岡さまよへば雲に近づく心地こそすれ　大分町　千草

○

秘めごとは我くろがねの胸の戸に絕えずこをばあけよとさゝやく　備中　雨の花

○

枕邊の覺きゝて笑み給ふ病める姉をば見るが悲しき　名古屋　水野千枝子

○

白うばら紅うばら咲く野の草に匂ひに醉ひて今日も暮れ行く　常陸　田村紫色女

○

なは作る人物言はで煤けたる春の灯火淋しくてりぬ
○ 筑前 笹つゆ
戀人の便り見しごとよろこびぬ白木蓮の一本を見て
○ 大阪 梅邑秋江
紅の女と君はいひましぬうれひかくしてほゝ笑むわれを
○ 枯葉
ゆら〱と陽炎立ちて歌反古に春風吹きぬ君待てる時
○ 京橋 凹坊
淋しさの身にしむ秋の月の夜に鹿など鳴くと書きて給ひぬ
○ 神田 石田美子
よく笑ふ友と別れて只一人うなだれて行く春の町かな
○ 淺草 みやこ鳥
赤き雲一ひら浮きぬ夕ぐれの海に白帆のかへりくる時
○ 南千住 吉田清子
うみつかれまぶたをとぢて悲しめばきみのすがたのまぼろしにみゆ
○ 宮城 齋藤荻子
紫の傘さして行く少女子の頭の上のつばくらめ啼く
○ 同 人
白き花紫の花美しき其の眞中なる君が家かな
○ 千葉 ふい子
峰の雪まだらとなりて山すその雜木ばやしに鶯のなく
○ 千葉縣 鶴岡吉代子
櫻花さくと思へる昨日今日身にしむ風の音と思ひぬ
○ 西多摩 梅花
我が戀をかなはせ給ふ神ならば此の黑髮を切りて捧げん
○ 秋田縣 佐々木園子
小松原青きが中をみづ色の裳裾かろらに夏の人行く
○ 秋田縣 佐々木貞子
君戀ひてこぼしゝ涙ことごとく花と咲きけん野邊の白百合
○ さつき雨
天地に我れてふ物のゆきどころなくも思はれ寂しむ時よ
○ 備前 松本竹子
鈴鹿川しろがねなして光るなり夕立のあめ過ぐるなる時
○ 大連 玉英
山ざくら別れにし日の悲しさを今さへ思ひ涙ながるゝ
○ 神戸市 花愁孤
悲しみを君に別れて忘れんと旅立し日のわれのはかなさ
○ 神戸市 森清子
山ざくらひとり遊べる小き子の可愛げなるにほゝゑみし吾れ
○ 水戸 重子
春の日のうらゝかに輝る牧場にて牛見る人のいと長閑なる
○ 山口縣 小川露の子
春雨の晴れて霞立つ山々を見詰めて胸に悲しさの湧く
○ 渡島 田川君惠
戀のうた口ずさみつゝ笑まれける手箱の中のさうび思へば
○ 沼津 鳴田若綠
風薫る谷間の夏の夕まぐれほのかに匂ふ白ゆりの花
○ 沼津 笑村
うれしくも松の木の間に見ゆるかな鏡のごとき君のゐる海
○ 備中 小見山春子
人二人ものをも云はず見てありし春の眞晝の海は凪ぎつゝ
○ 土佐 はざくら
きよき血をもちつゝ逝ける處女子の胸はとことは安らけからむ
○ 岡山縣 入江曉花
君袖をふり給ふとき春風は我のこゝろにむらさきに見ゆ
○ 同 人
華かにともる火影にむかふ夜も心の奧に悲しみの湧く
○ 備前 曉花子
夜の更けし鐘の響きてこの一室眞闇となれば悲しみの湧く
○ 岡山縣 寺木茂子
笛ふけば泣く聲聞ゆ戀人が痩せたる膝によるこゝちして
○ 伊豫 高橋政子

○
病む人のふと悲しげに眼開きて細りし指を見入るかなしさ　尾張　石黒鏈枝子

○
桃の花紫の傘の二つ三ついと重たげに過ぎ行く日かな　松田蒔葉

○
鋭き針に刺されしがごとその胸のいたむと云ふは何のことにか　大阪市　小泉貞子

○
紅き帶紫の袖大らかに着て行く人のねたましきかな　長岡在　千草子

○
なんとなく小琴戀しく君戀し粂でし宵に花の似たれば　金澤　むらさき

○
煙ともあらぬ霧どもやはらかに町を流れぬ三月のよる　大阪　杉山かし

○
路ばたの花の蕾をふみにじる牡牛の如き人と思へり　美登利

○
唳く花を手折れば悲しかざすべき髮のすがたの老いにたるかな　西島行野

○
紫のきざはし上る我が心あやうしと見て溢る哀れさ　三河　槌谷ともえ

○
卓上の小さき壓のけざやかに積むはその日の忘れがたみぞ　信濃　百瀬わか子

○
薔薇の花香をし嗅ぐべく顔よせし時にも君は來たまひしかな　福岡　建部艮久子

○
おん胸に涙のかほをおしあてゝ戀の少女はすゝりなくかも　備後　高田梨葉子

○
夕づく日小松茂れる谷間にて芹摘む我れは吉備の少女子　岡山縣　るり

○
きさらぎや漸く生ひし若草に痛々しげに淡雪の降る　岐阜　萬の葉

○
大聲に笑ふあとより何ものかひしひしよせく胸にこゝろに　松江　清き花

○
春なれど夜は寂しき心地しぬ一人の君のいと遠ければ　宮本灰色草

○
そとばらを胸に抱きしを人は皆罵くごとく我を見るかな　能登　攝田清枝子

○
紫に水の流るゝ川上にほのかに聞きぬ鶯の聲　大阪　しづ子

○
何となく胸をどらせば足音の門邊を過ぎぬきこえずなりぬ　靜岡縣　蒔

○
云ひがたき戀のにがさを味はひぬ吾二十二の行春にして　佐分華影

○
暗き町易者の前に立つ人を胸おどろかし見る日となりぬ　京都市　中野絹子

○
舞姫に似るとはやされかくれぬるよき帶したる小さき妹　京都　山田幸子

○
梅さきて日影さやかにさしにたるまどにうつりぬ君とわがかげ　千葉縣　伊藤美津子

○
みづくさをわけて見るべき水底に神の秘めぬる清き鏡を　越後　ふく子

○
ぬり箱の底に秘めたる野の小菊枯れじと思ふ心のたのみ　松江市　古志ます子

○
君故に望みも捨ぬよき友もすてぬときゝぬ病める枕に　みどり

○
われ死なば灰にしてよと涙ぐむ母の言葉のかなしうとまし　やなぎ

○
春なればあためく人の來べき日かしきりに今日は胸のさわがし　越後　河島伊璞子

○
病める身のうら寂しさに手を打てば銀線のごと時雨ふり來る　能登　清枝子

○
雨に衣濡れたる如き心地して君の一語に身ふるはするわれ　岩手　つめ

○
燦やかにかゞやく曉の明星を仰ぎ見る如君を見しわれ



河井醉茗選

あらゆる植物の書物にも、あらゆる地上の花にも、曾て一度も見たことのない、變形な、變色した、而して輝きのある花が、人間の心から咲き出した時に、若き女等は歌ふて曰く

○夢のやうな花

美耶

美しき若き少女のやはらかな瞳は、朝夕萠え出づる八千草の二葉にそゝがれて居た。

少女の强烈なる愛しみも空しく、凡ての花の香り失せ色あせて、しぼみ消えし去年の悲は、今いやます歡喜となつて、少女の胸は花の色に花の香りに滿たされて居る。

小草は暖かき光りに浴し、やはらかき大氣にうるほうて安らかに延び行くよろこび、色にあふれてスイートをサングする夕。少女は一人ゆるう吹く風に袂をひるがへしつゝ、靴音かるく、青み渡る八千草の息をすひ、ゆたかなる歡喜の微笑を若草の上にたるゝ時、雨後の空にかゞやく星の如く、にごりなき瞳に犇と抱かれし唯二ッの小さき白きつほみがあつた。ふくらみ初めしつぼみは、つゝましやかに葉がくれに潛んで居る、少女はひき付けられる樣に、つぶらに張りし眼を閉ぢて、幾度か溫かなる息に包んだ、夕暗のうちに、つぼみは嬉しさうに恥かしさうに震へた。

すきとほる樣に晴れ渡つた青い空の下に、二ッのつぼみは美しき小さき花となつて、朝露にうるほへる姿、其の面には始めて下界の人に見らるゝ恥らひと歡喜とがあふれて居る。何よりも花を愛する少女は、一夜を夢の樣にすごして、いそ〳〵と走り來し少女は、息を靜めて花を見つめて居る。花の瞳は靜かにゆれて、燃ゆる樣な少女の瞳と、おもむろに抱擁した。胸によせんか、頰にあてんか、唇にふれんか、刹那の熱愛に少女は苦惱した。

青い空を見上げて微笑つゝ少女は、暫らく夢の樣に花の妙なる香りに醉はされた。ふたゝび花に少女の瞳のそゝがれた時、二ッの花の上に夢の樣に浮ぶ懐かしき面影を見とめた、幼き春になくした可愛き人形の姿少女は夢中に抱かんとして若草の上に自づと倒れて、

自づと夢に入つた。

美しき無數の花は、無心に夢みる少女の身邊に香つて、可愛きエンゼルがとりぐ\にかなづる樂器の妙音につれて歌ふ、歌聲は、まろらかに少女の夢を包むのであつた。美しき樂しき春の凡ての歡喜を夢見し少女は、靜かに眼さめて、ふと花を眺めた。花は淸き少女の接吻をひたすらに欲する樣に微笑んだ。少女はくづれる樣に葉をかゝへた。幼き頃失ひし可愛き人形のあの二ッの瞳。あゝ、どうしてもあの人形の瞳が、此の花に、此の花になつたのであると、涼しき少女の眼からは、とめどもなく、とめどもなく、何時か眞白き手に持てる花に、感謝の涙がはふり落ちた。

ほのぬれし花はひたすらに、美しき少女の接吻をうながす樣に微笑んだ、少女も微笑で今更に花を見つめたとき、少女の胸には無限の歌が湧いた。

名も知らで葬る愛しさに、少女は犇とうなだれし花を、紅唇に押し付けた、一度、二度、三度。

さらく\と行く小川の淸らかなる水と共に、二ッの小さき白き花は流れ去つた。

花は、花は、二輪の花は美しきまゝ、遂に、遂に、遠く流れ去つた。少女は、につこり笑ふた。（入賞）

血の色に狂ひ咲く揚貴妃櫻の如し（評）

○北の空にて

札幌　上原ふみ子

もう四月になつた。

北の空！

郊外に出て花を見に來て御覽なさい。

日一日と伸びてゆく若草を見て御覽なさい。

三月の半ば頃から順々に咲いて行く木の花——其中にも落葉樹の花が餘計に目立つて見える。今迄たゞ灰色の木肌が見えるばかりだつた、その死んでるやうな木が、枝といふ枝一時に目を覺して、忙しく呼吸をし始めたやうに花が咲く。盛な力だ。今迄睡つて居た力が、一齊に目をさましたのだ。目が覺めると、その花には他意はない。强烈な勢でこの春の日光の下に新らしく呼吸をしはじめたのだ。で、枯れたやうな色をしてゐた枝の先から先迄に、ワッと聲が聞える樣に呼吸をし出した。

私がこの杜の近所に來てから、春になつて一番先きに目につく花は白木蓮だ。

不自然で、冷たくて、唐突な白木蓮——。

それはその周圍の林——常磐木、落葉木の間にあつ

て、枝の細くこんだ葉の細かい木の多い中に何處となくぶらつきぼうな木振から來るのか。

さうじやあない。この木が落葉して、休眠してゐる中は、さ程に不自然の感はない。が、この花が一時に咲いた時に見ると何處からとなく――その時の日光、その周圍の若芽などの中にあつて、何となく濁つた感じがある。白濁――さうだ。乳の腐つたやうな匂――。

肉の厚い花瓣、熱帶風な花瓣の形それがまだ弱い日光の下に咲いてゐると、冷たすぎる水分を多く含んでゐすぎる。そして何處ともなく、色の變つてゐる異人の皮膚のやう！

私はこの花がすぐ、小さい傷が付いて、そこから汁が滲み出し汚點が付くのが嫌だ何となく嫌だ。たゞ私は大きい木を並べて植ゑた廣い庭に、櫻の花にまじつてほろ／＼と散るその櫻の小さい花びらと、この花の大きい花びらとが、一所になつて落ちて來るのが面白い。それと濕り氣のある木の下の土の色の黒さと、櫻の花の薄紅と、この花の白と………殊に黄昏の時などは、その冷たさと、濕り氣とが肌に泌みて來るやう



さくら　芝　久佐ふね子

で、其中に薄い暖かい哀愁の感じが含まれる。

木の下に名の知らない花が咲いてゐる。しなやかに伸びた莖に黄金のやうな色の花が競び咲く。水々しい、薄い花瓣が伸びて、日光を受けてゐるその柔かさ。日光を透してその花瓣が光を帶びてゐるその艶、濕り氣を含んだ冷たさ……。

この群つて咲く花を見ると、一種の盛んな生活の力が溢れて居る心持を感ぜずには居られない。殊に葉のまだ伸びてゐない時、春が極めて若い時に、一層強くその心持を感ぜしむる。

その花の咲いてゐる上に一日の日が廻つては暮れ、新しい日が照らし、時が流れて行くと、その花が凋れてしまふ。すると花の間から淡綠の若芽が出てゐる。(入選)

濃厚なる色彩と薫香を持つデンドロビユムの如し(評)

○花の印象

ふもとの草

はな、何といふ心地よい言葉でせう。花、花、からくり返して言へば、むすぼれた胸もひらくやうな氣がします。殊にさくらは一點犯した罪のない、唯爛漫と咲いたところがようでざいます。

夜櫻は黒ぬりの盆に櫻の花を浮彫にしたやうなゆか

しさ。廣小路の輝やく灯をさけて、上野の森のアーク燈の光に映つた櫻はあまりに淡かつたけれど、村の鎭守の夜祭に、或る年始めてお母樣と詣でた時、駄菓子賣る店菓物の店、道狹い迄に兩側に並むだ雜然たる緣日の、カムテラの油煙の夥しくたち上るところ、闇の空にくつきりとしろく浮でた櫻の花は、何とも言はれぬ程ようございました。その大空の格天井に浮彫の櫻は、この雜然たる緣日には、あまりに高尙に奥ゆかし過ぎました。

春の花はみな、甘い酒に醉つたやうな心持に咲いて居ます。摘草の頃の野の草花の華やかな色、蓮華草はあの敷きつめた中に、仰向けにねて、ひばりの歌をききながら、深い深い空の奥に魂がは入つてゆく心地を文に書きたいと思つたこともありました。ひとり菫はうなだれがちに、野の中の墓場に澤山咲くのをとつてよく綠をそめました。蘭は春まだ淺い頃山に咲きます、ある山の裾に人肌位ぬるい泉が澤山わくのを、焚いて溫めてお湯をたてゝゐたので、ほか／＼する頃の日曜などは、一日遊びながらの客がかなり賑はひます。近いのでよく行つて、お父樣と裏山で蘭をさがした事もありましたが、それは幼い時でした。桃の花は折つて

きざしによく、海棠は美しいだけで好きではありません。梨の花は何となく、あだつぽい愁をふくむで居るやうですき、同じ様な野ばらは淸水わく石ころの中に咲いてあはれです。茅花は春、芝の中に枯葉に包まれてよれたまゝ、すいすいと立つて居るのをぬくのが面白うございました。小櫻草は名許りきいて懷しみましたが、横濱の山の手に住む英國の人を訪ふた時、お菓子にそへて出してあつた花が、それの一種ときいて嬉しうございました。パンシーは芝へ行つた歸りでしたか、花屋へ寄つて、澤山な鉢に咲き狂ふて居るのを「お土産に買つてゆきますか」と云はれた其時は、お父樣もお母樣も御一處だつたけれど、荷になるのを思案して、とう／＼買はずに歸りましたが、時々惜しかつたと思ひます。躑躅さつき霧島、どれがどれとも知りませんが、祖父樣がお建てなすつたけど、働き手の祖母樣が否と仰言つて、とう／＼住まずに了つたと云ふ隱居家の庭の泉水のあたり燃る色にさき出ます。藤あやめは白よりもやはり紫がそれらしく、ゆりは白の大輪、花の中で一番いゝのはと聞かれた時は、これと云ひます。越後の山ではさく／＼と言ふけれど同じ田舍でも、百合も咲かずほとゝぎすも鳴かず、中途半途は私厭です。小さくて好きは露草、あの花の色の半襟が一番すき。永く續いた雨の日、友を訪ふた時、庭の眞紅の花を百日紅と敎へて呉れました。柿の花もよく雨のふる頃、ほろり／＼散りました、美しくないのが何となく心を引かれます。ダリアは溫泉の宿の裏の空地に咲いてるのを欄干から毎日見て居ましたつけ。

コスモスの丈ののびるのは心持ようでございます。秋の花は皆廿年を越した女の、さめた趣があるやうに思はれます、そして春よりも丈ものびて大人らしく、秋草は碓氷の野を思ひ出します。あれは本科一年の時でした、植物採集するとて秋一日を師と友と、樂しく睦じく遊び暮らしましたつけ。あゝ懷しい師よ、クラスメートよ、思出しては胸いたい迄涙ぐまれます。(入賞)

蓮華草の如し(評)

○投げた花

横濱　千鶴子

日足は早や西へ／＼と落ちてゆく。

デゼーや、パンゼーやに鮮やかに映えと色彩とを見せた反射光も鈍て來た、其空も倦怠味をもつた沈滯した灰色に變化し樣としてる。

「グードバイ」
「グードバイ」
狂歡のどよめきは、群集せる白人の男女の口より起つた、上つ調子のキイ〳〵した聲、アーク低い太い男の聲、其邊が一つになつて沈まり切つた山手町の空氣に強く響いた。ハンカチーフを振る、眞白いレースに腕を包むだ女、キッスを送る女のゴールドの腕輪の輝き、シルクハツトを高く振る男、——別離の表情とは云へ其振る手に力があつた、送る言葉には嬉しさが溢れた。可憐の笑顔包むだ淡紅色のベールの新嫁は幾度かグードバイと呼んだ。

青銅色塗りの箱馬車は古靴さげた仲人馬車に續いた白米は後から打そゝがれた。

砂煙を立てゝ地を動搖さして走る蹄の音、其邊に續く轍の響、其が羅馬式建築の石造館の影になつても、いつまでも〳〵——ふるへ〳〵、響け〳〵て高層な歐洲的に立ち列ぶ洋館の町をゆく、細りゆく響きが全く消えた時、人々は足を上げた。眞白きスカート、長くコルセットした女や、ビール腹の肥滿した男やが、一人でゆく者、手を組合してゆく者、凡てが違つた方面にゆく、自働車の瓦斯の匂ひ、馬車の音、ゲーテ座に演せられる騒擾たる樣子である。

何處からともなく集つた人々は、何處ともなく散つてしまつた。

何時の間にか地上に、縱に、斜に、織り亂れて居た樹々の影が消えてしまつた、冷々として鋭い夕の風は新芽のふき出た小枝を搖つて、女の熱した林檎の頰を撫でゝ過ぎた。賑かだつた後の淋しみ、取殘された私は無意識に芝をそゞろ歩いた、「おゝジヤキよ」彼は灰色がゝつた一雙の眼に弱々しい微笑の閃光を見せたのみ、手に握つてた花束を地に投げつけて、小徑のあなたに消え樣とした、私は沈むだ彼の後姿を夕暗を透して見送つた。

おゝ此花束、バルコニーより投げられた花束よ。

私は強く〳〵胸に抱いた。そしてバルコニーより花を投げる刹那の彼女の姿を——其一瞬間過去の幻影を捉へやうとした、盛裝した彼女の姿が、眼の奥に〳〵浮んだ時、花を地上に投げつけて、悄然と立去る彼ジヤキの後姿があり〳〵と映つた。私も地上になげつけた、そしてジヤキの印した足跡を踏むで、小徑を通つて通りに出た。暗色はしだい〳〵に深くなつた、私は亦躑躅の葉越しに投げた花を見返つた、凡てが夕暗に

包まれてしまつて、只根元に結むだ白いリボンが動いてるのがぼーつと見えた。(グレースの結婚の日)

白薔薇の如し(評)

○椿の花

平塚白百合

何だかお寺の境内みたいね。美代さんがおつしやつた位我家の庭には椿の樹が何本もある。

春は濃紅なのも淺紅なのもしぼりも白も澤山あつい葉の間にさいた。咲き出す頃の空は溫かいミルク色ににごつて、コバルトのはれた空は極まれである。

椿は南國のあざやかな色彩です。私はよく碧海をめぐらす大島から、南方の椿の島を冥想する、美しい白日の冥想は甘い戀の匂ひのやうです。

紅椿の落花を日にすかすと、火のやうに紅がもえて私の眼にたゞれさうに思はれる。次に白をすかすと何となく瞳がひらくやうに吸はれる。

薄紅の少女椿は、幼ない時から好きだつた。貝ざいくのやうに重なつた花片をはがしては唇にはつた。

椿の盛りは隨分長い。二月初めからさいて、櫻が散つて山吹が黄にめがさめるやうに咲く迄、次に〳〵と咲き替つてつゞく。その頃、蛙の沈んだ音調は、たえず夜のうるほひにみちた黄色い空氣をゆすつて、輕い冥想にみちびくやうにコロ〳〵となく。

ある夜、兄の書齋の本箱から、椿姫といふ譯本をもつて來て、リーダーの下にひそませてよみふけつた。その日は終日雨で夜に入つても縷々とたぐりよせられるやうに切れずに降つた。雨の中に落ちる椿の音が、シーンとした夜の寂寞をやぶつて、一音毎に寂寥は深くなつて、肌寒を覺えるやうな心地をあぢはひながら空に畫がいた巧みな美しい畫に接近しやうと私の心は耽讀した。

あくる日、雨の上つた庭はむごたらしい程花が落ちてゐた。何かあつたあと、と云つたやうなあわただしい氣分がうつすらと感じられた。散つた中には印度婦人の唇を思はせるやうな紫がかつた褪色しかゝつた紅椿もあつた。白い花は赤つ茶けた線が入つて、緣も處處しみ込んだやうな茶の斑が、花全體をめぐる養分をくひとめる關所のやうにめだつてむごかつた。

今日は南洋にでもありさうなあかるいカッキリした日だ。ふとんはたいてゐる私の手は、何となくだるくなつて細かい塵のうつすらとにげてく庭を見下すと、

ポーッとあたゝかい日にボヤケたせいか、私の瞳は强い色彩の紅ばかり目立つて、其れが無限にひろがつてあたりがすべて紅がら色にぬられたやうなまぶしさを感じた。欄近くたれた柳の若芽の香は、頰に匂ひかゝる程近いけれど。

白い椿が赤い色彩の中を落ちた――。

ダリアの如し（評）

○幻の花

やゑ子

夢見るやうな眼つきの人、醒めきつたやうにぱちつと見張つて歩く人もある。夜の銀座街は雜駁だつた。勞れの吐息の些かも混じらないと思はれる都會の空氣は尙も動搖し乍ら、瓦斯や電氣の光を飽和して、生氣の充ちた「町」を包み歩みゆく「今の人々」を包み、電車のゆききの傍に立つ時、那邊からともなくたゞよふ刺戟的の匂ひにも、練磨と進歩を意味した都會の美を發揮して居る。

それらを背景にして居るこの時の澄さんと私とは樂しかつた。

あのう（と瞳をあげて）天下堂のうづまきは急激な人

生見たいですね。華かに輝くかと思ふとすぐ消えてもとの無色にかへつてしまふ（頷いた人もある）あのお雛さん宜いのねえ。調和を破つた色彩が莫迦に宜い。とも云つた。

あの巴流しの簪が氣がきいて宜い。とも云つた。

嬌艶な笑ひ聲もいたいたしくきいた。二人の揃はない下駄の響をも沁みぐ＼味うた瞬間もあつた。

交叉點に來た。ぢやあと二人は離れて

さやうなら。

さやうなら。

並木の柵によりかゝつて、忙しく乘り降りする知らない人々の色々な態度を眺めて居た。やがて澄さんの大勢の人の內にまじつてしまつて、澄さんの澄さんでないのが悲しくてならなかつた。

かちかちと青い火。

事もなく「時」に沿うて走りゆく電車のいくついくつを呆然と眺めても、銳きに馴れた感觸は、悲痛もなく意味も見出でず、路をもどつた。

意識しなかつた壓迫から遁れると、僞りの幸は落ちて、暗い、わびしい「者」のみ殘る。觸れてみて熱くもない冷くもない綿のやうな「者」それは私であつた。

かつては私自身の名を呼んで又なく「私」を愛したらともあつた。然し今では「私」をそんなに可愛いと思はない。うつろの底を狂うて行くやうな自棄の氣分が、時時、ある機會に見るあるもの〻閃めきは、私にヒントを與へやうとするらしい。

橋を越えて鐵橋をくゞつて、明るい町のはじを急いであるいた。

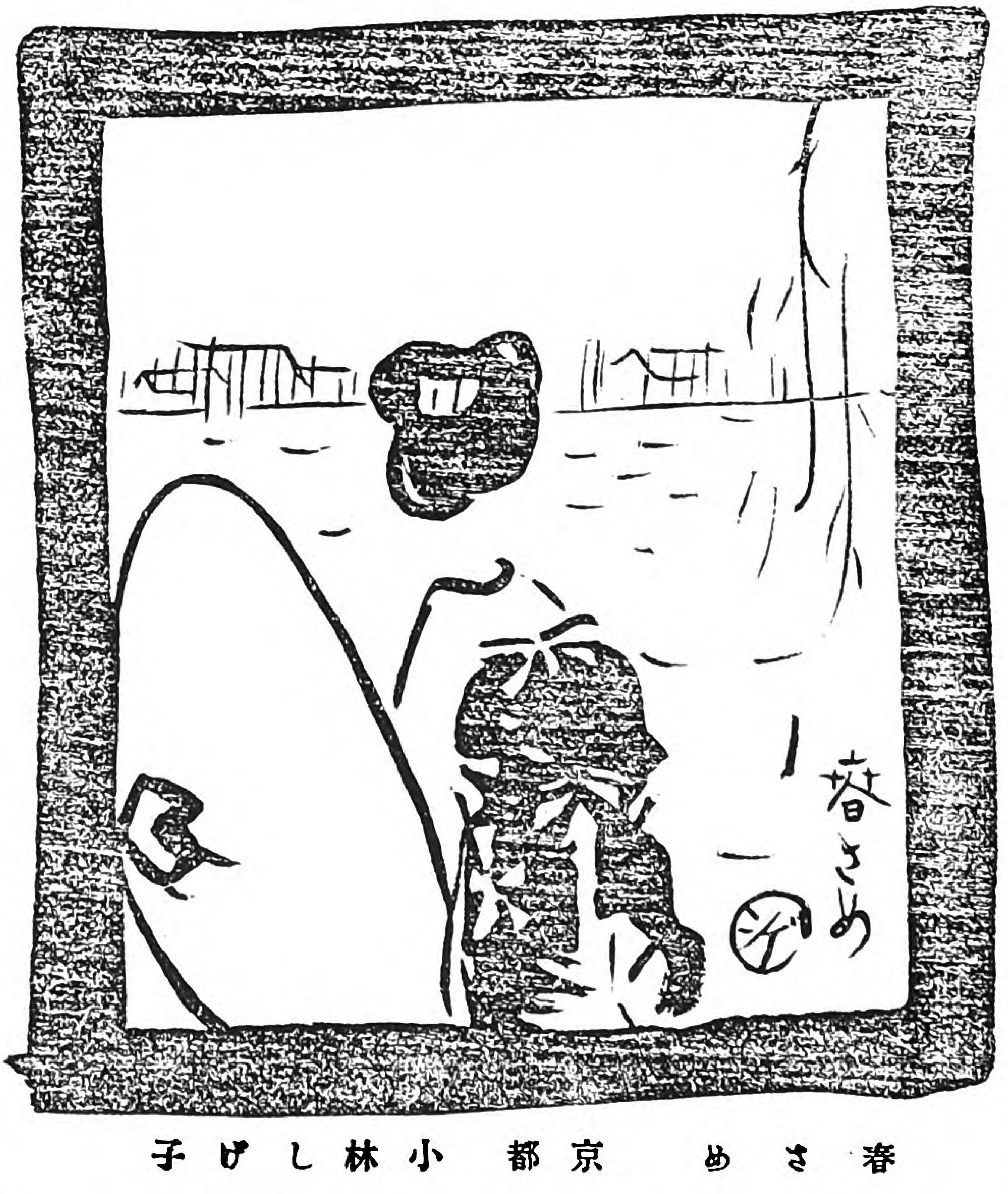
闇にかくれたサタンを刺すやうな會堂の塔が、重り會つた家の上に見える。新らしい生命をうけた處だ。然しそれはもう過去だ。さきを見るに忙しい私にとつて見むきたくもない後の事だ。が、

立ちとゞまつてつくづく塔の尖端を見上げると、夜の空は曇つて居た。

じいつと見て居ると——

高い高い空いつぱいに暗色の花咲き充ちて、咲き亂れて、そのかげから小さな、小さな、花びらが數限りなく、ちらちらちら、と降るやうに見えた。

紫黒の色して神秘めきたる西洋小田巻草の花の如し（評）



春さめ　京都　小林しげ子

○常陸だひら

赤城躑躅子

ぼろぼろの刀と、鐵糞のやうな鍔と、出たのはそれ切りであつた。掘返した石ころや、竹の根つこや、丘は壞すそばからきれいに平らしてむかででも蒔きたいやう。常陸の大掾の墓とばかり言ひ傳ひられたま〻、矢がらにほしき幾千萬本の野篠の中に埋まつて、朱をつめたらしい石のからどお

はむかし狐のかくれ家とさへなつた事もあらうか葬られた貴人は千年も筑波山麓に眠つても骨肉ともに朽ちてゐたのである。大掾塚の六ぴらの梅は食べると死ぬと、よく言はれ言はれした。野篠の茂つた中に生へてゐたので、幹は、どこを樹液が通るかと、思ふほど穴だらけになつてゐる。「よくこれで生存(もつ)て居たもんさね、こんなに朽(ぼ)けて」、「さうよな九分洞だからたきつけにもなりやしねえ」と話してる土方だちのそばへ寄つて一枝下さいと言ふのがこわかつた。「別嬪だからやんべいの」と、さんざからかはれたあげく、漸と貰つた枝を手にして、髮のぼうぼうになつてるまゝ、洋傘でかくすいく地もなしに師の君を訪ふべく小貝川の土手へ出る、人一人通らぬ堤の上を歩いた。枯れて續いてゐる草の芯からは、針かと思ふ細い芽がすぐずぐと出てゐる。藪(やぶ)一杯「天狗の面」の蔓がからんで、三間おき十間おき位には芝を燒いた野火のあとがある、黒く焦げた草の中にうつちやられたやうなタンポヽの花が咲いてゐた。

かげろふが薄らにきらきらと、目の下にもえて堤の内も堤の外も、どんぐり林も、はんのき、やはら(野)もちらくと白い蝶が飛んでゐるやう。

駿河へは四十里といふ富士山はかすんで見えぬけれど、わが村の後を、かこふやうに立つてる筑波山は、雨にぬれたばかりの色して、春の野に紫の裾を曳いて青くすんだ空に聳ゐてえる。

私は今小貝川の西の堤を留めて、S字形に南へ走る高い大きな路から、縱に横に區劃たゞしく流るゝ幾つかの堀割と、麥の青くのびはじめた畠とをへだてゝ、こんもりと茂つた横根の森を見下した。

丘一つ目にふれぬ水田の中に、五十戸ほどあつまれる小村の中に、二棟大きな家が見ゆる。百年ばかり前は六七里四方に土藏のあつたのはと、よく年よりの言ふその古い家に、師の君は生れて、三十年を病んでいらすのである。二月の一夜に水戸でなくなりなすつたときいたのは風聲鶴唳であつたけれど、われ人共におどろかされて、夢のやうにも思ふ。

花を見て慰める人かどうかは知らない、私はたゞ病める人に、山にも川にも春の來た事を知らせればいゝのだ。紫は石の色であつた、筑波よ、筑波の雲よ、千年の劍尖を麓に封じて、山は劫遠に紫なれ。

たんぽゝの如し(評)



詩

服部嘉香選

○憂き春の歌

和泉　金田代志子

雪の夕の心

ちら／＼と雪が散る。
かはたれ時の我が窓に迫り來て、
幽かにも青白く
夢のやうに雪が散る。

窓のかたへの鏡臺の薄ら明の冷さに
黄色い香料の匂は
悲しくも肌に沁みて、
自分のをさない心は――やさしい憂愁は――。
其のかたへに、音もなく
しのびやかに散り込みし
たつた一つの淡雪の消ゆる命を見つめる。

ちら／＼と
濕つた空から濕つた土に
靜かに散り落つる雪をはなれて
纎弱くしてはかない憂愁の側に
ひそかにも散り落ちし一つの白い微かな雪
其の光のなつかしい
かはたれ時の我が室の窓。

落椿

血のやうな椿が散る、
入日の淋しく悩むとき――
窓によりそふ病女の
亂れ髪にも沁々と、
春の夕の憂愁は
ひそかに顫ひ――、
やるせない思出を殘して
血のやうに椿が散る。

雨の夕

花の上に
しのびやかに降りそゝぐ雨。
其の冷さの沁みてゆく
濡れた花瓣の微かな息づき
――暗く靜かに顫へる心――

雨は微かな音を亂して
花の面に柔かく降りしのび
其の濕つた匂は
我が胸中に沁々と
ひそかにも悲愁の官能を顫はせる。

灰色の空から
降りそゝぎ降りぬらし
柔かく花に疵つくる雨
甘つたるい匂ひをおびて
滴はゆるやかに接吻ける――
かくて滴の一つ一つに
夕の影が潜みかくれて、
我が涙は溫かく胸にあふれ、

やるせない心は、其の痛ましい響をきく。
花の上に
降りそゞく夕ぐれの雨
甘く萎えた花瓣と
若いひとみに浮く涙と
懐かしくも悲しき春の夕の雨。

三味の響

かゝる夜を、
誰が手すさびの爪彈か、
月の光も晴々と
桃のつぼみに影落し
靜かに夢を守るとき――。
意氣な音色の其の主の
心はいかに――
私が胸は
悔か、なげきか、悲しみか、
響きになやむいぢらしさ。

青き花

やるせない思を抱いて
暮れがたの野を歩む――。
廣き野には
しら〳〵と光り消えかかり
冷たき空を
聲を亂して黑き鳥ぞ飛ぶ。
うつむける自分の面には
はかなき思出の涙は浮び
心はむせぶ――。
さあれ、又、靜かにもさ迷ひて
忍びかの笑を洩らせし哀れさ、
それよ、――
忘れがたき、かの枯草の中に匂てし
色青き露草の小さき花よ。(入賞)

評、何れも充實した作であるが、「官能の薄暮」を味つてゐる人の作である、就中「雨の夕」は主觀の情味と客觀の感味との美妙に融和して、忘れがたい印象を殘す。それに次いでは「雪の夕の心」、「落椿」である。作者は北原白秋氏の詩を愛讀してゐる人では無いか。

○更けし夜

備中　小見山春子

午前一時の電信室に
ほの暗い灯がともつて居る
黑い服を着けた――女の後姿にも
つかれの色がほの見える
カチカチと――　音響器の
低い音――濁つた音――
把手に觸れた女の指は細い
白金の接觸點から
青白い火が散つた
シト〳〵と雨が降る
雨に濡れた線から
電流が漏れて
音響器は力ない呼吸をつく
樺色の小函に反響する
押へる音と――彈く音が
女の鋭い聽覺に觸れて
譯寫された假名文字には――

人の死こを傳へらる
おびえた心――冷いをのゝき
何處からと
なく――黒
い影
――玻璃
の樣な笑ひ
生を侮る音
響器の――
ひゞき
ショボ〱
と雨は降る
――桐油の匂―
合羽摺
の音
電報配達の
角燈が
鋭へ闇を―
―顫へて行く
やがて今――――

「絶望」の叫び――と嘆嗟の吐息が
人の口から洩れんとはする

灰色の死の影――――
他局を連呼する音響器の響（入賞）

評、特殊な生活をしてゐる人の、特殊のシチユエーシヤンが取つてあるので面白く思つた。生活詩、委しく云へば生活を直白する抒情詩として形式を成すべきものである。言葉の選擇にもリヅムの作り方にも多少の注意が拂つてある。



春吹く風　和歌山縣　穂田みつ子

佳作

○夜　尾張　紅葉子

月光の青く
歔り泣くと
き、
世の全ての
悲しみの迫
つて來る時
どうして私
は人が戀しいのか？………
遠くかすんでうつゝの中に咲いてゐ

る白い花――白い葩に、
又も女の青褪た戀のすがつて泣くの
を見た。
歡樂の衣を着て蘇生るまで、
哀愁の涙が戀し人の胸にしみ入るま
で、
私は泣きつゞけて見たい。――
あゝ空氣はやるせない思ひに身顫ひ
髮を亂して裾かゝげ行く女の不吉の
ほくろ……
夜、くらい中に記憶なき星の光り、
黑い底知れぬ海から失戀の靈は――
私をよぶ――
さはあれ森の中に得た初戀の印象は
忘れんとしては又甦へる。

評、感情の動搖は見えるが、その溢れんとする力を活かす丈けの形式を得てゐない。

○薄暮の弔旗

札幌　上原ふみ子

涙形の低き甍にふりそゝぐ銀杏の落
葉よ、
日は淡黃色の梢に照りなやみ、
しめやかなる市街の薄暮となれば、
ハモニカの青き哀愁ぞ迫り來る。
雜草の土塀を越しておぼろに見ゆる
窓赤き盲啞院の教室に衰へし音曲の
息づみよ、
銀線の神經を蝕む悲痛なる不具の記
憶は反響にぶき校門の幽閉にあぶれ
たり。
見よ、灰白き冷き人造石の小門を出
づる、
綿羊くさき散髮の少女の孤影を、
薄き唇は狂念の發作にやゝうちふる
ひ、
地上の白闇を辿る空しき瞳孔よ、
砂利にくゆれる吸ひさしの煙草の殘
香は、
薄暮の強き光線に溶けにじみ、
絢爛の情調はほのかに歌ふ。
日蝕色に潤みたる市街の雰圍氣は夜
を怖れ、
屋上園の枯薔薇に淡光の日は歎く。
古びたるミルクホールの窓近く乾き
たる器の擦音、何かは知らず、皮膚
白き漂泊の女は口吟み、
そのあたり、路はなほ堀割工事に騷
立ちて、
沈澱せる都會のサンチマンよ。
黃濁の泥の頻吹に穢れたる烈しきポ
ンプの吐息、
胸苦しき汗は一群の工夫に匂ひ、
ホースを傳ふ惡水の壓力よ、
また、等閑の隙間より噴き出づるう
すき悲しみ。
あはれ、灰色に塗りこめられたる古
電車は、
遠きあなたよりしきりに徐行の鈴う
ち鳴らし

白緑色の火花の悲歎に、
おどけたる廣目屋の太鼓やみたり。
銀杏葉はなめらかなる甍にふりそゝぎ、
照りなやむ日の哀唱、
樹上に見る淡黄色の薄暮の弔旗よ。

評、一種の都會悲調をなしてゐる、表白の力も確かである、情緒も豐かである。たゞ模倣の跡の著しいのを殘念に思ふ。

○麻裏の音

西島行野

ヒタヒタヒタと麻裏草履の音！
黒い影がほの明りに浮いて行く、
恐怖を感じつゝも蹤いて行かねばならぬ樣に、
草履の音はしつしつと叱りながらすたすた先きに立つて行く、
私が立ち止ると、音はヒタヒタ高くなる、
又引きよせられて歩み出す、
墓へ行く？氣味が惡い!! と思へば足どりがにぶる。
ひたと音は止んで、
影が、はげしくゆれると、大きい白い歯と鋭い小さい眼とを一所に寄せて、クスクス笑ひつゝ、振り返つた。
お寺で見た仁王樣の顔だ。
ぞつとして突立つた。
と、見る〳〵優しく變つて、そち向きに、
又ヒタヒタ行く。
其の音に吸はるる如く、追はるる如く、
アヽ何時迄何時まで私は蹤いて行く
洪水の濁つた川の岸迄でいいだらう
一息に橋も渡らねば水に溺れるだらう！
音に吸はれてついて行く。

白晝の室

明るい室の眞中に、吐息を太くふくらして、
鐵瓶の蓋が鳴いて居る。
赤々と發つた炭の上に、白く湧き出た灰に跨つて、
身内にめぐる痛みを耐へながら
みがきぬかれた鐵瓶が鳴る、
外の空氣の壓迫よりも、足の根元の火の灰よりも
張い身肉の悩みに疲れて、
明るく部屋の眞中に
あれ、あれ、蓋を押し上げて涙が流るるまで鳴いて居る――

評、「草履の音?」は象徴的に行かうとしたのだが、表はし方が獨斷的で露骨に流れてゐる爲めに先づ讀者を囚へる印象が無い。象徴詩は先づ明白な事を避けねばならぬ、此の詩に、恐怖なり淋しさなりの感銘を傳へる丈のリヅムがあつたなら、多少象徴的効果が表はれた事と思ふ。「白晝の室」は卽興的な、寫生的な所に面白味がある。

○もえいづる

金澤むらさき

もえいづる草の芽
指の間のエメラルドの輝き
靜心なき外國人のうるめる瞳……
かくて草の芽はもえ出づ、
過ぎさりし
夢のあとを逐ひて
悲しめる女の瞳は
光なく記憶の絲をたぐる
もえいづる草の芽にそゝがれたり。」

强ふる心

さもしきものは心なれ
いたいけの鳩のむねに
二人やどりし其ゆめ
棕梠の葉陰にしとしとと……
やはらかに降る十月の雨。
蛇の赤き炎の舌向へるに
あたゝかき夢は破れつ
羽ばたきのけたゝましう
血の薔薇力なく萎れたり。
さもしきものは心なれ。
先の日の夢は忘れて、疵は思はで
新らしき胸の巣によらせんと
色彩と光輝に人まどはしめの
さもしき心……。

評、「もえいづる」は佳い作である。「强ふる心」は何となくはつきりしない、作者に其の心持は確かに掴んでゐなかつたのだらう。

○短詩

岡山縣　日下よし子

夜の黒き影を忍びく歩む猫の足音
の如く
靜かにわが白蠟の蒼白き額に、
砂糖の甘き心を見せて、おもひ出の
映畫は
惡阻の冷やけき涙にほうと咽ぶ……
あゝまた、
天鵞絨の柔く盲ひたる未來は
寂寞の產みし黒き闇の謎のどん底に
鼬の小さき眼のごとく鋭くひか
れり……。

青き星

わが眼に傷き夜の空に、
音なく光りかがやくは
幽靈の火か、狐火か
かなしき眼付の愛らしさ。
銀と青との星のいろ、
その魂を見てあれば、
青き螢のいろとなり
無邪氣な少女の眼となりぬ。
しづかに默しはた光る、
水晶か紅玉か夜の空に、
ひとりつかれて青々と
小さき星の眼付かな。

病葉

冬の夜もの凄く更けぬれば、

念珠の音はおもひでの絲を切りて高
くひゞき、
狐火のごと
光る瞑目し
たる病葉は
たかき木梢
よりすべり
落ちて、
死のごとき
夜の寂寞を
やぶる………

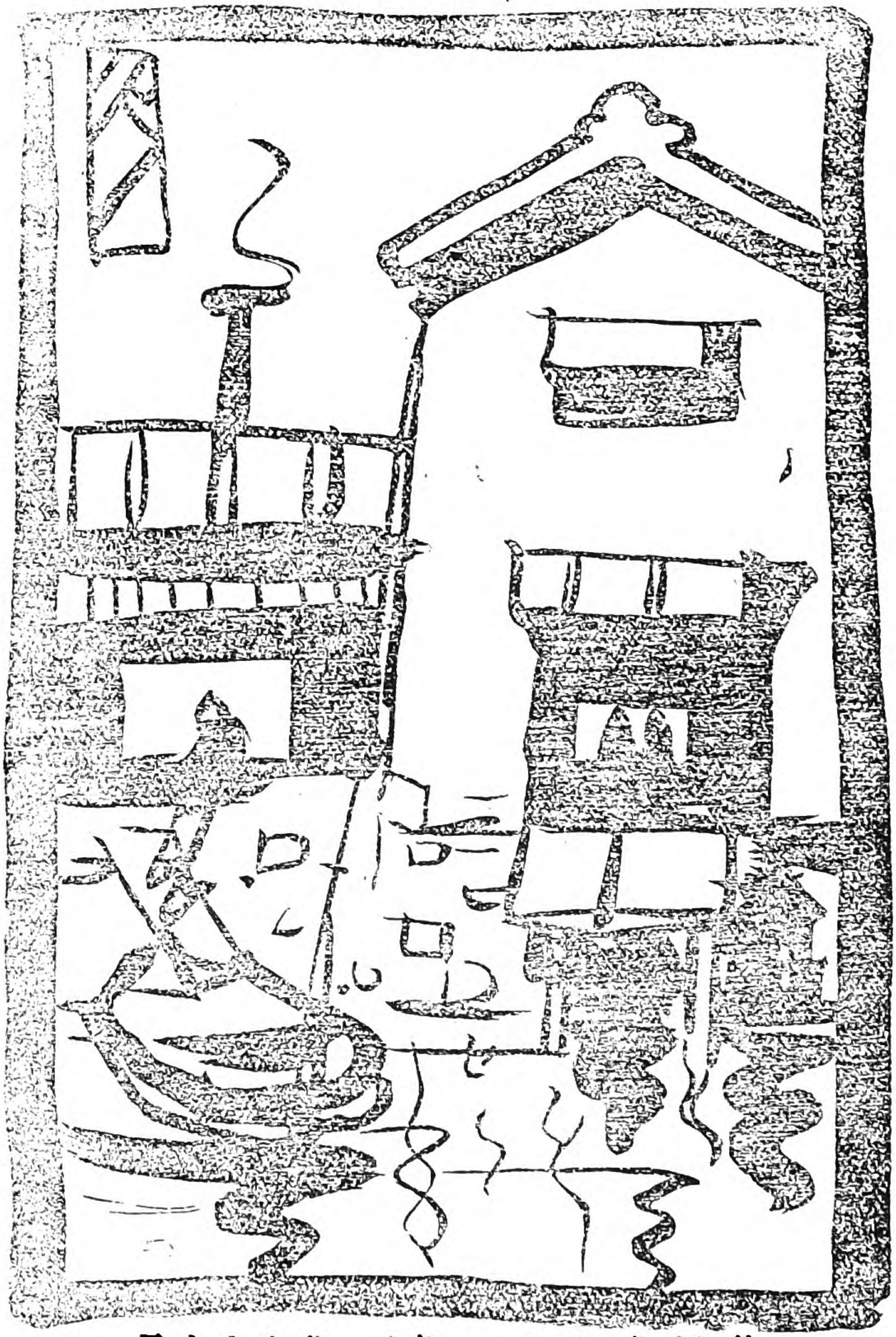
評、初めの「短詩」は立派な作である。

○紅椿

秋野の女

靜かな春の
夜、
月は白い、
若竹の影に
隱れて居る
背の低い、花の簪、
紅椿――軟い色、
接吻の痕のやうに
眠い眸のまたゝき。
だけど又
嫌な病葉――
―色褪せた
花瓣
醋酸の香、
濕れる土、
俯いて冷た
い不安に、
震ひ漂ふ、
鉛の如に、
重い空氣、
あゝ瞬間に
散る――今
散る、又一
つ。

評、短い句切りの間に何となく力が潜んでゐる、リツミカルではないが多少の調子があるやうだ。――泣菫の小品文にも落椿を



竹河岸にて　麻布　井上ゑと子

書いたのがあつた。

○夕禱

宮城縣　鈴木はる子

睡眠にみちびく夕べの祈禱………
尖塔の上を、
窓の外を、
暴風のグループが狂い嘲けり走る。
オルガンに群がる沈默、
黑いものの跫音、
頭の中を暴風が吹く。
一人のかげ失せた時。
また二人。
私のかなしい心はさ迷ひ、暴風の あとを追つ駈けた、
聖壇のほとりに跪づき、殘つたものは 溫かい頸巻のやうな心に、さびしい安息の巢を作つて居るだらう。
あゝ、暴風よ！
夢は街路のつきる所に、白い床に、
汝を待つて居る、
汝はそれを知らないのか。

冬意

ホテルの若い女中が、
うらの枯れた楡木のかげで、
旅人にならつたかなしい歌をうたつてゐる。
雪がちらちら降る、
雲もないのに雪がちらちら降る………

評、「冬意」は佳いスケッチである。

○明るい歌暗い歌

港の子

眞白な砂濱の吐息と
Childishな港灣の微笑み
明い悲しみを訴へる様に
光の影に純な瞳をひらく朝よ――唇許りふるへて居る
そのとき朝を驚かせてギーとする物の響
黑く蹲つて居た倉庫の扉が開いたのだ
暗い酒庫の奥から明るい光の中に
印袢天が出る
一つ又一つ――續き續いて
印袢天の男は一人一人まばゆさうに物珍しさうに空を仰いで行く
ざくといふ砂の音にも氣付かず
歌を歌ふ
砂の上に無意識に足跡を殘して行く
肩の上の黃色い菰包みの樽と背の印が
ものうさうに光に咽んで居る
渚に待つて居る舟に肩の荷を投げ置いて
明るい道をもとの樣にかへつて
暗い扉の影に消えて行く
扉は明いて居るけれど出て來ない
暗い中から歌聲がかすかに―― かすかに
舟の上に一人殘つた男は
青い海の彼方銀色をした南のはての水平線に
消えかかつて居る白鳥の樣な
白帆を見つめて居る――無言で
朝は酒の匂の交つた空氣を呼吸して
暗からひびく歌をきいて居る――たた

無言

冷えきつた河原の石と
私の心の奥にまろぶかなしみとに
微笑を殘して去る葬の淡紅色
あゝかなしい夕だ
この水許り感觸のなめらかな――物古りた
昔の歌を歌ふけれど
私い心も黃昏も歌をわすれてしまつた
時をかぞへる二人の戀人の樣に
最後の光を見守つて
暗紫色の黃昏と私の心とは沈默をつゞけて居る
そのときふと驚いた
さきほゝけた柳の花の
黃色い息が闇にふるつたのに――
石ころの間に根を張るかなしい柳の姿と
私の姿とを無言の闇は呪ふ樣に
呼吸をふきかける
あゝ無言に迫る闇を無言に逃れやうとする
私の心と――

評、二篇とも相當の出來である、然し增實は忠實はあつても餘りに自己が醒めてゐる。それ丈また理智的な所がある。

○雨の日

尾張　朝子

鶯、
こんな雨降りに
何處で鳴く？
私は、
憂き心に泣いてゐる。

迷つてゆく心と、
消えて行く聲…………

雨がポツリ、ポツリ
わたしの心が感電するやうに――
發、
何處にかて泣く…………

○藍の花

京都市　島本久惠

追憶は南の國の
曠野につゞく藍の花
沈める紅と暗緑色と
野川の岸にいと遠く
眼路まどひ行く甍の夢
其の果ての幽かにも
潮濆の想ぞ這ひ上る

打連れて野に來し子等の
石はいつしかに忘られて
今眼にうかぶは
つぶらなる眼と紅き頰と

○畑

越後　河島志加子

くれて行く水無月。
風はほのに陸稻の苗に吐息し、
柔かに夢をつゝむ夕靄は、
麥の切株の上に砒素の如く沁む。
うるみたる瞳をあげて黄に衰ふる夕よ、

あまき麥畑のなげきに、
獨りあゝさびしき鼓動を抱く時、
悅しげの蛙の聲は、
茄子の若芽に顫へたり。

美しく愁ふる夕、
わが蒼ざめたる心の底にひゞくモノトン、
うるみたる瞳は盲ひぬ。

○野はくれぬ

新潟縣　成田豐子

〈野はくれぬ、しづやかに
おそろしき、はた、歡樂の
眞闇まろがりものみなをやをらつゝみぬ
さながらの夢、世は沈默
事もなげなる。――――

〈春なれば、見よ、彼方
朧朧とさす月の梢、
かゝる時、世を倦みて夢に泣く人、
そは「敗殘」の黑き影呪の瞳
あゝわれも見き。
〈ものうとき、瞳あげし
をり沥きぬ、梵鐘たゆげ、死こそ迫れ――
冷えこゝろ、わが胸の毒血黑くろ
脈走る微のひゞき――さはれ呻吟
うなだれてわれは步めり。午後六時――

〈花みなは今ぞ、よき
香を吐きぬ―今日の「終焉」の
あゝ、そは黃泉へゆく人に似ていそ〳〵と
すぎゆく二ツ、らうたしや――雌雄の鳥
野はくれぬ……いま。

○夕

越後　河島伊與子

夕されば都會の空を覆はんとして、
沈澱せる零圍氣を閉ざす霧に、
ゆら、ゆら、と老樹の葉は冷かなるキスに囁く

かゝる夕の一刻を
高架停車場のカツエに
漂泊の厨女は立ちて街を見る。
ふと口ずさむ俗謠の哀調に、
エプロンはすゝり泣く――

あな、あな、窓の下の小さき花苑、
長き莖の上にと咲きたる
コスモスと百日草よ。

瓦斯の光はしばし純白の卓掛の反映にふるふ…
その斷續の微動よ顫律よ。

玻璃窓にほの見ゆるとろみたる夜の灯に、
あるかなきかのチヨコレートは匂ひ、
乳の香は染々とエプロンの斑點に欽いてあり…
あゝ俗謠は止みて女は疲れたる瞳を上げぬ。

○雲

麓の草

白い雲が閉ぢこめて、光もない
闇もない――靜かな宵
何の音もない〳〵
けれども――
雲は動いてゐた



詩の言葉（五）

鳥

あゝ南國のぬれ燕
尾羽は矢羽根よ、鳴く音は弦を
「春」のひくおと、「春」の手の
あゝ、よろこびの美鳥よ　（ダンヌンチオ）

姿は矢のやうに飛び、聲は弓弦のやうに力ある燕が、南國のはてから潮に濡れて來た、それで春のよろこびは空に充ちた、あゝうき鳥よと讃嘆したので、此詩は「海潮音」の巻頭にある。

「やをれ小雀女、人の子は
思ひしをれて嘆く世を
其方はひとり心安に
咏め聲してさへづる」と
さつさ、いよこの。
桂女　（泣菫）

桂女と小雀との問答の詩の初めの一節である、小雀女として、わざと女性化したので、桂女は桂の里の女であらう、さつさ、いよこのと云ふのは、小うたの間投詞で、調子を取つたまでゝ意味はない、咏め聲は、のどかな聲で、安らかに囀つてゐる態を云ふ、人の子は物思ふことを多いのに、そなたは物思はぬさまに面白く歌つてゐることぞと問ひかけたのである。泣菫氏には此外、小木曾女と、日雀女との問答もあつて、何れも「白羊宮」に收めてある。

よろこびの日
君が胸かゞやかの夢はあふれて
白日の湖とひらけつ
そが映ゆき水面に浮ぶ
わが魂はさてこそ白鳥
「愛戀」の香の流れに
身はもとろけ
かたち無き水に足搔きて
うつら〱　（葵村）

白鳥と云ふ言葉は使つてあるけれど、要するに戀愛の心持を表現したので、君の胸には光かゞやく湖水のやうに開けた嬉しい日に、私の魂は其湖上に翔る白鳥のやうに、自由に、たのしく、水上に遊んでゐると云ふのである、戀の夢現境とも云ふべき一種の心持を囚へたもので此詩などは文字を離して其心持だけを深く味つて行けば、さまざまの暗示が得られるのである。

星は星なる空の道
鴿は鴿なる環をあゆむ　（有明）

此句だけの意味は、星は星の軌道を廻り、鳥は鳥の行く道を歩むと云

ふのである。此れは「人は人とて」と云ふ詩の一節であつて、人は人の行くみちがあり鳥は鳥の行くみちがあると云ふやうな思想を、全體にほのめかしてある。

鳥は鳥とて羽づくろひ
人は人とてものおもふ　（有　明）

と云ふ句で、右の星は星なるの詩が終つてゐる、鳥は鳥で生きるために羽もつくろふ、天も飛ぶ、人は人で生きるために物も思ふ、苦しみもすると云ふのである。

水の面に影は漂ひ
廣ごりて、ころもに似たり
天なるや、鳥の通路
羽ばたきの音もたえ〲　（エルハアレン）

鷺が水上に影を落して下りて來たところの印象を歌つたものだ、此「鷺の歌」は一篇として見れば象徴詩であるが、此句だけ獨立して見れば深く象徴を探るまでもない、單に印象としても心持の好い句である。

わかうどなゆめ近よりそ
かのゆくは邪宗の鷗
日のうちに七度八度
潮あび化粧すといふ
伴天連の秘の少女ぞ　（白　秋）

鷗の鳥と云ふものは、水鳥の一種で、白鳥も同じことであらう、海邊にゐる鳥だから、一日の間に幾度も潮に浴することを歌つてある、是を邪宗の鳥といひ、バテレンの秘法を持つ少女になぞらへて、若い人等に近よるなと言つたのは、作者の詩的情緒を抒べたので、また一つの感興である。

鳥よ、お前が居ると胸の巣が暖い
けれども私は鳥を溫める爲ばかりに
生きてゐられないのだ
忘れることもあらう
冷たい血が巣に注ぐこともあらう
然うすると又逃出すだらう　（醉　茗）

此鳥は、美しい戀の鳥に相違ない、然うして此巣の持ち主は今の世に澤山ある。

菱の實喰ふ鴻の
岸に鳴く夜は萍の
白める花も燻むらむ　（夜　雨）

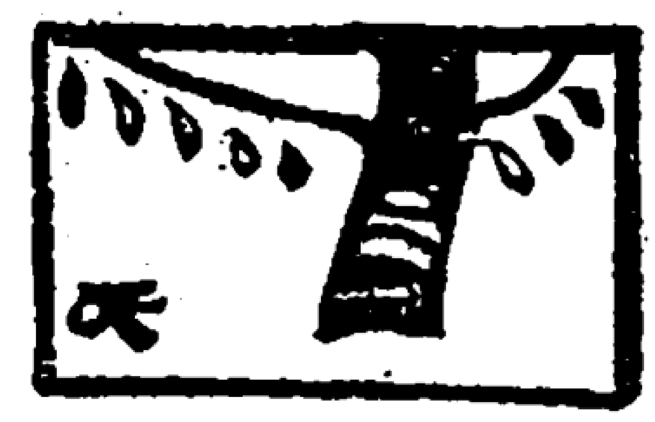
沼の岸に秋の夜を宿る鴻雁の、菱の實を食ふ頃には、何の花か咲いてゐる白い水草の花の色もくすむであらうと云ふので、暗愁がある。

彼方、綠の森の上に
千羽の鴉むれて舞ふ　（花　外）

千羽の鴉が森の上に舞ふてゐるのは盛んである。

小鳥でさへも巣は戀し
まして青空、わが國よ
うまれの里の波羅葦增雲　（オオバネル）

これで一篇の詩である、題は『故國』と云ふ、小鳥でさへも巣は戀しいのに、まして我が生れたハライソウは戀しいと云ふのだ。



木瓜

蘇生法師

△女子文壇もたうとう百號紀念を出すまでになつた。醉茗に招がれてこまめのと交りをはじめてから私には四年になる。雜誌の百號は知れた數なれど、其間に呑吐した寄稿家の數ととりあつかつた原稿の量は大へんなものだらう。今の高野學士(下妻中學出身)夫人重田春子君もたしか來た筈、ムラサキの編輯もよしたようだし、少しまた引張出したいものだ。信濃から來た吾孫子よし子君は先日亡くなつた。水野仙子さんはずつとあとの人らしい。

△陳きは新しきに代り、老いたるは若きに譲りて女子文壇の作家は終始かはつてゐる。殊に詩壇が最もひどい變りようだ。山田邦子が出てから長曾我部菊子太田きし子と代つて今は木村章子、港の女、金田よし子となつた、うそか事實か知らぬがやうやく詩らしくなつて來たと北原白秋君が言つたといふ金田代志子の最近の原稿には、黄泉をみよ、沈默をちんまく破れ壘をはじやう、昨夜をふうべ、捨小舟をすてこぶね、可惜をあたりおし、苦惱をこのぶとよませてある。人の書いた文におぼつかなき智識をたよつてルビをふうたとしか思へぬ。死んだ醒川がいつも野郎らしいと言つたことがあるけれど、私は醉茗と同じ和泉の生れなるこの人を尊敬したいと思つてゐる。

△「この歳十年相立申候」女の人は結婚と共に行方不明となるのが多い。去年から小川、横井、細谷、遠藤、眞柄、吉擇とつゞいて松風をうたはせ、今年は……天機たやすく漏しがたけれど近々くみどにおはとのこもらせ玉ふはそも誰々ぞ。「私まで○○さんによけいなこと仰しやつたでせう御自分勝手に人を嫁入らせて笑つていらすのね、怒つたつてはねたつて仕方がありませんけれど始末が惡い。年に幾度結婚ひろうして下さるの?呆れますわ、いゝかげんもいゝかげんにしておいて下さいましよ、まさかあなたは誌友結婚披露引受廣告係になつた譯でもありますまい」と手詰の談判をもちこんだ人がある。

△「誌友結婚披露引受係」何といふ名譽な肩書であらう、だまつてゐては役目にすまないから一つだけ御披露する。京は三十三問堂、佛の數よりもつと美人の多い都の川田益子君は近く京都の天地を引くりかへすほど盛んなる結婚式を擧げるといふ、且那は淺井さんと同じ横須賀の海軍さんださうだから羨ませる筈だ。それはよいが蜜月の旅を常陸に及ぼして法師を訪うて下さるのは甚迷惑する、美人には面會謝絕の立ふだもあれど前以て豫防線を張ること仍て如件。

△なぜまた君はさう惡口がいひたいのだと醉茗はいふ、なぜまたタネをこさへて來るのだと自分は答へる。小堀八重子といふ人から同情を失うてしまうぞとの威嚇もきかされたが、同情にはもう食傷してゐる。眠いたり瀉したりしたために拂つた藥代は私にとつては生涯の重荷になつてゐる。「クリスチヤンのくせに夜雨は女征伐をする」と書いたのが來た。阪東太郎先生によつて夜雨征伐の企があつたとは知つてるけれど僕未曾て女征伐をもくろんだ覺えもないし、ヤソ教に入つておかうぞりを頂いたためしも無い。其他今度の投稿には多く「蘇生」のうはさが出てゐる。十人に一人は私の名を書きこんであつたから皆沒書にした。「大家の若樣とわれらのやうな貧乏書生とは違ふ」ともあつた、「お年は三十三と仰しやるけれど頗る好男子二十五六にしか見えず、お家は音に聞こえた𨦇

家」とかいたのもあつた。つい目の先の下館の人だから手がつけられない。

△手がつけられぬといへば大和の靜子さん曰く、どうして私は結婚後かう馬鹿になつたんでせう、まるで夢のよう、只々夫の愛に醉うてゐるのだらうか、いゝえ、眞心を以てつくし合うてゐるのだ、決して虚僞の愛ではない、……私は影の霞に消えるまでお見送した。なつかしとみてぞわが立つ背の君はもやにかくれて雲雀なくなり」又ぞろお富さん——岐阜の質屋の孃さん、赤椿の君又の名瀧夜叉姫が口をふさぎかけるだらうおれは辭職したくなつた。

△ドンドンぐぐ、定めし穴居ましますコンくさま大皷の音にそゝり立てられ、這ひ出してうんと云ふ程油上げ豆腐召し上り給ふ事ならん赤のご飯が不足だと云つて娘たちを、たらかし給ふな。と祈り玉ふは近江水口細野の孃さん(細君?)である、狐は男を誑すものなれ、女に石地藏をしよはせた話も聞かないじやないか。

△ハムレットを見るほど、たらくはしないと氣焔を上げる人がある、かと思ふと維盛の傍に突伏してるお里と見て定めしお伽の人ならんと六代御前が言つた昔の人は露骨だといふ院本通もある、六代御前は七つか八つのお兒さんである。更に記者諸君を現代的詩人風の五紋、フロツクの紳士風、初々しい若樣と數へ立てた人がある。醉茗先生の首が菅秀才のとすげかへられるかどうかは疑問だが、白羊大人の八の字はデカダンに通用しさうもない、いはゆる發賣禁止の「或る女の日記」「追懷」の作者大浪先生なら一人で皆引受けてもいゝのだけれど。

かう言へば三先生のおこるとは先刻承知、後難の程少々おそろしけれど、子供の五六人づゝも有るお父さんだからまさか決鬪をしかけもしまい。「君子ぶり正人がるは君の勝手だ、眞心は君ひとり有してるものゝように、何だい」とでも言つて來るか知ら。

△ある人の作に大河内恒子が電車にのると醉つてしまつて蒼白になると書いてある、月の明るい晩などはよく歩いて戸崎町まで歸るさうだがY電車を避けてよく歩く女だ。それをまたKがあの人は生れがケチンボなんだからといつたのも意外だが、一體利巧ぢやないのですよと罵つたので益おどろいた。Mは寫眞屋の看板になつてるといふ、藝者ぢやあるまいし、氣が知れないと思つてゐたら、うそであつた。アクトレッスだと評したり、裸體畫のモデルとなつてるといつたり、女同士のお茶番は猿芝居よりも面白い。

君を誠む耽る勿れ花月の夜、君を誡む耽る勿れ歌舞の宴、七砲嚢邊浪萬里、帆檣影裡月三更、一封欲寄相思語、涙落枕頭聲有聲・(榎本辰子)明治にもこんな人があつたのに。

三月廿六日　桃咲く。

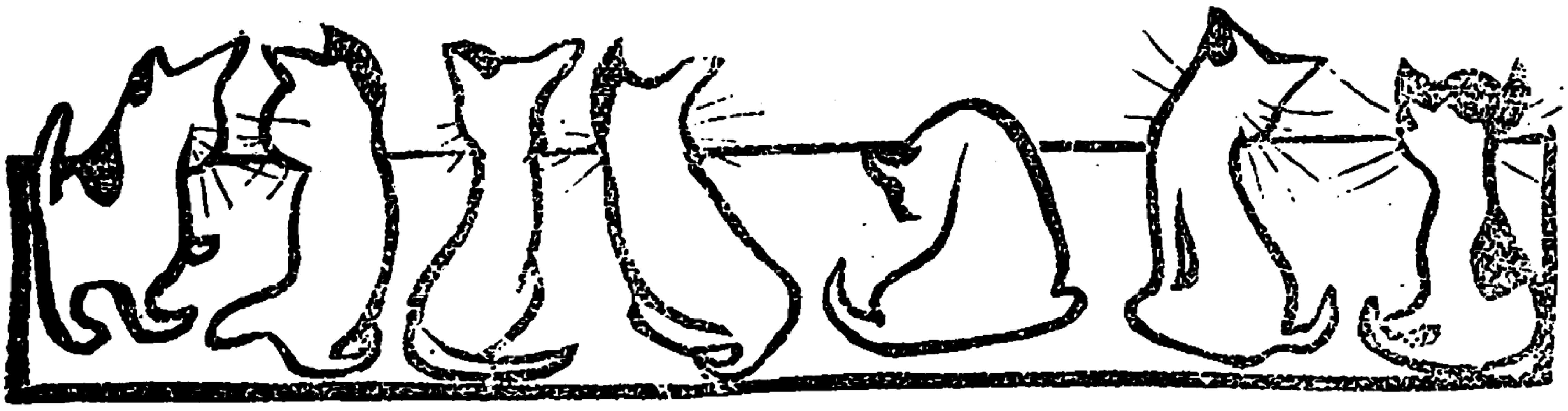
若葉の答

醉茗

▲此の七日の誌友會に夜雨君は、或は來るし、或は來ないと言つてきてゐる、何しろ蘇生事件以來、母堂が心配して、うつうり旅はさせないから、尤もである、併し今度は氣候も好し、一年振のことであるから成可く出席を勸めてみやうと思つてゐる。

▲蘇生といへば、あのつゞきを本號に載せる筈であつたが、書くのが嫌になつたと云ふので、中途休みになつた、併し二三ケ月の中には執筆が出來るだらうと信じてゐる。

▲此號は紀念號と云ふだけに投稿は隨分集つたが、記事が多くて載せ切れない、其爲に好い作で出ないものもある、其作者に諒察を乞ふ。



動物に對する感想

溝口白羊選

○名知らぬ鳥

西多摩　よし子

焜爐の冷えてゐたせいか火種の少かつたせいか、手のくたびれるほど煽いで、やつと堅炭へ起りついたから、澁團扇を板の間へ投げるやうに置いて、裏の外緣へ出る。いつの間にか止んだ雪が、ろくに照りもしないのに、太陽の力を待たないといつたやうに、重さに堪へないやうに、水を含んだのがばらばらと廂からも、花のきたなく見える梅の木からも、褐色に雪やけのしてゐる稻荷樣の大きな杉の木からも、落ちて、ちらちらと降つてゐた時より騷騷しい。丁度うちの屋根の上と裏の家の庭と同じ高さなのだから、その間は人には上り下り出來ないほどの傾斜になつてゐて、熊笹や石菖や何かで草の枯れた時でも眞青になつてゐる。さつきまで雪でまつ白だつたのが、まだらに青くなつてところどころにあらはれてゐる、石までなまめかしい。と思ふとチチチと小鳥の鳴きごゑする、とこかと思つてよく見ると、水草のやうになびいてゐる石菖や雪の上を、瑪瑙のやうな紅い色の羽の柔かさうな鳥が二羽だと思つてゐると、又上の方から二羽下りて來て、何物かにあやつられるやうに、ちよつとも、とどまらずに小鳥特有の落ちつかない擧動をしてゐる。嘴を地にあてるけれど、草をくはへるやうすも雪を喰べるけしきも見えない、ああそんなことを思はないで、あのふつくらした抱いて見たいやうなあたたかさうなからだ、美しい羽の色よく見ておいて、こんど學校の先生が來たら名を聞かうと足の先まで心をやると、あまり細く痛ましいやうな氣がして、早く梅の木へでも飛び上ればよいと思つた。そのくせ追ふ意氣地などはないどころか、自分の足音もさせずに立つてゐた。こんな窪いところへあのひろい空から追はれたやうに飛んできて、私の耳へは快い音いろがひびくけれど、心へは悲しい歌が傳はる。はつと息を吹きかければ驚くだらうと思ふほど近くまでも草の上に足をふれながら飛んで來たのもある、捉へられるのならいいなあと思つたのは十年も前

のこと、近づいてもほんとうに近づきがたいものであらう。懷かしいけれど淋しい、戀しいけれど悲しい、と、どの小鳥を見ても思ふ。まして名を知らぬ鳥のはがゆさ、春雨のふる明るい空を仰いで、月のありかを思ふよりもはかない心地がする。私はもう眞紅に起つた火の傍にゐる。さつきの小鳥はまだ雪をあさつてゐるだらうと思ひながら葱を刻みはじめた。(入賞)

水際立つてスツキリとした書振が嬉しい、雪の日の仄かな暖みが淋しい心に何ものかを囁くやうな氣がする(評)

○鳥の聲

京都市　しづか

ちどり

鴨川をへだてゝ燦く木屋町の灯の美しさ、さーと河床のあちこちに淸々しい音を立てゝ、暗き夜を色無く寂しく水が走る。千鳥が二條の橋の下邊りから鳴き出して、遠く河原を渡つて消えた。私は十年餘も川端近う住居しながらまだ一度もこの鳥の姿を見た事がない河原の草むらに月見草のほのかに匂ふ夏の夕、よく私は一日の勞役に疲れて、御幸橋を渡る時、橋の下から蛇籠の蔭から、夕闇に白く光る汀から、鳴きおこして、さて鳴き交ひ鳴き交ひわたりゆく美くしい聲の主を見とめ樣として、幾度立ちつくしたか知れなかつた。

しかし畫に馴された眼は何時か小さな丸こい可愛い鳥が目の前の暗がりに無數にひらめく樣に思はれる。

ほとゝぎす

門を入ると左手に直ぐ連翹、堂の前には紅梅があつた。優しい花の樹許りかと思ふと八つ手の暗綠色が如何にも寺らしい感じをよぶ。紅梅や白梅や八重櫻やすべて散盡して、新綠の香が高かつた五月の或る夜、降る雨のつれ〲に合の襖を開けはなして、寺の人々は色々の追憶談を語り合つた。和尚樣は人の好い快濶な方なので話がはづむにつれて折々高い笑ひ聲も交る。話半で誰だつたか、昨夕見た夢の話を始めた。おうさう〱と和尚樣は思ひ出した樣に、一昨夜あたりからほとゝぎすが、鳴きますよとおつしやる。ほとゝぎすと聞て、先刻から默つて居た私もつひつり込まれる。あの南の森でね、昨夕も一時過ぎからしばらくでしたけれどと仰るから、まあ何と鳴きますのと伺ふと、さうだねつて考へてゐらつしやる。矢張りほぞんかけたかつて云ひますかと、御弟子は笑ひながら尋ねる。美しい聲でね、さう云へばさうも聞こえるだらう、まあ今夜から氣をつけて御らんと云つて寢所へお入りになつた。私は又肩を裂く樣なと云ふからさうだと許り思つて居たと云ふと、そりや飛ぶ時さと誰かゞ笑つた。

その夜は生憎啼かなかつた、二三日覺め勝な夜がつづいて、ある雨後の美くしい月の夜にとう〱それらしい聲を聞いた。透き通る樣な玉をころばすとよりは

や丶鋭かつた。長い間の憧憬は聞く時の心を夢の樣によはしめて、うつとりと欄干に立ちつくした。聲はしばらくで止んだ。寂しかつたけれど、醉へる儘の心を抱いて、更に美くしい夢の衣に包まれて寢た。

今の住居に移つてからも一聲二聲更くる夜の空を鳴き捨て行く。帛さく樣な、昔私が想像した樣な聲はその夜頃稀に聞かれるけれど、寺住居の昔、森の深みに聞いた樣な幽玄な音に醉ふ事は出來なくなつた。折々はその姿を想像する事もあるけれど、同時に胸の中には寺住居の五月の夜のかの幽玄な心持がうかぶ、そして更にその姿迄も見樣とは願はない。私はむしろこの聲の主を神秘の中に、我が美くしき想像の中に、永劫の未來かけて納めておきたいと思ふ。（入選）

ほとゝぎすは夫れ程にも思はなかつたが、春雨けぶる京の夜の千鳥は何となく床しいと思つた。……我が好むところに侫する爲かも知れないけれど（評）

○夢見る動物

夢見る人

春日野は一面若草が萠えて、木瓜の花や春草の花が咲いてゐる。杉の根には茶の木のやうに丸い灌木が芽を吹いてゐる。私は勞れた足を若草の上に投げ出してゐた、私のつい傍に五六匹の鹿が、若葉をもれる光線に懶うさうに眼をつぶつて居た。私のうしろは丸い丘になつて、幾線かの徑が若草の間を縫つて居る。丘のむかふの寺院の白壁に、日光が射して瓦家根がキラキラと光つてゐる。

遠い所にも鹿がかたまつて寢てゐる。

杉の杜にや丶離れて咲いた櫻の花瓣が、音もなく落ちて、濕地らしい土を白くしてゐる。

私は何だかボーッとして夢見るやうな氣分になつたと過去が眼をあけて近づいてくるやうで、耳の奧には何か古い樂譜が鳴るやうに思つた。其の時一匹の鹿は懶うさうな眼を私の方へ向けて居た。「夢を見てゐるやうな動物だなー」と私はふとこんなことを思つた。

そして此時の美しい夢のやうな情調に、如何にもふさはしい動物だと思つた。それは過ぎし日の現象であつた。今でもあの時の情調を思ひ出すと、あの鹿の美しい眼が、じつと私を見てゐるやうに思はれる。

夢見るやな眼！ほんとにさうだ、私は鹿ほど春の野の感じに適した獸類はないと思ふ（評）

○犬

やなぎ

私がまだ幼い頃、近所にきくちやんといふ美しい娘があつた。私はきくちやんが大好きで、年ごろの娘さへ見れば花ちやんでも絹ちやんでもみんなきくちやんやと呼んで居た。その家にカメといふ茶褐色の大きな犬があつた。私は犬が嫌ひだ、私がきくちやんの家へ遊びに行くと、いつでもその犬めがのさり〳〵軒下から出

てくる。私が恐がつて逃げて來るときくちやんが追つて來て、負つて行くのだ例であつた。然し犬が始終きくちやんの後をついてくるので、私は脊中でお臀がむづ／＼して堪らなかつた。

きくちやんに負はれるのは嬉しかつたけれど、此犬が後につくのが何より苦痛だつた。それでも一人ぼつちの私は、きくちやんなつかしくつて、ひとりあそびに倦むと、きくちやんの家へいつて、お仕事の邪魔をしてゐた。

袂にはらむ西風に落葉がから／＼と舞ふ寒い冬の日例のやうに、ひとり唄をうたひながら遊びにいつた。前の道に立つて「きくちやん」と呼んだけれど返事がない。恐る／＼庭へ入つて見ると、いつもの軒下に寢てゐては耳をぴく／＼動かして氣味の惡い眼をあげて、のさり／＼出てくるカメの姿が珍らしく見えないので居ないのかと思ひながら、又きくちやんと呼んだ、返事がない。引つかへさうとしてまた椽先へいつて、もう一度呼んで見た。すると、眼を泣き腫らしたきくちやんの悲しさうな顔が障子の外へ出た。「きくちやん！どうしたの？どうしたの？……」と私は這ひ上つてきいた。「あのね、カメが死んだの、カメが——」「カメが？ほんとうに？——」「井戸へ落ちて死んじまつたのよ」といつてほろ／＼泣く。私はまあ恐い犬が死んじまつてよかつた、よかつたと思ふと心がゆるんで、落ちつきもなく嬉しがつた。きくちやんはしく／＼と泣いてゐる。嬉しげな私が憎らしいといつた風にその日は構つてもくれず、つまらないからすぐ歸つてしまつた。それから何となく足が遠くなつた。

其翌年の五つの春、踊りを習ひはじめた頃、赤い大きな扇を物めづらしく袂を抱へて暫く振できくちやんの家へ遊びに行つた。散々遊んで歸る際に、お椽を下りると椽の下からカメが後足を嗅いだ！姿も見ないに直覺的にさう感じたのだ。ギヨッとして逃げ出さうとするとどうしても足が出ない。あせつても／＼、犬の鼻に吸ひつけられたやうに、二本の足が自由を失つて、抱き締められたやうな恐怖にブル／＼慄へながら、力いつぱい扇を後へ叩きつけると足が出た。けれどやうやう一歩二歩——食ひ入る樣な恐怖に追はれて、悶掻き悶掻いて我家の庭へ入るや、バッタリ轉んだ。身を揉んで立たうとする刹那！がぶりッとばかり畜生が足へ食ひついた。「恐い！」と、窮命の聲をあげると、「夢だよ、夢だよ。」

母に搖り起されても、怖恐が去らないで慄へながら泣いてゐた。その故ではないけれど、それから私は永い間病んでゐた。病んでゐるうち中、その夢を思ひ起しては、拔けないとげをさゝぐるやうな恐怖に惱んだ。今でも犬を見ると、電氣にでも觸れたやうに、その時の恐怖を身內に感じます。

幼い時自分も犬は怖かつたが、そんな夢を見た事はない。事實かも知れないけれども「夢だよ、夢だよ」は平凡だ（評）

○雀

金澤　山梔子

去年の五月だつた。或日二羽の雀が廂のところへ來て凝乎と廂から雨戸から方々をしらべて行つた。私は寢床に横つて無言つて眺めて居ると、雀も私は動かれない者だと安心してか、翌日から枯草の髮の毛だの、檜の葉などを持つてきては巢づくり始めた。半分位は椽側へごみを落すので、春がお掃除甲斐がないとこぼして居たけれども巢を造るのは御目出度いのだ、病氣が癒るしらせかも知れないと、近所のお婆さんが言ふので、母などは大喜びで、ご飯時には屹度欄干の上にご飯を並べてやる。雀も他の人には恐れて寄りつかないけれども、私だけには氣を許して枕もと迄來て遊んで行く。徒然の慰みによいお友達になつて喜で居ると朝などは早くから起きてチユッと大きく啼いては羽ばたきをし。又一寸啼いては又羽ばたきをするなど、ほんとうに可愛い事をして見せた。もう巢立つ頃になると欄干のご飯だけでは足りなくなつたのか、ご飯がなくなるとつーと遠い所へ飛んで行つては何かしら餌を拾つて歸つて來る。親雀の姿が見えると、巢の中から幽かな啼きが一時に聽てえて、小雀らがさも嬉しさうな樣子を見せる。しまひには親雀の歸りが待たれないのか喙を出して餌を待つて居る。さうして食べること食べること音迄させる樣になつた。もうぢき巢立つだらうと待つて居ると、或る朝一寸の油斷の間に、雀はいつしか巢立つて、椽側のところに小さな毛のほやほやした子雀が六匹並んで居た。皆のものが面白がつて側へ寄らうとすると、親雀は悲しさうに下を覗いては啼くので、路次のところへ氣をつけると、そこに一匹飛べないのが落ちて居た。雀の啼くわけはこれだらうと言つて、連れてきて室の中を飛ばさうとしたけれども、矢張り飛べなかつた。柔かい暖かみは通つて居るけれども、啼く事も出來ないので、御飯や水を取つてきていろいろ介抱してやつたら、やつと元氣づいて親の側へ行つたかと思ふと、一度にぱつと八羽の親子が翅をそろへて飛んで行つた。それから再び巢へは戻らなかつた、けれども今もなほ覺えのある雀が來て啼く。

愛らしい點を採る、併し水平線以上の作ではない（評）

○涅槃

葛の葉

大聖釋迦牟尼尊者、涅槃に入りたまふ時、百鳥百獸御枕邊に嘆き悲んだことは、物の繪にも見、老いたる人よりも聞いて知つてゐる。

其鳥は空に飛び、其獸は山に歸つた、佛滅後二千二百有餘年、鳥の翼は脆くなり、獸の牙は弱くなつた、法燈の影暗きところ、一幅涅槃の圖はおぼろ〳〵として、鳥獸の象は將に拔けんとし、色や、まだらや將に消えんとしてゐる。



自ら救はん（日記）

露花女

午後一時頃の反射まぶしき温室のガラス戸ごしに美しい西洋花が、春の雲のやう、和らかな色の重なりに夢みる匂ひは、入口のドアに立つた私の胸に、泣くにも泣けないやうな或る大いなる悲しみを湧かせる。「早く入りませうよ」と、幼妹はせがむ。「又、今度ね、今日は、お雛樣が、待つてらしてよ、早く歸つて、おんぶして、やつて頂戴。おつちやん、何處へ、いつたらうつて、きつと、お雛樣、泣いてゝよ」「ぢや姉ちやん、一日、この着物、着せといてね、母さんだつていゝつてたわ」「えゝ」私は額に手をかざして、ちよこちよこ行く華美な被布姿の妹の後から、まだ色彩に乏しい、花畑の小徑を縫うて、常盤樹の陰の茶屋の前の廣場に出た。ゴシック風とか、ルネサンス式とでも云ふのか、川に近い、大きな建築物の傍の砂原で、白ズボンの給仕が、靴ばきの儘、相撲を取つて居る。私は吸ひ付けられるやうに、ベンチに腰下して、ばら／＼と、雜誌の頁を繰つた。自分の文章は、一番手に、汽船の内で、讀んでしまつたので、さのみ胸騷ぎはしないが、他をみても、さつぱり氣乘りがせず、自然と其處に引きよせられる。幾度も／＼評を讀む。消化力が足らぬ、安じてはならぬ、あゝ有難い、先生のお言葉まこと、Ｓ先生は、よく私を解して、いらつしやる。去年、星が岡の集りに、才なき身を恥ぢて、まゐらざりし私は、絶望の極悲劇となり、救はれて、愛他主義に變じ、あれを書いたお正月頃は、反抗と自尊との混合した、一種の樂天病に、かゝつて居たのでした。でも、どうか、御安心下さいませ、唯今では、ほんとうの私を知るやうに、なりました。あの事以來、絶對に讀書の自由を、うばはれてからは、つく／＼奥深い世間を見、自己解剖に耽りました。さうして、一つの悲しむべき答を得ました。あゝ、何といふ小さな醜い蟲の心よ、美しき花さき匂ふ藝苑の夢にあこがれ、哀むべき犧牲となるをも覺らずして、徒らに、啼き悶えしか。されど、一度この夢の香に魅せられし身は、まだ醉さめず、あてもなく、色なき曠野をさ迷うて居りますものを、どうぞ御察し下さいませ。「根氣は眞才なり」とか、たとへ如何に足遲くとも、愚かなる我を守りて、ひとすぢ路を、たどらねばならぬと、固く決心いたし

てをります。どうか、お笑ひ下さいますな、これが、私の眞の叫びで、御座います故。家へ歸れば、少しも讀めないのは目に見えてはゐるが、餘り遲くなつてはと、本をしまつて、園藝會社の門を出た。明日は、先生の御宅へ伺ふ日、吃度、お小言を頂くに違ひないであらう。一體世間的經驗の淺い私が小說を書くのは柄にないことだ。どうも不安だ。堤の傾斜には、青々と草が萌えて、△△邸の手前の入江は、キラ〳〵と、日を反射してゐる。何といふ、まぶしい自然であらう、……………深紅のリボン、びら〳〵させて、妹は嬉しさうに私の前をゆく。ふくらかな、りんご色の頰、大きな澄んだ瞳、紅さしたやうな締つた口、何處となく影濃い、强烈な日向の運命をもつた子であるらしい。十五も異つた姉と妹、目に見えぬ大いなる力は、斯うした內にもだん〳〵と、二人の間を裂きつゝあるのであらう。ふわ〳〵吹く、やはらかな風に、畦の若草は、うれしげに、靑い生の輝をふるはせ、靜かに〳〵足の下を流れる水に、あはたゞしい、新開地の生活の響が聞える。キラ〳〵する光線を透して、遙か彼方の大楠樹の陰なるは、なつかしき母校、幼き我が八年の夢は籠つては居れど、おめ〳〵前を通らるゝ身か、大恩ある舊師の君よ、軈て十年の後には……と、唇をかんで小川添ひの並榛樹の下を、うなだれて、罪人のやうにたどつた。噫　何といふ情ない姿であらう。もしこれが、我が一生の態度であつたら。投書家たるも、又難い哉。幸に見出されても、力足らずば、私の樣に人しれぬ苦痛を嘗めねばならぬ。笑止や、いかに悶ゆとも愚かなる汝が前途は、淸き水底の石の如く見え透いてゐるものを、と、お笑ひ下さいますな。賢ならざる私には、一度、天を指して誓ひし自己に對する節操を、破る勇氣はありませぬ。より深き愁よ來れ、悲しみよ來れ、これからの私は、決して其からのがれやうなどゝ卑怯な心は起すまい。まことの世に光と影の入りみだれし意味深き活きたる書なるを、空のみ仰ぎて、泣き笑ひすとも、時の絲は刻々に我等を底しれぬ穴に引入るゝであらう。むしろ飽迄、光を吸ひ、影を吸ひて、大いなる悲しみに活くる。其こそ、やがて、眞の價値ある生活では御座いますまいか。ふと空を見ると、うるほひある桔梗色の夢の國にも、大いなる不思議抱ける白雲の一ひら二ひら、美しさ增す、薄きその陰影には、淡いかなしみをおとなしく守つてゐる…………

(――三月三日――)

床の間に活けた白梅の强い匂ひをかぎ乍ら、他所行き着のまゝ、裁板の前に坐つて、先生の許から持ち歸つた「操」の表紙を、泣き度いやうな、寂しい心もちで眺めた。…………

「お年の割には、よく出來てますけれど、何しろ本屋も商賣ですからなア、之をもつて、直ぐといふ譯にはいかんでせう。かういふと、貴女をおだてるやうですが、腦がいゝから、あせらずに勉强なされば、いつかお出來になる事が出來るでせうが、もしお家の人がですね、文學を嫌ふ許りでなく、壓迫までも加へるやうなれば、男子と異つて婦人が反抗してまでやるといふのは、あんまり感心されませんね……」と、さつき、先生は仰有つた。何といふ婉曲なお言葉！淺才なお前のやうなものは、早くあきらめた方が得策であるといふお心なのであらう。とうより、素質のないのは自覺しては居れど、どうした因縁か、私は、文學と斷つてとは出來ない。壓迫されゝばされる程、益々、執着の熱度を高めるばかりだ。一寸、尺をとつて本の厚さを測つて見ると、丁度、三寸八分五厘、噫々……何と空しい私の血よ……涙よ……もつと短いのを作つて、△△雜誌にいつて見よと、紹介狀まで下すつたけれど、悲しいかな、私にはまだ、其れだけの力がないのだ。いたづらに早く、實力不相應な虚名を博すのは、愚かな至りである。まづ、こゝ六七年は、無名投書家として、及ぶ限り努力しよう。其れで成らずば、更に十年二十年、他人は狂と笑ふとも、我がゆく路は、死を決して、拓かねば置かぬ。母は、勝手の方から來られて

「また拓まつた。だから云はないこつちやない、仕方がないサ、何も元手遣つてやつた仕事ぢやなし、くよくよすると、きかないよ。今は春先で、逆上せたがる時だ、又、去年のやうな事があると、どんなに親不孝だか、もう決して、これは氣に掛けなさんなよ」としみ〴〵云つて、くる〳〵と古新聞に包んで、さつくと、二階にもつて行かれる。

あゝ……ほんとうに悲しかりし去年の今頃……血みどろな娘……おろ〳〵と泣く母……ぐる〳〵と目の前に廻る幻から、無理に瞳を外らして、縁側のガラス戸越しに、庭を見ると、まだ芽を吹かぬ椽の木に絡んだむべかづらの葉が、午後二時頃の光線に、鮮かな明暗を見せて、垣に近い槇の樹の邊りで、チッ〳〵と、暗い聲がする。垣外の雜木林に隱れた近所の烟突から、も〳〵と、褐色がゝつた雲が湧いて、とろ〳〵と、

まどろんだ空へ、まつすぐに上がる。

性急な機械の響、重さうな荷車の音、ゆるやかな鷄の聲、勇ましい木遣りの聲や、大工道具の音等が、おだやかな空氣の内に醒め、きずついてゆく、今の武藏野の歌を合奏してゐるやうであります。チツ／＼と、小鳥の聲！さあ、いつまで斯うしちや居られない。さつ／＼と着物疊んで、下駄の土落して、又裁板の前へ坐ると、風が出たのか、烟突の烟が、ふー／＼と、横ざまに吹きとばされて、さら／＼閃めく緑のおどろき、眞に晝の林は美くしい。

（――三月四日――）

曉の神オーロラが、美王子チソヌスを戀されしも、斯かる朝か、瞳は自然と、輝きを帶びてくる。心臟の鼓動は、段々と、高まつてくる。深いねむりから醒めた木の葉は、一葉毎に、白い生命の光に息づきて私を繞り、み空なる白雲は、炎色の反映に咽びて、薄黄金色の陰もてる大陸雲の下に、ふわ／＼と、少女のやうに嬉んでゐる。夢に浮ぶ古ギリシヤの國は、ローレルの樹匂へるオリンプス山の、まだ明やらぬ樹立の奧の館より、輝ある火把さゝげて、しづ／＼と現れ給へる、女神オーロラの神々しきみすがた……たゞ其の美しきみすがた……嗚呼、とげられし戀の墓場の夕ぐれ！私は、其の鋭き、グラスハツピースの悔の叫びを夢なれと願ふ。見るまゝに、雲も林も、あはたゞしい變化をしつゝ、爛々と輝き出づる一個の大いなる光體！地球のものよ働け！いざ働け！私は、はぢかれたやうに水桶下げて臺所に入つた。

（――三月五日――）

一篇二百四十二行、今其八十五行を削る、かくの如き大作に對して絶對の優遇を爲し得ざるを悲むのみ、君が藝術的煩悶に陥りしことは酔茗に聞き、豐富なる文字、絢爛たる色彩、なほ足れりとせずして「無名の投稿家」に伍するを甘んず、欽すべき努力よ。文學はすでに娛樂にあらず、詩もまた賣品と爲れり、友と與に十年のむかし酔茗に效へられて、詩を作りはじめし時、かれ等には名利の念無く、多く讀まれんことをすら願はざりき、人々みづから力めてたゞたのしんで集函を爲ししなりき。天もすでにわが心を容れず地も亦わが身をいこはしめず、やる方なき苦痛をこらへて今さへ生くるは酔茗い賜ものなるなり。詩に走らずんばわれに狂ありしのみ。知らず君が生きんと欲する世界はよく君を慰めて終に安らかならしむるや否や　醲肥辛甘非眞味。眞味只是淡神奇卓異非至人。至人只是常。地之穢者多生物、水之淸者常無魚。故君子常存含垢納汚之量。不可持好潔獨行之操。露奇露異者無遠大之識、苦節獨行者非恒久之操、家庭有個眞佛。日用有種眞道、人能誠心和氣愉色婉言、父母兄弟間形骸兩釋意氣交流、勝於調息觀心萬倍矣。チニアスにやぶさはすでに從めたし、靜思せよ、くるしめる子よ　夜雨評）



俳句

内藤鳴雪選

○（天賞）

春の夜や二人して書く歌日記　麹町　橋本廣子

○（地賞）

琵琶の絃きれて夜寒の初かな　伊豆　鈴木けい子

○（人賞）

雛一つ背きておはす灯かな　北海道　上原ちよ子

秀逸

散る花に心小さき少女かな　近江　須川まさ

木蓮の一ひら散りぬ春の月　相模　木村涙花子

春寒の青葉煮てゐる厨かな　丹波　隅田禮子

春風にての川上の人戀し　相模　中村みほ子

菖蒲草ふくや古人の懐かしき　京都　永井とし為

五月雨に浮くや水田の苗二寸　松本すみれ子

花紛々白酒を賣る雛哉　愛知縣　朝倉ハプリ

桃の咲く窓よりもるゝ梭の音　伊豆　土谷すゞこ

落椿拾ひてあそぶ妹三人　淡路　内海千鳥子

語るにも人なき山の櫻かな　京都市　國廣櫻子

小菅笠ならびし雨の田植かな　京都　要司村福子

若草の芽立ぬ程の寒さ哉　熊本縣　富野美惠子

梅かをる杉田の丘や薄月夜　信濃　白菊女

君が肩我背といはず花のちる　岐阜　蔦の葉

繪草紙に虻鳴く奈良の小店かな　京都市　中野絹子

温泉の窓に夢のやうなる唄もれて　信濃　白蓮女

物言ず別るゝ人や春の月　信濃　ひなげし女

南朝の正しと語る櫻哉　近江　須川しげ子

木の芽吹く春も最中の月夜哉　羽前　木村松風

春雨に閉込められて茶の湯かな　能登　哲子

一聲を殘してきじの行衛かな　能登　さとし

船普請桃咲く磯の長閑なり　茨城　田村かね子

松が根に落る椿や廣隆寺　京都　三宅壽賀子

京五山春草生ひて彼岸かな　山城　木の花

如月や芹三寸の水温む　鳥取　櫻草

春風に京の舞妓の笑渦哉　小石川　清水あき子

よき水の筧つたふて桃の家　宮城縣　齋藤那代子

雪の朝色とり〲の頭巾着て　越後　奈山木

行く春を橋のたもとに惜み鳬　宮城　波瀬河紫葉

門しめて夜寒むの風呂に入にけり　仙臺　増澤邦子

君を思ふ胸のひゞきや春の雨　宇都宮　きく子

春雨にぬるゝ燕のかた思　和歌山縣　梅香

渡り鳥日本海のうらゝかさ　神戸市　足立春子

千兩の馬失ひて逝きぬ秋　同　同

朝霞鳥井ばかりの宮居哉　周防　河野輝子

野を渡る袖に風あり初袷　足利　きしの柳

油斷して春は行きけり春の歌　長崎市　永井カネ

菜の花や西三條を立出て　長崎市　永井主子

雛まつり昔をかざる廐哉　岡山市　立岡居之

のびる芽の見ゆる様なる春の雨　尾張 綿原竹露
あたゝかや芹喰ふ牛を叱りつゝ　名古屋 瀧本逸子
梅の下馬上ながらに連歌かな　岡山市 田上桃のむら子
暖や一枚脱ぎて春の汗　大阪 田野しか子
人もなく花毛氈に舞胡蝶　大阪 田野靜子
捨てられし人の涙か春の雨　空とぶ鳥
水仙の花に夢ある夜月かな　新舞鶴 田中乃惠子
濱市のはてたる春の寒さかな　茨城縣 來栖花都子
戀猫の聲も止みけり春の雨　京都市 平井千代子
荒馬の立髪長し春の風　長崎市 永井圭子
ほの〲と晴れわたりけり午まつり　備前 佐久間りん子
妹の花手折りけり梅の花　備前 佐久間みどり子
淡雪や越路女の聲のよき　鳥取 櫻草
紅梅や若殿原の太刀細し　西多摩 岡野ヨネ子
春の水城の出丸を廻りけり　西多摩 岡野伊智子
落葉頻りに月に啼く猿あり　土佐 五百蕨幸子
行春の嵯峨の泊りや雨靜か　神田 石田美子
なつかしきもの、二つよ雛まつり　淺草 みやこ鳥
鯉のぼり風に流れて藏のかげ　本郷 植田みち子
伊勢の雨大和に晴れて花の旅　深川 佐久間貞子
病して東風暖き枕かな　尾張 銀波
君戀し浮世は西と東風　尾張 銀子
柳出て櫻に渡る日中かな　大和 千里
むさし野に月は落ちたり冬木立　南千住 吉田清子
春たけなはにかすみの海や魚の飛ぶ　淺草 藤井葉津子
菜畠や牧場に出づるうねり路　淡路 留子
麗や海いつぱいに帆の數が　淡路 木田よしゑ
恐ろしきまでに寺内の草茂る　淡路 柏木こはる
獨り居の座敷の隅の落椿　淡路 神田里花
花に降る雨見る宿の小窓哉　土佐 桂花
茶の煮えて隣をまねく日ながかな　群馬縣 すみれ

春雨や一滴二滴傘の上　渡島 田山清子
ちよろ〱と音も嬉しや春の水　廣島縣 後藤喜美枝
折々は鶏なく梨の月夜哉　兵庫 紅雀女
草もちの春に梅ちる日中哉　とよ子
鶯や清涼殿の物靜か　福井 明の星
梅散るや海苔干す磯の夕曇り　千葉 伊藤美濃子
海棠の灯に日記書く千鳥かな　千葉 伊藤美津子
永き日や菅の小笠を草の上　香川 大井久子
初春の光満ちたる山家かな　新舞鶴 菅幸子
墓野の中に小川の霞み行く　駿河 勝又和子
春の日や海女があやつる若布舟　淡路 山川しがらみ
夕月夜花のとんねるくゞりけり　小田原 中村貞子
月映し櫻の下の檜燈籠　伊豆 磯ちどり
野遊びや小桃源の一むしろ　麻布 小倉ふみ子
春の夜や障子にうつる琴の影　神田 榎田道子
憧憬れて夢みる奈良の春の月　京都 内藤ふみ
年々や花相似たり彼岸鐘　越後 藤原鍋子丸
さら〱と窓打つ竹や春の雨　大阪 多野なみ子
摘草や都に老いし官女達　山口縣 長谷比呂子
神だなに月のさしこむ磯家かな　千葉 若柳
見ぬ京のしきりに戀し春來れば　渡島 岸浦文江
石蟹を蕨で釣る日の永き哉　横濱市 新井新緑
山燒く〱と越路の宿の日記哉　横濱市 樋口美都
時鳥青葉の中に隠れ鳴く　上毛 大川たつ子
蛇穴にいるとき椎の一あらし　備前 さつき雨
青柳や舟なる人の笑ひ聲　岡山縣 村雨
山吹や朝月淡き京の山　深川 乃登奈子
鶯の涙見てけり春の朝　神戸市 金田小信
傾城の昼白し秋の風　神戸市 金田紫園
夢に見し蝶の行衛や花野原　山口縣 小山露乃子
花衣ぬぎかふる局局かな　札幌 上原ふみ子



化粧問答

化粧研究會
婦人修容會 顧問 藤波芙蓉

問 硼酸末一匁に、水一合の割合にて、一日三回位顔を洗へば色を白くする、と申しますが、効能はございますでせうか、また藥にマケるやうな事はないでせうか、尚は新芽色のおしろいとは、如何にして製しますか、何卒御教示を御願ひ致します。（京都 櫻子）

答 足立軍醫監を初め、大方の醫師等は、しきりと硼酸の白色藥として効能あることを唱道されて居るが、私の實驗、なほ其奥底に達し居らぬ爲めか、さして効能あるものとは思はれません。又その人の皮膚の强弱によつて、カブレる人即ち藥マケをすることがないとも限りません、併し一匁に對し水一合を加へたのなら、差したる御心配にも及ぶまいし、又効能も差して顯著ならずとするも、硼酸の艶肌劑の一料たることは確かな事實ですから、常に御使用なさるは決して美化の上から惡いことではないと存じます。新芽色白粉は、おしろいに、葉綠色素を適度に加へて製すのですが、その葉綠色素は、軟かな草の若葉を摘み、それを强酒精に浸出して取るのです。

問 私は生來荒れ性で、始終（殊に寒氣に向ふと）顔に種々の吹出物やハタケが出來て困ります、いろ／＼な評判の高い賣藥を用ひたり、醫師の治療をも受けて居りますが、一向にきゝめがありません、何とか良い療法はございませんものでせうか。（新舞鶴 幸子）

答 先づ石鹼は御使ひにならぬやうになさい、而して白降汞を初めの裡は一、五、アントラゾールを三、〇をラノリン三〇、〇に煉合したものを顔に塗り、二三日しても何の變狀も見えない時には、白降汞を三、〇とし、アントラゾールを五、〇加へるのです、斯くて治癒の現象が現れて參つたら、グラ／＼に煮した湯をヌルませて洗面盥に一杯に盛り、その中へ純良なるグリセリンを一食匙程混和したもので毎朝洗面すべく、その上に、キセロールクリーム若くはコールドクリームを塗りなさい、必ず其等の患を除き、艶肌化すること請合です。

問 私は身體も顔の色も眞黑で困つて居りますが、せめては白粉でなと夫れを蔽さうと思つて、種々なる化粧品でお化粧を致して居るのですけれど、白粉が少しものりませず、わけて夏季などには十分とも經たぬうちに、思ふさま厚く塗つた白粉もワケなく剝げて了ひますので、若き

女の身としては、實にこれ程苦しいことはありません、何とかして白粉の剝げない仕方がございませんものでせうか、後生ですから何卒敎へて下さいませ。（能登　春雨）

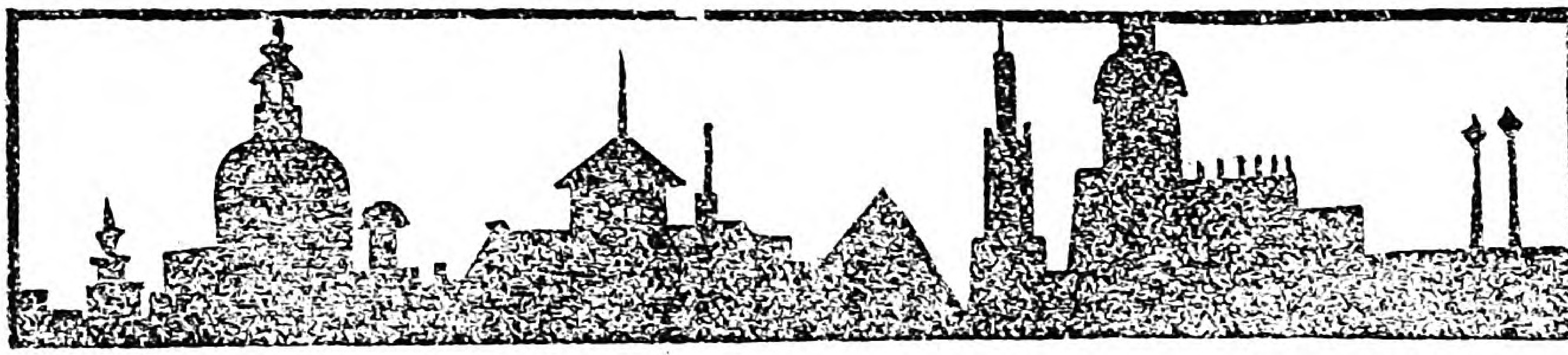
答　貴孃の御使ひになつて居る白粉といふは、たしかに煉白粉ですね、煉白粉では充分の扮飾美を發揮さすることは斷じて出來ません。若し御化粧して永く白粉の剝げを防がうと思召すなら、煉製に換ふるに粉白粉を御使用なさい、それには先づビネーグル（脂性なら五六滴を洗面器一杯の微溫湯に（若し荒性ならグリセリンを一食匙位）入れたもので洗面した後、キセロールクリームを平らに顏一面に塗り、その上に粉白粉を打つのです。若しこれでも充分でなかつたら、キセロールクリームを塗る前に、コールドクリームを顏に摺込み、それをよく拭き取つて後に右の打方をやりなさい、翌日まで白粉を保ち得ること請合です。且つ斯くして化粧すれば如何に濃厚なる化粧でも自由にされますから從つてどんな色の黑い人でも、見事に蔽すことが出來る筈です。

問　前髮と兩鬢とをわけて中根を引くわけ目の角の處が（こゝ文字不明）赤くなつて髮が薄くなりました、それに此部がカサブタのやうなフケが澤山ありましてかゆくて〳〵仕方ありません。年長者の話では、お禿になる初度に斯ういふ風で、段々と毛が拔け、やがてツル〳〵になるのだとのこと、そんな事になつては、この齢の若さで大變だと獨り心配して居ります、一生のお願ひですから、腦に害とならぬ、お禿にならない安全な療法がございましたら、女一人助けると思召して御敎へ下さい、私は一月に一度位髮を洗つて居ります、聞けば葡萄の房のつるを黑燒にしてウドン粉と等分に胡麻の油で煉つて附けるとよいとか、又は卵の白味も効能あるとのことですが、眞實でございませうか。（名古屋の女）

答　如何にも若い女性の御身にとつては御心配のことと同情申上げます。今にして然るべき手當をせんと、その年長者の申す通りになるでせうが、それにはサリチル酸一、〇若くは一、五、芫菁丁幾、タンノプロシン各二、〇、イヒチオール若くはチオノール四、〇、牛腦六〇、〇を煉合したものを、一週三回程、よく髮を分けて其處の頭皮に指頭で充分に摺附けなさい、そして其カユミが止り、カサブタのやうなフケがなくなつたら、柘榴の皮か桑の木を煎じた液で其赤くなつた毛を毎日洗ふのです、きつと元の通りに癒るに違ひありません、葡萄のつる云々は舊式の一方法で、さまでの効能はないやうです、卵の白味は洗髮によいとしてあります。

遠慮なくお問いなさい

▲化粧問答は凡て無手數料です▲ハガキ又は他の投稿と同封で質問をお送り下さい▲質問は規領を得るやうに願ひます▲化粧以外の問には答へません



女子文壇追想記

山田邦子

指を折て數へて見れば六年の昔今は嫁いて二人の子の母と成つて居る姉が、始めて上諏訪から『女子文壇』を買つて來ました。其頃私は少女界に和歌を投書して居た頃でしたが、見ると歌壇も詩壇も文壇も少女界などゝは、比べものにならぬ程、美花薫風の野に立つた様な、目もあやなる雜誌です。今もおぼえて居ますが、詩壇では先日逝かれた信濃の人、吾孫子美子様の「深林」と云ふ詩が天賞に成つて居ました。文壇では服部てい子様が、鄙だよりとか言つて氣のきいた消息文を書いてゐる。上山千重子様などを振つていらつしやいました、どうも自分には手がとゞきさうもない、先づ棚にまつつてある神様を下から見上げて居ると言ふ様な心もちで、三ケ月ばかりすぎましたでせう。其うちに吾孫子様はふとおやめに成つて、今度は下野の新井琴様が頭角を現はしだした太田樂子様が續いて詩壇に現れた。私も出して見る氣になつて丁度若い青春の血の燃え初めた頃、「朝虹」と言ふたゞもう盛り切れない血の赤い〳〵色を歌つて見ました。然し今思へば獨創ではなく、かりもの、言葉が多かつた、それが「をみなへし月」へ入賞に成つて載つてゐました、私はそれを知らなかつたのです。處が水戸の(一寸名を思ひ出せませんが)人から突然ハガキを頂いて驚いて服部てい子さん(其頃まだ岩代においでた)におかりして、始めて河井先生の御評を紙上に嬉しく、胸にねてもさめても繰りかへしたものです。新井琴子さんの詩で「塔影」(?)と言ふのだと思ひました、「泣くに限りの聲あげて、今宵はゆるせ御神よ憂ひは胸に秘めたれど、世にはほゝゑむ罪の子なれば」と言ふ句のある詩をよんで、ほーつとした思ひに只涙が露もなく湧いて〳〵。今思へば何んといふ若い柔い心だつたらうとなつかしくなります。常陸の綿貫滋子様の友に送る詩、「關の戸遠し白河や、合歡の花さく草の野に、夏は更けゆく月の夜を、淋しう戀ひおはすらむ」純潔なる情緒が綿々として歌ひ出されて有る、所謂音律を正則にふんで、濕ほひ深く歌ひ出されて有つたので、ほんとうの歌らしい、言ふに言はれない細いなつかしい清い響がどんなに意味が深かつたでせう。

年は其頃十七八、感ずる事、映ずる事、一つとして響きならぬはなく、歌ならぬは無い、心のまゝを並べて見れば、それが既に詩でありました。何せよかう言ふ心の芽を、思ひのまゝにのばさせて戴いたのは、全く『女子文壇』のおかげ、幸と不幸は別問題として、人間として、内部に目の開けかゝつた事を私は感謝せずには居られません、今も、未來も……かうした柔い清い暖い空氣の中に、心のまゝ憶ひもし、泣きもし、今から思へば生涯に二度と得られぬ樂園の中にうたつてゐる間に、外部の「時」は用捨なく動いて、知らずに居る間に、此空氣は薄らいで……祖母が死ぬ、父が死ぬ此間に家と、私と、『女子文壇』といふ舞臺とが、こんがらかつて入りくんだり、離れたり、書きたてたら經文にでも成りさうな程、大渦卷が動いて居ました。さうして居る間に、服部さんの上京、續いて私も上京しました。始めて岡田美知代さんと、服部さんと、私と三人逢つた時、神樂坂を散歩しながらあの「文壇の花」に並んで寫眞が出て居つた三人が、今こゝで一緒に歩いて居るなんて、思ひがけない奇緣ですわねつて笑ひましたつけ。兎に角私たちの生涯から、最早『女子文壇』てふ名は離す事の出來ぬものと成つたのであります。私たちの次ぎを引受けて、信濃の太田きし子さん

東京で河野槇子さんがお振ひになりましたが、然しもう此人々の歌ひぶりは、多少外界の詩壇の變化につれて、西洋音樂的に傾いて來てゐました。

一百號と云ふ嬉しい名を聞く時に、胸に來る『女子文壇』の歴史、それに入りくんでゐる私の生立がこもぐ亂れてまゐります、よし範圍は狹くとも『女子文壇』が女性といふ人間の上に成した仕事は、記すべきものだと思ひます。

長曾我部菊子

ちやうど今から幾年かの前にもなりましたが、女學校の庭で私は文章を作る事の大層好きな寄宿生二人とふとした事から、『女子文壇』を、一緒に取つて見ませうと相談して、ものなれぬ三人は一通ならぬ喜をもつて、其雜誌のそもそもの第一巻から、讀者となつたのでありました。

其頃は、形式も内容もまことに單純なものでそれに今思つて見れば、何だか古めかしい感じを與へる雜誌だつたと思ひます。其内に、私は卒業して村にかへりましたが、是れは學校生活から、身心を脫した人にはたいてい、了解していただける事と思ひます。——急に、先生も友達もなくなり、話したくとも話し相手がなく、聞ひたくとも問ふことが出來ず、それ故たえずものたりなくて、加之も、消す事の出來ぬ智識慾の火は胸をもやしますが、教科書を讀むには教科書が、蠅をかむやうなものであるし、勢、どうしても、雜誌に興味を持つやうになるのでありませう。

私は、ちやうど其經路をふみましたが、不思議に忘れず『女子文壇』に離れずに來たと云ふことは、文學好きと云ふ爲でも、投書好と云ふ爲でもありませぬ。それは、私のたえずある何者かが、私の未來の運命にあるにちがひない。其の準備として、自分の心を鍛練したいものだと熱望したのが一つの理由で、もう一つは、『女子文壇』が、良い友達と、好い先生とを私にひきあはしてくれたからであつたと思ひます。

『女子文壇』が私に紹介してくれて、今に至るまで、私の心に恩人である友達は、新體詩で、名をはせた、山田邦子さん、太田喜志子さんの二人であります。たゞ二人きりでありましたが二人の私にあたへた感銘は深うございます。此頃になつて、私は、小說で現れて居る水野仙子さんを知る事も出來たのであります。

女學校にゐた時にすら眞實の友達は一人も私にありませんでした。いつも一人ぼつちでしたから。『女子文壇』は私に貴重なおくりものとして、美しい好ましい玉をくれたと思ひます。

先生は、夜雨樣、醉茗樣、一方ならぬお世話を受けた事について感謝いたして居ます。

あこがれては居ても、夢にも現實の世に、囚はれ多い女の身に、上京といふことは出來ないとおもつたのも、『女子文壇』の間接のたすけは私に其れを成させました。此のたすけ、忘れる事は出來ませぬ。

今の私は、水野樣の許に居て成さんと期してゐただけのもくろみを、世の浪風にあてられず成しはじめてゐます。これも『女子文壇』が、私に、ひきあはしてくれたとおもひます。

以上は、私に取つてのみの思出にすぎませぬ。いろいろ云ひ盡されませぬが、兎も角も『女子文壇』は過去において又現在において、たしかに、まじめな讀者それに眞實な投書家を持つてゐました。それが丁度、長女、次女、三女、四女と云つたやうな樣子をしてゐるとおもひます。すれば『女子文壇』は、搖籃を守る乳母だつたと考へます。

長女、次女、三女、四女のそのいづれかに、必らず、ある光を放つ——それが螢の火のやうにか、また、火山のほのほのやうにか、いづれとも、是非、ある運動を生じて、何らかの事を成すにちがひないと思ひます。けれど私には、よく夢想するくせがあります。是れもその一つであらうかも知れませぬ。

加藤筆子

始めて投書したのは丁度櫻咲く春、それが此頃紀念號に遭遇したのは、何かしら因縁でもある樣に感じました。よく家の者などに、お前の樣に書いたものを收つて置いたつて仕樣かないと云はれましたが、始めは投書といふのが妙に心おくれして、やうやう大奮發で出しましたのが、あの「文壇の花」でした。私は自分のが掲載つてるのを見ますともう嬉しくてく、繰り返しく、そして山田樣服部樣のお作を讀み耽つたものです、あの折のたのしい思ひ出。五重の塔に近き草を敷いて前には櫻、後は東照宮の本殿から響く唐樂を聞きながら……。

段々投稿して居る内、境遇の厭迫や、すべて見聞に付ての刺戟、流動物のやうなだらしない私の心は動いて亂れて、ある時は隨分あからさまな告白をした事もありました、けれど皆様も色々變動して被居る樣にお見受け申しました。それだけ昔から本誌は廣く開放して私等を自由に叫はしてくれました。

『新作家』長曾我部様の『藍の葉』や『今の婦人』の小川様の御筆のあと、あゝ云つた筆致を私はなつかしう御座います。以前「文壇の光」だの、ずうつと前の本誌に御名聲あつた故田中久子様には少なからず心醉して居ました。敢へて見ると百號を經ます間、創作の舞臺に活動遊ばした方々も、或は幸福に、或は不幸に、隨分極端と極端に轉々として、めぐり廻つて、例の『魚がし』で御才筆を見留められた滿壽子様は、つひに『美しい血』をお出しになつて、不過な私をお泣かせになりました。南國の美しい景色をお歌ひ遊ばした菊子様もまた「入京記」をお發表なさいました。

皆様のお動靜にも疎い私は、この間に何の變化もなく、矢張一人ぼつちで、同じやうな事件ばかり書いて居ました。一昨年あたりは私は隨分不平不滿に悶えて居た、他からもいろ〳〵と敎唆する樣にされました。けれどそれを筆に叫ぶと云ふのには、今さゝへ不充分故猶更むつかしいものでした。兎に角創作といふ事に付ては眞暗三寢で、矢鱈に筆を採つて居ました。今讀んで見ると、色々な追憶が湧て來ます。

昨年あたりになつてから、常暗の地から少しばかり光が見えた樣に、詩や、歌が解せられるのですもの……。

極めて狹少な周圍の智識と、餘暇といふものなき私ですから、いつも千篇一律、お母様にかくのはおよしなさい、可いかげんにと、さる方から御注意を頂きました。可笑しいのは誌友外の友達は、私と女子文壇とをいつも連想していらつしやる、其當時もう發行になる、直ぐ飛んで行つて、買ひますもの……本箱には一ぱい這入つて、新古共に追想の種です、表紙では昨年四五月號と『新作家』が善いと思ひました。『都會の婦人』は餘り華やかで、私の樣な氣分には調和しません。以前深瀨ます子様といふ方がよく小說お書きになつたが、近頃私は更に御見うけしません、阿部秀子様々同樣に……。

春の潮の樣に追懷が起つて、限りなく越方がなつかしく、眞癡現在をも執着して居るのです星ケ岡の昨夢はまた再び現出致しますし、色々な思ひ出が深く重なり〳〵もう一つ百號を加へた時の心持を想像して見たいものです。本誌についての記憶は一切丢の季節と結びついて、確乎私の胸から放れないやうです。

平塚白百合

追想！、何となく若草の香をかぐやうな夢幻的の感想である。私はその香が何草であるか、とらへられないかもしれないけれど、卽私の胸にふれただけの事を述べる、或は美しいドリームを破るかも知れませぬが、心許りの追想記に代へるのである。

私が本誌を耽讀し初めたのは、この三四年にしかならない。けれどその前からも幾度となく私のテーブルには本誌がのつてゐた。

其の頃、私は雛壇を見るやうに、私の居るべき場所よりは、一段も、二段も、本誌は上にあるやうで、羨望の瞳を持つて投書家の誰彼を見た。

其の中には今もつゞけておられる方もあるけれど、多くは浪にもまるゝ木の葉のやうに、フト現はれたと思ふと、渦巻にまき込まれて、永久浪の下に音もなく沈んでしまつたやうに、フッツリかくれてしまつた人が九分の九迄ある。

雜誌界でもやはり同じ運命は行はれてゐる。其表面に浮きつゞけるには非常なる努力が要る

『女子文壇』は其發行當時から、一風變つた文學雜誌のタイプがあつて私の心に一つの印象をのこしてゐる。今本誌は充實した立派な雜誌として發展してゐる。据られた根底がしつかりと動かなかつた上に、無限の努力をもつてして、ある時は自由にあるときは熱烈に、浮沈ある時の潮にのつていさゝかの蹉跌もなく、其閱歷は本誌の上に照り輝いてゐる。

本誌の過去を少女にたとへたら、今は處女であらう。少女には天心爛漫な美點があつた。處女には最も美しい處女美がある。

處女！決して一足とびに其の美點はそなへらるゝものではない。根據が麗質であつたため、又よく磨かれたため、一層の美はましたので、只切下髮がフックラした庇に變つた迄、髮の毛が長くなつた許でなく、凡ての點が圓熟したのである。

前の本誌と今の本誌を比較する時は必ずこの思ひがあらうと思はれる。

とりあつめて云へば過去は思想の動搖につれての戰ひ（發育）であつた。未來は豫想するに

難い事であるけれど、過去が戰ひの印象と共に未來も戰のページであらうと思ふ。戰ひは凡て進取の象である。私はこの戰ひを文壇にさゝげて思ひ出多い過去を追想し、併せて未來を祝福するのである。

ふぢき野

校則に雜誌類は總て禁じられて居るとは云へ、通學生は家へかへれば自由の身、何を讀うとそこまでは先生の御目のとゞくはずは御座いませんけれど、悲しいかな寄宿の身は、何事も舍監に睨まれ通し、夜になれば用捨もなく電氣がぱつと消えて終ふ。いつか浦瀨さんが、かくれて文藝俱樂部を讀で居たのが見つかつて、とう〳〵舍監の隣の室にうつされた、それやこれや思つて一度はやめても見ましたけれど、好きなものは矢張り好きで苦しまぎれにいろ〳〵工夫して先生の御目をぬすみ、讀んで居た頃の本誌は、紙數もごく少ない頃で、山田さんや服部さんの活舞臺でした。

私が『女子文壇』とおなじみになりましてもう足掛五年、其間には隨分投書家も變りましたし身分にもいろ〳〵の追懷が御座います。

學校をでましてからは、いよ〳〵公然たる『女子文壇』の愛讀者となりました、山田さんの「北の海」が好きで幾度も讀返して見たり、河野さんの「詩」はおしろいくさいと或人が言つたのに腹立つて、盛んに泡をとばした事もありましたが、私が投稿致して見やうかと思つたのは『文壇の花』の發行した頃で、何分今迄かたくるしい作文許り作つて居たのですから、急に現代的の文字を用ひ樣とすれば、まるで環まれ同樣、隨分妙なものでしたけれど、自分ではどんなにか苦しんだもの――數さへ澤山だせば、何か一つ位のりさうなものと、美文論文書簡詩短文和歌俳句新歌謠何んでも御座れと、毎月必らず八九種づゝを投稿致したものです。そして發行を待つて、うの目たかの目で、自分の作物をさがしますけれど、一向に見えない、その時のつまらなさ、それでも此度こそ〳〵と無駄骨折つたのが六ケ月間。

馬鹿な奴だ、毎月紙半帖に二錢切手はつて、屑屋に奉公して居るのかなんて兄に茶化された事も幾度でしたか、けれども性來が負惜みですから、此度はと焦せつて書けば、矢張り沒、それでもさすがに選者も可愛相と思つてか、時折は短文か和歌位にどうやら顏を出しかけましたが、まだ〳〵とかく沒がちでした。

人生には春許りありません、昨日のほゝ笑も今日は憂と變り、快活な私も一度悲哀にふれては世にすねて暗きにのみ走り、とかく涙の日を送る樣になり、たへがたい心の苦痛を、おぼつかない筆に染めて投書するのをせめてもの心やりとしたのは、今から三年前で、それ以來はやうやく沒からのがれる樣になりましたのです。其三年間の今日迄には、いろ〳〵の事情で、二三度誌上の名をかへ、姓をかへて參りましたがやつと昨年あたりから、選者にも知られる樣になつたので御座います。

私がまだ本名で出しておる時分、必ず毎月五六本の手紙が舞込んだものでした、どなたにもたいてい此御經驗はおありの事と存じますが、來るのも〳〵月並文句、必ず御姉樣と永久の御交際との文字のない事は御座いませんで、初めこそは正直に返事も出したれ、永久の交際がわづかに二三回、長くて半年、それ以上は鐵砲玉と定まつては、さすがにあいそがつきます、もつとも半數は男子の樣です、うつかり女名前の男子へ返事を出したゝめに、とんだ迷惑を致した事もありました。

遠い〳〵滿洲、ハワイあたりから、親切めいた敎訓文をよせられたり、幾度ことわつても、郵券封入で返事を求め樣とするのんきな人も御座いますが、いづれも男子でおそらくこれらの交際に、信用のおけぬどころか、恐ろしい誘惑のつきまとつて居る事をさとつて以來、名をかくし、かく〳〵しやう〳〵今はかくれ切つて、或一部の誌友は別として、うるさい手紙は一本も參らなくなりました、それに前には入賞すると必と姓名の上に所番地出されたものでしたが、今はそれがなくなつたので大變よろしう御座います

雨もよひの空やうやく晴れ、そよ吹く風にふくやかな花の香おくらるゝ星ケ丘茶寮に、幾十の佳人の渧を見しは、去年の四月十日。數にもならぬ自分も幹事の一人として出席し、かねて誌上に花をかざられし方々に、初めて御目にかゝり初めて語つたので御座いました。初對面とは申せ、誌上にてはすでにおなじみで御座いますから、互にうちとけて、いざ袂を分つ際までには今一層何か面白い考案を致しませうなどゝ約したのも、今は夢となり、なつかしい都を遠くはなれし北の國より、はるかに西の空をながめて、近く開かるべき第二回誌友會をそゞろ偲ぶ身となりました。

女子文壇誌友會の案内

第二回誌友會開催

▲時日　五月七日午後正一時開會

▲場所　上野公園韻松亭（東照宮の前）

▲會費　金五拾錢

五月一日までに入場券と、プログラムを調製して置きますから、來會希望の方は、一日より六日までの間に本社編輯局内誌友會幹事宛に、入場券を請求されると好都合です、尤も當日會場に於てもお渡しいたします。

今回は出來得るかぎり打ちとけてお話の出來るやうにしたいと幹事一同いろいろ考へて居ります、當日の次第は凡てプログラムに記載いたしますから、就いて御覽を願ひます。名士の演説と、面白き餘興を主として、其間にいろ〳〵お話を交へたいと思ひます。女子文壇を愛讀なさる御婦人方に、擧つて御來會を懇望いたして置きます。

明治四十四年五月一日　幹事

岐阜誌友會案内

▲開會は五月七日午後一時からです▲會費は金四十錢▲男子の方はお斷わり▲會場はわざと申上ません、御申込の節一々御返事いたします▲申込は五月四日まで▲其他はいろ〳〵工夫中。

發起人　今山智惠子　山田花子　中島幸枝子
村山米子　松本利子　佐分富美子
水尾華子　篠田とみ子

申込所
岐阜市西野町一丁目西鄕方　今山智惠子
同　市杉山町北側　松本とし子
同　市縣町四九二　篠田とみ子
同　市杉山町松本榮太郎方　山田はな子

甲賀誌友會案内

▲五月七日午後〇時二十分より開會▲會場は水口町基督敎會（但し誌友會には宗敎的意味を加へず）▲會費は金十五錢▲御隨意に來會をねがひます

發起人　細野鈴蘭　堤愛子

神戸誌友會案内

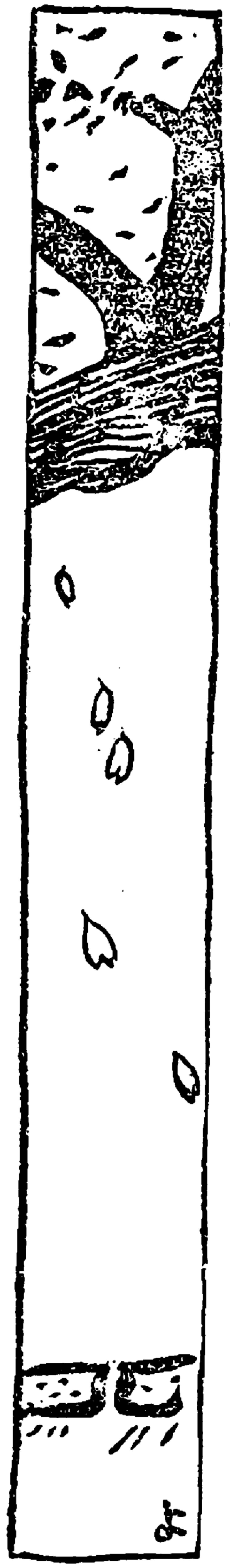
▲誌友會と申す程ではございませんが、五月七日午後一時に須磨寺の櫻の下に集つて、本誌愛讀者のお話や、和歌俳句の卽吟などをやらうと思ひます、思召のある方は同時刻までにお越下さい。

發起人　神戸市兵庫港町一丁目横河樣方　足立春子

京都第二回誌友會案内

▲五月七日午後一時より第二回の誌友會を開かうと思ひます、簡易に且面白くやりたいと思ひます、出席御希望の方は問合せ下さい、會場、會費（三十錢位）御返事いたします。

發起人　京都東紫竹大門　要司村福子



誌友くらぶ

女子文壇交換

○山口縣都濃郡夜市村字伊賀隱居方
相本種子

▲所有の分　明治四十三年四月より四十四年四月までの分（外に都會の婦人、地方の婦人、婦人ノート）及び文壇の花が不用になつてゐますから、御望みの方は何品なりとも御交換を乞ふ

○岐阜市縣町
篠田とみ子

△求むる分　六年第十二號と七年第三月號右二冊ゆずりうけたく候

○三重縣桑名郡香取
村上富

△求むる分　本誌一巻一號より七巻五號までの内にて缺號のもの四十五冊不足合本に是非入用故御不用の方は號數と冊數御知らせ下さい御禮は繪葉書又は不用圖書雜誌。

▲御不用の圖書雜誌と繪葉書と交換を願ひます特に婦人向きのものを好みます（三重縣桑名郡多度尋常高等小學校内多度文庫）

○東京市芝區芝口三ノ十一　布福支店様方
横山俊子

▲所有の分　第三巻十三號（明治四十年十一月發行）第四年六號文壇の花（四十一年四月十五日發行）第五年九號（四十二年七月一日發行）第四年二號（四十一年二月一日發行）第四年十三號（四十一年九月一日發行）

△求むる分　第七年一號（四十四年一月發行　其他何號にてもよろし。

○山口縣阿生郡萩町一〇二六番地
山根よし子

▲所有の分　婦人寶典巻ノ一より巻の四。明治少女節用。日本女子百傑。

△求むる分　食道樂春夏秋冬、皇族畫報其他小說雜誌等種々あります上等の絹ハンカチ空氣ヅーリなどと交換を望む又上等の繪葉書（何にてもよろし）十枚以上送り下されし方へはシャツ洋服や羽袋物などの雛形五種以上送ります右交換下さる方は一應御一報を又品物着次第直に發送致します不正なることはきつと〱致しません安心なすつて下さい。

○福岡縣三井郡草野町紅桃林
宮崎雅子

△求むる分　去る四十二年の女子文壇臨時增刊の中「新美文」と、新作家」とを御不用の御方はありませんか上記の處まで御知らせ下さい

○羽前東置賜郡小松町
高橋ちよ子

▲所有の文　わたくしは增刊「婦人ノート」を持つて居りますからどなた樣か。

△求むる分　「若き婦人」お持ちの御方がありましたら交換して下さいませんか、一寸前に御しらせ下さいませな。

○三重縣伊勢松阪町字新座町十七番屋敷村田方
溪秋子

▲所有の分　第六年第十號（明治四十三年八月一日發行）

△求むる分　第六年第一號（明治四十三年一月一日發行）

○廣島縣比婆郡敷信村是松
高田梨葉子

▲所有の分　第六年、二月、五月、七月、十一月より四十四年四月號迄

△求むる分　第六年八月號

繪葉書

○三重縣松坂町新座町五十六番地
長谷川金之助方
長谷川　とみ子

▲所有の分　本居宣長翁肖像、同本居翁を祭れる山室山神社、翁の墓所、又翁の生れなすつた家。翁の愛鈴、松阪公園伊勢神宮其他種々

△求むる分　各地の城跡、銅像木像等の繪葉書各地の名所、龍の繪葉書、有名な神社佛閣、戰國時代武士の肖像、各地婦人の風俗勇士聖人等の石碑の繪葉書等

○長崎市築町四十七
森谷つた子

▲所有の分　當地名所繪葉書、大連名所、美人(寫眞版)等。

△求むる分　各地公園雪景、各地紀念塔及び瀧寫眞版美人右交換をのぞむ。

○三重縣伊勢松阪新座町十八番屋敷村田方
溪　秋子

▲所有の分　伊勢神宮木曳及び神殿

△求むる分　各地の婦人の風俗及び銅像

○東京市芝區芝口三ノ十一布福支店方
横山俊子

▲所有の分　東京名所、其他雜種

△求むる分　各地名所、風景舊蹟等

誌友の皆樣ヱハカキ下さいな必ずヱハガキで御禮いたしますドシ〳〵交換いたしませう。

○大阪市東區内平野町二丁目林方
岡部きよし

▲所有の分　市中有樣

△求むる分　婦人風俗右品交換御願ひ致します。

○大阪市南區高城二番町一七〇釜井宗次郎樣方
大谷さだへ

妾は誌友の御姉樣方と風景繪葉書交換を御願ひいたします、そして又幾久しく御交際を願ひます。

○伊勢國桑名町宮通
河村富子

各地神社佛閣印影葉書交換を願ます返禮はきつといたします。

○大阪府泉北郡鶴田村
冠木みつえ

御同情に富み給ふ誌上みな〳〵樣よ、何卒〳〵末永く御交際のほど伏しておねがひ致します殊に妾は繪はがきを拜見致すのを何よりも樂しみに致してをりますですから御地名所舊跡等の繪はがきの御寄贈を切におねがひ致します妾も直に繪はがきにて御返事いたします尤も繪はがきならば如何樣種類にても結構でございます。

○大阪市西區江戸橋北詰北入西側
洋畫家馬淵美郷樣方
本間三笠子事琴爾

浪花の皆樣花の江戸の皆樣方妾は昨冬當地に東京から參りましたものですが何卒肉筆繪葉書の御交換なすつて下さいな東京の皆樣方何卒哀れな妾と御交はり下さいな。

書物の交換

○廣島縣比婆郡東城町川西二六
後藤壽美枝

▲持つてる書物　女子文壇(四十三年全部)內部會の婦人をのぞく。武藏野。一葉全集。

△讀みたい書物　藤村詩集。

右御情け深き諸姉樣の內御交換下さる方はありませんでしようか誠ある姉樣に願ひます御承知下さる方は先に御一報を。

○高知縣土佐郡本川村高藪
山中春子

△見たいもの　本誌貴姉中、女學世界の八巻三號を御持の方は送くつて頂戴、返禮は必ず相當の品に不束ながら私の寫眞をそへ進呈致します

○大阪市南區惠美須町三丁目
岩木方
梧の雫

▲持つてゐる書物「孝女白菊」前後「花夜叉」「ハイカラ令孃」「松風村雨」「想夫憐」「女子文壇四巻今迄」「戀と戀」右の本不用に付何冊でも御貸しいたしますから御一報下さい。

○佐賀縣佐賀市白山町
池田愛子

△見たいもの　皆樣のお中に「寄生木」御持ちの方がございましたら左の本と交換して下さる方はできますまいか。

▲持つてゐる書物　五人女、眞山青果著

○伊豆國伊東町松原　武藤內
やよい子

▲持つてゐる書物　一葉全集、和歌八重垣、古今和歌集、黑風、日本演劇史上編、海賊船、塔中の怪、人外魔境、新古文林、文藝くらぶ、冒險世界其他雜誌數冊あります。

△各地の名産、寫眞、お自製のシヲリなどすべて趣味ある品と御交換を願ひたう存じます、往復

はがきにて一應御紹介下さいませ。

○府下中澁谷一〇四　龜井芳枝

▲持つてゐる書物　紅雨集、玉琴集、家庭新詩、不如歸、夫女波、汲泉、心の花、筐のあや、伏屋の曉、バイブル、讃美歌、其他雜誌では昨年の女子文壇全部、文章世界、秀才文壇、婦女界、婦人くらぶ、婦人世界なども其他にも御座います。

△讀みたい物　ハイカラ令孃、田舍牧師、佐保姫、常夏、夢二畫集（何の巻でもよろしう御座います）などゝ御交換下さる方は暫く御貸し下さいませんか、御禮は繪端書栞又は見苦しき自分の寫眞を添へます。

○栃木縣下都賀郡寺尾村尻内　福富トメ子

▲催眠術　誌友の皆樣私は當文壇は六年も愛讀して居ります、實に文壇の賑つたのは嬉れしい次第です、私は催眠術研究いたしましてわづか三日で誰れでも眠らせます實に愉快な術です其の本不用になりました故御希望の方にお讓り申ます故御手紙下さい必ず出來ます。

○秋田市長町　たづ子

△讀みたい書物　誌友の皆樣已が罪の終編、松風村雨、琵琶歌下、若き妻二冊、殘花一輪、ハイカラ令孃、乙女の秘密日記、初戀、少女の戀をお持ちの方は暫くお貸し下さいませんかまた御希望の品と交換！でもよろしいです　御貸し下さる方は御はがきにて御一報の上何とぞ誌上に。

○土佐かみ郡山田町　鮭山秋の花

▲持つてゐる書物　秀才文壇、女學世界、本誌其の外古雜誌、大坂朝日切拔き大塚楠緒女史遺稿雲影、モウパッサン幽靈の話、世界見物、英譯不如歸。

△讀みたき書物　文章世界昨年三月號及び九月より十二月號まで、三田文學一月三月號、都會の婦人、今の婦人、地方の婦人、放浪、冷笑、妻。

○千葉縣山武郡二川村　荒木秀子

△讀みたい書物　皆樣の中で伊原靑々園戀の闇後編不用のお方は私の「いたづら小僧日記」千葉縣名所繪葉書（二十枚）の内何れにても御交換をねがひます。

○埼玉縣入間郡川越町相生町川越病院内　高森操子

▲持て居る書物　「響」「天地有情」「美文斷錦」「早稻田文學」

△讀みたい書物　「ハムレット」「箕子」「夏子」「夢の花」「美文しをり」「金色夜叉」「露子夫人」「やどり木」右御送り下されし方には名所繪はがき右書物にそへて御禮いたします。

○茨城縣猿島郡岡郷小堤　諏訪まさ子

▲持て居る書物　女禮式大全。女子記事文林。女學生訓。女禮式畫報。食㵎樂。手藝講義（高等）

△讀たい書物　女子手藝講義錄（普通科）衣裳かゞみ。婦人の慰藉。裁縫おさいく物。家庭日常の實驗。右お貸下されし方々には相當お禮差上ます。

○愛知縣六ッ美村大字坂左右、愛知療院内　靜子

▲持つてゐる書物　誌友の諸姉樣妾此片田舍に居てさびしい日を送つて居ります、どうぞあはれと思召して御交りして下さいませ、妾不束な者ではありますが、キット御禮は差上ます、又御寫眞の交換も御願します、それから左の書物不用ですから御入用の方には差上ます、又御不用のが御座いましたら御交換下さい（此頃男子で女名で手紙下さる方々まことに困ります女名の男子の御方は一切御斷り申します。）

▲新撰百料全書二十冊、普通教育五冊、歌學一、二、三冊、二宮尊德一冊、中學講義錄、女學講義錄、美文、作文五十題、最新催眠術、算術教科書二冊、文藝倶樂部、ハガキ文學、婦人世界其他習品小說或は教科書其他

○靜岡縣引佐郡中川村瀬戸　深井濟子

▲持つてゐる書物　英語獨修新書。ナショナル第一リーダー及獨案內。催眠術新治療法。美文の資料。綴り方の教。落語大全。戀學生。快樂の栞。毛筆新畫。其他諸雜誌澤山あります。

△讀みたい書物　夢二畫集。言海。美文作法。和歐入門。其他相當した書物と御交換を伏して願います

○愛媛縣東宇和郡土居　宮田賴

▲持つてる書物　增補會玉篇大全　郁文館發行。

△讀みたい書物　夢二畫集、野に山に。旅の巻二冊と交換して下されたし。

○北越龜田仲町　吉幸方　きち子

△讀みたいもの　本誌昨年五月號と本年二三四月號

▲持つてゐるもの　婦人世界、少年世界、文藝倶樂部(古い物)右交換を乞ふ又文學趣味をお持ちの方何卒御交際下さい、淸き方なればどなたでもかまひません。

○上野國長野原局區內　茂木芳江

▲持つて居る書物　「禮式と作法」「新ほとゝぎす」「日本小辭典」「女學世界」「婦女界」
△讀みたい書物　「寄生木」「片われ月」「夢二畫集花の巻」本誌增刊、ムラサキ六巻二、三、五七、十一月號其他
右交換にても又は貸借何れにても宜しう御座いますから御望の御方は御一報下さい。

記者と讀者

○記者樣、只今新聞の號外にて承りますれば東京は大火のよし誠に驚き入候皆々樣方どのように御おどろき遊ばされ候御事と察し上まゐらせ候貴社樣には何の御災難もあらせられず御のがれあそばし候や蔭ながら心配仕居候間取りあへず御たづね申上候まづはとりいそぎ御見舞のみあらく／＼かしこ（大阪田野しか子）（火事は本社と方角ちがひに候故何の懸念もなく候ひき、わざ／＼御見舞狀ありがたく存候此外四五名よりも蔵き候記者）

○記者樣方、私十五歳位の時にチヨイ／＼投書してはおなじみにもなつて居りましたが、その後音樂の方を暫らく硏究して居つたので好きな／＼文壇にも遠かつて居りましたの併し先月の文壇フト手に入りましたがサア先生方はお忘れでも私におなじみの河井先生や横瀬先生が盛んにやつていらつしやるそして又大層進んでしまつて私等才もなくたゞ好きで投書する樣な初心者はうら耻しい樣な譯けでもいくら腰辨の細君樣味噌くさくなつていても昔の面影は少しはありますのでおなつかしいやらうれしいやらで又時々お仲間入りさせていたゞきたくと一ツ二ツ書きました今月三十日頃大阪へ引移りますからさうするとすぐ住所御報いたします　とても見込みのない者ではありますがどうぞ／＼御導き下さいまし（野菊子）（一旦別れたが又お目にかゝると云ふやう方が折々あります、記者も亦其方々をなつかしく存じます（記者）

『縞帖』希望

△友禪ちりめん、古代更紗、綴錦、縞ふくりん、きんらん、どんす、に限る。
△寸法は縞、模樣の分る程度。
△自畫自賛の短冊を返禮す。

東京麴町二ノ二、洛陽堂　竹久夢二

交際

○福島縣田村郡三春町百十八番地　橋本ふさ子

●●●●●●●●

▲紀念號發行を祝して　妾が可愛い友の本誌も健全に育つて百號を發行する樣になつたのを祝します、誌友の皆樣とこの紀念を機として永久に御交際をお願ひ致します、名所繪端書に和歌か俳句を書いてお送り下さい、妾からも差上げます、それから地方から發行する雜誌新聞も交換して下さいませんか。唯だ妾は眞心から交際して下さる方ならどんな方でも厭ひません。

○秋田縣南秋田郡船越町　那珂はつ子

●●●●●

▲八郎湖畔より　御慕はしき姉樣方、私は秋田縣男鹿半島八郎湖のほとりに住み、每月參る本誌を何によりの樂みとして居ります、風のない天氣のうらゝかなる日、八郎湖上に船を浮べて、本誌を愛讀致すも誠に心持ちよう御座いますよ。又六七月頃の海のおだやかなる時、男鹿島巡りも長閑になりますよ、皆々樣方ちと御遊びに御出下さい。

○朝鮮釜山港南濱町一丁目河野方　河野きよ子

●●●

▲釜山より　御壯健ですか何萬の諸姉樣たち私は朝鮮に居る愚妹ですようやく本月より本誌の愛讀者になりました以後とも宜ろしく文通の御便りを希ひます。

○長州大津郡三隅村　中野ふえ子

●●●

▲御文通　私は本郡にある實業を主としてゐる女學校へ通ふてゐます何卒御親切なる皆樣御文通の程を御願ひます惡筆で見苦しくは御座いませうが御返答はきつと差し上げます。

○埼玉縣比企郡平村大字西平　淺見くら子

▲山間より　諸姉樣お玉章下さいなきつと御返事差し上げますわ大分のしぐれさんおさつしてよどうぞ御交際下さいなわたしは淋しい山間に今は暮してゐますものですわ。

○Heonolulu February 14 th 1911
To. S/S. Nippon Maru.

▲淡路のお方　御手紙のおもむきよぅわかりましたよわたし確實に守もつてゐますからあなたもお約束を實行して下さいわたくしは船便りのあるときには鶴首して待てゐますよ!!（布哇ホノルル府郵便函（六八五）

○山形縣長井町小出桐町
佐藤ます子

▲一時的でなく　滿天下の諸孃何卒末長く御交際願ひます、一時的は固く御斷りいたしますどんなに境遇が變りましても松のみどりの末かけて御交際下さる方に宜しくねがひます。

○大和高田局區內奥口
石井うた

▲御禮と御願み　本年一月號で御交際を求め、方方の諸孃樣から御送りくださいまして、妾は此の上も無く悅ばしく存じます、略儀乍ら誌上で御禮申し上げます。と共に今後も益々御厚情を願ひます、就きまして私の手元に大和の考古と名所繪葉書が數組御座います、御望みの方は早速申込まれるか、或何かの物か或左記の書を御讓りくださいい、御禮には右の繪葉書か持合せの書で致します（左記、乳姉妹、不如歸、思ひ出の記、自然と人生、英語辭書、其他、圖書伸縮器、各地の寫眞繪葉書、女子の雜誌、文藝書類）尙諸孃樣よ、方言をどしく知らしてください。

○大分縣速見郡中山香驛
小屋落子

▲若竹のなよらかに　伸びる頃となりました、皆さま繪ハガキやレターをお送り下さい。

○岡山縣小田郡美川村一の邊上池の前
三宅まさ子

▲花咲き鳥うたふ　好時節となりました、妹同樣に同情下さる御方には交際をねがひます、おん玉章お惠み下さい。

○福島縣耶麻郡鹽川寺町
北村翠子

▲慰藉　私は悲くてくなりません、たゞ女子文壇を見るのが此上なき慰藉です。何卒情ある方々御交通をねがひます。

▲誌友の方々に　春去り夏來る時の步みの早きと共に、本誌も着々進んで來ます、皆さま誠實なる御交際をねがひます、初め御はがきで御名乘り下さいますれば其上で、いろくに照會申上ます（大抵本文の意味は斯う云ふことで同じですから、交際を求められる方々の芳名を左に列擧して置きます。記者）

▲長崎縣西彼杵郡長浦村、相川ひろ。
▲岩代耶麻郡喜多方町島坂病院內、細野たつ。
▲廣島縣佐伯郡嚴島町、加茂章子。
▲山口縣吉敷郡仁保村、山本靜子。
▲東京神田皆川町三十一、三越裁縫部、小川樣方、飯井篠板子。
▲新潟縣東頸城郡牧村成見方、浪花子。
▲茨城縣新治郡林村大字根小屋、岡地安平方にて、島田しん子。
▲岐阜縣加茂郡下米田村山茂東、渡邊學子。
▲茨城縣稻敷郡阿見村大室青山なは方、松本美泉子。
▲靜岡市材木町二七ノ四、須山伊三郎樣方、高見澤勝子。
▲千葉縣山武郡大總村木戶臺、伊藤美溪子。
▲仙臺市北二番丁百十一番地、後藤はる子。
▲熊本市東坪井立町二〇番地、橋本さへ子。
▲同　所　高島くへ子。
▲同　所　松岡　友子。
▲高知縣香美郡岩村字京田、土方紺次方、土方ひろし。
▲愛知縣豐橋市湊町、朗木淺子。
▲橫須賀市逸見町二〇一、石川樣內靜江子。
▲群馬縣新田郡木崎町赤堀村、關口ちよ子。
▲同　所　小澤　竹子。
▲同　所　宮田くじ子。
▲名古屋市東區長堀町二ノ二、瀧本逸子。
▲若松市中六日町、宮原紫公子。
▲北海道雨龍郡多度志局東二丁、鴻上靜枝。
▲岡山縣笠岡局區第四區道方、坂本綠子。
▲仙臺市仲杉山、四六、増澤邦子。
▲大阪市東區上本町八ノ一八七阪田樣方浪子
▲後志國古手郡澤江町、松尾美智子。

○栃木縣那須郡黑磯町
瀬尾登美

▲手紙と寫眞　記者樣、私田舍娘ですのに未だ面識のない方々とお交りの出來るのは實に本誌

くらぶの爲と厚く御禮を致します、誌友の皆樣レターや寫眞の交換を願ます。

○ 千葉縣香取郡米澤村大貫
工藤碩子

▲何うぞ 誌友の皆樣おなつかしう御座ります私參月號で交際を求めましたら、誌友の諸姉樣より交際を致してくれる方がありませんでしたですか、今度は御姉上樣方交際をして下さいよ私の方からは名所の繪はがきを送りますわ。

○ 大分縣速見郡中山香驛
古屋露花

▲西海の山里より 諸姉樣よ私は西海の山里の訪ふ友もなき寂しき白屋にわびしく暮らして居る賤女です諸姉樣よさびれた此の私の心中をお察し遊ばして長い〳〵御玉章下さい字も文も下手ですけれど御返事は必ずさしあげます何卒永遠に御交際下さい

○ 信濃東筑摩郡廣丘村
百瀨若子

▲春來る 信濃にも春が來ました、庭には梅が二三輪咲き初めて鶯が唄つてゐます賢明なる誌友の姉さん方樂しう御座いますか？ 雜木林を通つて來る甘いキスの樣な春風も私しには秋蟲の臨終の聲の樣な遺瀨ない細い唄に聞えます。乙女の麗しい瞳を瞪張つて微笑んで居る樣な星も冷たく心細く、まるで、女の魂が脫出した瞳の悲しくさめ〴〵と涙ぐんで居る樣に思はれ、寂しい冷めたい物が全身の血脈中に流れ込んで氣が襟いで、それに荒海の浪が寄せる樣に非常に胸騷ぎがしてしやうがありません、誰れか此の思をなぐさめて下さる方はありませんか。

○ 京城
夕照

▲京城より 誌友の皆樣よ私は當年十五歲の少女です今は或る學校に通學致して居ります何卒みな樣御交り下さいな私と御交り下さる御方は誌上で御知らせ下さい。

○ 愛知縣寶飯郡蒲郡町
平岩はつ子

△お願ひ 記者樣はじめ誌友の皆樣、御變りはありませんか。私は片田舍に淋しい日をおくつて居る不束者でございますが、何卒憐れと思召し、御玉章の御交換をお願ひ致します。さやうなら。

○ 丹波南桑田郡稗田野村
村上加賀子

▲丹波の山奧より 解し得られね三年前頃から本誌を明暮の友として居るが、今始めて投書したからとて其麼にお笑ひ遊ちやいやよ、アラ何處から來たつて、これでも廿世紀の女學生よ、鬼の住むてふ丹波の山奧のだけど、お尻振つて歩いてるんですよ、アラおさんの樣だつて、ひどいわ、私だつても靑春の血燃ゆる二八の乙女よ、でも此頃少々弱つてるですよ、試驗中で四月には卒業出來る心算よ、もし出來なかつたら今一年行くだけの事よオホヽヽ、平凡な田舍者ネエ、此麽愚鈍な者でもお思召のお在します方は、とはの御交り下さいませんか、失禮ながら一時的のお方は望みませんよ、誌友が一人もないのよ。

○ 茨城縣新治郡下大津村戶崎
宮崎やす子

▲霞浦の北岸 に淋しく暮して居ます不束な者では御座いますがどうぞ御交際御願いたします

○ 紀伊田邊町
橘千鶴子

▲大きくなつて 御なつかしき誌上の諸姉さま私この一月より本誌の愛讀者となりましたのよ去年まで少女世界をよんで居りましたのけれども一つ大きくなつたからつて本誌にかへましたそして又私は高女の漸く二年の遊び盛りで毎日試驗もそつちのけで樂しく過してますのよ同じ年位の御方は色々の事を御便して下さいましなんでも澤山あると困ります わそしてお姉樣が只一人ほしいのよ。みちびいて戴きますのに英語書御入用の紅子さまとやら私にあるのよ。

○ 番町
愛讀者

▲忠告 愛讀諸姉よ妾は此文壇生れて初聲をきくよりの愛讀者です今思ひみますれば以前にまさりて餘程進步致して參りました事は皆のよろこぶ處ですが只かなしい事には誌友くらぶたと思ひます大切なる誌上をいたづらにけがす事は記者樣に對して失禮ではないかと存じます多くの諸姉は只交際をのぞまれても永く〳〵て二三通のレターの交換にて絕交となるのはまことに殘念と存じます之を永久持續せんとする人は我年齡と職業と氣質とを承知の上にての交際ならば永く保つ事を得る事と存じますから一寸申上ます。

編輯通信

投稿の等級

今回の投稿は數も多くあり、好い作もあつたが、只これ一つと云ふほど優れた好い作がなかつた、全體の步調が進んで來たのも確實だが、或る一つの製作に全力を擧ぐる人の無かつたのも事實だ、已むなく一等を缺く、二等以下の入賞者は左の如し。

▲何故時姫や初花に生れなかつたのでせう(二等)　神近市子
▲青春の去り行く時(三等)　斷崖の人
▲其間に出來た私の個性(同)　覆面女
▲小説『娘』(同)　松田妙子
▲小説『冬のはじめ』(四等)　小笠原貞子
▲名家の令孃と言はれる苦痛(同)　毒だみ女
▲生命より深い愛はないでせう(同)　草の門
▲吾を救はん(同)　露花女
▲小説『祖母』 前島優梨子▲春の寄宿舍 靜江▲聲の亂行に離散したる一家の悲運 重子▲名知らぬ島 三ケ島よし子▲夢のやうな花 江森美耶▲華やかな時代 かげろふ▲蚕き春の歌『詩』 金田代志子(以上五等)▲眞實にお可哀想な百合子さん 佐分莠影▲涙多くなつたのも病身の爲め 木村涙花子▲早く身の治りをつけたい 島守女▲やよひの空 あはゆき▲三月六日 平塚白百合▲和歌 齋藤靜子▲北の空 上原ふみ子▲鳥の聲 しづか(以上六等)▲殿方評判記 照子▲更けし夜『詩』 小見山春子▲嫁ぎの前に はる子▲花の印象 凌草▲俳句 橋本廣子▲同 鈴木けい子▲同 上原ちよ▲和歌 佐久間みどり子▲同 中村貞子▲同 加藤菊子▲同 加藤胡蝶子▲同 宗原美津子(以上七等)

圖書は例號にならひて送賞す、送賞は例の通り來月下旬に行ふ。

掲載洩の投稿

掲載漏れの投稿も少くはない、小説、花、女子文壇追想記等も大半載せ得なかつた、此等は次號以下に於て其中の佳作を發表することがあるでせう。

●●●●●誌友會の記事

東京に於ける第二回誌友會の記事と共に他の地方のも共に二九七頁に發表してありますから見落さないやうに願ひます。

贈賞に就いて

編輯局多忙に就き此二三ケ月は贈賞發表が後れがちになりましたけれど、前月末に發送いたしましたから左樣に御承知下さい。

次の增刊

七月十日に『新文章』といふ第二增刊を出します、例に依り全部秀才なる諸嬢の手を煩はさうと思ひますから、別項廣告參照の上、盛んに投稿をねがひます。

雜報

○落花の風　今年ほど風の能く吹いた春はありませんでした、櫻の花はまるで風に吹き散らされる爲に咲いたやうなもので、梢の花見でなく地上の花見でした。

○吉原の火事　其風の烈しい四月九日の正午前東京市の東北隅の一角を領せる吉原より火を失し、附近の人家に燒けひろがりて、燃ゆると十時間、約六千戸を灰燼にした、吉原の火事は江戸時代からの遺傳で明治にも之を再演したのです。

○婦人世界五週年　實業の日本社發行の『婦人世界』は發行後滿五週年に相當するので、四月九日午後一時より、芝紅葉館に於て盛んな祝宴がありました、大隈伯、新渡戸博士の演説、栅橋、跡見二夫人の祝辭、其他面白い餘興や、模擬店がありました。

○太平洋畫會　太平洋畫會は前月二十三日より來る十八日まで、上野公園で展覽會を開いてをります。

○浮世繪展覽會　博物館には浮世繪の展覽會があつて、珍しいものが澤山ありました、京阪の方でも別に開かれたさうです。

○和歌講義錄　大日本短歌會の和歌講義錄はいよ／＼第一號が出た、斯う云ふ新しい意味の講義錄は、新興文藝に志あるものが見なければならぬものだと思ひます、添削や例だの、短歌作法なども初學者には有益です。

○詩歌　西大久保の白日社から『詩歌』の初號が出た、詩歌專門の好雜誌です。

○女子文壇定期號 投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る
▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること
▲原稿は凡て女子文壇社宛(未納税は断じて受付ず)に送ること
▲小説と、詩と、雜錄とは振假名をつけること
▲小説は二十四字詰八十行以内、散文は三十行乃至五十行、初めての投書は三十行以内、詩と雜錄は行數制限なし
▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす
▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る
▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め、大さは二寸に三寸、一人一枚限
◉投稿は毎月十五日到着を以て嚴に締切る

○女子文壇投稿各種 懸賞定額

▲小説と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す
▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢
▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す
▲『雜錄』は金五圓以下壹圓以上、正金にて呈す(但し二頁以内の短きものは此限りにあらず)
▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす
定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

○定期發行分 ▲毎月一回(一日)
一冊(一回分)定價金拾五錢……郵稅一錢五厘 計金拾六錢五厘
三冊(三月分)前金四拾三錢五厘……同四錢五厘 計金四拾八錢
六冊(半年分)前金八拾四錢……同九錢 計金九拾三錢
十二冊(壹年分)前金壹圓五拾六錢……同拾八錢 計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分 ▲年四回(二月、五月、八月、十一月)
一冊(一回分)定價金貳拾錢……郵稅一錢五厘 計金貳拾一錢五厘
二冊(半年分)前金三拾八錢……同三錢 計金四拾壹錢
四冊(壹年分)前金七拾二錢……同六錢 計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部 ▲十六回
四冊(三月分)定價金六拾三錢五厘……郵稅六錢 計金六拾九錢五厘
八冊(半年分)前金壹圓二拾二錢……同拾貳錢 計金壹圓三拾四錢
十六冊(壹年分)前金貳圓二拾八錢……同二拾四錢 計金貳圓五拾二錢

▲申込注意(振替にて拂込む時は誌代の外に壹錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增(收入印紙謝絶)、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……	部數多く有効に比し無類の割安
上等	一頁廿五圓	半頁……	
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	二行四拾錢

〆切 毎號十五日前

取扱所○日本電報通信社○博報堂○弘報堂○文明廣告社其他各取次店

明治四十四年四月廿五日印刷納本
明治四十四年五月一日發行

紀念百號 特價金三拾錢

不許轉載

編輯兼發行人 野口竹次郎
印刷人 松本魁
印刷所 合資會社 東京國文社

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十二番地 電話(京橋六〇七番) 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

自分の財産は自分の子に與へよ

吾人が夙に起き夜半に寢ね粒々辛苦して積み得たる財産は、之を自分の子に與へよといふことは正當の主張なりと信ずるのである、吾人が子女を擧げて之を養育し、之を教育する所以のものは、第二の我を造らんが爲である、此第二の我を造るといふことは祖先の祭を絶たしめずといふが如き宗教上の慾望を滿足せしむる爲ではなく、人類に共通の一大原則たる向上を希望するからである、併し自分の子女をして第二の我たらしむるには先づ其子女のあることを前提とし、又其子女を擧るには婦人の健康であるといふことが必要條件である、若し其婦人が病身であつたならば子女を擧ることが出來ません、偶々子女を擧ることあるも多くは虚弱にして成長することが六ヶ敷い、斯る不幸の境遇に在るものはたとへ巨萬の富を擁するも、第二の我を造りて社會に貢獻することが出來ません、又子なき家庭は團欒の樂み少なく且つ夫婦間の愛情の衰ふ原因となることが多いのである、諺にも子は夫婦のかすがひといふことがある位で、子ある夫婦は假令一時隔意を生ずることあるも、子に對する慈愛の心より何時しか融和するに至り自然夫婦間の愛情を永久に繋ぎ留ることが出來ます、之に反して子なき妻は夫に放蕩の口實を藉すに至ることがあります、即ち子供を造るといふ口實の下に或は妾を蓄へ、又は他の婦人に關係するに至り夫婦間の愛情を薄からしめるものです、次に又子なき時は他より養子を貰へば可なりといふものあらんも養子は父母の感化を受くることが實子のやうでないから兎角家庭は圓滿に治まりません、されば弱き婦人又は子なき婦人は中將湯を服用せられよ、中將湯は弱き婦人を健全ならしめ子なき婦人をして姙娠するに至らしむるの特効があります、尚ほ中將湯の功能は

●子宮病子宮内膜炎にて白帶多く前たゞれ又下腹腰足の引つり痛む人●婦人神經（ヒステリー）血の道にて氣鬱ぎ癇高ぶり物を苦にし夜眠れず●月經不順月經滯り等にて吹出物多く又何んとなく身體惡き人●逆上頭痛眩暈し肩こり腰足冷え●息切れ動氣強く手足痺れ水腫●十七八歳になりて月經なく血ぶとり又月經の前後に下腹痛む人●白帶赤帶滯下多く顔色蒼白き人●冷症にて難産流産の癖ある人●産後何となく常ならざる人、嘔吐、産後古血の滯り或は日立惡く●此外子宮血の道月經不順に起因する諸病にてぶら〳〵と惡き人●定價は四日分卅五錢●一週分六十錢●二週分一圓十錢●三週間一圓六十錢五週間二圓五十錢です△製藥は東京市日本橋區通四丁目津村順天堂で取次店は全國到る處にあります●本舖には加減法あり病症委しく御申越あれ

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）